鳥取県教育文化財団調査報告書 89

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県東伯郡東伯町

久蔵峰北遺跡
蝮谷遺跡
岩本遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書89『久蔵峰北遺跡　蝮谷遺跡　岩本遺跡』正誤表

頁・行	誤	正
文中写真目次	Ｆｉｇ２　ＳＤ10床面直上出土土器	Ｆｉｇ２　ＳＩ10床面直上出土土器
43頁第45図Ｃラインの土層図の土層№	８層（右側のみ）	７層
43頁24行目	甕の頸部	甕の肩部
45頁１行目	床面上	床面直上
46頁４行目	Ｖ―Ⅱ期	Ｖ―２期
51頁1行目	層位的関係は	層位的関係も
54頁12行目	られ、平面形は不整円形である。	られる。
54頁31行目	床面上で	床面直上
60頁５行目	埋土中からは	埋土中からも
65頁16行目	位置し、ＳＩ５１に掘り込まれている。	位置する。
68頁４行目	２５６，２５８，２５９	２５６は器台、２５８、２５９
75頁15行目	Ｐ９は中央ピットで、周囲には周堤がめぐる。これは地山の削り残しによる高まりの上に貼床と同様の土で盛土されたものである。	Ｐ９は中央ピットである。（後の２文は削除）
85頁第103図	図中のＳＩ３０	ＳＩ３９
93頁17行目	このため掘り下げは同時に行った。	削除
96頁22行目	Ｐ５は主柱穴	Ｐ５は中央ピット
99頁第127図	平面図のＰ９―Ｐ１０の切線	上がｅ´、下がｅ
107頁第140図	第１４０図ＳＢ４出土遺物	第１４０図ＳＢ４出土土器
110頁26行目	Ｖ―２期	Ｖ―３期
110頁28行目	弥生時代後期中葉	弥生時代後期後葉
112頁147図土層注記	１層　淡褐色土（白色土を	１層　淡褐色土（白色粘質土を
132頁28～29行目	長軸225ｃｍ、短軸155cm	長軸116ｃｍ、短軸76cm
135頁13～14頁	長径120cm、短径130cm	長径130ｃｍ、短径120cm
139頁12行目	SI４、１５、５７	SI４、１５、５９
139頁19行目	古墳時代前期前半	古墳時代前期前葉
139頁26行目	東伯者一体	東伯者一帯
140頁14行目	碧玉は、	削除
143頁表58上から33番目の備考欄	厚さ4.8mmの板状原石	原石は厚さ4.8mmの板状
176頁表64№８の石材	蛇文岩	蛇紋岩
写真図版目次ＰＬ．43下	ＳＤ１・２・５完掘状況	ＳＤ１・２・５全景

鳥取県教育文化財団調査報告書 89

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

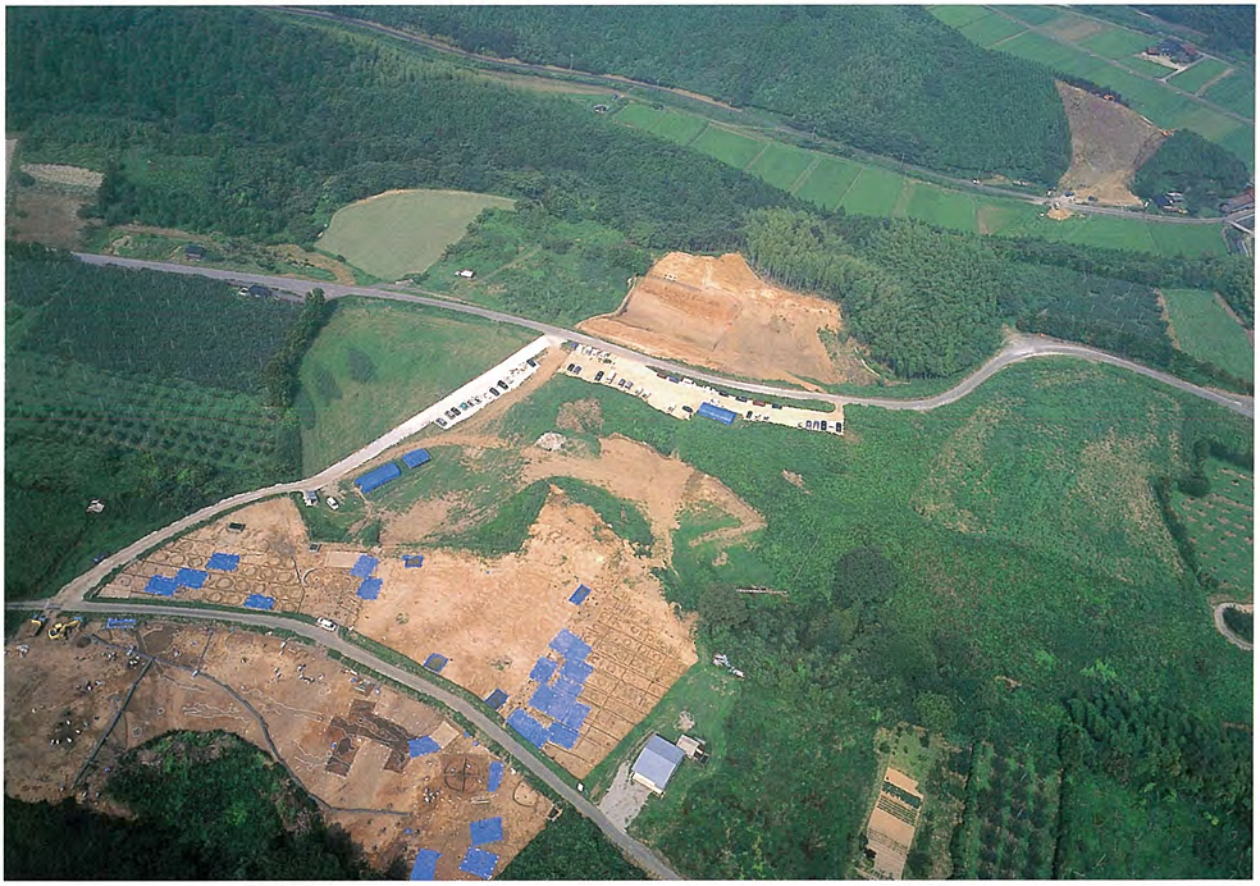
鳥取県東伯郡東伯町

久蔵峰北遺跡
蝮谷遺跡
岩本遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

岩本遺跡・蝮谷遺跡・久蔵峰北遺跡（調査後、南から）



久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡（手前より、北東から）

巻頭図版 2

久蔵峰北遺跡（調査後、北東から）

蝮谷遺跡（調査後）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道９号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有 田 博 充

序　　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取―島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「中尾第１遺跡」、「井図地頭遺跡」「三林遺跡」、「笠見第３遺跡」、「久蔵峰北遺跡」、「蝮谷遺跡」、「岩本遺跡」、「八橋第８・９遺跡」、「別所中峯遺跡」「松谷中峰遺跡」の10遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「久蔵峰北遺跡」「蝮谷遺跡」「岩本遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長　矢 田 光 夫

例　言

1．本書は平成15年度に行った国土交通省一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業による、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は以下の通りである。
久蔵峰北遺跡：鳥取県東伯郡東伯町大字八橋字龍王頭2481－1ほか
蝮谷遺跡：鳥取県東伯郡東伯町字蝮谷2531
岩本遺跡：鳥取県東伯郡東伯町字御建山2731－8

3．本報告書における方位、座標値は世界測地系に準拠した国土座標第Ⅴ系に基づく。
またレベルは海抜標高を示す。

4．本報告書に掲載した地図は国土地理院発行の1/50000地形図「伯耆浦安」、東伯町地形図1/5000「新農業構造改善事業東伯地区（No.１）」を使用した。

5．本報告における一部の出土石器の石材鑑定を赤木三郎氏に依頼した。また、玉類の産地分析を藁科哲男氏に、炭化材の樹種同定をパリノサーヴェイ株式会社に依頼し、玉稿をいただいた。

6．本書の執筆は、調査員小山浩和、野口良也、長尾かおり、淺田康行、阪上志緒里、小谷郁夫、岩井美枝、原あずさ、福井流星が分担し、目次と文末に文責を記した。編集は、小山、野口、長尾が行った。

7．本報告書に使用した遺構・遺物写真は航空写真を除いて調査員が撮影した。

8．本報告にあたり久蔵峰北遺跡と蝮谷遺跡の調査前・調査後測量を業者に委託した。

9．出土遺物や図面、写真などの記録は鳥取県埋蔵文化財センターにて保管している。

10．現地調査及び報告書作成にあたり下記の方々にご指導、ご協力いただいた。
記して謝意を表する次第である。
小林義孝、丹羽野裕、深田　浩、米田克彦　（順不同敬称略）

凡　例

1．本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物　SK：土壙・土坑　SD：溝　P：柱穴・ピット

2．遺構図の地山は斜線のトーンで示した。特に指定がない限り、薄いトーンは貼床範囲を、濃いトーンは焼土範囲を、砂目は炭化物検出範囲を示す。
遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、土器・土製品は白抜き、石器、鉄器類は斜線で示した。

3．土器の年代観は以下の文献に拠る。
弥生土器：清水真一　1992「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』木耳社　政岡睦夫・松本岩雄編
土師器：牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団
古代の土器研究会編　1992『古代の土器１　都城の土器集成』
須恵器：田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
巽淳一郎　1979「１土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報（５・６次）』倉吉市教育委員会

目　　次

序
序文
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 ……（小山・野口・長尾）　1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　調査体制 …… 3

第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 ……（淺田・小谷）　4
　第２節　歴史的環境 ……（淺田・岩井・原・福井）　6

第３章　久蔵峰北遺跡の調査 …… 9
　第１節　遺跡の立地と層序 ……（小山）　9
　　(1)　立地と現況 …… 9
　　(2)　基本層序 …… 9
　　(3)　調査の方法 …… 10
　第２節　調査の成果 …… 13
　　(1)　調査の概要 ……（小山）　13
　　(2)　竪穴住居跡 ……（小山・野口・淺田・阪上）　13
　　(3)　掘立柱建物 ……（小山・野口・淺田・阪上）105
　　(4)　布掘掘立柱建物 ……（小山・野口・淺田・阪上）114
　　(5)　溝 ……（小山・野口・淺田・阪上）116
　　(6)　土坑 ……（小山・野口・淺田・阪上）120
　　(7)　その他の遺構・遺物 ……（小山・野口・淺田・阪上）136
　第３節　まとめ ……（小山）139
　　(1)　遺跡の変遷 ……139
　　(2)　玉作について ……139
　　(3)　総括 ……142

第４章　蝮谷遺跡の調査 ……（野口）151
　第１節　遺跡の立地と層序 ……151
　第２節　調査の成果 ……151
　　(1)　調査の概要 ……151
　　(2)　竪穴住居跡 ……154
　　(3)　土坑 ……161
　　(4)　その他の遺構 ……164

(5) 谷部の調査 ……164
(6) 遺構外出土遺物 ……170
第３節 まとめ ……172

第５章 岩本遺跡の調査 ……（長尾）177
第１節 岩本遺跡の概要 ……177
(1) 概要 ……177
(2) 調査区内の堆積 ……177
第２節 溝状遺構の調査 ……179
第３節 出土遺物 ……180
(1) ＳＤ１出土遺物 ……180
(2) 遺構外出土遺物 ……182
第４節 まとめ ……183

第６章 自然科学分析の成果 ……184
第１節 久蔵峰北遺跡出土勾玉、碧玉の産地分析 …… 藁科哲男 184
第２節 久蔵峰北遺跡から出土した炭化材の樹種 …… パリノ・サーヴェイ株式会社 199
第３節 蝮谷遺跡から出土した炭化材の樹種 …… パリノ・サーヴェイ株式会社 201

挿 図 目 次

第１図 久蔵峰北・蝮谷・岩本遺跡位置図 …… 1
第２図 東伯町位置図…… 4
第３図 周辺の遺跡…… 5
第４図 久蔵峰北遺跡調査前測量図…10
第５図 久蔵峰北遺跡調査後測量図 ……11～12
第６図 SI１床面遺物出土状況図１…13
第７図 SI１実測図……14
第８図 SI１床面遺物出土状況図２…15
第９図 SI１出土遺物……16
第10図 SI２実測図……17
第11図 SI２出土遺物……18
第12図 SI３実測図……18
第13図 SI３出土石器……19
第14図 SI３出土土器……19
第15図 SI４実測図……20
第16図 SI４出土遺物……21
第17図 SI５実測図……22
第18図 SI５出土遺物……23
第19図 SI６出土遺物……23
第20図 SI６実測図……24
第21図 SI７出土土器……24
第22図 SI７実測図……25
第23図 SI８実測図……26
第24図 SI８出土土器……26
第25図 SI９出土土器……26
第26図 SI９実測図……27
第27図 SI９出土遺物……28
第28図 SI10・35実測図……30
第29図 SI10・35土層断面図・変遷図 ……31
第30図 SI10出土石器・鉄器……31
第31図 SI10出土土器……32
第32図 SI11実測図……34
第33図 SI11出土遺物……34
第34図 SI12実測図……35
第35図 SI12出土遺物……36
第36図 SI13実測図……37
第37図 SI14実測図……39
第38図 SI14出土土器……39
第39図 SI15実測図……40
第40図 SI15出土土器……40
第41図 SI16実測図……41
第42図 SI16出土遺物……41
第43図 SI17実測図……42
第44図 SI17出土土器……42
第45図 SI18実測図……43
第46図 SI18出土土器……43
第47図 SI19実測図……44
第48図 SI19出土遺物……44
第49図 SI20実測図……46
第50図 SI20出土遺物……47
第51図 SI21実測図……48
第52図 SI21出土遺物……49
第53図 SI22・23実測図……50
第54図 SI22出土遺物……51
第55図 SI23出土遺物……51
第56図 SI24実測図……52
第57図 SI24出土遺物……53
第58図 SI25実測図……53
第59図 SI25出土遺物……54
第60図 SI26出土土器……54
第61図 SI26実測図……55
第62図 SI27出土土器……55
第63図 SI27実測図……56

第64図　SI28実測図……57
第65図　SI28出土土器……58
第66図　SI29出土土器……58
第67図　SI29実測図……59
第68図　SI30実測図……60
第69図　SI30出土水晶剥片……60
第70図　SI31実測図……61
第71図　SI31出土遺物……61
第72図　SI32実測図……62
第73図　SI32出土遺物……62
第74図　SI33実測図……63
第75図　SI33出土土器……63
第76図　SI34実測図……64
第77図　SI34出土遺物……65
第78図　SI36実測図……66
第79図　SI36出土土器(1)……66
第80図　SI36出土土器(2)……66
第81図　SI37実測図……67
第82図　SI37出土遺物……68
第83図　SI38実測図……68
第84図　SI38土器出土状況図……69
第85図　SI38出土遺物……70
第86図　SI39実測図……71
第87図　SI39出土遺物……72
第88図　SI40出土ヒスイ製勾玉……72
第89図　SI40実測図……73
第90図　SI40出土土器……74
第91図　SI40出土遺物……74
第92図　SI41実測図……76
第93図　SI41出土土器……77
第94図　SI42実測図……78
第95図　SI42出土遺物……79
第96図　SI43実測図……80
第97図　SI43出土遺物……81
第98図　SI44実測図……82
第99図　SI45実測図……83
第100図　SI45出土遺物……83
第101図　SI46実測図……84
第102図　SI46出土土器……84
第103図　SI47・62実測図……85
第104図　SI47出土土器……85
第105図　SI48実測図……86
第106図　SI48出土土器……86
第107図　SI49実測図……87
第108図　SI50実測図……88
第109図　SI51実測図……89
第110図　SI51出土遺物……90
第111図　SI52実測図……90
第112図　SI52出土石器……91
第113図　SI53実測図……91
第114図　SI53出土石器……91
第115図　SI54出土土器……92
第116図　SI54・55実測図……92
第117図　SI55出土土器……93
第118図　SI56・57実測図……93
第119図　SI56出土遺物……94
第120図　SI57出土遺物……94
第121図　SI58実測図……95
第122図　SI58出土遺物……95
第123図　SI58出土玉類未製品……96
第124図　SI59出土遺物……97
第125図　SI59・60実測図……98
第126図　SI60出土石器……99
第127図　SI61実測図……99
第128図　SI61出土遺物……100
第129図　SI63実測図……101
第130図　SI64実測図……102
第131図　SI64出土鉄器……102
第132図　SI64出土土器……103
第133図　SI65実測図……104
第134図　SI65出土遺物……104
第135図　SB１実測図……105
第136図　SB２出土土器……105
第137図　SB２実測図……106
第138図　SB３実測図……106
第139図　SB４実測図……107
第140図　SB４出土土器……107
第141図　SB５実測図……108
第142図　SB６出土土器……108
第143図　SB６実測図……109
第144図　SB７実測図……109
第145図　SB８・SD15出土土器……110
第146図　SB８実測図……111
第147図　SB９実測図……112
第148図　SB10実測図……112
第149図　SB10出土土器……113
第150図　SB11・12実測図……113
第151図　布掘掘立柱建物１出土遺物…114
第152図　布掘掘立柱建物１実測図……114
第153図　布掘掘立柱建物２実測図……115
第154図　布掘掘立柱建物２出土土器…115
第155図　SD１出土遺物……116
第156図　溝平面図……117
第157図　溝土層断面図……118
第158図　SD２・５・８出土遺物……119
第159図　土坑位置図……121
第160図　SK2・3・11・21・28・31実測図……122
第161図　SK11・31・39出土遺物……123
第162図　SK33・36・39実測図……124
第163図　SK40・43・48実測図……124
第164図　SK１実測図……125
第165図　SK１出土遺物……125
第166図　SK4・6～10・13～16実測図…126
第167図　SK8・10出土遺物……127
第168図　SK17～20・22～26実測図…129
第169図　SK27・34・35・37・38・42・44・47実測図……130
第170図　SK27・34・35・45・49・51出土土器……131
第171図　SK29実測図……131
第172図　SK29出土遺物……132
第173図　SK30実測図……132
第174図　SK32実測図……133
第175図　SK32遺物出土状況図……133
第176図　SK32出土遺物……134
第177図　SK45実測図……135
第178図　SK46実測図……135
第179図　SK49～52実測図……136
第180図　ピット・遺構外出土遺物(1)…137
第181図　ピット・遺構外出土遺物(2)…138
第182図　遺構外出土玉類未製品……138
第183図　碧玉製玉未製品……140
第184図　水晶製玉未製品……141
第185図　蝮谷遺跡基本層序……151
第186図　蝮谷遺跡調査前地形測量図……152
第187図　蝮谷遺跡調査後地形測量図……153
第188図　SI１実測図……155
第189図　SI１炭化材・焼土出土状況図……155
第190図　SI１出土遺物……156
第191図　SI５実測図……156
第192図　SI２実測図……157

第193図 SI２出土遺物 ……157
第194図 SI３実測図 ……158
第195図 SI３出土遺物 ……158
第196図 SI４実測図 ……159
第197図 SI４出土遺物 ……160
第198図 SK１実測図……161
第199図 SK１出土遺物……161
第200図 SK２実測図……161
第201図 SK２出土遺物……161
第202図 SK３実測図……162
第203図 SK３出土遺物……162
第204図 SK５実測図……162
第205図 SK８実測図……162
第206図 SK４実測図……163
第207図 SK４出土遺物……163
第208図 SK６実測図……163
第209図 SK７実測図……163
第210図 SD１出土遺物……164
第211図 SD１・ピット配置図 ……165
第212図 谷部土層断面図 ……166
第213図 谷部暗褐色包含層出土遺物 ……168
第214図 谷部暗褐色包含層出土遺物 ……169
第215図 谷部褐色包含層出土遺物 ……170
第216図 尾根部包含層出土遺物 ……171
第217図 表土・攪乱土中出土遺物……171
第218図 岩本遺跡調査前・調査後測量図 ……178
第219図 調査区土層断面図 ……179
第220図 SD１実測図……180
第221図 SD１土層断面図……181
第222図 出土遺物 ……182
第223図 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布図 ……186
第224図 ヒスイ原石と勾玉の元素比値 Zr/Sr対Sr/Feの分布 ……188
第225図 ヒスイ原石と勾玉の元素比値 Ca/Si対Sr/Feの分布および分布図 ……189
第226図 ヒスイ原石と勾玉の元素比値 Na/Si対Mg/Siの分布および分布図 ……189
第227図 花仙山産碧玉原石との蛍光X線分析スペクトル ……192
第228図 弥生（続縄文）時代の碧玉製、緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏および碧玉・碧玉様岩の原産地 ……192
第229図 碧玉原石のESRスペクトル ……196
第230図－(1) 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル ……196
第230図－(2) 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル ……196
第230図－(3) 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル ……196
第230図－(4) 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル ……196
第231図 久蔵峰北遺跡出土玉材の信号(Ⅲ)のESRスペクトル ……196

文中写真目次

Fig１ 調査前風景（北東から）……9
Fig２ SD10床面直上出土土器 ……33
Fig３ SI14甕161出土状況 ……38
Fig４ SI51炭化材出土状況 ……88
Fig５ SB８・SD14・SD15検出状況 ……110
Fig６ 布掘掘立柱建物２北溝土層断面 ……116

表　目　次

表１ SI１ピット表……13
表２ SI２ピット表……17
表３ SI３ピット表……18
表４ SI４ピット表……21
表５ SI５ピット表……21
表６ SI６ピット表……22
表７ SI７ピット表……24
表８ SI９ピット表……27
表９ SI10・35ピット表……29
表10 SI11ピット表……34
表11 SI12ピット表……37
表12 SI13ピット表……38
表13 SI14ピット表……38
表14 SI15ピット表……40
表15 SI16ピット表……40
表16 SI17ピット表……42
表17 SI18ピット表……43
表18 SI19ピット表……44
表19 SI20ピット表……45
表20 SI21ピット表……47
表21 SI22・23ピット表……51
表22 SI24ピット表……53

表23　SI25ピット表……54
表24　SI26ピット表……55
表25　SI27ピット表……57
表26　SI28ピット表……58
表27　SI29ピット表……58
表28　SI30ピット表……59
表29　SI31ピット表……60
表30　SI32ピット表……62
表31　SI33ピット表……63
表32　SI34ピット表……65
表33　SI36ピット表……66
表34　SI37ピット表……67
表35　SI38ピット表……69
表36　SI39ピット表……71
表37　SI40ピット表……72
表38　SI41ピット表……75
表39　SI42ピット表……76
表40　SI43ピット表……78
表41　SI44ピット表……82
表42　SI45ピット表……82
表43　SI46ピット表……84
表44　SI47ピット表……85
表45　SI48ピット表……86
表46　SI49ピット表……87
表47　SI50ピット表……88
表48　SI51ピット表……90
表49　SI52ピット表……91
表50　SI54・55ピット表……92
表51　SI56・57ピット表……94
表52　SI58ピット表……95
表53　SI59・60ピット表……97
表54　SI61ピット表 ……100
表55　SI63ピット表 ……101
表56　SI64ピット表 ……102
表57　SI65ピット表 ……103
表58　久蔵峰北遺跡玉未製品観察表 ……143
表59　久蔵峰北遺跡土器観察表 ……144
表60　久蔵峰北遺跡石器観察表……149
表61　久蔵峰北遺跡鉄器観察表 ……150
表62　蝮谷遺跡ピット表 ……165
表63　蝮谷遺跡土器観察表 ……173
表64　蝮谷遺跡石器・石製品観察表 ……176
表65　蝮谷遺跡鉄製品観察表 ……176
表66　蝮谷遺跡土製品観察表 ……176
表67　SD１層序表……181
表68　岩本遺跡出土土器観察表 ……183
表69　岩本遺跡出土石器観察表 ……183
表70　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)
……188
表71　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)
……188
表72　久蔵峰北遺跡出土のヒスイ製勾玉の元
素分析値と比重の結果 ……190
表73　久蔵峰北遺跡出土のヒスイ製勾玉の原
材産地分析結果 ……190
表74　各碧玉の原産地における原石群の元素
比の平均値と標準偏差値 ……194
表75　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物
群の元素比の平均値と標準偏差値 ……194
表76　久蔵峰北遺跡出土碧玉玉材の原材産地
分析結果 ……195
表77　久蔵峰北遺跡出土碧玉玉材の元素分析
値の比量と比重 ……197
表78　樹種同定結果 ……199
表79　樹種同定結果 ……201

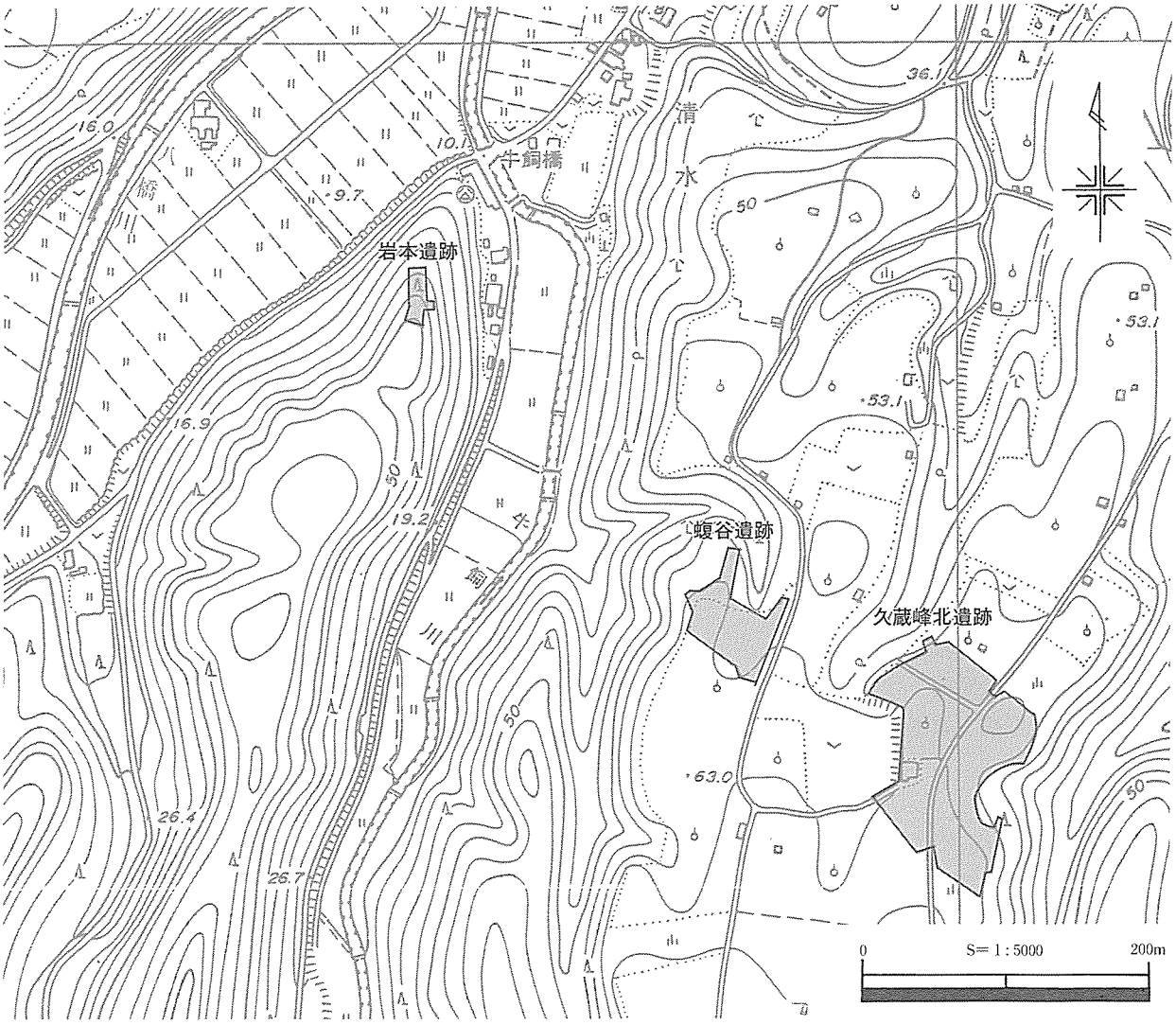
第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、国土交通省が進めている一般国道９号線東伯中山道路の改築に伴う、東伯町内の工事予定地に所在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

当該地は遺跡として登録はされていなかったが、周辺には従来多数の遺跡が知られていた。そのため東伯町教育委員会は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行い、これらの遺跡及び遺構の範囲を確認するための試掘調査を実施することとした。調査の結果、弥生時代・古墳時代の遺物・遺構が確認され、本遺跡の存在が明らかになった。

これを受けて、国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を行った上で、鳥取県教育委員会教育長の指示によって財団法人鳥取県教育文化財団に遺跡の発掘調査を委託した。その後、当財団が文化財保護法第57条の１に基づく発掘調査届けを提出し、埋蔵文化財センターが平成15年度の発掘調査を担当することとなった。



第１図　久蔵峰北・蝮谷・岩本遺跡位置図

第２節　調査の経過

調　査　日　誌　抄

久蔵峰北遺跡

4/17 調査前空撮（業者委託）
4/21 調査前測量（業者委託）開始
4/25 調査前測量は西半部を終了
4/30 表土剥ぎ西半部から開始
5/12 北西部から遺構検出を開始
　　重機による表土剥ぎも継続
5/13 メッシュ杭設置開始（業者委託）
　　調査前測量終了
5/26 重機による表土剥ぎ終了
5/27 北東側遺構検出作業を開始
6/2 南西側遺構検出作業を開始
6/6 SK８から水晶剥片出土
6/26 SI19からガラス製小玉出土
7/14 布掘掘立柱建物１検出、掘り下げ開始
8/1 農道の代替地の調査を終了
8/6 SI10焼土塊の除去
8/21 SI40からヒスイ勾玉出土
8/27 SD１からガラス小玉出土
9/3 SK29から副葬品出土
9/4 農道付替工事着工（国交省）
9/25 代替え道設置工事終了を受けて農道下表土剥ぎ開始
9/30 農道下表土剥ぎ終了
10/2 SK32から土器が多数出土
10/6 SI58から水晶製切子玉、玉類の剥片類が出土
10/28 SI60から水晶剥片出土
10/29 現地にて記者発表　数社来訪
10/30 山陰放送の取材
　　調査後地形測量（業者委託）
11/1 現地説明会開催　124名来訪
11/14 調査後空撮（業者委託）調査終了

蝮　谷　遺　跡

4/17 調査前空撮（業者委託）
4/21 調査前測量（業者委託）開始
5/1 重機による表土剥ぎ開始（業者委託）
5/12 発掘調査を開始
5/13 メッシュ杭設置開始（業者委託）
5/29 重機による表土剥ぎ終了
6/2 SI１を検出
6/10 谷部・調査区東側尾根部の調査開始
　　SI４の検出
7/9 SI２の調査
7/14 SI２より勾玉出土
7/22 SI３の調査
7/31 調査終了
8/6 調査後空撮（業者委託）
8/20 調査後測量（業者委託）
11/1 現地説明会（久蔵峰北遺跡にて遺物展示解説）

岩　本　遺　跡

8/1 調査前地形測量及び調査開始
　　SD１を確認
8/6 トレンチ内SD１を掘り下げ
8/7 メッシュ杭設置
8/19 調査地南側より人力による表土剥ぎ開始
8/26 調査地南側より重機による表土剥ぎ開始（業者委託）
8/27 SD１全体を検出
9/8 地形測量開始
9/11 遺構完掘
9/18 調査終了
　　調査後空撮（業者委託）

第３節　調査体制

調査は以下の体制で実施した。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　有田　博充
常務理事　川口　一彦（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　下田　弘人

埋蔵文化財センター

所　長　田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　長　竹内　茂
次　長　加藤　隆昭
調査課長(兼)　加藤　隆昭
企画調整班長　山枡　雅美
文化財主事　下江　健太
庶務課長(兼)　竹内　茂
主任事務職員　矢部　美恵
事務職員　田中　陽子、大川　秋子、植田　恵子（９月退職）
谷垣真寿美、小谷　有里
事務補助員　山根　美代（11月採用）

○調査担当　埋蔵文化財センター東伯調査事務所

所　長　佐治　孝弐
班　長　牧本　哲雄
文化財主事　小山　浩和（久蔵峰北遺跡担当）
野口　良也（蝮谷遺跡・久蔵峰北遺跡担当）
長尾かおり（岩本遺跡担当）
調査員　淺田　康行（久蔵峰北遺跡担当）
福井　流星（岩本遺跡担当）
阪上志緒里（久蔵峰北遺跡担当）
調査補助員　濱　いづみ（旧姓　河本　９月退職）
事務補助員　大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　東伯町教育委員会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

今回調査が行われた東伯町は、鳥取県中部（東伯耆）の西側に位置する。大山連峰の烏ヶ山（1381m）と野田ヶ山を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北16.8km、総面積は約82.2km²で県面積の約2.3％を占めている。人口は約12,400人（平成15年末）で少子高齢化の進展で昭和期に比して漸減傾向にある。昭和29年の５町村合併により、混乱を避け中立的な名称、東伯耆を意味する現町名となった。全国的な市町村合併の潮流の中で、平成16年９月１日には赤碕町との合併が予定されている。

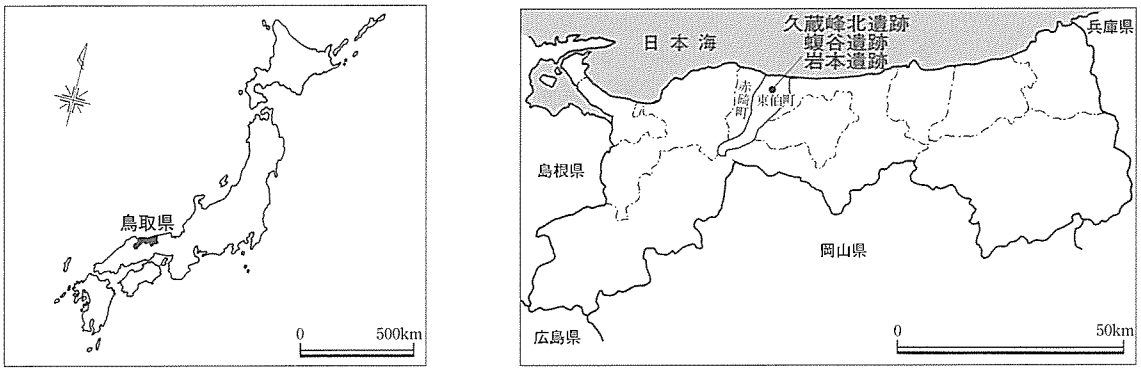
本町の南側には矢筈ヶ山、烏ヶ山の大山前峰に続く山麓台地が広がる。北側は、大山山麓を源とする加勢蛇川、洗川、倉坂川が北流し広い扇状地を形成している。加勢蛇川、洗川に挟まれた扇状地には律令時代の条里制が旧地名や地割りに残る地域がある。しかし、加勢蛇川は近世まで氾濫を繰り返した県内屈指の荒れ川であり、概ね残りが良いとは言い難い。加勢蛇川の東岸地域は火山扇状地性台地が広がり、ここには大小の農業用ため池がみられる。荘園が発達した平安中期頃よりそれらから導水し、現大栄町域へも広がる稲作・畑作地帯を形成したものと考えられる。

加勢蛇川の最上流域には大山滝があり、そこから地獄谷～大休峠付近～大山町の川床を経て大山博労座に通じる急峻な古道がある。この川床道は江戸時代から昭和初期にかけて、大山参拝の往還道であるとともに、東伯耆地方から市の立つ大山へ牛馬を運ぶ重要な短絡ルートであった。また、海岸沿いの八橋地区には古代から伯耆の東と西をつなぐ交通の要衝として古代山陰道の清水駅が置かれ、中世以降は丘陵北端部に八橋城が築かれるなど、交流及び戦略的な活動が繰り広げられた地でもある。

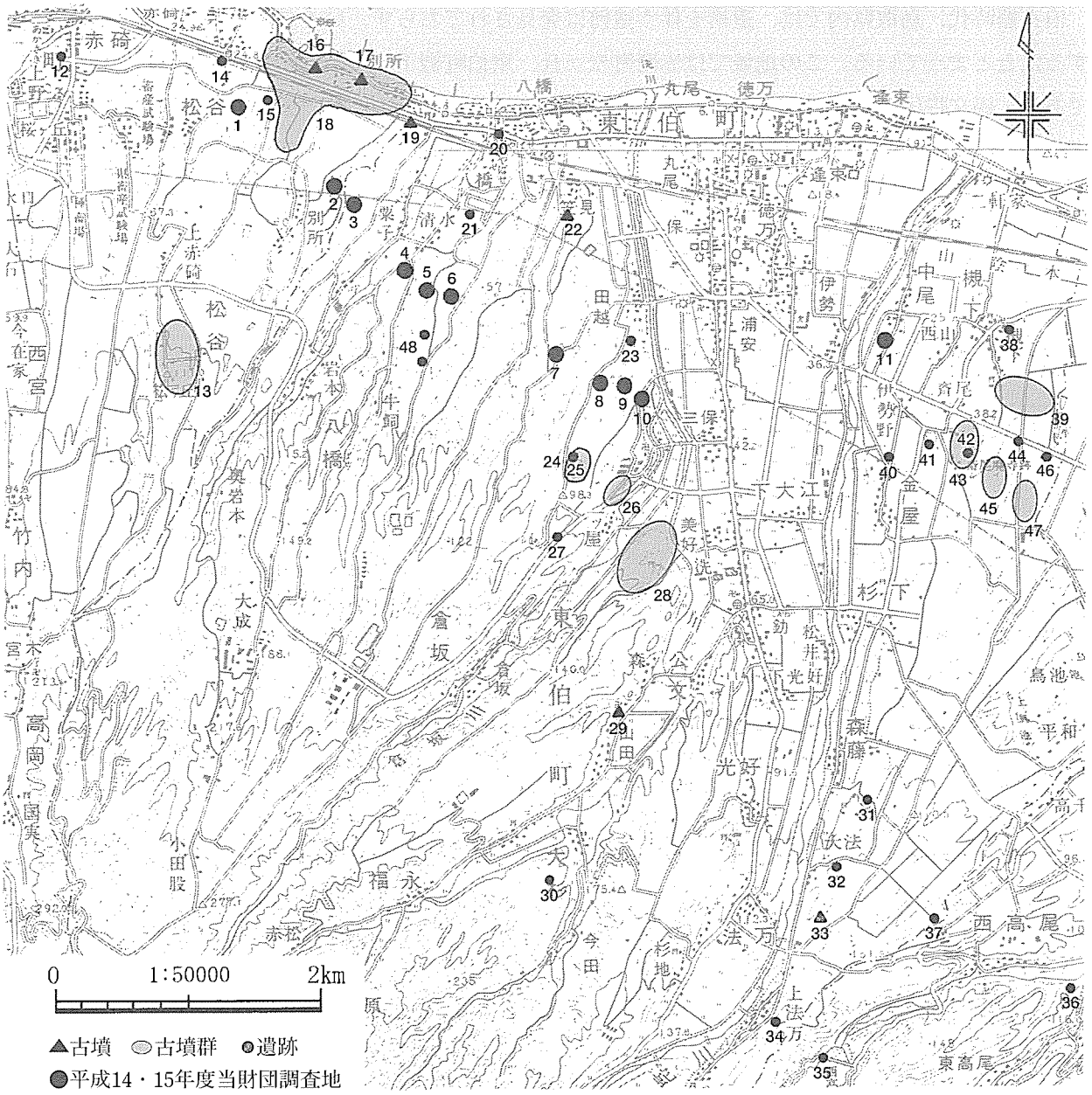
昭和20年代より盛んになり、北米や香港・シンガポールなどにも輸出される二十世紀梨生産は本県東郷町に次ぐ生産量を誇る。本調査地でも近年まで梨生産が行われていた。また、水稲とともに芝生産、酪農、ブロイラー・和牛などの畜産も主要な農業分野である。

海岸部近くを東西に走る国道９号線沿線には、近年商業及び公共施設が急速に立地し、酒造、弱電、食品製造などの工場群とともに都市機能を形成している。

久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡は、JR八橋駅の南南西約1.3km、八橋川東岸の南北に伸びる丘陵上に位置している。各遺跡はそれぞれ小規模な谷で隔てられており、東側から久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡の順に並ぶ形で位置している。　（淺田、小谷）



第２図　東伯町位置図



１松谷中峰遺跡　２別所中峯遺跡　３八橋第8・9遺跡　４岩本遺跡　５蝮谷遺跡　６久蔵峰北遺跡　７笠見第３遺跡　８三林遺跡（旧田越第４遺跡）　９井図地中ソネ遺跡　10井図地頭遺跡　11中尾第1遺跡　12福留遺跡　13松ヶ丘遺跡　14墓ノ上遺跡　15松谷遺跡　16笠取塚古墳　17別所2号墳　18別所古墳群　19八橋狐塚古墳　20八橋城跡　21八橋銅鐸出土地　22笠見1号墳　23田越第1遺跡　24田越第2遺跡　25田越第3遺跡（銅剣出土地）　26三保古墳群　27三保遺跡群　28竜ヶ崎古墳群　29山田1・2号墳　30妙見山城跡　31森藤遺跡群　32古瓦出土地（大法廃寺跡）　33大法古墳群　34法万経塚　35西高尾谷奥遺跡　36西高尾経塚　37大峰遺跡　38槻下豪族居館　39槻下古墳群　40金屋経塚　41伊勢野遺跡群　42斎尾廃寺跡　43斎尾古墳群　44大高野遺跡　45塚本古墳群　46水溜り・駕籠据場遺跡　47大高野古墳群　48八橋第２～第４遺跡

第３図　周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器時代、鳥取県内では、遺構を伴う遺跡は発見されておらず、いくつかの遺物が各地域で出土するにとどまっている。この地域では赤碕町松ヶ丘、東伯町槻下で尖頭器が数点見つかっているのみである。縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ないが、低丘陵上および平野部において、人々の活動痕跡が確認されている。早～前期では西高尾谷奥遺跡(35)で、押型文土器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構が検出されている。また松ヶ丘遺跡(13)、大栄町築山遺跡、森藤第２遺跡(31)などでは土器片が出土している。中期では、井図地中ソネ遺跡(９)、井図地頭遺跡(10)など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落がみられるようになる。特に森藤第２遺跡では中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が検出され、精製・粗製土器、土器片錘、土偶等が出土している。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡(12)、中尾第１遺跡(11)、笠見第３遺跡(７)など多くの遺跡で検出されており、狩猟の場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代

弥生時代に入り本格的に稲作が始められ、それを機軸とした文化・社会が形成される。米子市目久美遺跡では前期の水田が確認されているが、県中部では、現時点では稲作に関る遺構は発見されていない。集落遺跡は、中期以降加勢蛇川右岸の平野部と丘陵上で確認されている。特に中期後葉から古墳時代初頭にかけて遺跡数が大幅に増加する。東伯町森藤第１・２遺跡(31)、水溜り・駕籠据場遺跡(46)、大峰遺跡(37)、田越遺跡群(23・24・25)、井図地中ソネ遺跡(９)、笠見第３遺跡(７)、三林遺跡(８)、久蔵峰北遺跡(６)などで集落が営まれている。赤碕町では福留遺跡で後期の竪穴住居がみつかっている。これらの遺跡の中には、集落内に玉作工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡では中期の工房跡が検出され、水晶の剥片とともに、製作に使用したと考えられる鉄製工具等が出土している。笠見第３遺跡では後期の工房跡が検出されており、緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が出土している。現段階で当地域での数少ない生産遺跡である。墓域については、前期に大栄町青木第１遺跡・後ろ谷遺跡で土壙墓がみつかっており、中期以降赤碕町墓ノ上遺跡(14)・別所女夫岩峯遺跡で木棺墓が検出されている。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての溝で区画された土壙墓群が供献土器とともにみつかっている。また弥生時代の祭祀を特徴づける銅鐸が、県中部では６遺跡で計７口みつかっている。東伯町八橋の南方丘陵上(21)で銅鐸（扁平鈕Ｉ式）が１口みつかっている。また、東伯町田越の丘陵上(25)では、正確な出土状況は明らかではないが、中細形銅剣が４口、東伯町久蔵峰で銅矛が１口出土している。八橋を中心とする地域は銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土していることとなり、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態に関連性があったものとして興味深い。

古墳時代

古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所１号墳（笠取塚古墳）(16)は、墳形等の特徴から、前

期に遡る可能性がある。中期から後期にかけて、前方後円墳の築造がみられる。別所２号墳(17)・八橋狐塚古墳(19)・笠見１号墳(22)・竜ヶ崎３号墳(28)などがある。これらは大山から日本海に延びる台地の丘陵先端に築造されており、日本海を見下ろす要所に位置している。中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになる。中期以降の群集墳としては、大栄町妻波古墳群・瀬戸古墳群・西穂波古墳群、赤碕町出上岩屋古墳・別所古墳群(18)・箆津古墳群・帆立貝式古墳の光１号墳などがある。また、後期以降従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法３号墳(33)や三保６号墳(26)、大栄町上種東３、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性があり、槻下古墳群(39)・塚本古墳群(45)・大高野古墳群(47)・斎尾古墳群(43)、などの後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。東伯町大高野３号墳には横穴式石室の中に金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下５号墳（代々１号墳）には金環・鉄刀などが副葬されていた。山田１号墳(29)や出上岩屋古墳は切石積石室で、終末期の様相を示す。この時代の集落は、東伯町三保遺跡(27)、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡、八橋８・９遺跡、赤碕町太一垣遺跡・松谷遺跡(15)・別所第３遺跡などが丘陵上に営まれている。

古代

日本で最初に仏教伽藍が建立されてから約半世紀後の７世紀後半頃、山陰地方では仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22ヶ所の古代寺院がみつかっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残しているといわれる斎尾廃寺(42)は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採用しており、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦などが出土している他、創建期の軒丸瓦には紀寺式（複弁八弁蓮華文で外縁に雷文を飾る）、軒平瓦に法隆寺式（忍冬唐草文を配する）系統をもつものを採用しており、山陰・山陽では数少ない瓦当文様で、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。斎尾廃寺の東方にある大高野遺跡(44)では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉（郷倉）と考えられる。さらに郡衙所在地もその周辺に比定されている。伊勢野遺跡群(41)・水溜り・駕籠据場遺跡・森藤遺跡群においては、掘立柱建物を中心とする集落がみつかっている。その他、伊勢野遺跡群の南方に古瓦出土地(32)がある。当地域は伯耆国八橋郡に属し、加勢蛇川右岸が当郡の中心地であったと推察される。平安時代末期の遺構として、金屋(40)と法万(34)に経塚があり、金屋と西高尾(36)では銅経筒が出土している。また、井図地頭遺跡において「コ」の字状の溝に囲まれた方形区画遺構がみつかっている。建物跡は認められていないが、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。

中世・近世

鎌倉時代に入ると、名田を多く集めた有力名主の中には荘園内に孤立した荘宅を構えるなど、武士的な性格を持つ者が出現する。東伯町槻下(38)には、高さ２ｍの土塁で囲まれた区画が２つ並んで遺存し、館跡とみられる。『伯耆民談記』には岩野弾正坊の居城であったと記述されている。

また、赤碕町海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期の作と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の赤碕塔がある。現在赤碕町内で６基確認されている。

JR山陰線八橋駅のすぐ北側の丘陵上には、八橋城跡(20)がある。八橋城は、南北朝時代に行松氏によって築造されたが、のちに尼子・毛利氏の支配下となり、西伯耆から東伯耆方面の経営拠点となった。また東伯町大杉には南条氏の出城である妙見山城跡(30)がある。赤碕町では、土塁と堀を持った箆津城（槇城）がある。1584～1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城・大仏山城・山川城跡が知られている。築城年代は不明であるが、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城（東郷町）攻撃に関与した城と考えられている。

江戸時代には東伯町逢束に伯耆街道の宿駅が置かれた。江戸時代前期、寛永14年（1637年）の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」がみられることから、この時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれていた。現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。　（淺田、岩井、原、福井）

【参考文献】

鳥取県教育委員会編集　2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会
鳥取県埋蔵文化財センター編　1986『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県埋蔵文化財センター編　1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県教育文化財団編　2003『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』(財)鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県教育文化財団編　2003『笠見第３遺跡』(財)鳥取県埋蔵文化財センター
赤碕町教育委員会編　1986『墓ノ上遺跡発掘調査報告書Ⅰ』赤碕町教育委員会
赤碕町教育委員会編　1995『別所古墳群・別所夫婦岩峯遺跡発掘調査報告書』赤碕町教育委員会
赤碕町教育委員会編　2001『福留遺跡発掘調査報告書』赤碕町教育委員会
東伯町教育委員会編　1987『水溜り・鴛籠据場遺跡・森藤第３遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
東伯町教育委員会編　1995『笠見第２遺跡・笠見第３遺跡・田越第４遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
東伯町教育委員会編　2001『八橋第２遺跡～八橋第４遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
内藤正中・真田廣幸・日置粂左ヱ門著　1997『県史31　鳥取県の歴史』(株)山川出版社
坂詰秀一編　2003『仏教考古学辞典』(株)雄山閣

第３章　久蔵峰北遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と層序

(1)　立地と現況

大山北麓には大小幾筋もの台地状の尾根が日本海へ向かって延びている。当遺跡はその東端付近に位置する。遺跡が立地する尾根は、樹枝状に分岐しながら北へ延び、上面は幅広の平坦面を形成する。

尾根の両側には谷が深く入り込み、東側の谷との比高差は30mを越す。谷部に水田域を想定するには、狭小なためやや難がある。調査前の現況は、調査区東半部では植林が行われ、西半部は梨畑であった。調査区西半部の中央はコ字形に大規模な土取りが行われ、西側の谷が埋め立てられていた。調査はこの尾根を横断する形で行い、尾根上の平坦面および台地の縁辺部の斜面を調査区とした。

(2)　基本層序

表土は黒ボクの耕作土である。その直下が遺構検出面である。遺構面までの深さは約30cmと浅いため、遺構面は耕作に伴う攪乱をかなり受けていた。

遺構のベースとなる層は所によって異なるが、残りが良い所では、下のホーキ層と呼ばれる大山の火山灰層であった。これがすでに失われた箇所では、その下層のＡＴ層や、白色粘質土、さらに下の淡赤褐色粘質土層をベースとする遺構もみられる。

調査区の縁辺部の緩斜面では、表土と地山の間に暗茶褐色系の粘質土の堆積がみられた。これは厚さ約10cm前後の無遺物層である。SI２等の一部の遺構はその上面での検出であった。調査区北西部では、これをすべて除去し、調査区南西部の遺構が希薄な箇所でもこの層の断ち割りを行ったが、その下層では遺構、遺物ともに認められなかった。　（小山）

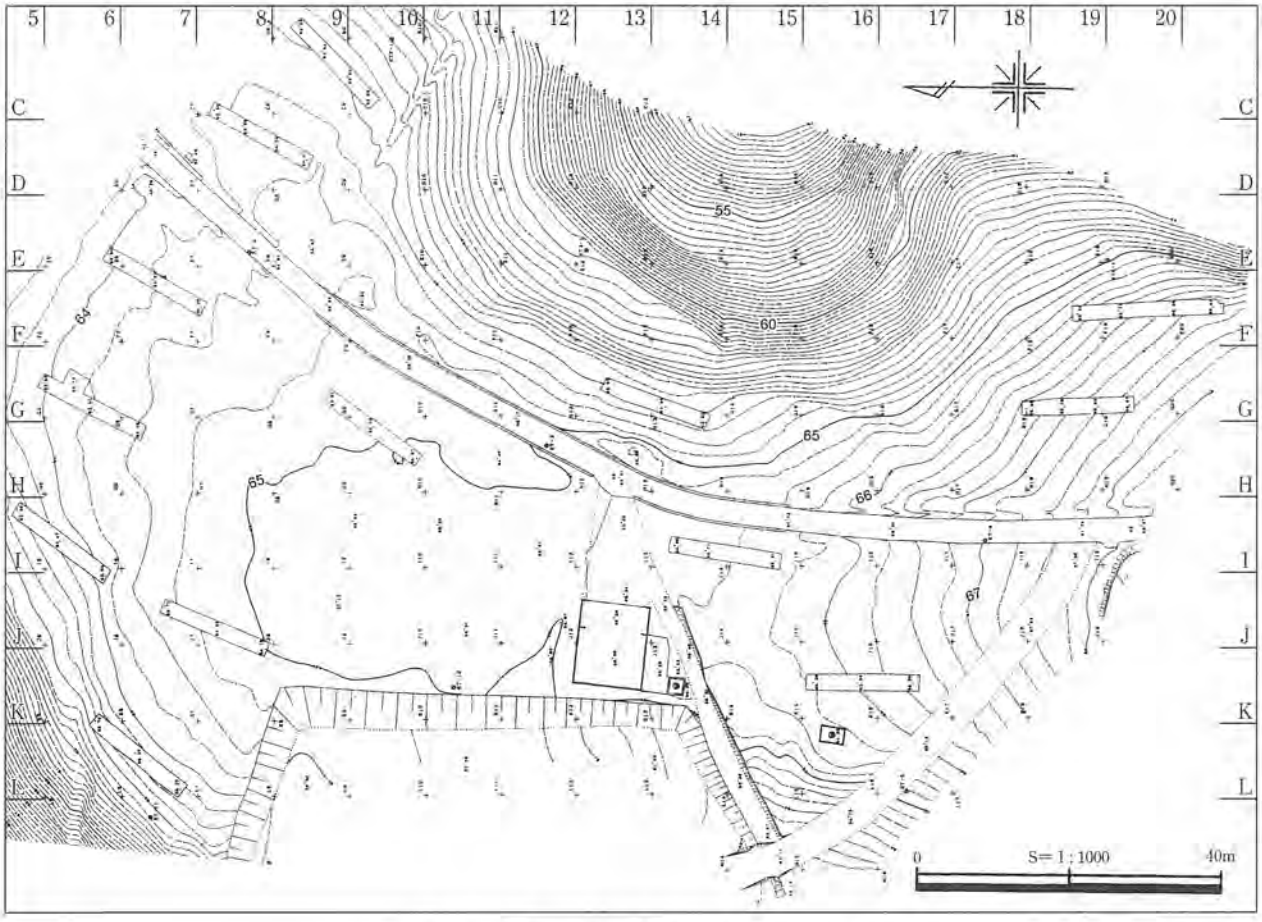
Fig　1　調査前風景（北東から）

(3)　調査の方法

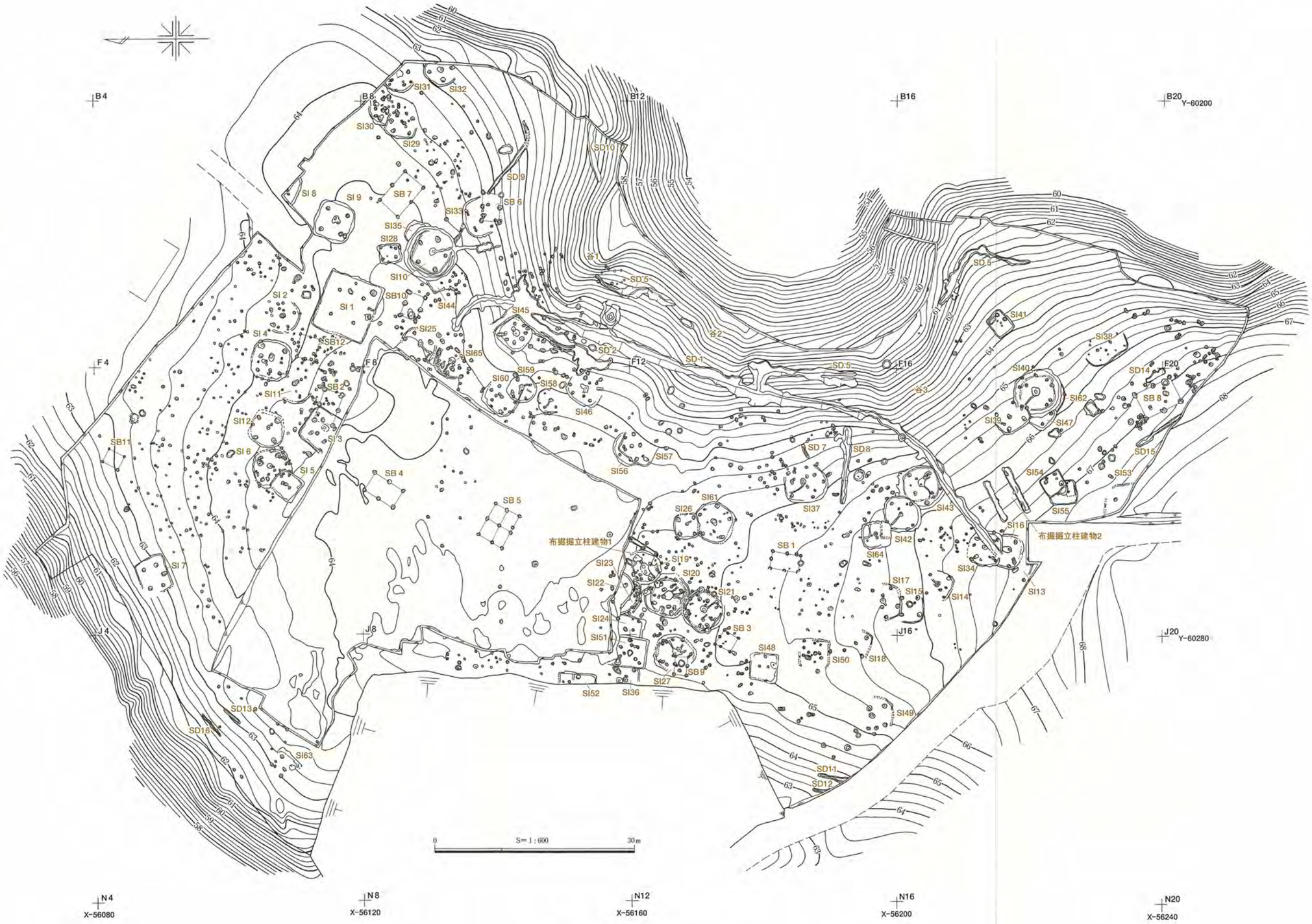
当初は排土搬出の関係から、調査区の北東部から調査に着手する予定であったが、調査開始時は調査区の東半部の木が未伐採であったり、伐採木が調査区内に山積みされていたことから、調査はやむを得ず北西部から着手した。調査が進むにつれて調査区中央を横切る道の下にも遺構があることが分かり、国土交通省との協議により道の付け替え工事の後、現道の下も調査を行うこととなった。このため上半期の調査は付け替え道路予定地に調査の重点を置き、下半期は東半部の調査ならびに道の下の調査を行った。

表土剥ぎは重機により行った。また斜面地でも環濠等の有無を確認するため、可能な限り調査区を広げ、調査を行った。その後の遺構検出、掘り下げ、埋没谷の包含層の除去などはすべて人力により行い、住居の掘り下げ中に玉剥片類が出土した遺構については、随時その埋土の洗浄、ふるいかけを行った。遺構実測はすべて手測りで行い、調査前測量、及び調査後測量、方眼杭の打設は業者へ委託した　また写真は航空写真を除き、調査員による撮影である。航空写真は業者へ委託し、ラジコンヘリにより撮影を行った。

調査区の地区割りは、調査区外の北東部に原点を設け、調査区内に10m方眼のメッシュ杭を打設した。東西は東から10mごとにアルファベットの記号をふり、南北は北から10mごとにアラビア数字をふった。打設した杭はそのアルファベットと数字を組み合わせた記号で呼称し、10m四方の一区画を、その北東隅の杭番号でもって地区名とした。



第４図　久蔵峰北遺跡調査前測量図



第５図　久蔵峰北遺跡調査後測量図

第２節　調査の成果

(1)　調査の概要

調査の結果竪穴住居跡65棟、掘立柱建物12棟、布掘掘立柱建物２棟、溝、土坑などを検出した。以下この順に報告を行う。

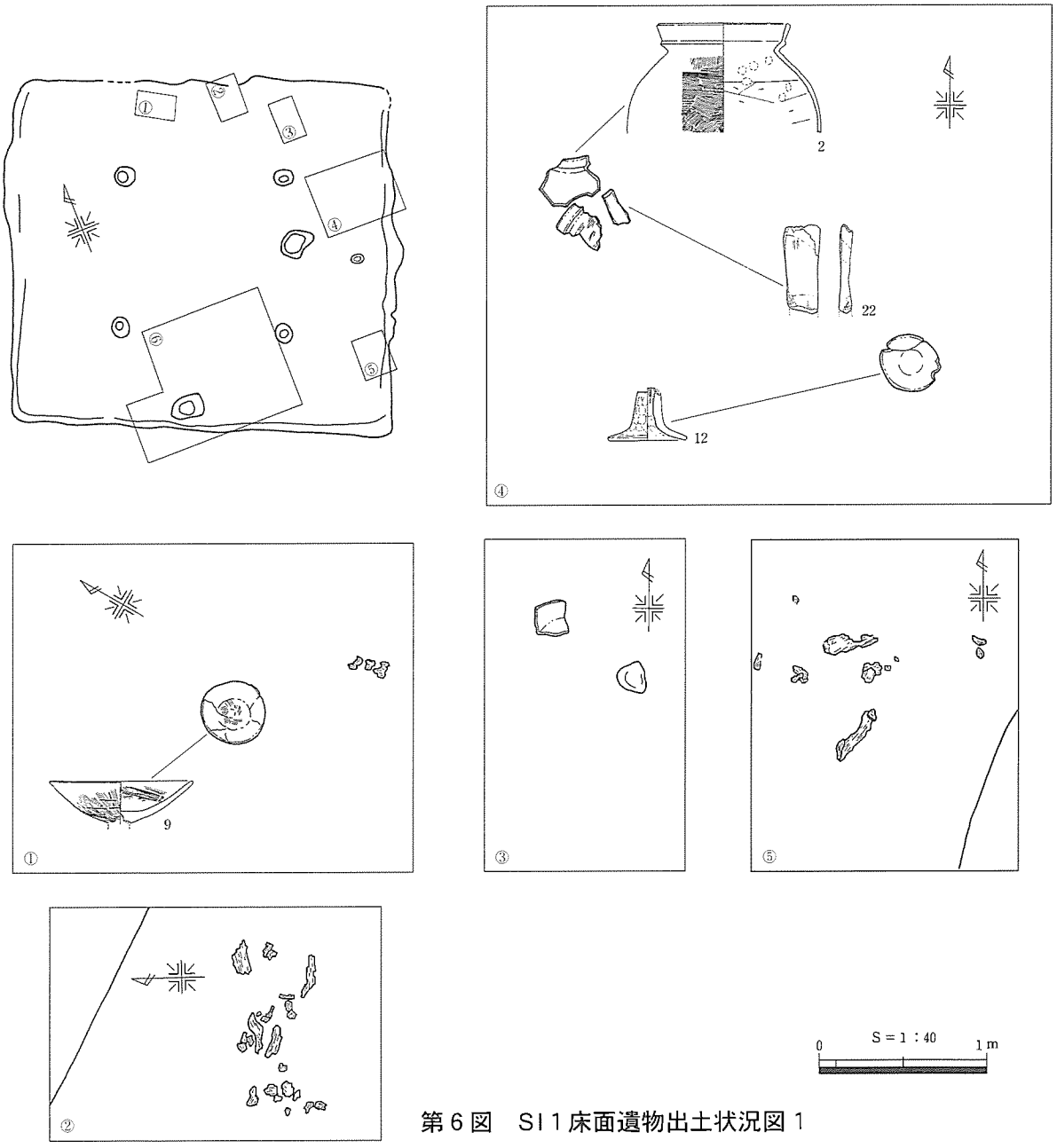
表１　SI１ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40	34	66
Ｐ２	43	40	85
Ｐ３	50	38	93
Ｐ４	42	40	79
Ｐ５	74	47	17
Ｐ６	25	21	29

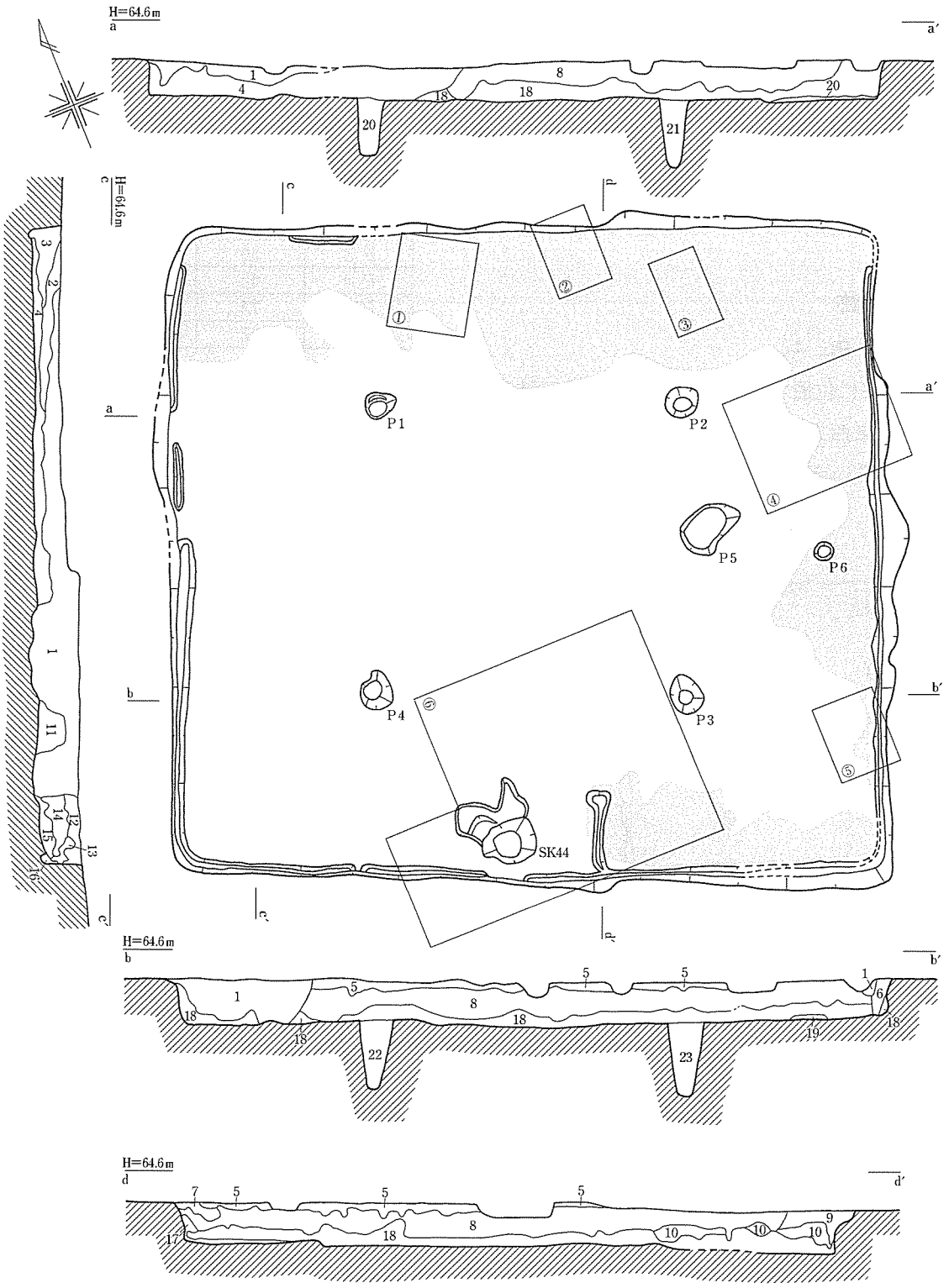
(2)　竪穴住居跡

SI１（第７図、PL. ４）

Ｅ７グリッドに位置する。この付近は傾斜が最も緩やかな台地上の平坦地にあたる。一辺が9.1×8.3ｍ、平面形は東西方向に長い長方形の竪穴住居跡である。当遺跡内では最大規模のものである。壁高は最も残りの良い南西隅付近で69cmと、遺存状況が比較的良好である。埋土は暗褐色系の土であるが、

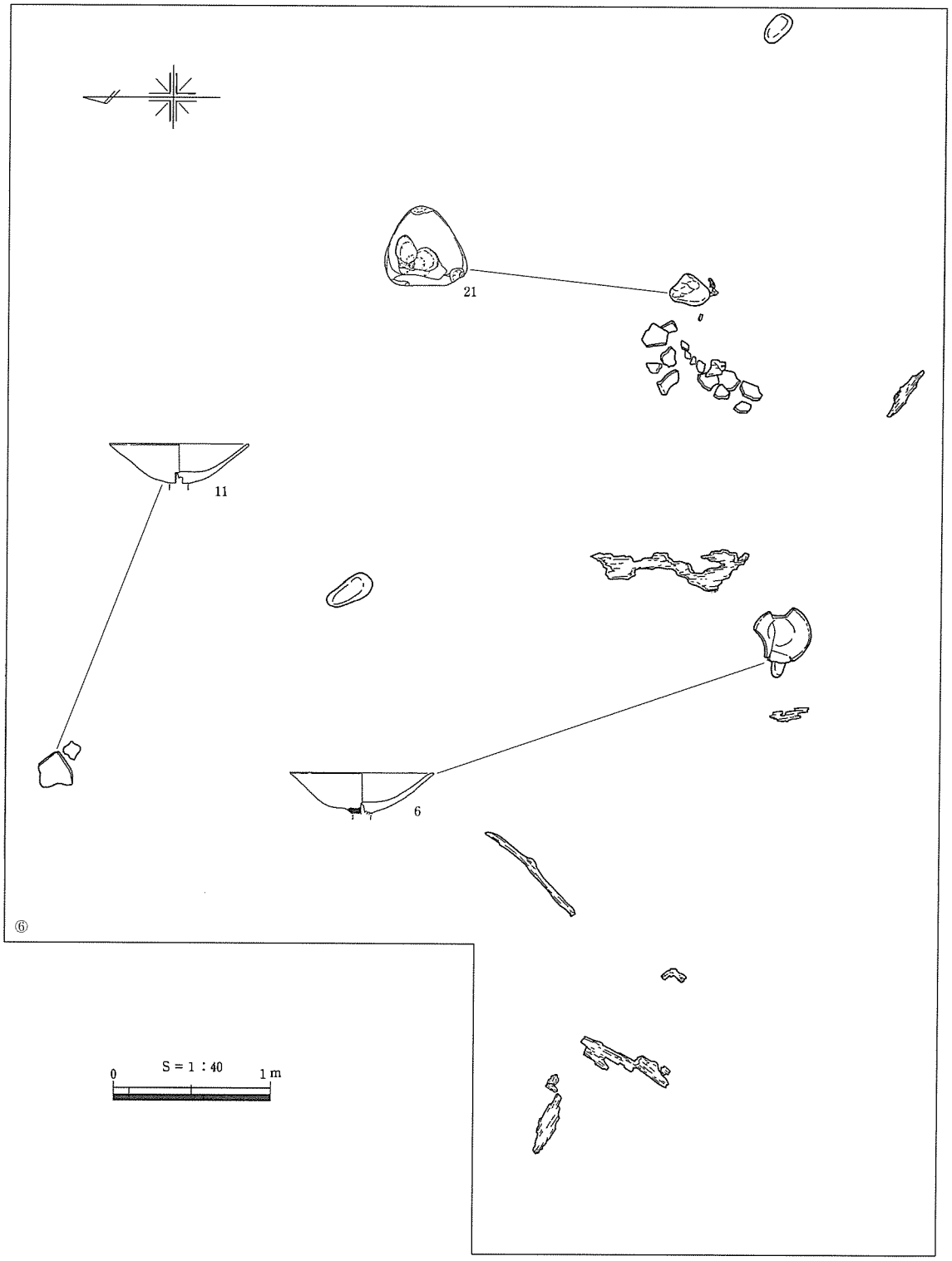


第６図　SI１床面遺物出土状況図１



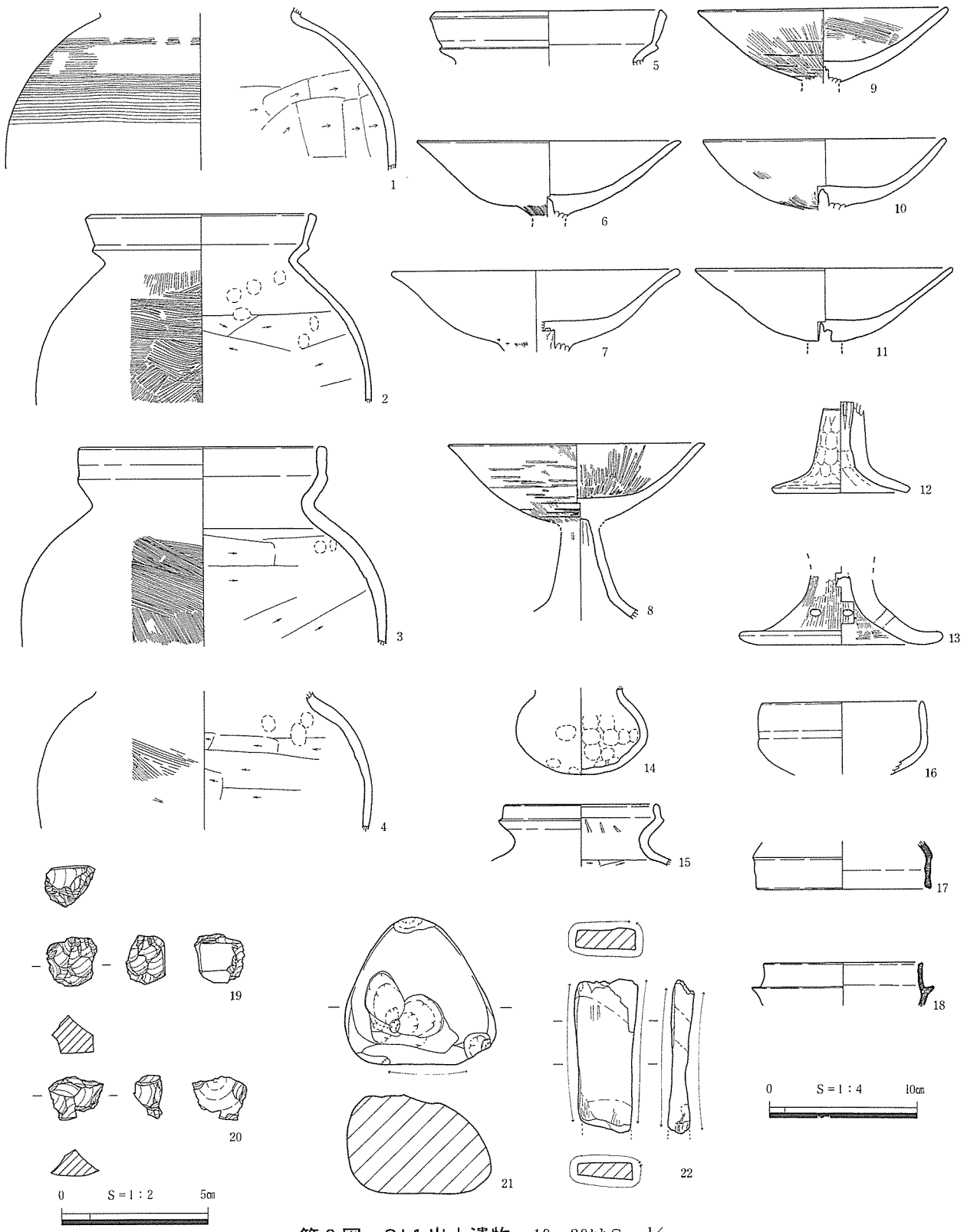
1層　撹乱土
2層　明褐色土（20mm大黄褐色土ブロック含む）
3層　暗黄褐色土（砂粒含む）
4層　暗黄褐色土（30mm大黄褐色土ブロック含む）
5層　暗褐色土（８層より大きい白色礫含み、しまり強）
6層　茶褐色土（しまり強）
7層　暗褐色土（しまり強）
8層　暗褐色土（白色礫、炭化物、黄褐色土ブロック多く含み、しまり強）
9層　暗褐色土（しまりやや弱）
10層　暗褐色土（２mm大黄褐色粒子、白色礫含み、しまり強）
11層　暗褐色土（20mm大黄褐色土ブロック含む）
12層　褐色土
13層　黄褐色土（30mm大黄褐色土ブロック含む）
14層　暗黄褐色土（10mm大黄褐色土ブロック含む）
15層　黄褐色土（黄褐色ブロック、灰黄褐色土含む）
16層　灰黄褐色土
17層　暗黄褐色土（炭化物、30mm大黄褐色土ブロック含み、しまり強）
18層　暗褐色土（炭化物、黄褐色土ブロック多く含み、しまり強）
19層　暗褐色土（炭化物、黄褐色土ブロック含む）
20層　灰褐色土（炭化物含む）
21層　暗褐色土（炭化物、黄褐色土ブロック含み、しまり強）
22層　暗黄褐色土
23層　褐色土（黄褐色土ブロック、橙褐色土含み、しまり強）

第７図　SI１実測図



第８図　SI１床面遺物出土状況図２

混入するブロックの大きさや色などで３層に細分可能である。堆積は水平堆積であり、自然堆積による埋没とみられる。周壁溝は幅６～31cmで深さが５cm前後のものが北壁際を除く３方向の壁際で検出された。当住居跡に伴うとみられるピットは６基検出した。このうちＰ１～Ｐ４が主柱穴とみられ桁行3.9m、梁行3.6～3.7mを測る。このほか南壁際中央には土坑が認められた（SK44）。長軸106cm、短軸96cm、深さ70cmの不整形土坑である。出土遺物はない。またその東では南壁に直交する幅12cm、長さ105cm、深さ４cmの溝が認められた。その位置からみて、間仕切り溝と考えられる。床面には北



第９図　SI１出土遺物　19、20はＳ＝½

壁際から東壁際にかけて貼床が認められた。北壁際と南壁際の床面直上にて炭化材が出土した。炭化材は直径が５cm前後、太いものでも直径10cm程の丸太状のものである。遺存状況が悪く、建築材であるか否か判断し難いが、南壁際の最下層の埋土中には焼土も含まれていたことから、焼失住居の可能性もある。

埋土中から多くの土師器とともに須恵器、石器、水晶製の剥片も出土した。その大半は埋土上層の

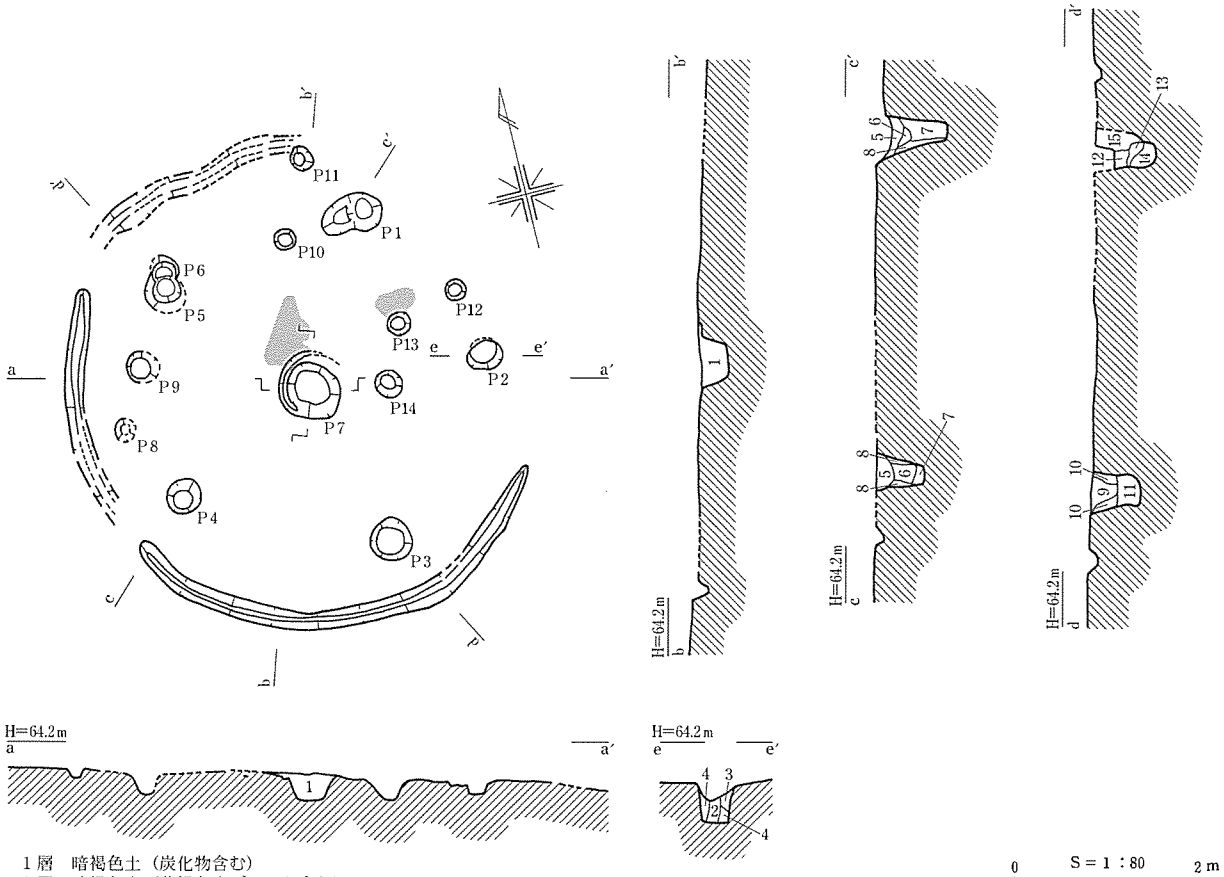
出土であり、住居廃絶後の流れ込みと判断される。床面から出土した遺物は土師器甕１、高杯７．８．11．12、小型丸底壺14、砥石22である。このうち高杯はいずれも法量、胎土、色調、調整手法が近似し、規格性の高い土器群である。このほか床面付近出土の土師器甕２も住居の時期に近い遺物と考えられる。２の口唇部内面の肥厚する特徴からみて、天神川Ⅲ期に該当するとみられる。このことから当住居跡は、古墳時代前期前葉から中葉のものとみられる。　（小山）

SI２（第10図、PL. ６）

Ｅ６グリッドの台地の中央平坦部で検出した。住居跡のベース土となる層は、南半は淡赤褐色の粘土層であるが、北半はこの上に堆積する無遺物層の暗赤褐色土をベースとする。本来淡赤褐色土の上面にはＡＴ層が堆積することから、この層は緩斜面に堆積した流土と考えられる。遺構の遺存状況は悪く、検出段階ですでに大半の埋土が失われ、床面の一部が露出し、北半部は、床面より低い高さまで、削平が及んでいた。周壁溝は幅16～26cm、深さ４～10cmのものが、住居の南半で検出された。当初は

表２　SI２ピット表　（ ）現存値

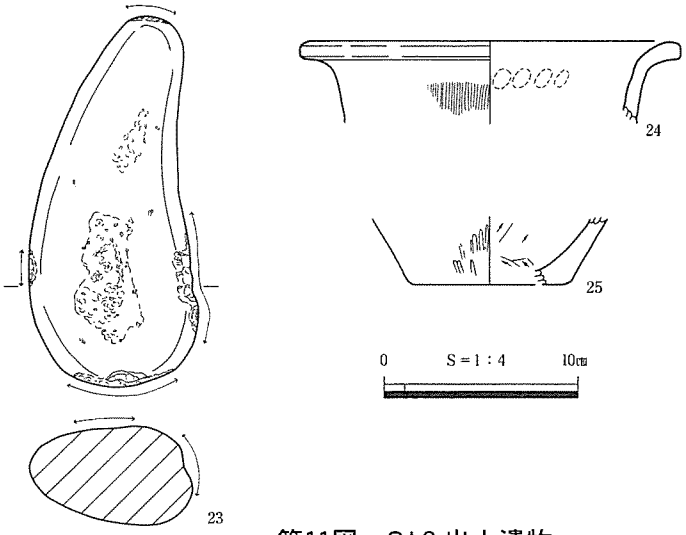
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	68	43	67
Ｐ２	38	32	38
Ｐ３	45	45	48
Ｐ４	39	37	50
Ｐ５	30	28	62
Ｐ６	26	(15)	49
Ｐ７	68	58	29
Ｐ８	不明	不明	不明
Ｐ９	(38)	(32)	3
Ｐ10	24	24	10
Ｐ11	28	24	30
Ｐ12	22	21	88
Ｐ13	24	23	10
Ｐ14	30	27	23



1層　暗褐色土（炭化物含む）
2層　暗褐色土（黄褐色土ブロック含む）
3層　黄褐色土（灰黄褐色土含む）
4層　暗黄褐色土
5層　暗褐色土（しまり強）
6層　暗褐色土（少量の黄褐色土、炭化物含む）
7層　暗灰褐色土（５㎜大黄褐色土ブロック、炭化物含む）
8層　黄褐色土
9層　暗褐色土（10㎜大黄褐色土ブロック、少量の炭化物含む）
10層　黄褐色土
11層　暗灰褐色土（黄褐色土ブロック多く含む）
12層　暗黄褐色土
13層　暗黄褐色土（暗褐色土含む）
14層　暗灰褐色土
15層　暗褐色土（５㎜大黄褐色土ブロック含む）

第10図　SI２実測図

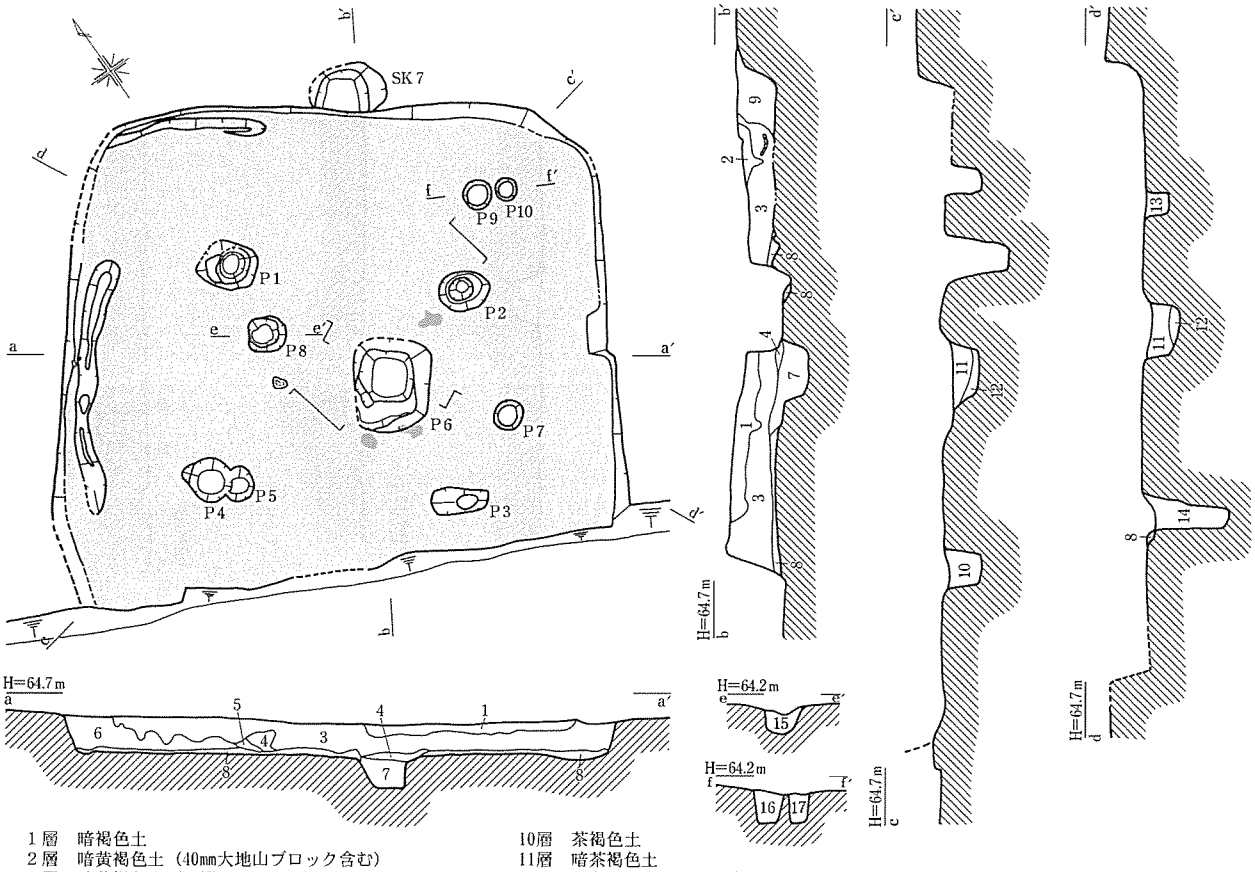
全周していたものが、後世の削平により失われたものと考えられる。これから推定される住居跡の規模・平面形は、直径5.4mの円形または一辺が３mの五角形の竪穴住居跡と考えられる。検出したピットは14基である。この中には、住居の廃絶の後、埋土中から掘り込まれたものも含むと考えられるが、埋土の残りが悪く、区別は困難であった。主柱穴と考えられるのは、Ｐ１～Ｐ５の５基である。柱間は2.2mの等間である。中央ピットは一部２段掘りとなっていた。この１段目の落ち込みから北西側の床面にて焼土面が検出された。さらにＰ13付近の床面においても焼土面が認められた。



第11図　SI２出土遺物

表３　SI３ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	60	49	90
Ｐ２	55	41	68
Ｐ３	60	22	43
Ｐ４	55	46	32
Ｐ５	38	(22)	6
Ｐ６	(100)	80	38
Ｐ７	31	28	10
Ｐ８	38	38	28
Ｐ９	32	29	35
Ｐ10	24	22	30



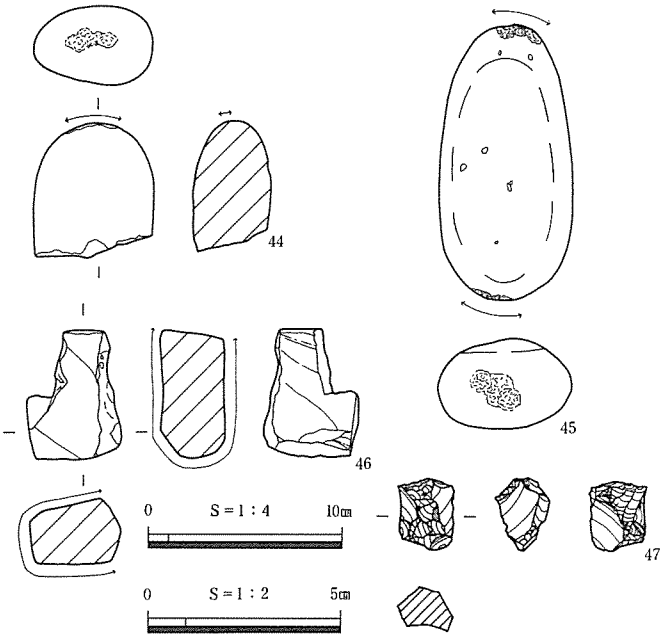
１層　暗褐色土
２層　暗黄褐色土（40mm大地山ブロック含む）
３層　暗黄褐色土（２層より明るい）
４層　にぶい黄褐色土（５～10mm地山ブロック含む）
５層　暗褐色土（10mm大地山ブロック含む）
６層　にぶい黄褐色土（20mm大地山ブロック多く含む）
７層　暗茶褐色土（下部は黒色土）
８層　暗黄褐色土（貼床　10～20mm大黄色土ブロック含む）
９層　SK７埋土
10層　茶褐色土
11層　暗茶褐色土
12層　黒色土（炭化物多く含む）
13層　暗黄褐色土
14層　暗黄褐色土（20mm大地山ブロック含む）
15層　茶褐色土
16層　茶褐色土
17層　暗褐色土

第12図　SI３実測図

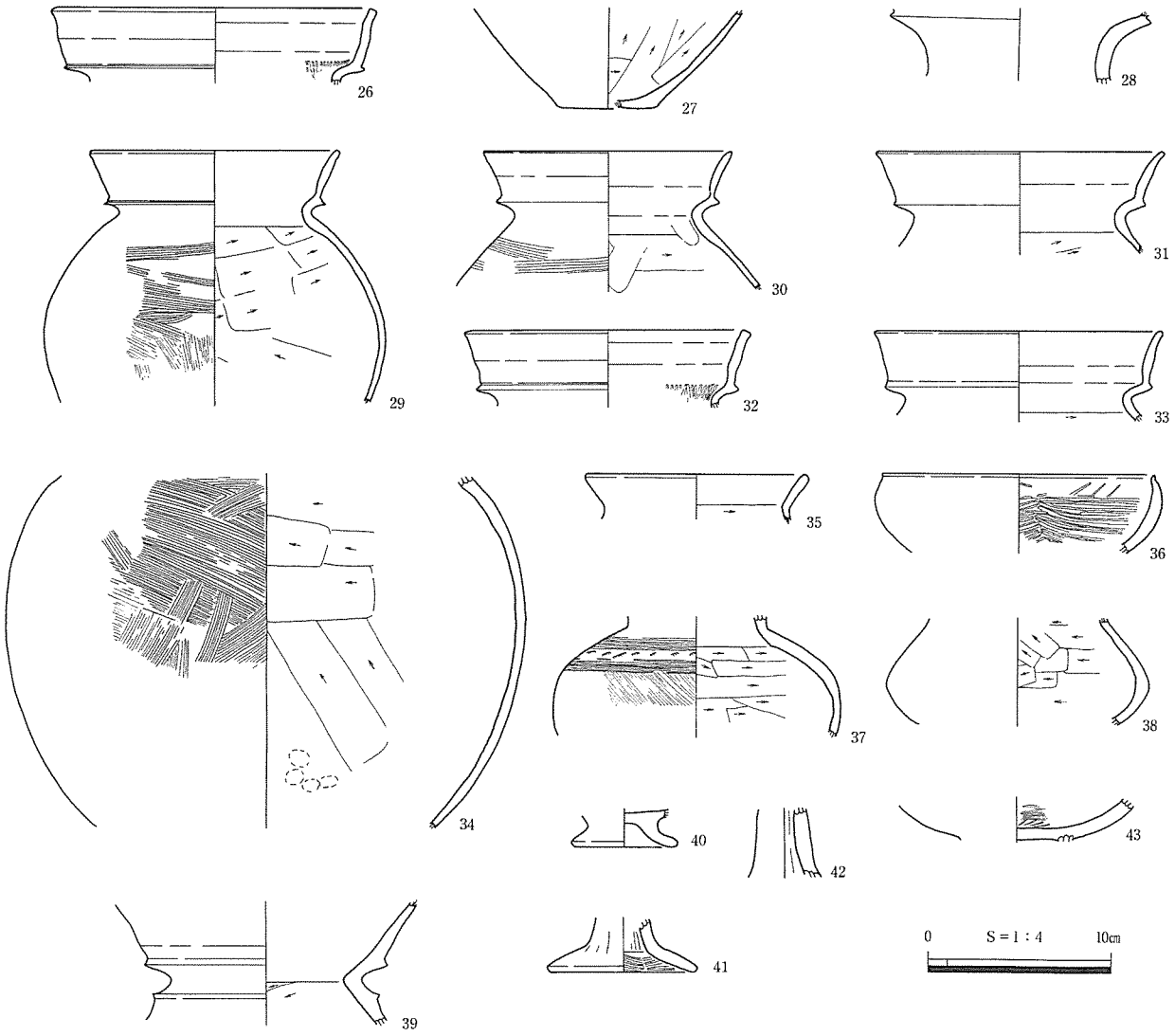
出土遺物は埋土中から若干の土器片と敲石が出土した。いずれも埋土の下層に相当する。これ以外にも細片のために図化が困難であったが、甕の口縁部が出土している。内面には口縁部直下にヘラケズリを施しており、内傾する口縁部外面に平行沈線を施すなどの特徴から清水編年のＶ－１期に相当すると考えられる。このことから当住居跡は、弥生時代後期前葉の時期のものとみられる。　（小山）

SI３（第12図、PL. ６）

Ｆ７グリッドからその西側にかけて、台地の平坦面にて検出した。住居の南壁はそのほとんどが攪乱により破壊されている。



第13図　SI３出土石器　47のみ　S＝½



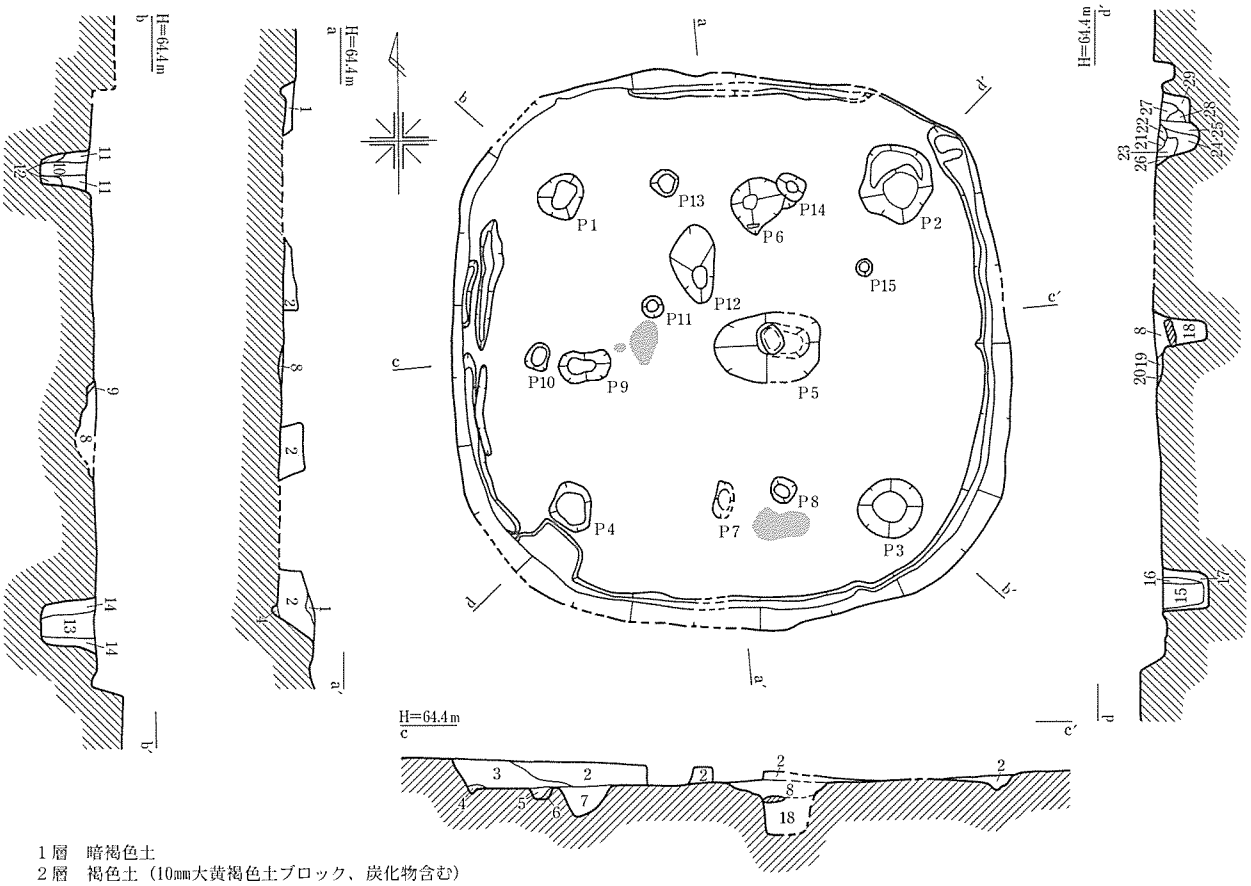
第14図　SI３出土土器

北壁中央部ではSK７と重複関係にあるが、当住居跡の埋土がSK７の埋土を切り込んでいたので、切り合い関係からみて、当住居跡が新しい。規模は5.7×4.9mで、方形の竪穴住居跡である。壁高は遺存良好な住居の北壁から西壁で43cmである。周壁溝は幅７～14cm、深さ１～４cmで、北壁と西壁の一部に認められた。

検出したピットは10基で、この他に貼床の下でSB２の柱穴を検出した。このうちＰ１～Ｐ４が主柱穴で、中央ピットＰ６を有する４本主柱の住居跡とみられる。床面には貼床が認められ、その範囲は床面の大部分に及ぶ。貼床上面にて水晶製調整剥片47が１点出土しているが、単独での出土であり、また住居清掃中の出土であることから、貼床層中の混入品とみられる。

その他の出土遺物としては、埋土中より多量の土器の破片や石器が出土した。床面直上から出土の甕26は天神川Ⅱ期に該当する。このことから、当住居跡の時期は、古墳時代前期前葉のものと考えられる。

（小山）

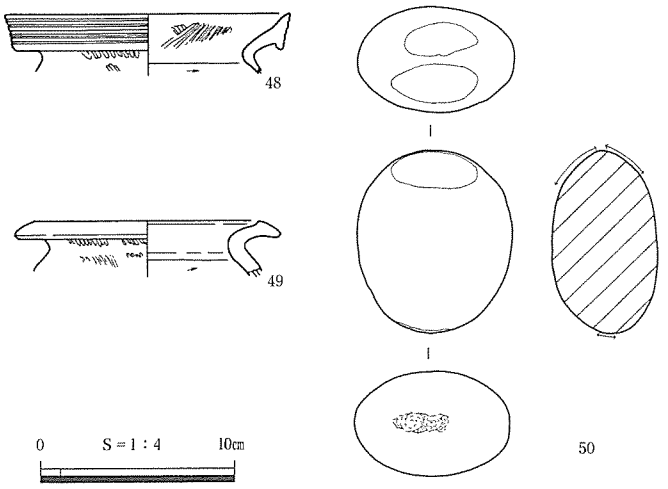


1層　暗褐色土
2層　褐色土（10mm大黄褐色土ブロック、炭化物含む）
3層　暗褐色土（10～20mm大黄褐色土ブロック、炭化物含む）
4層　暗灰褐色土（10mm大黄褐色土ブロック含む）
5層　暗褐色土（灰褐色土含む）
6層　灰褐色土
7層　暗灰白色土（20mm大黄褐色土ブロック、焼土含み、上部灰白色）
8層　暗褐色土（30mm大黄褐色土ブロック含む）
9層　灰白色土（黄褐色土ブロック含む）
10層　暗褐色土
11層　にぶい黄褐色土
12層　にぶい黄褐色土
13層　暗褐灰色土（20mm大黄褐色土ブロック含み、しまり弱）
14層　灰黄褐色土
15層　暗褐灰色土
16層　暗褐灰色土
17層　灰黄褐色土
18層　暗褐色土（５mm大地山ブロック、炭化物多く含む）
19層　暗褐色土（黄褐色土ブロック含む）
20層　灰白色土（黄褐色土ブロック含む）
21層　暗褐色土（５mm大黄褐色土ブロック含み、しまり強）
22層　暗褐色土
23層　暗茶褐色土（20mm大黄褐色土ブロック含む）
24層　暗褐灰色土（10mm大黄褐色土ブロック、炭化物含む）
25層　暗茶褐色土（黄褐色土含む）
26層　暗茶褐色土
27層　暗褐色土
28層　暗茶褐色土
29層　暗黄褐色土

第15図　SI４実測図

表４　SI４ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	50	45	54
Ｐ２	83	79	48
Ｐ３	68	64	60
Ｐ４	48	48	49
Ｐ５	113	74	54
Ｐ６	58	50	38
Ｐ７	40	(15)	16
Ｐ８	27	26	25
Ｐ９	54	30	31
Ｐ10	28	25	14
Ｐ11	23	22	21
Ｐ12	84	50	65
Ｐ13	30	29	26
Ｐ14	31	23	22
Ｐ15	16	15	7



第16図　SI４出土遺物

SI４（第15図、PL. ７）

Ｅ６グリッドからその西側にかけて、台地の平坦部に位置する。一辺が5.9m四方の隅丸方形の竪穴住居跡である。壁高は最も残りの良い南西側で40cmを測る。埋土は残りが悪いが、暗褐色系ないしは黄褐色系の埋土で、自然堆積による埋没とみられる。検出したピットは15基である。このうち主柱穴とみられるものは、Ｐ１～Ｐ４の４基である。このうちＰ１とＰ３は土層の断面観察により、柱痕跡を確認できた。柱の太さは15～25cm、主柱穴間の距離は、3.3～3.5mである。またＰ６，Ｐ７、Ｐ９は主柱穴より若干浅いピットであるが、主柱穴間を結ぶライン上に位置することから、支柱穴と考えられる。またＰ８，P10，P13もその可能性がある。Ｐ５は中央ピットであるが、底から30cm上より、長径33cm、短径23cm、厚さ８cmの台石が出土した。中央ピットの埋土はこの台石を境とし、下層は炭化物を含み、上層は地山ブロックを含む埋土であった。壁際には、幅16～35cm、深さ５～７cmの周壁溝がめぐるが、北東と北西隅で途切れる箇所がある。床面には３ヶ所に焼土面が認められた。出土遺物には若干の土器、石器がみられるが、いずれも埋土中出土であることから、住居廃絶後の埋土中への流れ込みと判断される。床面からの遺物の出土は皆無であった。このため当住居跡の詳細な時期決定は困難を伴うが、埋土中出土の甕48は清水編年のＶ－２期に相当することから、弥生時代後期中葉に近い時期のものとみられる。　（小山）

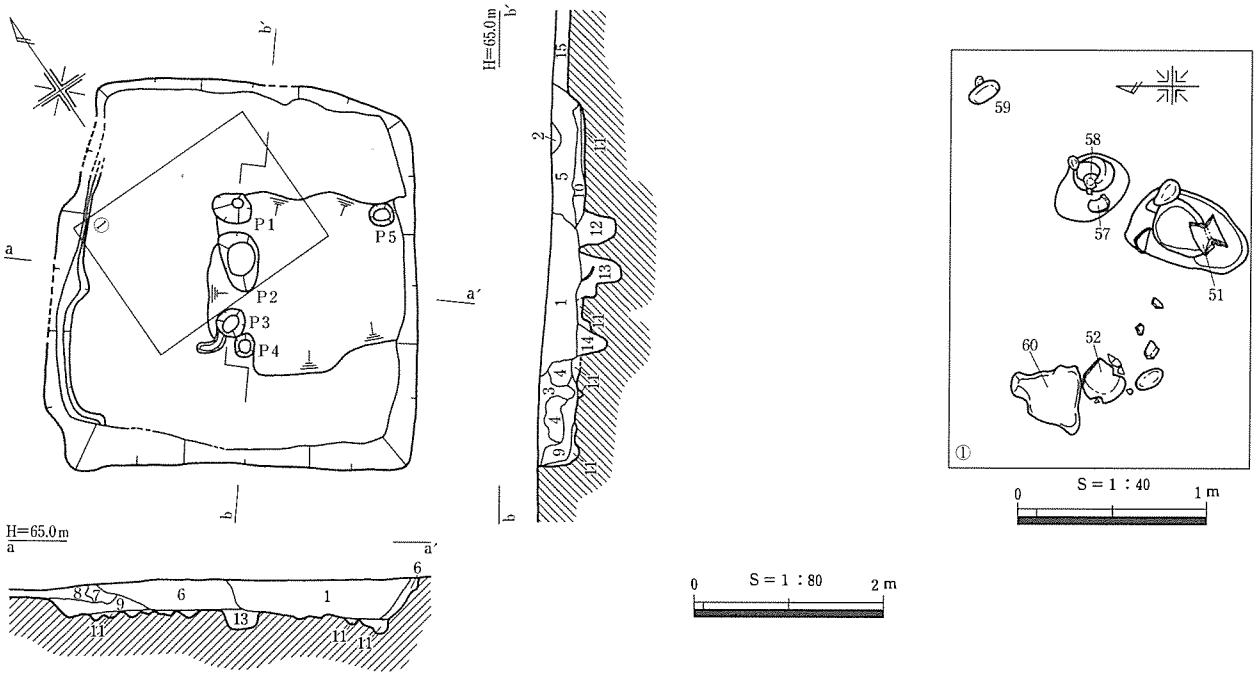
SI５（第17図、PL. ７）

Ｇ６グリッドの台地の平坦面に位置する。北側でSI６と重複するが、当住居跡が、SI６の埋土を切って掘り込まれていることから、当住居跡が新しい。規模・平面形は南北4.0m、東西が3.4～4.0mのやや台形状を呈する方形の竪穴住居跡である。壁高は南壁やや西寄りで38cmを測る。一部床面に達する攪乱を受けているが、遺存状況は比較的良い。

土層堆積状況からみて、壁際から流入土が堆積していく状況が看取でき、自然堆積による埋没とみられる。床面で検出したピットは５基である。このうち主柱穴は、

表５　SI５ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40	30	36
Ｐ２	64	38	47
Ｐ３	35	30	30
Ｐ４	20	17	10
Ｐ５	26	26	44



１層　攪乱土
２層　暗褐色土
３層　褐色土
４層　にぶい黄褐色土
５層　暗褐色土
６層　暗褐色土（30mm大黄褐色土ブロック含む）
７層　にぶい黄褐色土
８層　褐色土
９層　黄褐色土（50mm大黄褐色土ブロック含む）
10層　黄褐色土（褐色土含む）
11層　にぶい暗黄褐色土（10mm大黄色土ブロック含む）
12層　暗黄褐色土
13層　暗黄褐色土
14層　暗黄褐色土
15層　SI６埋土

第17図　SI５実測図

中央ピット（P２）を挟むP１とP３の２基で主柱穴間距離は1.3mである。東壁際に幅７～28cm、深さ７cm前後の周壁溝がめぐる。

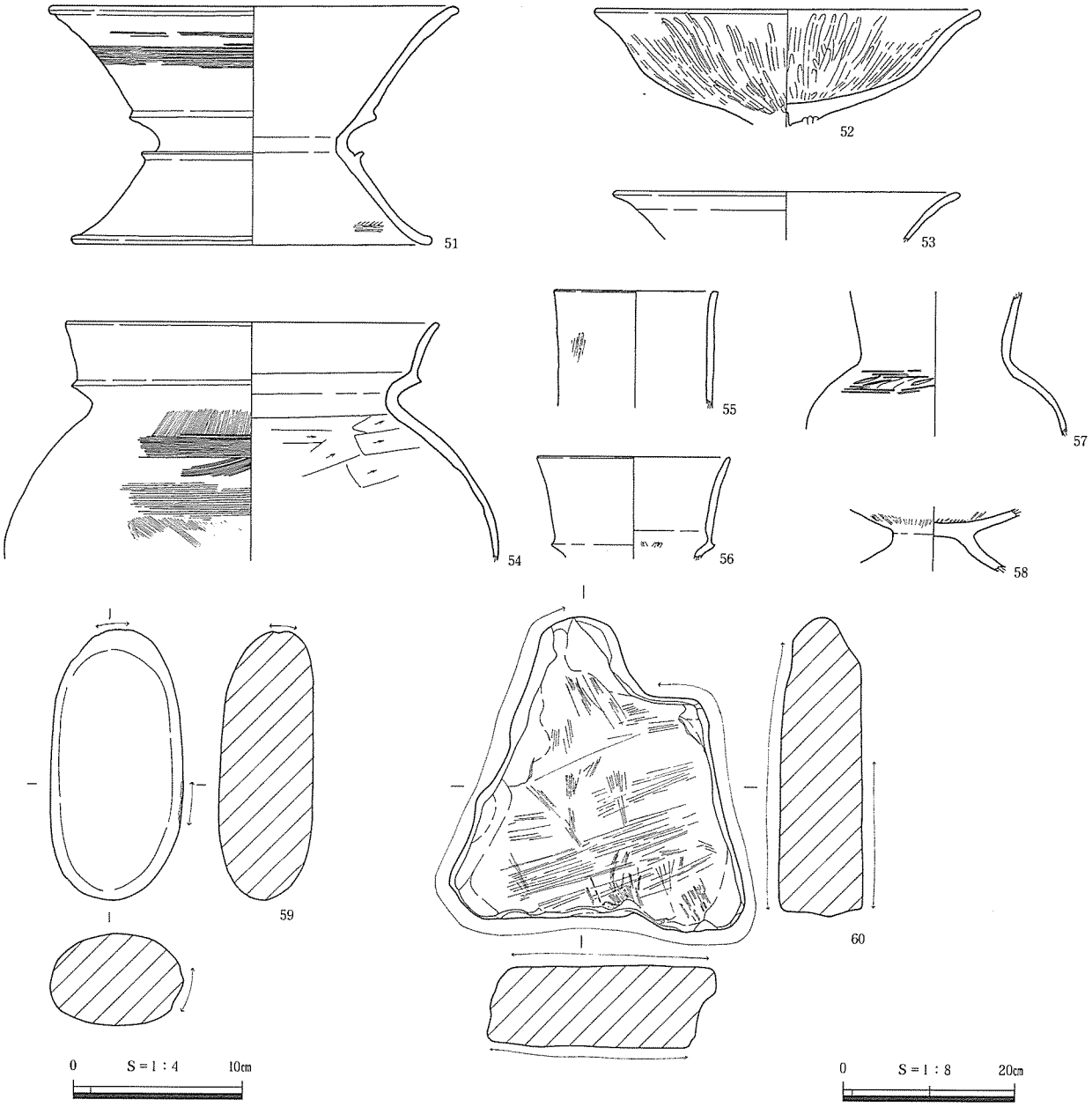
出土した遺物は土師器、石器である。中央ピット周辺からは、台石60、敲石が出土した。いずれも床面直上からの出土である。敲石は側面に敲打痕を残し、台石は上面に擦痕が顕著に認められる。また中央ピットの検出面から、鼓形器台51が横たわった状態で出土した。その他の土器は埋土中出土のものである。51の土器は、天神川Ｉ期にあたることから、弥生時代終末期から古墳時代初頭の住居跡とみられる。　（小山）

表６　SI６ピット表　（　）現存値

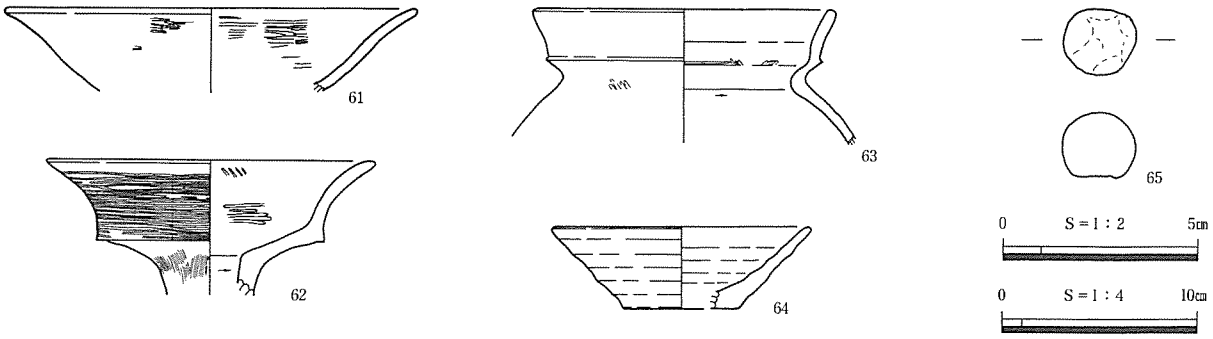
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	62	42	63
P２	77	46	61
P３	53	34	39
P４	36	30	(51)
P５	99	80	46
P６	28	26	23
P７	34	20	18
P８	26	(22)	17
P９	22	18	7
P10	34	32	44
P11	46	30	42
P12	19	19	10
P13	37	33	38
P14	43	41	26
P15	36	28	42
P16	28	22	37
P17	(28)	18	48
P18	(68)	57	30
P19	74	48	38
P20	54	33	33
P21	32	32	62

SI６（第20図、PL. ８）

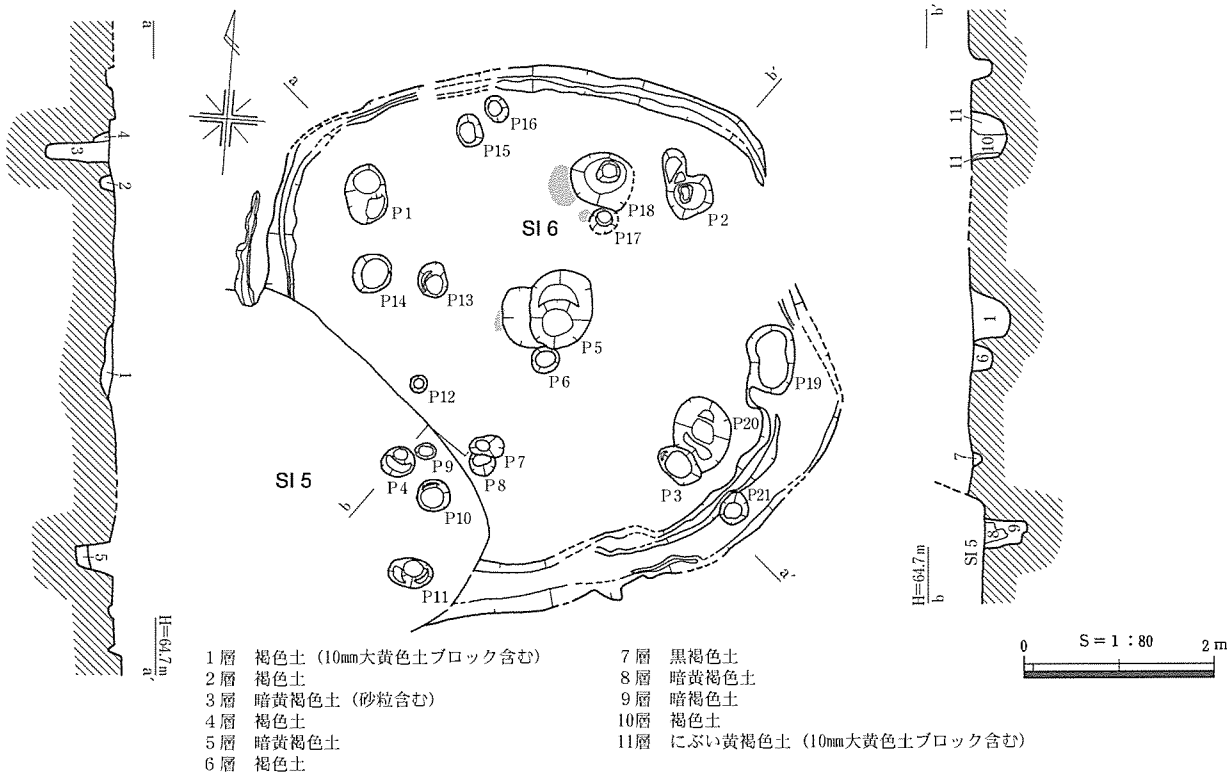
Ｇ６グリッドの台地の平坦部に位置する。南側はSI５と重複するが、前述したようにSI５が新しく、当住居跡が古い。また東側もSI12と重なるが、両者共に既に埋土が失われ、検出面が同一であるため、層位的な前後関係は不明である。住居跡は、一辺5.7m×5.5mの隅丸方形である。遺存状況が悪く、壁高は残りがよい北壁際でもわずかに８cmである。周壁溝は幅15～30cm、深さ２～６cmで全周していたとみられる。床面には３ヶ所から焼土面が検出された。ピットを18基検出した。このう



第18図　SI５出土遺物　60のみ　S＝⅛



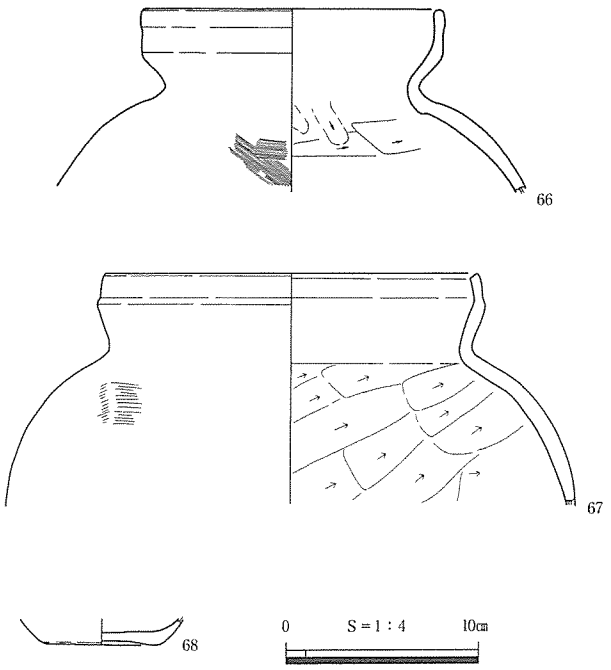
第19図　SI６出土遺物　65のみ　S＝½



第20図　SI６実測図

ちＰ１～Ｐ４が主柱穴であり、Ｐ５は中央ピットであることから、４本柱の住居跡とみられる。

主柱穴間の距離は2.5～3.3mである。その他のピットは性格不明のものであるが、中には住居とは時期を異にするものも含むと思われる。遺物は、埋土中から土玉65や、若干の土器片の出土がみられた。出土した土器は弥生時代後期後葉から古墳時代前期、下って平安時代までの年代幅を持ち、土器から住居の時期決定を行うのは困難である。しかし弥生時代終末期のSI５に切られていることなども勘案すると、おおむね弥生時代後期のものと判断される。また、64の土師器杯は12世紀代のものとみられ混入品と考えられる。　（小山）



第21図　SI７出土土器

SI７（第22図、PL. ８）

I４グリッド周辺、標高62.7～63.4mのゆるやかな斜面に位置する。本遺構は西側の攪乱と、中央部分を北東－南東方向の攪乱溝によって壊されている。また、遺構の北西側は土の流出により遺存状態は悪い。平面形は方形で、長辺6.0m、短辺4.6mを測る。床面は全面にわたって、黄褐色土・灰白色土・橙褐色土のブロックを含

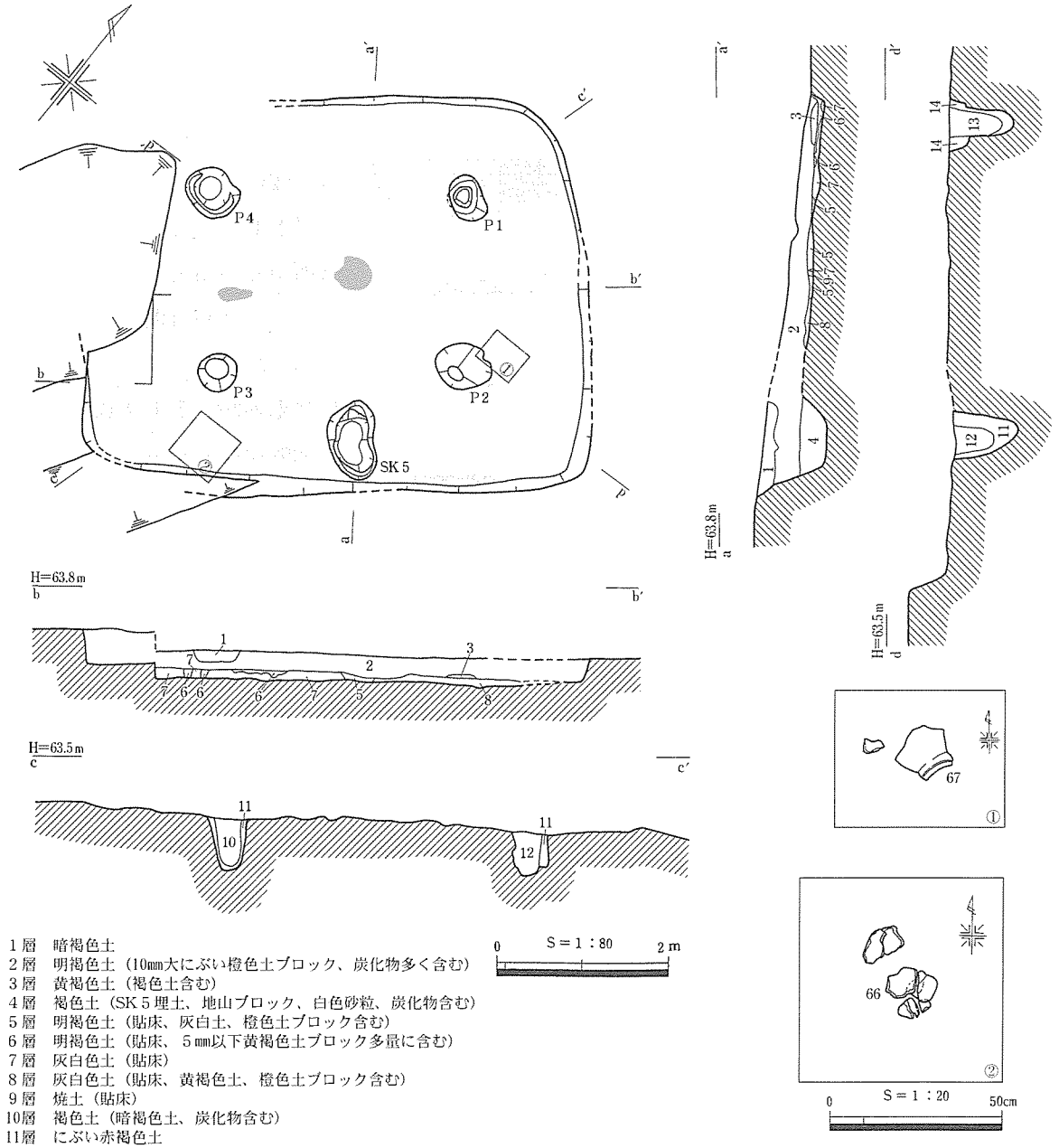
表７　SI７ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	53	39	56
Ｐ２	52	52	79
Ｐ３	46	45	64
Ｐ４	61	52	81

んだ明褐色の土を10cm程度貼って貼床を施していた。検出面から床面までの深さは南東側で最大51cm、北西側で最小12cmを測る。ピットは４基、貼床層上面で検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４で、４本柱の建物になる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間より順に2.1、2.8、2.1、3.0mを測る。このほか、住居の東南側、壁際中央でSK５とした土坑を検出した。平面形は不整円形である。規模は長軸84.0cm、短軸55.0cm、検出面からの深さは最大18.4cmを測る。この土坑からは遺物は出土していないが、床面で検出したことからこの住居に伴うものと考えられる。床面には中央部分とＰ３－Ｐ４間に焼土面が２ヶ所みられた。中央の焼土面は貼床層にまで及んでいる。

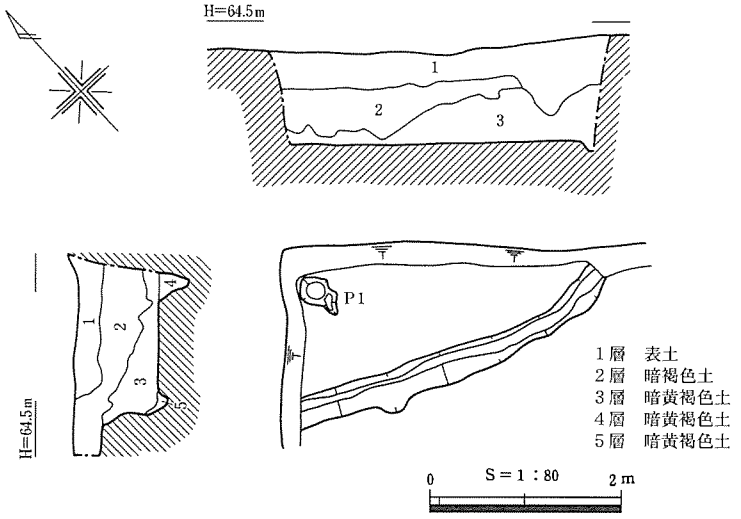
出土遺物としては、甕が２個体出土している。67は床面直上、66は床面付近から出土している。これらの土器が天神川編年のⅨ期に相当することから、本遺構は古墳時代中期後半の時期と想定される。

（阪上）

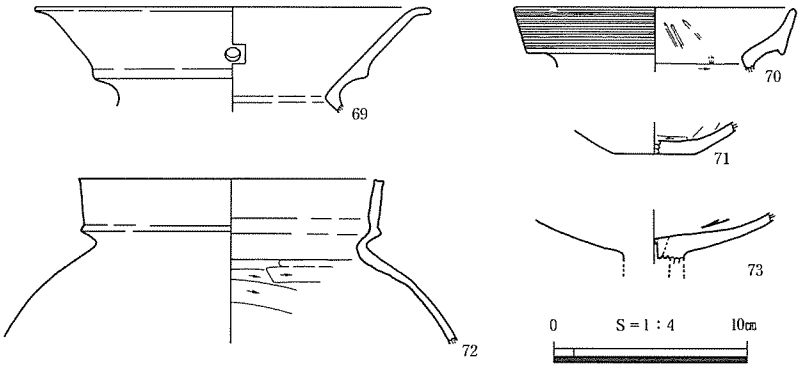


1層　暗褐色土
2層　明褐色土（10mm大にぶい橙色土ブロック、炭化物多く含む）
3層　黄褐色土（褐色土含む）
4層　褐色土（SK５埋土、地山ブロック、白色砂粒、炭化物含む）
5層　明褐色土（貼床、灰白土、橙色土ブロック含む）
6層　明褐色土（貼床、５mm以下黄褐色土ブロック多量に含む）
7層　灰白色土（貼床）
8層　灰白色土（貼床、黄褐色土、橙色土ブロック含む）
9層　焼土（貼床）
10層　褐色土（暗褐色土、炭化物含む）
11層　にぶい赤褐色土
12層　褐色土（炭化物含む）
13層　褐色土（暗褐色土、地山ブロック、炭化物含む）
14層　にぶい黄褐色土

第22図　SI７実測図



第23図　SI８実測図

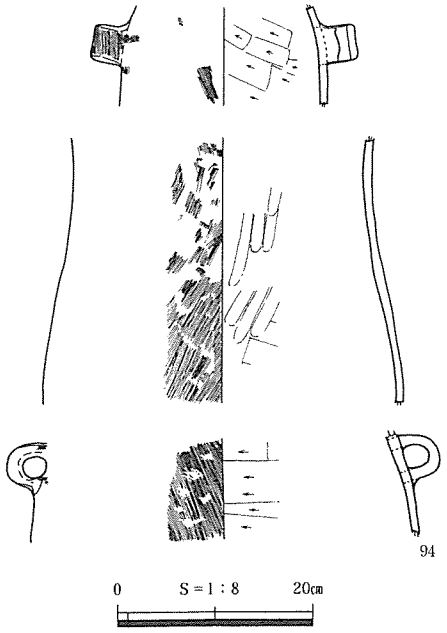


第24図　SI８出土土器

SI８（第23図、PL. 10）

Ｃ６グリッドからその南にかけて、台地の平坦面に位置する。調査区の制約により約1/4のみの調査である。このため、住居の規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は38cmを測り、遺存状況は比較的良好である。埋土は暗褐色系の粘質土で、自然堆積とみられる。壁際には幅16～26cm、深さ３～６cmの周壁溝がめぐる。床面にて直径32cm、深さ30cmのピットを１基検出した。深さからみて主柱穴とは考え難い。

埋土中から土器片が出土したが、床面からの出土遺物は皆無であった。このため時期決定には厳密性を欠くが、出土した土器は弥生時代終末期から古墳時代前期までの時期幅が認められる。下層出土の69、73は天神川Ⅱ期にあたることから当住居跡は古墳時代前期のものと考えられる。　（小山）



第25図　SI９出土土器

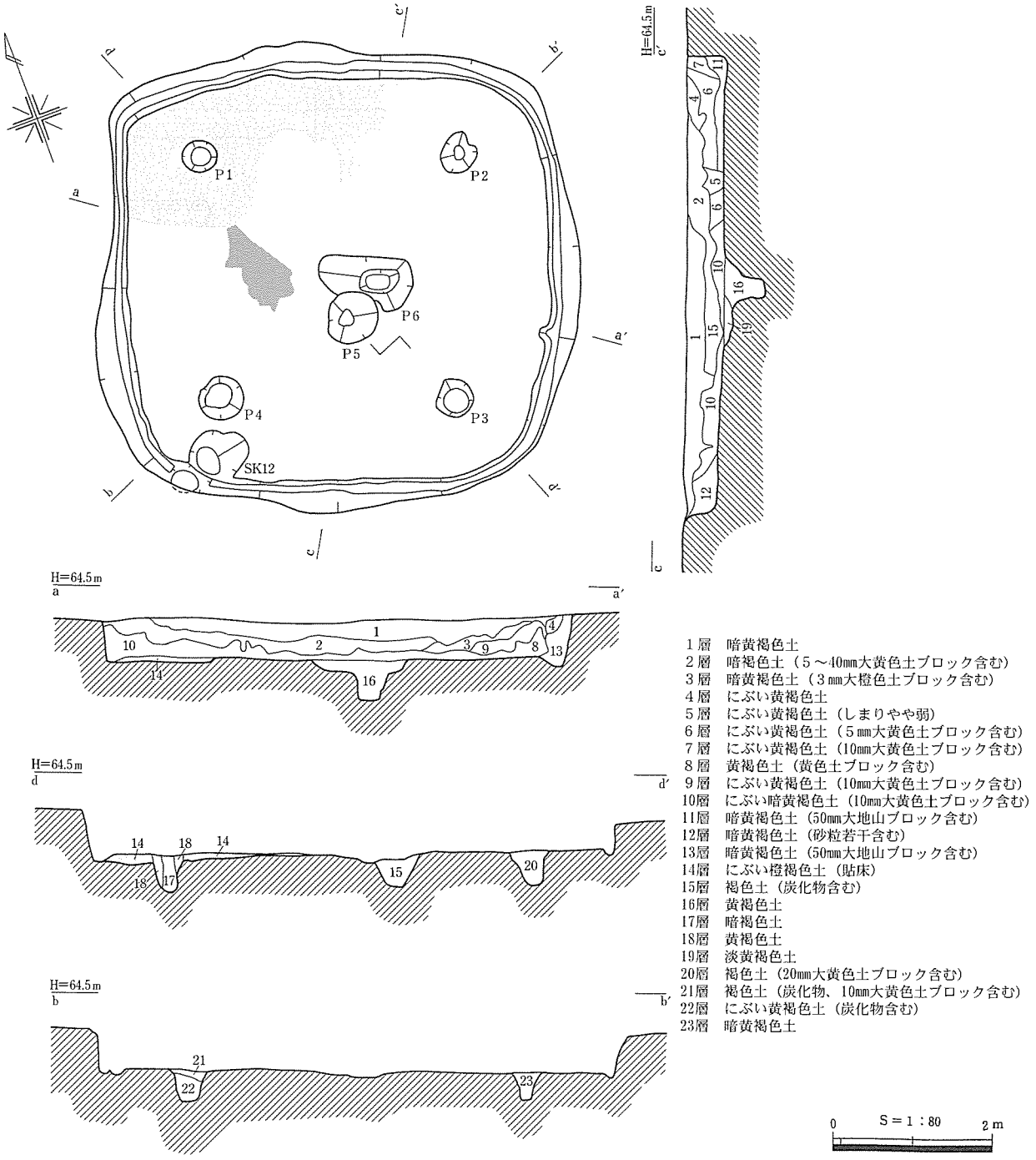
SI９（第26図、PL. 10）

Ｃ７グリッド台地の平坦面に位置する。一辺が6.0×5.7mの隅丸方形の東西にやや長い住居跡である。壁高は最も残りの良い東壁で55cmと遺存良好である。埋土の堆積状況は、埋没初期の段階には暗黄褐色系の土が住居の四周から流入し、徐々に堆積が進み、次第に暗褐色系の土で完全に埋没する状況が窺える。このことから、自然堆積による埋没とみられる。検出したピットは６基で、このうちＰ１～Ｐ４は主柱穴である。主柱穴間距離は3.0～3.3mである。Ｐ６は中央ピットで、Ｐ５は住居とは時期の異なるピットとみられる。この他にＳＫ12とした長径70cm、短径56cm、深さ20cmの土坑を壁際で検出した。床面には中央ピットの西側で１ヶ所焼土面を検出した。住居跡の壁際には、幅16cm前後、深さ２～７cm、平均５

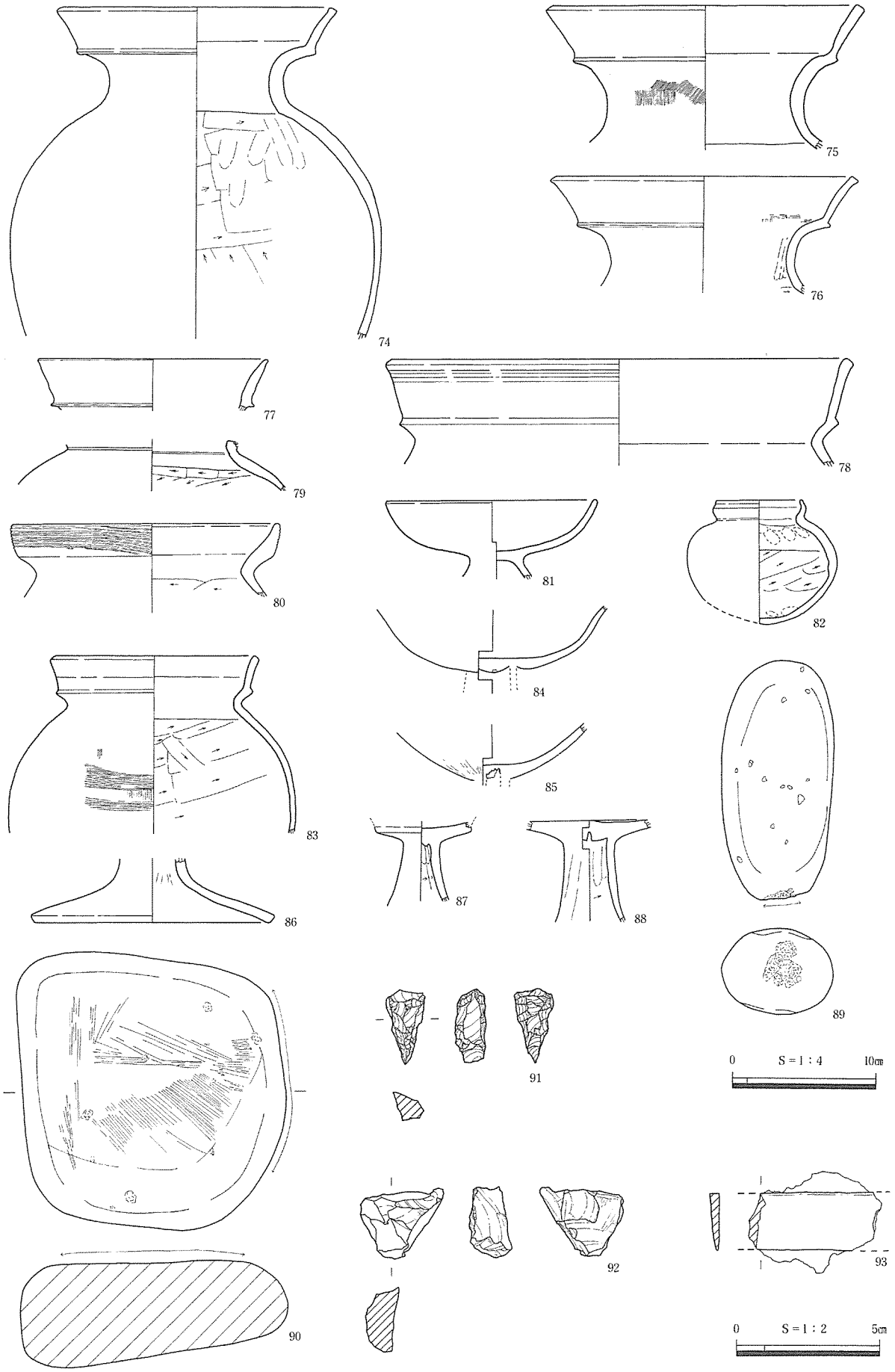
cmの溝が全周する。住居の北東部には貼床が認められた。出土遺物は埋土中から多くの土器の出土をみたほか台石90、水晶剥片91、碧玉製の石核92、鉄器の刃部の破片93が出土した。出土遺物はすべて埋土中のもので、床面出土のものはない。75の壺の破片の一部や81の高杯は床面から数cm上からの出土である。出土した土器は天神川Ⅱ期にあたることから、古墳時代前期前葉のものとみられる。　（小山）

表８　SI９ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	44	41	46
Ｐ２	55	45	44
Ｐ３	50	44	54
Ｐ４	38	33	41
Ｐ５	66	64	52
Ｐ６	120	55	52



第26図　SI９実測図



第27図　SI9 出土遺物　91～93はS＝½

SI10（第28図、PL. 10）

Ｄ８・９グリッド、標高64.1mの平坦面に位置する。SI35の埋土を掘り込んで建てられている。遺存状況も良好であった。この遺構は貼床上面と貼床除去後の地山面で、床面を２面検出した。貼床上面で検出した住居は地山を床面とする住居の後、一回り大きく振り込まれている。このことから住居の拡張が行われたものと判断される。そこで拡張前の住居跡から述べることとする。

拡張前の住居は貼床除去後に検出した。１辺が6.4×6.2mの規模である。橙褐色土の地山を床面としており、周壁溝の形状から隅丸方形を呈すると考えられる。周壁溝は２条めぐっている。このうち内側の溝は全周しており、幅21.0cm、床面からの深さ5.4cmで断面は「U」字状である。外側の溝は幅16.0cm、深さ6.4cm、断面形は「U」字状で、所々途切れているが本来は全周していたものと考えられる。なお、この２つの溝は一部繋がっていた。

ピットは４基検出した。主柱穴と考えられるものはＰ３とＰ７・８・９で、４本柱の建物である。Ｐ７・８・９は橙褐色土の床面上で検出したが、Ｐ３については拡張後の住居跡貼床上面で確認した。これは、拡張後の住居跡の主柱穴として再度利用されたためと考えられる。柱穴間距離はＰ７－Ｐ３間、Ｐ３－Ｐ８間の順に2.8、2.1、2.6、2.3mを測る。

出土遺物については、細片のため図化していないが、Ｐ８の埋土中から天神川編年のⅡ期の甕の口縁部が出土している。このことから、本遺構は古墳時代前期前葉の時期のものと考えられる。

拡張後の住居は、地山の掘削土を用いた厚さ６cmの貼床上面を床面としていた。規模、平面形は直径８mの円形で、検出面から床面までの深さは西側で最大74cm、南側で最小47cmを測る。

ピットは６基、床面で検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１からＰ５で、５本柱の建物になる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間の順に2.8、2.9、2.6、2.8、3.1mを測る。Ｐ６は中央ピットで、３段に掘り込まれており、上段不整円形、中・下段は楕円形を呈する。

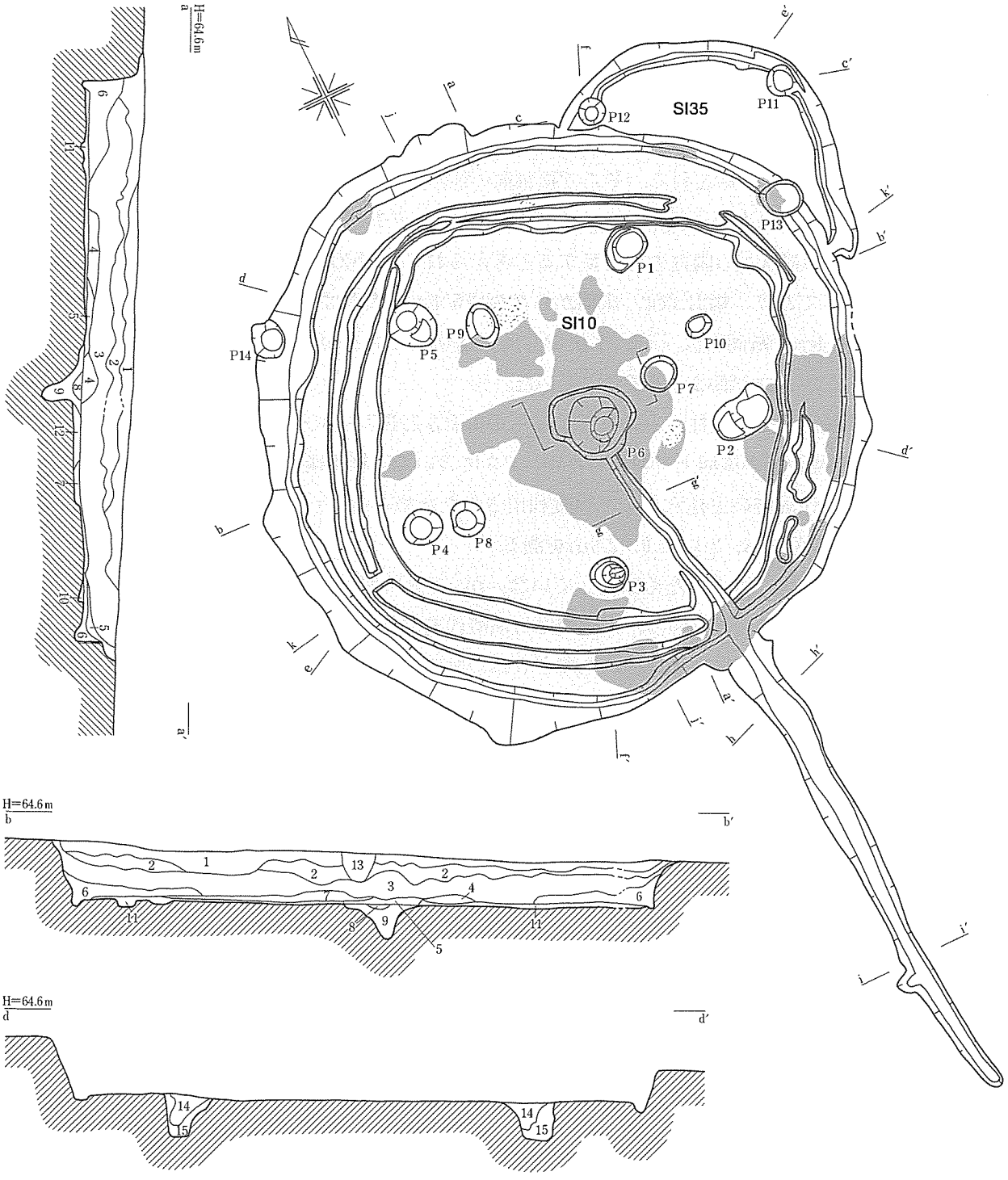
周壁溝は１条検出した。幅約20cm、床面からの深さは10cm、断面形は「U」字状で全周していた。この他、床面でＰ６から壁面を貫いて屋外へのびる溝を確認した。この溝は、等高線に直行して埋没谷である谷１へ向かいなだらかに下降しており、住居跡から約７m先にて収束する。溝の先端部分はSK45によって壊されている。屋内での溝の規模は幅2.5cm、深さ16.0cm、屋外では最大幅50cm、最深部で65cmを測る。この溝の性格については、具体的に明らかにはできなかったが、溝の走向からみて排水機能を有していた可能性がある。

遺物の出土状況は、SI35の床面レベル、すなわち、埋土の上層でほぼ全面にわたって土器片が広がっていた。さらに、埋土の中層では、中央周辺から南東側に集中するように土器片が出土した。この下の層には中央部分と南東側周壁溝の上面に焼土が広がり、焼土の下で炭化物を検出した。この焼土と炭化物の層位は、一部において逆転がみられた。炭化物の下から検出した中央ピットＰ６の埋土には、焼土のブロックと炭化物が多量に含まれていた。

遺物は、Ｐ６の埋土中から甕の口縁部105が、床面付近から脚部104が出土した。床面直上では、甕の口縁部

表９　SI10・35ピット表

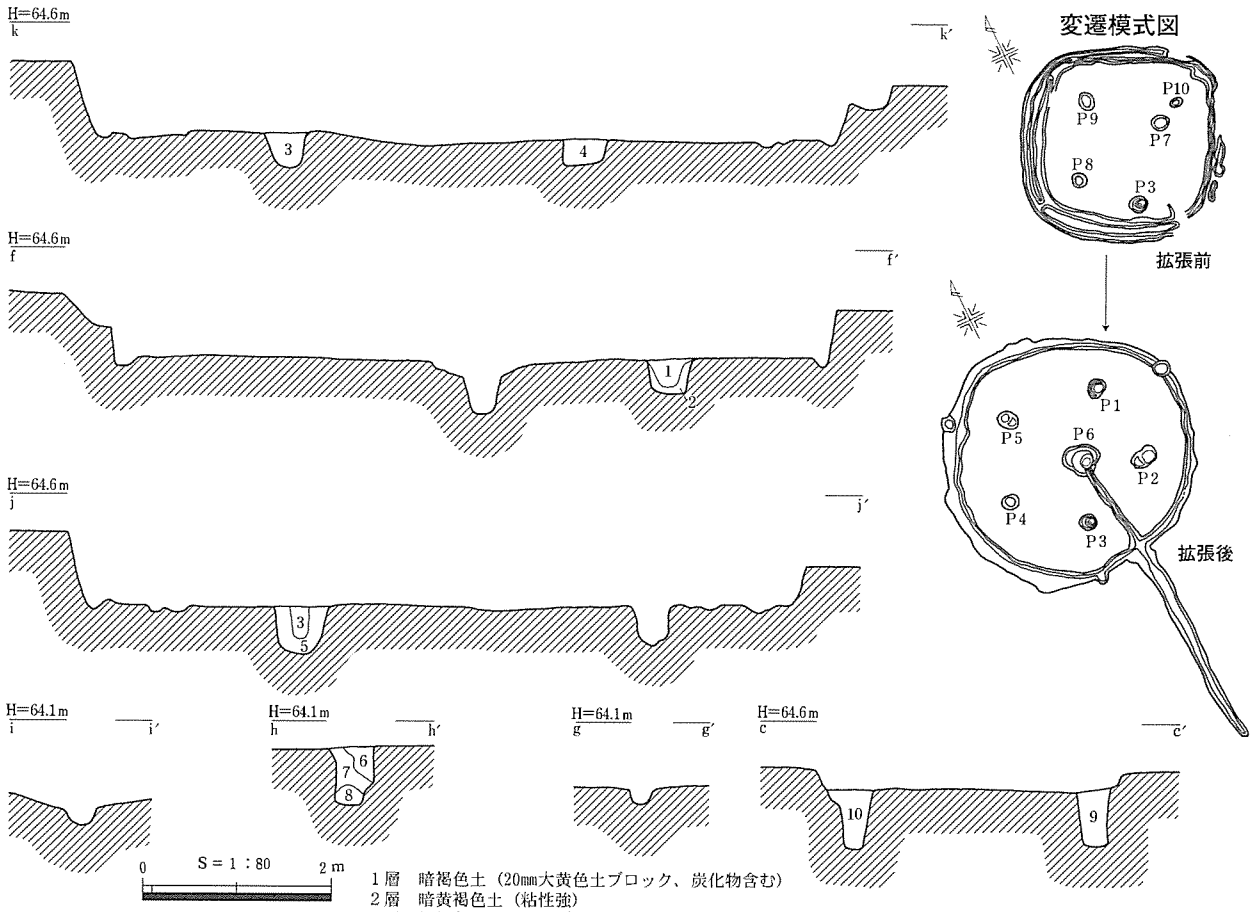
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	62	50	45
Ｐ２	82	53	51
Ｐ３	50	46	44
Ｐ４	49	48	45
Ｐ５	63	56	56
Ｐ６	105	90	56
Ｐ７	50	45	27
Ｐ８	45	45	35
Ｐ９	58	41	51
Ｐ10	36	27	38
Ｐ11	42	37	60
Ｐ12	35	33	59
Ｐ13	52	47	79
Ｐ14	49	42	不明



1層　暗褐色土
2層　暗褐色土（土器片多量に含む。１層よりやや明るい）
3層　褐色土（20～100mm大の黄色土ブロック多量に含む。暗褐色土、炭化物少量含む）
4層　褐色土（40mm以下の黄色土ブロック多量に、焼土をまばらに含む。３層よりやや明るい）
5層　茶褐色土（焼土多量に含む）
6層　褐色土（30mm以下の黄褐色土ブロック、炭化物少量含む）
7層　にぶい橙褐色土
8層　暗褐色土（炭化物多量に含む）
9層　暗褐色土（20mm大の焼土ブロック、炭化物多量に含む）
10層　暗褐色土（しまり弱）
11層　橙褐色土（貼床、黄色土、黄褐色土、灰白土ブロック多量に含む）
12層　暗褐色土（にぶい黄褐色土含む）
13層　黒褐色土
14層　褐色土（20mm以下黄色土ブロック、30mm以下の黄褐色ブロック多量に含む）
15層　橙褐色土（10mm大黄色土ブロック少量含む。しまり強）

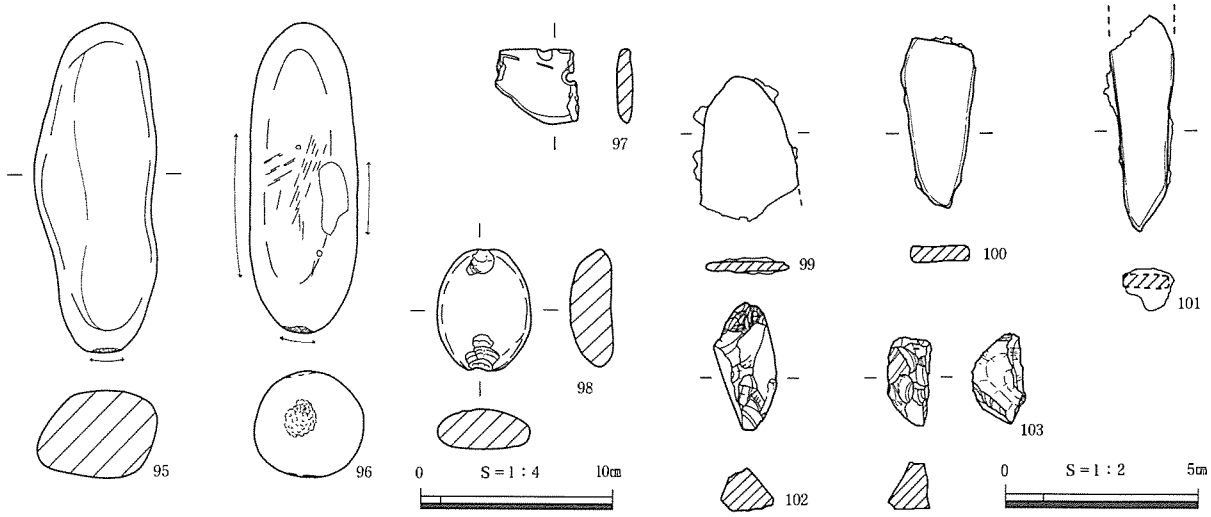
S＝1：80　0　2m

第28図　SI10・35実測図



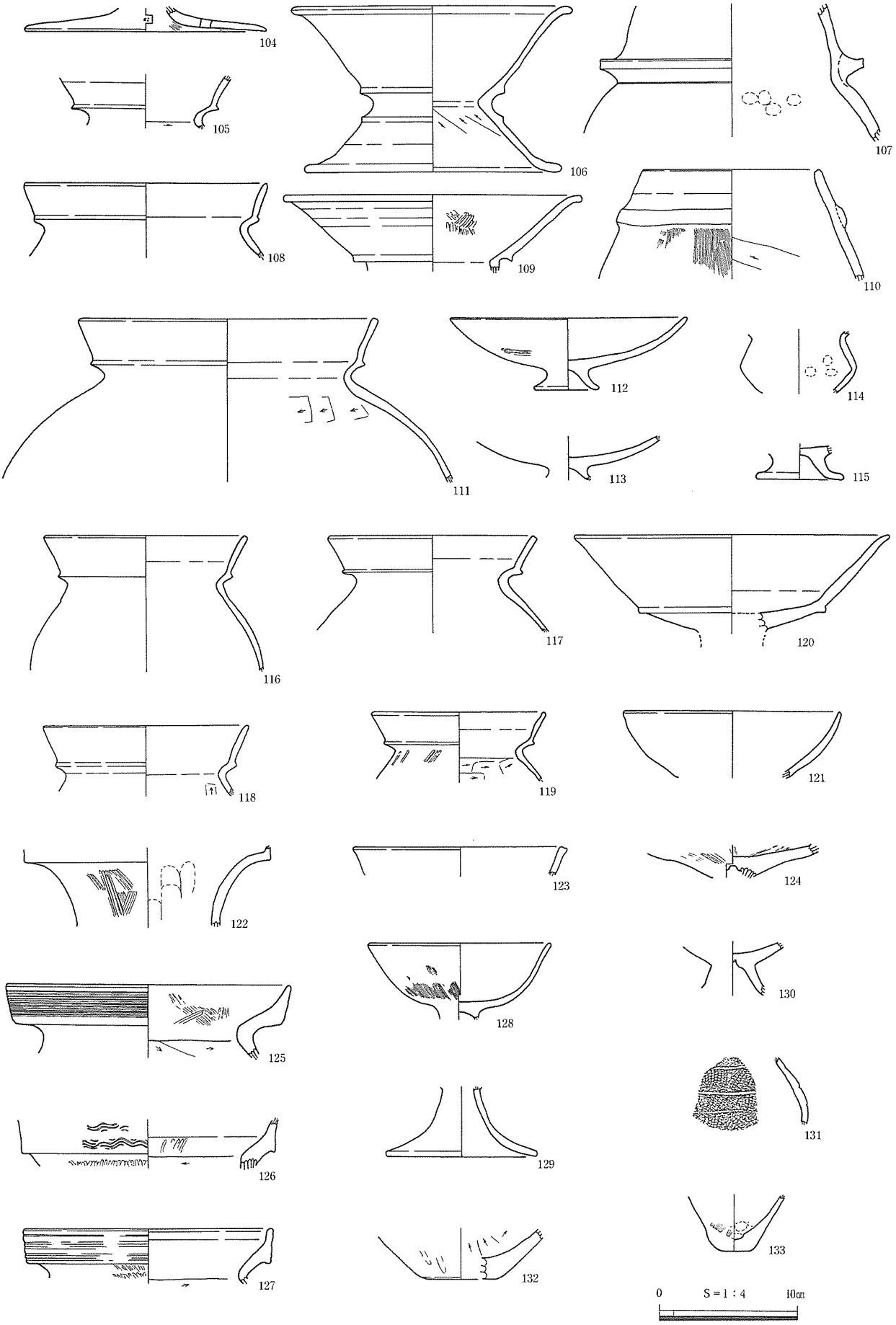
1層　暗褐色土（20mm大黄色土ブロック、炭化物含む）
2層　暗黄褐色土（粘性強）
3層　橙褐色土（黄色土ブロック含み、しまり強）
4層　黄褐色土（黄褐色土ブロック、暗褐色土少量含む）
5層　橙褐色土（灰白色土ブロック少量含み、しまり強）
6層　にぶい褐色土（黄色土ブロック、橙褐色土含む）
7層　にぶい褐色土（炭化物若干含む）
8層　茶褐色土（20mm大黄褐色土ブロック、橙褐色土含む）
9層　茶褐色土（SI35埋土、10mm大黄褐色土ブロック・白色礫、少量の炭化物含む）
10層　褐色土（SI35埋土、炭化物、10mm大黄・黄褐色土ブロック含む。しまり強）

第29図　SI10・35土層断面図・変遷図



第30図　SI10出土石器・鉄器　99～103はS＝½

が出土したが、細片のため図化するに至らなかった（Fig 2）。埋土中からは鼓形器台106・109や甑形土器107・110のほかに、３条の凹線と貝殻腹縁文が施された甕の破片131が出土した。この遺構の年代については、床面直上出土の土器と104、105が天神川編年Ⅱ期に相当する。屋外へのびる溝から



第31図　SI10出土土器

Fig 2　SI10床面直上出土土器

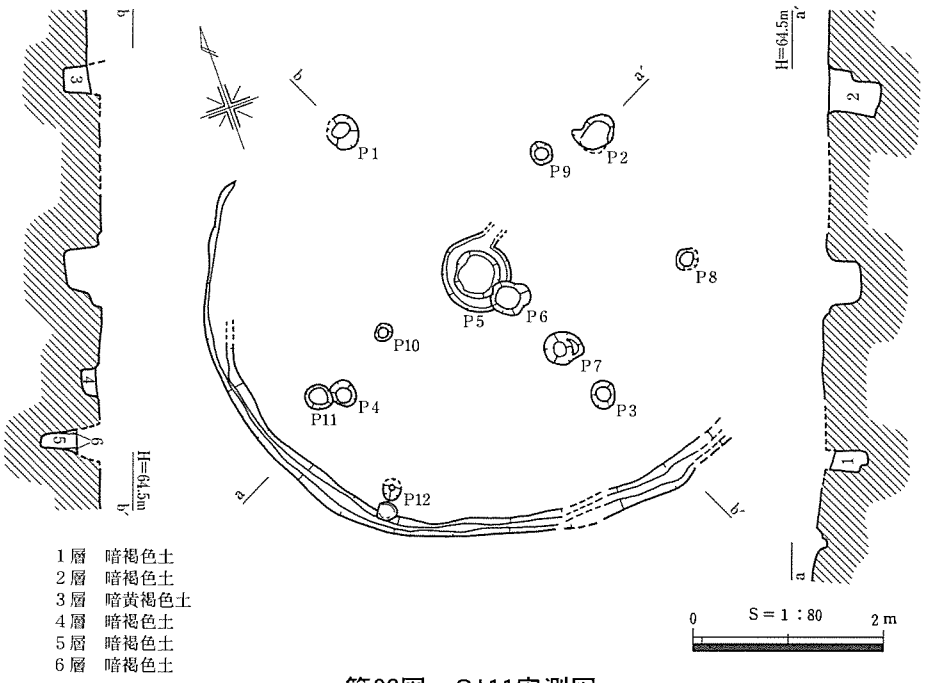
も同時期の土器が出土している。このことから、建て替え後の住居の時期も、古墳時代前期前葉と判断される。当住居跡の構築、建て替えは短期間に行われたものと考えられる。　（阪上）

SI35（第28図、PL. 22）

Ｃ８グリッド、標高64.1mの平坦面に位置し、SI10と重複する竪穴住居跡である。この遺構はSI10の埋土の掘り下げ段階で検出した。このため両者の層位的関係は不明である。SI35の床面の高さで、SI10の埋土中に掘り込むピットの検出を行ったが、SI35の柱穴は検出されなかった。このためSI10が、先行するSI35埋土を掘り込んだものと判断した。規模は不明であるが、平面形は、残存部の形状から隅丸方形を呈すると考えられる。黄褐色土を床面としており、検出面から床面までの深さは27cmを測る。周壁溝は１条検出した。北側から南東側にかけて検出したが、本来は全周していたと考えられる。幅は13cm、床面からの深さは約８cmで断面形は「U」字状である。

ピットは東西両隅で２基検出した。周壁溝内に位置するが、住居の規模が小さいことや、深さが60cmもあることから、主柱穴の可能性が考えられる。なお、柱穴間の距離は2.6mを測る。

遺物については、時期を特定できる床面直上からの出土がみられなかった。遺構の想定される年代は、先述したようにSI10より古いことから、古墳時代前期以前の時期と考えられる。　（阪上）



第32図　SI11実測図

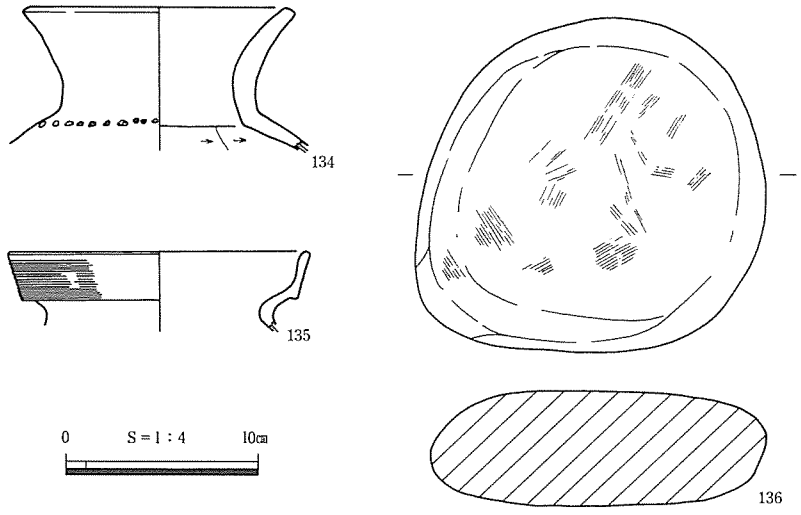
表10　SI11ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	38	33	53
Ｐ２	42	32	55
Ｐ３	30	26	(39)
Ｐ４	30	26	34
Ｐ５	(62)	70	39
Ｐ６	40	34	29
Ｐ７	43	36	18
Ｐ８	24	(15)	8
Ｐ９	26	24	11
Ｐ10	18	18	9
Ｐ11	28	26	20
Ｐ12	(20)	20	19

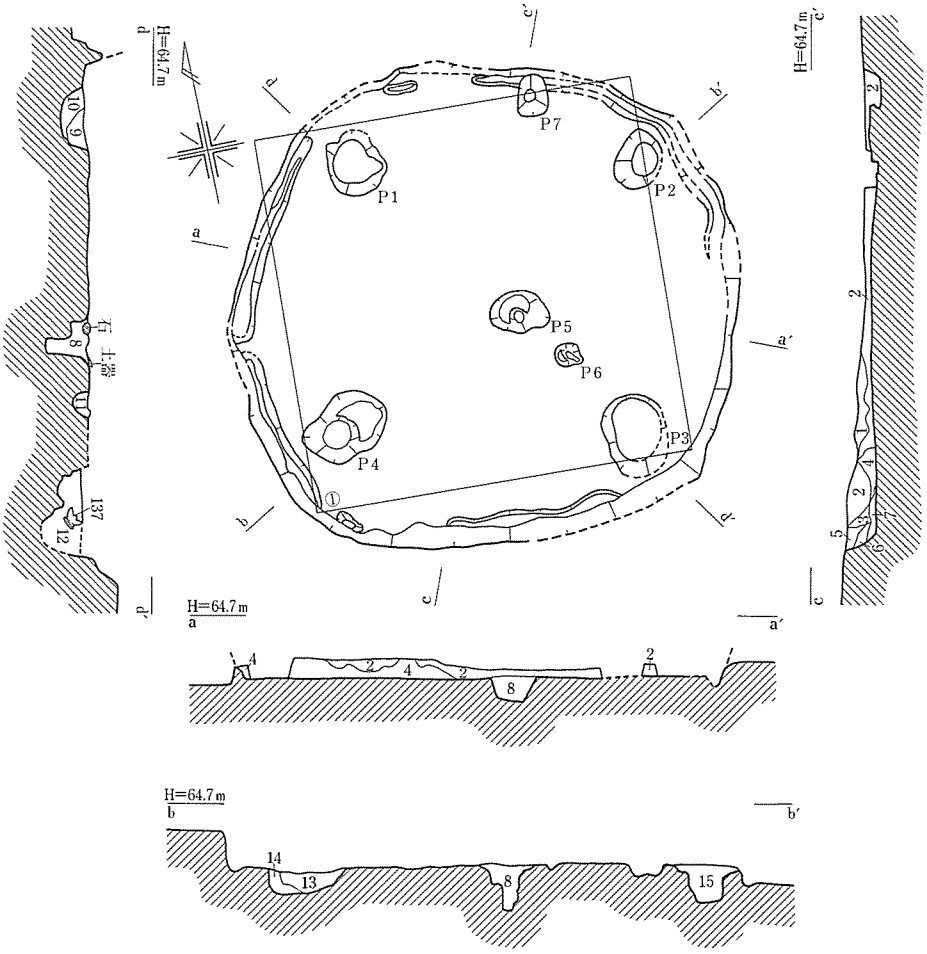
SI11（第32図、PL. 12）

Ｆ６グリッドからその南側の台地の平坦面に位置する。遺存状況が悪く、東半部が削平により失われ、残る西半部も壁高わずか９cmであった。このため住居の規模、平面形は不明であるが、一辺が2.5mの多角形ないしは、直径６mの歪な円形とみられる。

壁際には幅12～32cm、深さ５～８cmの溝がめぐる。検出したピットは12基である。中には住居廃絶後のものも含まれると思われる。しかし埋土が失われているため、埋土中からの掘り込みのものを峻別し難い。このうち主柱穴とみられるものはＰ１～Ｐ４で、４本柱の住居跡とみられる。Ｐ５は中央ピットである。東南側主柱穴のＰ３では直径18cmの円形の柱痕跡が認められた。主柱穴間の距離は2.7～2.8mである。出土遺物は床面からわずかに浮いた状態で土器が若干出土した他、南西側壁際の床面直上から台石が据え置かれた状態で出土した。出土土器は清水編年のＶ－３期にあたることから、弥生時代後期後葉の時期と考えられる。（小山）

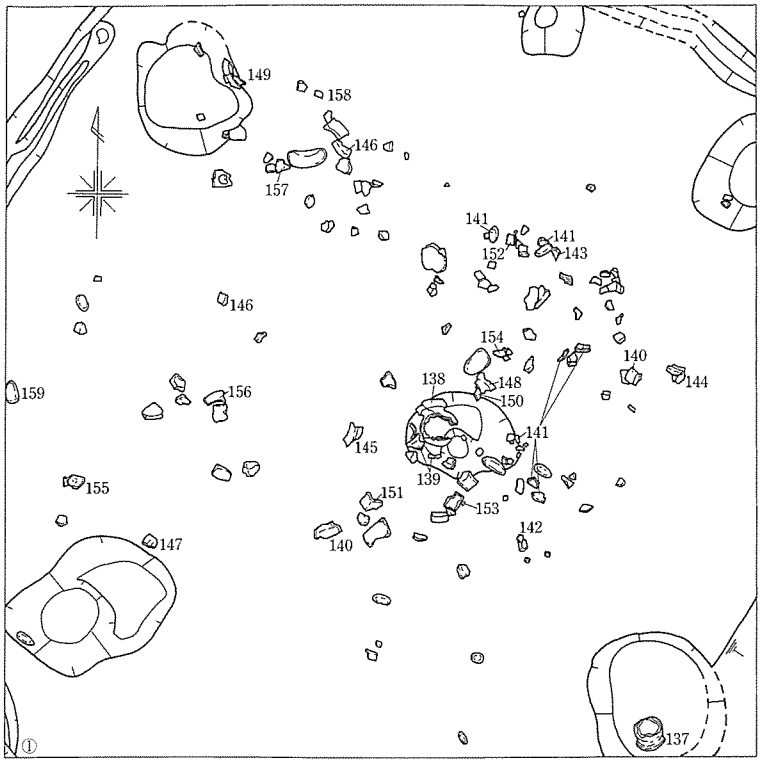


第33図　SI11出土遺物



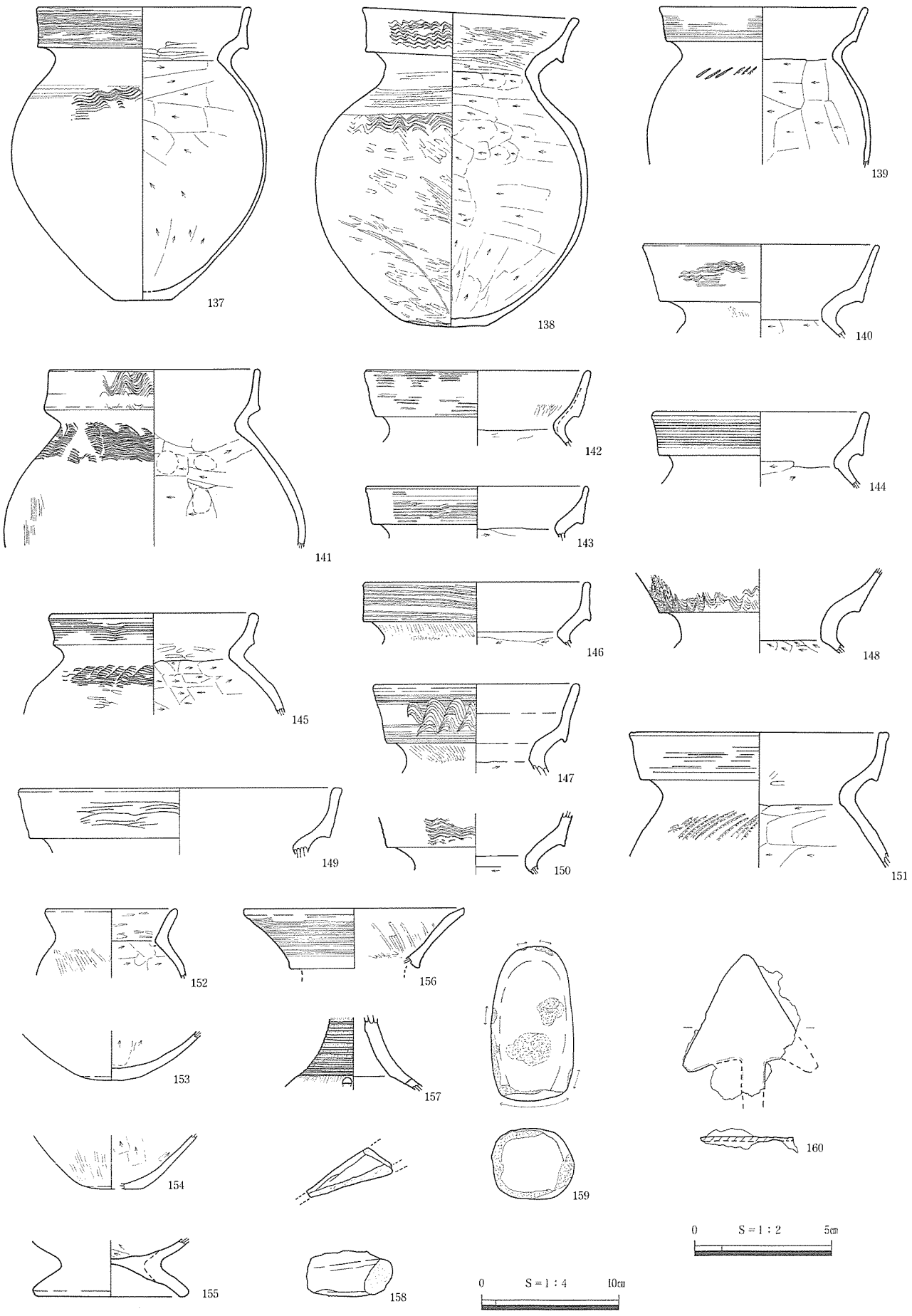
1層　暗黄褐色土
2層　褐色土
3層　褐色土（10mm大黄色土ブロック含む）
4層　にぶい暗黄褐色土（20mm大黄色土ブロック含む）
5層　褐色土
6層　褐色土
7層　褐色土
8層　褐色土
9層　褐色土
10層　暗黄褐色土
11層　褐色土
12層　暗黄褐色土（10～30mm大地山ブロック含む）
13層　暗黄褐色土
14層　にぶい黄褐色土（10mm大ATブロック含む）
15層　暗黄褐色土

0　S＝1：80　2m



0　S＝1：40　1m

第34図　SI12実測図



第35図　SI12出土遺物　160のみ　S＝½

SI12（第34図、PL. 12）

Ｆ６グリッドからその西側の台地の平坦面に位置する。ＳＩ６と一部重なるが、前述のように切り合い関係は不明である。一辺5.4×5.0mの隅丸方形の住居跡である。壁高は南壁で38cmである。埋土の堆積状況は南壁際でみると、壁際に褐色系の初期の流入土が堆積し、次第に住居の中央部が埋没していく過程が窺がえる。このことから、自然堆積により埋没したものと考えられる。

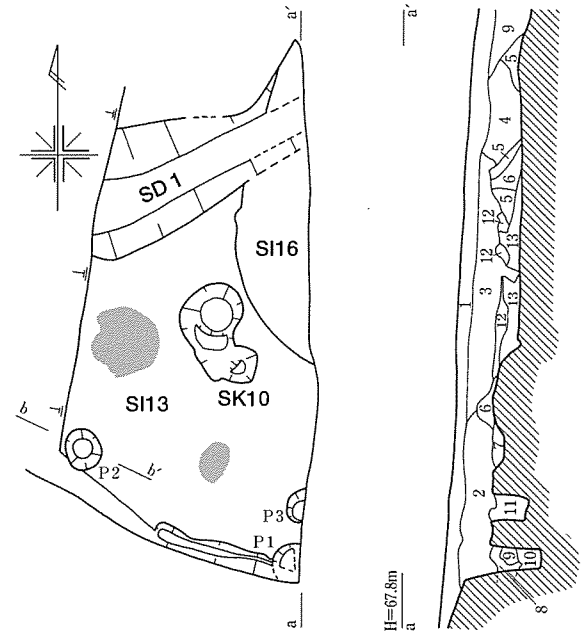
表11　SI12ピット表　（ ）現存値

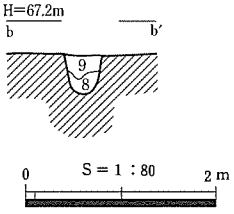
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	(65)	62	29
Ｐ２	64	(44)	39
Ｐ３	(80)	(67)	30
Ｐ４	82	65	31
Ｐ５	63	45	45
Ｐ６	32	27	13
Ｐ７	43	32	25

壁際には幅16～26cm、深さ３～６cmの周壁溝が、一部で途切れるもののほぼ全周する。検出したピットは７基で、このうちＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。中央ピット（Ｐ５）を持つ４本柱の住居跡とみられる。主柱穴間距離は2.9～3.2mである。

出土遺物は床面付近のほぼ全面から弥生土器が出土したほか、鉄器、敲石が出土した。中央ピットの上面からは138の甕がほぼ完形のまま横たわった状態で出土した。これらは出土状態からみて住居の廃絶時に廃棄された一括性の高い土器群と判断される。

出土した土器はいずれも清水編年のＶ－３期の範疇におさまることから、当該期の良好な資料といえる。このことから弥生時代後期後葉の時期と考えられる。（小山）





1層　表土
2層　暗灰褐色土（黄褐色ブロック多く含み、しまり弱）
3層　暗灰褐色土（黄褐色ブロック少量含む）
4層　褐灰色土（SD１埋土）
5層　褐色土
6層　暗灰褐色土（しまり弱）
7層　暗灰褐色土（黄褐色ブロック多量に含み、しまり弱）
8層　黄褐色土
9層　暗灰褐色土
10層　暗灰褐色土（炭化物を少量含む）
11層　灰褐色土
12層　にぶい黄褐色土
13層　暗褐色土（炭化物、黄褐色ブロック少量含む）

第36図　SI13実測図

SI13（第36図、PL. 12）

Ｉ17～18グリッドに位置し、標高約66.7mの平坦面に立地する。埋土はほとんど残っていない状態で、耕作土除去後床面を検出した。西側は暗渠排水により大きく破壊され、南東側は調査区範囲外で農道の下に埋没している。また、北側はSD１、SI16に切られる。遺存状態が悪く、平面形を特定することはできない。

表12　SI13ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	(30)	(25)	64
Ｐ２	43	38	41
Ｐ３	(35)	(17)	41

ピットは３基検出した。Ｐ１、Ｐ３は部分的な検出である。このうち柱穴と思われるピットはＰ１、Ｐ２で、柱穴間距離は2.6mである。また住居の中心部分になるであろうと思われる位置に土坑SK10（112×70－92cm）がある。住居の埋土が部分的にしか残っていなかったため、SK10の掘り込み面を確認できなかった。このため住居跡に伴うものかどうかは判断できなかった。またその性格についても不明である。

床面は平坦で、全体的に硬化している。AT層をそのまま床面としている。床面の南側には周壁溝と思われる溝がわずかに1.3mある。この周壁溝周辺の、床面より５cmほど高い位置で土器の細片が数点出土した。また、SK10の西側と南側の２ヶ所で焼土面を検出し、この周辺からも床面付近で土器の細片が数点出土した。いずれも図化できるようなものはないが、清水編年のⅥ期に相当するものがあることから、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものとみられる。（淺田）

SI14（第37図、PL. 14）

表13　SI14ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	34	32	45
Ｐ２	50	48	42
Ｐ３	40	40	59
Ｐ４	33	20	54
Ｐ５	76	57	53

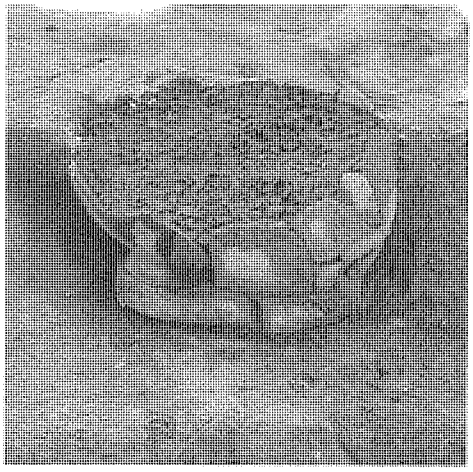
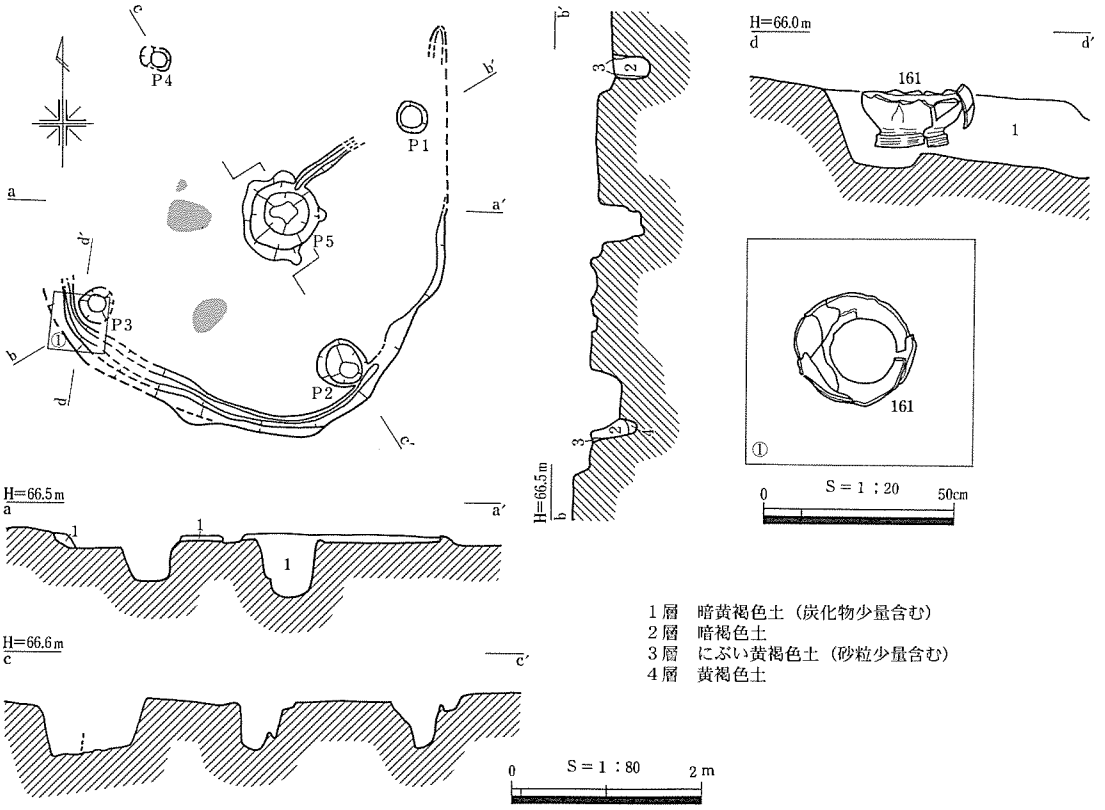


Fig 3　SI14甕161出土状況

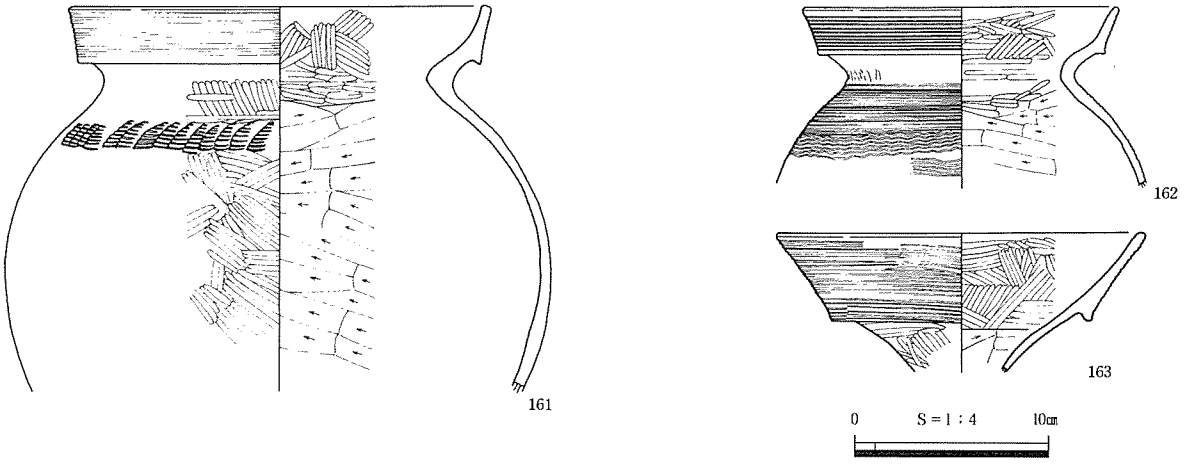
Ｉ16グリッドに位置し、標高約66mの平坦地に立地する。北側から東側にかけては、果樹園の掘削のため破壊されている。西側は暗渠排水により破壊されており、住居の南東端がわずかに残る程度である。遺存状態は非常に悪い。平面形は残存する周壁溝の形から隅丸方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは、最も残りの良い南側壁面で約20cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で土器の小片を含んでいる。床面は平坦で、全体的に硬化しており、ホーキ層をそのまま床面としている。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.8m、2.8m、2.7m、2.7mである。住居の中心部分に中央ピット（Ｐ５）がある。西側に地山を削り出した低い周堤がわずかに残っている。Ｐ５からＰ１の方向にのびる床溝が１条あるが、遺存状態が悪く途中で途切れてしまっている。Ｐ１もしくは周壁溝までのびていたと考えられる。焼土面はＰ５の西側で３ヶ所検出した。

出土遺物は埋土中から器台の受け部163、甕の口縁部162、Ｐ３の南側から床面に逆位に置いた状態で甕の口縁部161（Fig ３）が出土した。いずれも清水編年Ｖ－３期に相当する。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期後葉頃と考える。（淺田）



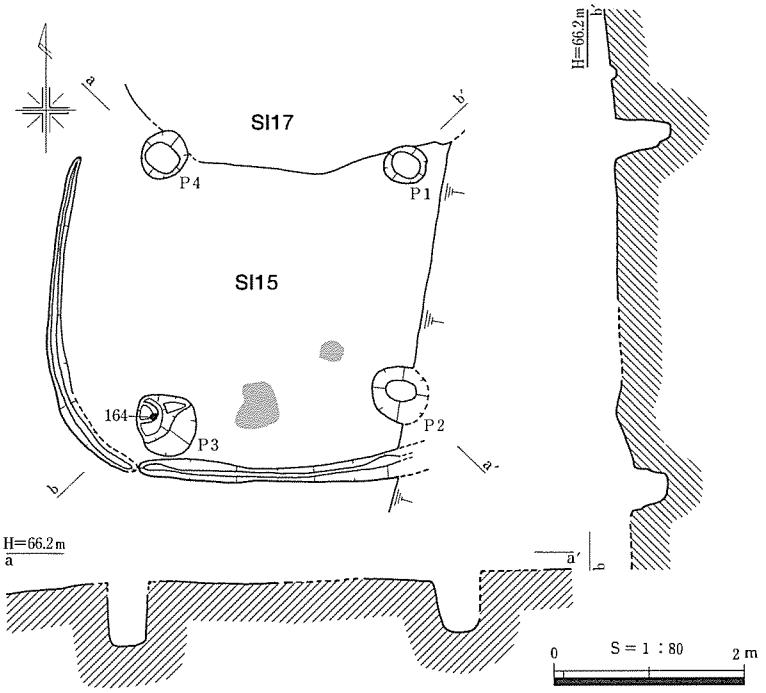
第37図　SI14実測図



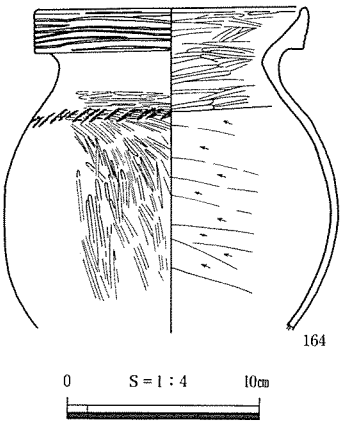
第38図　SI14出土土器

SI15（第39図、PL. 14）

I16グリッドに位置し、標高約66mの平坦部に立地する。埋土はほとんど残っていない状態で、耕作土除去後すぐに床面を検出した。東側と西側は暗渠排水により破壊されている部分がある。南側は果樹園の削平のために部分的に破壊されている。北側はSI17に切られる。検出面からの深さは、最も残りの良い南側でわずかに５cmほどである。平面形は隅丸方形を呈し、規模はおよそ一辺3.0mである。周壁溝は西側から南側にかけて「L」字状に検出した。大きさは幅10cm、床面からの深さは１cmで、断面形は「U」字状である。本来は全周していたものと考えられる。床面は平坦で、全体的に硬化しており、ホーキ層をそのまま床面としている。焼土面は南側で２ヶ所検出した。検出した４基



第39図　SI15実測図



第40図　SI15出土土器

表14　SI15ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	46	38	36
Ｐ２	(52)	58	51
Ｐ３	66	62	59
Ｐ４	44	45	46

のピットは、いずれも主柱穴と考えられる。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.4m、2.5m、2.8m、2.6mである。このうちＰ３から清水編年Ｖ－２期、弥生時代後期中葉の小形の甕164が出土した。住居の中央部分にはSK６があり、この土坑により、中央ピットは破壊されたものと考えられる。

Ｐ３出土の土器が示す年代が、当住居跡の構築された時期を示すと考えられる。よって、本遺構の時期は、弥生時代後期中葉頃のものと考える。　（淺田）

SI16（第41図、PL. 14）

H17グリッドに位置し、標高約67mの平坦地にある。北側をSI34に切られる。検出面からの深さは最も残りの良い南東側で40cmである。平面形は隅丸方形を呈し、規模はおよそ一辺が4.6mである。周壁溝は、SI34に切られている部分を除いた全てを検出した。本来は全周していたものと考えられる。幅25cm、床面からの深さは７cm程で断面形は「U」字状である。床面は平坦で全体的に硬化しており、ホーキ層をそのまま床面としている。ピットは５基検出した。このうち主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離は３m等間である。中央ピットはＰ５である。南西隅の床面にてSK46とした土坑を１基検出した。この土坑の埋土上面に貼床が施され住居の床面とされていたこと、土坑の埋土を切って柱穴（Ｐ２）が掘り込まれていたことから、この土坑は本遺構に先行する時期のものと判断した。

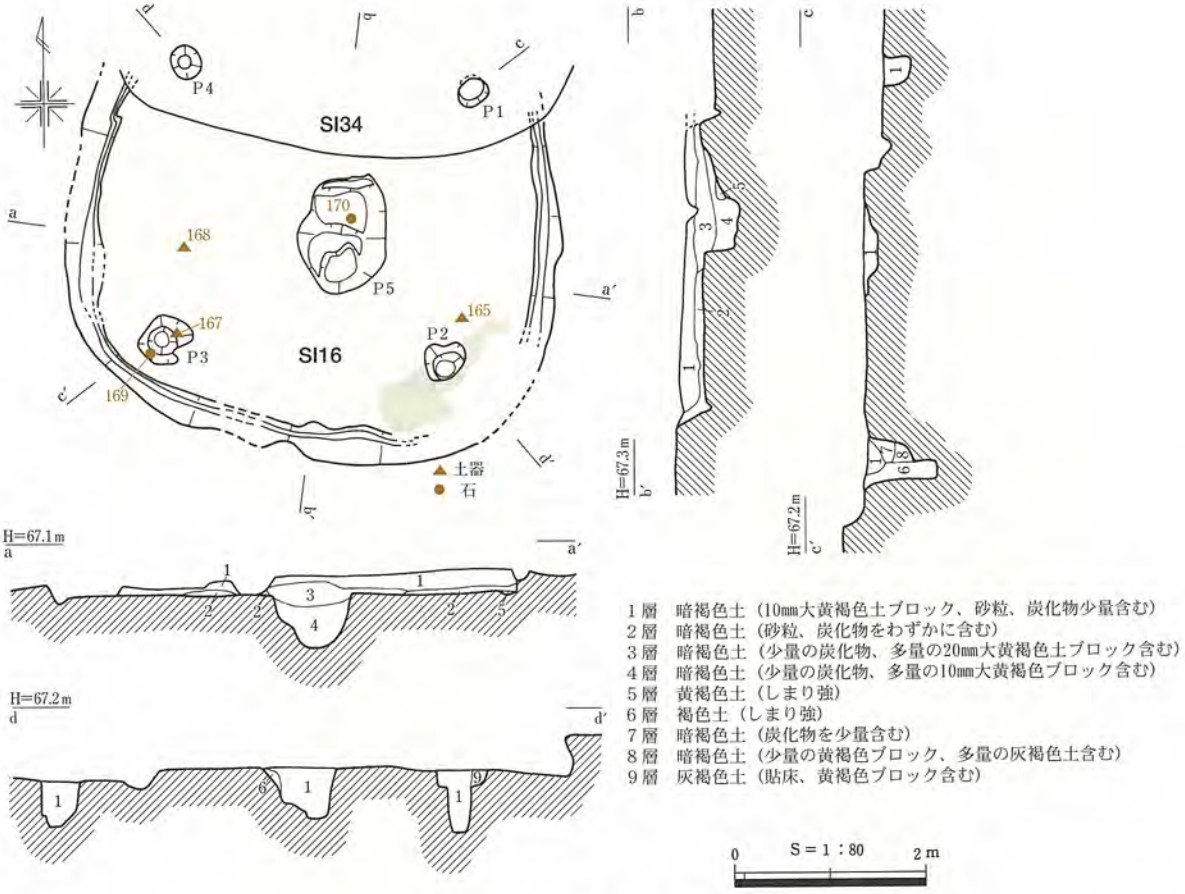
表15　SI16ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	32	25	(29)
Ｐ２	47	42	69
Ｐ３	52	38	76
Ｐ４	35	30	(47)
Ｐ５	120	96	55

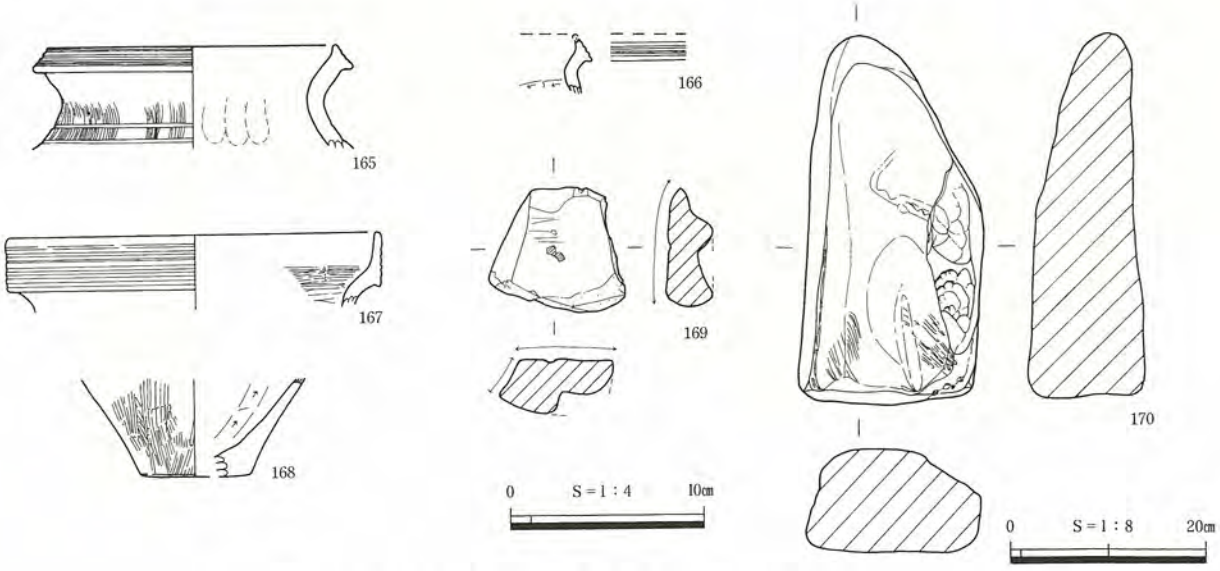
遺物はＰ５から甕の口縁部分167が、床面付近から甕の底部168と甕の口縁部166が、床面直上で壺の口縁部165がそれぞれ出土している。またＰ５の検出面で台石170が１点出土している。166、167、168はいずれも流入によるものである。床面出土の土器は、清水編年のＶ－１

期に相当する。

本遺構の時期は弥生時代後期前葉のものと考える。　（淺田）



第41図　SI16実測図



第42図　SI16出土遺物　170のみ　S＝⅛

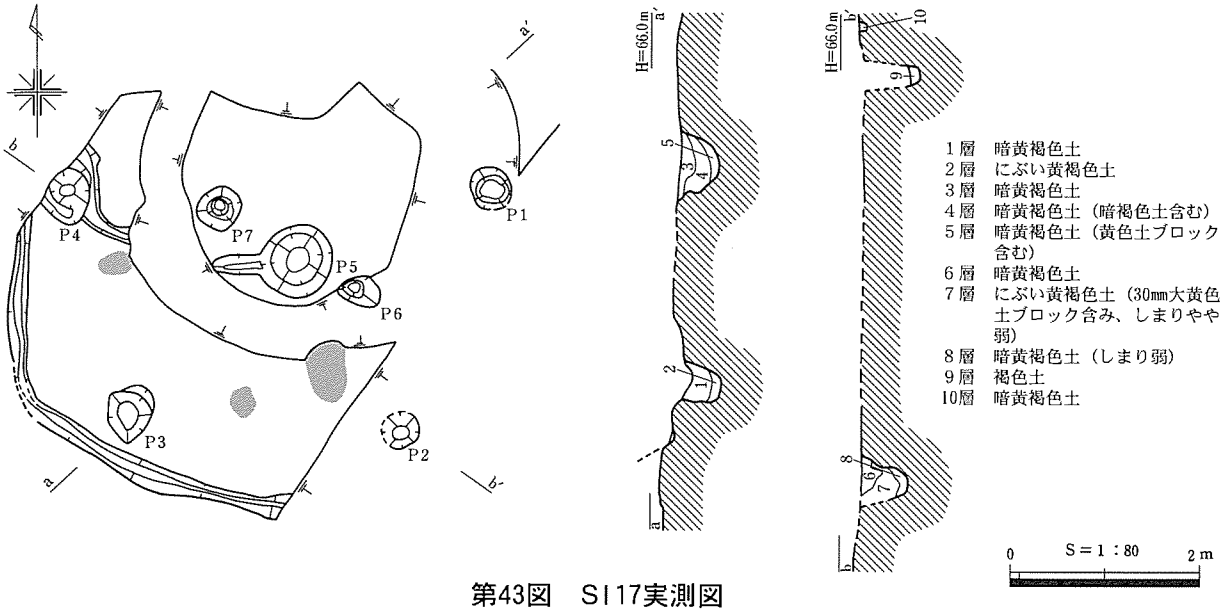
SI17（第43図、PL. 15）

Ｉ15グリッドに位置し、標高約66mの平坦面に立地する。北側から北西側にかけて、果樹園耕作時の削平により破壊されている。東側と西側は、暗渠排水により破壊されている。埋土はほとんど残っていない状態で、表土除去後床面を検出した。埋土の状況としては、単層で床面直上に炭化物を含んだ褐色土が部分的に１cmあった程度である。平面形は、周壁溝の形や柱穴の並び方から五角形と考えられる。床面は平坦で、全体的に硬化しており、AT層をそのまま床面としている。

周壁溝は南側で比較的遺存状態が良く、北側は残っていない。溝の幅は20cm、床面からの深さは５cm程で、断面形は「U」字状である。本来は全周していたものと思われる。

ピットは７基検出した。このうち主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４である。主柱穴は４基しか検出できなかったが、その並び方から５本柱が予想される。残るもう１基は、果樹園の耕作時に破壊されて無くなっている。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３、Ｐ３－Ｐ４の順に2.7m、2.9m、2.5mを測る。Ｐ６、Ｐ７の距離は1.7mである。何らかの補助的な柱が立てられていたか、もしくはＰ５に伴う構造物の一部であった可能性が考えられるが、明確にその性格を判断する状況を確認することはできなかった。Ｐ５は中央ピットと考えられ、平面形は円形である。また、途中が切れているが幅15cm、深さ３cmの床溝がＰ５からＰ４に向かってのびている。焼土面はＰ５の南側に２ヶ所、西側に１ヶ所検出した。

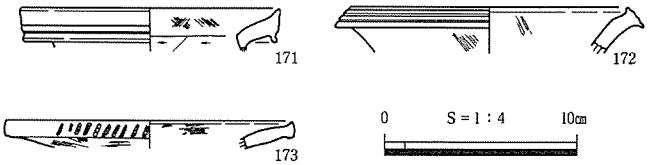
出土遺物は甕の口縁部171が床面直上で出土している。清水編年のＶ－２期に相当する。したがって本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期中葉頃と考えられる。本遺構と切り合いの関係にある



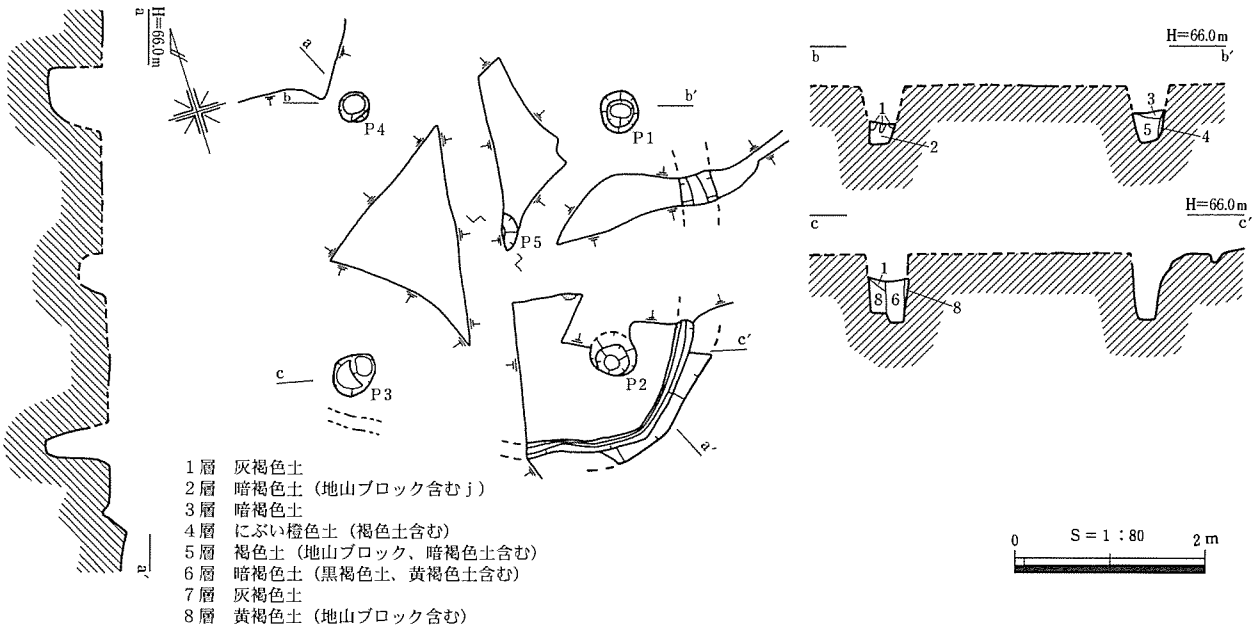
第43図　SI17実測図

表16　SI17ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	48	42	(42)
Ｐ２	40	(33)	(39)
Ｐ３	62	48	57
Ｐ４	(56)	54	65
Ｐ５	80	74	44
Ｐ６	48	43	41
Ｐ７	46	32	39



第44図　SI17出土土器



第45図　SI18実測図

SI15と同時期になるが、この２つの住居は短い時期の間に造営、廃絶が行われたものと考える。

（淺田）

SI18（第45図、PL. 15）

Ｉ15～Ｊ15グリッドに位置し、標高約66mの平坦地に立地する。果樹園耕作時に四方向を破壊されているため、遺存状態は非常に悪い。耕作土除去後に床面を検出した。床面が残っているのは南東側のごく一部分だけである。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南側で23cmである。壁面は床面よりやや外側に傾斜もって立ち上がる。周壁溝は南東側のみ残っており、「L」字状に角が緩やかに屈曲している。幅10cm、深さ5cmを測る。断面は「U」字状である。平面形を特定することはできないが、周壁溝の形から隅丸方形と思われる。床面は部分的にしか残っていないが、全体的に硬化しており、AT層をそのまま床面としている。

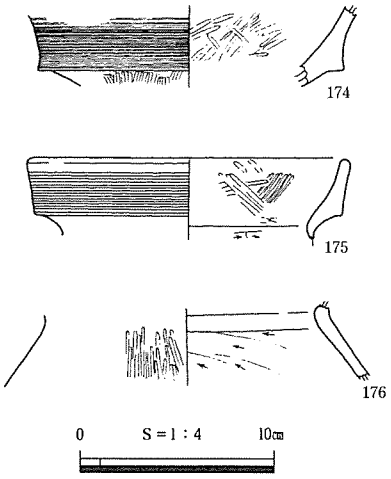
表17　SI18ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	34	31	(34)
Ｐ２	45	(38)	44
Ｐ３	49	42	(64)
Ｐ４	49	41	(56)
Ｐ５	不明	不明	不明

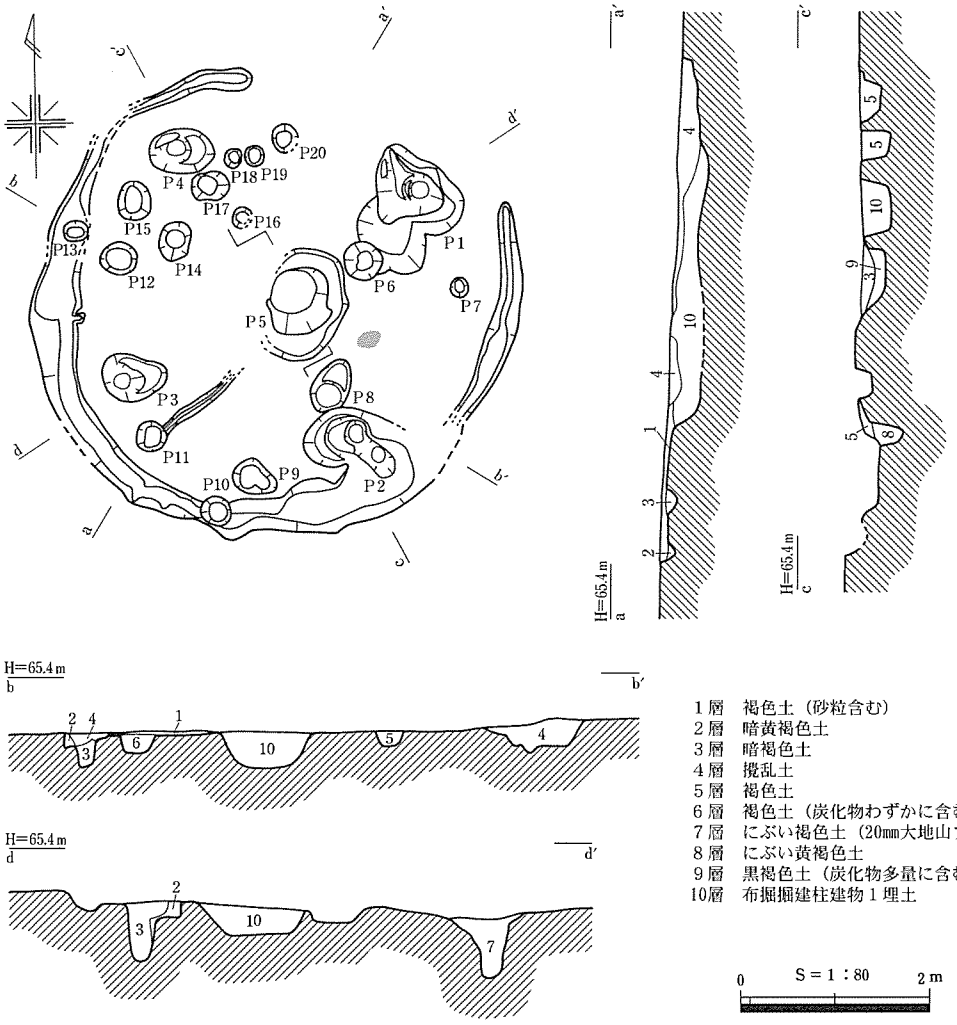
ピットは５基検出した。そのうち主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.7m、2.7m、2.8m、2.8mである。Ｐ５は西側と南東側が破壊されており、扇状に全体の３分の１程度しか残っていない。ピットの全体規模は分からないが、２段に掘り込まれていること、断面が不整形な「U」字状になっていること、また住居の中央部分に位置していることから中央ピットと考えられる。また、遺存状態は非常に良くないが、Ｐ２の北西側に焼土面を１ヶ所確認することができた。

埋土は焼土面から南側に部分的に残っており、床面から最大５cmである。炭をやや含む褐色土の単層であった。

出土遺物は器台の受部174、甕の口縁部175、甕の頸部176で



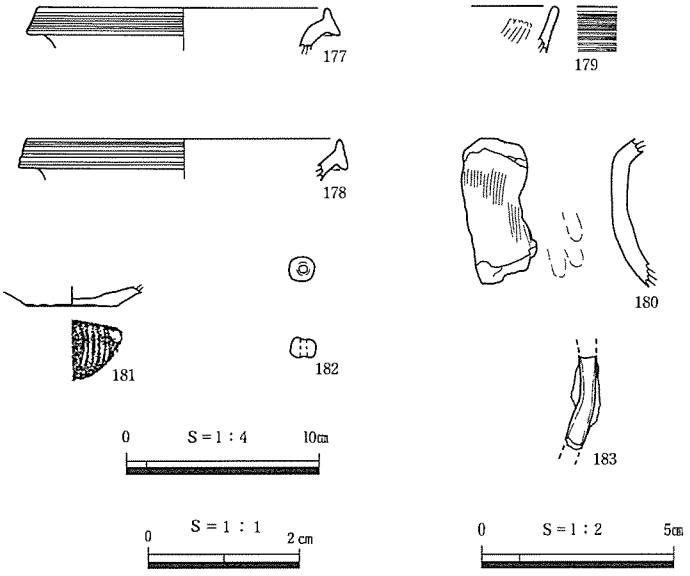
第46図　SI18出土土器



第47図　SI19実測図

表18　SI19ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	74	50	74
P 2	74	57	56
P 3	64	50	64
P 4	57	48	64
P 5	120	(82)	31
P 6	40	40	42
P 7	20	17	19
P 8	60	40	17
P 9	50	45	39
P10	34	30	40
P11	30	30	13
P12	48	31	20
P13	25	19	26
P14	40	33	26
P15	40	34	32
P16	21	21	23
P17	40	31	33
P18	17	17	20
P19	20	20	7
P20	30	(27)	46



第48図　SI19出土遺物　182はＳ＝1/1、183はＳ＝1/2

ある。このうち174は床面上で出土した。時期は清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉に相当する。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期後葉頃と考えられる。（淺田）

SI19（第47図、PL. 16）

Ｉ12グリッドに位置し、標高約65mの平坦面に立地する。北側は５分の１程度が削平され、無くなっている。北西側はSI22に切られる。埋土は部分的にしか残っておらず、耕作土除去後に床面を検出した。壁面は最も残りの良い南側で10cmほどであり、壁面は床面からやや外側に傾斜して立ち上がる。埋土は褐色土の単層で、わずかに炭と土器の小片を含んでいる。

平面形は円形であり、床面は平坦でＡＴ層をそのまま床面としている。周壁溝は幅25cm、床面からの深さは８cmである。断面形は「Ｕ」字状である。北側の削平部分付近で途切れているが、本来は全周していたものと思われる。

ピットは20基検出した。そのうち主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.7m、2.6m、2.6m、2.7mを測る。Ｐ５は中央ピットと考えられ、平面形は楕円形で２段に掘り込まれている。P11からＰ５に向かって床溝がのびている。途中で切れているが、Ｐ５につながっていたものと考えられる。その他のピットの性格は不明である。焼土面はＰ５の南東側で１ヶ所検出した。

北東隅、周壁溝近くの床面から５cm上の位置でガラス製小玉182が１点出土した。これは本遺構の埋没段階の早いうちに流入したものと思われる。

遺物は床面付近から甕の口縁部179、埋土中から甕の口縁部177、178、壺の頸部180、カワラケ181が出土した。181は本遺構が埋没していく途中に流入したものと思われる。このうち床面付近の埋土中から出土した179は外反する口縁部の形態からみて、清水編年のＶ－３期に相当する。このことから本遺構の時期は、弥生時代後期後葉頃のものと考えられる。（淺田）

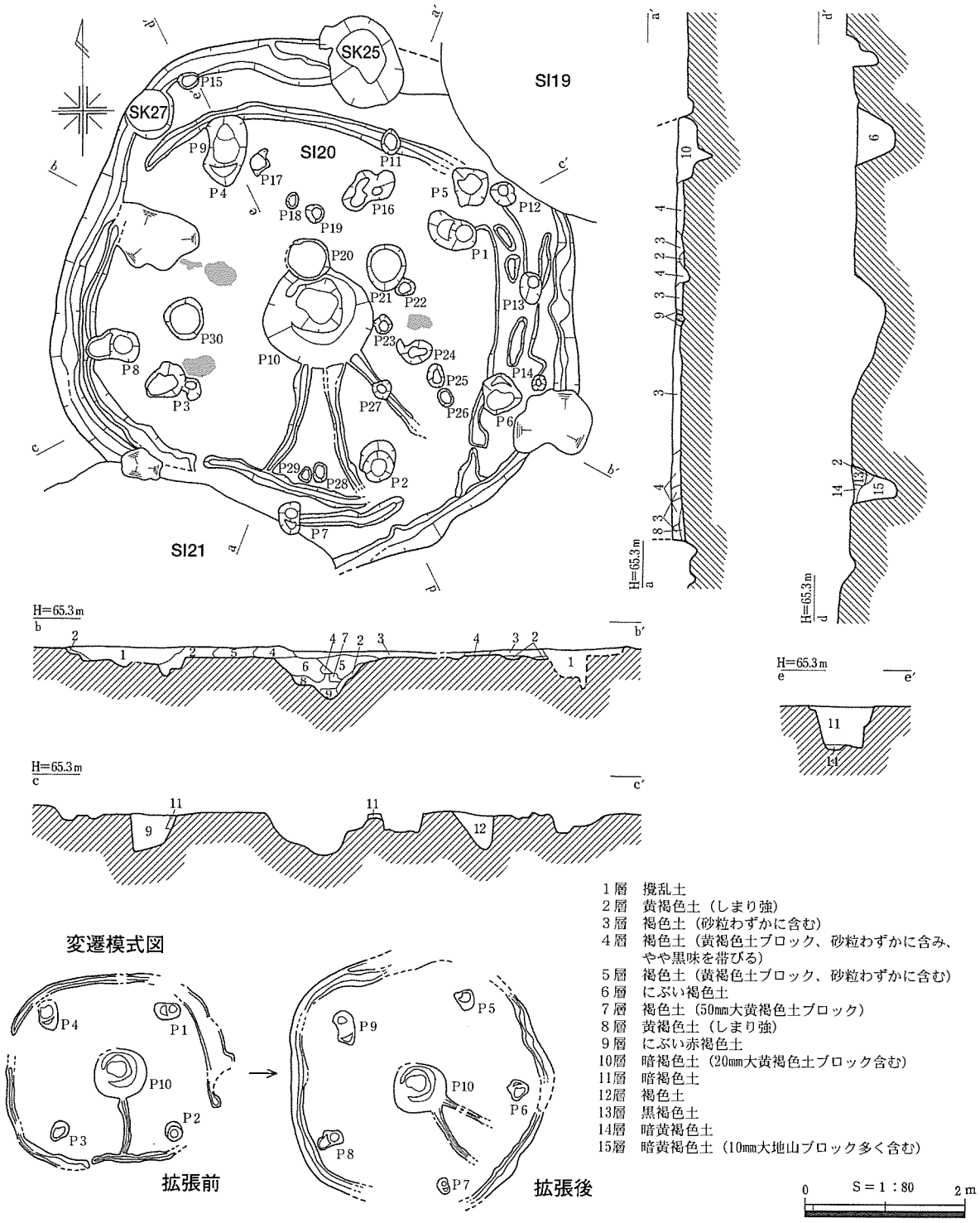
表19　SI20ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	65	40	52
Ｐ２	54	45	59
Ｐ３	55	40	47
Ｐ４	92	47	56
Ｐ５	57	48	44
Ｐ６	52	52	49
Ｐ７	40	27	62
Ｐ８	65	37	42
Ｐ９	92	47	52
Ｐ10	134	127	48
Ｐ11	32	25	19
Ｐ12	35	30	43
Ｐ13	37	30	26
Ｐ14	20	16	32
Ｐ15	28	22	35
Ｐ16	75	40	37
Ｐ17	35	24	33
Ｐ18	18	13	19
Ｐ19	27	25	53
Ｐ20	56	48	44
Ｐ21	59	50	26
Ｐ22	24	24	14
Ｐ23	24	24	32
Ｐ24	40	29	8
Ｐ25	29	20	34
Ｐ26	23	17	6
Ｐ27	24	24	41
Ｐ28	24	19	9
Ｐ29	18	45	7
Ｐ30	56	50	37

SI20（第49図、PL. 16）

Ｉ12グリッドに位置し、標高約65mの平坦地に立地する。北側はSI19に切られ、南側はSI21に切られる。本遺構は１回の拡張があり、古いものから拡張前、拡張後として記述することにする。

拡張前　拡張後の住居の床面上で検出した。平面形は周壁溝の形から隅丸方形と考えられる。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に3.2m、3.0m、3.1m、3.2mを測る。P10は中央ピットである。周壁溝の幅は約20cm、深さは床面から８cmであ

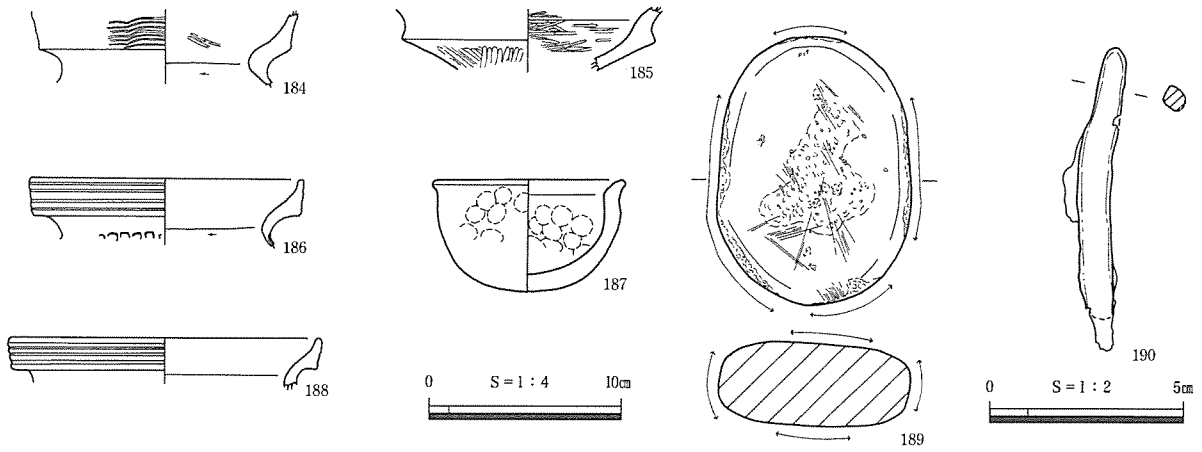


第49図　SI20実測図

り、断面形は「U」字を呈する。途中で途切れる部分もあるが、全周していたものと思われる。P10からのびる床溝が３条あり、そのうちの１条は周壁溝に繋がっており、拡張前の住居に伴うものと考えた。

遺物はＰ３の埋土中から甕の口縁部184が出土している。時期は清水編年のＶ－Ⅱ期、弥生時代後期中葉に相当する。これは、拡張前の住居跡の構築された時期を示すものと考える。

拡張後　北側をSI19に切られ、南側をSI21に切られる。平面形は五角形であり、床面は平坦でＡ



第50図　SI20出土遺物　190のみ　S＝½

Ｔ層をそのまま床面としている。主柱穴はＰ５～Ｐ９である。Ｐ９はＰ４を拡張し、再利用したものである。柱穴間距離はＰ５－Ｐ６、Ｐ６－Ｐ７の順に2.8m、3.1m、3.0m、3.1m、3.2mを測る。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南西側で11cmほどである。

P10は中央ピットと考えられ、２段に掘り込まれている。上段の大きさは（134×127－19cm）、下段は（90cm×90cm－24cm）である。住居拡張の時に拡張前の中央ピットを再利用したものと考える。周壁溝は幅30cm、深さは床面から７cmで、断面形は「U」字状である。南北をそれぞれSI19とSI21に切られているため、その部分で途切れるが本来は全周していたものと思われる。焼土面は住居の床面にて、P10の西側に２ヶ所、東側に１ヶ所確認した。

遺物は、床面付近から甕の口縁部186、188、高杯の杯部185、P23の埋土中から鉢187が出土している。187は当住居跡に伴うものかは不明である。185は清水編年のＶ－２期から３期にかけてのものであり、弥生時代後期中葉～後葉に相当する。その他のものはいずれも清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉に相当する土器である。本遺構の時期については、出土遺物から弥生時代後期中葉～後葉頃と考える。これはSI19、SI21との切り合い関係と矛盾しない。周辺の住居群の中にも同時期のものがあり、住居の継続する時期幅は、土器型式差として現れない程度の短期間であるということができ、極めて短い期間に、住居の造営・建て替えが行われたものと考える。（淺田）

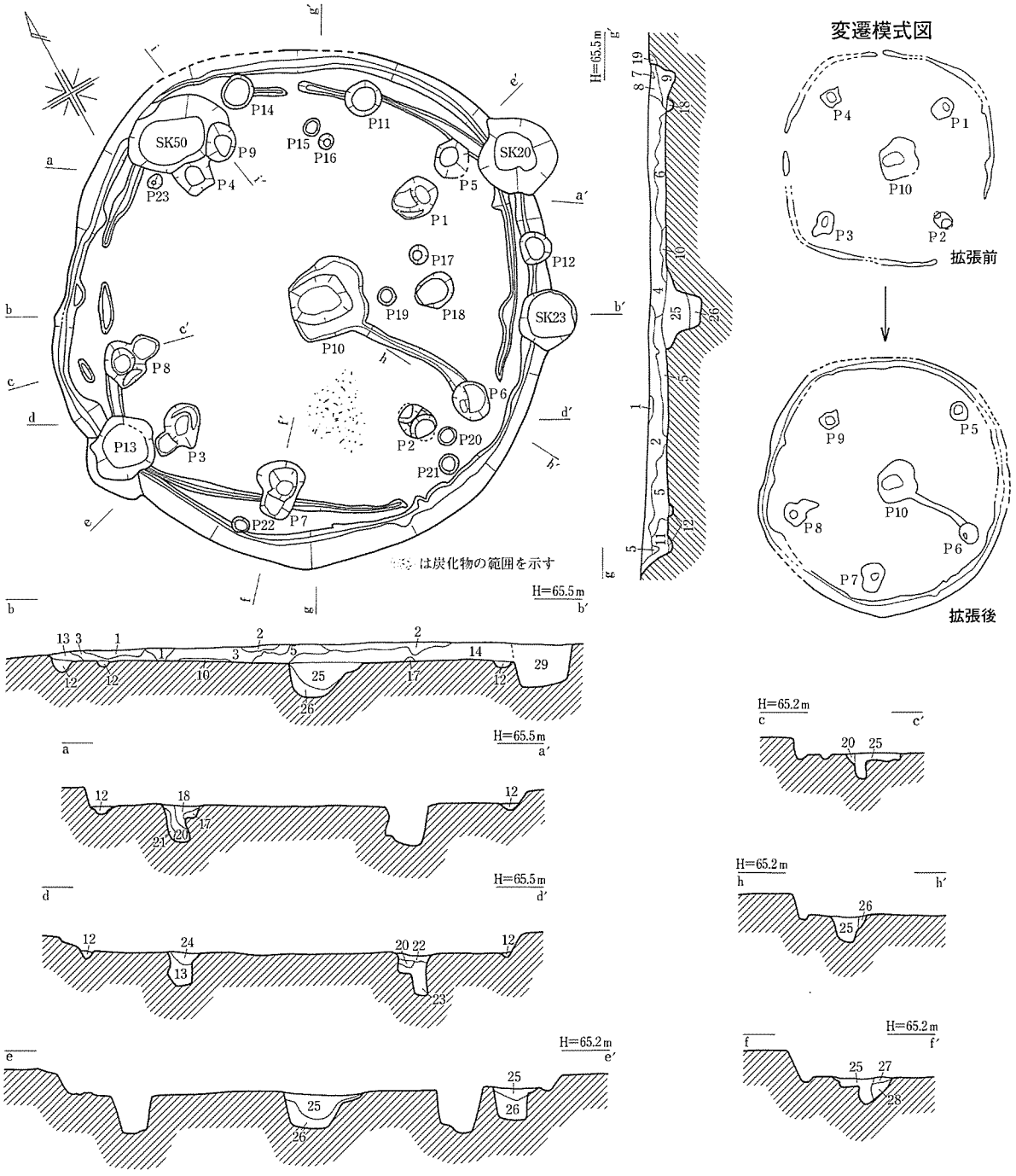
表20　SI21ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	57	46	58
Ｐ２	46	40	20
Ｐ３	61	44	43
Ｐ４	54	50	51
Ｐ５	46	(43)	42
Ｐ６	50	45	34
Ｐ７	71	60	45
Ｐ８	56	40	32
Ｐ９	110	104	46
Ｐ10	42	39	22
Ｐ11	45	45	57
Ｐ12	40	37	38
Ｐ13	78	65	26
Ｐ14	46	38	49
Ｐ15	24	20	5
Ｐ16	19	19	16
Ｐ17	25	25	6
Ｐ18	48	40	48
Ｐ19	22	22	10
Ｐ20	23	20	6
Ｐ21	25	25	13
Ｐ22	22	17	14
Ｐ23	17	15	12

SI21（第51図、PL. 16）

Ｉ13グリッドに位置し、標高約65mの平坦部に立地する。本遺構は１回の拡張があり、古いものから拡張前、拡張後として記述することにする。

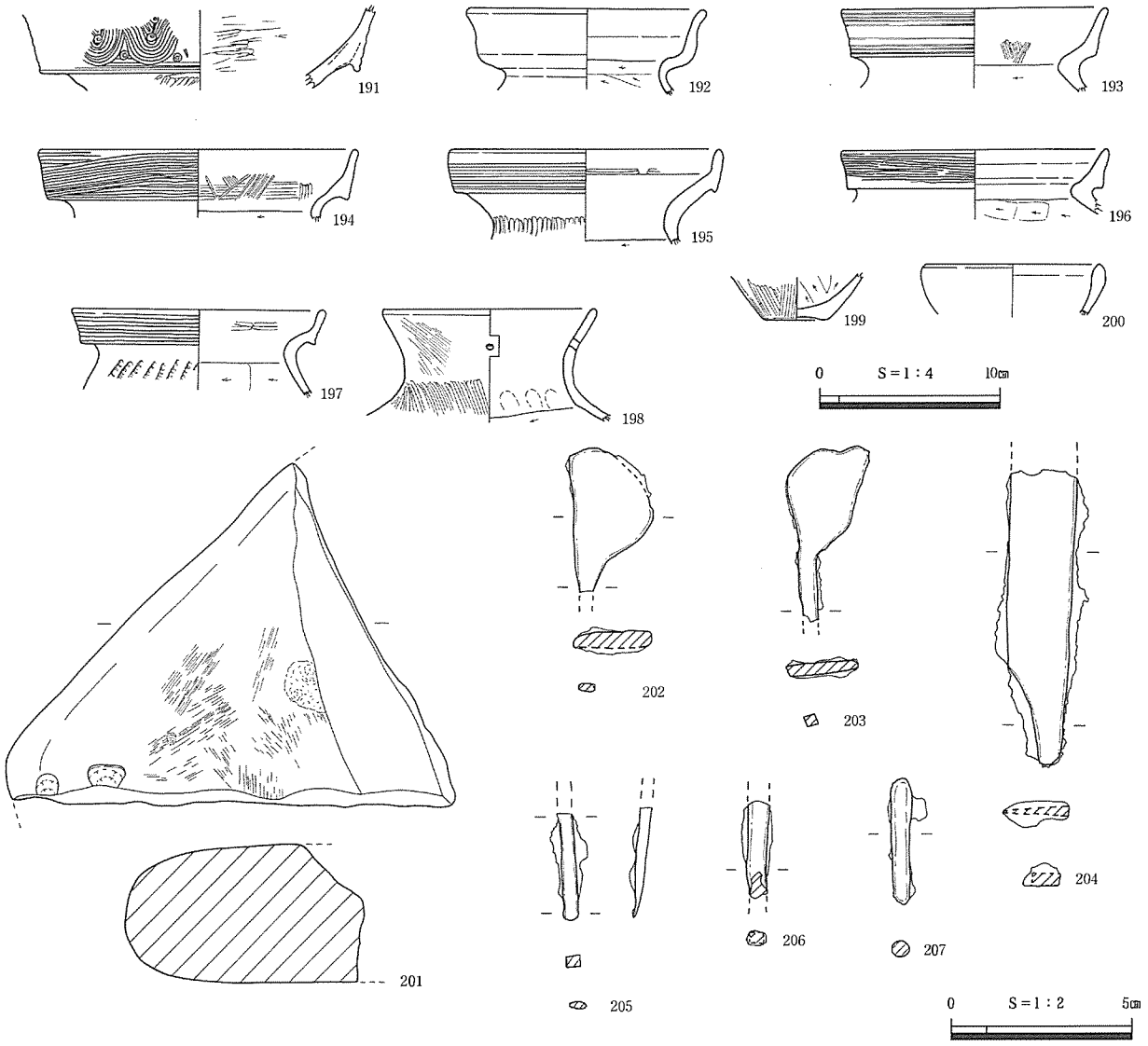
拡張前　拡張後の床面上で検出された。主柱穴はＰ１



1層　暗黄褐色土
2層　暗褐色土
3層　褐色土（10mm大黄色土ブロック、炭化物、砂粒含む）
4層　褐色土（暗黄褐色土多く含む）
5層　褐色土（暗黄褐色土含む）
6層　にぶい褐色土（黄色土ブロック、炭化物、砂粒少量含む）
7層　暗褐色土（しまり弱）
8層　にぶい褐色土（黄色土ブロック含む）
9層　にぶい褐色土（黄色土ブロック多く含む）
10層　暗褐色粘質土
11層　褐色土（暗黄褐色土多く含む）
12層　にぶい黄褐色土
13層　褐色土（しまりやや弱）
14層　褐色土（砂粒、多量の炭化物含む）
15層　にぶい褐色土
16層　にぶい黄褐色土（20mm大黄色土ブロック含む）
17層　にぶい黄褐色土（しまりやや弱）
18層　暗褐色土
19層　SI20の埋土
20層　褐色土（しまり強）
21層　灰褐色土（しまり強）
22層　暗褐色土（炭化物多く含み、しまり強）
23層　褐色土（炭化物わずかに含む）
24層　褐色土（黄色土ブロック、暗褐色土含む）
25層　暗褐色土（炭化物わずかに含み、しまり強）
26層　黒褐色土（炭化物多く含む）
27層　灰褐色土（黄色地山ブロック含む）
28層　黄褐色土（黄色土ブロック、灰褐色土含む）
29層　SK23の埋土

0　S＝1：80　2m

第51図　SI21実測図



第52図　SI21出土遺物　202～207はＳ＝½

～Ｐ４で、柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.8m、3.0m、3.0m、2.8mである。中央ピットはP10である。周壁溝は拡張後の住居の柱穴に切られる箇所や、途切れる部分もあるが、本来は全周していたものと思われる。大きさは幅15cm、床面からの深さは3.5cmで、断面形は「U」字状である。住居跡の規模は、１辺が5.2m四方で、平面形は主柱穴の並び方と周壁溝の形から、隅丸方形と考えられる。

拡張後　平面形は隅丸五角形であり、床面は平坦でAT層をそのまま床面としている。SI20の南壁を切る。床面から検出面までの深さは、最も残りの良い南側で約75cmである。主柱穴はＰ５～Ｐ９で、柱穴間の距離はＰ５－Ｐ６、Ｐ６－Ｐ７の順に3.0m、2.6m、2.6m、3.0m、2.9mである。中央ピットはP10である。住居拡張後も再利用されたものと考える。平面形は隅丸方形を呈し、東南隅からＰ６に向かって床溝がのびている。床溝の大きさは幅10cm、深さは床面から2.7cm、断面形は「U」字状である。

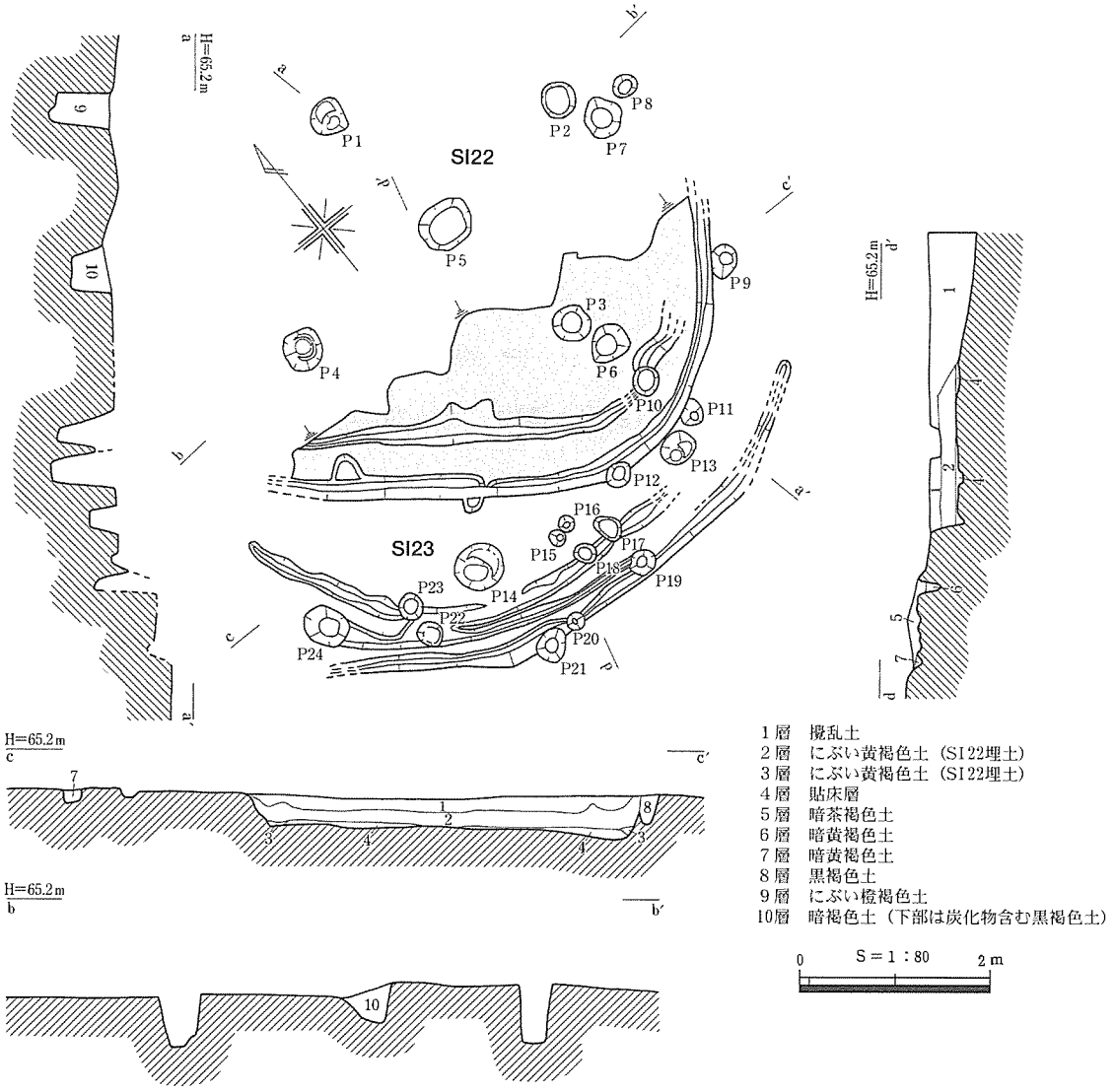
P11～P14は、その性格を明瞭に示す痕跡が今回の調査では得られなかったが、補助的な柱の可能性が考えられる。その他のピットは小規模で性格は不明である。

床面は平坦でAT層をそのまま床面としている。全体的に被熱により淡く赤味を帯びており、P10の南側に炭化物を多量に含んだ埋土が２cm程度堆積していた。この中には長さ15cm、直径４cmの棒状の炭化材が含まれていた。これらのことから本遺構は焼失住居である可能性がある。床面直上の遺物がほとんど無いことから、ある程度片付けられたのち意図的に燃やした可能性も考えられる。

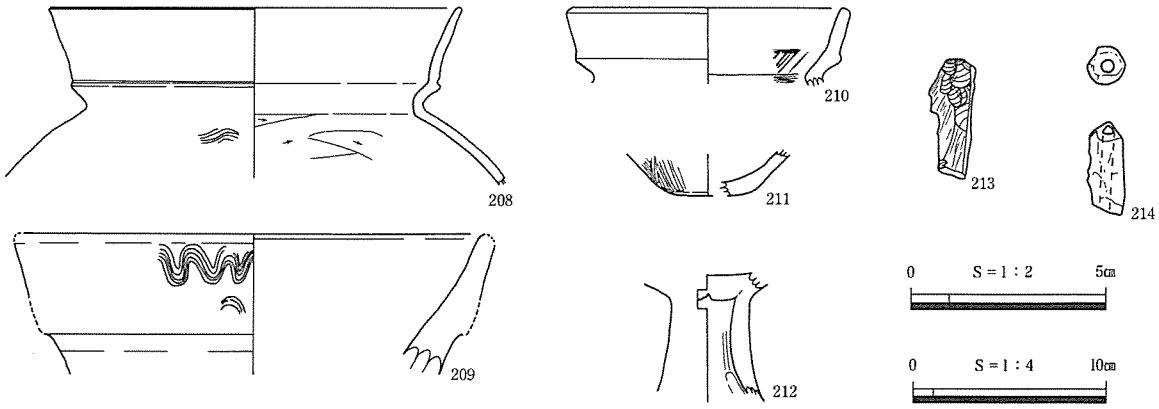
遺物はP11から甕の口縁部191、周壁溝内から甕の口縁部192、床面付近から甕の口縁部193、194、甕の底部199が出土している。また、埋土上層から壺の口縁部198、甕の口縁部195、196、197、鉢の口縁部200が出土している。いずれも清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉に相当する土器であり、これは本遺構の時期を示すものと考える。これはSI20との切り合い関係と矛盾しない。同時期の短い間に、住居の造営・建て替えが行われたと考える。　（淺田）

SI22（第53図、PL. 18）

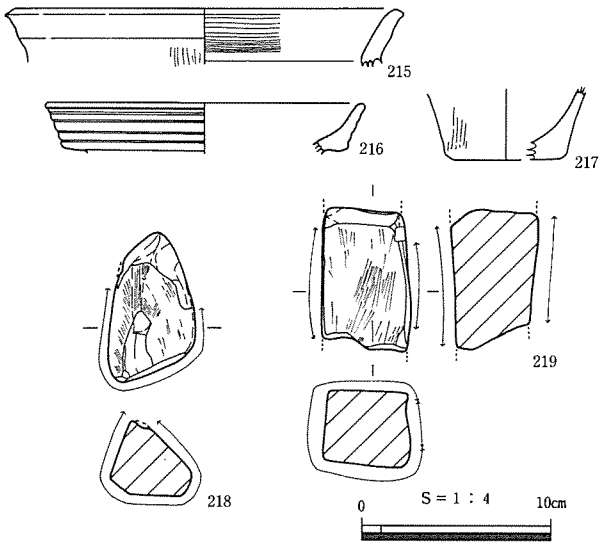
I11グリッドの台地の平坦部に位置する。壁高は南壁の最深部で30cmを測るが、北半部は攪乱により失われていた。東南部はSI19と重複するが、SI19の埋土が遺存しないため、層位的関係は不明である。南側で重複するSI23は埋土の残りが悪く、SI23の床面で当住居跡を検出した。このため両者の



第53図　SI22・23実測図



第54図　SI22出土遺物　213、214のみ　S＝½



第55図　SI23出土遺物

表21　SI22・23ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	42	41	(61)
P２	38	36	(66)
P３	44	42	66
P４	48	42	(69)
P５	63	50	(41)
P６	46	40	(70)
P７	46	40	(60)
P８	26	24	(19)
P９	36	(29)	54
P10	32	28	25
P11	28	23	51
P12	30	25	48
P13	36	34	59
P14	50	50	60
P15	18	16	36
P16	18	16	16
P17	33	23	10
P18	22	20	16
P19	28	27	21
P20	22	18	39
P21	36	30	8
P22	28	24	7
P23	32	28	42
P24	50	38	62

層位的関係は不明である。住居跡の規模・平面形は推定で一辺5.5mの隅丸方形とみられる。ピットは10基検出した。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。このうちＰ１・Ｐ２・Ｐ４は攪乱土を除去した地山面にて検出した。いずれも底のレベルが同一であることからSI22に伴うものと判断される。Ｐ５は中央ピットである。壁際には幅15～26cm、深さは平均３cmの溝がめぐる。また床面には全面に貼床が施され、貼床を除去した地山面にて内側の周壁溝を検出した。このことから、住居の拡張が行われたものとみられる。遺物は、床面付近の埋土中から若干の土器が出土した。図示した213は珪化木で、214は土錘である。ともに攪乱土中の出土であり、当住居跡に伴うものかは、不明である。出土した土器は若干古いものも含むが、新相の土器が清水編年のⅥ期のものであることから、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものとみられる。

（小山）

SI23（第53図、PL. 18）

Ｉ11グリッドにあり、SI22の南側に位置する。遺存状況が悪く、南半部のみの検出である。北半部はSI22の掘り込みにより、床面が失われている。

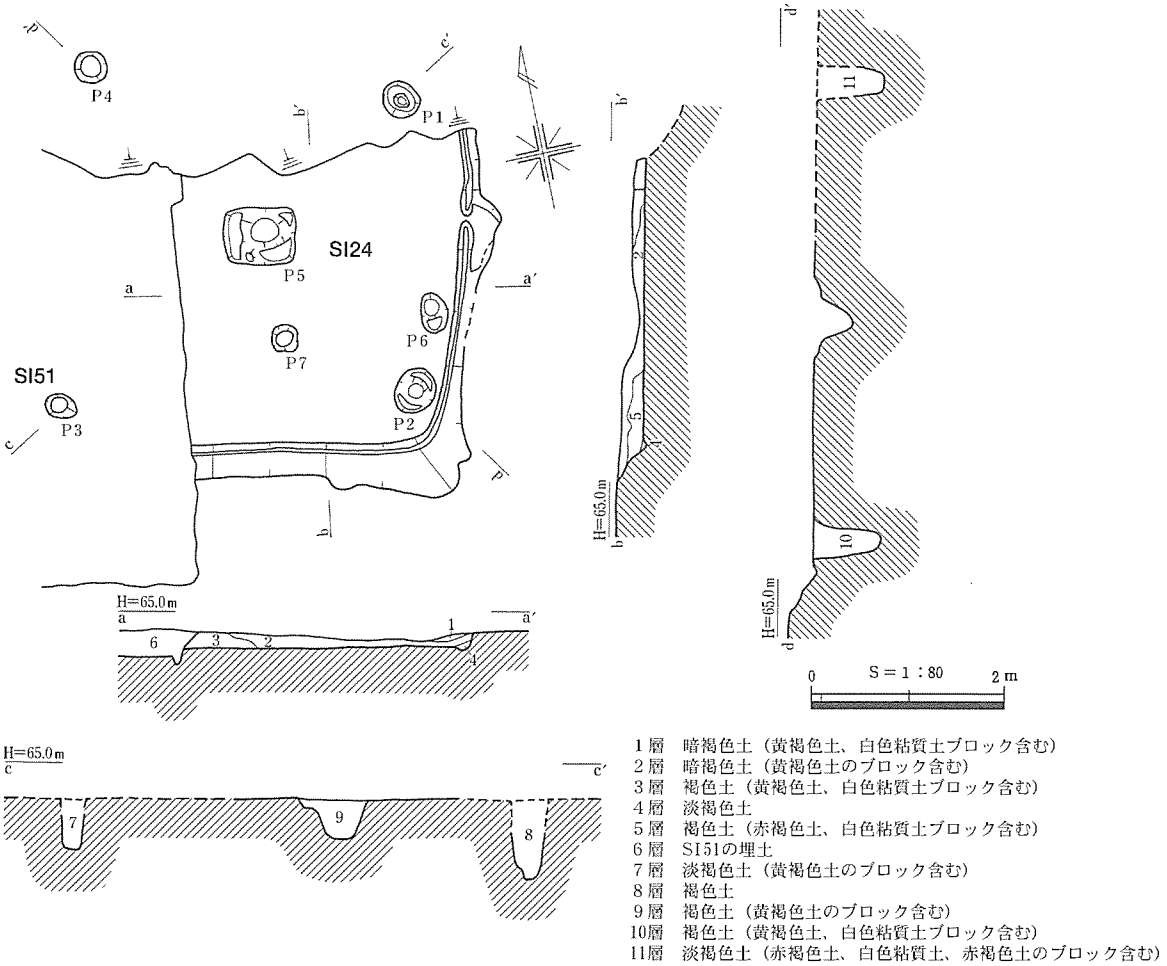
壁高は残存する南壁で、わずかに11cmである。壁際では幅８～28cm、深さ５cmの３重の周壁溝を検出した。これは住居の建て替えに伴うものと考えられるが、遺存状況が悪く、詳細な変遷は明らかでない。

住居跡の規模・平面形は一辺3.0mの五角形ないしは直径約8.4mの円形とみられる。検出したピットは14基であるが、住居跡埋土中から掘り込まれた可能性があるものも含む。深さなどからみてP13やP14は主柱穴の可能性があるが、北半部は後の攪乱やSI22の掘り込みによって床面から40cm以上掘り下げられているため、詳細は不明である。出土遺物は弥生土器、石器が出土した。217が攪乱土中からの出土であるほかは埋土中からの出土である。218、219は砥石である。埋土中出土の土器は、清水編年のＶ－３期に該当することから、弥生時代後期後葉の住居跡と考えられる。　　（小山）

SI24（第56図、PL. 18）

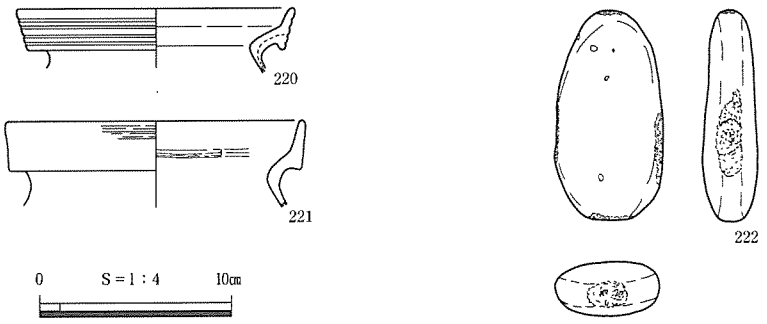
I11グリッドの位置で、標高およそ64.9mの高さ、ホーキ層を検出面として確認した。SI51により住居西側部分が壊されており、北側部分では近年の耕作による天地返しを受けている。また、東側部分では、SI23を壊して存している。

残存する部分は住居東南部に限られるが、検出面から床面までは深さ24cmを測り、AT層、および白色粘質土層を床面とする。周壁溝は確認された範囲では東壁北寄りで一部途切れるところがみられた。ピットは４基床面から確認され、うちＰ２は主柱穴、Ｐ５は中央に掘り込まれたピットである。



第56図　SI24実測図

本住居では床面以外からも本住居に伴うと考えられるピットが検出された。Ｐ１・４は攪乱土除去後に柱穴の下半部分が遺存していたものである。Ｐ３はSI51の貼床除去後に確認したものである。このことから、本住居では壁部分は南東部を残し遺存しないことから正確な規模は不明であるが、四本柱とする平面方形の住居であったと考えられる。



第57図　SI24出土遺物

表22　SI24ピット表　（ ）現存値

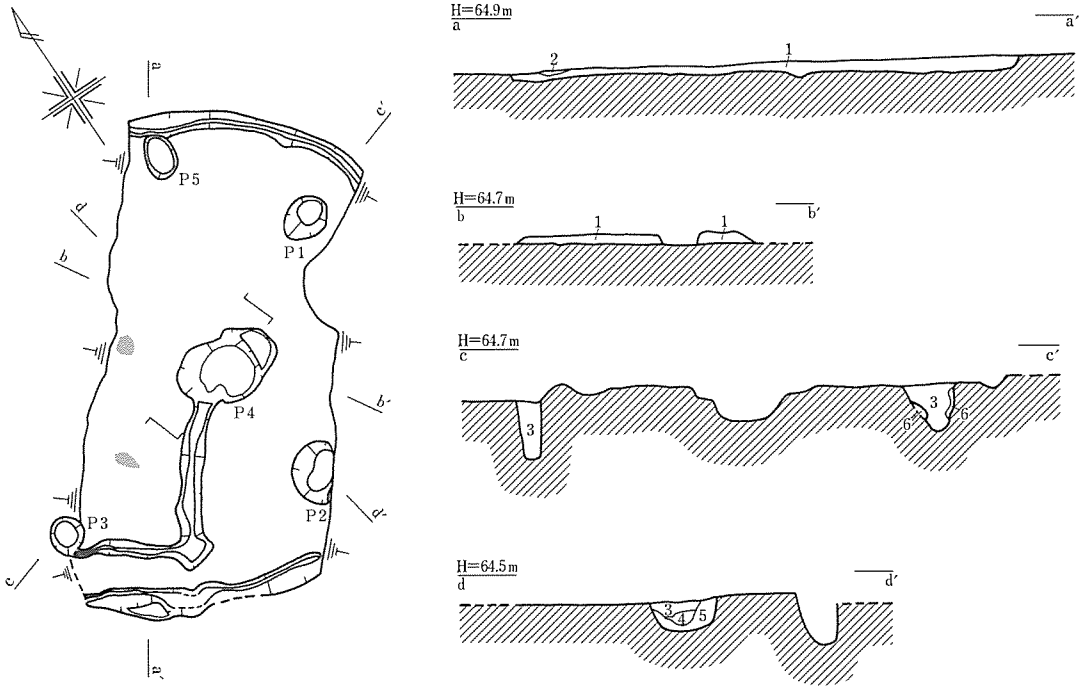
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	42	38	(89)
Ｐ２	50	42	65
Ｐ３	35	24	(51)
Ｐ４	35	34	(58)
Ｐ５	74	58	47
Ｐ６	42	27	43
Ｐ７	32	30	36

さて、本住居の出土遺物には、220・221の甕の口縁部の破片がみられる。220は外傾する口縁部に４条の平行沈線文を施し、221は平行沈線文を施した後、一部ナデ消しを行っている。222は敲石である。

本住居の時期であるが、出土遺物は清水編年Ｖ－３期に相当することから、弥生時代後期後葉の時期が考えられる。このことは本住居と切り合い関係にあるSI23、SI51との前後関係とも矛盾するものではない。（野口）

SI25（第58図、PL. 18）

Ｅ８グリッドの南西側、標高64.3mの平坦面に位置する。SI65の北に立地する。農道の真下に位置

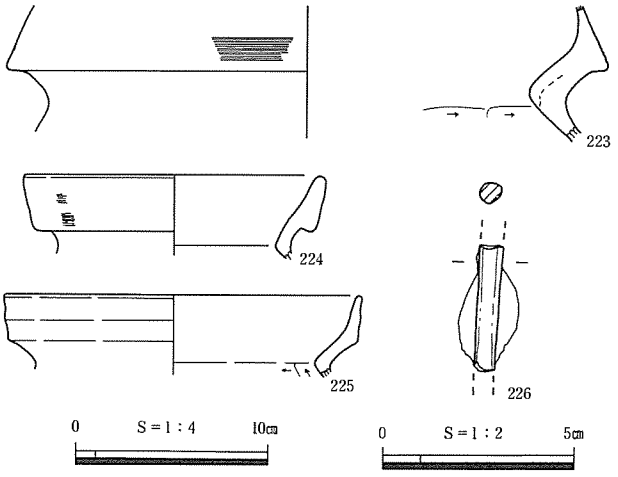


1層　褐色土（10mm大ホーキ、黄褐色土ブロック、白色礫、炭化物含む）
2層　暗褐色土（白色礫少量含む）
3層　暗褐色土（10～20mm大黄褐色ブロック、白色礫、炭化物含む）
4層　褐色土（灰白色ブロック、黄褐色ブロック、白色礫、炭化物含む）
5層　灰白土（黄褐色ブロック、橙褐色土、褐色土、炭化物含む）
6層　茶褐色土（黄褐色ブロック含む）

第58図　SI25実測図

表23　SI25ピット表　（ ）現存値

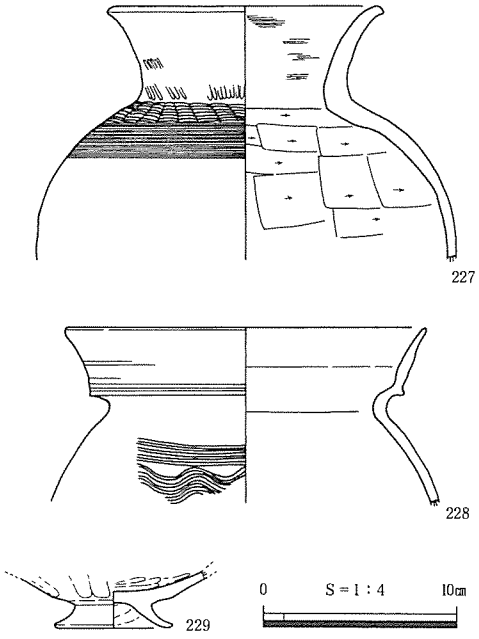
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	53	40	51
Ｐ２	66	(43)	55
Ｐ３	42	36	75
Ｐ４	107	75	37
Ｐ５	47	34	23



第59図　SI25出土遺物　226のみ　S＝½

していたため、道路の取り付けの際に削平を受け、東南側と北西側が壊されている。検出できた北東側と南西側の状況から、平面形は円形であると推定され、直径5.5mを測る。黄褐色土を床面としており、検出面から床面までの深さは、南西側で18cm、北東側で６cmを測る。周壁溝は北東側と南西側のみ検出した。攪乱を受けた部分では確認できなかったが、本来は全周していたと考えられる。溝の幅は９cm、床面からの深さは５～８cmで断面形は「U」字状である。床溝は１条あり、Ｐ４から南西方向に1.7mのび、さらにＰ３に向かい1.3mのびている。ピットは５基検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ３である。柱穴の配列から、４本柱の建物になると思われる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に2.8、2.9mである。Ｐ４は中央ピットと考えられ、平面形は不整円形である。床面上にはＰ４の西側に焼土面が２ヶ所みられた。

出土遺物については、床面直上のものはみられなかったが、Ｐ１とＰ２の埋土中から甕の口縁部224・225が出土している。本遺構の年代は、これら主柱穴から出土の土器が清水編年のＶ－３期に相当することから、弥生時代後期後葉の時期と考えられる。　（阪上）



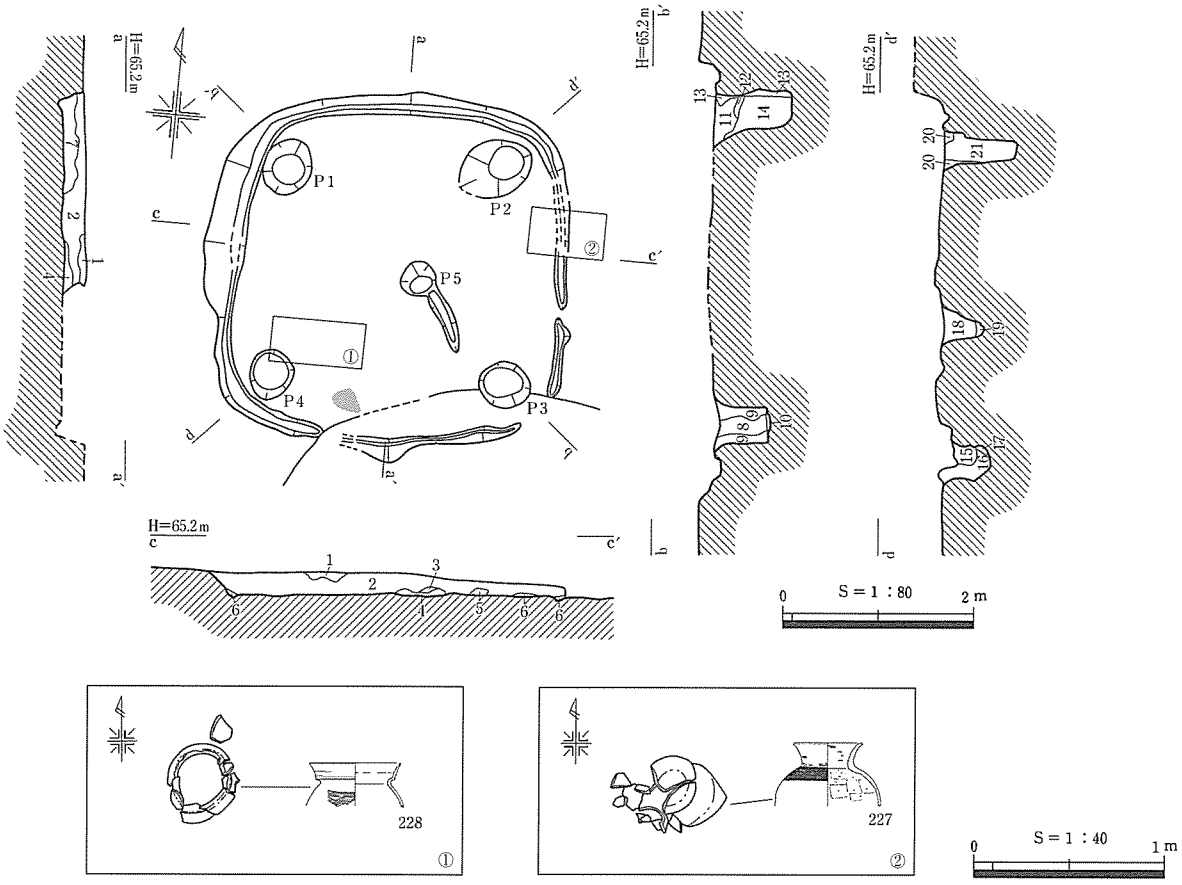
第60図　SI26出土土器

SI26（第61図、PL. 19）

H12グリッドに位置し、標高約64.7mの、西側から東側に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺が3.0mである。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い北西側で28cmである。壁面は床面よりやや外側に傾斜を持って立ち上がる。周壁溝はほぼ全体を検出した。大きさは幅12cm、床面からの深さは３cm、断面形は「U」字状である。床面は平坦で、AT層をそのまま床面としている。

ピットは５基検出した。このうち柱穴はＰ１～Ｐ４である。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.8m、2.8m、2.9m、2.2mを測る。Ｐ５は中央ピットである。床溝がＰ５からＰ３に向かってのびている。大きさは幅15cm、床面からの深さは４cmで、断面は「U」字状である。焼土面はＰ３、Ｐ４の間で１ヶ所検出した。

遺物は床面上で壺の口縁部227、甕の口縁部228、低脚



1層　黒褐色土
2層　暗褐色土（砂粒、10mm大ホーキブロック少量含み、しまり強）
3層　褐色土
4層　黄褐色土
5層　黒褐色土（しまり弱）
6層　褐色土
7層　暗褐色土（20mm大ホーキブロックを多く含み、しまり強）
8層　暗褐色土（しまり強）
9層　褐色土（ホーキブロック含み、しまり強）
10層　灰褐色土（しまり強）
11層　暗褐色土（少量の砂粒、10mm大ホーキブロック、炭化物含む）
12層　褐色土（ホーキブロック含み、しまり強）
13層　黄褐色土
14層　暗褐色土（しまり強）
15層　暗褐色土（炭化物、10mm大ホーキブロックわずかに含む）
16層　褐色土（しまり強）
17層　灰褐色土
18層　暗褐色土
19層　褐色土（ホーキブロック含む）
20層　褐色土（ホーキブロック含む）
21層　暗褐色土（少量のホーキブロック、炭化物含む）

第61図　SI26実測図

杯の脚部229が出土している。時期はいずれも清水編年のVI期に相当する。

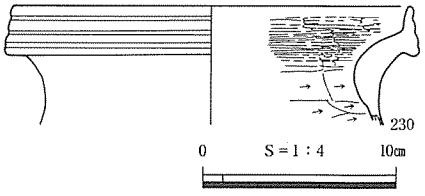
このことから当住居跡は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期のものと考える。　（淺田）

表24　SI26ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	58	50	72
P 2	80	61	80
P 3	54	50	60
P 4	52	45	62
P 5	38	37	46

SI27（第63図、PL. 19）

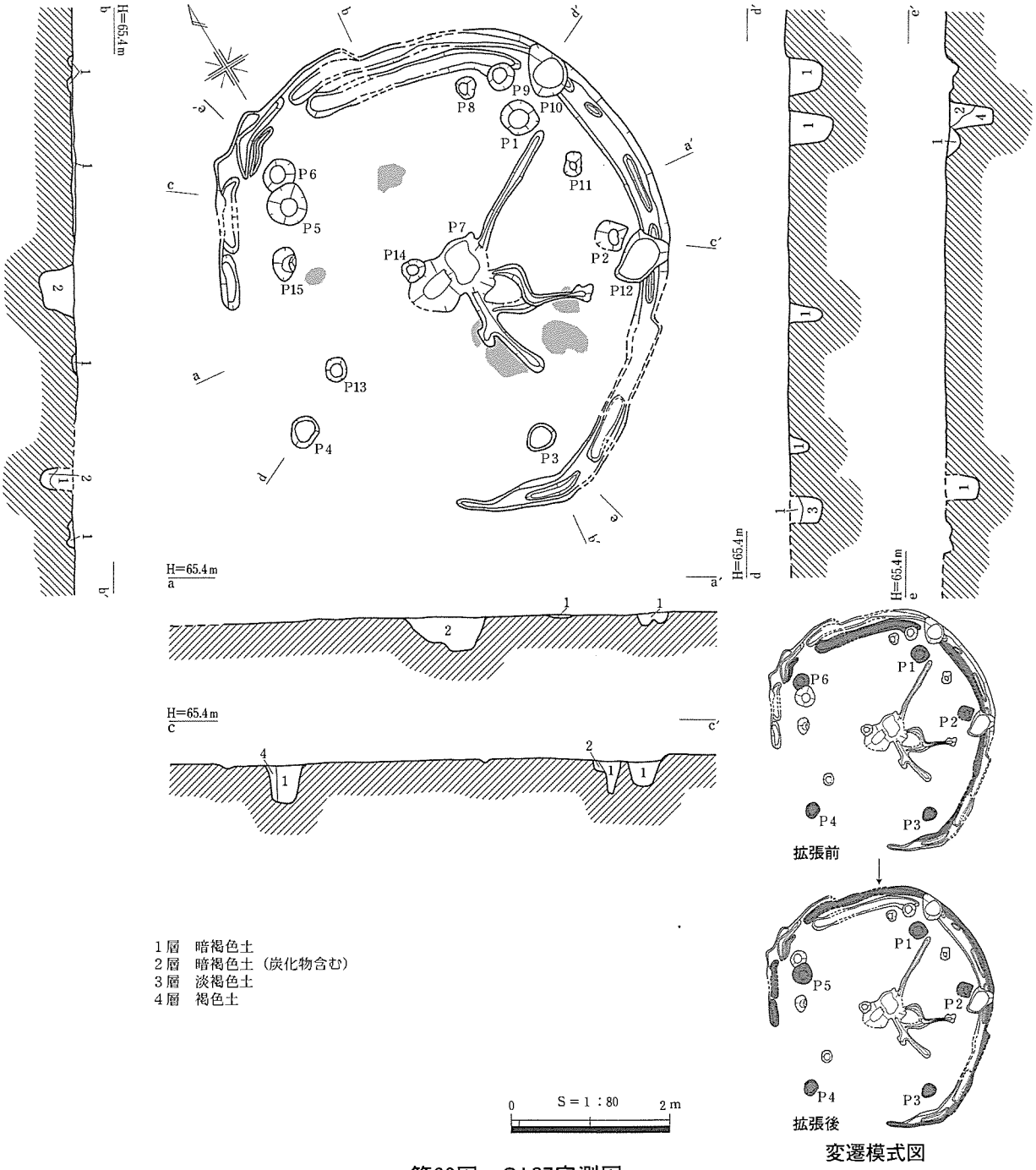
J12グリッド、標高およそ65.0mの高さでホーキ層を検出面として確認した。SB９、SK34と一部で重複する。検出の段階ですでに床面の焼土や周壁溝の一部が確認されるなど、すでに床面よりも上の住居構造は、後の耕作等の削平により失われていた。このことから住居埋土も柱穴や周壁溝、ピットを埋める土以外は残りもほとんどなく、住居内の所々に厚さ１～２cmの堆積を残すのみ



第62図　SI27出土土器

であった。また、本住居はSB９、SK34と一部で重複する。

このような状況であったが、調査の結果、本遺構は南西部に関しては削平により周壁溝も遺存しないため、不明な点を残すものの平面形を五角形にする、東西5.7m以上、南北6.4mの竪穴住居跡であることが周壁溝の形態から明らかとなった。また、周壁溝の状況からは、上述の周壁溝の内側で縁部分を一部で重複させる東西5.5m以上、南北5.7mの周壁溝も認められ、このことから本住居は建て替えが行われたことが確認できた。さて、この建て替えが拡張か縮小かの判断であるが、埋土がほとんど残存していなかったことや、外側と内側で認められた周壁溝の切り合いからは判断が困難であった。しかし、住居北西側の主柱穴と考えられるＰ５・６で、外側の周壁溝のコーナーと対応するＰ５が内側の周壁溝のコーナーと対応するＰ６を切って存在することから拡張であったと判断される。そのほ



第63図　SI27実測図

かの４基の主柱穴に関しては、Ｐ１・２・３・４以外に、柱穴として妥当なピットが確認できなかったことから、拡張後も引き続き用いられていたものと考えられる。

さて、本住居跡はホーキ層を床面とし、柱穴となるピット以外に９基のピットが確認された。本住居内で確認できたピットには周壁溝を切って存在するものがあるなど本住居跡よりも新しい可能性もある。Ｐ７は中央ピットで、中央ピットからは床溝が北東、南東、南方向に３本のびる。南方向にのびる床溝は途中で南東方向に枝分かれをするが、この床溝は南東方向にのびる床溝に切られている。また、本住居の床面からは焼土面が６ヶ所で確認できたが、東南にある３ヶ所の焼土面は床溝に切られている。

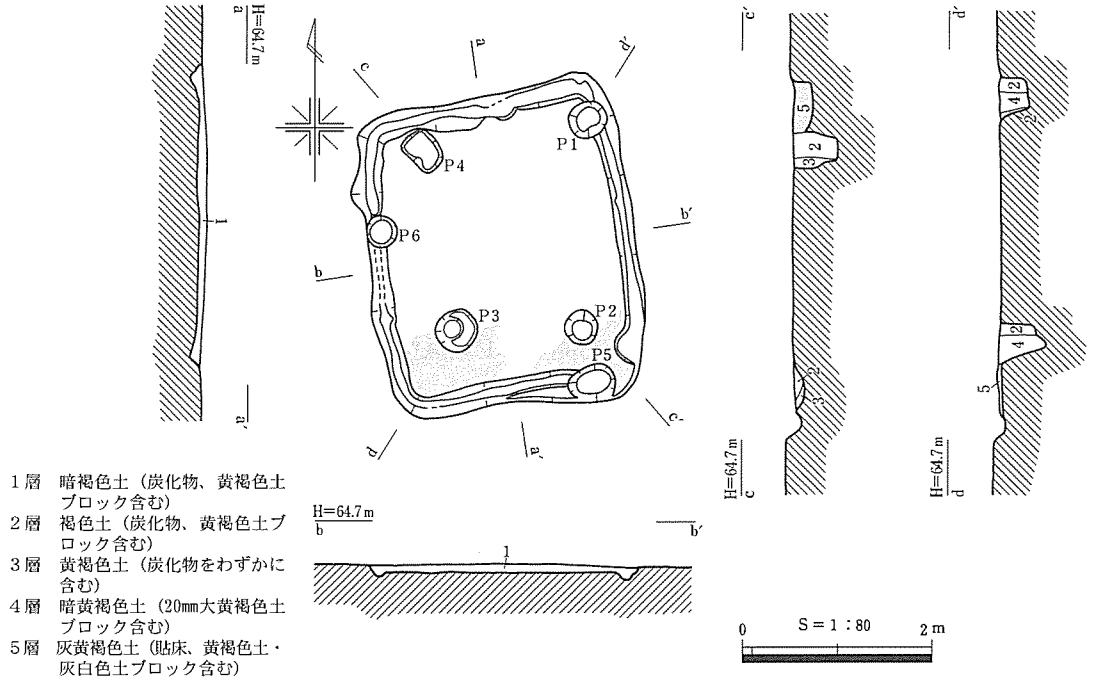
表25　SI27ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	49	43	49
Ｐ２	45	40	40
Ｐ３	38	30	29
Ｐ４	41	35	28
Ｐ５	53	51	56
Ｐ６	44	33	41
Ｐ７	112	55	36
Ｐ８	26	24	34
Ｐ９	35	34	37
Ｐ10	70	49	41
Ｐ11	32	21	19
Ｐ12	65	45	35
Ｐ13	30	25	27
Ｐ14	30	27	38
Ｐ15	43	30	53

出土遺物であるが上述したように本遺構は住居の上部構造は削平を受け、住居埋土もわずかに残す状況であったため、極めてわずかであった。230は壺口縁部の破片で、外反した頸部につく複合口縁はやや内傾する。口縁部外面には凹線が３条施され、内面は非常に丁寧なミガキが施される。そのほか図化できなかったものに口縁部の平行沈線文をナデ消したものがみられ、清水編年のＶ－３期に相当する。このことから弥生時代後期後葉頃の時期と思われる。　（野口）

SI28（第64図、PL. 20）

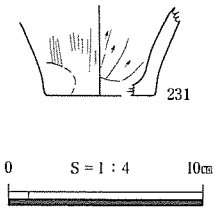
Ｄ８グリッドの中央付近、標高64.2mの平坦面に位置する。SI10の北側に立地する。本遺構は検出段階で薄く埋土が残っている程度で、遺存状態はよくない。黄褐色土を床面としており、南東・南西隅では黄褐色土・灰白色土のブロックを主体とする土で貼床を施していた。貼床の厚さは東南側で最



第64図　SI28実測図

表26　SI28ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	41	38	32
Ｐ２	37	34	45
Ｐ３	45	43	48
Ｐ４	44	32	74
Ｐ５	50	39	57
Ｐ６	35	32	53



第65図　SI28出土土器

大20cm、南西側で最小５cmを測る。住居跡の平面形は方形で長辺3.3m、短辺2.9mである。検出面から床面までの深さは10cmを測る。周壁溝は一部途切れるものの、本来は全周していたものと考えられる。大きさは幅約15cm、床面からの深さは４cmで、断面形は「U」字状である。ピットは６基検出した。２本柱や４本柱と考えた場合に対応する柱穴がないことから、主柱穴としてふさわしいものはみあたらず、屋内に柱を持たない建物であると考えた。Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６に関しては、本遺構の床面で検出したが、どれも周壁溝を切っていることから、住居廃絶後に掘り込まれたものと考えられる。

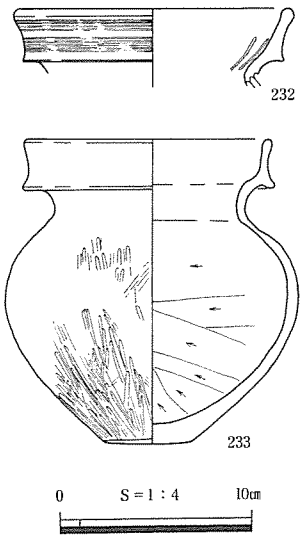
出土遺物は床面直上のものはないが、埋土中から出土の231の甕底部は、清水編年のⅣ期の土器である。このほか細片のため図化していないが、出土した土器の中に、内面横方向のヘラケズリを施した甕の破片があることから、弥生時代後期に下る可能性もある。いずれにしても時期の特定は困難であり、弥生時代中期を上限とし、後期まで下る可能性が高いと考えられる。なお周壁溝を切っているピットからは、詳細な時期は不明であるが、土師器が出土していることから、層位的にも矛盾しない。

（阪上）

SI29（第67図、PL. 20）

表27　SI29ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	50	40	75
Ｐ２	58	48	54
Ｐ３	52	36	57
Ｐ４	61	50	77
Ｐ５	50	44	35

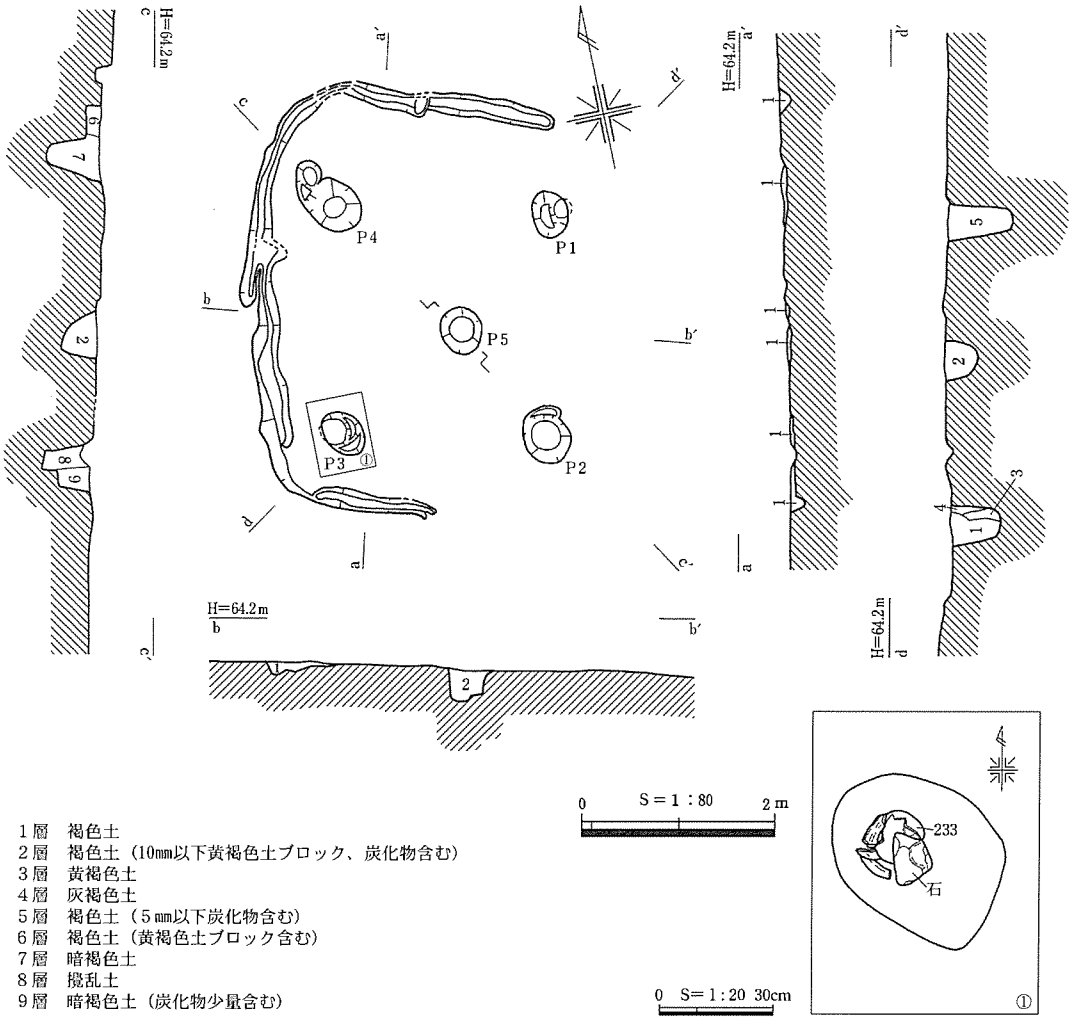


第66図　SI29出土土器

Ｂ８グリッドの中央、標高63.5～63.7mのなだらかな斜面に位置する。SI30と重複するが、わずかに遺存する埋土の切り合い関係からみてSI29の方が新しいと考えた。遺構の東側は攪乱を受けており、規模は不明であるが、検出できた周壁溝の形状から隅丸方形であると思われる。黄褐色土を床面としており、検出面から床面までの深さは西側で最大９cmを測る。周壁溝は、北東側から南西側のみ検出できたが、本来は全周していたものと考えられる。幅は約21cm、床面からの深さは約８cmで断面形は「U」字状である。ピットは５基検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４で、４本柱の建物になる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間より順に2.4、2.3、2.4、2.4mを測る。Ｐ５は中央ピットと考えられ、平面形は円形である。

遺物については、床面直上のものは認められなかったが、Ｐ３の埋土中から外面が赤彩された壺233が出土している。この壺はピットの底面から約33cm高い位置で、石に押しつぶされた状態で出土した。この遺構の年代として、Ｐ３から出土した壺が清水編年のⅥ期に相当することから、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の時期と考えられる。

（阪上）



第67図　SI29実測図

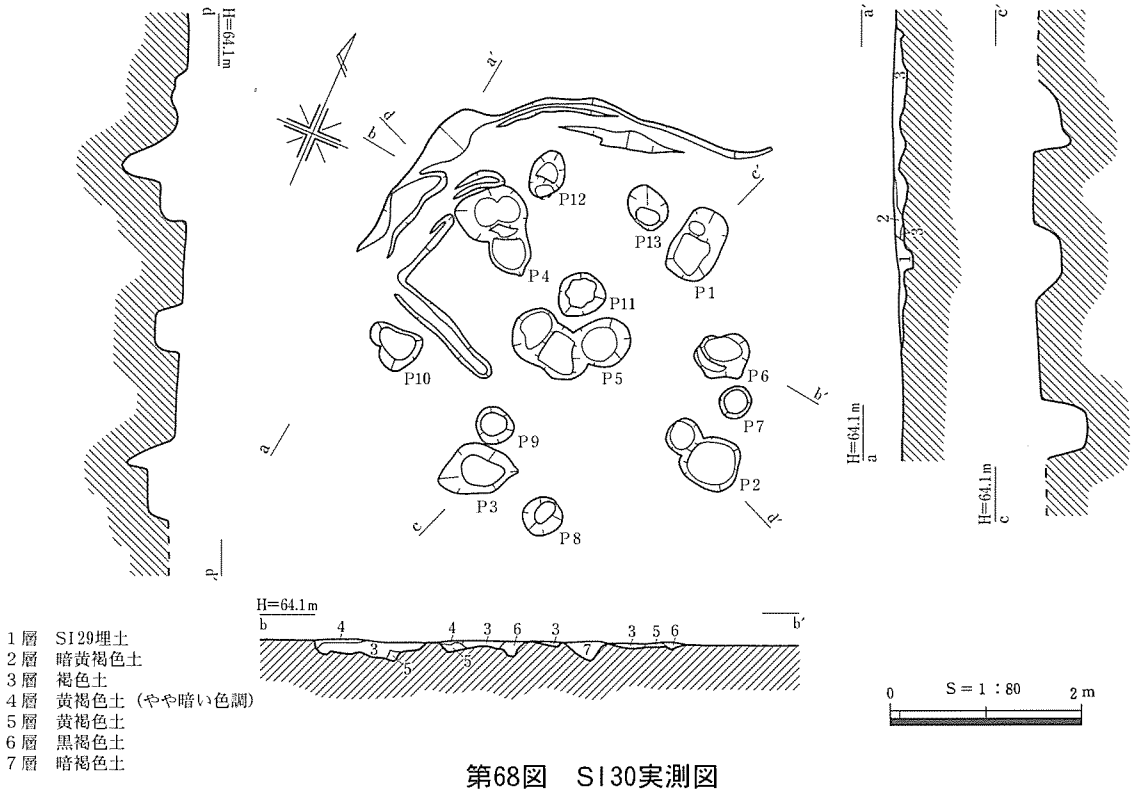
SI30（第68図、PL. 21）

Ｂ８グリッドの北東側、標高63.6～63.8mのゆるやかな斜面に位置する。本遺構は後にSI29に南側を掘り込まれている。埋土は部分的に薄く残ってはいるが、撹乱を受けており遺存状態は良くない。壁面もほとんど残っていないため、平面形及び規模は不明である。黄褐色土を床面としており、検出面から床面までの深さは最も残りのよい西側で17cmを測る。周壁溝は１条検出した。撹乱によりほとんど残っていないが、北西側が部分的に本来の周壁溝の姿をとどめていると思われる。大きさは幅約10cm、床面からの深さは約３cmで、断面形は「U」字状である。このほか、床溝を１条検出した。この溝は南東方向に1.4mのびて収束している。幅は20cm、深さ８cmで、断面形は「U」字状である。

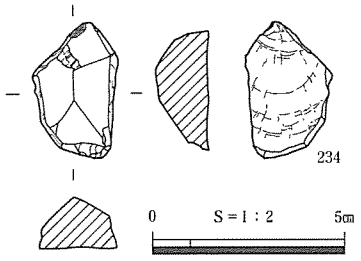
表28　SI30ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	79	47	44
Ｐ２	87	60	27
Ｐ３	83	54	46
Ｐ４	95	41	28
Ｐ５	119	48	29
Ｐ６	56	40	51
Ｐ７	35	32	16
Ｐ８	42	39	54
Ｐ９	41	39	11
Ｐ10	58	41	64
Ｐ11	51	47	14
Ｐ12	50	35	50
Ｐ13	46	37	43

ピットは13基検出した。主柱穴については、位置、深さから考えて、Ｐ１～Ｐ４の４本柱の建物の可能性が考えられる。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間より順に2.3、2.5、2.4、2.0mを測る。



第68図　SI30実測図



第69図　SI30出土水晶剥片

P５は中央ピットとみられる。その他のピットは住居跡に伴うものか定かではない。遺物はほとんど出土していないが、P12の埋土中から水晶の剥片234が出土している。また、細片のため図化していないが、P５とP11の間の床面直上で壺か甕の口縁部が、P５の埋土中からは壺か甕の底部が出土している。

本遺構の年代として、床面直上で出土した土器が清水編年のV－１期に相当することから、弥生時代後期前葉の時期が想定される。このことは、SI29とSI30の層位的関係と矛盾するものではない。（阪上）

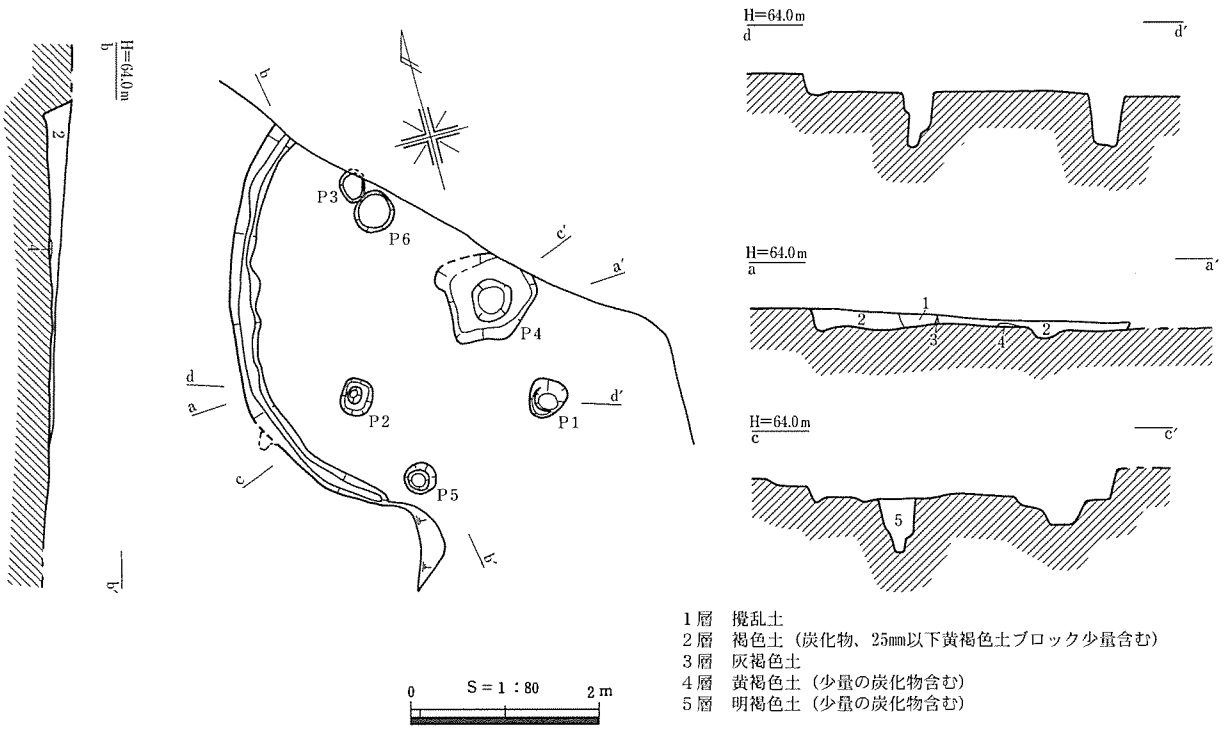
SI31（第70図、PL. 21）

Ａ８グリッド、標高63.5mのゆるやかな斜面に位置する。遺構の北東側は調査区外にのびている。検出状況は比較的西側部分では埋土が残っていたものの調査区境界付近では攪乱を受け、薄く埋土が残る程度で、また東南側の壁面は、既に失われていた。このため、規模は不明であるが、検出した西側の状況から、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。検出面から床面までの深さは最深部で23cmを測る。周壁溝は西側半分のみ確認でき、調査区外も含めて本来は全周していたものであると考えられる。この溝は幅15cm程度、床面からの深さは４cmで、断面形は「U」字状である。ピットは６基検出した。P１とP２は位置的にみて主柱穴の可能性が考えられる。残りは調査区外にあると思われ、４本柱の建物とみられる。

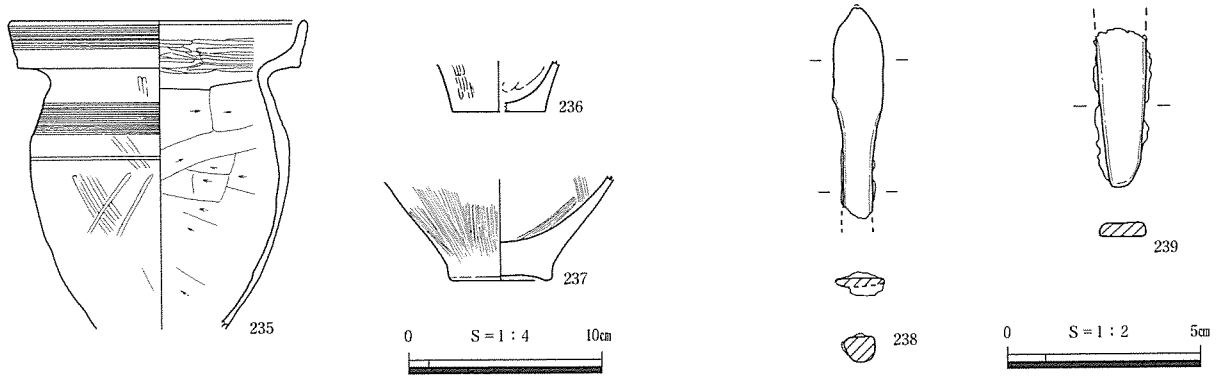
表29　SI31ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	41	34	53
P２	39	32	57
P３	35	27	不明
P４	101	99	29
P５	32	31	45
P６	52	40	3

柱穴間距離はP１－P２間で2.1mを測る。P４は中央



第70図　SI31実測図



第71図　SI31出土遺物　238、239はＳ＝½

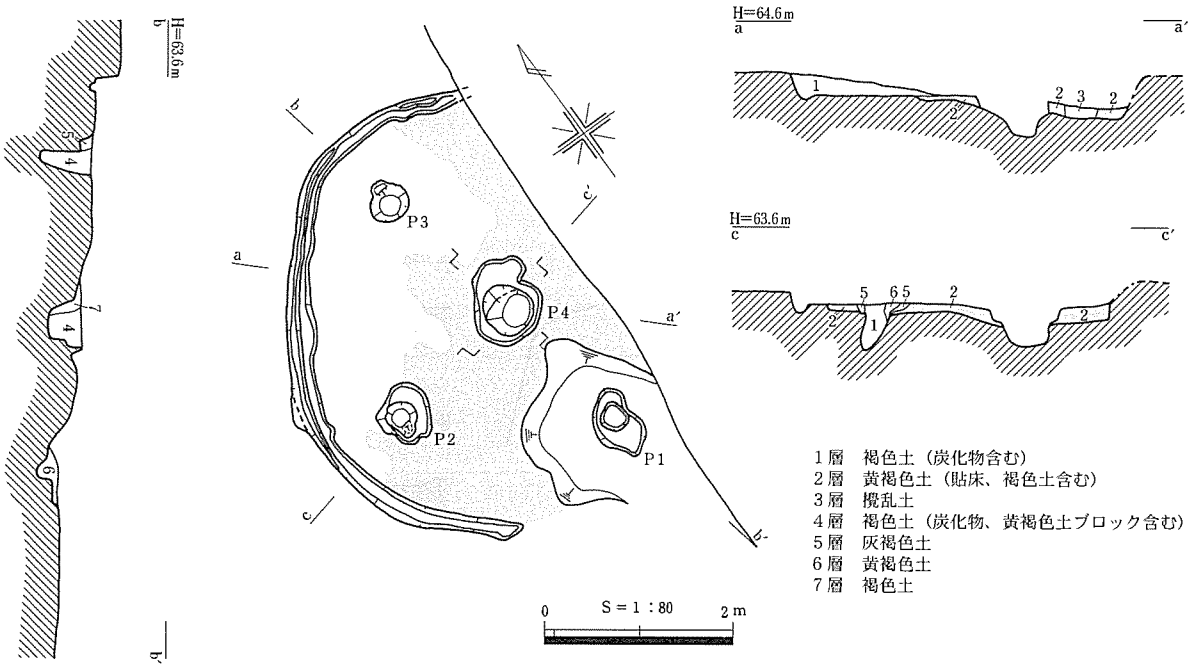
ピットであると考えられ、２段に掘り込まれている。平面形は上段不整円形、下段は円形を呈する。埋土は褐色土の単層で、炭化物を若干含んでいた。

床面上には、調査区外へ続くと考えられる焼土面が１ヶ所調査区際で辛うじて認められた。

遺物については、床面直上のものはみられなかったため、この遺構の時期は確定できないが、埋土中から若干上げ底気味の底部237や甕235が出土している。236の底部に関しては、埋土を切るピットから出土したため、本遺構に伴うものではない。あまり埋土が残っていなかったことから、埋土中出土の土器は下層に相当し、これらの土器が清水編年のＶ－３期に相当することから、この遺構は弥生時代後期後葉の時期と考えられる。　（阪上）

SI32（第72図、PL. 21）

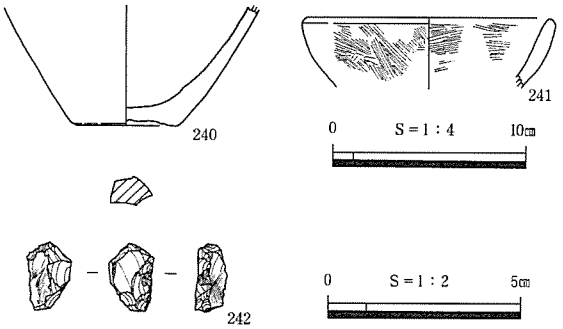
Ａ９グリッド、標高62.8～63.1mの傾斜面に位置する竪穴住居跡で、SI31の南に立地する。遺構の東側は調査区外にのびている。検出状況は西側部分で埋土が残っているものの、南側では埋土が既に



第72図　SI32実測図

表30　SI32ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	77	49	(27)
Ｐ２	59	57	49
Ｐ３	44	43	54
Ｐ４	85	72	41



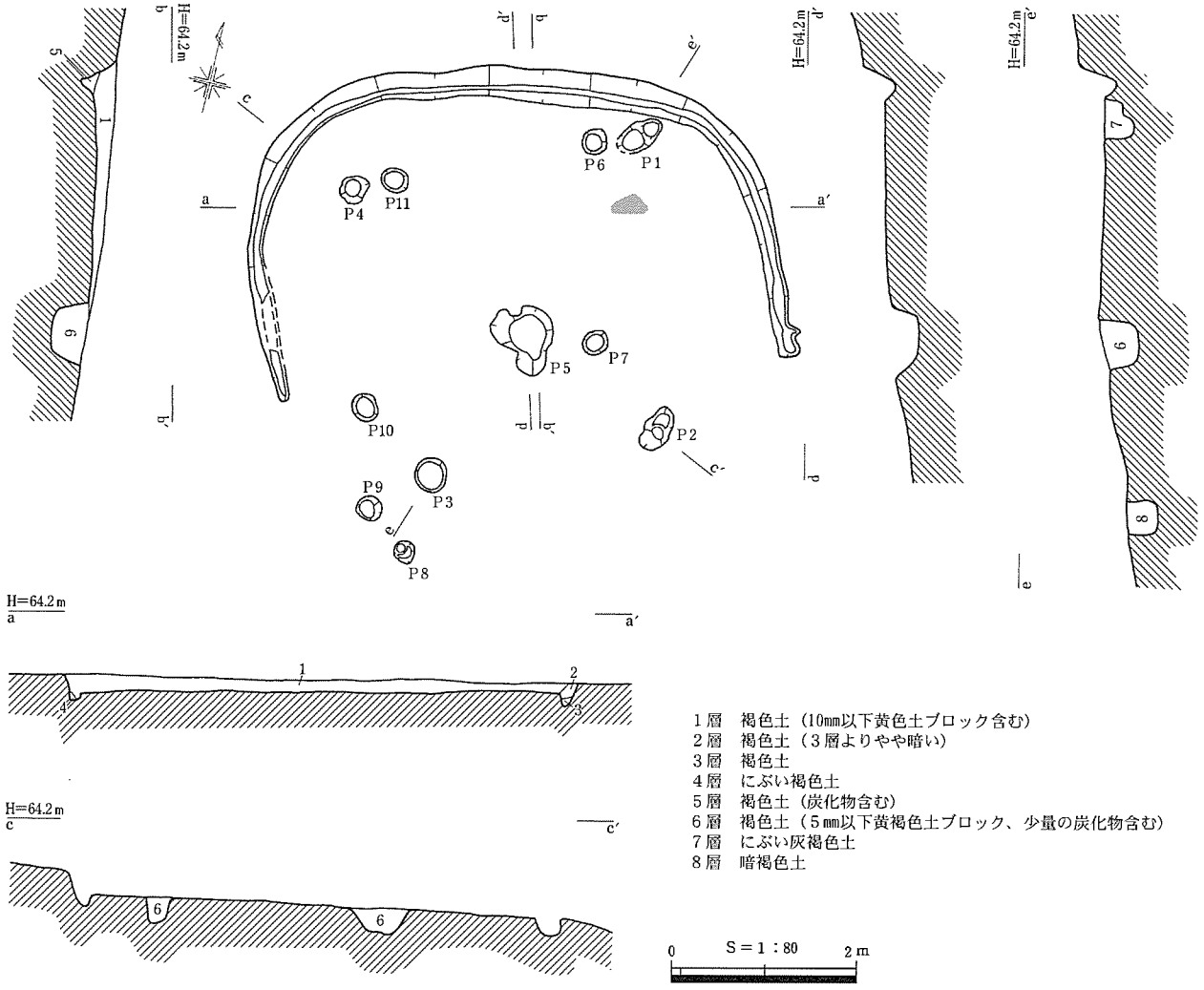
第73図　SI32出土遺物　242のみ　S＝½

失われていた。そのため、正確な規模は不明であるが、検出した西側の状況から、平面形は隅丸方形を呈する一辺が4.5mの住居跡と考えられる。灰白色土を床面としており、北東部および南西部で黄褐色土を主体とした土を15cmの厚さに貼り、貼床としていた。検出面から床面までの深さは北西側で最大22cmを測る。周壁溝は北東側から西側部分のみ検出できたが、本来は全周していたものと考えられる。幅は15cm、検出面からの深さは６cmで、断面形は「U」字状である。

ピットは４基、すべて貼床層上面で検出した。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ３である。柱穴の配列から調査区外にピットの存在が考えられ、４本柱の建物になると思われる。柱穴間距離は2.3mを測る。Ｐ４は中央ピットであり、２段に掘り込まれている。

遺物は、床面直上からの出土はみられなかったが、Ｐ４の埋土中から甕もしくは壺の底部240が出土している。土器以外では、同じＰ４の埋土中から碧玉製勾玉未製品242とみられるものも出土している。当住居跡から出土した玉未製品はこれ１点のみであり、また床面直上からの出土でもないことから、埋土中への流れ込みと考えられる。

この遺構の年代として、Ｐ４から出土した土器は、詳細な時期は不明であるが、清水編年のＶ期の範疇におさまるものとみられることから、弥生時代後期のものと考えられる。　（阪上）

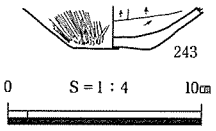


第74図　SI33実測図

SI33（第74図、PL. 22）

Ｃ９グリッドの南西側、標高62.9～63.7mの傾斜面に位置する。本遺構のすぐ南は谷へ下る斜面となっており、立地条件は良いとはいえない。埋土は、北側半分しか残っておらず、遺存状態はあまりよくない。SB６と重複関係にあるが、住居埋土の遺存状況が良好ではないため、両者の新旧関係を層位的に検証することはできなかった。後述するが、出土遺物からみて、SB６が古いと考えられる。住居跡の南側の壁面は既に失われているが、北側の周壁溝の形状から平面形は歪な隅丸方形を呈するものとみられる。

黄褐色土の地山面を床面としており、検出面から床面までの深さは北側で24cmを測る。周壁溝は北側半分のみ検出された。溝は幅15～20cm、床面からの深さは約13cmで断面形は「U」字状である。



第75図　SI33出土土器

表31　SI33ピット表

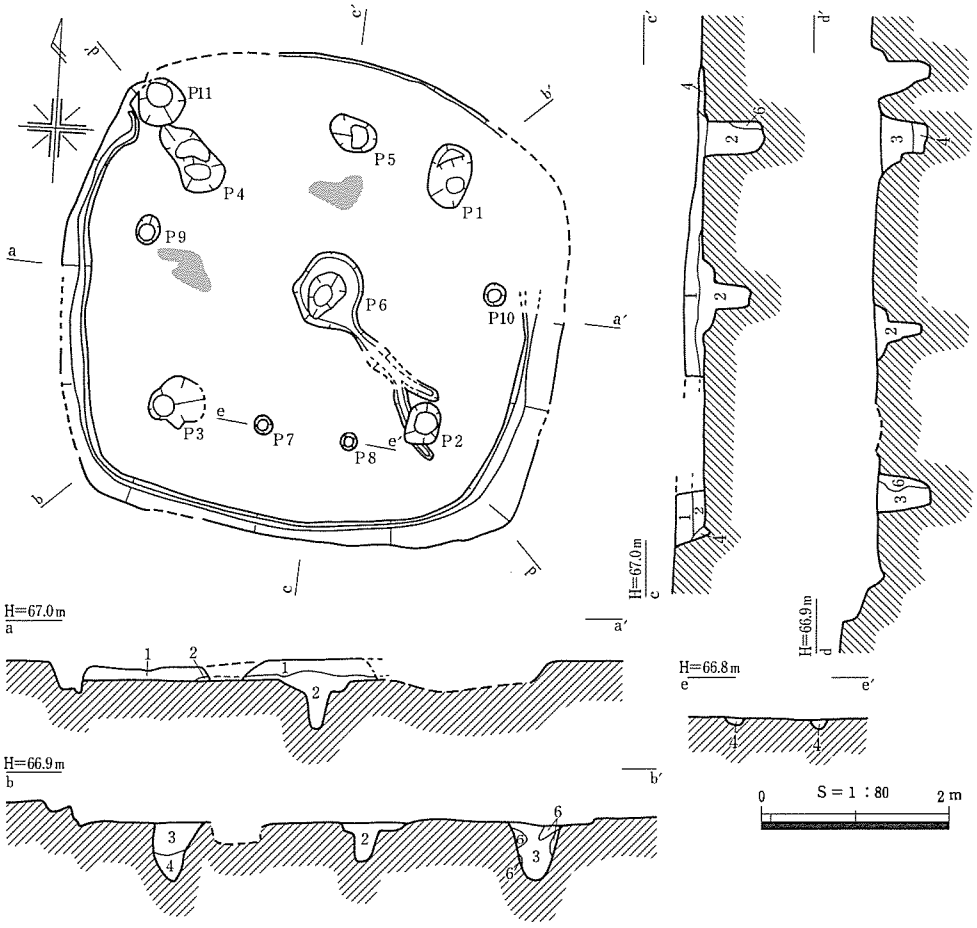
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	55	30	31
Ｐ２	50	28	18
Ｐ３	36	35	36
Ｐ４	35	29	29
Ｐ５	87	67	31
Ｐ６	29	27	55
Ｐ７	28	27	27
Ｐ８	24	20	11
Ｐ９	29	27	10
Ｐ10	32	27	9
Ｐ11	29	27	22

ピットは11基検出した。ピットの配置が不明瞭なため、主柱穴は判然としない。中には本遺構とは時期を異にするものも含むと思われる。配置からＰ１からＰ４が主柱穴と考えられ、柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間より順に3.3、2.6、3.4、3.2mを測る。Ｐ５は中央ピットである。このほか、床面上のＰ１の南側で焼土面を検出した。

出土遺物としては、Ｐ７西側の床面直上で甕の底部243が出土した。底部が縮小し、若干上げ底気味で外面にススが付着している。この土器が清水編年のＶ－３期に相当することから、この遺構は弥生時代後期後葉の時期と考えられる。（阪上）

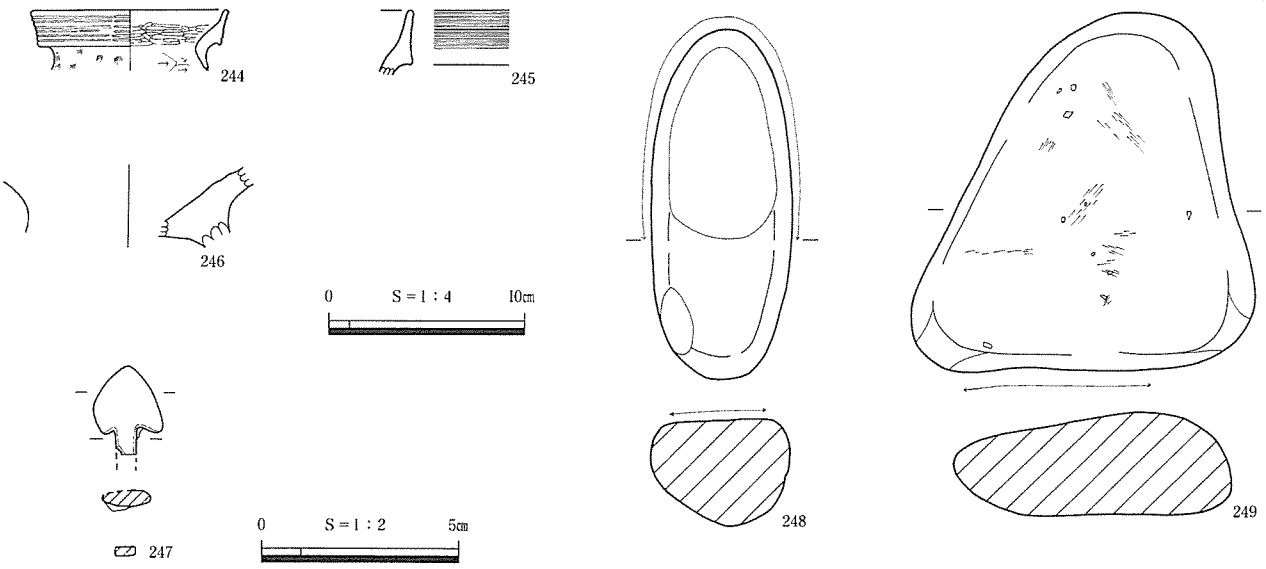
SI34（第76図、PL. 22）

H17グリッドに位置し、標高約66.6mの平坦部に立地する。東側の一部分をSD１に切られる。北東側は遺存状態が悪く、壁面は残っていなかった。南側は比較的埋土も残っており、検出面から床面までの深さは32cmで、埋土は主に２層である。炭化物と土器の小片を含んでいる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸方形を呈し、一辺が約４mである。床面は平坦で、ホーキ層をそのまま床面としている。周壁溝は北東部分を除いた全てを検出した。大きさは幅10cm、床面からの深さは５cm、断面形は「U」字状である。本来は全周していたと思われる。



1層　暗褐色土（砂粒、ホーキブロック、炭化物少量含み、しまり強）
2層　暗褐色土（砂粒、炭化物少量含み、しまり強）
3層　暗褐色土（ホーキブロック、炭化物を少量含み、しまり強）
4層　暗褐色土（しまり強）
5層　褐色土（しまり強）
6層　暗褐色土（砂粒、ホーキブロック多く含み、しまり強）

第76図　SI34実測図



第77図　SI34出土遺物　247のみ　S＝½

ピットは11基検出した。その内主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４である。柱穴間距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.6m、2.8m、2.5m、2.7mである。Ｐ６は中央ピットである。平面形は楕円形で２段に掘り込まれている。Ｐ６からＰ２に向かって床溝がのびている。途中でSD１に切られて途切れているが、本来は一連のものと考える。Ｐ７、Ｐ８は約90cmの間隔を持って並ぶ径15～17cm、深さ９cmほどの浅いピットである。これらのピットについては、明確にその性格が判断できる状況を確認することができなかった。焼土面はＰ６の北側と西側に１ヶ所ずつ、計２ヶ所検出した。

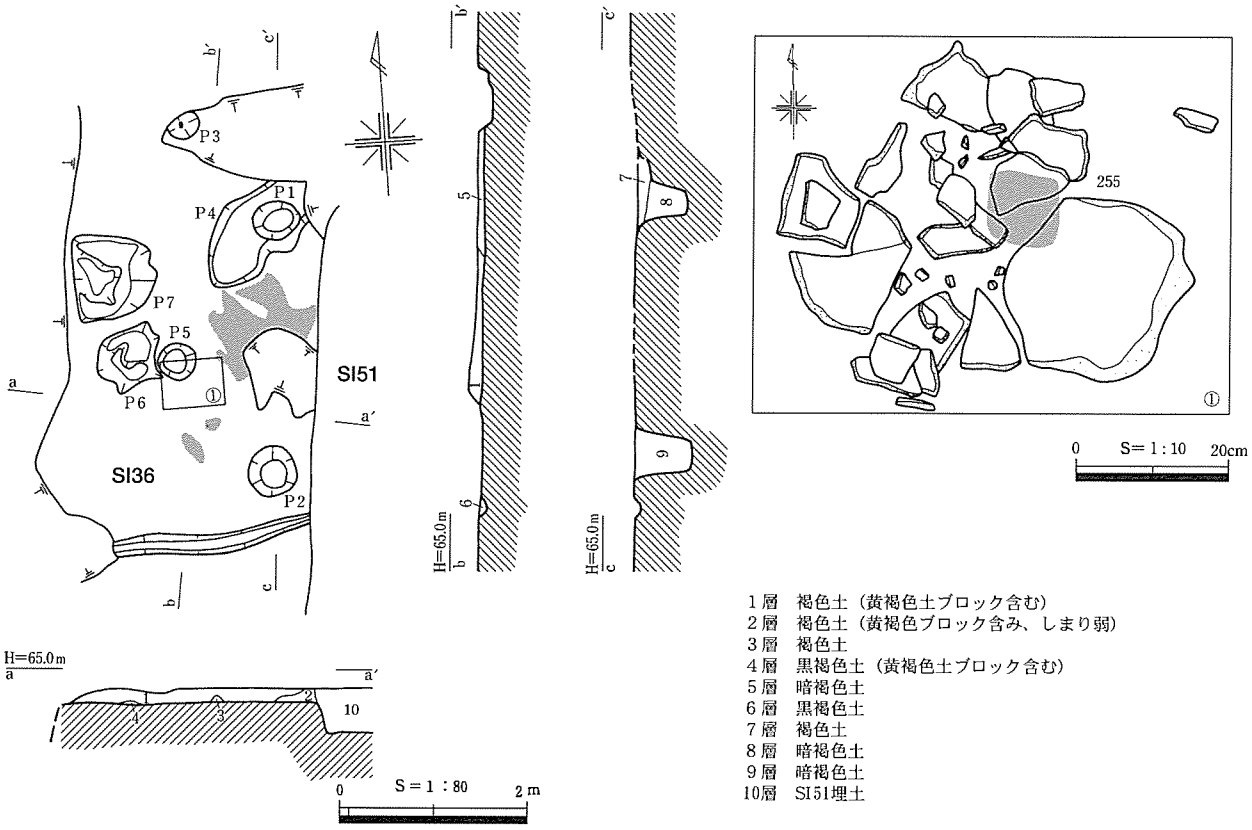
表32　SI34ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	67	44	66
Ｐ２	45	34	50
Ｐ３	(55)	45	62
Ｐ４	87	42	51
Ｐ５	52	34	65
Ｐ６	82	65	51
Ｐ７	17	17	9
Ｐ８	14	14	9
Ｐ９	23	23	22
Ｐ10	22	22	16
Ｐ11	50	50	52

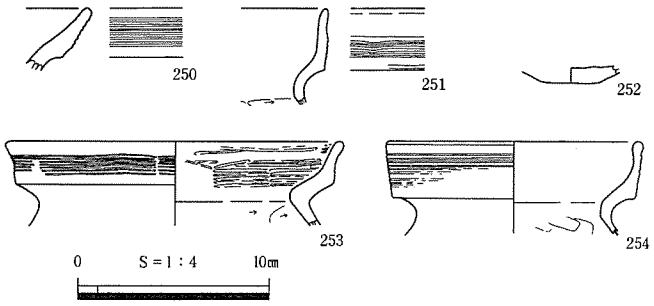
遺物はＰ５とＰ６から、それぞれ甕の口縁部244、245が出土している。いずれも清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉に相当する。これは本遺構の時期を示すものと考えられ、SI16との層位的関係と矛盾しない。（淺田）

SI36（第78図、PL. 23）

Ｊ11・12グリッド、標高およそ64.8mに位置し、SI51に掘り込まれている。本住居跡は東側をSI51に削平され、西側は調査区外で土取りによる削平を受けているため、遺存状態は良くなかった。また南側においても、表土下はすぐ床面となり埋土等は削平されている。本住居跡で確認できたものとしては南側の周壁溝の一部と焼土面３ヶ所、ピットなどである。ピットは、柱穴と考えられるものとして、現況の住居東側で南北に２基、Ｐ１・２が認められた。また、Ｐ６は中央ピットにあたる可能性がある。以上のような遺存状況であったが、床面付近から出土した255の壺破片内面には、壺の破片よりも2.5cmほど高い地点で焼土が認められた。このことや埋土に炭化物や焼土が含まれる層があることから本住居は焼失住居であった可能性もある。出土遺物であるが、床面直上から出土した255は肩部から底部にかけての壺で、肩部外面に平行沈線文を３条、その間に２条の波状文が施されている。



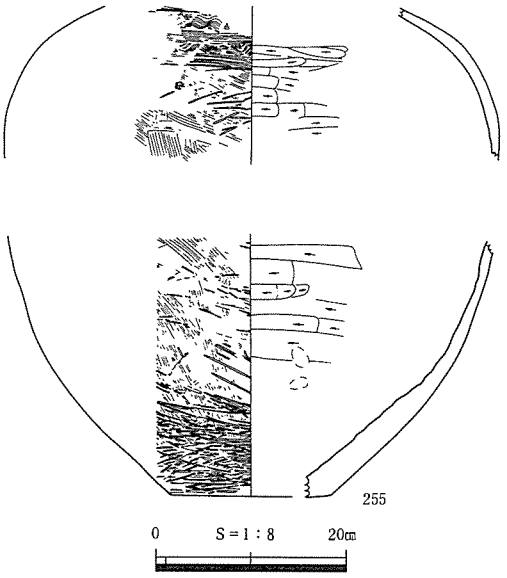
第78図　SI36実測図



第79図　SI36出土土器（1）

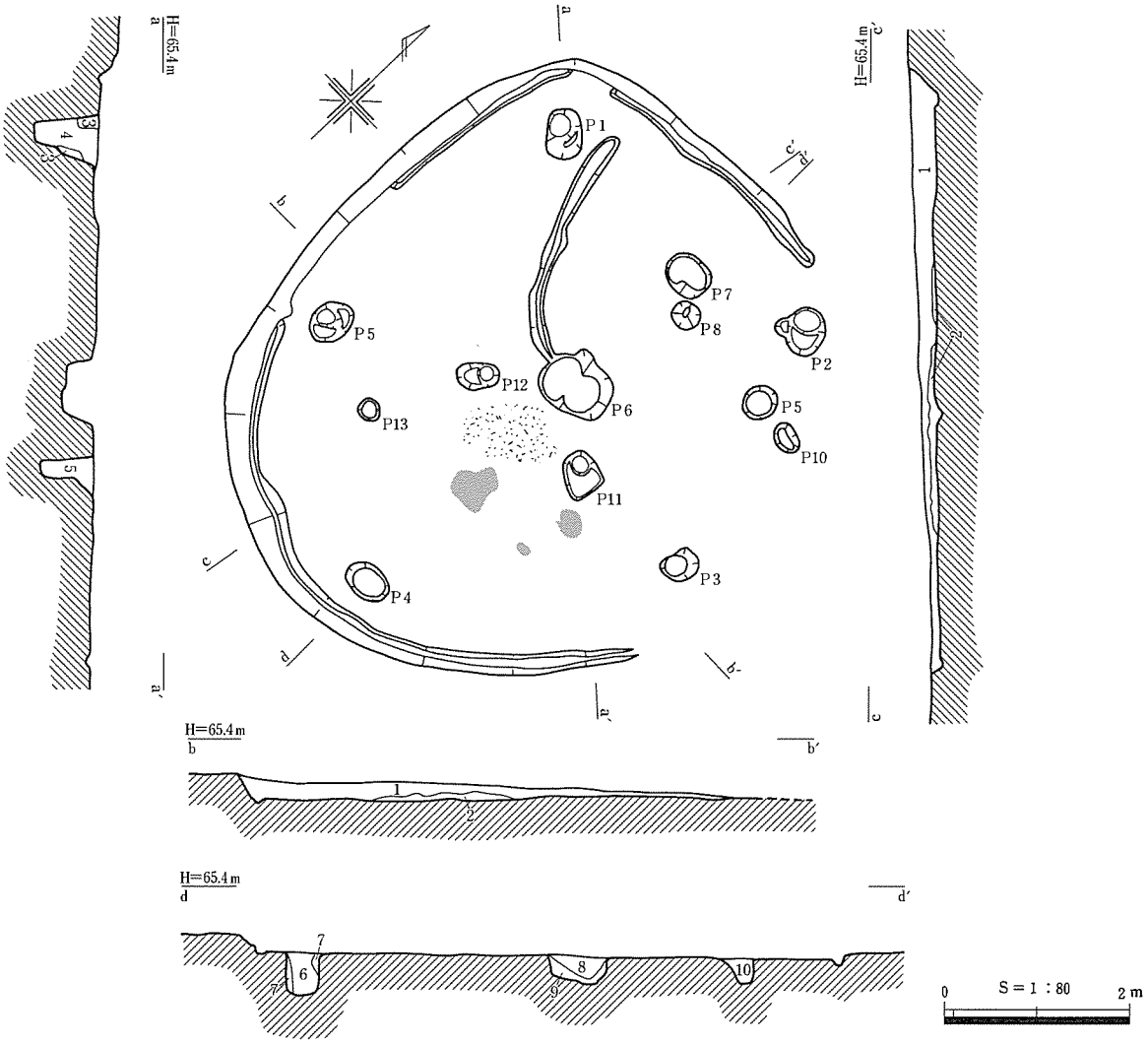
表33　SI36ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	48	42	2
P 2	54	49	58
P 3	38	24	33
P 4	(148)	62	12
P 5	39	39	24
P 6	76	55	36
P 7	90	87	43



第80図　SI36出土土器（2）

251・253・254は甕の口縁部で外面に平行多条沈線文が施された後、ナデ消しが行われている。250は甕もしくは器台の口縁部の破片である。これらの遺物は清水編年のＶ－３期に相当することから、本遺構は弥生時代後期後葉の時期が考えられる。　（野口）



1層　淡茶褐色土
2層　暗褐色土
3層　褐色土（しまり強）
4層　暗褐色土（10mm大ホーキブロック、炭化物少量含む）
5層　暗褐色土（炭化物わずかに含み、しまり強）
6層　暗褐色土
7層　褐色土（しまり強）
8層　暗褐色土（10mm大ホーキブロック、炭化物少量含む）
9層　灰褐色土（20mm大ホーキブロック少量含み、しまり強）
10層　暗褐色土

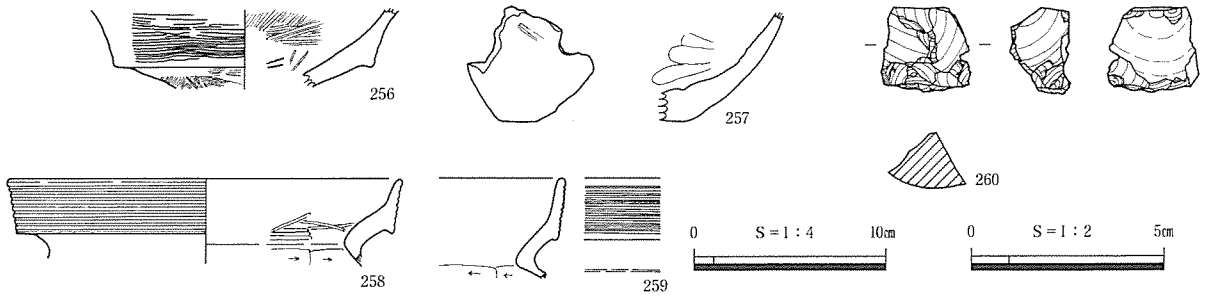
第81図　SI37実測図

SI37（第81図、PL. 23）

G14グリッドの台地縁辺部にあり、緩斜面に立地する。埋土は淡茶褐色土が主体を占め、床面直上には部分的に暗褐色土が堆積する。東半部は埋土と共に東壁も既に失われ、床面の高さよりも低く削られていた。南壁は35cmほど遺存する。規模は長軸6.6m、短軸6.4mである。平面形はやや歪ではあるが、不整な五角形とみられる。検出したピットは13基で、うちＰ１～Ｐ５が主柱穴と考えられ、５本柱の竪穴住居跡と考えられる。主柱穴間距離は3.0～3.4mである。Ｐ６は中央ピットであるが、そこからＰ１の方向へ、幅16～23cm、深さ４cmの溝がのびる。溝底は中央ピット側が1.7cm低いが、ほぼ平坦といえる。また中央ピットの南側には炭化物を多く含む黒色土の広

表34　SI37ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	54	38	68
Ｐ２	54	46	46
Ｐ３	42	30	58
Ｐ４	52	34	46
Ｐ５	48	40	58
Ｐ６	80	62	29
Ｐ７	51	43	26
Ｐ８	32	30	62
Ｐ９	39	33	38
Ｐ10	32	22	20
Ｐ11	50	44	57
Ｐ12	46	28	53
Ｐ13	24	21	33

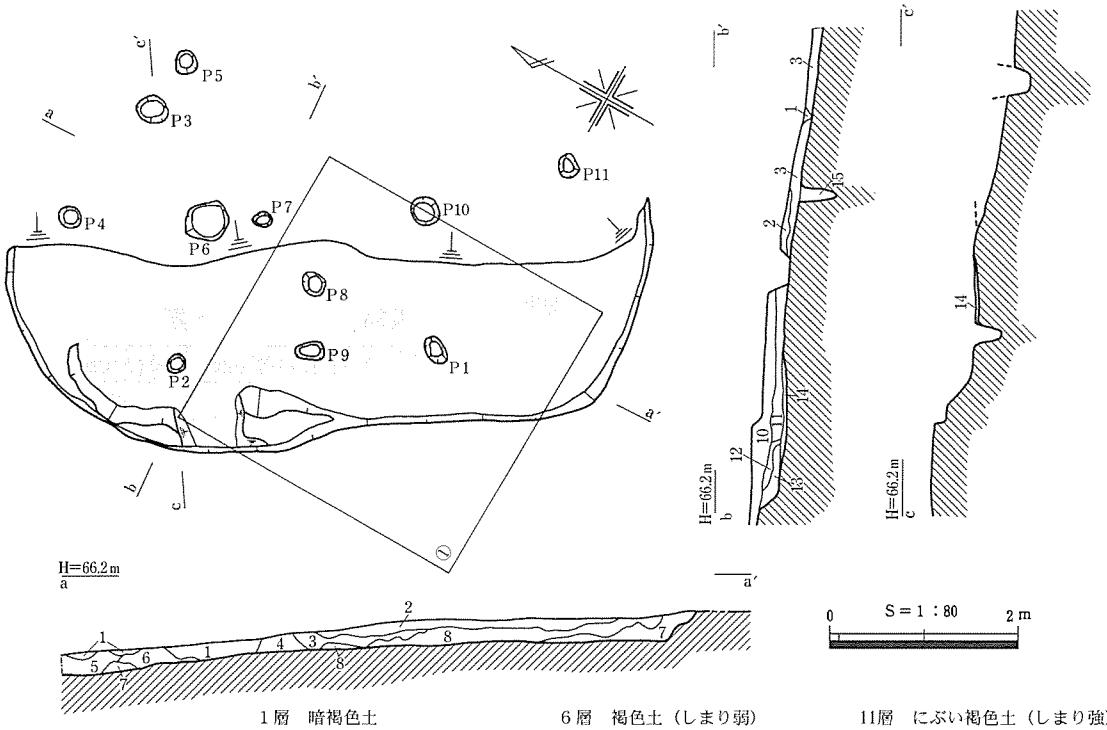


第82図　SI37出土遺物　260のみ　S＝½

がりが認められた。またその東南側には床面にて焼土面が３ヶ所検出された。壁際には部分的に途切れはするが、幅18cm前後、深さが約２cmの周壁溝がめぐる。遺物は弥生土器などが若干出土した。すべて埋土中からの出土である。260は水晶の剥片であるが、１点のみの出土であり埋土中への流れ込みとみられる。256、258、259は甕の口縁部である。口縁部は直立ないしは外傾し、外面には平行多条沈線文を施した後、一部に横ナデを施す。これらの土器は、清水編年のＶ－３期に該当することから、当住居跡は弥生時代後期後葉のものとみられる。　（小山）

SI38（第83図、PL. 24）

E19グリッドの標高65.5mの斜面部に立地する。この周囲は地山直上に厚さ約10cmの暗黄褐色土が堆積する。これは無遺物層であり、古い時期の流土とみられる。遺構検出面はこの流土の上面である。東側は土の流出により既に失われ、床面よりも低くなる。西壁は比較的良好に残り、壁高は南隅で32cmを測る。



1層　暗褐色土
2層　褐色土（しまりやや弱）
3層　黒褐色土
4層　褐色土
5層　褐色土（しまり弱）
6層　褐色土（しまり弱）
7層　暗黄褐色土
8層　褐色土（しまり強）
9層　にぶい褐色土（しまり強）
10層　褐色土
11層　にぶい褐色土（しまり強）
12層　にぶい褐色土（しまり強）
13層　褐色土
14層　にぶい褐色土（貼床）
15層　にぶい褐色土

第83図　SI38実測図

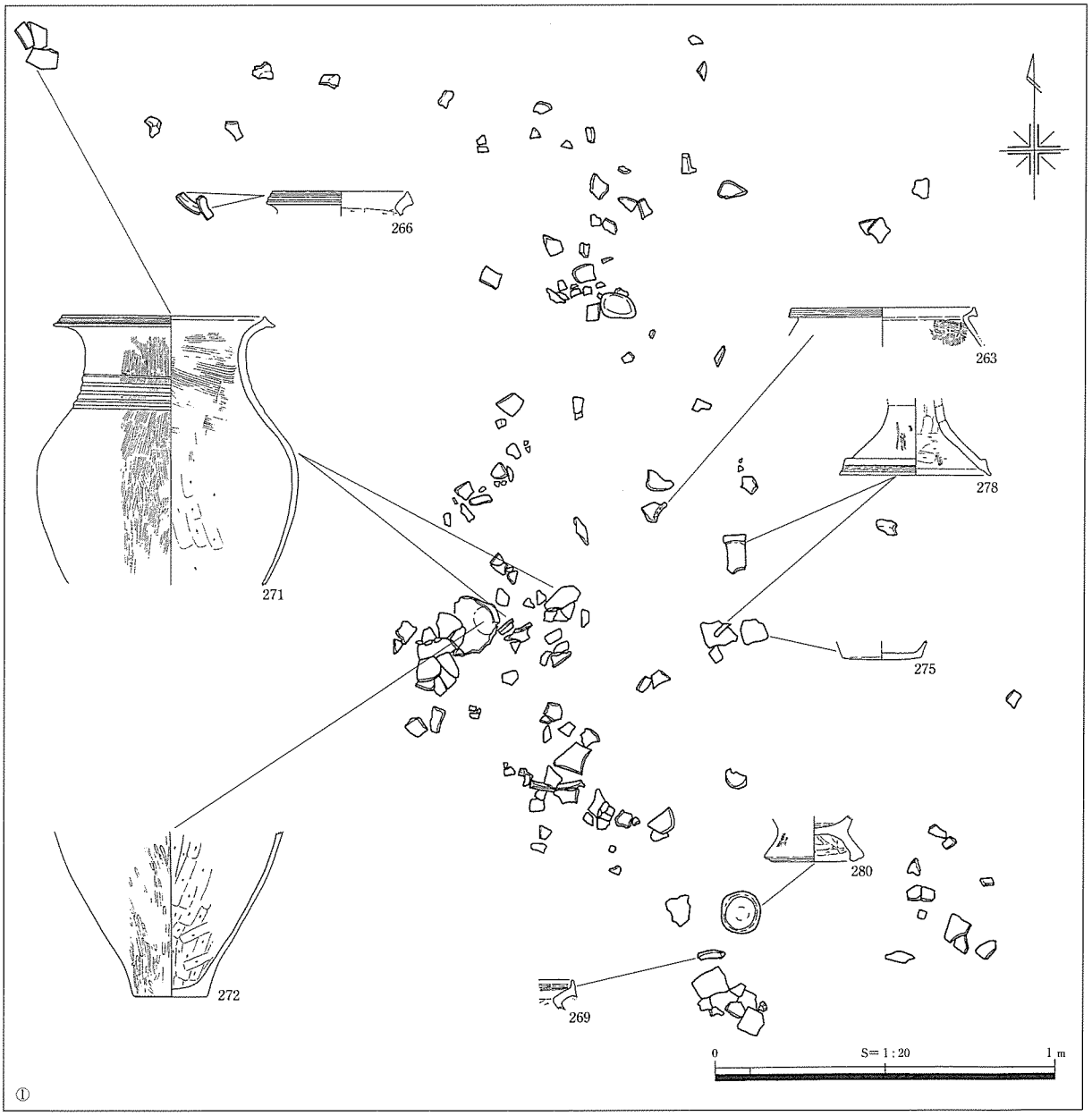
平面形は不整形な隅丸方形を呈し、段状遺構の可能性もある。ここでは東側が土の流出により失われたものとみて、竪穴住居跡と考えておく。

住居跡の規模・平面形は一辺が6.6mの隅丸方形を呈する。埋土の堆積は、高所側にあたる南から褐色系の土が流入して埋没したものとみられる。床面にてピットを11基ほど検出したが、いずれも小規模で、配置も不規則であり、主柱穴は明確ではない。床面の一部は貼床が施されていた。床面からの土器の出土はないが、床面から約10cm前後高い位置で比較的多量の弥生土器が出土した。

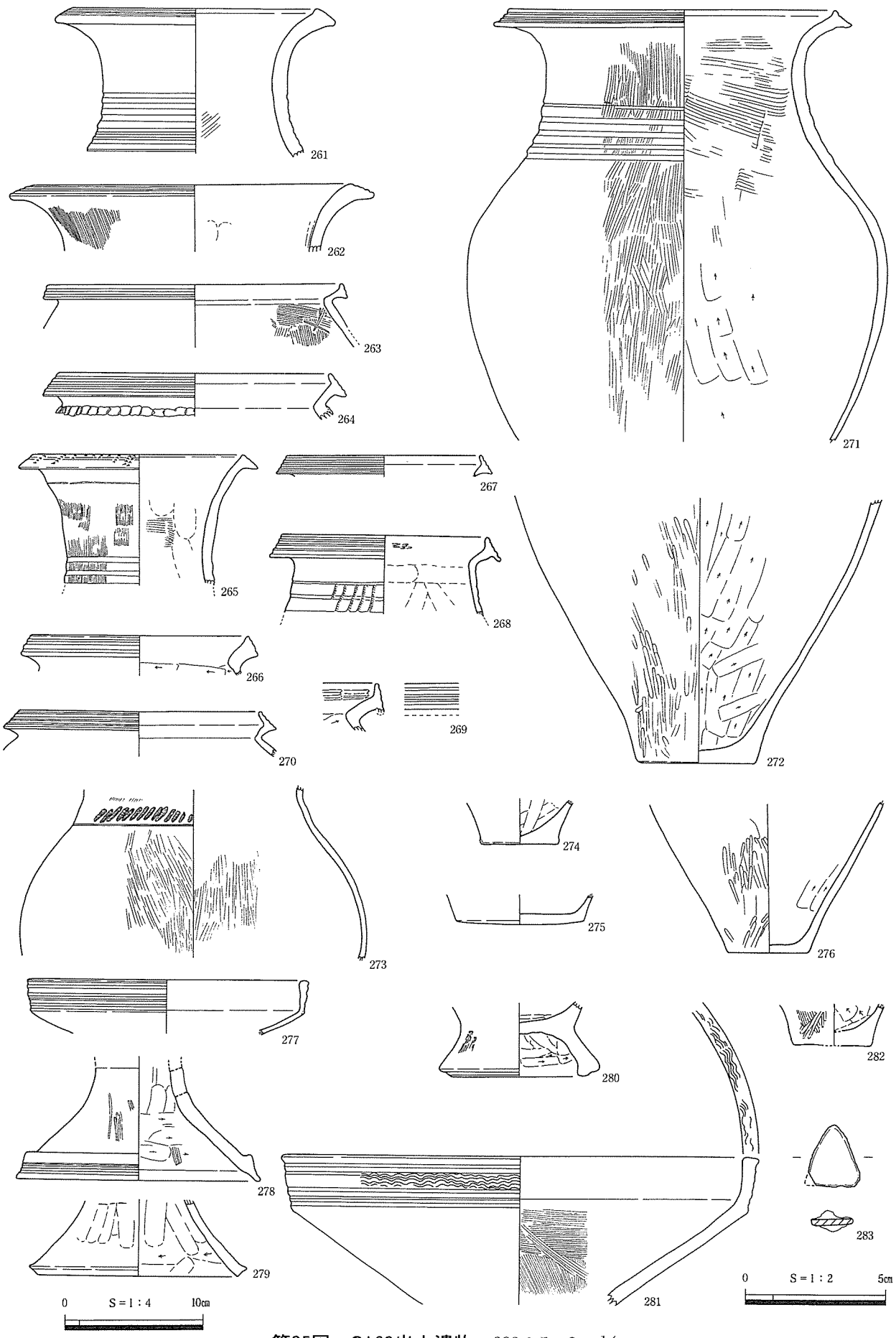
このうち271と272の壺は、接合関係にはないものの、

表35　SI38ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	30	20	40
P 2	19	18	28
P 3	32	27	(24)
P 4	24	22	(55)
P 5	25	23	(67)
P 6	46	42	(10)
P 7	20	17	(47)
P 8	25	23	41
P 9	30	20	53
P10	31	28	(50)
P11	28	18	(18)



第84図　SI38土器出土状況図



第85図　SI38出土遺物　283のみ　S＝½

共に外面に煤の付着がみられ、調整手法も一致することから、同一個体の可能性がある。出土した土器の中には、一部に弥生時代後期に下るものも含むが微量であることから混入品と考えられる。大半の土器は清水編年のⅣ－２期の範疇でとらえられる。283は三角形の板状の鉄製品である。鉄器製作に伴う端切れの可能性も考えられる。当住居跡は床面直上の遺物を欠くが、出土した土器の大半が、弥生時代中期末に一括廃棄されたものと考えられることから、これに近い時期とみられる。（小山）

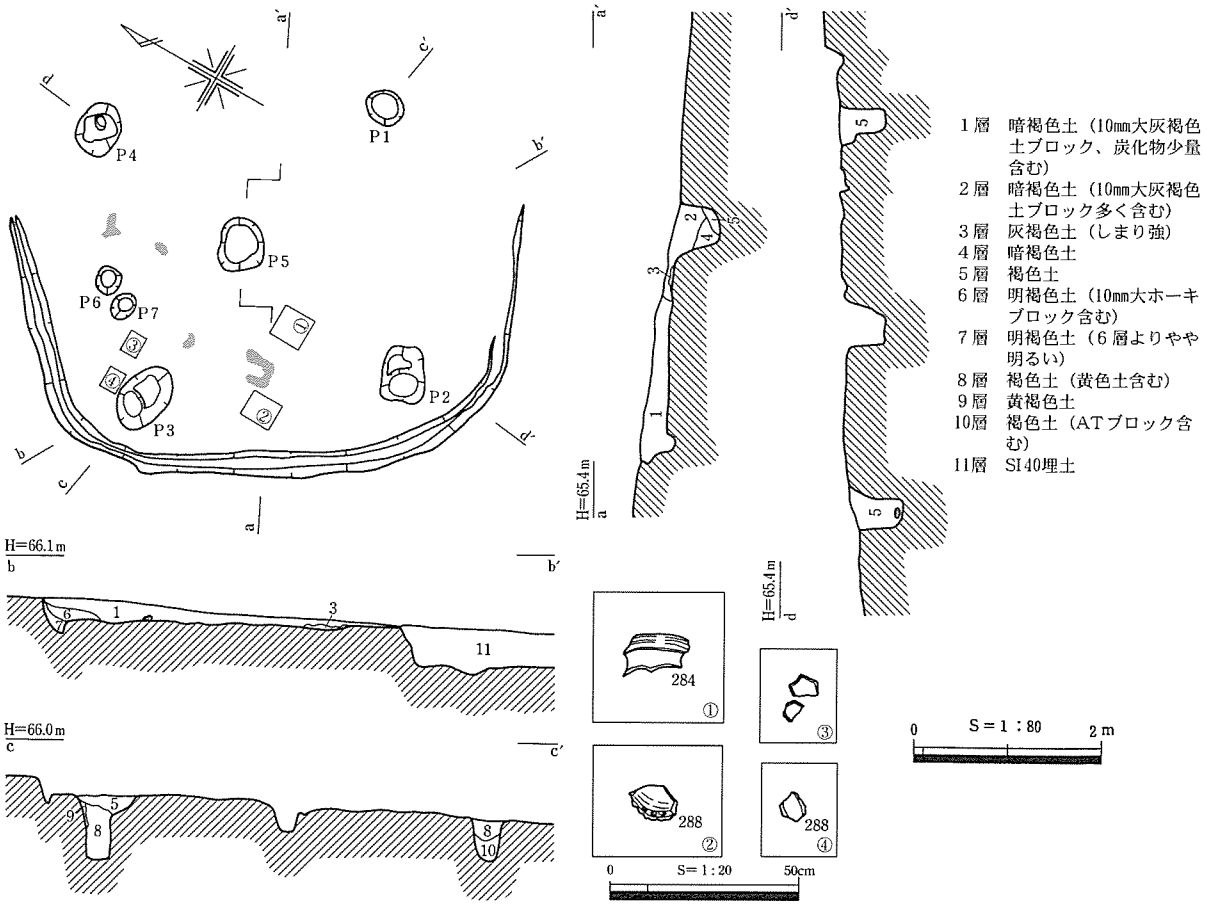
SI39（第86図、PL. 24）

F17グリッドに位置し、標高約66mの、南西から北東に向かって下降する緩斜面に立地する。遺存状態は悪く、東側半分は谷部の侵食のため無くなっている。東南側はSI40の埋土を掘り込んで構築されていた。最も残りの良い西側部分で、検出面から床面までの深さは29cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。床面及び周壁溝は西側半分のみ検出できた。ホーキ層をそのまま床面としている。周壁溝の大きさは幅26cm、床面からの深さは７cmで、断面形は「U」字状である。住居跡の平面形は周壁溝の形から、隅丸方形と思われる。

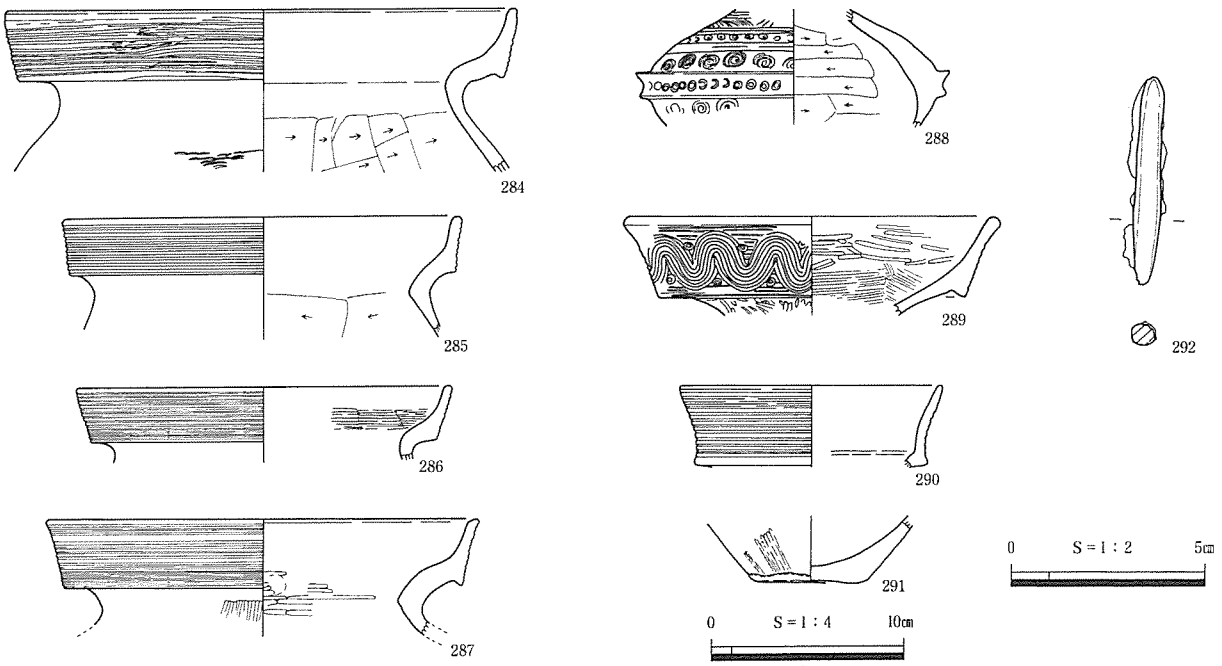
遺物は、Ｐ３から器台の受部289、Ｐ５から甕の口縁部290、床面付近から甕の口縁部284、装飾壺の胴部288が出土している。埋土下層からは甕の口縁部285、286、287が出土している。これらはいずれも清水編年のＶ－３期、

表36　SI39ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40	36	51
Ｐ２	59	45	62
Ｐ３	74	49	74
Ｐ４	57	44	59
Ｐ５	55	48	51
Ｐ６	29	26	24
Ｐ７	30	23	19

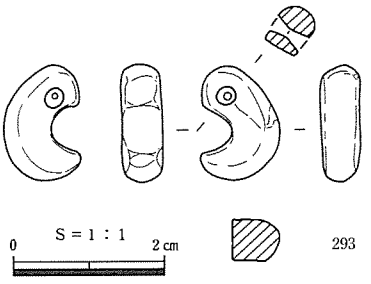


第86図　SI39実測図



第87図　SI39出土遺物　292のみ　S＝½

弥生時代後期後葉に相当する。遺物の中で288は、類似したものが淀江町妻木晩田遺跡、青谷町青谷上寺地遺跡、東伯町水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡から出土している。妻木晩田遺跡のものは包含層中からの出土であり、明確な時期決定がなされていない。青谷上寺地遺跡においては、溝に伴って出土しているものがあり、弥生時代後期初頭～後葉とされている。水溜り・駕籠据場遺跡では、住居内の出土であるが、出土層位が不明なため、所属時期は不明である。また大峰遺跡ではトレンチ調査で出土しており、遺構に伴うものかは不明で、明確な時期決定がなされていない。装飾壺は墳墓からの出土例はよくみられるが、今回のように住居跡に伴って出土するのはきわめてまれである。本遺構においては床面付近の出土であり、他の床面出土遺物との比較から、清水編年Ｖ－３期と判断した。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。　（淺田）



第88図　SI40出土ヒスイ製勾玉

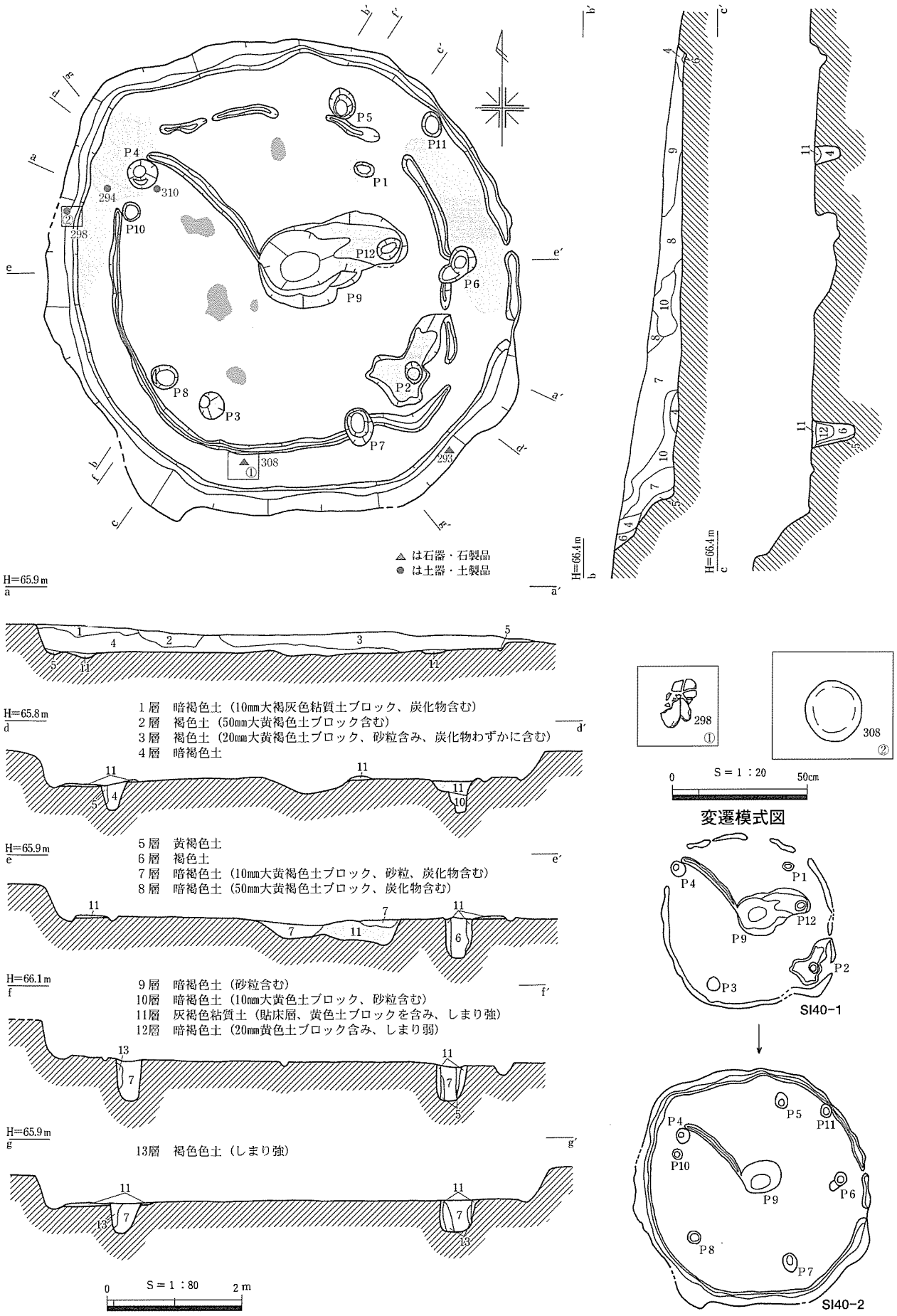
SI40（第89図、PL. 25）

Ｆ17～Ｆ18グリッドに位置し、標高約65mの、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。北西側をSI39に切られる。本遺構は１回の拡張があり、古いものからSI40－１、SI40－２として記述することにする。

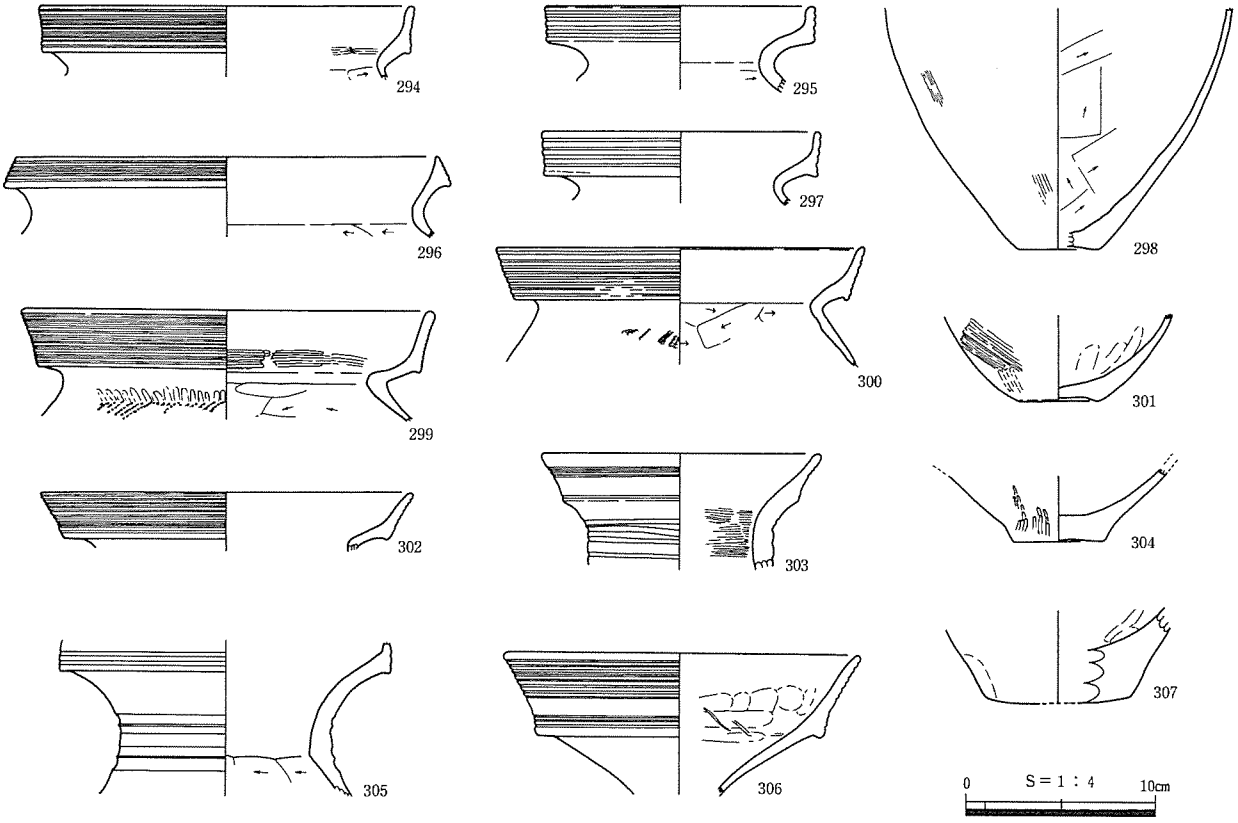
表37　SI40ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	29	22	38
Ｐ２	30	25	48
Ｐ３	38	38	62
Ｐ４	46	43	49
Ｐ５	37	44	55
Ｐ６	55	25	79
Ｐ７	55	40	43
Ｐ８	41	36	61
Ｐ９	121	90	22
Ｐ10	27	27	11
Ｐ11	38	30	51
Ｐ12	40	28	7

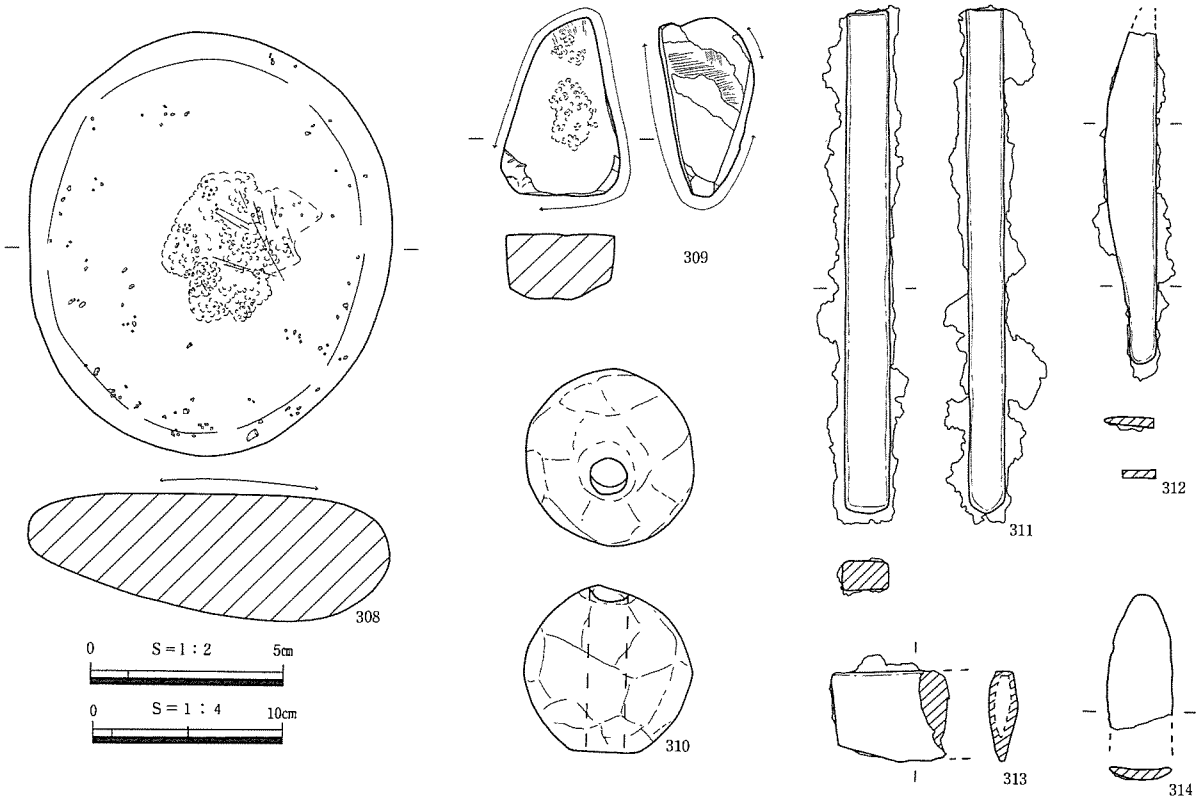
SI40－１　拡張後の床面上で検出した。部分的に拡張後は貼床が施されており、貼床除去後にもピット及び周壁溝の一部を検出した。平面形は周壁溝の形から隅丸方形と思われる。周壁溝の大きさは幅13cm、床面からの



第89図　SI40実測図



第90図　SI40出土土器



第91図　SI40出土遺物　310～314は　S＝½

深さは６㎝、断面は「U」字状である。途中で途切れている部分もあるが、本来は全周していたものと思われる。

ピットは６基検出した。このうち主柱穴はＰ１～Ｐ４である。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３は貼床層除去後に検出した。主柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に3.2m、3.1m、3.6m、3.3mである。Ｐ９は中央ピットであり、貼床層と同じ土で埋め戻されていた。平面形や底面が歪であり、２時期の中央ピットが重複していると考えられる。

P12はＰ９の埋土を除去した後検出した。位置的関係から、支柱穴の可能性が考えられる。

SI40－２　平面形は隅丸五角形である。床面は平坦で全体的に硬化しており、AT層及び白色粘質土層を床面としている。部分的に、AT層と白色粘質土層が混ざった土で貼床が施されていた。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南側で84㎝である。壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。北東側は谷に面しているため侵食が激しく、壁高はわずかに３㎝ほどである。周壁溝はほぼ全体を検出した。大きさは幅14㎝、床面からの深さは５㎝、断面形は「U」字状である。

ピットは８基検出した。主柱穴と考えられるものはＰ４～Ｐ８である。このうち、Ｐ４は拡張前のものを再利用している。主柱穴間の距離はＰ４－Ｐ５、Ｐ５－Ｐ６の順に3.2m、3.0m、2.9m、3.0m、3.1mを測る。Ｐ９は中央ピットで、周囲には周堤がめぐる。これは地山の削り残しによる高まりの上に、貼床と同様の土で盛土されたものである。また、P12は貼床層の土で埋め戻されていたことから、柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。焼土面はＰ９の周囲に６ヶ所確認した。遺物はＰ９から壺の口縁部305、床面直上から甕の口縁部294、甕の底部298が出土している。これらは清水編年Ｖ－３期、弥生時代後期後葉に相当する。埋土中からは勾玉293、棒状鉄器311、刀子と思われる鉄製品312が１点ずつ出土している。これらはいずれも埋土上層から中層のもので、流入物と思われる。勾玉はヒスイ製で、全長15.0㎜、厚さ5.0㎜、重さは1.6ｇである。蛍光Ｘ線による産地同定の結果、糸魚川産という結果が出た。これは、ヒスイの流通を考える上で貴重な資料といえる。

本遺構の時期は床面出土遺物が清水編年のＶ－３期に該当することから、弥生時代後期後葉と考えられる。

（淺田）

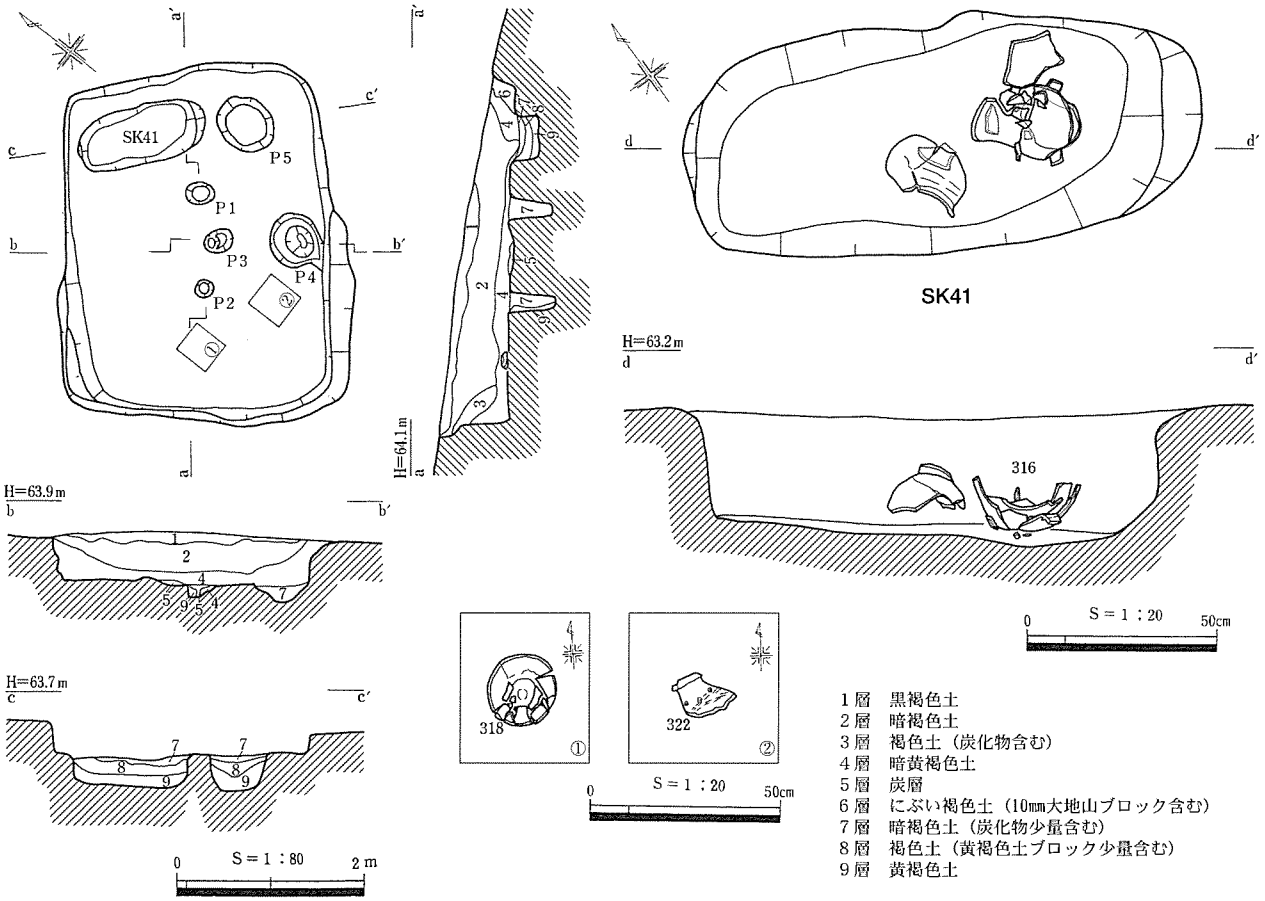
SI41（第92図、PL. 26）

E17グリッドに位置し、標高約62.8mの南西から北東に向かって傾斜する斜面に立地する。北東側は谷の侵食により、埋土が流され壁面の上部が無くなっているが遺存状態は比較的良い。

検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南西側で76㎝、侵食されている北東側で22㎝を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、AT層及び一部白色粘質土層をそのまま床面としている。平面形は方形で、南北約3.7m、東西約2.9mを測る。周壁溝及び焼土面は検出されなかった。ピットを５基、土坑を１基（SK41）検出した。このうち主柱穴はＰ１とＰ２である。主柱穴間の距離は1.0mで、それぞれの壁面からの距離は共に1.3mである。南東側の壁寄りに特殊ピットと考えられるＰ４がある。柱穴間の中央やや東寄りにも、底の浅いピットＰ３がある。北東側の壁寄りにはＰ５がある。Ｐ３、Ｐ５については、その

表38　SI41ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	28	23	44
Ｐ２	19	17	47
Ｐ３	29	23	14
Ｐ４	62	53	20
Ｐ５	64	54	40



第92図　SI41実測図

性格を明確に判断できる状況は確認できなかった。SK41の平面形は楕円形で、規模は長軸137cm、短軸60cmを測る。床面からの深さは最大35cmである。SK41の底面からは、甕316が１個体分出土している。位置的関係から、SK41はSI41に伴う貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は床面直上で高杯の杯部318、床面付近から小型丸底壺の胴部319が出土した。出土した土器は、天神川編年Ｖ期、古墳時代中期初頭に相当することから、本遺構の時期も当該期と考えられる。　（淺田）

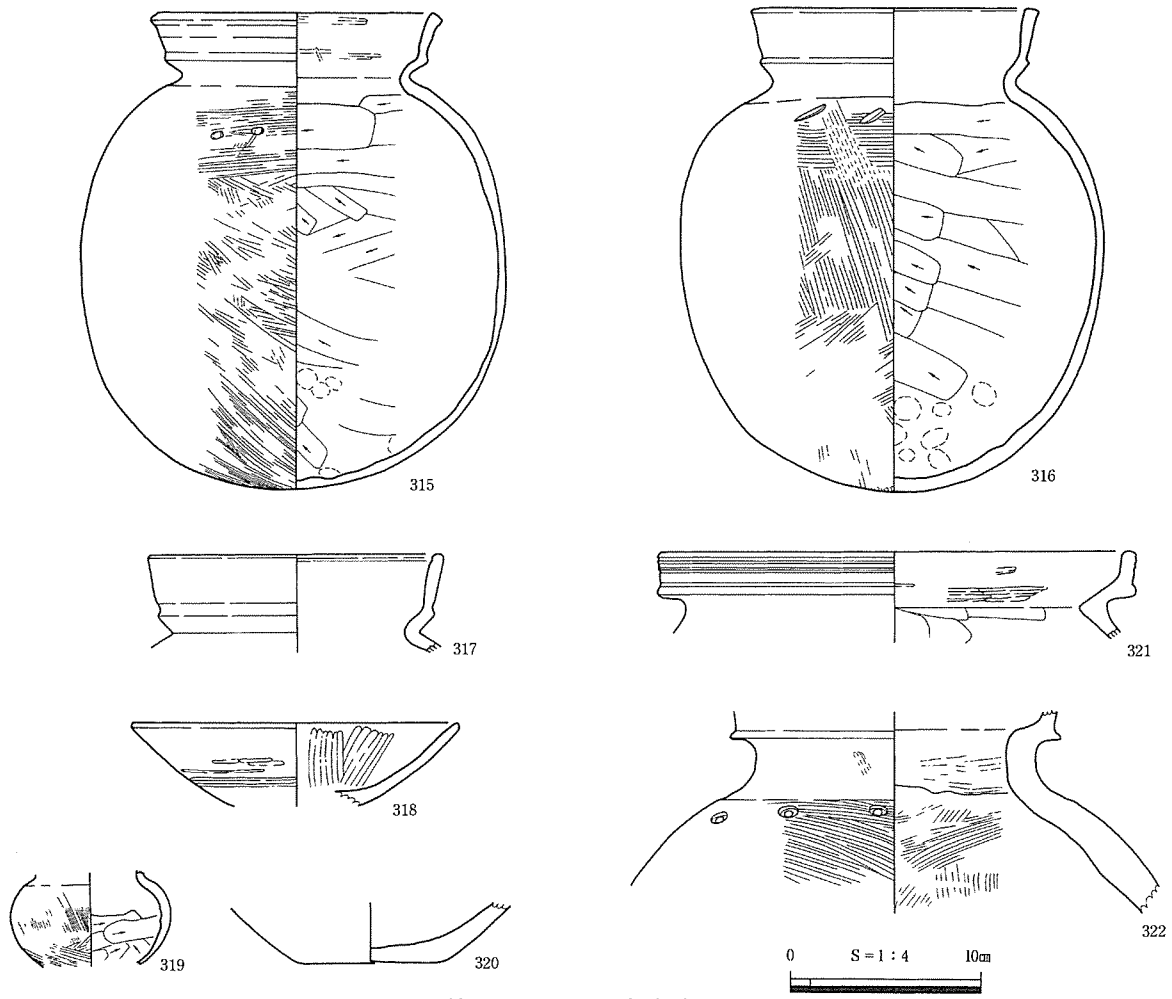
SI42（第94図、PL. 27）

H16グリッド、標高およそ65.8mの高さでホーキ層を検出面とし確認した。北西側には本住居跡を一部掘り込んでSI64が建てられ、南東側には本住居構築に伴い一部削られたSI43が位置する。また遺存状況は検出面から床面までの高さが南側の42cmに比べ、北側は８cmと住居北側部分においては住居上半部をかなり削平されている状況であった。

表39　SI42ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	43	36	61
P 2	63	47	40
P 3	42	32	47
P 4	34	25	53
P 5	50	50	40
P 6	38	30	38
P 7	20	20	24
P 8	31	28	20
P 9	47	34	21
P 10	22	22	14

さて、本住居跡の規模であるが検出面で南北5.6m、東西5.2mを測る。平面形は隅丸方形を呈する。床面は北東隅の一部で２次堆積土である褐色土を床面とするほかは、地山であるホーキ層、AT層を床面とし、床面からはピットが10基確認された。そのうち本住居跡の主柱

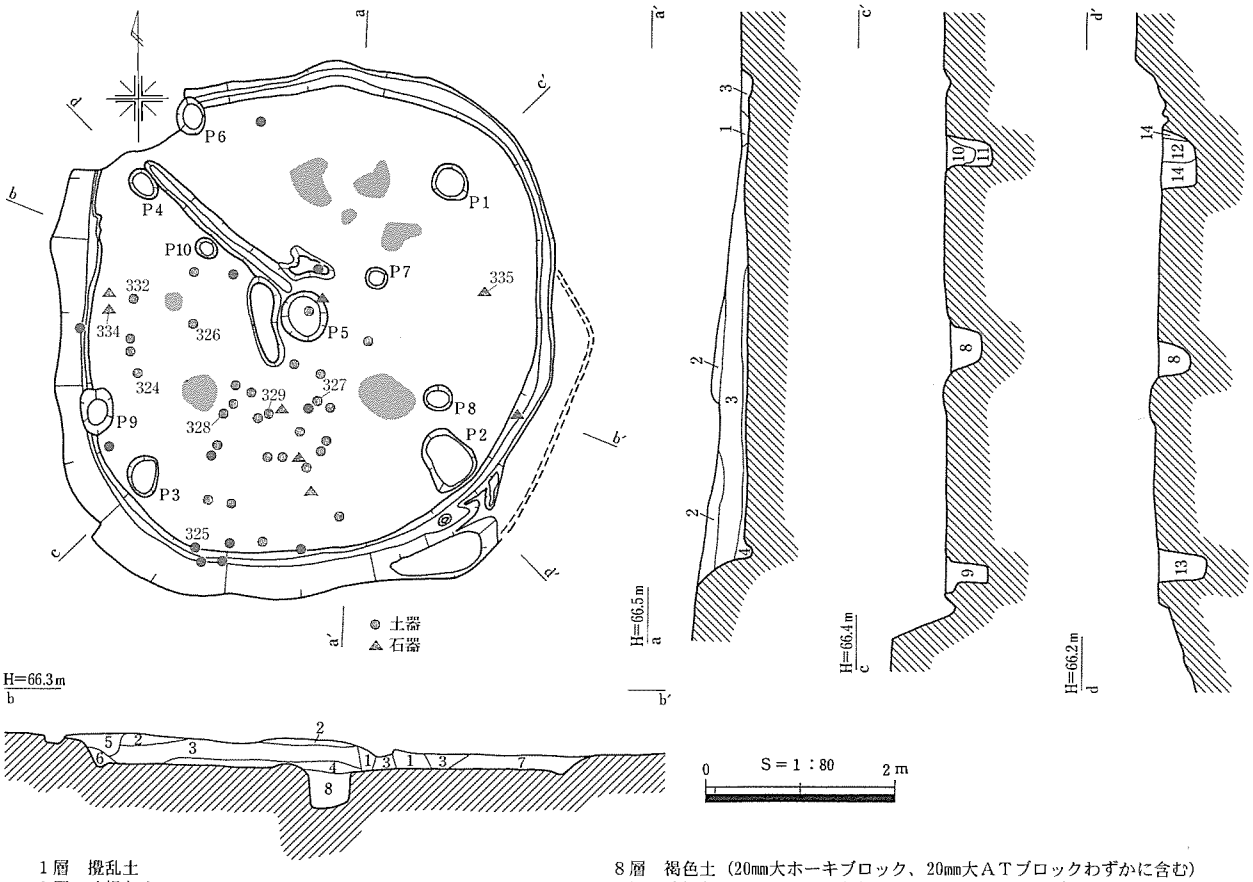


第93図　SI41出土土器

穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４で、Ｐ４が底面の高さを標高64.9mと若干深くするほかは、標高65.0mと高さを揃える。また、床面には焼土面が７ヶ所でみられるほか、中央ピットであるＰ５の北西側にはホーキ層を掘り残して周堤が作られる。周壁溝は住居全体にめぐるが、幅が狭いところで12cm、広いところで28cmを測るなど一定の幅ではない。床溝は幅20cm、深さ５cmほどで中央ピットから北西方向にのびるが、Ｐ４に隣接したところで認められなくなる。出土遺物であるが、床面付近から口縁部を内傾させ、口縁部外面に４条の凹線文、内面にミガキを施した甕323が出土し、埋土下層中にみられた甕326は口縁部を外反させ、外面に施した平行沈線文をナデ消し、肩部には貝殻の腹縁による刻目文が付けられる。また、床面付近からは黒雲母角閃石安山岩の台石334・335や、閃緑岩の磨製石斧333なども出土している。本住居跡の時期は、埋土中からの出土遺物において時期が判別できるものに関しては清水編年のＶ－１～３期に相当する。床面付近出土の323は清水編年のＶ－１期に相当するが、下層出土の324、326、332は清水編年のＶ－３期とみられることから、弥生時代後期後葉に下る可能性が高い。　（野口）

SI43（第96図、PL. 27）

本住居跡はG16グリッド、SI42の東南側に位置する。標高およそ65.6mの高さでホーキ層を検出面とする。住居北西側はSI42と切り合い関係にあり、SI42により住居埋土を掘り込まれている。また、住居南側はSD１により部分的に攪乱を受けているほか、本住居跡が立地する場所は、調査区の



1層　撹乱土
2層　暗褐色土
3層　褐色土（10mm大ホーキブロック、５mm大礫含む）
4層　黒褐色土（炭化物含む）
5層　暗褐色土（５mm大ホーキブロック、５mm大礫含む）
6層　暗褐色土（５mm大ホーキブロック、５mm大炭化物わずかに含む）
7層　褐色土（焼土ブロックわずかに含む）
8層　褐色土（20mm大ホーキブロック、20mm大ＡＴブロックわずかに含む）
9層　暗褐色土（20～30mm白色粘質土、５～10mm大ＡＴブロック、炭化物含む）
10層　暗褐色土（砂粒と３mm大炭化物少量含む）
11層　褐色土（20mm大ホーキブロックわずかに含む）
12層　暗褐色土（10mm大ホーキブロック、10mm大ＡＴブロック、炭化物含む）
13層　暗褐色土（しまり弱）
14層　褐色土（白色粘質土、ATブロック多く含む）

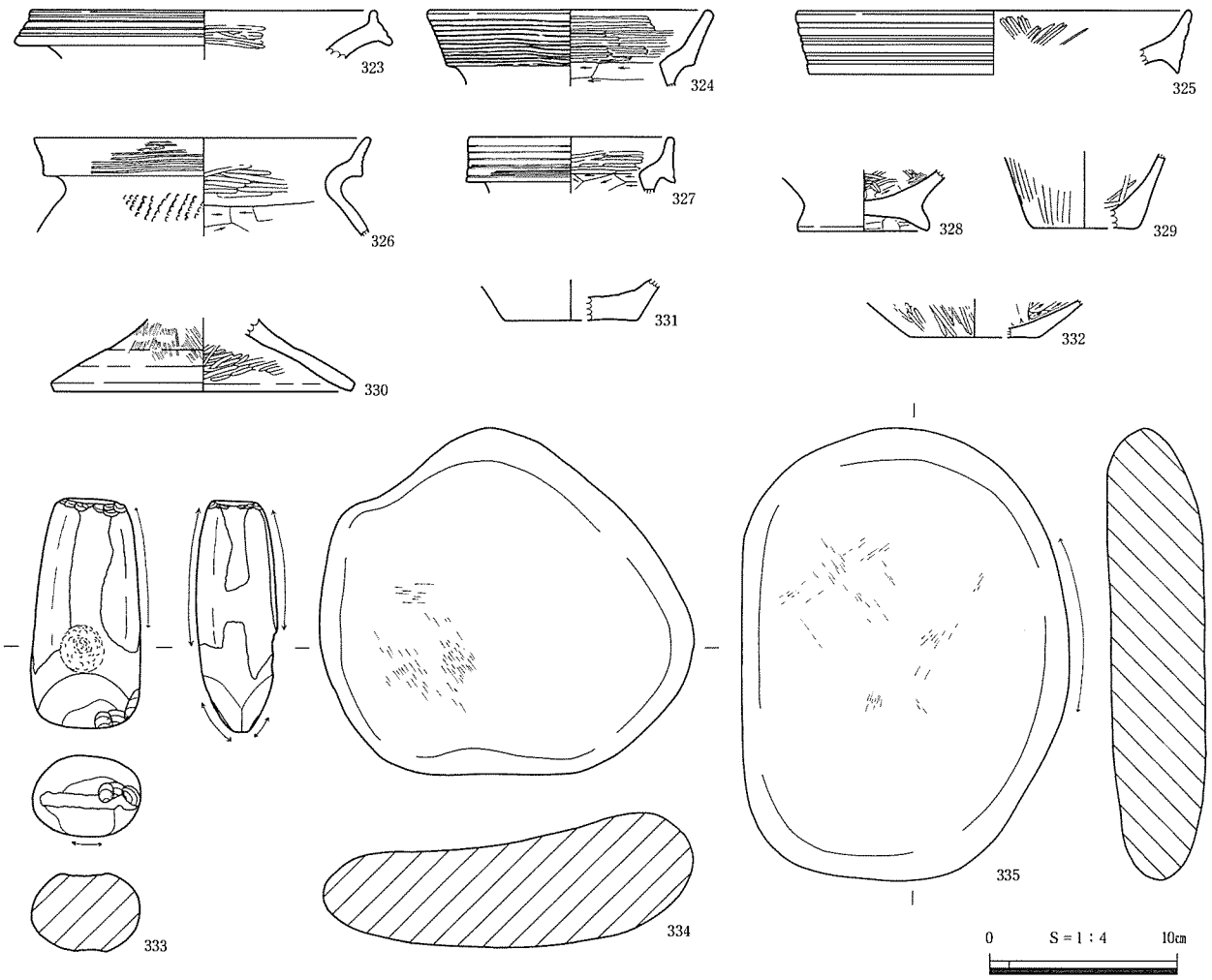
第94図　SI42実測図

東側に入り込む谷に向かって傾斜した地形のため、住居東側部分の住居構造は埋土を含め流失している状況であった。そのため住居東側部分で床面としたものについては後述する本住居跡（以下43－１）内に入子状に存在する住居（以下43－２、43－３）の床面であり、これと同一面を床面としていたかの判別は困難な状況であった。

以上のようにやや煩雑な遺存状況を呈するが、43－１の規模は、東西6.5m、南北7.2mを測る。床面は中央部分が43－２、43－３の床面であるため縁辺部分での確認となるが、地山である白色粘質土層、AT層、ホーキ層を床面とする。43－１の主柱穴としてはＰ１～Ｐ５が考えられるが、Ｐ１・２は43－２の床面での確認であり、Ｐ１に関しては検出面より上位に43－３に伴う焼土が確認されることから、43－１もしくは43－２に伴う可能性が残る。Ｐ２については確認面である43－２の床面が地山であり、遺存状況からは43－１または43－３で利用されていた可能性があるので、確実に43－１に伴うものとは言えない。Ｐ１～Ｐ５が主柱穴として考えられるならば、住居東南部分で周壁溝とＰ２の間隔に開き

表40　SI43ピット表

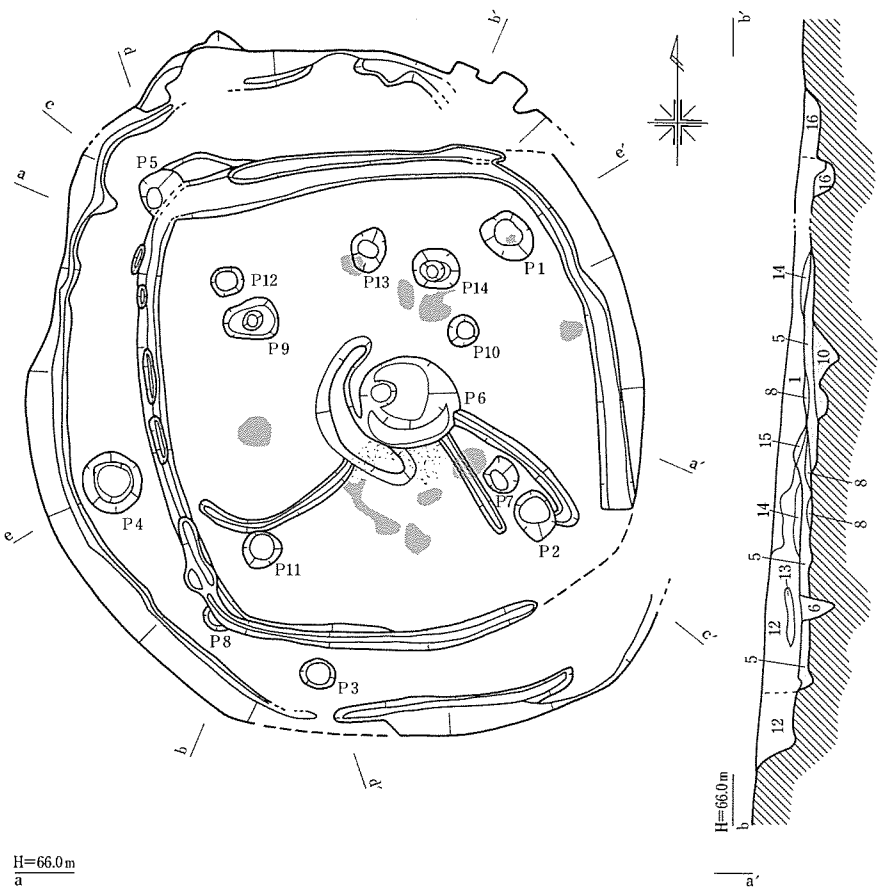
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	56	47	66
Ｐ２	49	40	70
Ｐ３	37	30	42
Ｐ４	63	63	65
Ｐ５	54	48	53
Ｐ６	105	96	35
Ｐ７	35	32	25
Ｐ８	33	27	13
Ｐ９	32	32	42
Ｐ10	34	34	18
Ｐ11	43	40	80
Ｐ12	58	45	34



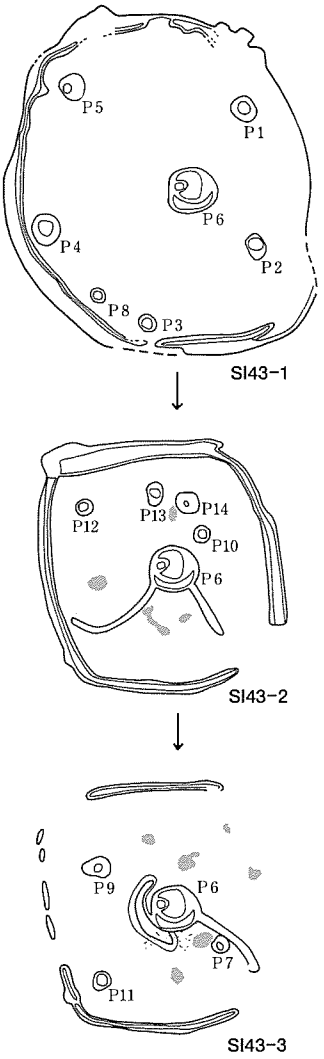
第95図　SI42出土遺物

がみられることから平面形はやや歪なものとなるが、平面形は柱穴の配置から五角形であったと思われる。またＰ１・２を43－１に伴わないものとみた場合、住居平面形は六角形を呈するとも考えられるが、本住居東側には六角形に配置されるような柱穴の確認はできなかった。また住居北西側のＰ５は43－２および43－３に削られた状態であった。

さて、先述したように43－１内には、43－１が廃絶された後に構築された43－２、43－３が存在する。43－３の確認は、43－1埋土と43－３埋土の様相が極めて近かったことから、床面での確認となった。43－３は平面方形を呈し、規模は東西、南北とも5.3mを測る。床面は、一部でＡＴ層に白色粘質土を混入させた黄褐色土が貼られるが、貼床が確認される住居西側の大半においては白色粘質土を主体とした灰褐色土が貼床として施されていた。住居東側においては地山であるホーキ層が床面である。この43－３の床面からはピットが３基検出された。主柱穴としてはＰ７・９・11が考えられるが、南東側の主柱穴については、Ｐ７に変わりＰ２がこれにあたる可能性がある。北東側に関しては柱穴と考えられるピットは確認できなかった。また本住居中央にはＰ６が配され、Ｐ６の西側部分にはホーキ、ＡＴ、白色粘質土を含む黄褐色土による周堤が構築される。この周堤下の43－３床面には炭化物の広がりが認められることから、43－３で炭化物層が形成された後に構築されたものである。また床面にて、Ｐ６から東南方向に向かう床溝を１条検出したほか、焼土面を６ヶ所で確認した。ところでこの入子状住居である43－３は上述したように住居西側部分において貼床が施されていたが、この貼

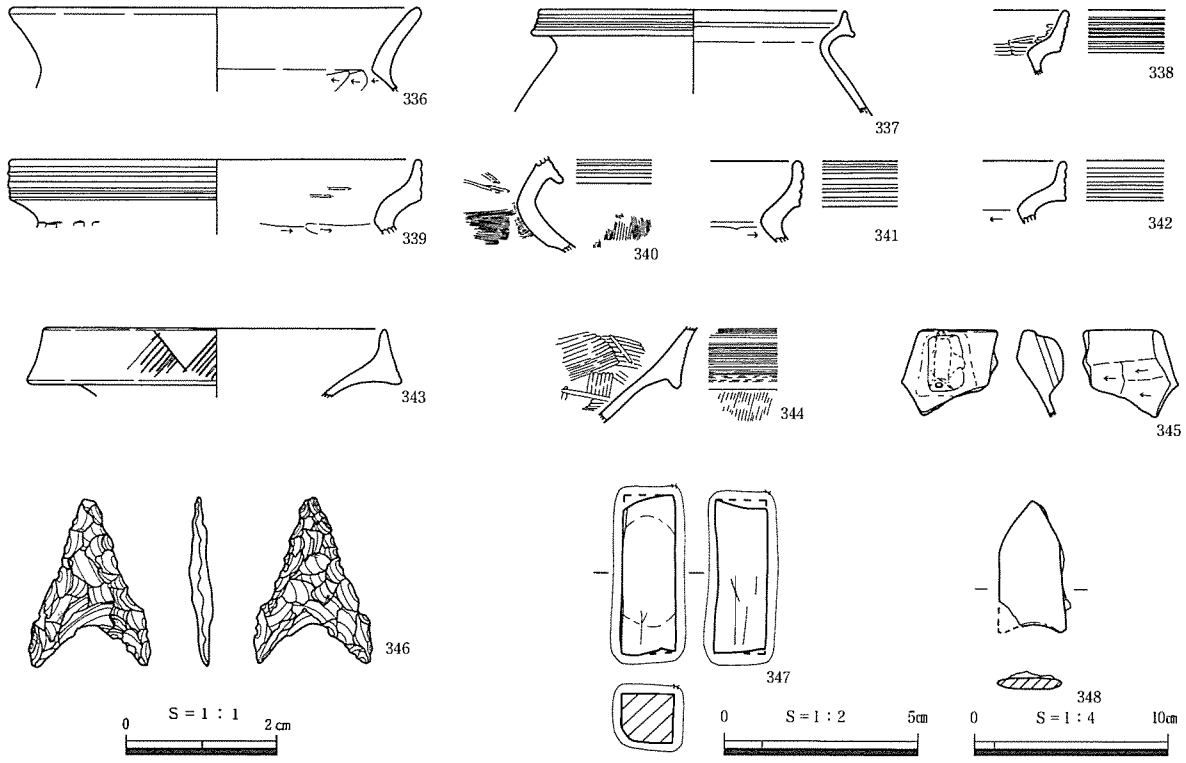


1層　褐色土（10～20㎜大ホーキブロックわずかに含む）
2層　淡褐色土（多量の白色粘質土、少量の10㎜大ホーキブロック含む）
3層　暗褐色土（白色粘質土、５㎜大ATブロック、ホーキブロック含む）
4層　黄褐色土（AT層を主体とし、白色粘質土含む）
5層　灰褐色土（貼床、白色粘質土、３㎜大炭化物含む）
6層　淡褐色土（白色粘質土、ATブロック、炭化物を含む）
7層　淡黄褐色土（貼床、ホーキ、AT、白色粘質土、赤褐色粘質土含む）
8層　黒褐色土
9層　淡黄褐色土（貼床、ホーキ、AT、白色粘質土、赤褐色粘質土含む）
10層　暗褐色土（10～20㎜大AT、白色粘質土ブロック、３㎜大炭化物含む）
11層　褐色土（５㎜大ATブロック含む）
12層　褐色土（10～20㎜大ホーキ、AT、白色粘質土ブロック含む）
13層　暗褐色土（10㎜大ホーキブロックわずかに含む）
14層　暗褐色土（５㎜大AT、白色粘質土、３㎜大炭化物含む）
15層　黄褐色土（中央ピット周堤、ホーキ、AT、白色粘質土含む）
16層　明褐色土（５㎜大AT、ホーキブロックわずかに含む）
17層　褐色土（10～30㎜大ATブロック含む）
18層　褐色土（20㎜大ATブロック含む）
19層　暗褐色土（20～30㎜大AT、白色粘質土、炭化物含む）
20層　暗褐色土



S＝1：80　0　2m

第96図　SI43実測図



第97図　SI43出土遺物　346は S＝1/1、348は S＝1/2、その他は S＝1/4

床面の下にはさらに43－３と同一規模の住居が認められた。確認できた周壁溝は上面住居よりも幅を広くしている。床面は北西側の一部でホーキ、白色粘質土、淡赤褐色粘質土で構成される淡黄褐色の土により貼床が施されているほかは、地山面を床面としている。この貼床が施された箇所については地山面から床面まで数種類の土を積み重ねて貼床とする箇所もみられた。床面からはP10・12・13・14の４基のピットを検出したが、そのうち主柱穴と考えられるものは住居北東側に位置するP14で、他の柱穴に関しては、43－３の床面で確認した柱穴Ｐ７（もしくはＰ２）、Ｐ９、P11が該当すると思われる。このことは43－２とその直上に位置する43－３が、検出した周壁溝範囲など同一規模の住居であることから、43－３は43－２を貼床により嵩上げした住居であると思われ、43－２の柱穴をそのまま用いたものと考えることによる。以上のように43－２は４本柱の方形の住居であったが、床面からは43－３でも使用され続けた住居中央のＰ６からのびる床溝が、南東方向と南西方向にそれぞれ１本ずつ確認できたほか、焼土面を４ヶ所で検出した。

さて、上述の様相を呈するSI43であるが、煩雑な状況であるためここで整理すると、平面五角形と思われる43－１が廃絶された後、43－１の中に平面方形の43－２が築かれる。この43－２は確認できた住居西側においては43－１よりも床面を深くする。43－２はある程度の使用の後、貼床により住居床面を嵩上げし、床面の高さを43－１と同じくする43－３が構築されるといった変遷をたどる。

出土遺物であるが、先述したように43－３の確認が43－1と43－３の床面での確認となってしまったため、床面直上や床面付近で一括して取り上げた遺物にも時期差が認められる。346は黒曜石製の石鏃である。床面付近から出土した337・340の甕は口縁部を内傾させ、外面には凹線による施文がみられる。清水編年のＶ－１期、弥生時代後期前葉頃に相当する。また、床面から出土した338の甕は、口縁部を直立させ、外面に７条の平行沈線を施文することから、清水編年Ｖ－３期にあたるとみられ、弥生時代後期後葉頃の年代が考えられる。そのほか、43－３の主柱穴と考えられるＰ９埋土中からは

直立した口縁部に４条の平行沈線を施した甕342が出土している。清水編年Ｖ－３期、弥生時代後期後葉頃と思われる。

以上のことから本遺構の時期は、43－１が弥生時代後期前葉、43－３が弥生時代後期後葉の時期が考えられる。また、43－１が北西部で清水編年Ｖ－３期にあたるSI42に削られていることから、SI42よりも古い時期に位置づけられ、43－２についてもこれを嵩上げして構築された43－３と時期差はあまり考えられないことから弥生時代後期後葉の時期に収まるものと考えられる。　（野口）

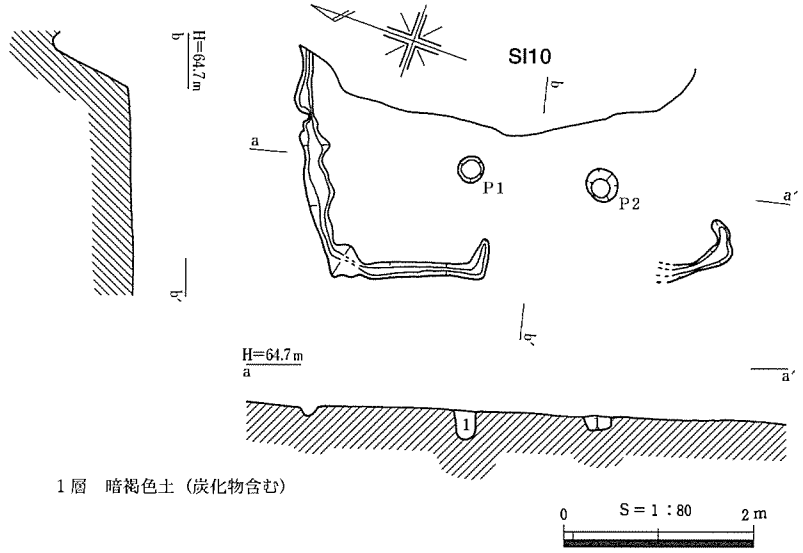
表41　SI44ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	27	26	35
Ｐ２	32	34	14

SI44（第98図、PL. 10）

Ｄ９グリッドの北西側、標高64.2mの台地上の平坦部に位置し、SI10と重複するが、新旧関係は不明である。遺構の検出段階ですでに埋土はなく、西半部のみ検出した。平面形は、周壁溝の形から方形を呈するものと考えられる。

周壁溝は北西側と南東側の一部のみ確認できた。この溝の幅は10～28cm、床面からの深さは７～９cmで断面形は「U」字状である。ピットは２基検出した。ともに浅いピットであるが、位置的には主柱穴の可能性が考えられる。柱穴間の距離は1.4mを測る。遺構の年代については、遺物が皆無のため不明である。　（阪上）



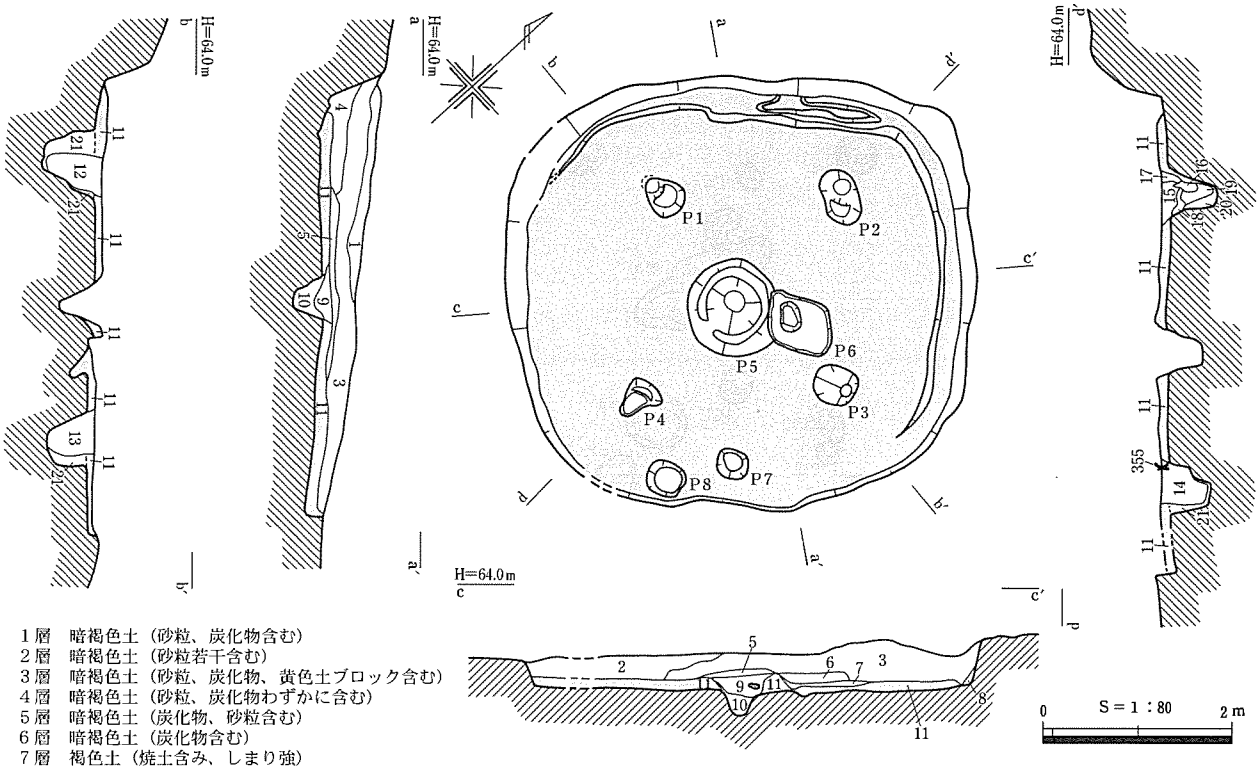
第98図　SI44実測図

SI45（第99図、PL. 27）

Ｅ10グリッドの斜面に位置する。住居跡のベース土は谷１とした埋没谷の埋土である。その最上層は弥生時代中期後葉から後期にかけての遺物を包含する。SI45はその埋土の掘り下げ中に検出したものである。時期的に先行するSI59は、この谷の埋土上面にて検出していることから、当住居跡も本来の遺構面は谷の埋土上面であったと考えられる。住居跡の規模・平面形は長軸5.0m、短軸4.5mの隅丸方形を呈する。埋土は暗褐色系の土で、砂粒や炭化物の混入の度合で細分可能である。住居跡の土層堆積状況は、高所側の西側からの土砂の流入が顕著である。ピットは８基検出した。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基とみられる。主柱穴間距離は2.0～2.2mである。Ｐ５は中央ピットであり、東南部を除き２段掘りである。その周囲には周堤がめぐり、床面からの高さ４cm、幅20cmを測る。この周堤は、地山の削り出しによるものではなく、後述

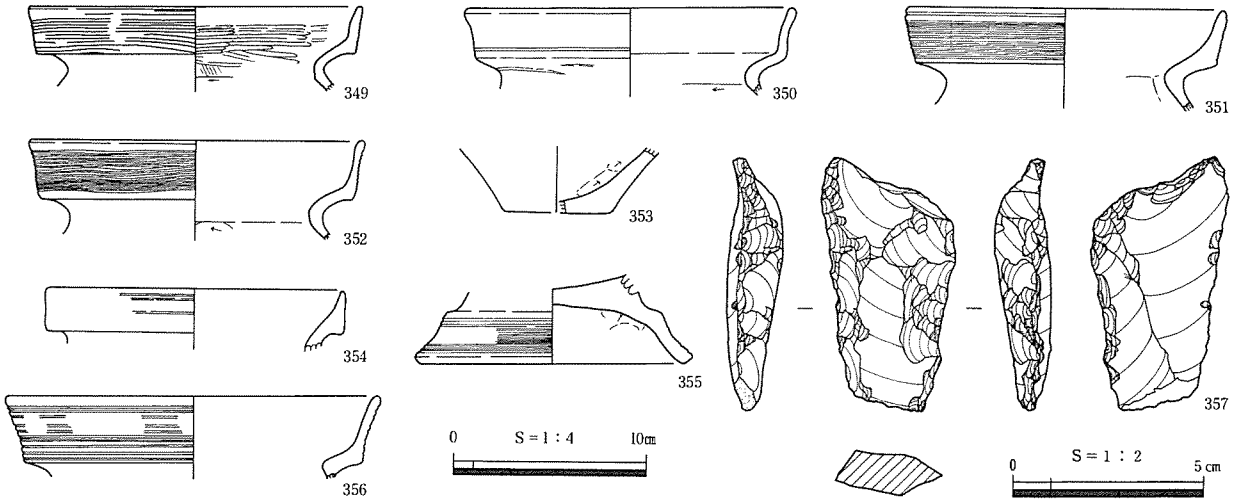
表42　SI45ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	48	36	59
Ｐ２	60	37	59
Ｐ３	46	41	51
Ｐ４	44	36	52
Ｐ５	58	48	49
Ｐ６	65	56	30
Ｐ７	34	33	27
Ｐ８	42	37	22



1層　暗褐色土（砂粒、炭化物含む）
2層　暗褐色土（砂粒若干含む）
3層　暗褐色土（砂粒、炭化物、黄色土ブロック含む）
4層　暗褐色土（砂粒、炭化物わずかに含む）
5層　暗褐色土（炭化物、砂粒含む）
6層　暗褐色土（炭化物含む）
7層　褐色土（焼土含み、しまり強）
8層　にぶい褐色土
9層　暗褐色土（砂粒、炭化物含む）
10層　暗褐色土
11層　褐色土（貼床　砂粒、10mm大ホーキブロック含み、しまり強）
12層　暗褐色土（砂粒、炭化物含む）
13層　暗褐色土（砂粒含む）
14層　暗褐色土（砂粒含む）
15層　暗褐色土（砂粒、炭化物含む）
16層　にぶい黄褐色土
17層　にぶい黄褐色土（砂粒含む）
18層　褐色土（ATブロック含む）
19層　暗褐色土
20層　暗褐色土（砂粒、10mm大ホーキブロック含む）
21層　褐色土

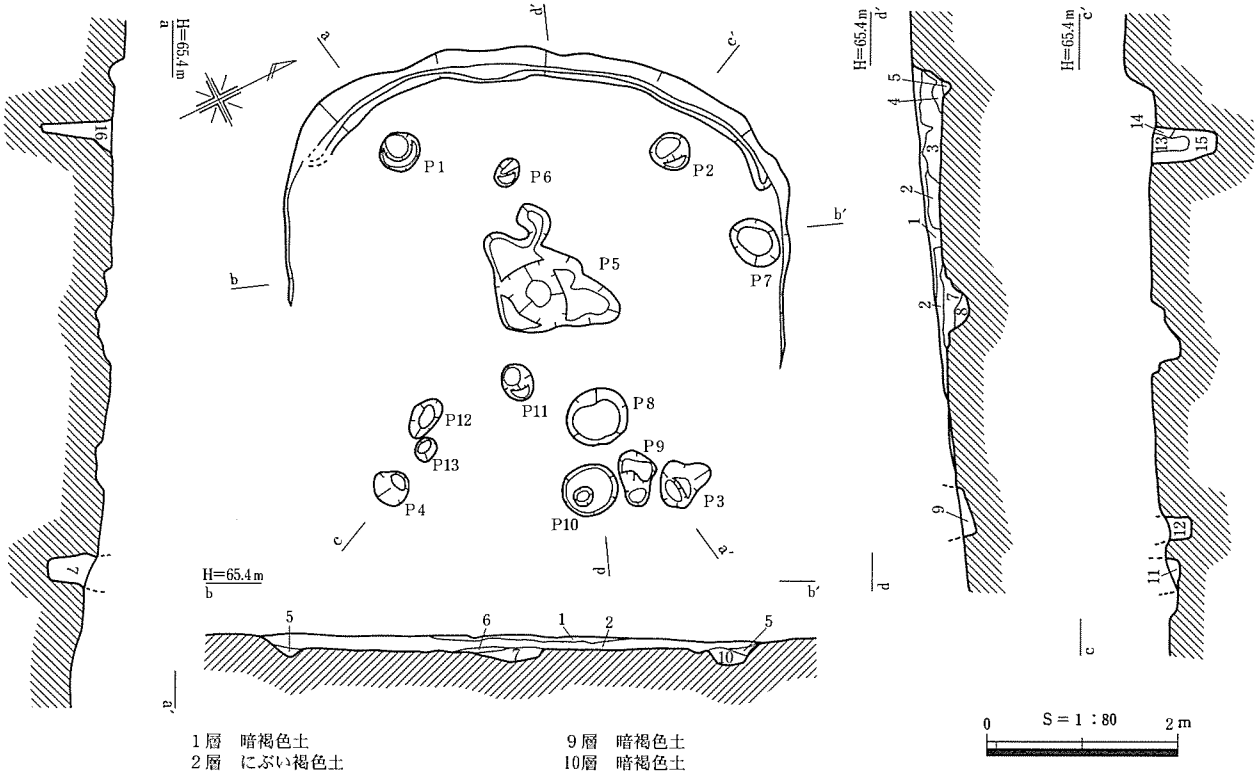
第99図　SI45実測図



第100図　SI45出土遺物　357のみ　S＝½

する貼床層と同じ土で盛られたものである。床面には北壁から西壁にかけて、幅20cm前後、深さ２～６cmの周壁溝がめぐる。床面には全面にわたり、層厚12cmの貼床が施されていた。このような入念な造作は、谷の埋土をベース土とすることによるとみられる。出土遺物は埋土中及びピットから弥生土器が出土した。また埋土中への混入品であるが、黒曜石製の削器357が出土した。全長6.7cm、最大幅3.6cmである。出土した土器は清水編年のＶ－３期に該当することから、弥生時代後期後葉の住居跡と考えられる。

（小山）

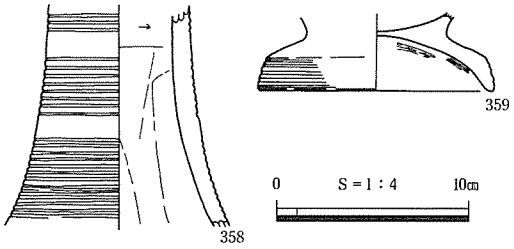


1層　暗褐色土
2層　にぶい褐色土
3層　暗黄褐色土
4層　にぶい暗褐色土
5層　にぶい暗黄褐色土
6層　褐色土（炭化物、焼土を多く含む）
7層　褐色土
8層　暗褐色土
9層　暗褐色土
10層　暗褐色土
11層　暗褐色土（しまりやや弱）
12層　茶褐色土
13層　にぶい褐色土（10mm大ATブロック含む）
14層　にぶい褐色土
15層　にぶい褐色土
16層　にぶい褐色土

第101図　SI46実測図

表43　SI46ピット表　（　）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	44	38	72
P２	42	40	70
P３	60	43	(58)
P４	39	39	(13)
P５	124	88	30
P６	29	24	不明
P７	56	46	12
P８	65	60	11
P９	58	40	17
P10	59	50	24
P11	40	32	63
P12	46	28	62
P13	26	19	28



第102図　SI46出土土器

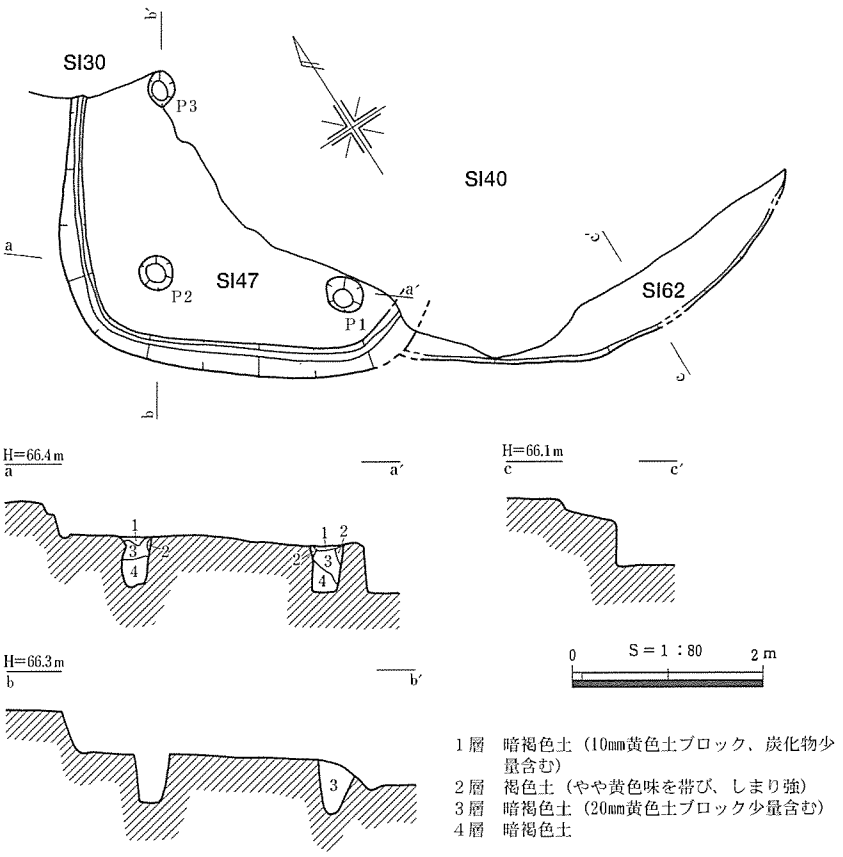
SI46（第101図、PL. 28）

F11グリッド、標高64mの斜面に立地する。東壁はすでに失われているが、一辺が約５mの隅丸方形の竪穴住居跡と思われる。壁高は残りがよい西壁で34cmを測る。埋土は暗黄褐色系の土が壁際に堆積し、その後は暗褐色系の土が中央部にかけて堆積する。特に斜面の上方に当たる西側からの流入が顕著である。検出したピットは13基で、このうちＰ１～Ｐ４が主柱穴とみられる。Ｐ５は中央ピットである。主柱穴間距離は2.9～3.6mである。他のピットは住居跡の埋土の残りが悪いため、埋土中からの掘り込みの可能性が残る。このため住居跡に伴わないものも含むと考えられる。周壁溝は西壁にみられ、幅８～10cm、深さ２～５cmである。

出土遺物は埋土中から器台脚部、台付甕台部が出土した。時期は、出土した土器からみて、清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉のものとみられる。（小山）

SI47（第103図、PL. 25）

F18グリッドに位置し、標高約65mの、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。北側をSI39に切られ、東側をSI40に切られる。遺存状態は悪く、西側半分だけが検出できた。平面形は遺存する部分の形から隅丸方形と思われる。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南側で40cmである。床面は平坦で、ホーキ層をそのまま床面としている。周壁溝は遺存する床面の範囲で全てを検出した。本来は全周していたものと思われる。大きさは幅12cm、床面からの深さは５cmで、断面形は「U」字状である。焼土面は検出されなかった。住居の中央部分までSI40に切られているため、中央ピットの存在については不明である。ピットは３基検出した。いずれも主柱穴と考えられる。主柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間が2.0m、Ｐ２－Ｐ３間が1.9mである。

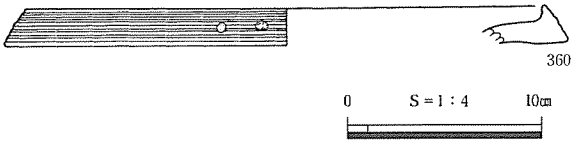


第103図　SI47・62実測図

遺物は床面付近から壺の口縁部360が出土している。時期は清水編年Ⅳ－３期、弥生時代中期後葉に相当すると思われる。これは本遺構の廃絶時期を示すものと考える。これはSI39、40との切り合い関係と矛盾しない。（淺田）

表44　SI47ピット表　（ ）現存値

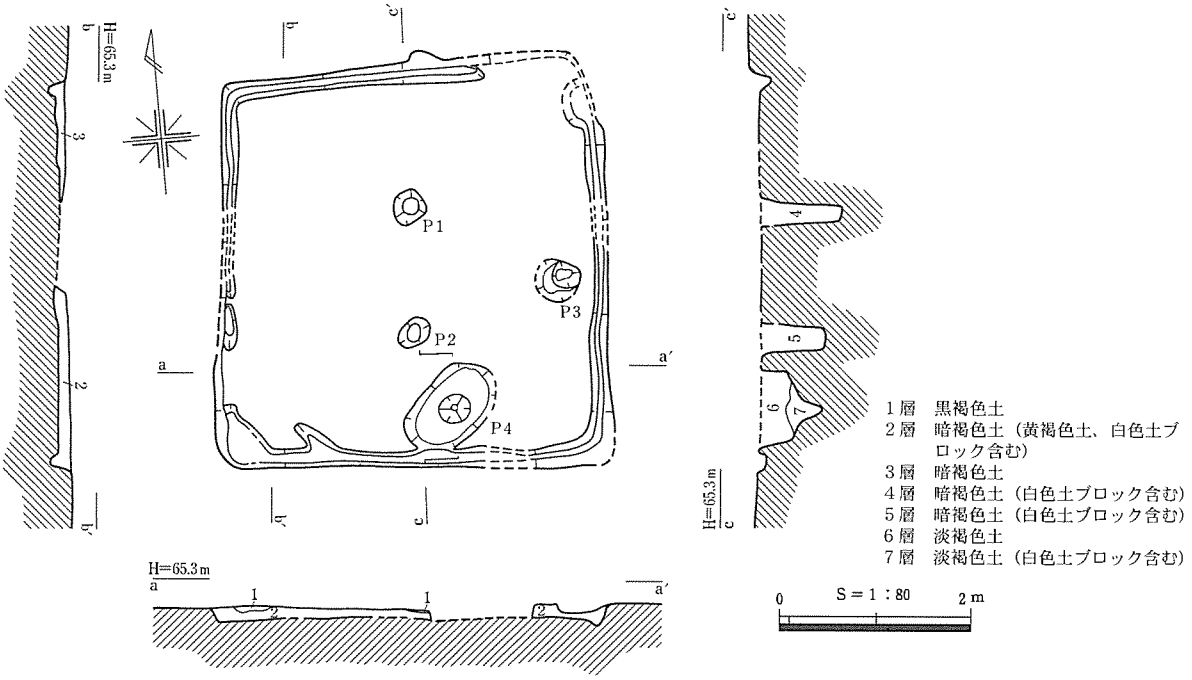
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	42	34	62
Ｐ２	45	45	52
Ｐ３	40	(25)	42



第104図　SI47出土土器

SI62（第103図、PL. 25）

F18グリッドに位置し、標高約65.7mの、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。本遺構は主軸を等高線に対して平行な位置をとっており、段状遺構の可能性も考えられる。しかし、平面形が円形であること等から住居跡として取り扱うこととした。北側をSI40に切られる。遺存状態は非常に悪く、南側の壁面部分をわずかに検出したのみである。このため規模も不明である。検出面から床面までの深さは最大17cmで、壁面は外側に緩やかに傾斜して立ち上がる。床面はホーキ層をそのまま床面としている。ピット、周壁溝、焼土面は検出されなかった。

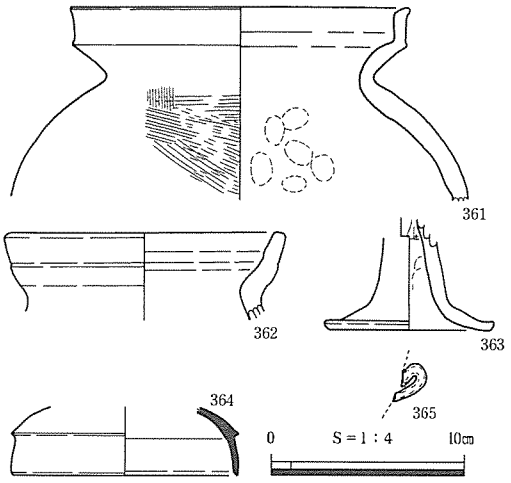


第105図　SI48実測図

遺物は埋土中に土器片が数点含まれていたが、いずれも細片のため、図化も困難であり、時期を決定できるようなものは無かった。よって本遺構の時期については不明であるが、層位的にみて、SI40（弥生時代後期後葉）より古いと考えられる。　（淺田）

表45　SI48ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	39	37	77
P２	38	28	58
P３	46	(40)	59
P４	112	69	60



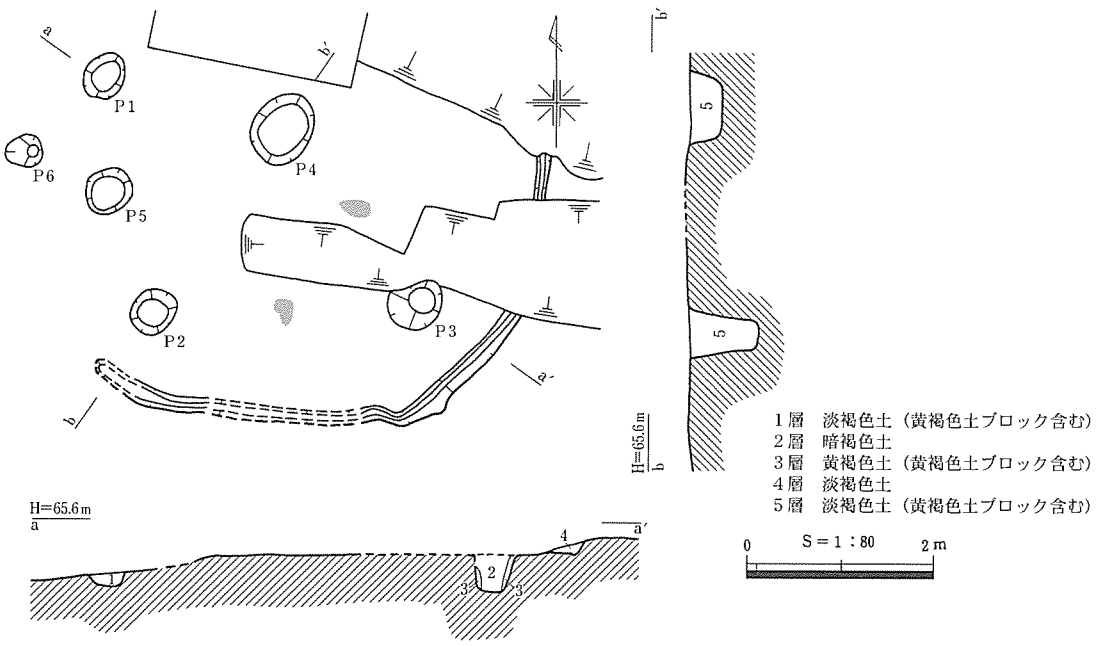
第106図　SI48出土土器

SI48（第105図、PL. 28）

J14グリッド、標高およそ65mの高さで、ホーキ層を検出面とし確認した。主軸を南北にした方形の竪穴住居跡である。北東側から西側、南側にかけて近年の耕作による攪乱を受けている。規模は東西4.2m、南北4.3m、深さは残りの良い部分で16cmを測る。ホーキ層を床面とし、床面ではピットが４基確認された。住居中央に南北に並ぶP１・２が主柱穴となる２本柱の竪穴住居跡であり、付近ではSI50が同じ様相を呈する。周壁溝は攪乱を受けている範囲を除いて西側、北側の２ヶ所で途切れている。P４は南側の壁際に位置し、周壁溝と重なりをみせるが埋土の状況から埋没の前後関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物には天神川Ⅸ期に相当する361の口縁部がやや短くなった甕や、TK23型式併行期の須恵器杯蓋364などが認められた。本遺構の時期としてはこれらの出土遺物から古墳時代中期後半頃が想定される。

（野口）



第107図　SI49実測図

SI49（第107図、PL. 28）

SI49は、K15グリッドに位置する。標高およそ65.2mから65.4mの高さで、ホーキ層を確認面とした。本住居は住居南東側の壁溝や焼土面が検出されたことから確認にいたったが、本住居内には、貯水槽が存するなど、近年の梨栽培による攪乱を受けている状態であった。また、住居西側部分はすでに地形の傾斜から壁、床等の住居施設は流失してしまっており、本住居の遺存状態は良くない。本住居で確認できたものとしては西側から南側にかけての周壁溝の一部、南西側の床面と焼土面２ヶ所、柱穴と考えられるピットなどである。P５・６に関しては本住居に伴うものかどうかは明らかではない。また、住居埋土は検出した周壁溝内と住居南東側にわずかに認められたのみであった。

表46　SI49ピット表

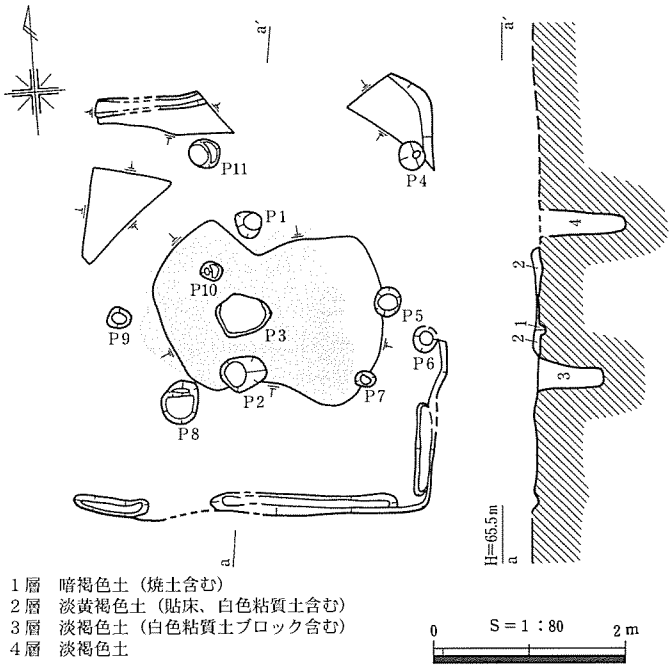
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	52	41	20
P２	50	46	79
P３	60	45	50
P４	78	63	33
P５	56	44	47
P６	40	32	44

さて本住居は、周壁溝や柱穴などの遺存状況から判断すると、平面五角形の住居になる可能性が高い。確認された周壁溝は、南西部で角を削ったような形態をみせるが、主柱穴と考えられるP１・２・３の配置は五角形の３つの角の部分にあたり、また、五角形を想定して柱穴を復元した場合、住居中央にあたる地点には中央ピットと考えられるP４が掘り込まれている。

以上述べたように本住居跡は遺存状況が良くなかったことから、出土遺物もわずかであり、本住居跡の時期を判断できるものもみられなかった。しかし、平面形が五角形であった場合、本遺跡の他の住居形態から弥生時代後期頃の年代であった可能性が高い。（野口）

SI50（第108図、PL. 29）

J14グリッド、標高およそ65.1mの高さで、ホーキ層を検出面とする。近年の梨栽培により、住居床面の大半、および西壁の全部、北壁、東壁、南壁の大半が攪乱を受けている。遺存する壁溝等から、主軸を南北にした方形の竪穴住居跡で、南北規模4.5mあったことが分かるが、東西方向に関しては



第108図　SI50実測図

表47　SI50ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	31	27	(17)
P 2	48	37	86
P 3	59	45	40
P 4	30	26	54
P 5	33	27	31
P 6	39	20	(38)
P 7	20	16	24
P 8	44	36	(23)
P 9	26	21	(8)
P10	21	17	9
P11	32	29	(42)

不明である。本住居の埋土はすでに存せず、白色粘質土と黄褐色土による貼床も大半が失われている。本住居内からはピット11基が検出された。本住居の遺存状態からこれらは必ずしも本住居に伴うものとは言えないが、Ｐ１・２は主柱穴と考えられる。２本柱の住居になるが、本住居跡付近のSI48も住居形態を含め同じ様相を呈する。また住居中央に浅く掘り込まれたＰ３からは焼土が検出された。本住居跡からは遺物の出土はみられなかったが、住居形態や、付近のSI48の状況などから、SI48とほぼ同じ頃の古墳時代中期後半頃と推定される。　（野口）

SI51（第109図、PL. 29）

Ｊ11グリッド、標高およそ64.9mの高さで、ホーキ層を検出面とし確認した。主軸を南北にした方形の竪穴住居跡であり、東側でSI24、西側でSI36の埋土を掘り込んで建てられている。北側は近年の耕作による天地返しを受けていたため、正確な規模は不明である。しかし、わずかではあるが北西隅が遺存しており、およその規模を知り得た。

規模は現況で東西5.0m、南北5.8m、深さは残りが良い西側で34cmを測る。床面は住居中央を中心に大部分に白色粘質土、及び黄褐色土による貼床が施され、貼床が施されない東側、西南隅ではAT層を床面としている。床面ではピットが９基確認され、うちＰ１～４の４基は主柱穴となる。中央には若干掘り窪められたＰ５が位置し、焼土面が認められた。周壁溝は東側、南側は連続するが、西側においては２ヶ所で途切れ、全周はしない。埋土の状況は、上層で細かな炭化材が含まれており、下層において炭化した住居の部材、及び焼土を検出したことから、焼失住居であることが明らかとなった。検

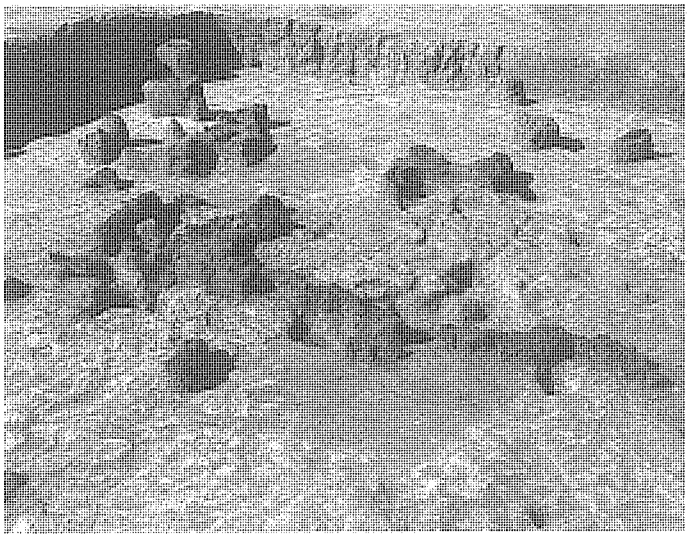
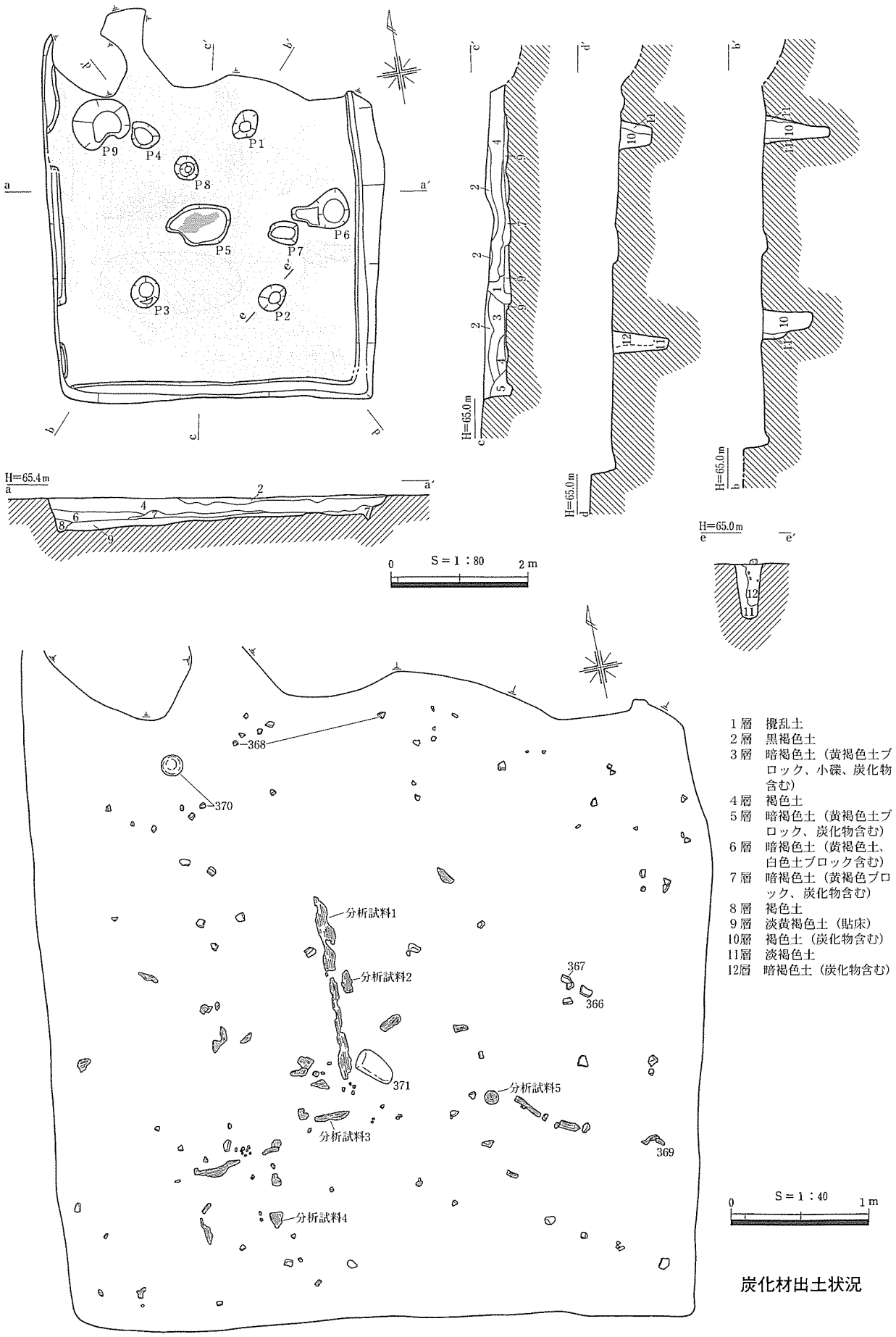


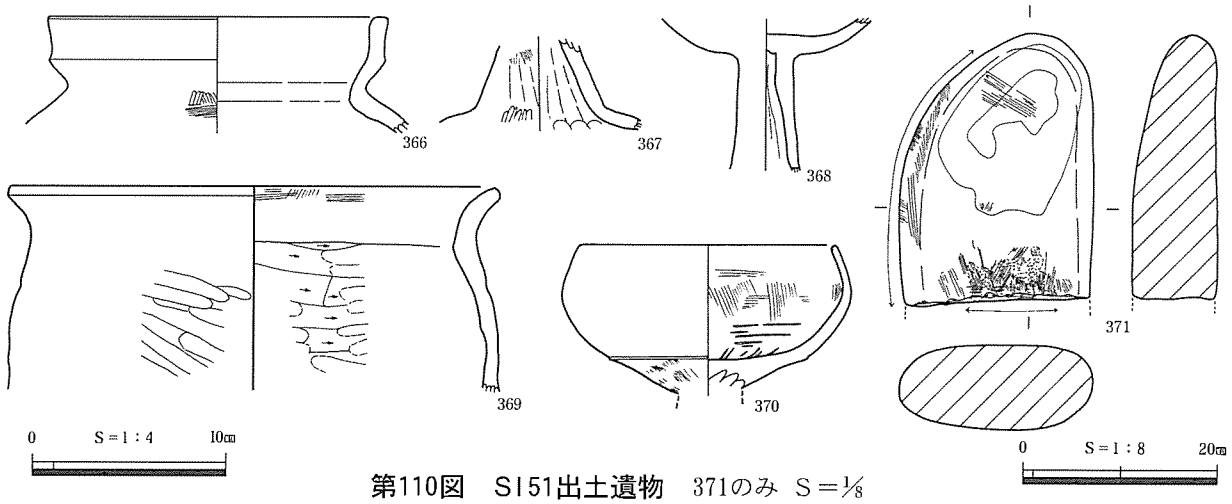
Fig 4　SI51炭化材出土状況（北東から）



1層　攪乱土
2層　黒褐色土
3層　暗褐色土（黄褐色土ブロック、小礫、炭化物含む）
4層　褐色土
5層　暗褐色土（黄褐色土ブロック、炭化物含む）
6層　暗褐色土（黄褐色土、白色土ブロック含む）
7層　暗褐色土（黄褐色ブロック、炭化物含む）
8層　褐色土
9層　淡黄褐色土（貼床）
10層　褐色土（炭化物含む）
11層　淡褐色土
12層　暗褐色土（炭化物含む）

炭化材出土状況

第109図　SI51実測図



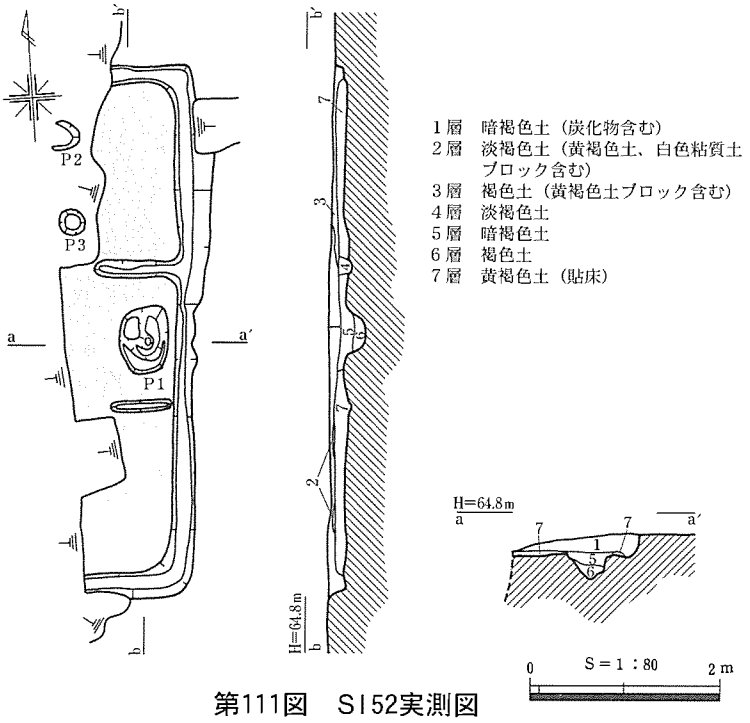
第110図　SI51出土遺物　371のみ　S＝1/8

出状況としては、柱として用いられていた部材が、P2直上に立った状態で確認された。柱穴埋土中の状況は、焼失時に火を受けず、炭化しなかったためか遺存はしていなかった。そのほかの炭化材に関しては、検出した状況からこれらの部材が住居のどの部分に用いられていたかを判別するのは困難であるが、その多くは住居中心部に材の方向を向けていることから垂木の可能性が高いと思われる。

表48　SI51ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	46	34	90
P 2	42	34	77
P 3	45	42	64
P 4	44	37	47
P 5	94	58	5
P 6	79	58	24
P 7	44	32	12
P 8	38	34	43
P 9	82	57	28

出土遺物としては、古墳時代中期中頃の土師器が多く認められた。366の甕は口縁部が肥厚し、口唇部を平坦にする。370は埦形の杯部をもつ高杯の杯部、367・368は高杯の脚部である。369は長胴化した胴部から頸部に明確なくびれを持たせず口縁部へ外反させた甕で、頸部から口縁部にかけて肥厚する。古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのものと考えられ、周囲からの流れ込みと思われるが、本遺跡からは該期の遺構は検出されておらず、削平を受けた該期の遺構の存在が考えられる。本遺構の時期としては、埋土中の出土遺物には時期幅がみられたが、床面直上から出土した366の甕が天神川編年Ⅷ期に相当することから古墳時代中期中頃と考えられる。(野口)



第111図　SI52実測図

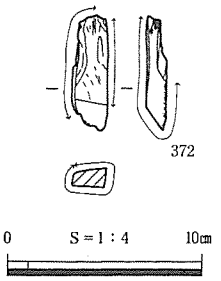
SI52（第111図、PL. 30）

J11グリッド、SI36の北側の位置で確認した。本住居跡は東側部分1.2mから1.4mが残存するのみであり、それ以外は調査区外にのび、近年の

土取り等により削平される。本住居跡は標高64.6mの高さで、ホーキ層を検出面として確認された。検出面から床面までの高さは８cmあまりで、床面には黄褐色土による貼床が施される。周壁溝は確認できた範囲では途切れることなく、20cmほどの幅でめぐっており、東壁中央北寄りでは東西に１mほどのびる床溝と連結する。また床溝は、東壁中央南寄りにも長さ60cmほど認められ、北側と南側の床溝の間にはＰ１が位置している。

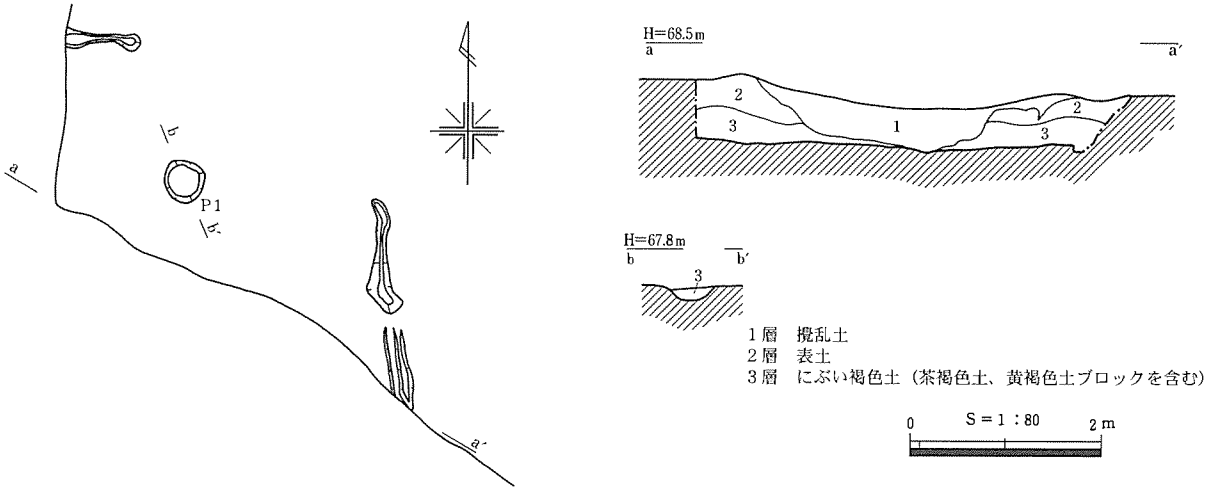
表49　SI52ピット表　（ ）現存値

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	70	51	29
Ｐ２	(28)	29	(11)
Ｐ３	30	28	(62)



第112図　SI52出土石器

さて本住居跡は確認できた範囲では平面方形の住居跡で、規模は南北5.7mである。北東部分では上半部を攪乱で壊されるが、他に柱穴とみられるＰ２が存することから、４本柱の住居であったと考えられる。出土遺物は砥石372のみであり、本遺構の時期を推定させる遺物の出土はなかったが、平面方形の住居形態から古墳時代中期頃の可能性が高い。　（野口）

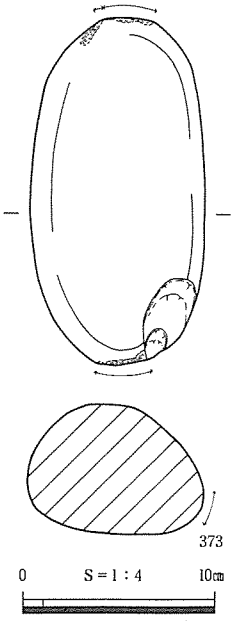


第113図　SI53実測図

SI53（第113図、PL. 30）

H19グリッド杭の南、標高67.4mの平坦面に位置する。SI54・55の南に立地する。本遺構は検出時、既に埋土の大半が失われ、遺構の半分以上が調査区外にのびている。このため規模は不明であるが、平面形は北側と東側の周壁溝が直線的にのびることから、方形か、もしくは隅丸方形とみられる。住居跡の中央部は攪乱を受け、その一部は床面にまで及ぶ。周壁溝は東側と北側の一部のみ確認できた。幅約15cm、床面からの深さは４～５cmで断面形は「U」字状である。ピットは１基検出した。規模は長径45cm、短径42cm、深さ16cmを測る。ピットの配置が不明であることから、主柱穴であるかは不明である。

遺物は、床面直上で敲石373が出土しているほか、図化はできなかったが、埋土中から数点の土器片が出土した。遺構の年代については、時期を特定できる土器が出土しなかったため不明である。　（阪上）



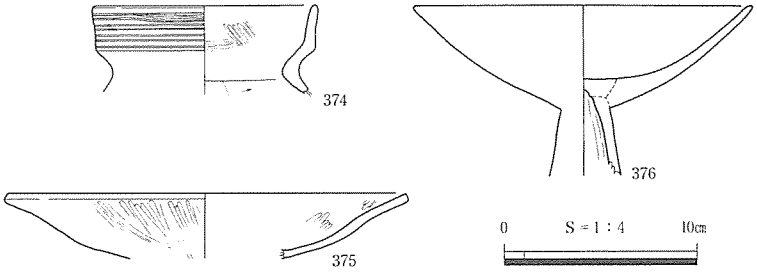
第114図　SI53出土石器

SI54（第116図、PL. 30）

G18グリッドの西側、標高66.5～66.8mのゆるやかな斜面に位置する。この遺構はSI55及びSK37の埋土を掘り込んで建てられている。平面形は方形を呈し、長辺3.4m、短辺3.1mを測る。黄褐色土を床面としており、壁高は南西側の最深部で27cm、北東側で４cmを測る。ピットは４基検出した。いずれも床面で検出したものの、位置や深さにばらつきがみられることから主柱穴は明確ではない。このため屋内に柱穴を持たない建物である可能性もある。遺物は、床面直上のものはみられなかった。P４と埋土下層から高杯の杯部375・376が出土した。遺構の年代については、下層から出土した376の椀状杯部をもつ高杯からみて、天神川Ⅵ期に相当するとみられる。このことから古墳時代中期前半と考えられる。（阪上）

表50　SI54・55ピット表

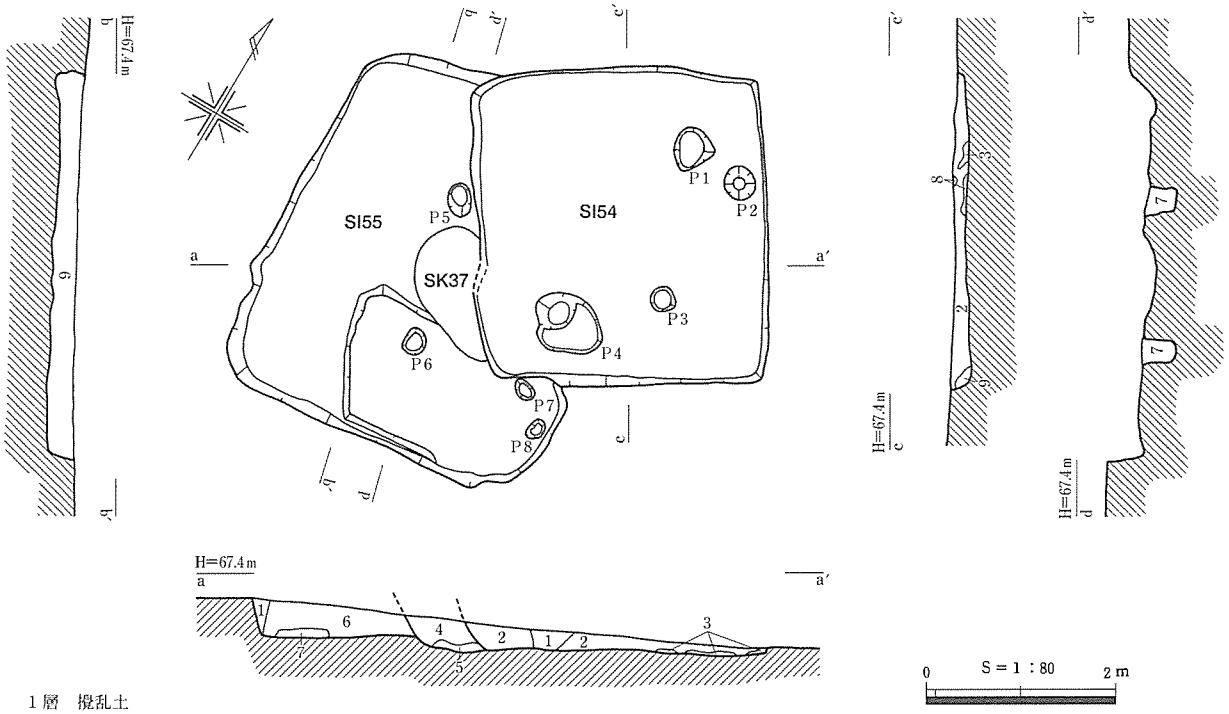
ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	45	43	45
P２	37	33	46
P３	26	26	6
P４	77	56	17
P５	36	24	25
P６	27	22	36
P７	24	16	30
P８	21	17	26



第115図　SI54出土土器

SI55（第116図、PL. 31）

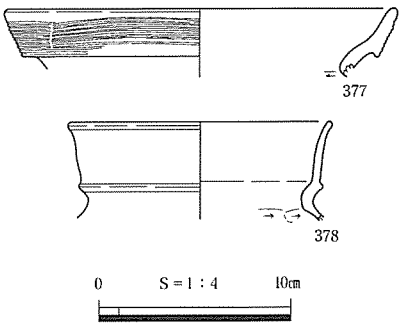
G18グリッドの西側、標高66.8～67.2mの緩やかな斜面に位置する。北東側をSI54及びSK37に壊されている。平面形は方形で、長辺4.0m、短辺3.6mを測る。ホーキ層を床面としており、検出面から床面までの



1層　撹乱土
2層　暗褐色土（褐色土含む）
3層　黄褐色土
4層　褐色土（SK37埋土、20mm大黄褐色土ブロック含む）
5層　褐色土（SK37埋土、暗褐色土、黄褐色土ブロック、多量の炭化物含む）
6層　褐色土（20mm大黄褐色土ブロック含む）
7層　暗褐色土
8層　茶褐色土
9層　暗褐色土（２層より褐色土少量）

第116図　SI54・55実測図

深さは、南西側で最大40cm、北西側で最小28cmである。南東部にはベッド状遺構とみられる長辺2.4m、短辺1.4m、厚さ９cmの長方形の高まりがみられ、褐色土を主体に黄褐色土のブロックと暗褐色土を含むしまった土を盛っていた。ピットは４基検出した。Ｐ５以外はベッド状遺構上面で検出した。このうち、主柱穴と考えられるものはＰ５とＰ６で、２本柱の建物になる。柱穴間距離は1.7mを測る。



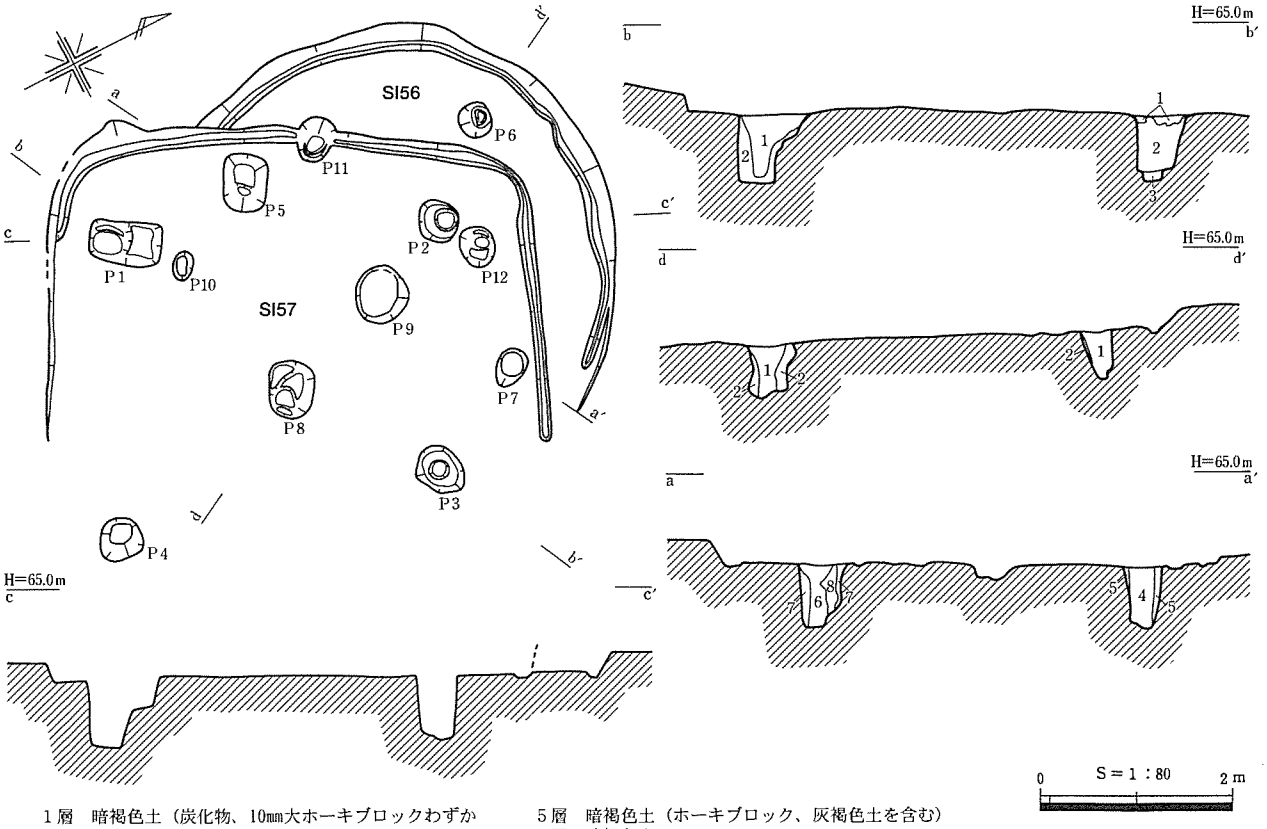
第117図　SI55出土土器

出土遺物は床面直上のものはなく、埋土中から甕の口縁部378が、またベッド状遺構部分の盛土中から清水編年のＶ－３様式にあたる甕の口縁部377が出土している。後者については、ベッド状部分を作る際に混入したものと考えられる。本遺構の想定される年代として、細片のため図化していないが下層から天神川編年Ⅱ期にあたる土器が出土していることから、古墳時代前期前葉の時期が想定される。（阪上）

SI56（第118図、PL. 31）

Ｇ11グリッド、台地の縁辺部に位置する。東側の大部分がSI57と重複する。遺存状況が悪く、壁高はほとんど残存せず、住居の南半は床面レベルより下まで削平を受けていた。

埋土の残りが悪かったことや、検出当初１棟の住居跡とみて掘り下げを行ったため、２棟の新旧関係を層位的に検証することは、困難であった。このため掘り下げは同時に行った。遺物はSI57の周

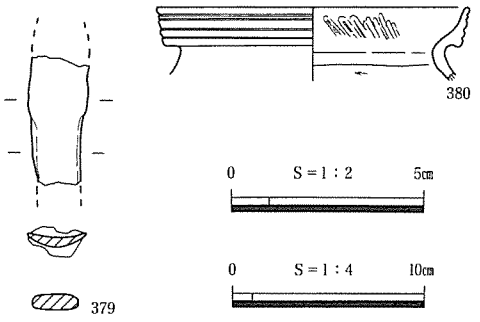


1層　暗褐色土（炭化物、10mm大ホーキブロックわずかに含み、しまり強）
2層　暗褐色土（ホーキブロック多く含み、しまり強）
3層　灰褐色土（しまり強）
4層　灰褐色土
5層　暗褐色土（ホーキブロック、灰褐色土を含む）
6層　暗褐色土
7層　褐灰色土（しまり強）
8層　暗褐色土（少量のホーキブロック、多量の褐色土含む）

第118図　SI56・57実測図

表51　SI56・57ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	77	45	74
P２	47	44	66
P３	57	44	71
P４	49	48	74
P５	60	45	72
P６	37	36	50
P７	42	30	70
P８	60	46	61
P９	61	54	13
P10	30	20	39
P11	49	38	50
P12	44	38	43



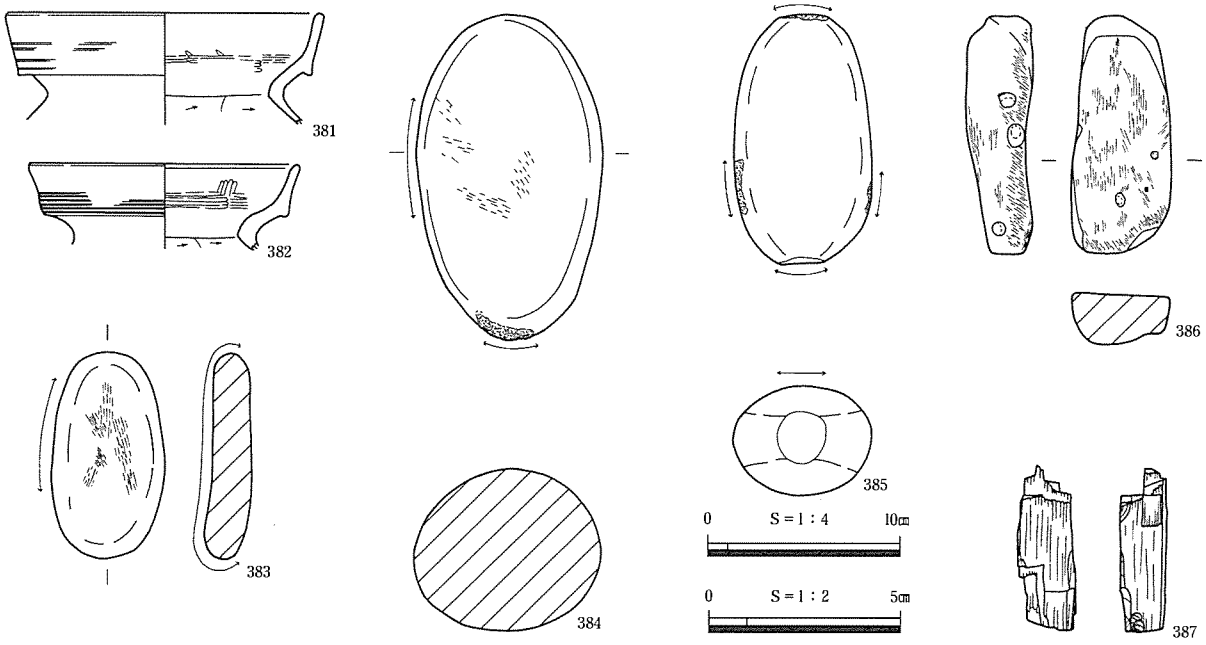
第119図　SI56出土遺物　379は　S＝½

壁溝より内側の出土遺物を、SI57出土遺物として取り上げを行った。SI56の規模・平面形は直径が約５ｍの円形の竪穴住居跡である。主柱穴はＰ５～Ｐ８で、４本柱の住居跡と考えられる。主柱穴との位置的関係からみて、Ｐ９は中央ピットとみられる。主柱穴間距離は2.4m～2.7mである。

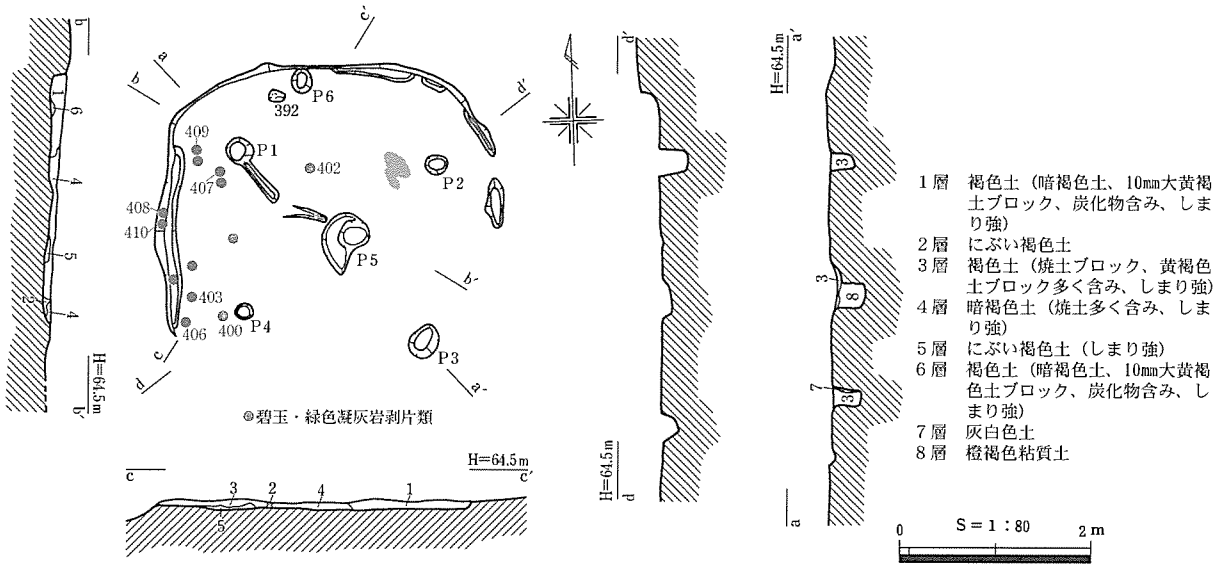
出土遺物は埋土中から鉇379、土器が出土した。380の甕は、外傾する口縁部の外面に４条の沈線を施したのち、ナデを施す。清水編年のＶ－３期に該当するとみられる。このことから弥生時代後期後葉のものと考えられる。　（小山）

SI57（第118図、PL. 31）

G12グリッドの台地の縁辺部に位置し、SI56と重複関係にある。規模・平面形は一辺5.2mの隅丸方形であり、SI56より新しい要素を持つ。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。主柱穴間距離は短辺が2.7～3.1m、長辺が3.5～3.6mである。Ｐ８は位置的にみて、中央ピットの可能性もあるが、土層断面の観察から柱痕跡らしき立ち上がり（１層）が認められる。このことから前述のSI56の主柱穴とみるのが妥当と考えられる。出土遺物はすべて埋土中からの出土である。弥生土器、石器、珪化木が出土した。



第120図　SI57出土遺物　387のみ　S＝½



第121図　SI58実測図

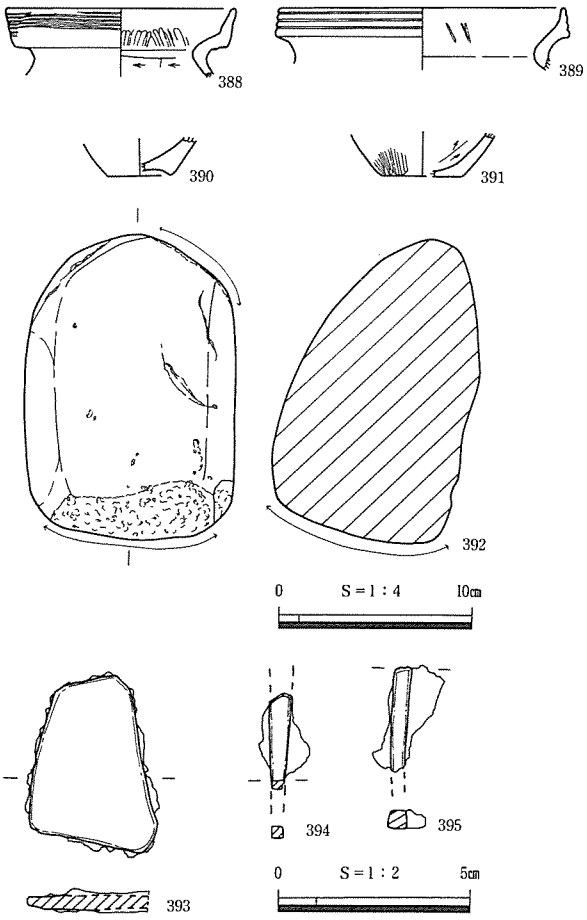
381、382の甕口縁部は、ともに床面付近出土のものである。外傾する口縁部外面に平行沈線を施した後、ナデ調整を行う。381は内面に赤色塗彩を施す。387の珪化木は加工を施した痕跡は認められない。床面付近出土の土器は、清水編年のＶ－３期のものとみられることから、当住居跡は弥生時代後期後葉のものと考えられる。SI56との新旧関係については、土器からみる限りSI56出土の甕よりもSI57出土のものが、口縁部の発達がみられ、新相を示すと考えられる。このことから、SI57が新しいと考えられる。　（小山）

SI58（第121図、PL. 31）

F10グリッド、標高64m付近の斜面部に位置する。東壁はすでに失われており、遺存状況は良好ではない。壁高は北西隅の最深部で15cmであった。埋土は褐色系の土による自然堆積とみられる。遺存状況が良くないが、攪乱などは認められなかった。本遺構の規模・平面形は、東西3.5m、南北の現存長2.9mを測り、他の住居跡に比べやや小規模である。床面では６基のピットを検出した。このうち主柱穴と考えられるのは、Ｐ１～Ｐ４である。いずれも直径、深さと

表52　SI58ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	28	26	31
Ｐ２	24	20	30
Ｐ３	36	29	17
Ｐ４	18	18	53
Ｐ５	70	48	38
Ｐ６	26	21	31

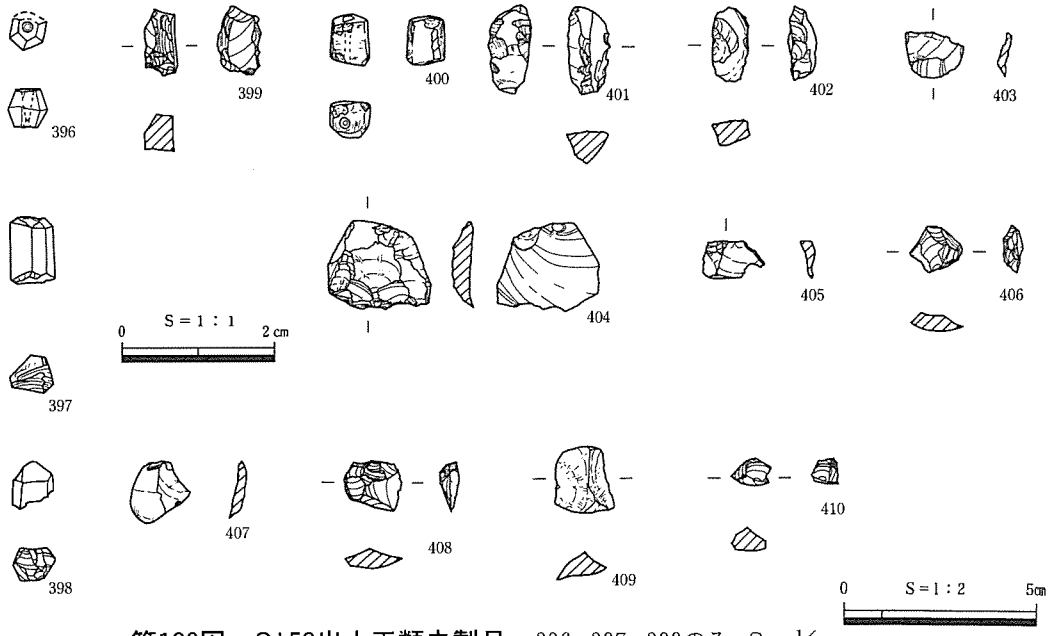


第122図　SI58出土遺物　393～395は　S＝½

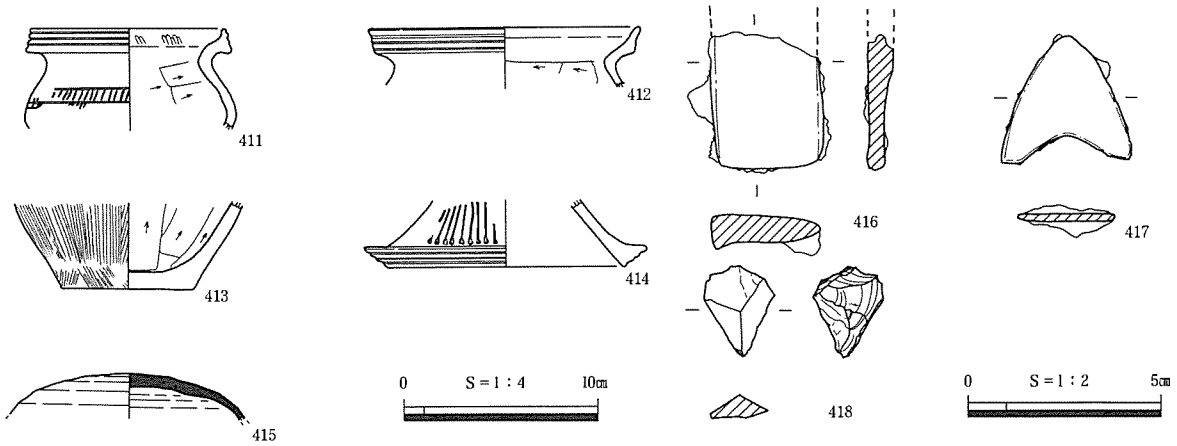
もに20～30cm前後の小ピットである。主柱穴間距離は1.7～2.1mである。Ｐ６のみ埋土が黒褐色土であり、時期を異にする可能性がある。Ｐ５は中央ピットである。ここからＰ１へ向かって幅10cm、深さ３cmの溝がのびる。溝底のレベル差は顕著ではない。床面では１ヶ所の焼土面を検出した。壁際には幅10cm、深さ３cm前後の周壁溝がめぐる。埋土の掘り下げ中、碧玉の剥片類が出土したことから、埋土をふるいに掛けたところ、多数の碧玉・水晶・緑色凝灰岩の剥片が出土した。また床面からも管玉未製品や、碧玉・緑色凝灰岩の剥片が出土した。特筆すべきものとして、埋土中から極小の水晶製切子玉396が出土した。上部裏面に欠損があるが、割れ口の観察から穿孔時の加圧による破損ではなく、上部からの硬質ハンマーの加撃による破損とみられる。素材自体は透明感のある良質の水晶であるが、表面は研磨による擦痕が残り、白く曇る。このため最終の仕上げ段階の未製品の可能性がある。全長、最大幅ともに5.3mm、重さ0.2ｇを測る。当遺跡において、埋土中から玉作関連遺物が出土した住居跡は他にもあるが、これらは住居に伴う遺物とは考え難く、流入物とみられる。床面から未製品や剥片類が多数出土した例は、SI58のみである。このことから、SI58は、玉作工房跡と考えられる。また水晶はすべてふるいにかけて検出したものであり、原位置を確認できるものはないが、碧玉剥片と同様当住居跡に伴うものとみられる。その他の遺物としては、敲石392や棒状鉄製品394、395、板状鉄製品393がある。いずれも埋土中からの出土であり、玉作に関連する遺物であるか不明である。出土土器は埋土中及び中央ピット内から若干出土した。やや古い土器もあるが、清水編年のＶ－３期に該当する土器を含むことから、遺構の時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。　　（小山）

SI59（第125図、PL. 32）

F10グリッドの台地の縁辺部に位置する。北西部はSI60と重複するが、SI59がSI60の埋土を掘り込んでいることから当住居跡が新しい。壁高は西側で23cmを測る。規模・平面形は、直径4.2mの円形の住居跡である。検出したピットは５基である。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴で、主柱穴間距離は2.2mであった。Ｐ５は主柱穴であるが、床面にてＰ３と西側へ向かってのびる幅約10cmほどの溝を２条検出した。床面には２ヶ所ほど焼土面が検出された。西壁と東南側の一部では、幅18～28cm、深さ３～11cmの周



第123図　SI58出土玉類未製品　396、397、399のみ　S＝¼



第124図　SI59出土遺物　416～418は　S＝½

壁溝が検出された。

出土遺物は埋土中から弥生土器、須恵器、鉄器、水晶の剥片が出土した。このうち415の須恵器杯蓋や418の水晶剥片は、埋土中への混入品とみられる。416は板状の鉄器である。417は無頸の鉄鏃の形態であるが、鉄板の裁断片の可能性もある。出土土器は清水編年のＶ－２期に該当することから、弥生時代後期中葉のものと考えられる。　（小山）

表53　SI59・60ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	61	44	48
Ｐ２	34	31	52
Ｐ３	22	18	42
Ｐ４	22	21	32
Ｐ５	64	54	21
Ｐ６	34	32	18
Ｐ７	38	32	62
Ｐ８	46	44	58
Ｐ９	62	46	42
Ｐ10	43	32	21
Ｐ11	52	37	24
Ｐ12	38	38	35
Ｐ13	28	28	21
Ｐ14	44	39	12

SI60（第125図、PL. 32）

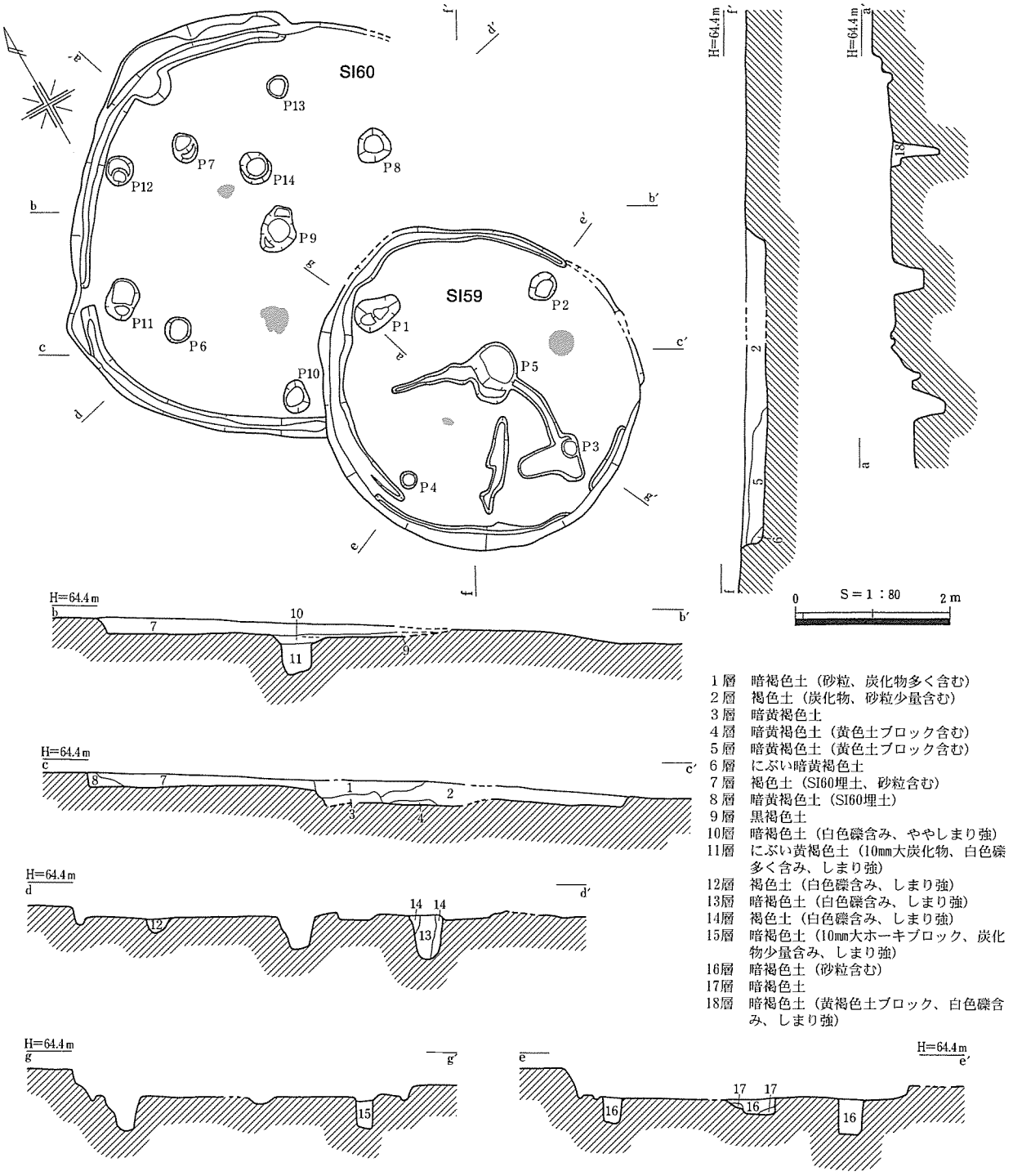
Ｆ９グリッドからその南にかけて、台地の縁辺部に位置する。西半部のみ遺存し、東半部はこれより新しい住居跡であるSI59による破壊や、その他の削平によりすでに失われていた。壁高は最も残存する南西部で36cmである。規模・平面形は一辺が5.3mの隅丸方形とみられる。床面にて多数のピットを検出したが、このうちＰ１とＰ６～Ｐ８が主柱穴である。Ｐ１はSI59の主柱穴でもあるが、形がやや歪であり２基のピットが重複したものとみられる。主柱穴間距離は2.4～2.5mである。

出土遺物は埋土中から土器、石器、玉類未製品が出土したが、図化した土器はいずれも床面付近か、下層出土のものである。床面に近い位置で出土した419は内面ヘラケズリが頸部直下までは達していないが、上半部に及んでいることから、清水編年のＶ－１期とみられる。その他は下層埋土中のものである。このことから、弥生時代後期前葉の住居跡と考えられる。　（小山）

SI61（第127図、PL. 32）

H13グリッドに位置し、標高約65.4mの平坦部に立地する。北西側をSI26に切られる。平面形は隅丸五角形を呈する。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い南側で30cmである。床面は平坦でAT層をそのまま床面としている。壁面は床面よりやや外側に傾斜を持って立ち上がる。周壁溝はほぼ全体を検出した。大きさは幅14cm、床面からの深さは７cmで、断面は「U」字状である。

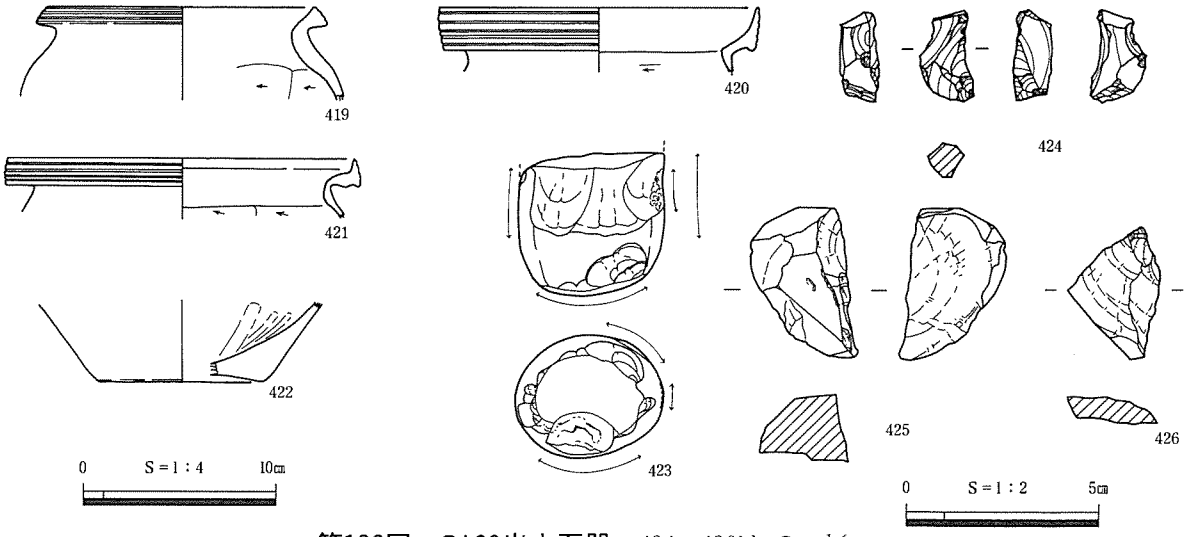
ピットは16基検出した。このうち主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ５である。主柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３の順に2.9m、2.8m、3.0m、2.9m、2.9mである。中央ピットはＰ６である。Ｐ６



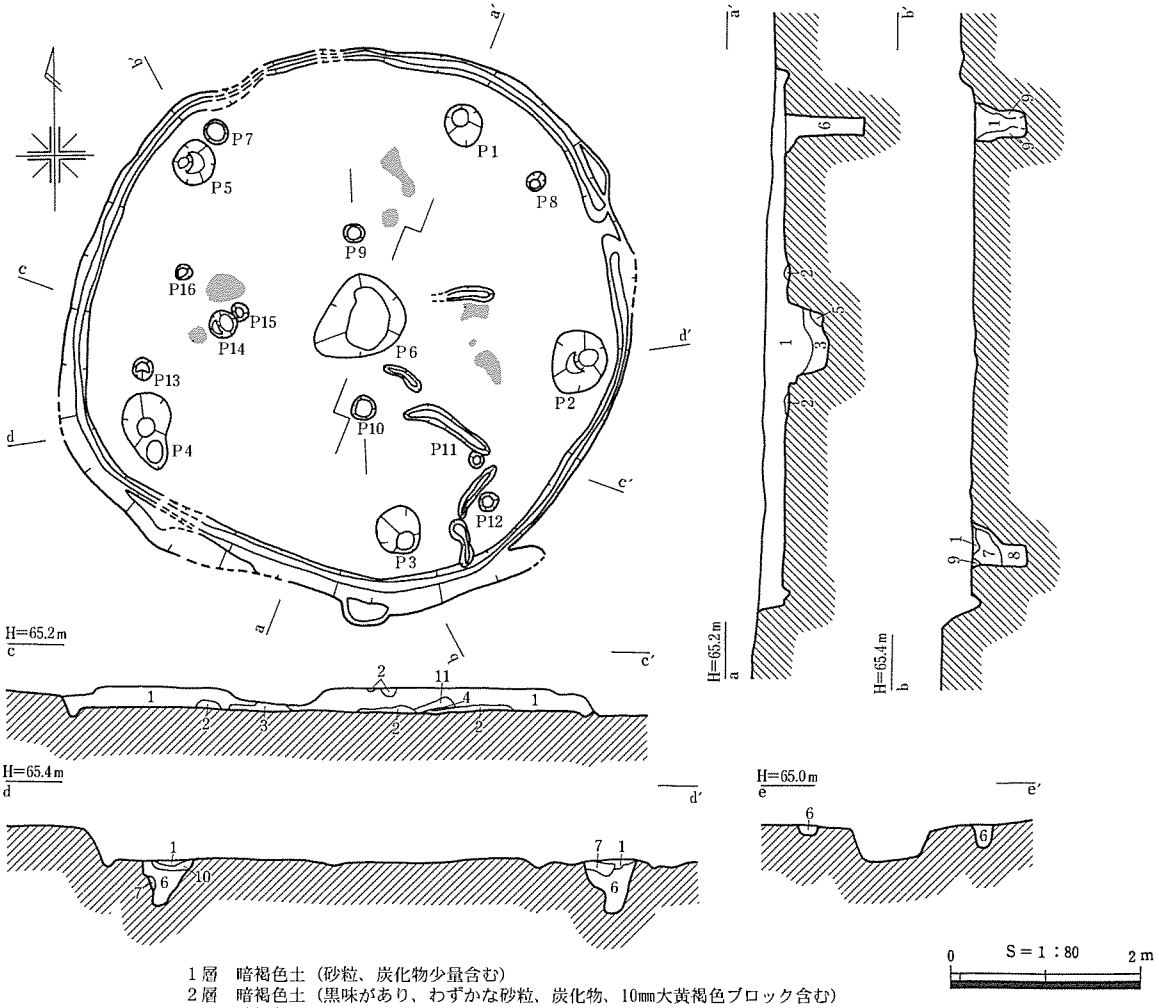
第125図　SI59・60実測図

から東側と南東側に向かって床溝が２条のびている。途切れている部分もあるが、周壁溝に繋がっていたものと考えられる。大きさは幅12cm、床面からの深さは３cmで、断面形は「U」字状である。P９、P10は直径20cm、深さ10～25cmほどのピットである。P６を挟むかたちで一直線上に並んでいる。P６までの距離はいずれも90cmである。何らかの補助的な柱が立てられていたか、もしくはP６に伴う構造物の一部であった可能性が考えられるが、明確にその性格を判断する状況は確認できなかった。その他のピットの性格は不明である。焼土面はP６の周囲の床面で、７ヶ所検出した。

遺物はP６から甕の口縁部427、埋土下層から器台の脚部428と高杯の脚部429が出土している。これらはいずれも清水編年のV－３期に相当する。また、P２の検出面直上では管玉436が出土してい



第126図　SI60出土石器　424～426は　S＝½



1層　暗褐色土（砂粒、炭化物少量含む）
2層　暗褐色土（黒味があり、わずかな砂粒、炭化物、10mm大黄褐色ブロック含む）
3層　暗褐色土（2層よりも炭化物を多く含む）
4層　灰褐色土
5層　暗褐色土（黒味があり、わずかに褐灰色土含む）
6層　暗褐色土（炭化物わずかに含む）
7層　暗黄褐色土（30mm大黄褐色土ブロック含む）
8層　暗黄褐色土（7層に比べしまり弱）
9層　褐色土（しまり強）
10層　褐色土（黄褐色土ブロック含み、しまり強）
11層　撹乱土

第127図　SI61実測図

表54　SI61ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	46	40	83
P 2	72	57	83
P 3	52	48	73
P 4	83	52	51
P 5	48	48	60
P 6	104	82	33
P 7	25	25	54
P 8	17	17	51
P 9	19	19	10
P10	25	20	26
P11	20	15	6
P12	20	16	25
P13	23	21	39
P14	30	27	6
P15	18	14	47
P16	19	14	31

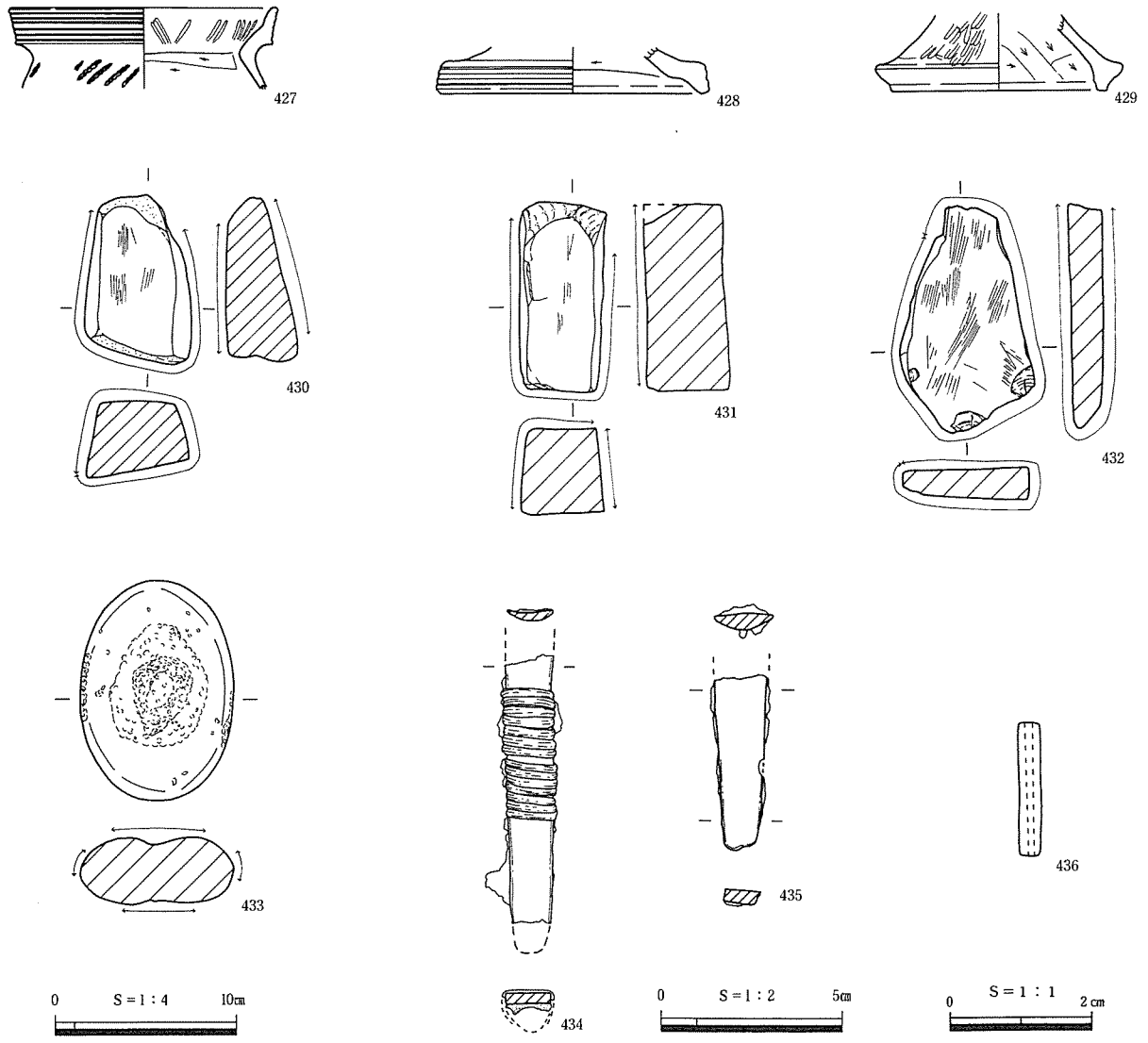
る。これは軟質の緑色凝灰岩製で、淡緑色の製品である。長さ3.7cm、直径6.6cmで、両面穿孔を行う。当遺跡で出土した他の玉作関係の素材とは、かなり異質である。床面付近からは、砥石430、431、432、鉇434、435が出土している。434は柄の部分に、下面から木柄があてがわれ、蔓状の紐がまかれて握り部分が作られている。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期後葉と考える。これはSI26との切り合い関係と矛盾しない。

（淺田）

SI63（第129図、PL. 33）

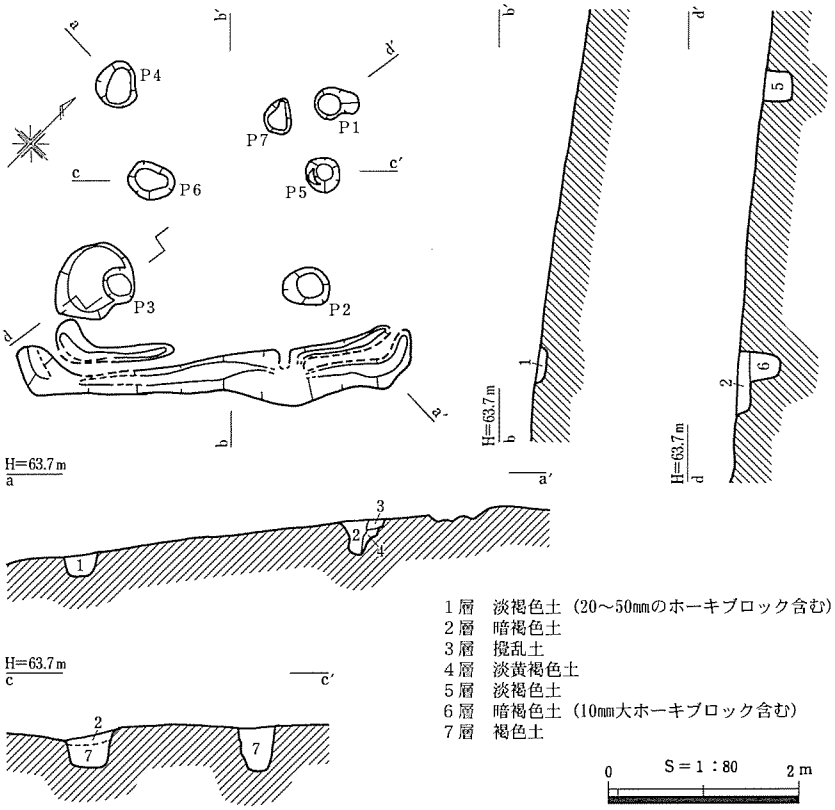
本住居は調査区北西側のＫ６グリッドに位置する。標高およそ63.3mの高さで、ホーキ及びソフトロームを主とした２次堆積土層で検出した。本住居跡が位置する調査区北西側は、調査区の西側に入り込む谷に向かって傾



第128図　SI61出土遺物　434・435は S＝½、436は S＝1/1

斜した地形を呈すため、住居構造と埋土の大半は谷部に向かい流失し、南東側周壁溝と柱穴、及びピットを確認するのみであった。

なお、ここで取り上げるピットであるが、上述のように本住居跡の埋土、及び床面はほぼすべて失われているため、確実に本住居跡に伴うものとは言えないが、本住居跡と推定される範囲で検出したものを含めた。



第129図　SI63実測図

さて、本住居跡は確認された東南周壁溝では4.2mを測り、隅丸方形を呈する。床面は残存する東南周壁溝付近では、ホーキ及びソフトロームを主体とした２次堆積土層を床面とする。ピットは７基検出した。Ｐ１～４が主柱穴と考えられ、深さはＰ２でやや浅くなるものの標高63.2m付近に揃えている。周壁溝は東南周壁溝の南隅部分、東隅部分においてさらに内側にめぐる。東隅部分のものは外側周壁溝と一部切り合う箇所があるが、遺存状態の悪さからその新旧関係は明らかにできなかった。この２重にめぐる周壁溝は切り合い関係が確認できなかったことから拡張・縮小等は不明であるが、建て替えの可能性が考えられる。その場合、主柱穴としてはＰ１～４を新旧の住居で継続して使用していた可能性のほか、前後どちらかの住居でＰ５・６を主柱穴とした２本柱の住居が構築された可能性もある。なお、本住居跡の時期であるが、図化はできなかったが、清水編年Ｖ－３期に相当する甕の破片が出土しており、弥生時代後期後葉の年代が考えられる。　（野口）

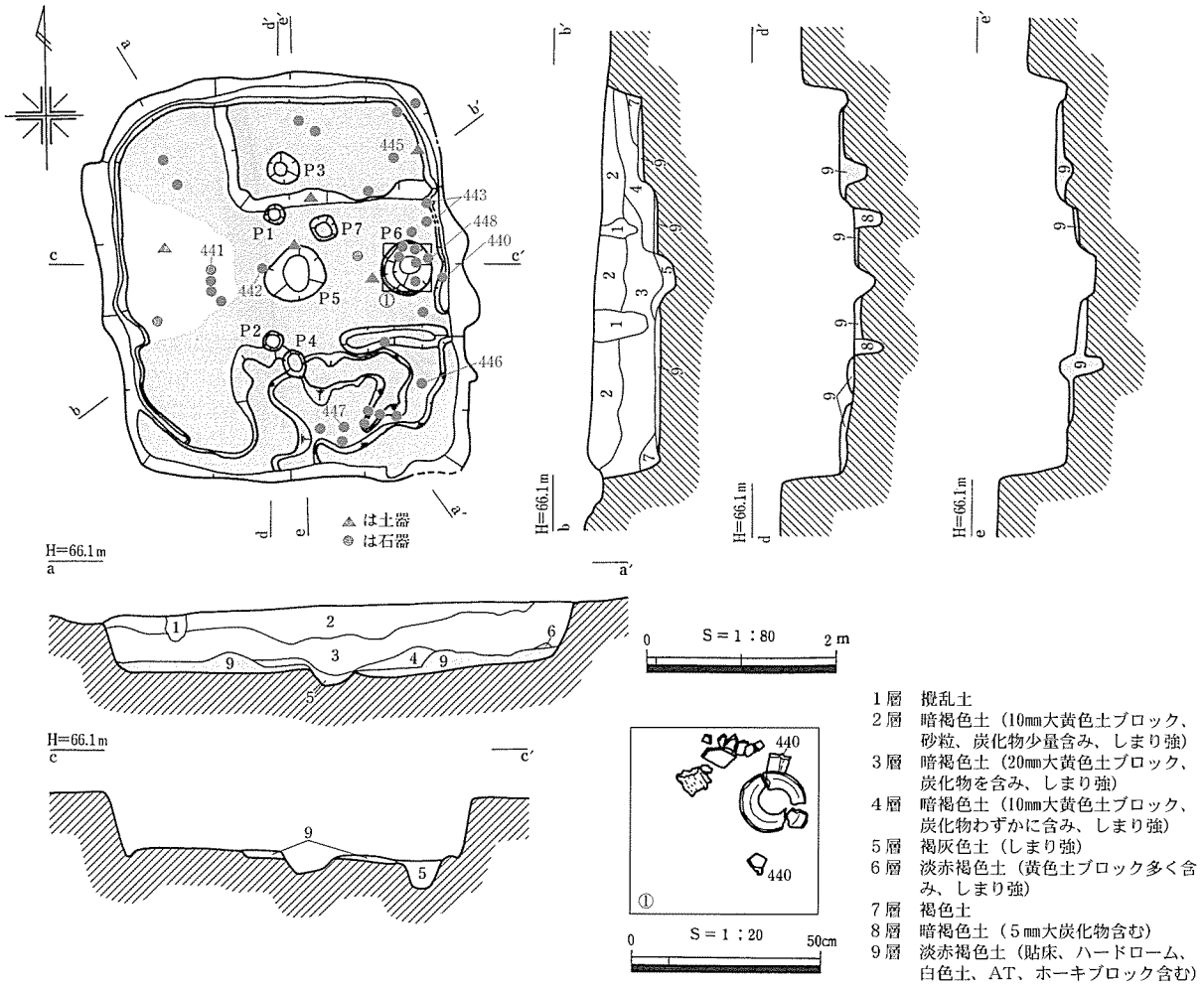
表55　SI63ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	46	34	30
Ｐ２	49	41	38
Ｐ３	85	78	43
Ｐ４	50	43	24
Ｐ５	36	36	49
Ｐ６	50	40	41
Ｐ７	36	26	6

SI64（第130図、PL. 33）

H15グリッド、SI42の北西側に位置する。一部SI42と切り合い関係にあり、SI42の埋土を掘り込んで建てられている。本住居跡は調査区内を南北に通る農道の直下に位置しており、この農道の付け替え後、標高60.0mの高さで、ホーキ層を検出面とし確認した。住居の遺存状況は上半部を農道により削平されているが、比較的よく遺存しており、残りの良い部分では深さ70cmを測った。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.9m、南北4.4m、主軸を南北にする。

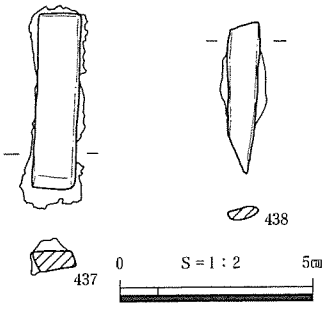
本住居跡はベッド状の遺構を持つ住居であり、住居の東南、北東の隅に東西230cm、南北110cm、高



第130図　SI64実測図

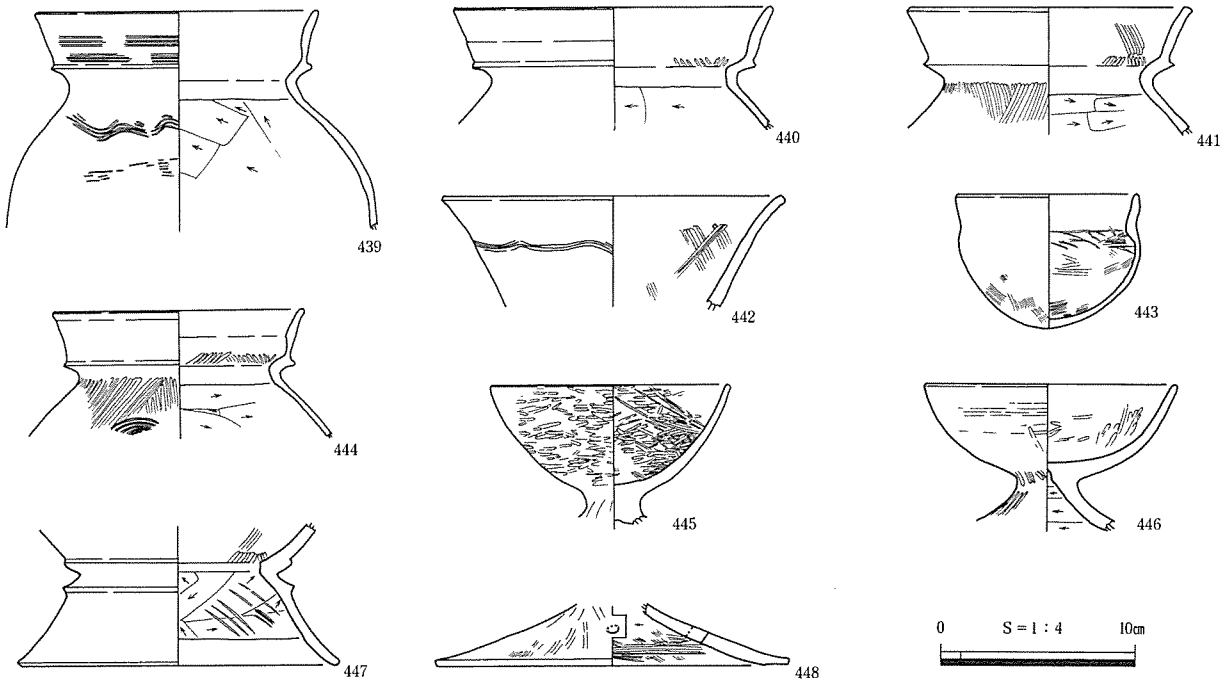
表56　SI64ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	22	22	23
P２	18	18	22
P３	36	31	37
P４	30	22	35
P５	63	56	18
P６	59	52	34
P７	27	27	60



第131図　SI64出土鉄器

さ10～20cmほどの段が付けられている。南側部分のベッド状遺構に関しては、本来は北側部分と同様に上面を平坦にするものと考えられるが、ベッド状遺構を構築する土を埋土と誤認してしまい、一部掘り込みすぎてしまった。ベッド状遺構を構築する土は、下半部は地山を段状に削り残し、上半部は床面に施された貼床に用いられている土と同じハードローム（淡赤褐色粘質土）を主体とした淡赤褐色土からなる。貼床は住居西側部分で一部施さないハードロームの地山を床面とする箇所があったほか、段差の部分ではこの淡赤褐色土は連続しないが、ベッド状遺構付近では平面的に床面とベッド状遺構の上面は同一の色調を呈している。また、周壁溝は南側のベッド状遺構、およびその周辺では認められなかったが、他の部分では北側のベッド状遺構の上面を含みめぐっている。本住居跡の主柱穴にはＰ１・２が該当し、２本柱の建物であったと思われる。Ｐ１・２とも南北のベッド状遺構の上面から床面に下る段差の部分から掘り込まれている。Ｐ１・２の中間である住居中央



第132図　SI64出土土器

にはＰ５が配され、東壁寄りで確認したＰ６からは土師器甕の上半部が出土した。また、ベッド状遺構の上半部、及び床面に施された淡赤褐色土を除去したところ、Ｐ３・４がそれぞれ北側のベッド状遺構と南側のベッド状遺構下で検出された。埋土は両者とも貼床に用いられている淡赤褐色土の単層であったことから、本住居構築に伴い掘削された可能性が高い。

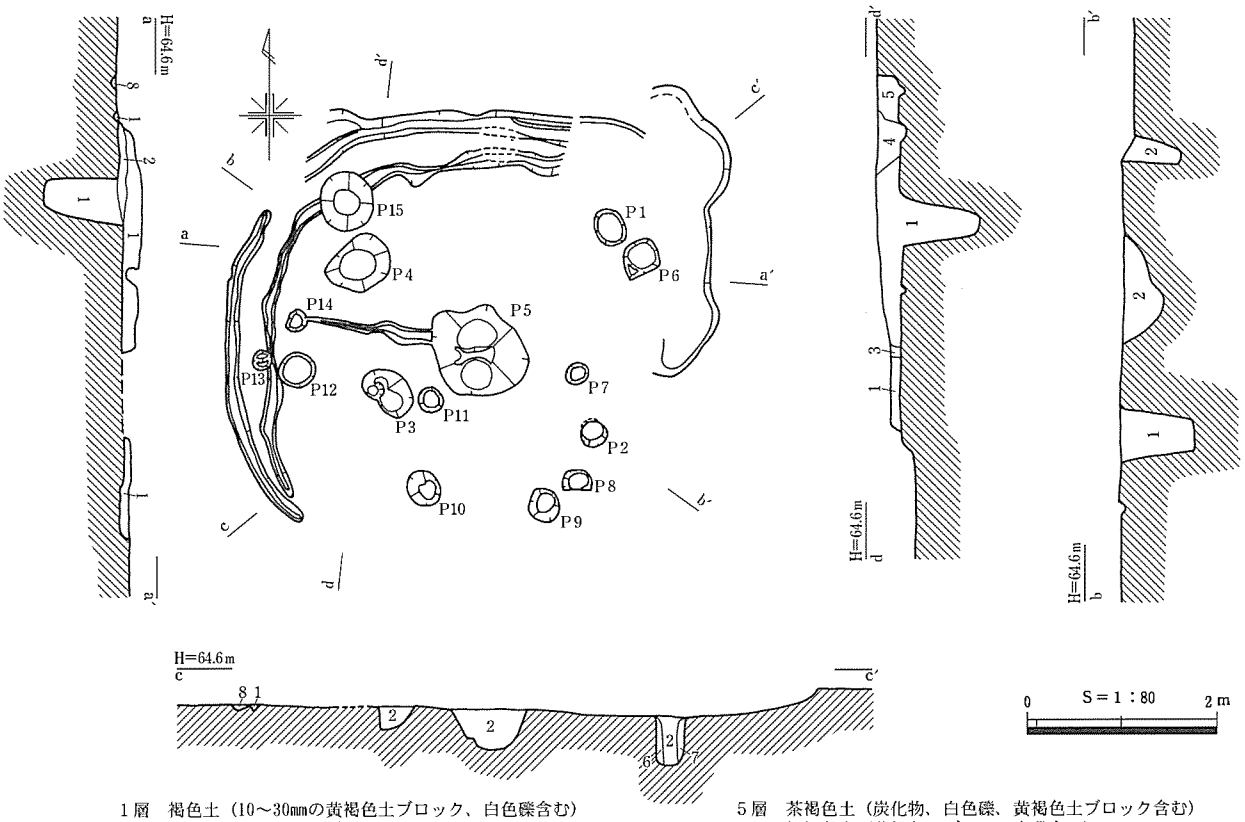
さて出土遺物と遺構の時期であるが、甕、器台、高杯、鉢などがみられた。そのうち床面直上から出土した439は清水編年のⅥ期に相当することから本遺構は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃と考えられる。　（野口）

SI65（第133図、PL. 34）

Ｆ９グリッド杭の南に立地する。遺構は北東側から中央にかけて埋土が薄く残る状態で検出でき、西側は攪乱土の除去後にわずかに周壁溝を検出した。埋土の堆積状況から、２棟の住居が切り合い関係にあることが確認できた。新旧関係については、外側の周壁溝を伴う住居を掘り込んで、内側の溝を伴う住居がつくられている。２棟とも床面は同一である。P15周辺では、薄い貼床層を確認した。検出面から床面までの深さは北側で最大22cmを測る。建て替え前の住居は、周壁溝の形状からみて平面形は隅丸方形である。周壁溝は１条検出した。外側の溝は幅14.0cm、床面からの深さは6.4cmで断面形は「U」字状である。攪乱土の除去後にも一部検出できたことから、本来は全周していたものと考えられる。建て替え後

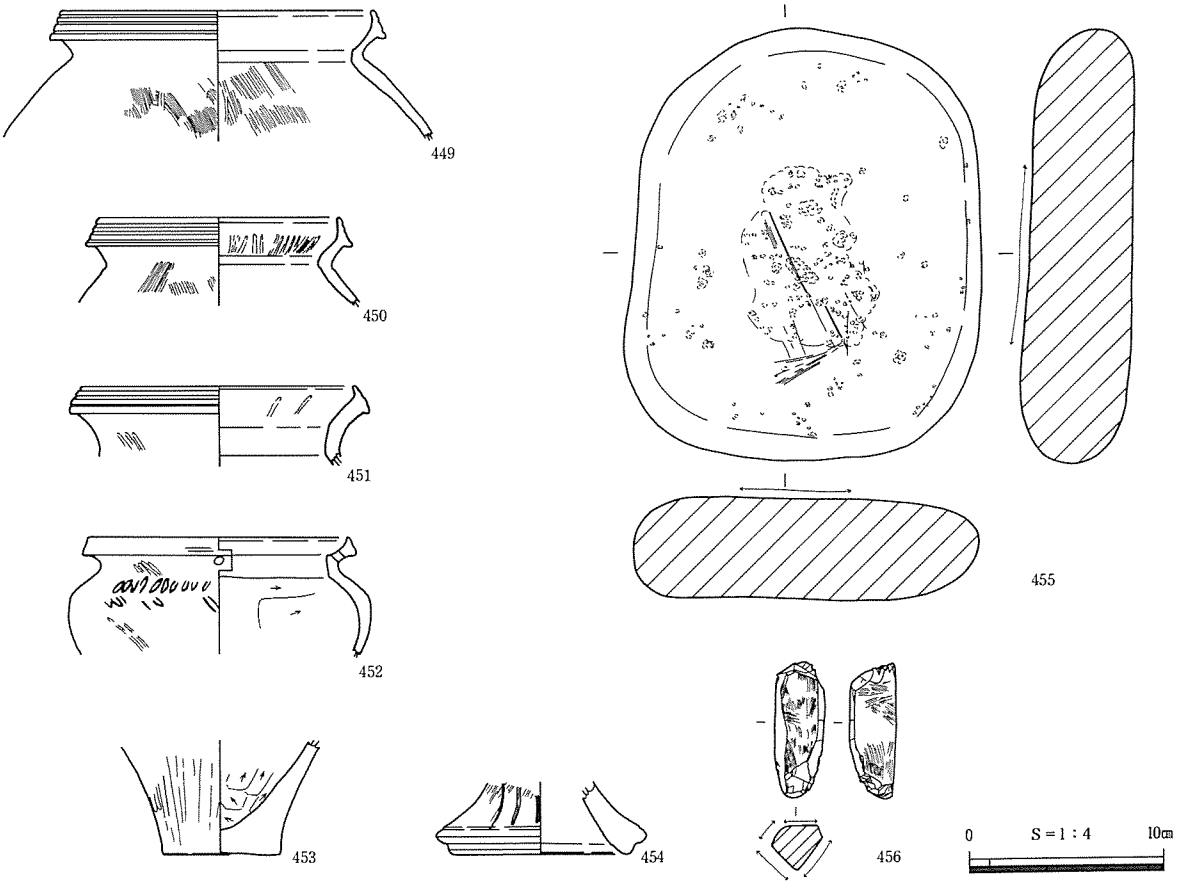
表57　SI65ピット表

ピット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40	32	54
Ｐ２	28	28	63
Ｐ３	56	32	68
Ｐ４	72	54	79
Ｐ５	92	88	44
Ｐ６	48	38	54
Ｐ７	25	22	49
Ｐ８	29	21	44
Ｐ９	23	19	15
Ｐ10	38	32	19
Ｐ11	27	24	25
Ｐ12	40	36	41
Ｐ13	20	17	10
Ｐ14	41	33	39
Ｐ15	72	62	70



1層　褐色土（10～30mmの黄褐色土ブロック、白色礫含む）
2層　暗褐色土（黄褐色土ブロック、白色礫、褐色土少量含む）
3層　暗褐色土（10mm大黄褐色ブロック少量含む）
4層　にぶい褐色土（20mm大黄褐色土ブロック含む）
5層　茶褐色土（炭化物、白色礫、黄褐色土ブロック含む）
6層　橙褐色土（黄褐色土ブロック少量含む）
7層　灰白色土（橙褐色土含む）
8層　褐色土（黄褐色土ブロック、灰白色土含む）

第133図　SI65実測図



第134図　SI65出土遺物

の住居も周壁溝の形状からみて隅丸方形である。内側の溝は、幅19cm、深さ4.9cm、断面形は「U」字状で、本来は全周していたものと考えられる。ピットは両遺構合わせて15基検出した。主柱穴は明らかでない。中には住居に伴わないものも含むと思われる。P15は、内側の周壁溝を切っていることから両遺構に伴わないものと考えられる。床溝は１条検出した。幅は４～16cm、深さは１～４cmである。この溝についても、どちらの遺構に伴うものか不明である。

遺物については、一部を床面に接して斜めになった状態で台石455が、床面より10cm上の埋土から砥石456が出土した。またＰ５の南東側で、床面から４cm上で甕の口縁部449が出土した。これは清水編年のⅣ－２期にあたることから、弥生時代中期後葉の時期が考えられる。449は建て替え後の住居の埋土中の出土であるが、いずれの住居の時期を示すものか、定かではない。　（阪上）

(3)　掘建柱建物

SB１（第135図、PL. 36）

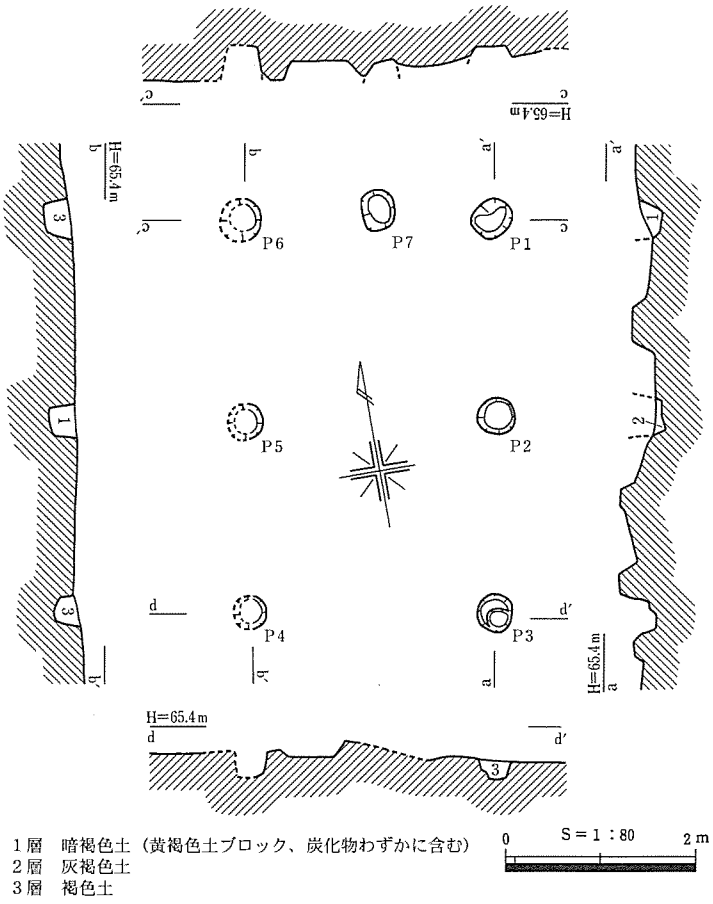
H14・I14グリッドに位置し、標高65.2～65.6mの、本遺跡内において最高所付近の平坦地に立地する。

建物の規模は桁行２間（4.3m）、梁行１間（2.6m）である。側柱の柱穴間距離は、2.1～2.2mである。全ての柱穴が果樹園耕作時に上面を削平されており、底部のみ残存している状態であった。さらに西側の柱穴は西側半分を暗渠排水用の掘削のために破壊されており、半円状の検出である。Ｐ７は棟持柱と考えられる。南側で対応するピットは他に検出できなかった。

柱穴の掘方は、検出面での平面形は円形で、断面形は「U」字状である。主軸は座標北に対しＮ－10°－Ｅに振る。

遺物は出土していない。このため、本遺構の時期については不明である。

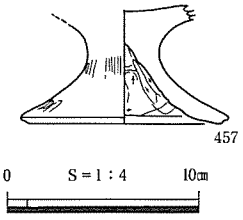
（淺田）



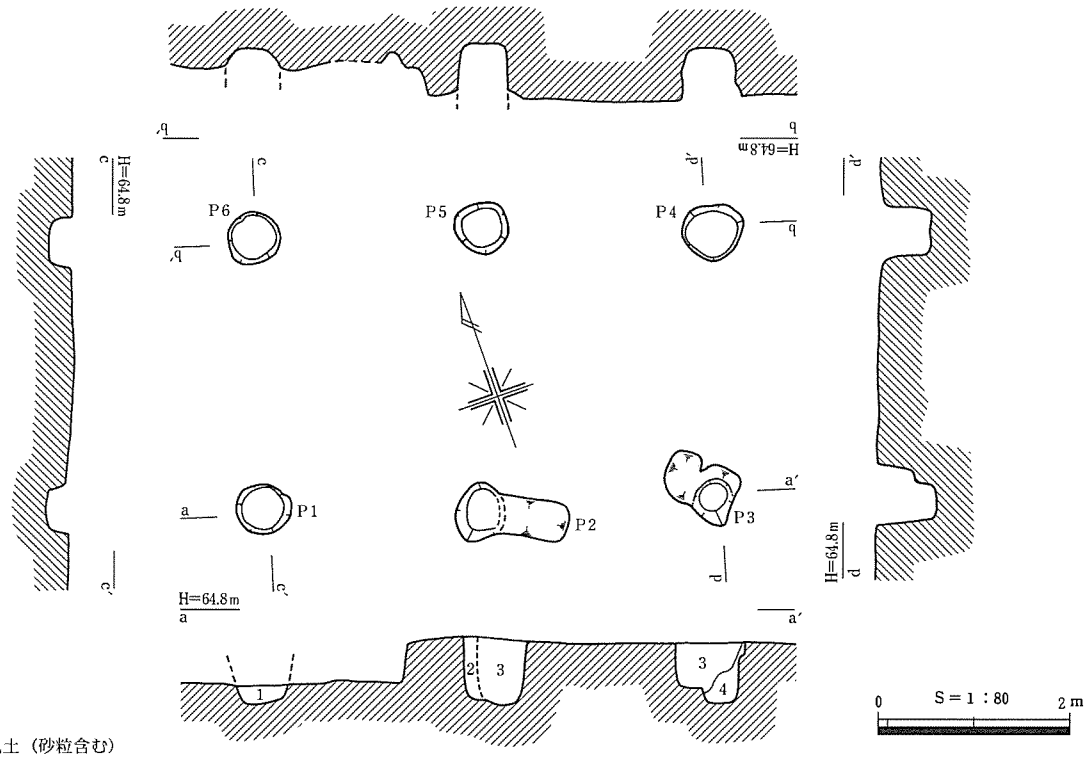
第135図　SB１実測図

SB２（第137図、PL. 36）

Ｆ７グリッドの中央、標高64.4mの平坦面に位置する。Ｐ１とＰ６はSI３の貼床除去後に検出したことから、本遺構はSI３より古いと判断した。主軸は座標北に対しＮ－18°－Ｅに振り、建物規模は桁行２間（約５m）、梁行１間（約３m）である。側柱の柱穴間距離は2.5mである。Ｐ２の東南側は攪乱を受けて壊されている。



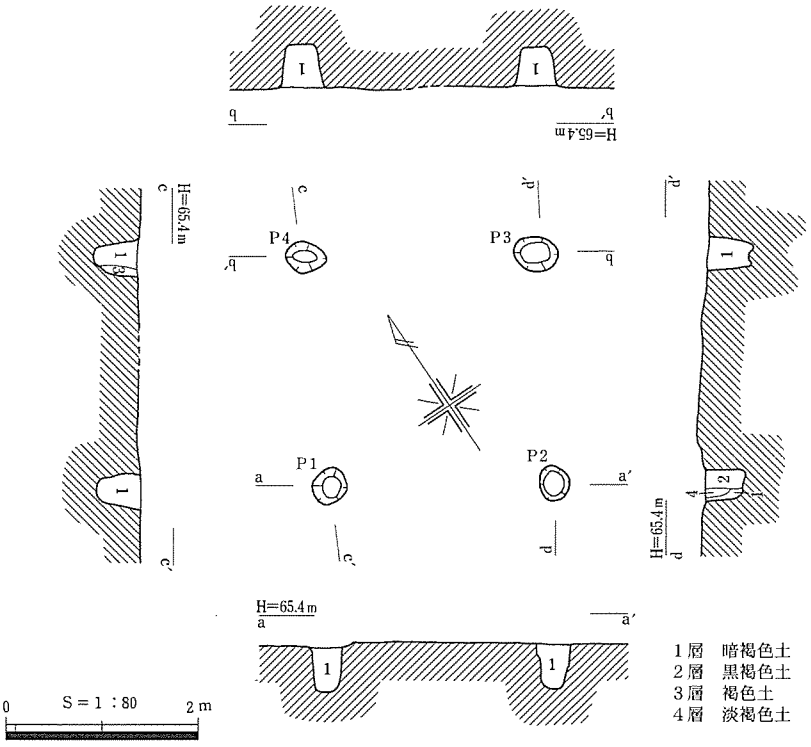
第136図　SB２出土遺物



１層　褐色土（砂粒含む）
２層　褐色土（黄褐色土ブロック含む）
３層　攪乱土
４層　暗褐色土（10～30mm大黄褐色土ブロック、炭化物含む）

第137図　SB２実測図

遺物は、Ｐ４の検出面から高杯の脚部457が出土している。本遺構の年代は、457が清水編年のⅥ期かと思われることから、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の時期と考えられる。なお、SB２より新しいSI３の時期が古墳時代前期であり、層位的にも土器が示す時期と矛盾しない。　（阪上）

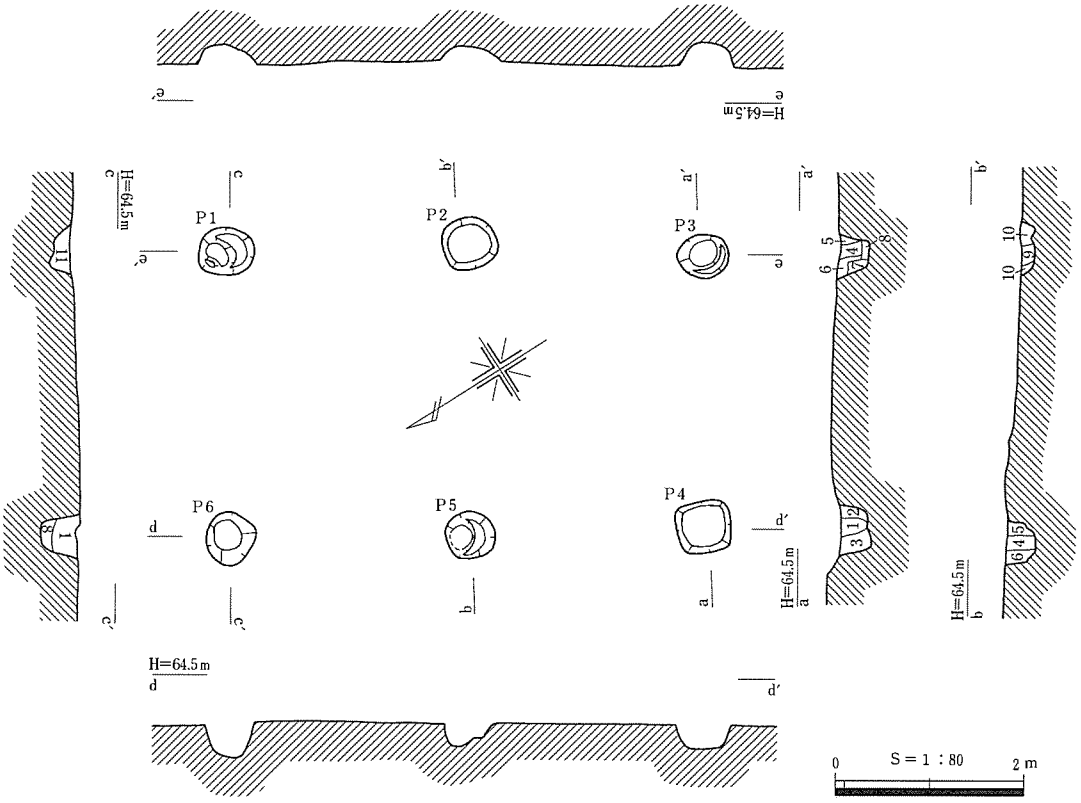


１層　暗褐色土
２層　黒褐色土
３層　褐色土
４層　淡褐色土

第138図　SB３実測図

SB３（第138図、PL. 36）

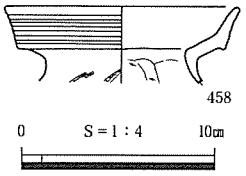
Ｊ13グリッド、標高およそ65.0mの高さで、ホーキ層を検出面とした。１間×１間の掘立柱建物で、座標北に対し、主軸を32°東に傾ける。本遺構ではＰ２とＰ４の埋土に柱痕跡と思われる黒褐色土及び暗褐色土が確認できた。ピット底面の高さはＰ１～４ともほぼ64.6mと高さを揃えた状況である。ピット間の距離は、心々で2.4～2.5mを測る。本遺構からの出土遺物はなく、時期を推察する要素は少ないが、付近には弥生時代後期後葉の竪穴住居跡SI21が近



1層　暗褐色土（10mm大黄褐色土ブロック多く含む）
2層　黄褐色土（褐色土少量含む）
3層　暗褐色土（1より暗い、10mm大黄褐色土ブロック、灰白色土わずかに含む）
4層　暗褐色土（炭化物含む）
5層　黄褐色土
6層　黄褐色土（褐色土含む）
7層　浅黄褐色土（黄褐色土ブロック含む）
8層　黄褐色土（暗褐色土含む）
9層　暗褐色土
10層　黄褐色土（黄色土ブロック含む）
11層　暗黄褐色土（暗褐色土含む）

第139図　SB４実測図

接存在することから同時併存の可能性は低い。　（野口）



第140図　SB４出土遺物

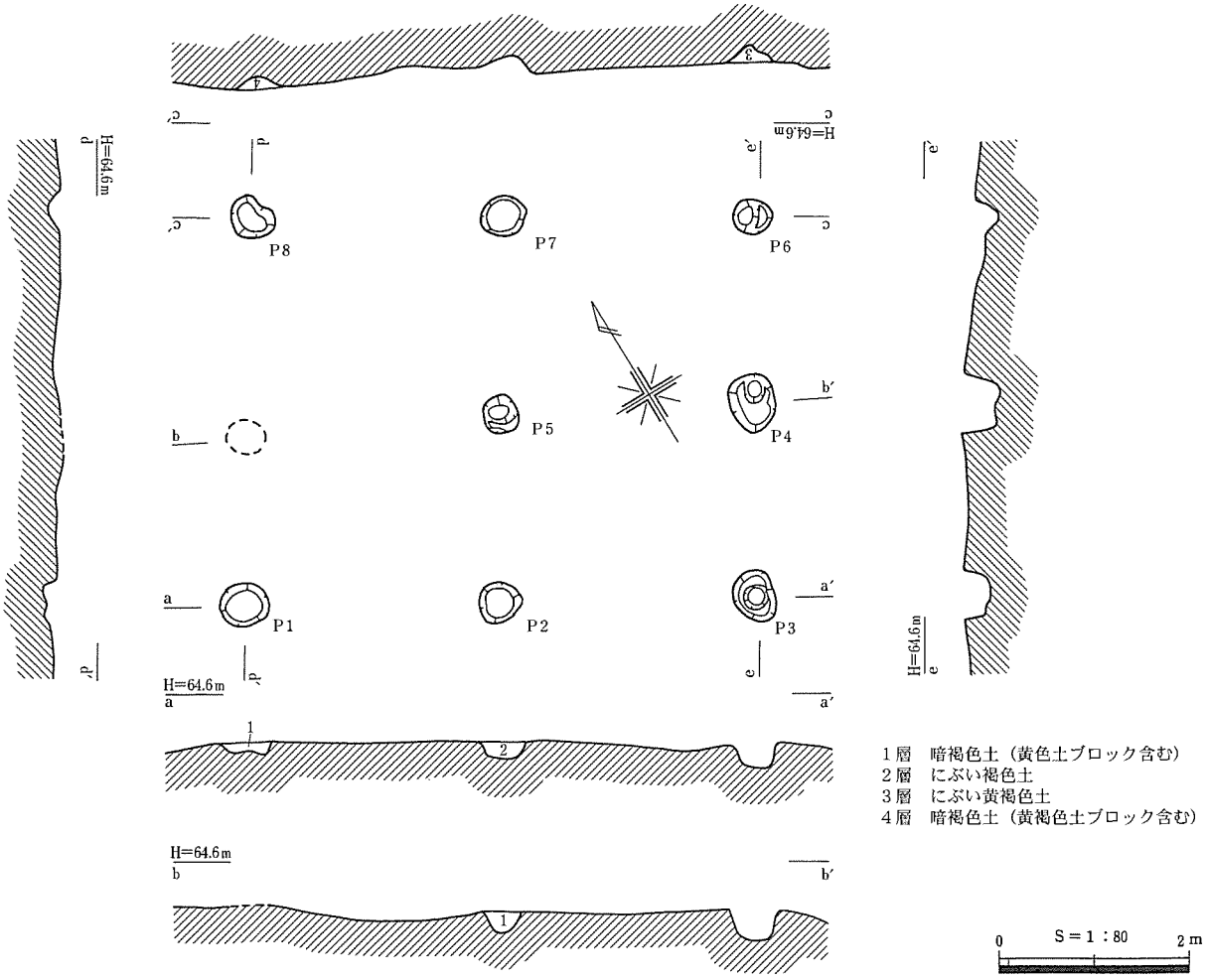
SB４（第139図、PL. 36）

Ｇ８グリッドの台地上の平坦面に位置する。大規模な攪乱を受けているため、柱穴は下部のみの検出である。主軸は座標北に対し、Ｎ－33°－Ｅに振り、建物規模は桁行２間（5.2m）、梁行１間（約3.0m）である。側柱の柱穴間距離は2.5～2.7mである。Ｐ２～５に関しては、柱痕跡が残っており、柱痕の直径は15～20cmである。

遺物は、Ｐ３の埋土中から甕の口縁部458が出土している。これは清水編年のＶ－３期にあたることから、弥生時代後期後葉のものと考えられる。　（阪上）

SB５（第141図、PL. 36）

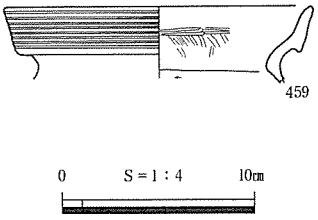
Ｈ９・10グリッド、標高64.1mの平坦面に位置する総柱掘立柱建物跡である。本遺構は大規模な攪乱を受け、遺存状況は悪い。主軸は座標北に対し、Ｎ－29°－Ｅに振り、建物規模は桁行２間（約5.4m）、梁行２間（約4.1m）である。柱列の並びから、Ｐ１とＰ８の間には柱穴を確認できなかったが、攪乱がピットの底近くまで及んでいることから、削平されたと考える。柱穴間距離は2.0～2.7mと一定ではない。遺物は出土していないため、時期は不明である。　（阪上）



第141図　SB５実測図

SB６（第143図、PL. 36）

Ｃ９グリッドの南側、標高63.0～63.3mの傾斜面に位置する。Ｐ５とＰ６はSI33の床面で検出した。主軸は座標北に対し、Ｎ－４°－Ｅに振る。建物規模は桁行２間（約4.2m）、梁行１間（約2.7m）を測る。側柱の柱穴間距離は2.1mである。柱穴の直径は平均70cmで、深さは標高の低いＰ１～Ｐ３では65cm前後、Ｐ４～Ｐ６の高い位置では100cmを測り、底面の高さを同一としていた。Ｐ１のみ柱痕跡が残っており、柱材の直径は、直径35cmと推定できる。掘方は橙褐色土を主体とする土を埋土としていた。



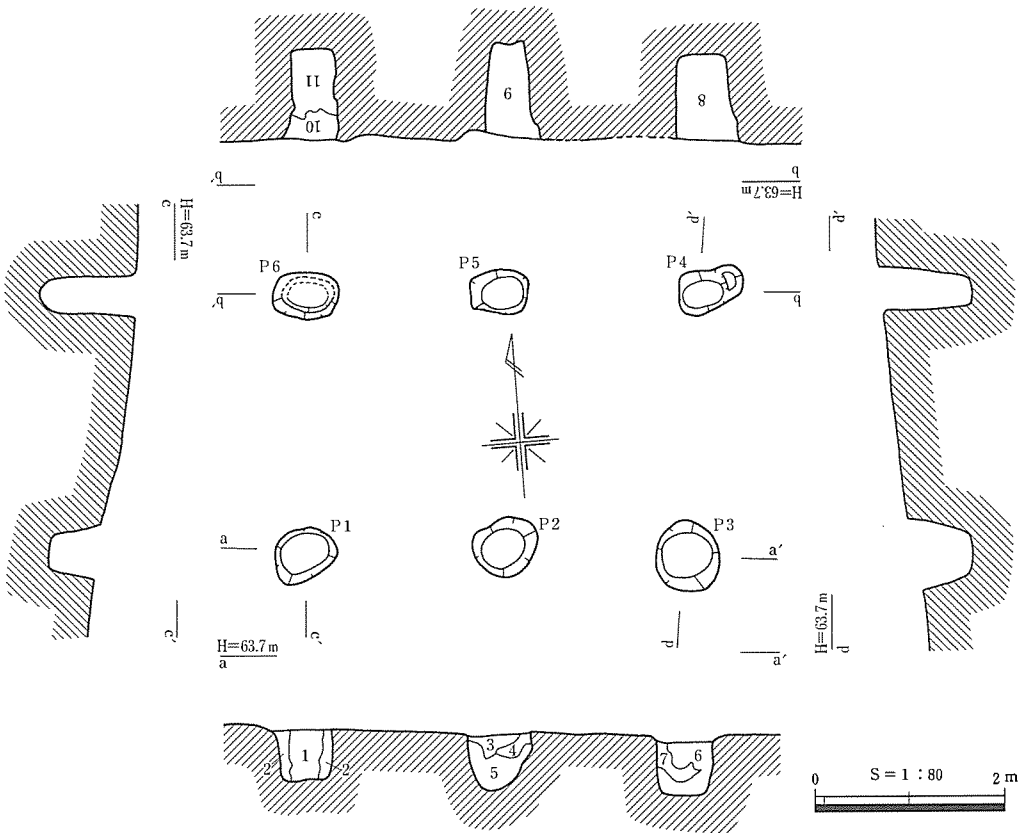
第142図　SB６出土土器

遺物は、Ｐ４の埋土中から甕の口縁部459が出土している。459は清水編年のＶ－３期に相当することから、本遺構の年代は、弥生時代後期後葉の時期とみられる。遺物から想定されるSI33の年代とも矛盾しない。（阪上）

SB７（第144図、PL. 37）

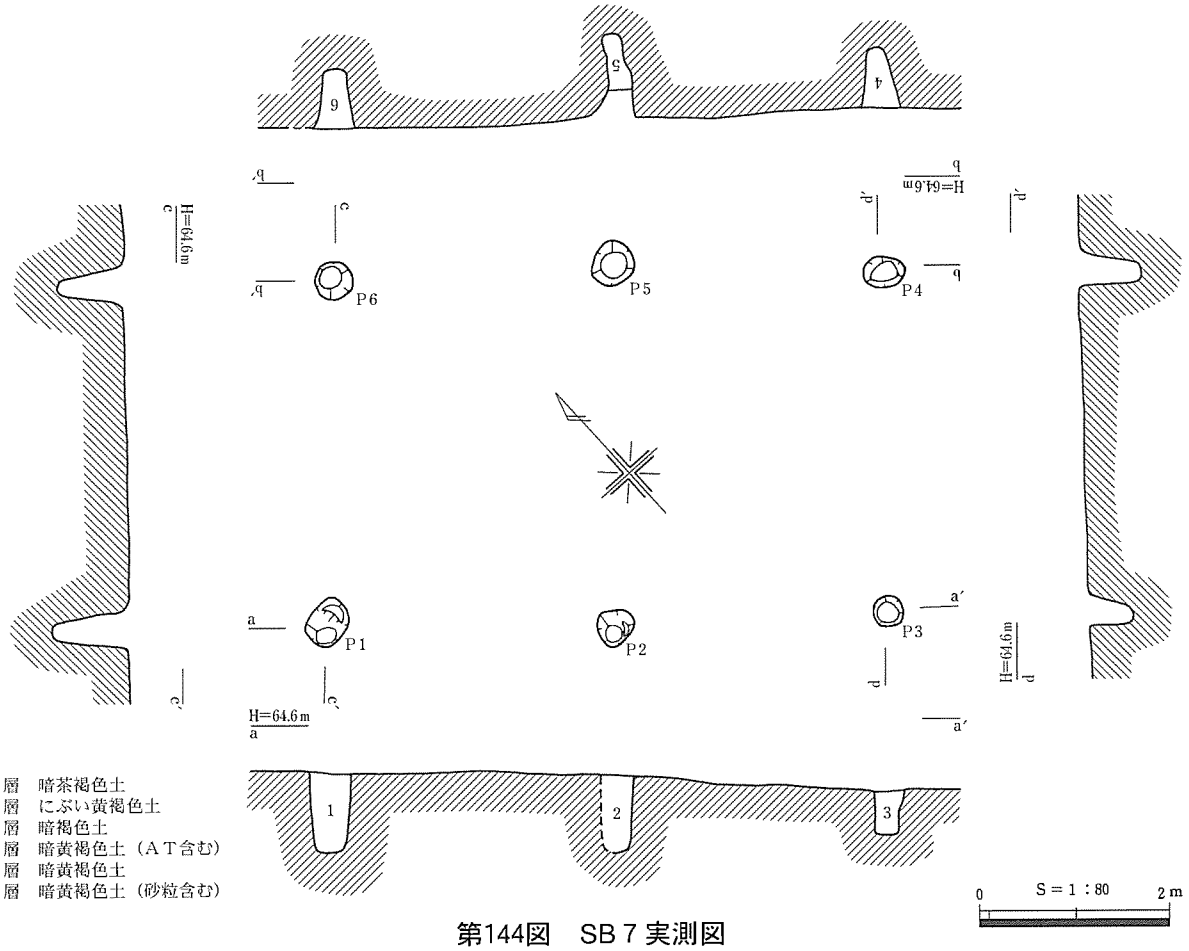
Ｃ８グリッドの中央、標高63.8～64.1mのゆるやかな斜面に位置する。SI28の東側に立地する。主軸は座標北に対し、Ｎ－41°－Ｅに振る。

建物規模は桁行２間（約6.0m）、梁行１間（約3.9m）を測る。側柱の柱穴間距離は約３mである。



1層　暗褐色土（10mm大地山ブロック多く含む）
2層　にぶい橙黄褐色土（10mm大地山ブロック多く含む）
3層　にぶい褐色土
4層　にぶい黄褐色土（10mm大地山ブロック含む）
5層　にぶい暗褐色土
6層　暗黄褐色土
7層　暗黄褐色土（20mm大地山ブロック含む）
8層　にぶい褐色土
9層　褐色土
10層　にぶい暗褐色土（砂粒、炭化物若干含む）
11層　橙黄褐色土

第143図　SB６実測図



1層　暗茶褐色土
2層　にぶい黄褐色土
3層　暗褐色土
4層　暗黄褐色土（ＡＴ含む）
5層　暗黄褐色土
6層　暗黄褐色土（砂粒含む）

第144図　SB７実測図

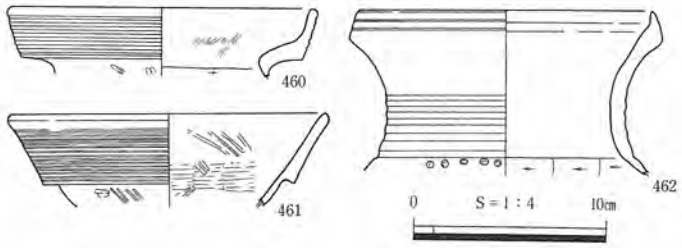
遺物はＰ５から土器片が出土しているが、遺構の年代を特定できるものでないため時期は不明である。

（阪上）

SB８（第146図、PL. 37）

F19～F20グリッドにあり、標高約66.9mの調査区内で最高所に位置する。ほぼ平坦ではあるが、わずかに北東側に向かって傾斜する斜面に立地する。建物の規模は桁行２間（5.8m）、梁行１間（4.1m）を測る。主軸は等高線に対してほぼ平行しており、座標北に対しＮ－27°－Ｗに振る。側柱の柱穴間距離は、2.8～3.1mである。柱穴の掘方は円形もしくは不整円形で、直径約50～70cm、深さ約53～93cmを測る。柱痕跡は確認することができなかった。

また、建物の主軸と平行して北東側と南西側にSD14、SD15がある。SD15の南東端は調査区外に続いているため、全体は検出できなかった。これらの溝はSB８と同じ層位面で検出され、埋土も柱穴のものとほぼ同じである。このことから溝はSB８に伴うものとみられ、SB８を区画するための溝と考えられる。それぞれの溝の規模は、SD14が幅65cm、長さ約3.3m、検出面からの深さ約15cmである。SD15は幅45cm、長さ約7.5m、検出面からの深さ約10～20cmである。



第145図　SB８・SD15出土土器

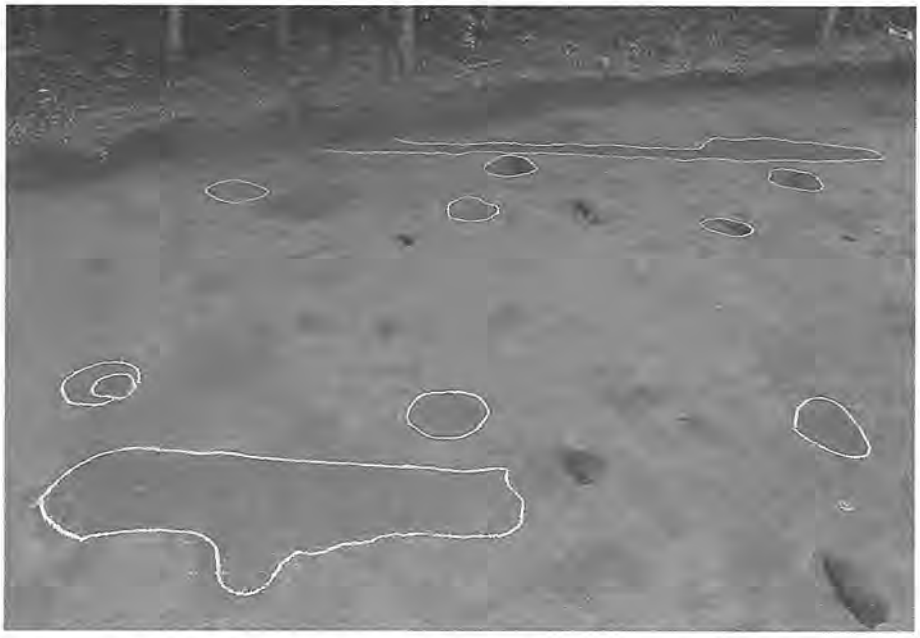


Fig 5　SB８・SD14・SD15検出状況

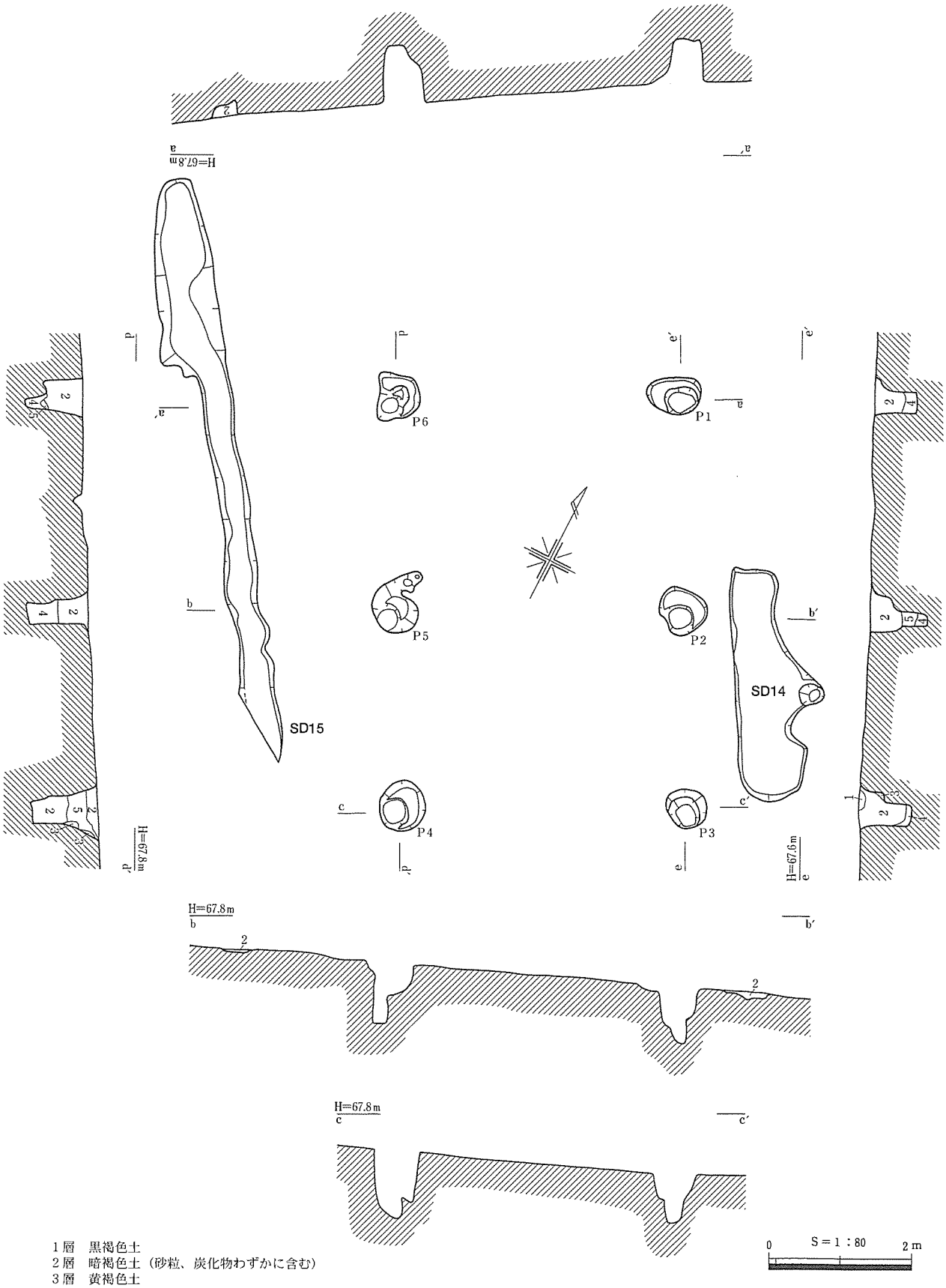
遺物はＰ６から甕の口縁部460、SD15から器台の受部461、壺の口縁部462が出土している。これらはいずれも清水編年Ｖ－２期に相当する。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉頃と考える。　（淺田）

SB９（第147図、PL. 37）

J12グリッド、標高およそ64.9mの高さで、ホーキ層を検出面とした。１間（1.9m）×２間（約2.8m）の掘立柱建物で、座標北に対し、主軸を84°西に向ける。本遺構はSI27、SK34と重複しており、Ｐ６はSI27の中央ピットの埋土を掘り込んでいる状況であった。また、ピット底面の高さは64.4～64.6mの間にある。

ピット間の距離は、心々でＰ１－Ｐ２間1.4m、Ｐ２－Ｐ３間1.4m、Ｐ４－Ｐ５間1.5m、Ｐ５－Ｐ６間1.2mを測り、Ｐ１－Ｐ６間、Ｐ２－Ｐ５間、Ｐ３－Ｐ４間はいずれも1.9mであった。



1層　黒褐色土
2層　暗褐色土（砂粒、炭化物わずかに含む）
3層　黄褐色土
4層　褐色土（炭化物、褐色土含み、しまり強）
5層　褐色土

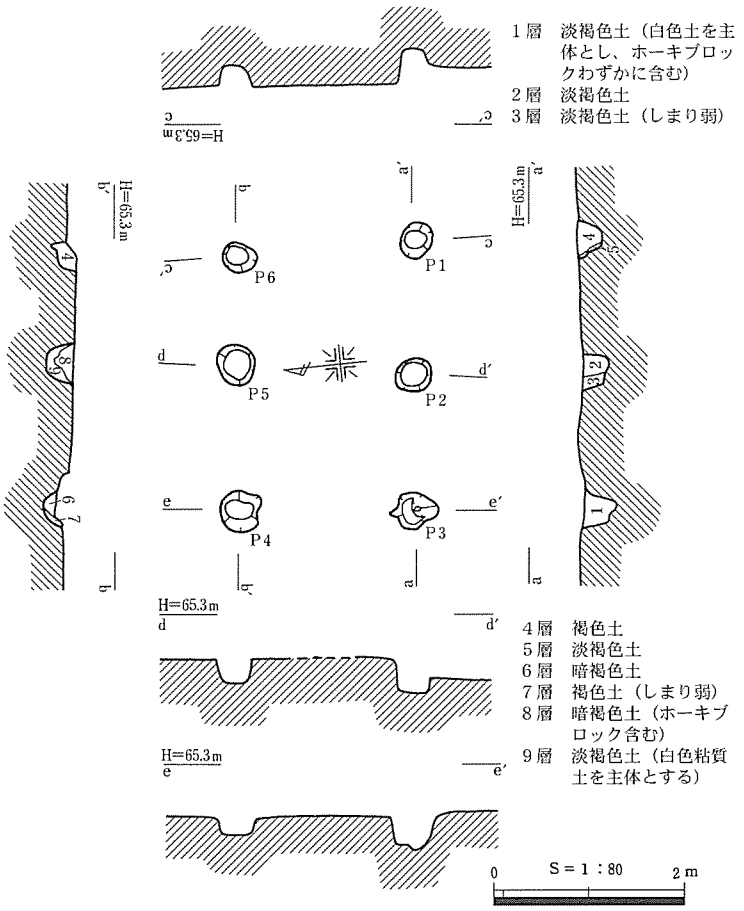
第146図　SB８実測図

本遺構からの出土遺物はないが、先述したように、Ｐ６がSI27の中央ピットの埋土を掘り込んでいることから、SI27が機能していたと思われる弥生時代後期後葉以降の時期が考えられる。

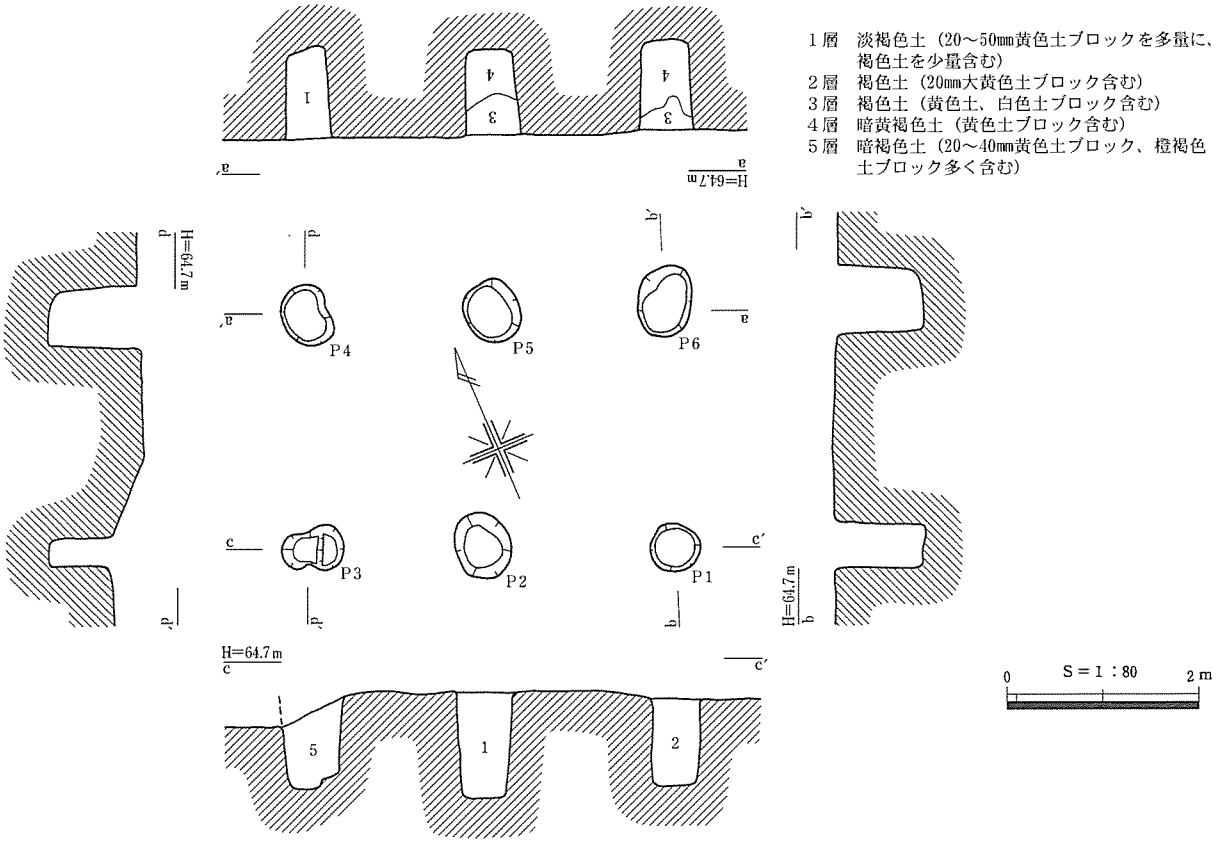
（野口）

SB10（第148図、PL. 37）

Ｅ８グリッド、標高64.3mの平坦面に位置する。SI25の東に立地する。主軸は座標北に対し、Ｎ－20°－Ｅに振り、SB２とほぼ同一の主軸をとる。建物規模は桁行２間（約4.0m）、梁行１間（約2.5m）である。側柱の柱穴間距離は約２mを測る。柱穴の深さは92～112cmである。出土遺物については、Ｐ５の検出面から甕463が出土した。この甕は頸部に一対の焼成前穿孔があり、肩部には貝殻腹縁文が施されてい

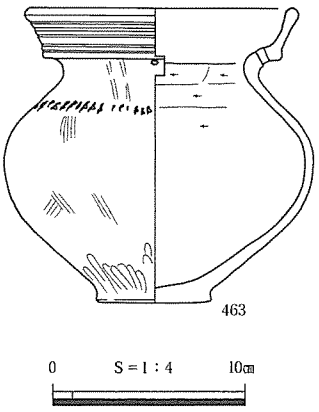


第147図　SB９実測図



第148図　SB10実測図

る。本遺構の年代については、463が清水編年Ｖ－３期にあたることから、弥生時代後期後葉の時期が想定される。　（阪上）



第149図　SB10出土土器

SB11（第150図）

Ｇ４グリッドの北東側、標高62.8～63.2mの傾斜面に位置する本遺跡内で最も北に立地する遺構である。主軸は座標北に対し、Ｎ－27°－Ｅに振る。建物規模は１間四方の2.3×2.6mである。

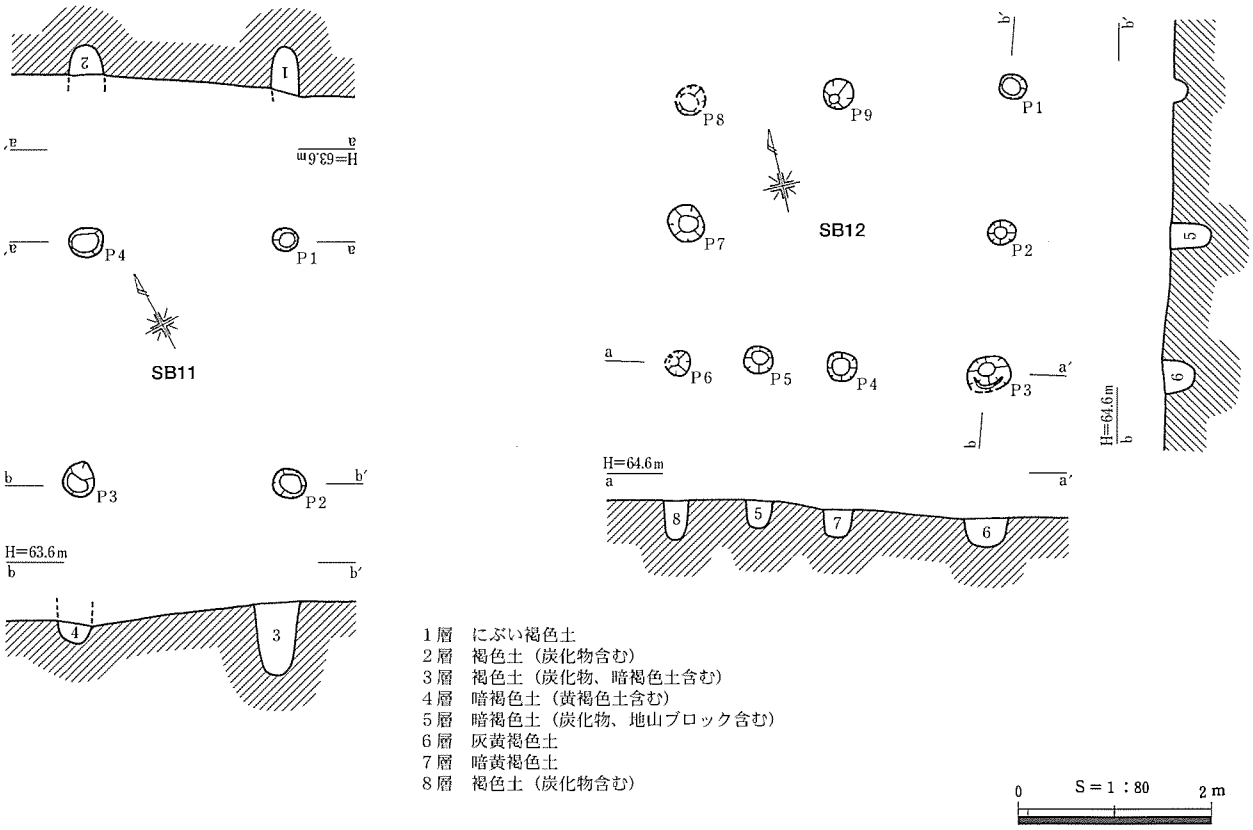
遺物は図化を行っていないが、Ｐ３から土器片が出土している。遺構の年代を特定できるものでないため、時期は不明である。

（阪上）

SB12（第150図）

Ｅ７グリッドの北西側、標高64.1mの平坦面に位置する。主軸は座標北に対し、Ｎ－14°－Ｅに振る。建物規模は桁行２間（約３m）、梁行２間（約３m）である。柱穴間距離は1.3～1.9mである。Ｐ５については、Ｐ４とＰ６間の中央に位置することから、補助的な柱の可能性が考えられる。

遺物については土器片が出土しているが、年代を特定できるものではないため、時期については不明である。　（阪上）

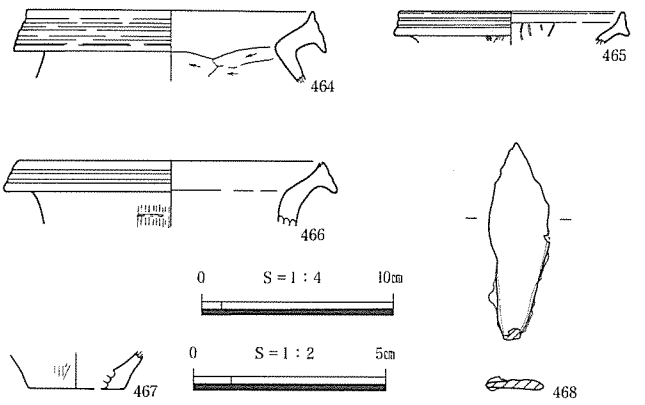


第150図　SB11・12実測図

(4)　布掘掘建柱建物

布掘掘建柱建物１（第152図、PL. 37）

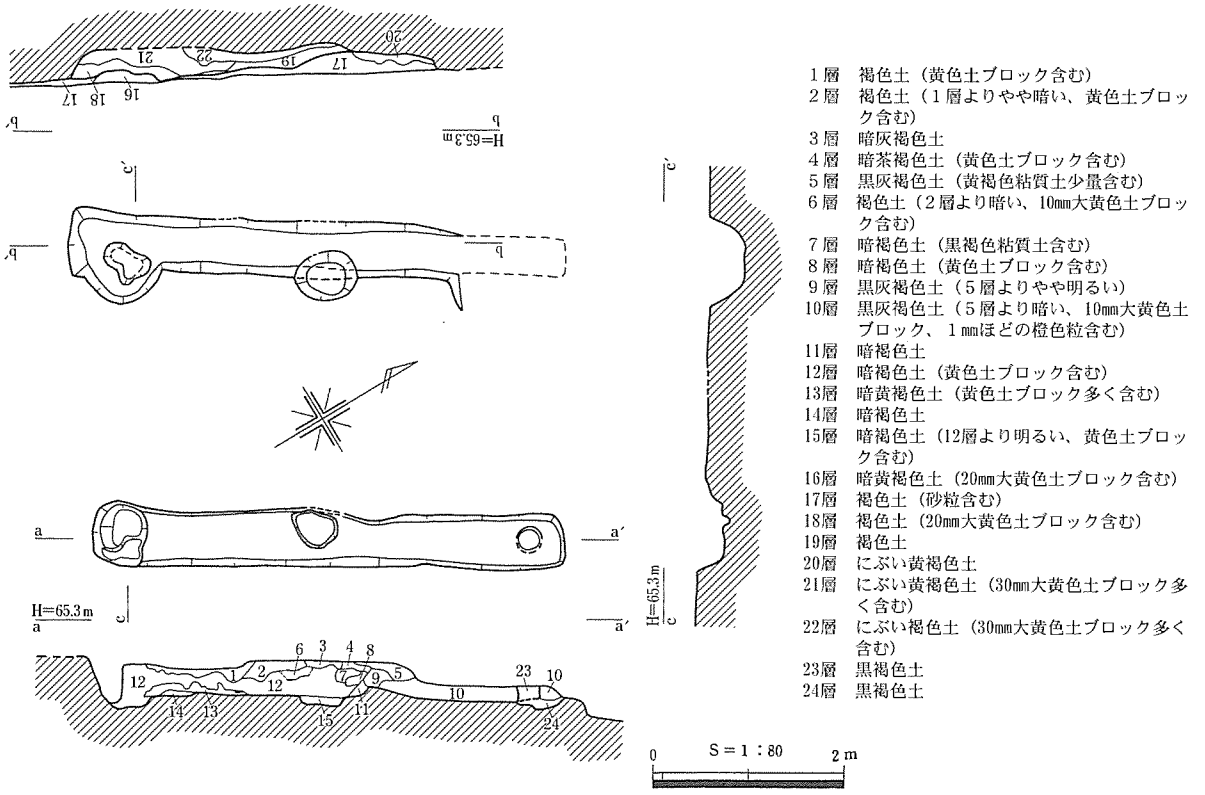
H12グリッドの台地平坦面で検出した。調査時は東からSD３・SD４と呼称した。西側の溝はSI19と重複するが、SI19の埋土を除去した床面にて溝を検出した。溝は幅が50～60cm、深さ35cm、断面U字形である。比較的遺存状況が良好な東側の溝で、長さ4.9mである。底面は多少の凹凸はあるが、おおむね平坦でレベル差も顕著ではない。２条の溝は平行し、東側の溝底には３ヶ所のくぼみが検出され、柱痕跡とみられる。これらのことから布掘掘建柱建物とみられる。北端部は耕作に伴う攪乱により失われているが、東側の溝はかろうじて北端の立ち上がりが残っていた。これから推定される規模は4.9×３mである。図化した遺物は465、468が東側の溝出土のもので、他は西側の溝出土のものである。出土土器は清水編年のV－１期に相当することから、弥生時代後期前葉にあたる。（小山）



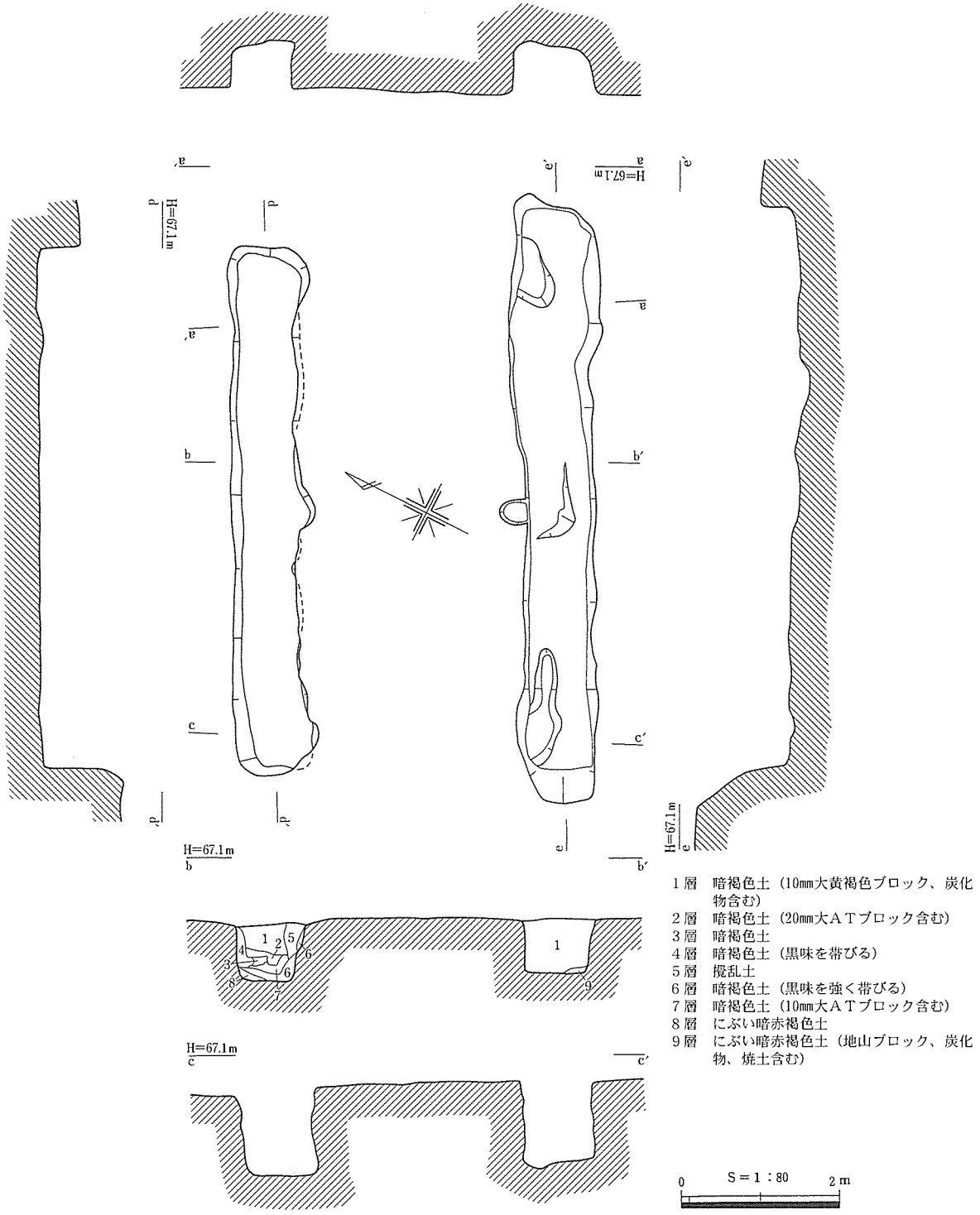
第151図　布掘掘立柱建物１出土遺物　468のみ　S＝½

布掘掘建柱建物２（第153図、PL. 37）

G17グリッドの谷３に面した緩斜面に位置する。調査時は北からSD17・18と呼称した。溝の走向

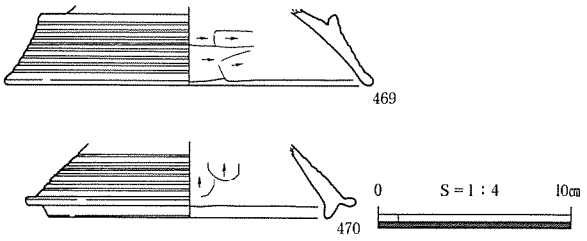


第152図　布掘掘立柱建物１実測図



第153図　布掘掘立柱建物２実測図

は等高線に対し直交するため、検出面は北東側が約１m低い。溝底はほぼ水平で、平坦である。溝の幅は約90cm、深さは最深部で1.1m、溝の全長は北側が6.6m、南側が7.5mである。土層の断面観察では柱痕跡は認められなかったが、溝の内側に３ヶ所の突出部が確認できた。特に北側の溝で顕著である。この埋土は溝埋土と同



第154図　布掘掘立柱建物２出土土器

様の土であったが、柱痕跡の可能性もある。出土遺物は埋土中から若干の土器が出土した。出土土器は清水編年のＶ－３期に該当することから、弥生時代後期後葉の時期のものと考えられる。　（小山）

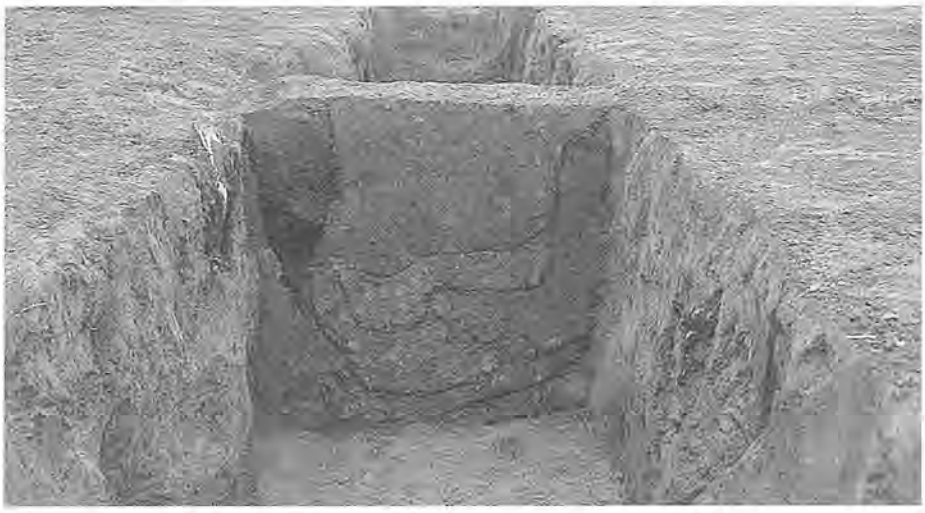


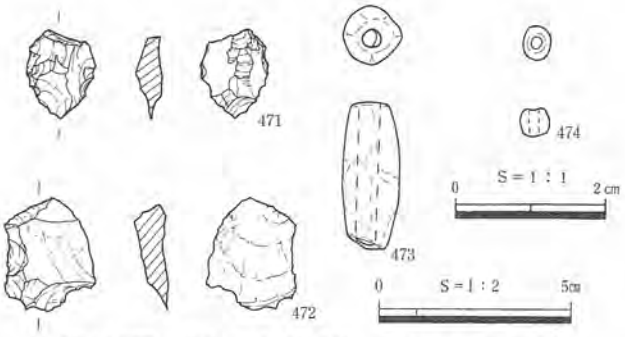
Fig 6　布掘掘立柱建物２北溝土層断面（東から）

(5)　溝

溝は18条検出した。このうち調査時にSD３、４とSD17、18としたものは、それぞれ布掘掘建柱建物と判明したため、別項で報告する。またSD14、15はSB８に付属する溝であることから、SB８の項で述べることとする。なおSD６は欠番である。

SD１（第156図、PL. 43）

標高約61.0～66.7mの、調査地東側の斜面地に位置し、埋没谷上面で検出した。Ｅ９グリッドからH17グリッドにかけて「コ」の字状にのびる。SI34を切る。南端は攪乱により破壊されている。その走向は直線的で、斜面部分については等高線に対して平行である。検出した大きさは全長約95m、幅0.9～1.8mを測る。検出面からの深さは８～45cmで、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。E10杭の付近でSD２、F14杭の付近でSD５へと分岐する。



第155図　SD１出土遺物　474のみ　S＝¼

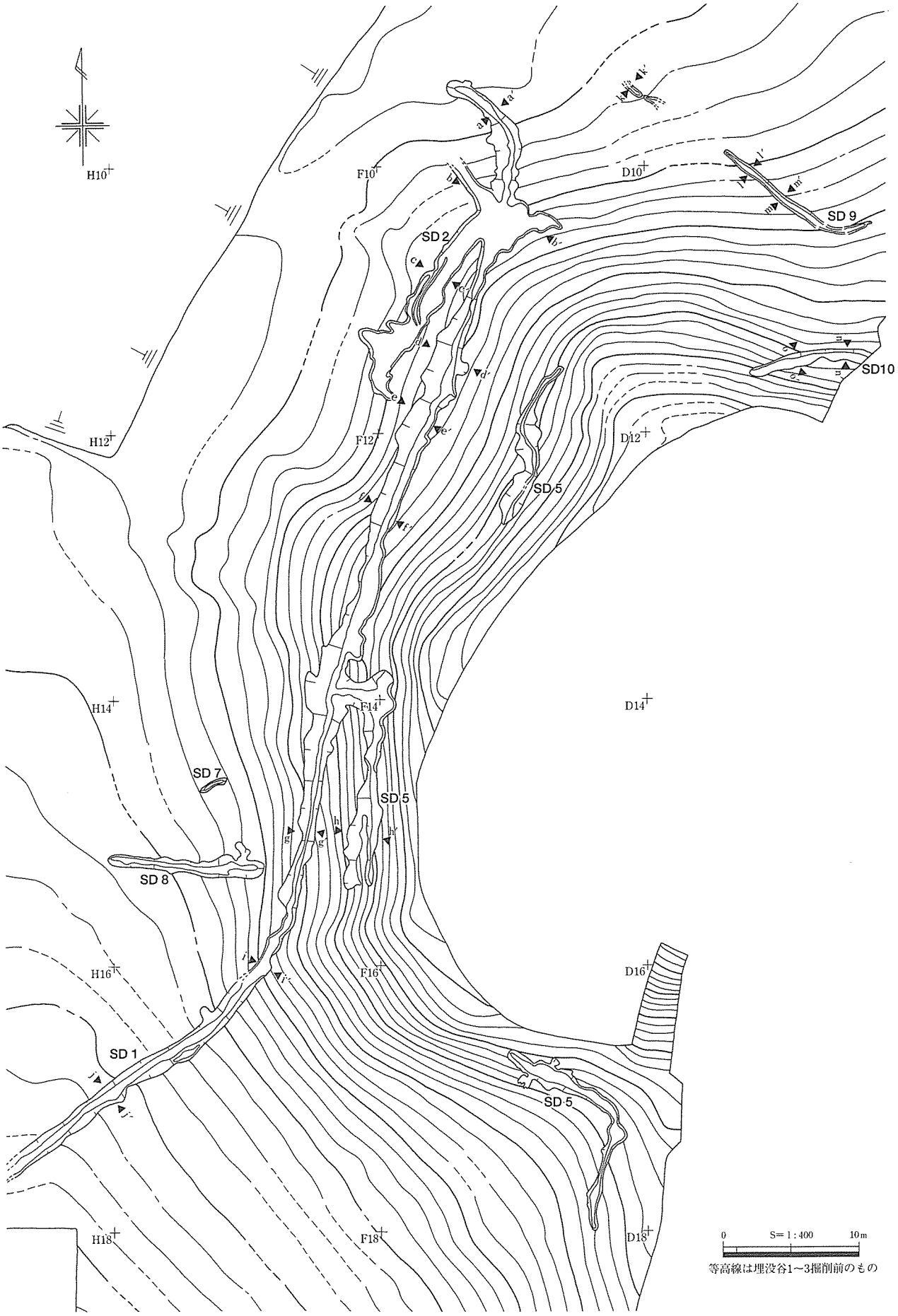
埋土は主に褐色土で、これはSK30の埋土とほぼ同じであり、調査地上部からの流れ込みによる堆積と考えられる。遺物は埋土中から水晶の剥片471、472、土錘473、ガラス製小玉474が出土している。

時期は埋土の状況及びSK30との関係から、近世以降が想定される。性格については、道の可能性があるが、底面が硬化していないため、明確にその性格を判断することはできなかった。　（淺田）

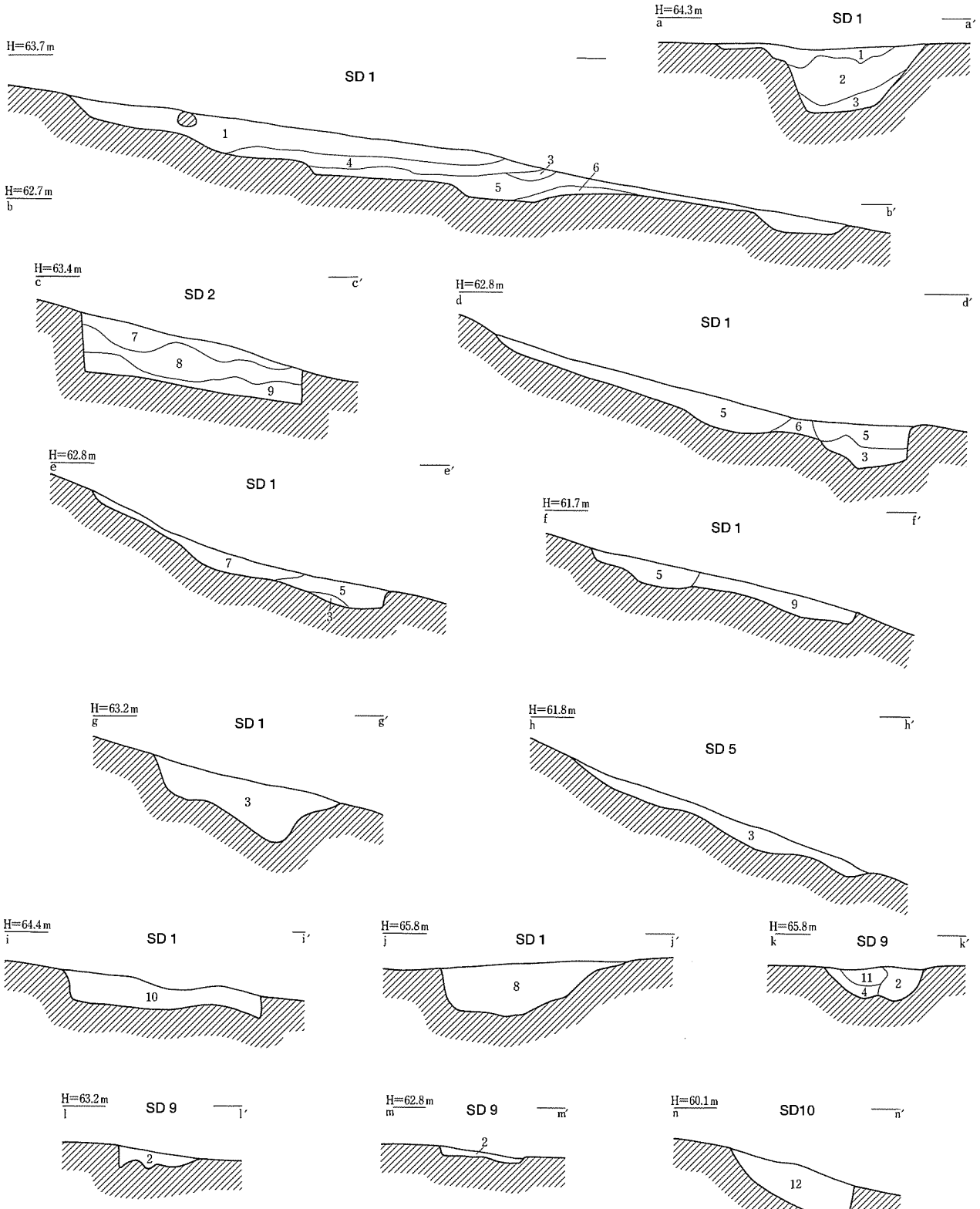
SD２（第156図、PL. 43）

標高約63.0～63.5m、調査地東側の斜面に位置する。E10杭の南４mの付近でSD１と切り合い関係にあり、SD２が新しい。E10～E11グリッドにかけて、SD１と並行するように直線状にのびる。検出した規模は全長約15m、幅約1.7mを測り、検出面からの深さは16～33cmである。断面形は皿状ないし方形を呈する。SD１と同様に底面に明瞭な硬化した跡や付随する施設がみられなかったことから、溝として考えた。

埋土は主に褐色土で、これは台地平坦部からの流入によるものである。遺物は埋土中から水晶の剥


H10
F10
D10
SD 9
SD 2
SD10
H12
F12
D12
SD 5
H14
F14
D14
SD 7
SD 5
SD 8
H16
F16
D16
SD 1
SD 5
H18
F18
D18
0
S= 1 : 400
10m
等高線は埋没谷1～3掘削前のもの

第156図　溝平面図

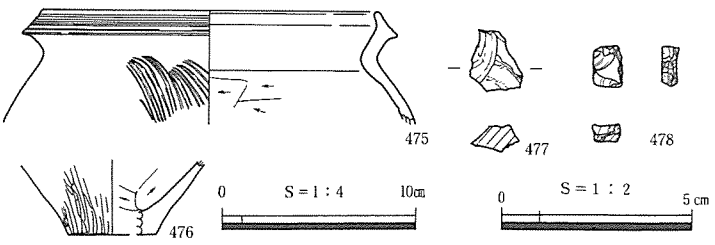


１層　褐色土（５～10mmの黄褐色土ブロック多く含む）
２層　暗褐色土（10～30mmの黄褐色土ブロック含む）
３層　褐色土（10～20mmの赤褐色土ブロック多く含む）
４層　褐色土（10mm大黄褐色土ブロック、10～40mm灰白色土ブロック、40mm大黒褐色ブロック多く含む）
５層　黒褐色土（10mm灰白色土ブロック）
６層　赤褐色土
７層　黒褐色土
８層　褐色土（10～20mmの黄褐色土ブロック少量含む）
９層　褐色土（小礫少量含む）
10層　褐色土（10mm大淡褐色砂質土ブロック含む）
11層　灰白色土
12層　褐色土
13層　明褐色土（しまり強）

第157図　溝土層断面図

片477、甕の底部476が出土しているが、これらは台地平坦部からの流入物である。

溝の性格については不明である。時期はSD１と同様、近世以降が想定される。　（淺田）



第158図　SD２・５・８出土遺物　477、478は　S＝½

SD５（第156図、PL. 43）

標高約60～61mの調査地東側の斜面、SD１の東側に位置する。SD１と並行し、D11～D12、F14～F15、D16～D17グリッドにかけて直線状ないし「L」字状にのびる。その走行は等高線に対して平行である。途中で途切れているが、本来はSD10と共に一続きの溝であったと思われる。D16～D17グリッドの部分は、D17杭の付近でほぼ直角に折れ曲がり、地形の変換線に沿うように南に向かってのびる。SD１と同様に底面に明瞭な硬化した跡は認められない。検出した長さは、D11～D12、F14～F15、D16～D17グリッドの部分でそれぞれ約12m、16m、18mを測る。幅は30～150cmで、断面形は皿状である。検出面からの深さは７～15cmである。埋土は主に褐色土で、これはSD１、２、SK30の埋土とほぼ同じであり、台地平坦部からの流入によるものと考えられる。遺物は埋土中から碧玉の剥片478が出土しているが、これは埋土中への流入と思われる。時期及び性格についてはSD１と同様不明である。　（淺田）

SD７（第156図）

標高約64.3～64.5mの調査地東側の緩やかな斜面にある。SI37の東側、G14グリッドに位置する。南西から北東の方向にほぼ直線状にのびる。長さ2.2m、幅46cmを測る。検出面からの深さは14cmで、断面形は「U」字状ないし皿状を呈する。遺物は皆無なため、性格、時期ともに不明である。（淺田）

SD８（第156図）

標高約64.0～64.2mの調査地東側の緩やかな斜面に立地する。SI37の南側、G15グリッドに位置し、東西方向にほぼ直線状にのびる。検出した長さは11mで、幅は70～170cmである。検出面からの深さは15～23cmで、断面形は「U」字状ないし皿状を呈する。性格については不明である。遺物は、埋土中から甕の口縁部475が出土した。これは清水編年のV－１期、弥生時代後期前葉に相当する。これは本遺構の埋没時期を示すものと考える。　（淺田）

SD９（第156図）

B10～D９グリッドの標高約62.0～63.8mの調査地東側の緩やかな斜面に立地する。C12杭付近で途切れているが、本来は一続きであったと思われる。北西から東南の方向にほぼ直線状にのびる。長さは16mを測り、幅は約70cmである。検出面からの深さは５～23cmで、断面形は「U」字状ないし皿状を呈する。遺物は埋土中から時期不明の土器片が数点出土した。溝の性格および時期については不明である。　（淺田）

SD10（第156図）

標高約59.0～60.0mの調査地東側の緩やかな斜面に立地する。B９～C11グリッドに位置する。東西の方向にほぼ直線状にのびる。東端は調査区外へ続いているため、全体を検出することはできなかった。検出した大きさは、長さ約９m、幅約100cmである。検出面からの深さは20～30cmで断面形は「U」字状ないし皿状を呈する。埋土は主に褐色土であり、SD１、２、５とほぼ同じである。走向の様子からSD５とは途中で途切れているが、本来はSD５と一連のものと考えられる。遺物は出土していない。性格、時期については不明である。（淺田）

SD11（第５図）

L14・15グリッド、調査地南西側の緩やかな斜面に位置する。南北方向に直線状にのび、南側部分は調査区外に続く。確認できた範囲では、長さ4.25m、幅60cm、深さは最深部で40cmを測る。埋土は褐色土の単層である。出土遺物は皆無で、時期等は不明である。（野口）

SD12（第５図）

L14・15グリッド、SD11の西側２mほど隔て位置する。SD11と同様に南北方向に直線状にのび、南側部分は調査区外に続く。規模は確認できた範囲で、長さ2.4m、幅45cm、深さは最深部で37cmを測る。出土遺物は皆無で、時期等は不明である。（野口）

SD13（第５図）

K５・６グリッド、調査地北西側の緩やかな斜面地に位置し、標高63mほどの高さで確認した。主軸を北東方向に向けた、長さ3.1m、幅37cm、深さは最深部で27cmを測る。埋土は褐色土の単層である。出土遺物はみられず、時期等は不明である。（野口）

SD16（第５図）

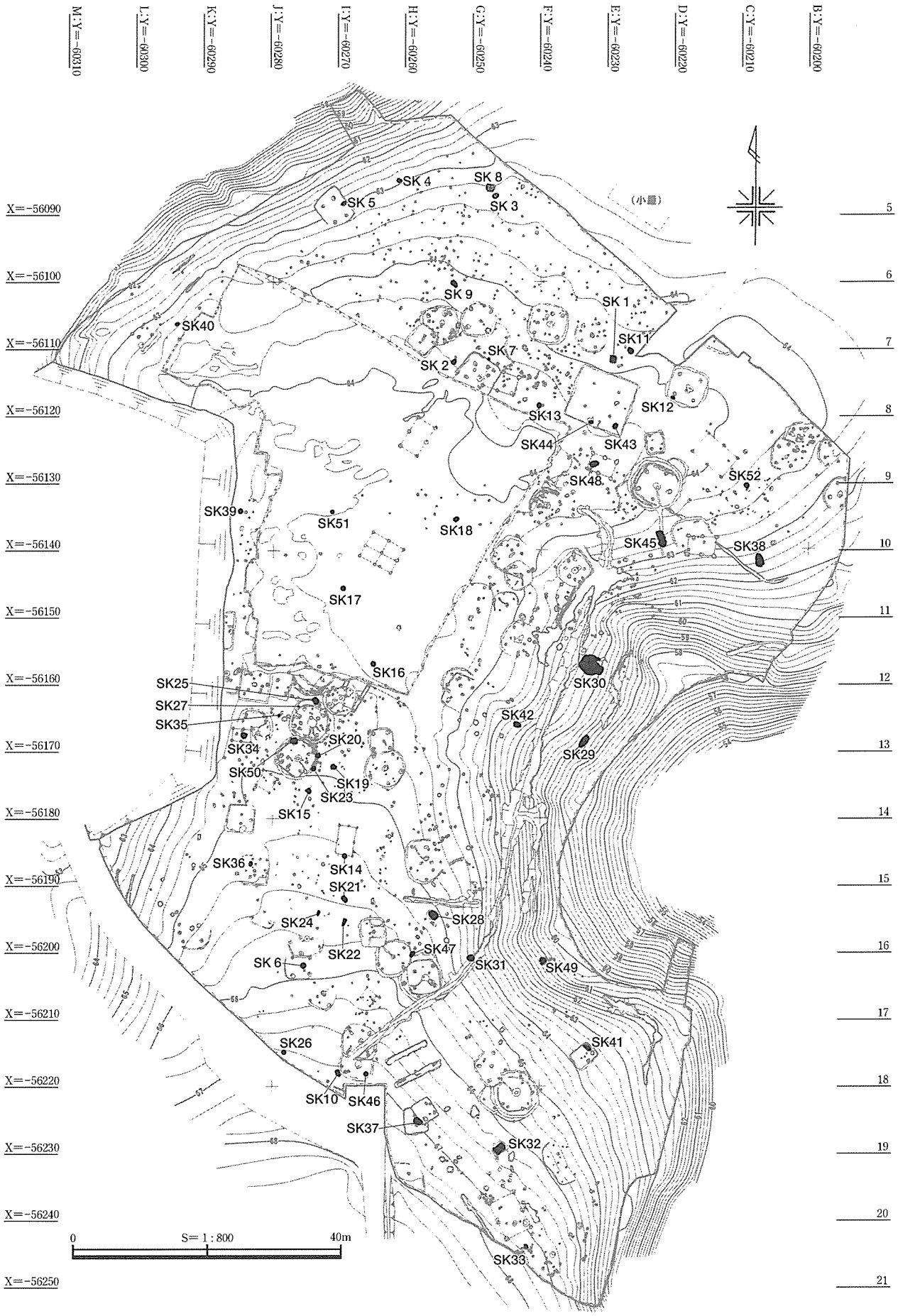
K５グリッド、SD13の南に位置する溝である。主軸を北東方向に向け、平面形はやや歪みながらも直線状を呈す。長さ4.4m、幅37cm、深さは最深部で42cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物はみられず、時期等は不明である。（野口）

(6)　土坑

土坑は52基検出した。このうちSK５、12、41、44は竪穴住居跡に伴うものとみられることから、竪穴住居跡の項で述べることとする。

SK２（第160図、PL. 38）

G７グリッドの北東側に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。規模は上面で長径125cm、短径105cm、底面までの深さは90cmを測る。底面には長径33cm、短径30cm、深さ34cmの底面ピットが存在する。出土遺物はなく時期は不明である。形態からみて落とし穴と考えられる。（阪上）


M:Y=-60310
L:Y=-60300
K:Y=-60290
J:Y=-60280
I:Y=-60270
H:Y=-60260
G:Y=-60250
F:Y=-60240
E:Y=-60230
D:Y=-60220
C:Y=-60210
B:Y=-60200
X=-56090
X=-56100
X=-56110
X=-56120
X=-56130
X=-56140
X=-56150
X=-56160
X=-56170
X=-56180
X=-56190
X=-56200
X=-56210
X=-56220
X=-56230
X=-56240
X=-56250
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
(小量)
SK 4
SK 8
SK 5
SK 3
SK 9
SK 1
SK40
SK11
SK 7
SK 2
SK13
SK12
SK44
SK43
SK48
SK52
SK39
SK51
SK18
SK45
SK38
SK17
SK16
SK30
SK25
SK27
SK35
SK42
SK34
SK20
SK29
SK50
SK19
SK23
SK15
SK36
SK14
SK21
SK28
SK24
SK22
SK47
SK 6
SK31
SK49
SK26
SK41
SK10
SK46
SK37
SK32
SK33
0
S=1:800
40m

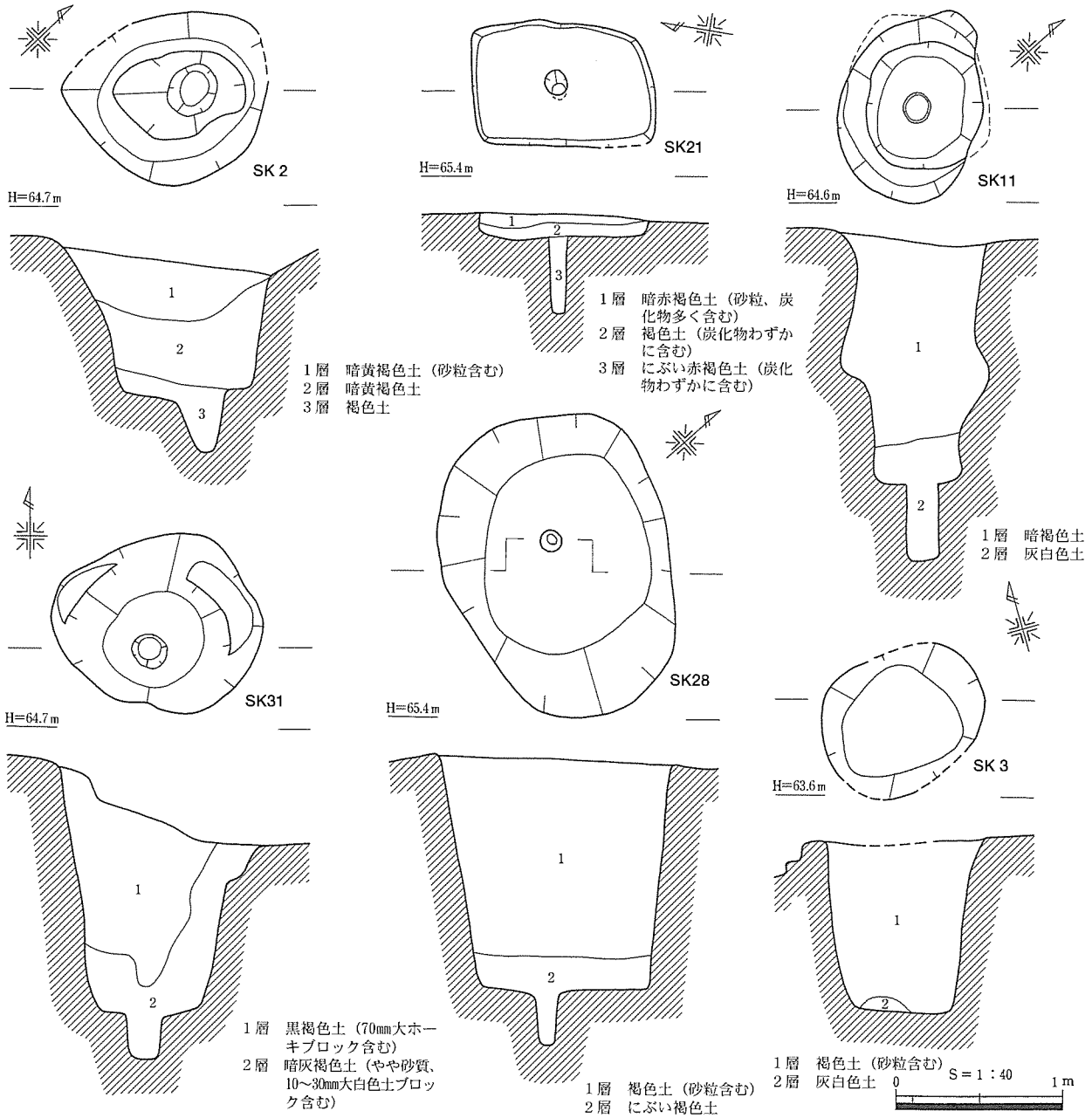
第159図　土坑位置図

SK３（第160図、PL. 38）

Ｆ４グリッドに位置する。平面形は楕円形と推定される。上面の規模は長径105cm、短径は推定85cmを測る。深さは約110cmで、遺物はなく時期不明であるが、土坑の形状や、落とし穴であるSK28と埋土が類似することから、落とし穴の可能性が考えられる。（阪上）

SK11（第160図、PL. 39）

Ｄ７グリッドに位置する。平面形は南北に長い楕円形を呈する。上面の規模は長径120cm、短径85cm、底面までの深さは150cmである。底面中央には長径18cm、短径17cm、深さ73cmの底面ピットが存在する。遺物については、埋土中から土器片や黒曜石、水晶の切子玉未製品481が出土している。切子玉は最上層からの出土である。本遺構の年代は時期を特定できるものが出土していないため不明である。形態からみて、落とし穴であると考えられる。（阪上）



第160図　SK２・３・11・21・28・31実測図

SK21（第160図、PL. 40）

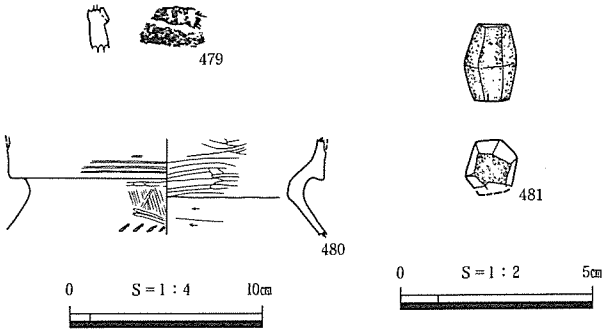
H15グリッドに位置する。上部は破壊され、底面付近のみ検出された。平面形は方形を呈する。規模は長軸110cm、短軸75cmを測る。検出面からの深さは最大16cmである。底面にてピットを１基検出した。大きさは直径12cm、底面からの深さは47cmである。形態からみて落とし穴と思われる。出土遺物は皆無なため、時期不明である。（淺田）

SK28（第160図、PL. 40）

G15グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径185cm、短径138cm、底面までの深さは140cmを測る。底面には、長径14cm、短径12cm、深さ30cmの底面ピットがある。出土遺物はなく、時期不明である。形態からみて落とし穴とみられる。（阪上）

SK31（第160図、PL. 41）

G16グリッドに位置する。長径1.3m、短径1.1m、深さは最深部で1.5mであった。底では直径20cm、深さ27cmの底面ピットを検出した。形態からみて落とし穴とみられる。出土遺物は弥生時代後期の土器480が出土したが、上層出土であり、遺構の時期を示すものではないと判断される。このため時期は不明である。（小山）



第161図　SK11・31・39出土遺物　481のみ　S＝½

SK33（第162図、PL. 41）

F20グリッドに位置する。規模は長径97cm、短径75cm、底面までの深さは105cmを測る。底面には、長径10cm、短径８cm、深さ16cmの底面ピットが存在する。出土遺物はなく、時期は不明である。形態からみて落とし穴と考えられる。（阪上）

SK36（第162図、PL. 41）

J14グリッド、SI50の貼床層除去後に確認した。平面形は楕円形で、東西67cm、南北80cmの規模である。深さは確認面から52cmを測り、底面にはさらに一段低くなる円形の窪みがみられる。出土遺物はなく、時期不明である。SK33など他の落とし穴と同様の埋土の状況を呈することから、落とし穴と考えられる。（野口）

SK39（第162図、PL. 42）

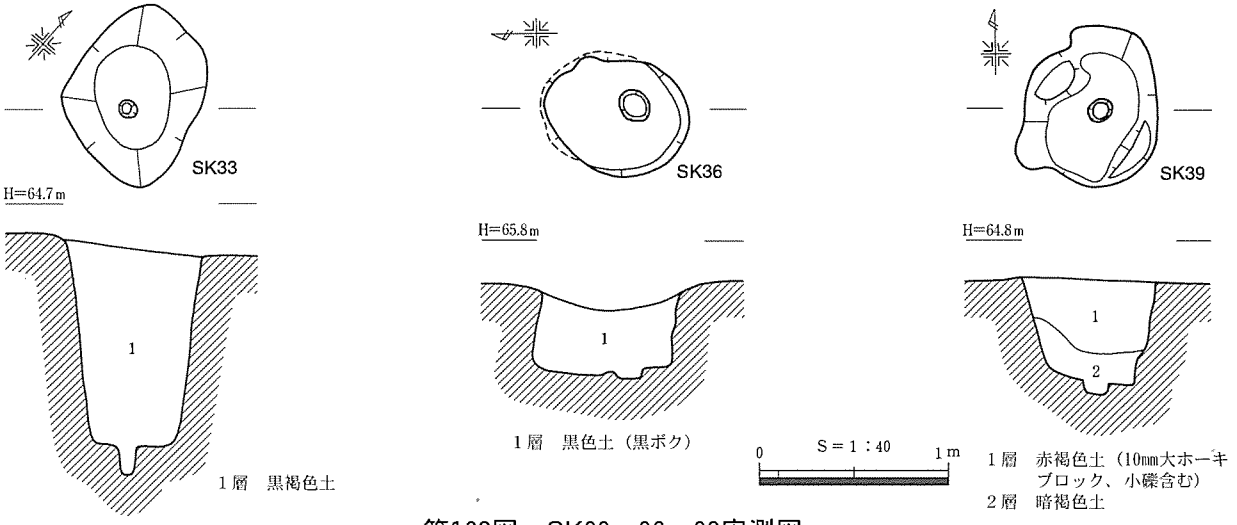
J９グリッドに位置する。規模は東西70cm、南北85cmを測り、深さは確認面から62cmである。平面形は西半部が若干張り出した楕円形をし、底には底面ピットがみられる。出土遺物は赤褐色土層から細片であるが、内外面ともナデによる調整を施した後、外面に刻目を加えた隆帯を貼付けた479の土器が認められた。本土坑は、形態からみて落とし穴としての性格が考えられる。時期は出土した細片の土器から判断した場合、外面に条痕は認められないが、刻目隆帯の特徴から長山馬籠式や西川津式といった縄文時代前期初頭頃の可能性が高い。（野口）

SK40（第163図、PL. 42）

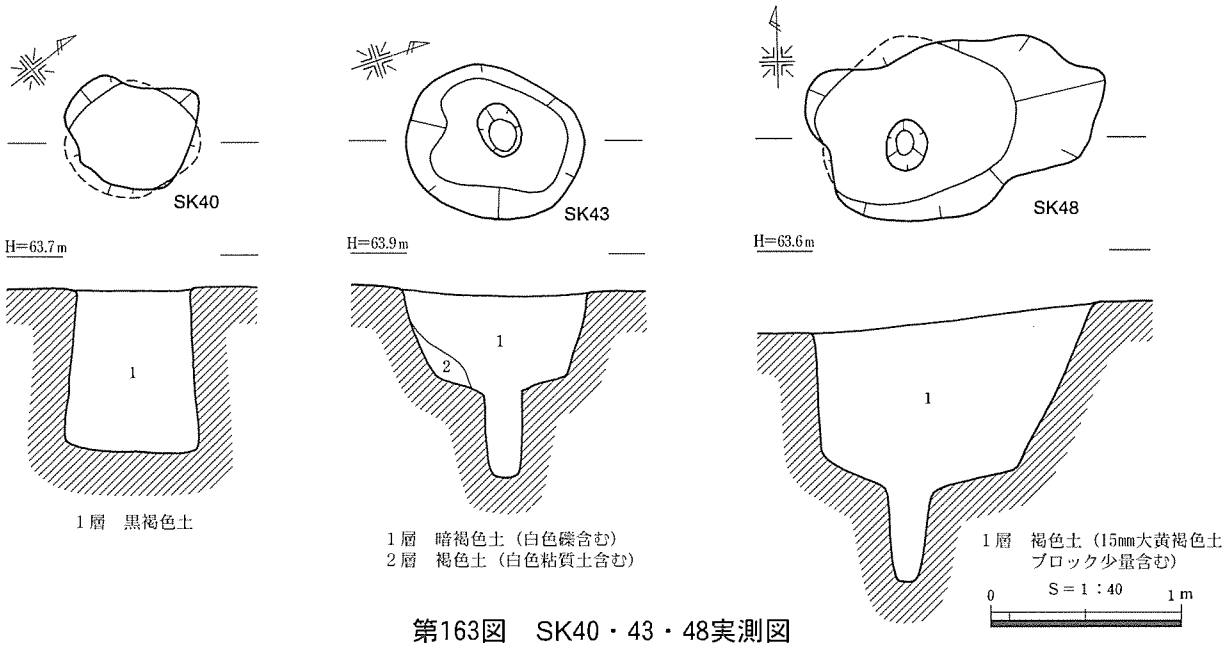
Ｋ６グリッドにて検出した。平面形は北側と西側がやや張った円形で、規模は検出面で東西68cm、南北58cm、底面で東西58cm、南北64cmである。深さは確認面から85cmを測る。底面ピットは認められなかったが、他の落とし穴と埋土が同じことから落とし穴であったとみられる。出土遺物が皆無なため、時期は不明である。（野口）

SK43（第163図、PL. 42）

Ｄ８グリッドの北西側に位置する。SI１南東隅付近の貼床層の下で検出した。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径94cm、短径80cm、底面までの深さは53cmを測る。底面には、長径28cm、短径20cm、深さ約50cmの底面ピットが存在する。出土遺物は時期不明の土器の細片のみのため、年代を特定できない。形態からみて落とし穴と考えられる。（阪上）



第162図　SK33・36・39実測図



第163図　SK40・43・48実測図

SK48（第163図、PL. 42）

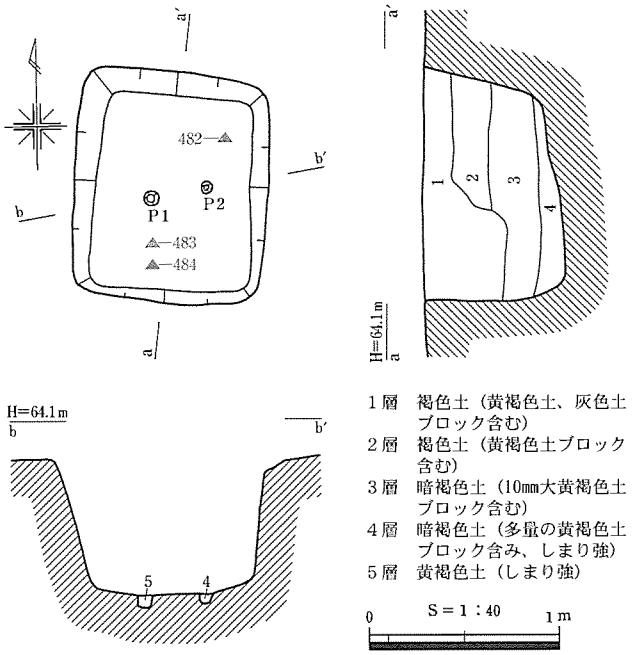
Ｅ８グリッドに位置する。平面形は東西158cm、南北95cmで、歪な楕円形を呈する。底には底面ピットが認められた。深さは確認面から底面までで100cm、底面から底面ピットまでで50cmである。形態からみて、本土坑は落とし穴とみられる。出土遺物が皆無なため、時期不明である。　（野口）

SK１（第164図、PL. 38）

Ｄ７グリッドに位置する長辺124cm、短辺102cmの長方形土坑である。深さは最深部で74cmを測る。底面に直径７cmの小ピットが２基検出された。深さが約７cmと浅く、落とし穴とは考えがたい。底面から石鏃482が出土したほか、埋土中から水晶剥片が出土した。時期、性格ともに不明である。　（小山）

SK４（第166図、PL. 38）

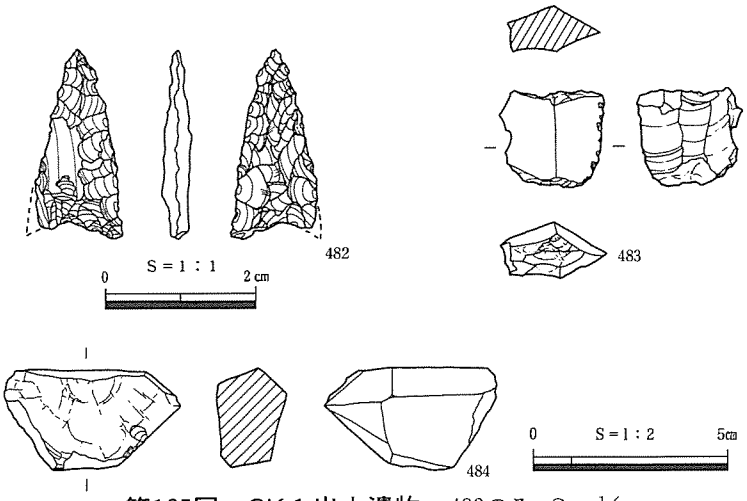
Ｈ４グリッドに位置する。底面はさらに一段掘り込まれる。規模は長軸80cm、短軸67cmを測り、平面形は楕円形を呈す。深さは確認面から40cmである。出土遺物は皆無なため、時期、性格ともに不明である。　（野口）



第164図　SK１実測図

SK６（第166図、PL. 38）

Ｉ16グリッドに位置する。平面形はやや楕円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸85cmを測る。検出面からの深さは最大82cmである。埋土上層から、時期不明の土器片が１点出土した。本遺構の時期、性格は不明である。　（淺田）



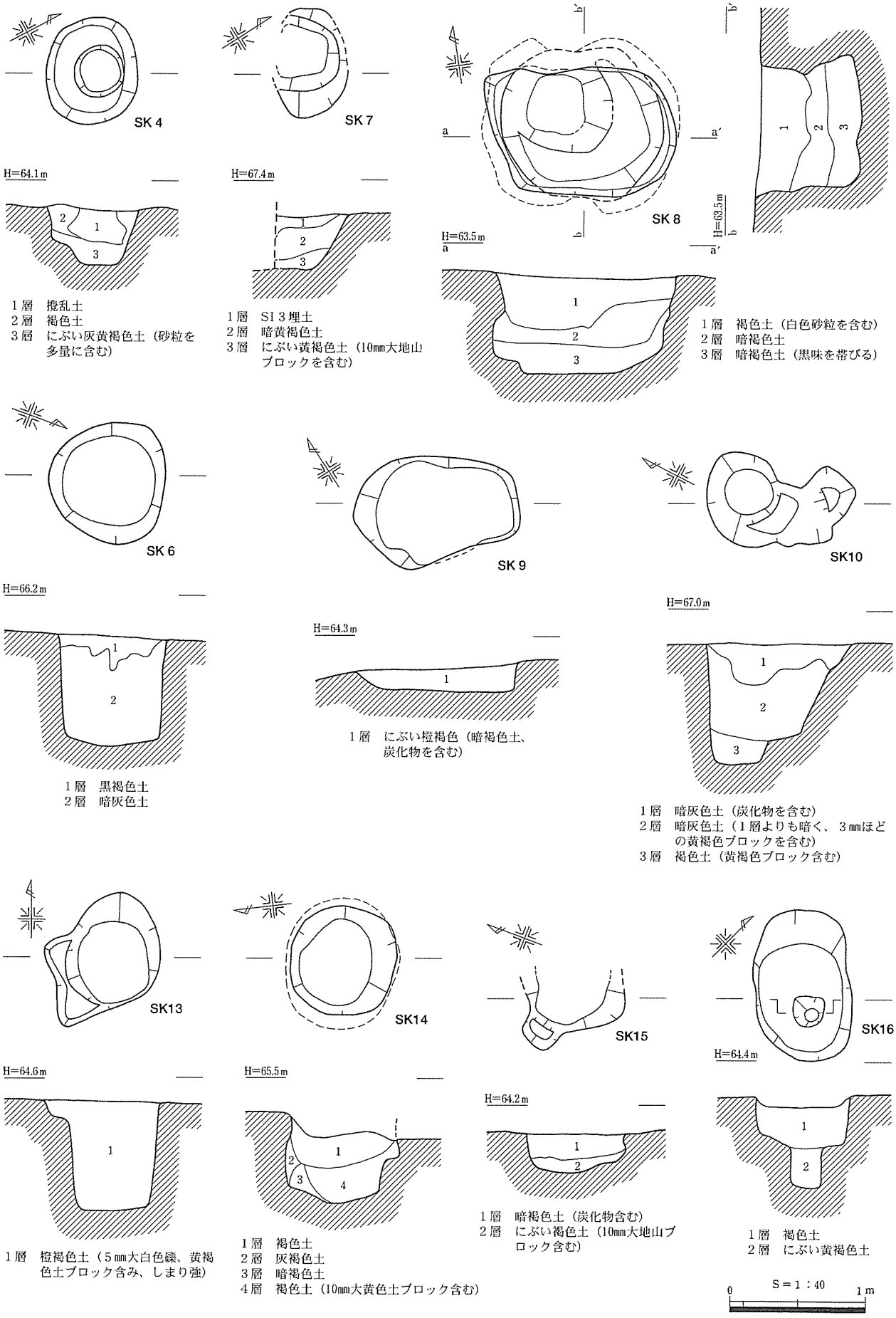
第165図　SK１出土遺物　482のみ　S＝1/1

SK７（第166図）

Ｆ７グリッドに位置する。本遺構は南西側をSI３に切られる。平面形は推定楕円形で、長径82cm、推定短径50cm、深さは35cmを測る。出土遺物が皆無なため、詳しい時期は不明であるが、SK７が古墳時代前期のSI３に切られていることから、それ以前の遺構である。　（阪上）

SK８（第166図、PL. 38）

Ｆ４グリッドに位置する。平面形は東西に長い楕円形で、規模は上面で長径136cm、短径95cm、深さ



第166図　SK４・６～10・13～16実測図

約110cmを測る。遺物は、検出面から黒曜石とサヌカイトの剥片が出土し、漸次下層へと量を減少させる。底面から62cm高い位置で縄文土器の破片486が出土した。外面には山形押型文・押引沈線文・沈線文が施されている。また、底面から85cm高い位置からは、上部につまみ状の突起をつけた用途不明の石製品485が出土した。この不明石製品の材質は鋼玉で、産地は広島県庄原市や兵庫県大屋町などが挙げられる。硬度が９もあるため、加工にはあまり適さない鉱物であると考えられるが、出土したものに関しては丁寧な加工が施されていた。

本遺構の年代は、486が縄文時代前期初頭と考えられることから、当該期のものと想定される。

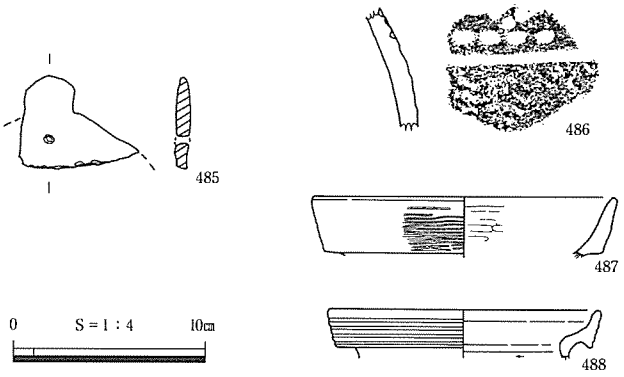
（阪上）

SK９（第166図、PL. 38）

Ｇ６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径124cm、短径約48cm、深さは27cmを測る。遺物は、検出面で黒曜石の剥片が少量出土したが、年代を特定できるものは出土しなかった。このため、時期は不明である。（阪上）

SK10（第166図、PL. 38）

Ｉ17グリッド、SI13の中央部分に位置する。平面形は中央部分がくびれたような不整円形で、長軸112cm、短軸70cmを測る。検出面からの深さは最大で90cmである。埋土は主に暗灰色土と褐色土で、自然堆積と考えられる。遺物は甕の口縁部487、488が２層より出土した。これらの時期は清水編年のＶ－３期、弥生時代後期後葉に相当する。これは、本遺構の埋没時期を示すと考えられる。出土遺物からみて、重複するSI13より古いと考えられる。（淺田）



第167図　SK８・10出土遺物

SK13（第166図、PL. 39）

Ｆ７グリッドの南東隅に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は長径87cm、短径86cm、深さは82cmを測る。出土遺物が皆無なため、時期は不明である。（阪上）

SK14（第166図、PL. 39）

H14グリッドに位置する。平面形は円形で、直径約80cm、検出面からの深さは最大で55cmである。断面形はやや袋状を呈する。検出面より40cmの深さで、上端部より最大10cmほど壁際に入り込む。出土遺物は皆無なため、時期、用途については不明である。（淺田）

SK15（第166図、PL. 39）

Ｉ13グリッドにあり、東側半分は攪乱により失われている。このため規模は明らかでない。平面形は、残存する部分から隅丸方形と推測される。検出面からの深さは最大28cmである。埋土は２層に分かれ、自然堆積と考えられる。遺物は皆無なため、時期、用途については不明である。（淺田）

SK16（第166図、PL. 39）

H11グリッドに位置する。平面形・底面形ともに楕円形を呈する。規模は長軸113cm、短軸80cm、底面までの深さは37cmを測る。底面には、直径25cm、深さ45cmの底面ピットが検出された。遺物が出土していないため、時期は不明である。底面ピットを伴うことから、落とし穴と考えられる。

（阪上）

SK17（第168図、PL. 39）

H10グリッドに位置する。平面形は歪な円形を呈す。規模は直径78cm、底面までの深さは32cmを測る。遺物は時期不明の土器片のみのため、年代は不明である。（阪上）

SK18（第168図、PL. 39）

Ｇ９グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径85cm、短径70cm、底面までの深さは52cmを測る。出土遺物はなく、時期不明である。（阪上）

SK19（第168図、PL. 39）

Ｉ13グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸74cm、短軸56cmを測る。検出面からの深さは最大63cmである。１層のラインが立ち上がるが、底面が歪であり、また本遺構と並ぶピットが周囲に存在せず、柱痕跡とはみなし難い。出土遺物はなく時期、用途は不明である。（淺田）

SK20（第168図）

Ｉ13グリッドに位置する。SI21埋土を切る。平面形は不整円形で、規模は長軸97cm、短軸90cmを測る。検出面からの深さは最大47cmである。遺物はなく、時期不明であるが、SI21との層位的関係から弥生時代後期後葉以降のものである。性格は不明である。（淺田）

SK22（第168図、PL. 40）

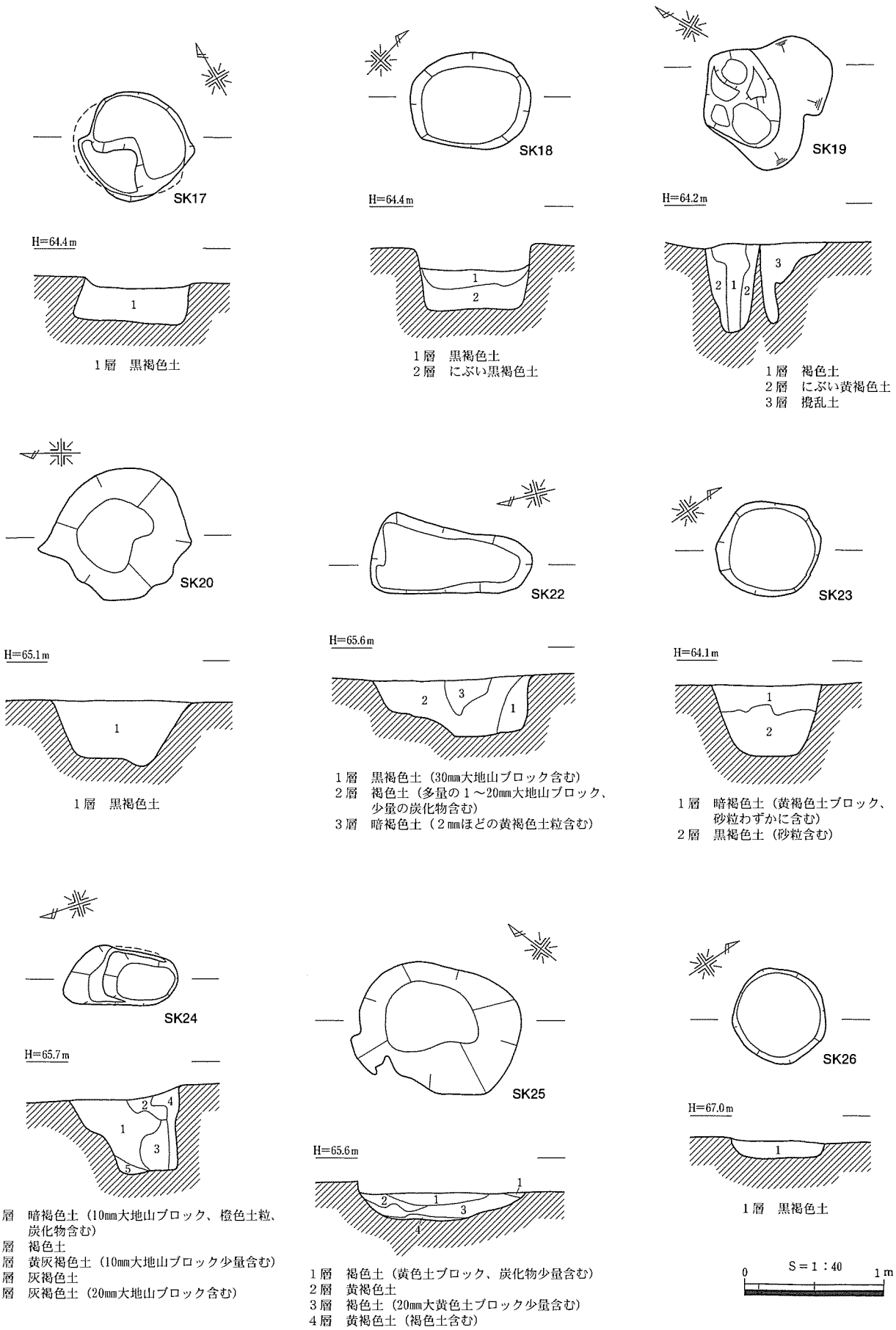
H15グリッドに位置する。長さ113cm、幅46cmの歪な長方形の土坑である。検出面からの深さは最大40cmである。遺物は皆無で、時期、用途は不明である。（淺田）

SK23（第168図、PL. 40）

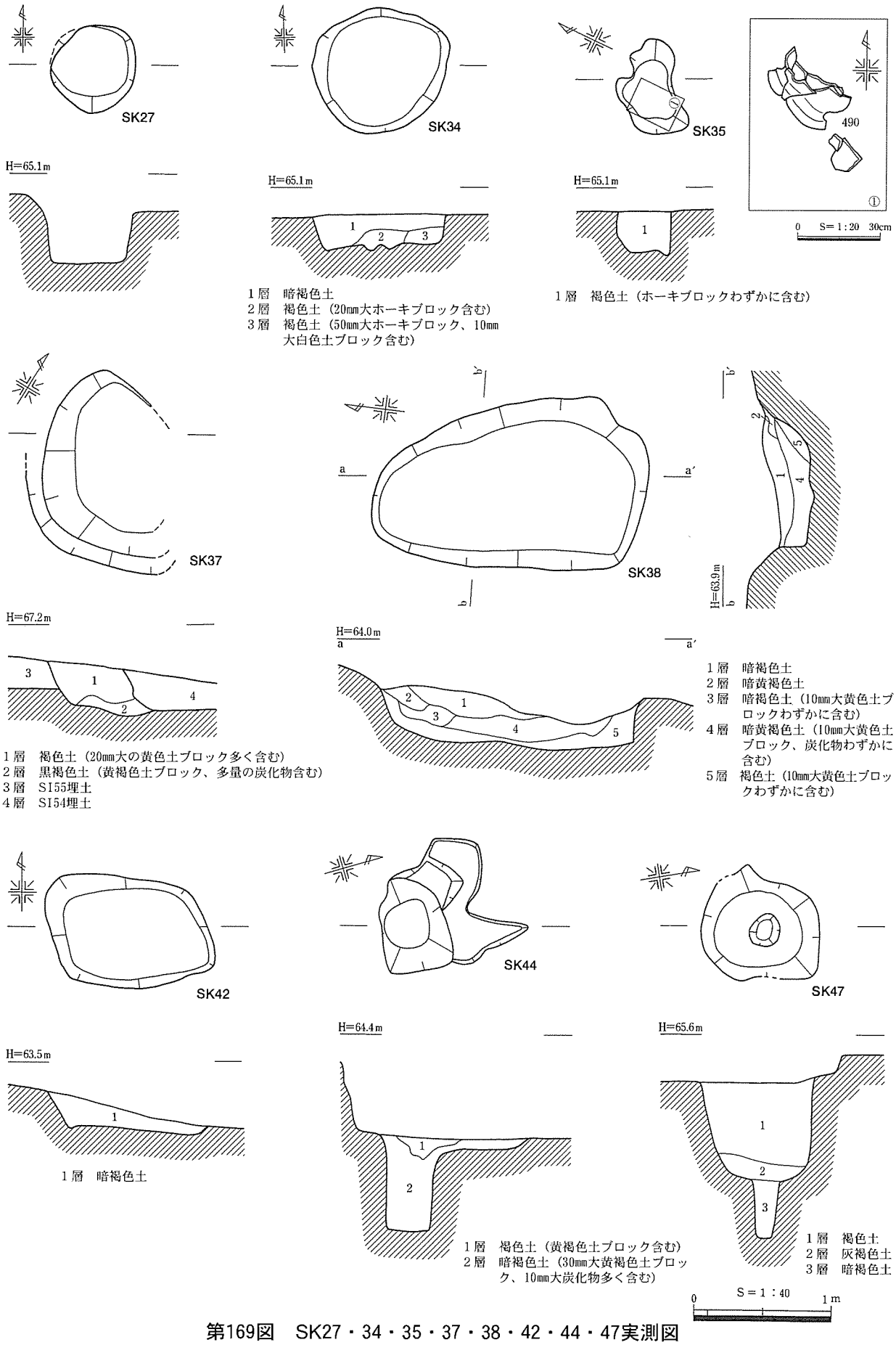
Ｉ13グリッドに位置する。SI21埋土を切る。直径約70cm、検出面からの深さ50cmの円形土坑である。出土遺物は皆無であるが、SI21との切り合い関係より、弥生時代後期後葉以降のものと考える。用途については不明である。（淺田）

SK24（第168図）

Ｉ15グリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で、２段掘りである。規模は長径84cm、短径43cm、深さは南西側で最大60cmを測る。遺物は皆無で、時期は不明である。（阪上）



第168図　SK17～20・22～26実測図



第169図　SK27・34・35・37・38・42・44・47実測図

SK25（第168図、PL. 40）

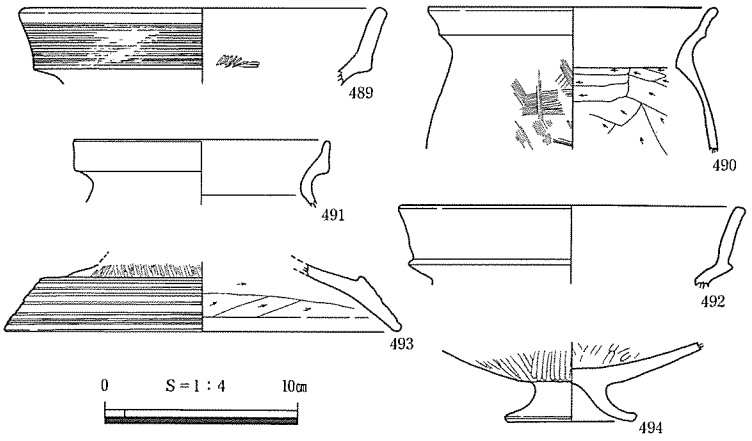
Ｉ12グリッドに位置する。SI20を切る。上部は攪乱を受け、底部付近のみ検出された。長軸115cm、短軸88cmの隅丸方形を呈す。検出面からの深さは、最大20cmである。遺物は皆無であるが、SI20との切り合い関係から弥生時代後期後葉以降と考える。（淺田）

SK26（第168図、PL. 40）

Ｉ17グリッドに位置する。長径69cm、短径67cmの円形土坑である。底面までの深さは11cmである。遺物は皆無で、時期、性格ともに不明である。（阪上）

SK27（第169図）

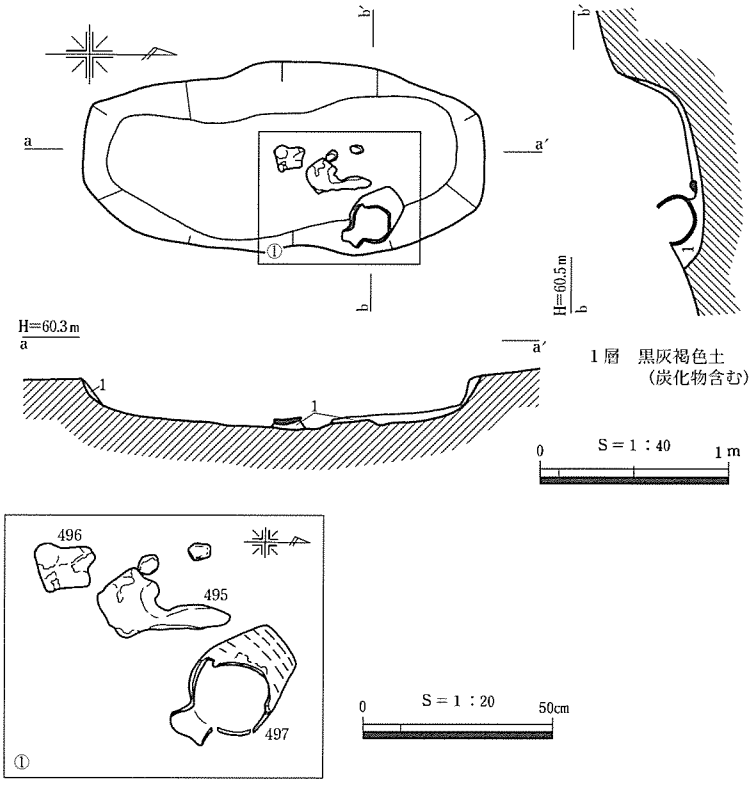
Ｉ12グリッドに位置する。SI20を切る。平面は円形で、直径約60cmである。検出面からの深さは38cmである。遺物は埋土中から、器台の脚部493が出土した。これは清水編年のＶ－２期から３期にかけてのものであり、弥生時代後期中葉から後葉に相当する。これは本遺構の埋没過程で、SI20から流れ込んだものと考える。本遺構の時期はSI20との切り合い関係から、弥生時代後期後葉以降と考えられる。用途については不明である。（淺田）



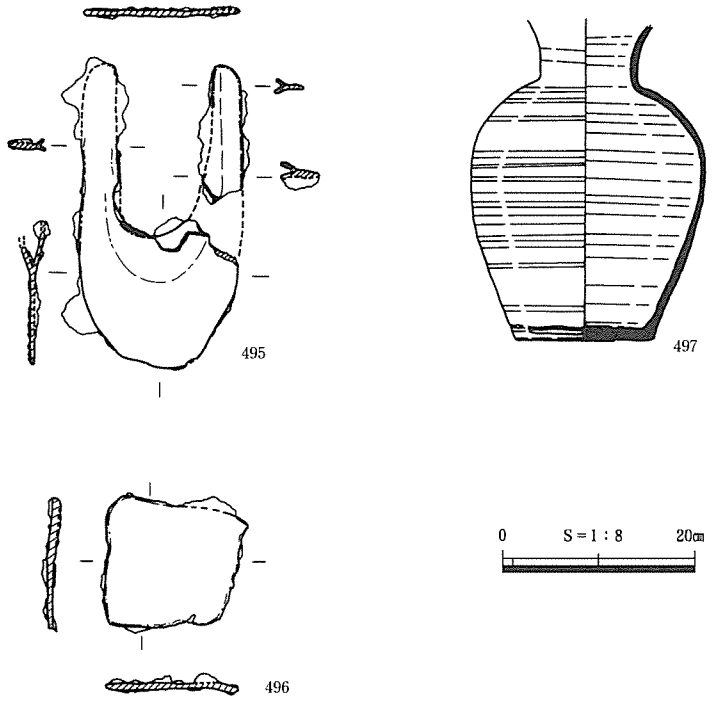
第170図　SK27・34・35・45・49・51出土土器

SK29（第171図、PL. 40）

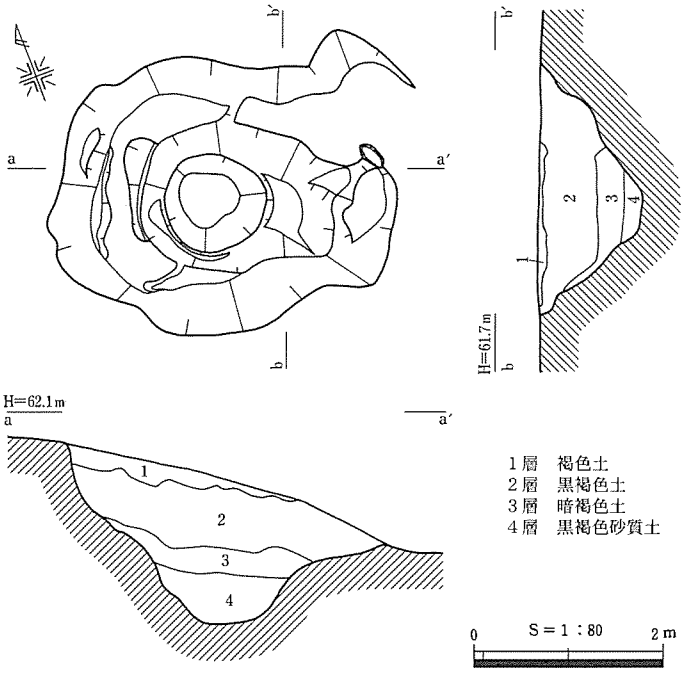
E12グリッド、標高64m付近の斜面で検出した。台地の上面からの比高差は、およそ４mである。長軸215cm、短軸100cmの歪な長方形を呈する。底面は多少の凹凸があるものの緩いU字形で、両端の高低差は顕著ではない。土壙の主軸は、ほぼ座標北に一致する。土壙内中央からやや北寄りにて須恵器壺、鉄製鋤（鍬）先、方形の鉄板が出土した。須恵器壺は底面からわずかに上から口縁部側を東南側へ向け、出土した。鋤先は刃部を南へ向け、底からわずかに



第171図　SK29実測図



第172図　SK29出土遺物



第173図　SK30実測図

上から出土した。風呂部の木質の付着は認められない。方形の鉄板は、鋤先と出土レベルも同じで、厚みや材質が酷似するが、その破損品とは考え難く、性格は不明である。遺構の性格としては、埋土中から、棺痕跡が検出されなかったことから、土壙墓とみられる。出土した須恵器からみて平安時代のものと考えられる。　（小山）

SK30（第173図、PL. 41）

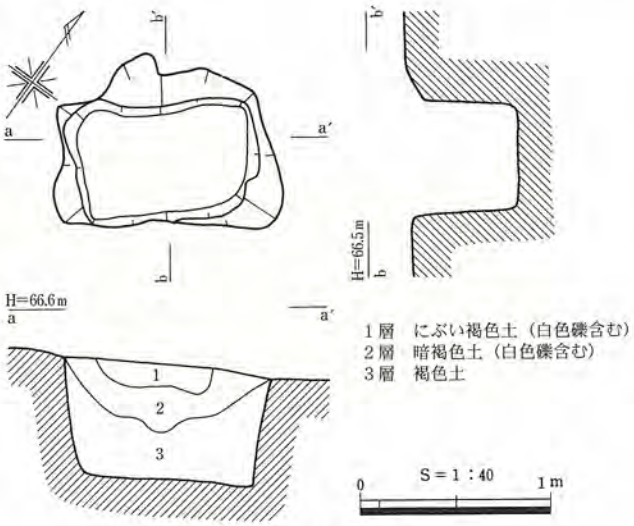
E11グリッドで検出した。本遺構は谷１に南接した位置にあり、検出面はこの谷に堆積した褐色土である。規模は東西420cm、南北300cm、深さ230cmで、平面形は歪な楕円形を呈する。白色粘質土層まで掘り込まれるが、湧水層ではない。土坑内に堆積する埋土の状況はSD１と近似し、出土遺物もSD１と同様に須恵器等のほか陶磁器の破片も認められた。本土坑の性格は形態からみて、溜井などの機能を有していた可能性が高いと思われる。時期は出土遺物から近世以降の時期が考えられる。　（野口）

SK32（第174図、PL. 41）

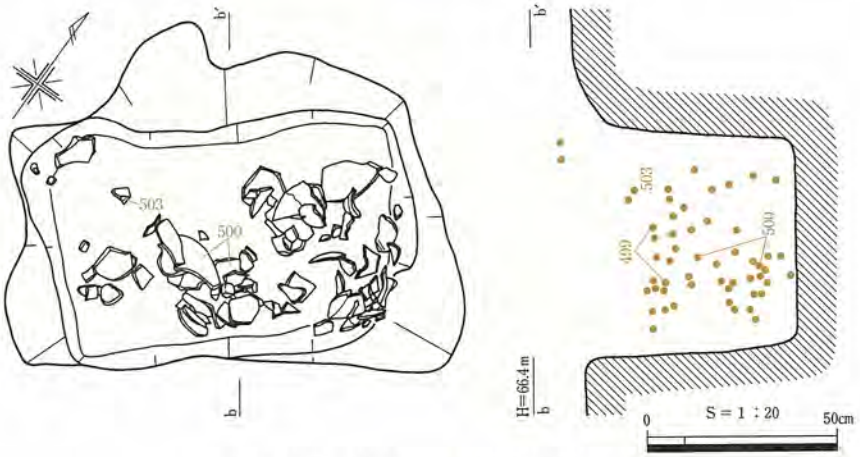
F19グリッドの南側、標高66.2～66.4mのゆるやかな斜面に位置する。平面は長方形を呈する。規模は長軸225cm、短軸155cm、検出面からの深さは67cmを測る。底面は平坦である。遺物については、遺構の全面にわたって土器片が出土した。土器は２個体分以上の甕が細片となり出土した。498と499、500と501がそれぞれ同一個体の可能性が高い。これらは特に東隅及び、中央やや南寄りに集中しており、前者は底面から38cm、後者は30cm高い位置で出土した。500と501に関しては、中央やや南寄りにまとまって出土しており、498と499は東隅から散らばるように出土した。土器以外の遺物として、西側で底面から34cm上の位置から鉄鏃503が、埋土上層から扁平な緑色凝灰岩502の石核が出土している。当遺構出土の遺物は、良好な一括資料である。上記の甕が清水編年Ⅳ－３期に相当することから、弥生時代中期末の時期と考えられる。　（阪上）

SK34（第169図、PL. 41）

J12グリッドに位置する。規模は東西95cm、南北90cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から最深部で25cmであった。出土遺物はわずかであるが埋土中から491の甕口縁部の破片がみられた。垂直に立ち上がった口縁部外面は、平行沈線文が省略され、ヨコナデのみによる調整がみられる。この特徴から清水編年のＶ－３期に該当する。よって、本遺構の年代は弥生時代後期後葉の時期の可能性が高い。また本遺構は、検出の段階ですでにSI27の埋土が遺存しなかったことから、SI27床面での検出となりSI27との関連については明らかでなかった。このことから個別に取り扱ったが、SI27が弥生時代後期後葉の時期であるならば、SI27内に伴う土坑の可能性がある。　（野口）



第174図　SK32実測図



第175図　SK32遺物出土状況図

SK35（第169図、PL. 41）

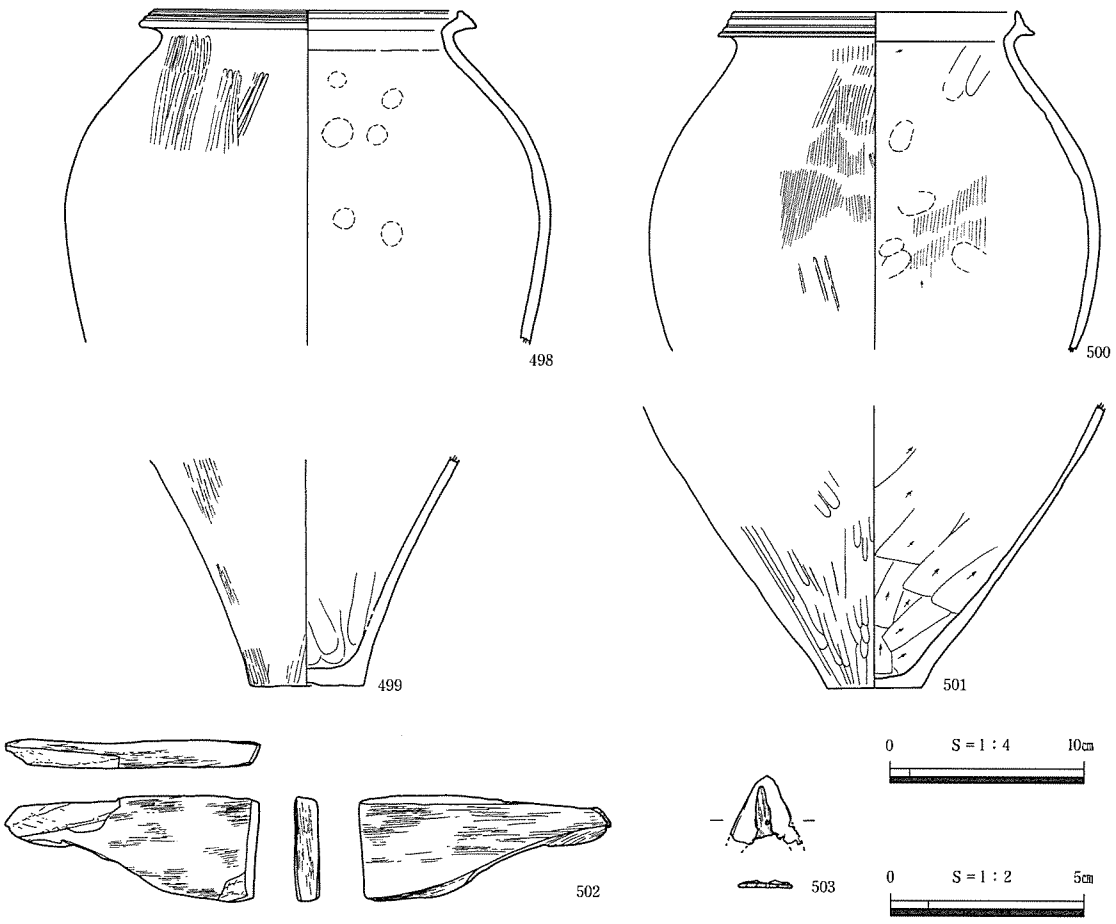
I12グリッドに位置する。東西50cm、南北70cmの長楕円形を呈す。深さは検出面から最深部で32cmであった。埋土中から490の甕が出土した。この甕は、古墳時代中期の甕と同様口縁部稜線から口唇部までを短縮化させるものの肩の張りはなく、残存部分からは長胴化している可能性が高い。このことから古墳時代後期以降とみられるが、退化しながらも複合口縁であることを勘案するならば、古墳時代後期頃の年代が考えられる。　（野口）

SK37（第169図、PL. 31）

G18グリッドに位置する。SI54に切られ、SI55の北側を切る。平面形は不明だが、残存する部分から不整楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸146cm、推定短軸110cmを測る。検出面からの深さは最大35cmである。遺物は底面で土器片が数点出土したが、いずれも時期不明である。本遺構の時期についてはSI54、SI55との切り合い関係から、古墳時代前期と想定される。　（淺田）

SK38（第169図、PL. 41）

B10グリッドに位置する。長径205cm、短径120cm、南北に長い楕円形を呈する。検出面からの深さ66cmを測る。遺物は土器片が少量出土したが、時期等は不明である。　（阪上）



第176図　SK32出土遺物　502、503のみ　S＝½

SK42（第169図、PL. 42）

F12グリッドに位置する。長軸132cm、短軸84cmの隅丸長方形を呈する。底面までの深さは最大27cmを測る。出土遺物が皆無なため、時期は不明である。（阪上）

SK45（第177図、PL. 42）

D９グリッドに位置する。この土坑はSI10から屋外へのびる溝を切る。規模は長軸250cm、短軸215cmで、長方形を呈する。検出面からの深さは34cmを測る。埋土中から甕の口縁部492が出土している。

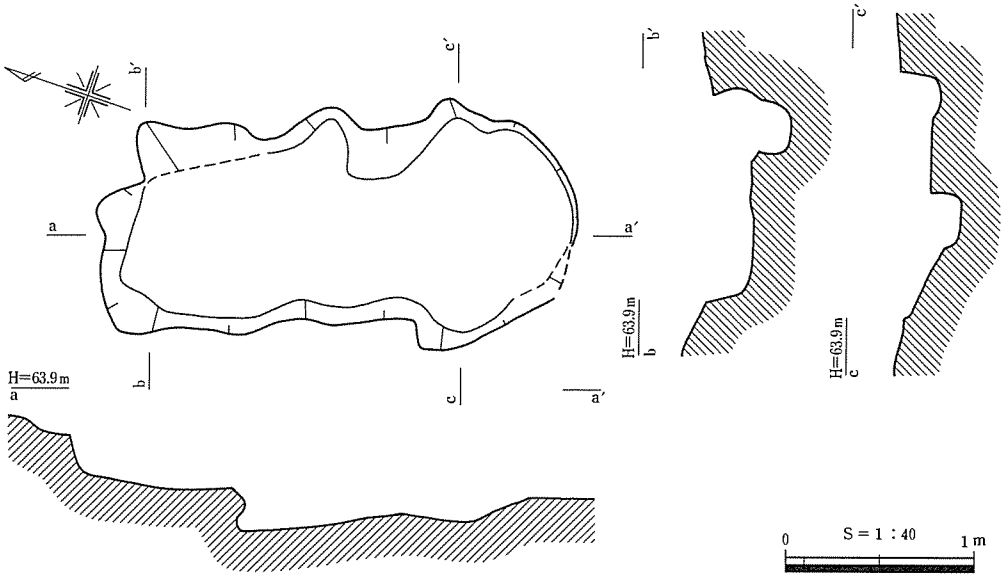
本遺構の年代は、SI10が古墳時代前期であることから、古墳時代前期以降のものである。（阪上）

SK46（第178図、PL. 42）

H17グリッド、SI16の床面上で検出した。SI16に破壊され、遺存状況は悪い。最深部で30cmほどである。平面形は隅丸方形を呈し、一辺約160cmを測る。断面形は袋状を呈し、下端が上端部より最大26cm壁際に入り込む。形状からみて貯蔵穴の可能性がある。遺物は皆無で、時期が不明であるが、SI16との層位的関係から弥生時代後期前葉以前とみられ、中期に遡上する可能性が高い。（淺田）

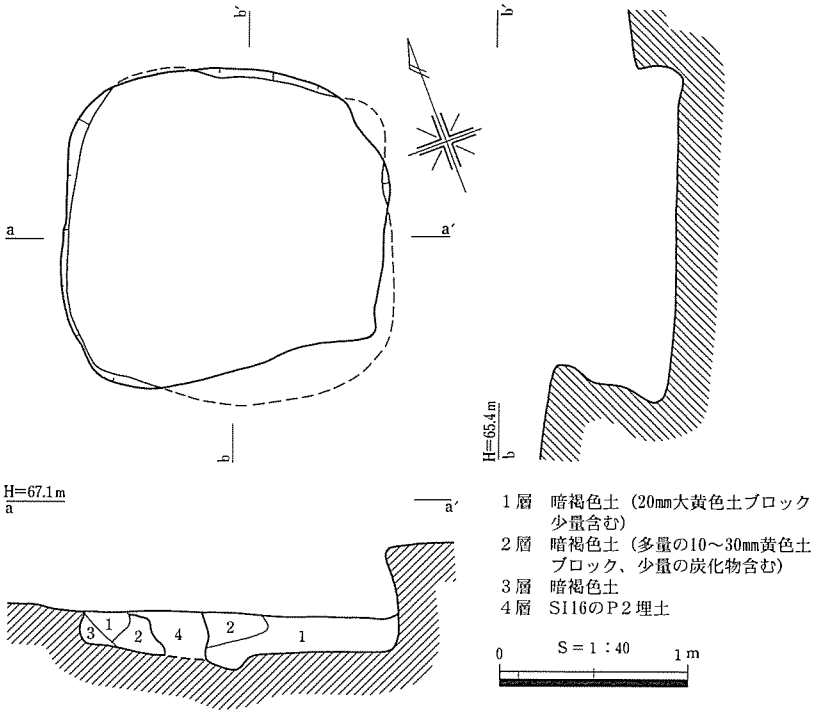
SK47（第169図）

G16グリッドに位置し、SI43に上半部を削平される。規模、平面形は楕円形で、東西83cm、南北104



第177図　SK45実測図

cmを測る。深さは確認面から72cmを測り、底面中央には深さ40cmの底面ピットがみられる。形態からみて落とし穴と考えられる。出土遺物は皆無で、詳細な時期は不明だが、本遺構を削平するSI43の年代が弥生時代後期前葉であることから、弥生時代後期前葉以前の年代が考えられる。　（野口）



第178図　SK46実測図

SK49（第179図）

E16グリッドの谷部の地山面で検出した。長径120cm、短径130cmの円形土坑である。深さは約10cmと浅い。489の甕口縁部が出土しており、清水編年のV－３期に該当することから、弥生時代後期後葉の土坑とみられる。

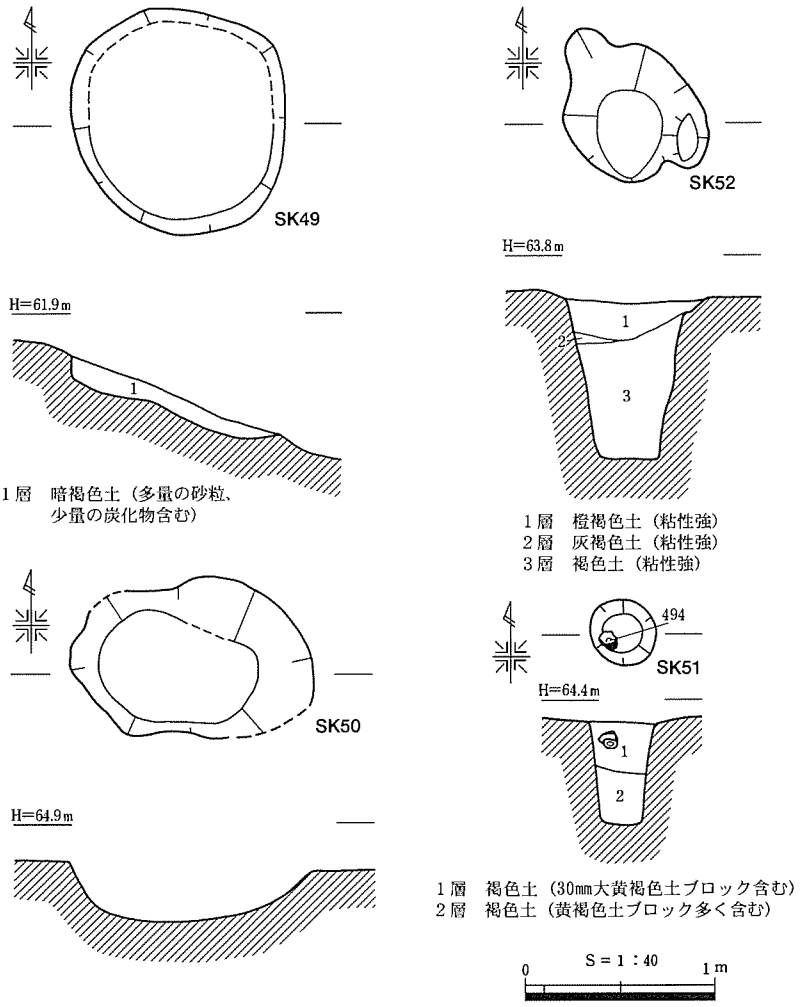
（小山）

SK50（第179図）

I12グリッド、SI21の北西隅に位置する。長径130cm、短径82cmの歪な楕円形を呈す。検出面からの深さ30cmを測る。出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。　（小山）

SK51（第179図、PL. 42）

I９グリッドに位置する。長径37cm、短径33cm、現状での深さ55cmを測る。上部は攪乱を受けていることから、本来は１m以上の深さであったとみられる。底面ピットも検出されず、小規模であるこ



第179図　SK49～52実測図

とから、落とし穴とは考え難い。上層埋土から494の低脚杯が出土した。土坑の性格は不明であるが、出土した土器から、古墳時代前期のものと判断される。　（小山）

SK52（第179図）

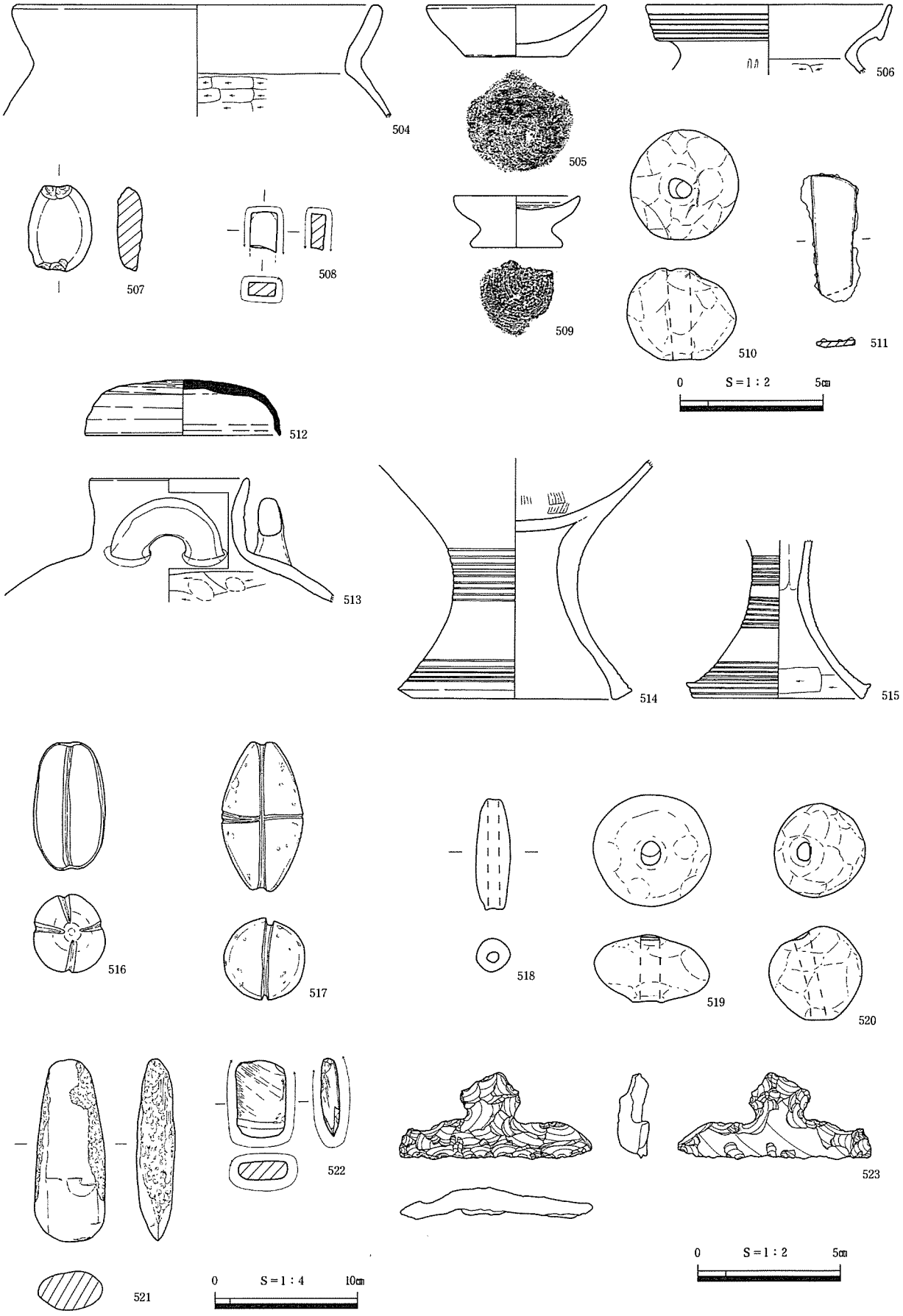
Ｂ９グリッド杭の南東側に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径83cm、短径67cm、検出面からの深さは88cmを測る。遺物は時期不明の土器が出土したのみであるため、時期、性格ともに不明である。　（阪上）

(7)　その他の遺構・遺物

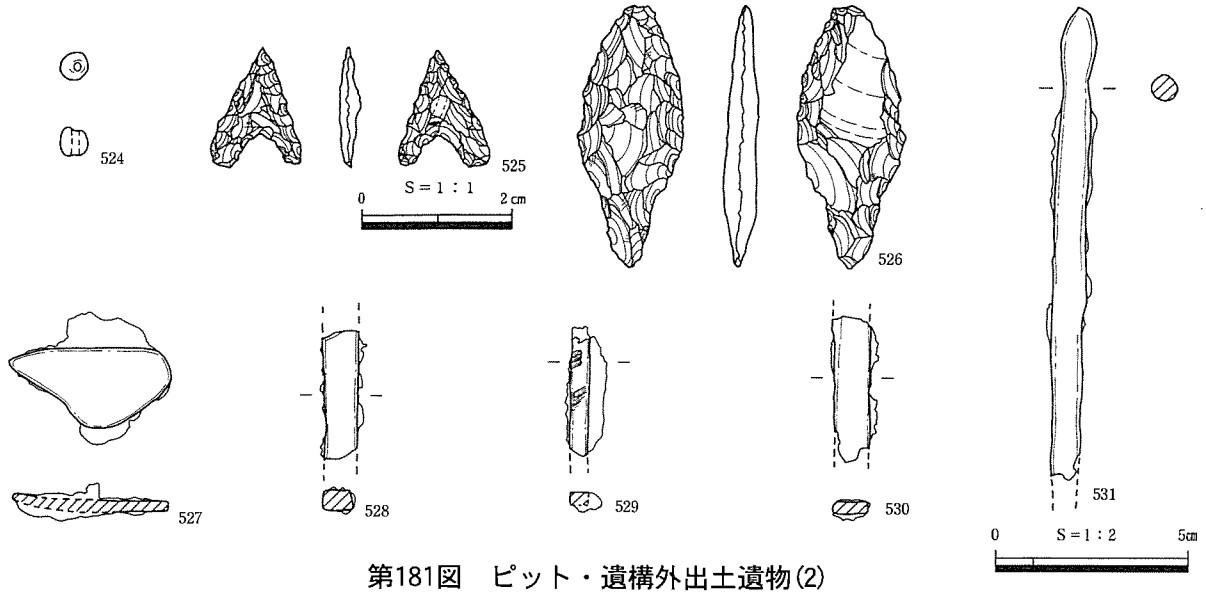
調査区内からは多くのピットが検出された。その大部分は、出土遺物もなく、配置は不規則で時期、性格ともに不明である。しかし一部では、出土遺物を伴うものもみられた。ここでは、出土遺物を一括して報告することとする。また遺構外からも多くの遺物の出土がみられた。これらの出土遺物の帰属する時期は幅広いことから、ここではピットと遺構外に分けたうえ、土器、石器等の種別ごとに報告する。また、玉作関連遺物に関しては第３節で、まとめて取り扱う。

504～511はピット内から出土した遺物である。506の甕口縁部は外反した口縁部に平行沈線文が施されることから清水編年Ｖ－３期、弥生時代後期後葉のものである。504は甕の肩部から口縁部にかけての破片である。口縁部が単純口縁であること、肩部がやや張り長胴化認められないことから古墳時代後期頃のものと思われる。505は土師器の杯で、内外面の調整は回転台使用によるヨコナデを施し、底部には回転糸切痕が認められる。器壁が厚いなどの特徴から平安時代末期、12世紀頃のものと考えられる。509の柱状高台杯も器高がやや高くなる形態から12世紀頃のものと考えられる。507は細粒花崗岩の礫長軸端部を打ち欠いた打欠石錘、508は緑泥片岩を材質にした砥石で破損部以外は全面が砥面として使用されている。510は有孔土錘で最大径４cmを測る。511は板状の鉄片で、左側面部に比べ、右側面部は短い平面形を呈する。最大で長軸43.0mm、短軸15.5mm、厚さ2.5mmを測る。

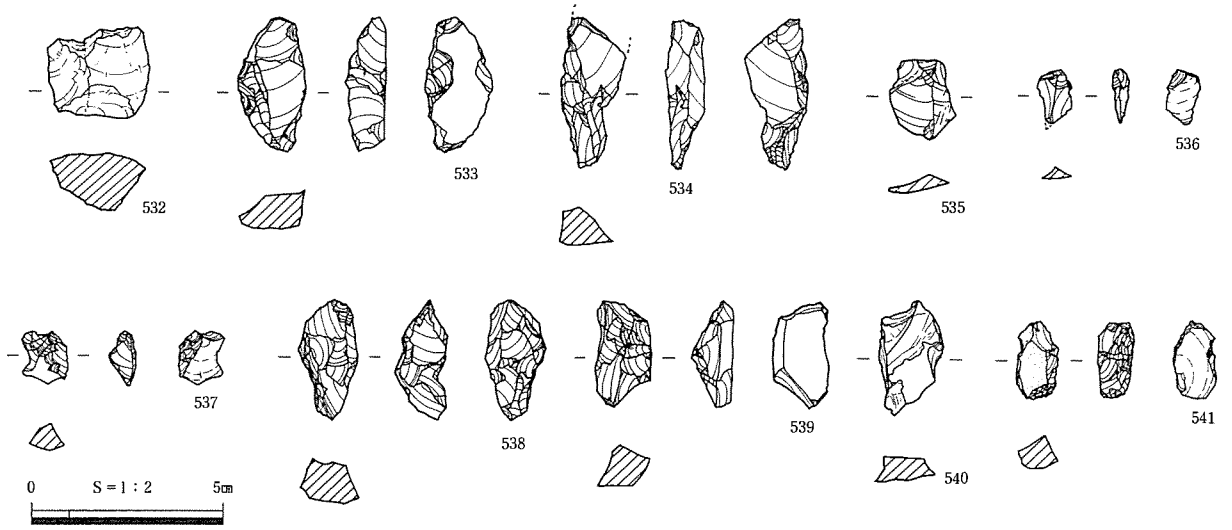
512～531までは遺構外出土の遺物である。512は須恵器の杯蓋で、天井部と口縁部の間の稜線は不明確で、口唇部も丸みを持っている。形状からTK209型式併行期、６世紀末から７世紀初頭頃に位置づけられる。513、514、515はいずれも弥生時代中期後葉と思われるもので、513は水差し形土器、514は台付鉢、515が器台、もしくは高杯である。516、517は有溝石錘で、516は長軸に沿って２条の



第180図　ピット・遺構外出土遺物(1)　510、511、518～520、523は　S＝½



第181図　ピット・遺構外出土遺物(2)



第182図　遺構外出土玉類未製品

溝を施し、517は長軸、短軸ともに１条の溝を十字に施している。518は長軸40mm、短軸12mmの管状土錘、519は最大径42mm、520は最大径33mmを測る有孔土玉で、519はやや扁平な形状である。521は磨製石斧で、側部には整形に伴う調整痕が残る。522は扁平片刃石斧で、全面に研磨による調整が及んでいる。材質は軟玉で、産地の同定は行わなかったが、近隣の軟玉産地としては兵庫県大屋町が知られる。523は黒曜石製の石匙で、70度を超す急角度による調整よって刃部を作り出している。524は青色のガラス製小玉である。525は凹基無茎鏃、526は凸基有茎鏃で、両者ともサヌカイトを材質とする。

527～531は鉄製品で、527は厚さ３mmの不定形の板状鉄片、528～530は断面長方形、531は断面円形の棒状の鉄片で、529には植物性繊維を巻いた痕跡が遺存する。532～541までは玉作関連遺物である。532～539は水晶の剥片である。535、536が調整剥片で、それ以外は素材剥片である。540、541は碧玉の素材剥片である。　（野口）

第３節　まとめ

(1)　遺跡の変遷

当遺跡の始まりは、縄文時代前期初頭に遡る。この時期の遺構は、落とし穴のみであることから、当該期のこの一帯は狩猟の場として、利用されたものと考えられる。

集落形成が開始するのは、弥生時代中期後葉である。この段階の住居跡はSI38、47、65など数棟にとどまる。また土器を一括廃棄した土坑であるSK32、貯蔵穴と考えられるSK46などもこの時期に属する。住居の分布は、台地の縁辺部に立地する傾向にある。

後期前葉に属する住居跡は、ＳＩ２、16、17、30、60などで集落規模に変化はない。これを前後する時期は、近隣の八橋出土銅鐸が埋納された頃とみられる。また詳しい出土状況は明らかでないが、久蔵峰から出土したという銅矛もこれに近い時期に埋納されたものと推察される。このことは、当遺跡に居住した集団が、青銅器祭祀に深く関わっていた可能性を示すものといえる。

後期中葉に営まれた住居跡は、ＳＩ４、15、57の３棟で集落規模に依然変化はない。ところが、後期後葉になると台地の全面に住居が広がり、住居の数が激増し、集落形成のピークを迎える。この時期の住居跡は、SI11、12、14、18～21、23～25、27、31、33、34、36、37、39、40、45、46、56～58、61、63等である。また掘立柱建物もこの時期に属するものが多く、SB４、６、８、10、布掘掘立柱建物２などがこれに該当する。

弥生時代終末から古墳時代初頭の時期になると、再び集落規模が縮小する。この時期のものとしてＳＩ５、８、13、22、26、29、64などが挙げられる。

古墳時代前期前半に属するものとして、ＳＩ３、９、10、55が挙げられる。前期中葉になるとＳＩ１のみとなり、前期後葉の住居跡は当遺跡内ではみられない。この時期は集落形成の一時衰退期であるといえる。古墳時代中期初頭はSI41、中期中葉がSI51、54、中期後葉がＳＩ７、SI48が該当する。このように前期後葉の集落の衰退後も、小規模ながら古墳時代中期全般を通じて集落が継続したことが窺える。この時期の住居の分布は再び、台地の縁辺部へと移るようである。

当遺跡における集落の営みは古墳時代中期末をもって終わる。その後は平安時代の土壙墓や、ピット、近世以降の溝がみられるが、台地上に人が居住した痕跡は顕著ではない。

近年、東伯耆一体は大規模調査が相次ぎ弥生集落の調査事例が蓄積されつつある。笠見第３遺跡、井頭地中ソネ遺跡、三林遺跡などが挙げられ、いずれも当遺跡の近隣に所在する遺跡である。細かな時期のずれが認められるものの、いずれも弥生時代中期後半から後期にかけて台地上に集落が営まれ、古墳時代にかけて継続するあり方を示す。当遺跡の消長もこれと同調するものである。こうした集落の消長が、一遺跡単独の現象でないことは、何らかの社会的背景を一とした連動するものであると考えられる。また、こうした集落の動向は、因幡、伯耆全体にわたって敷衍するものであるという指摘もある。その社会的背景を考えていくことは重要であり、今後の課題としておきたい。

(2)　玉作について

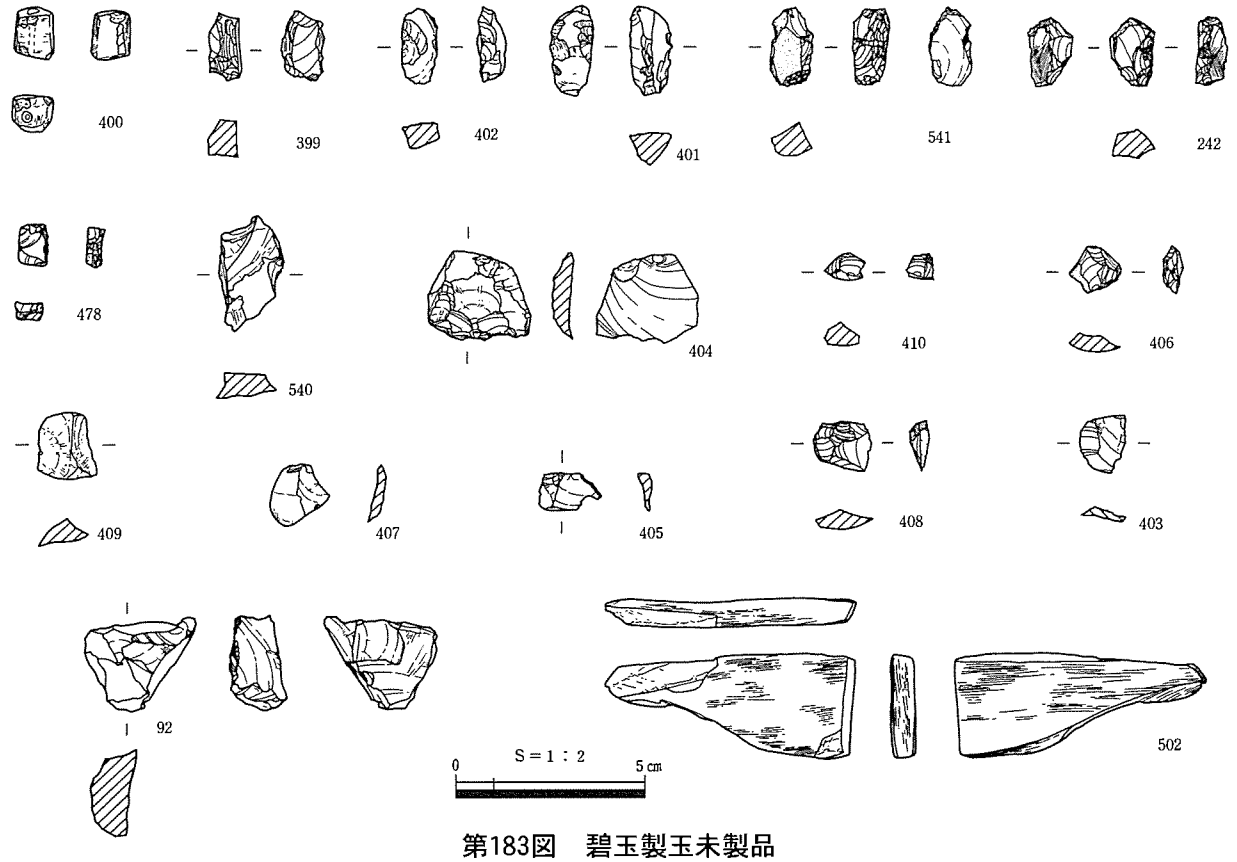
久蔵峰北遺跡の玉作　遺跡内における玉作の始まりは、弥生時代中期後葉に遡る。SK32出土の緑色凝灰岩製の石核502は、施溝分割技法により、角柱状の管玉未製品を抽出する前段階のものとみられる。当遺跡内で施溝分割の技法が認められる例は、これのみである。また素材の面からみても他の

玉未製品に比べ軟質であり、技法や素材の選択などの面からみて古い特徴を示している。残念ながら当該期の玉作工房は明らかでないが、この石核は弥生時代中期後葉における遺跡内での玉作を行っていたことを示す証左となる。

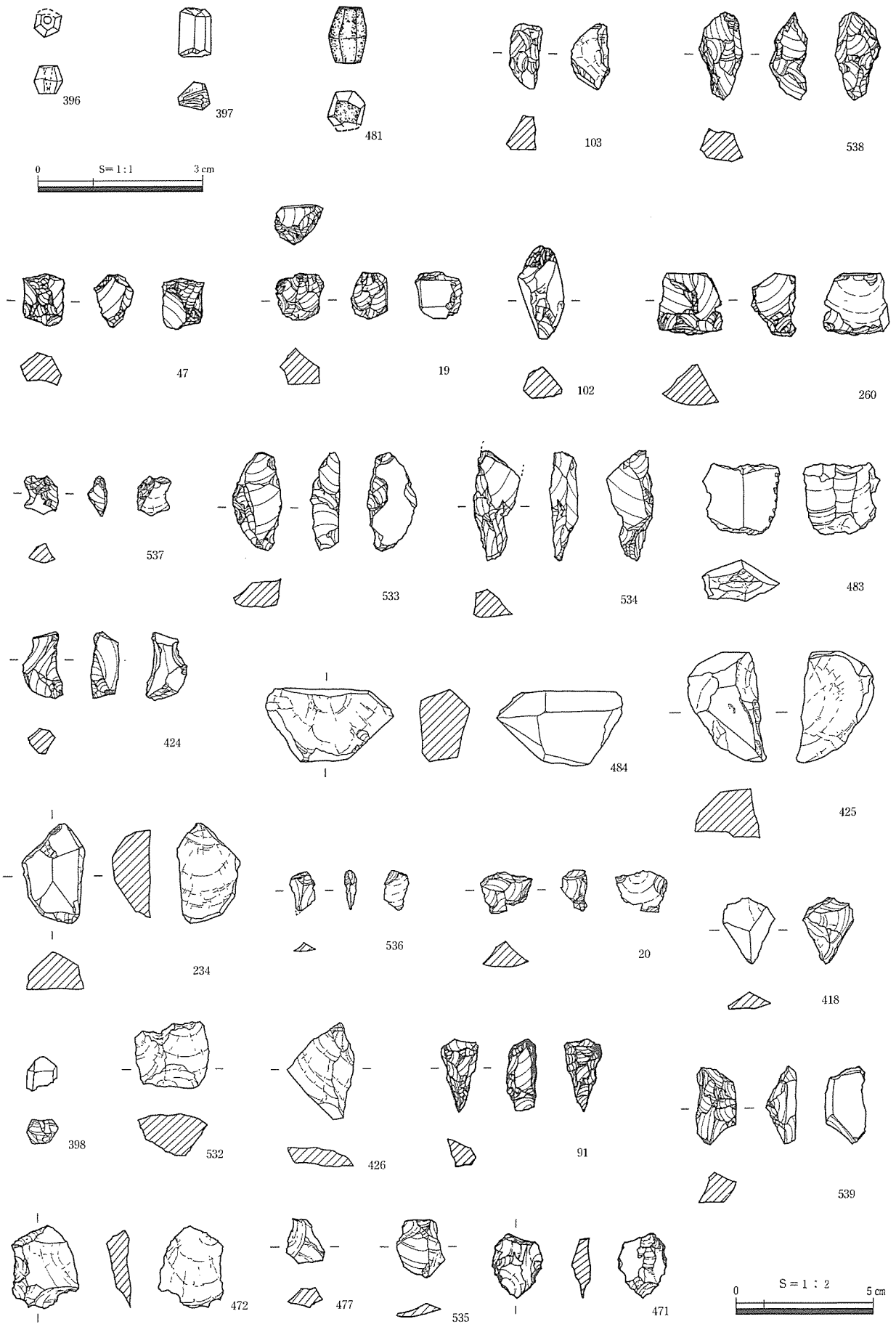
玉作工房が明らかとなったのは、弥生時代後期後葉のSI58である。台地の縁辺部に位置する小規模な建物である。床面直上から管玉未製品400などが出土したほか、埋土中から碧玉70点、水晶６点、緑色凝灰岩６点が出土した。他の住居跡の埋土中からも水晶や碧玉の剥片が出土しているが、微量であり床面直上出土でもなく、住居廃絶後の流れ込みと判断される。また遺跡全体における玉剥片類の出土分布は、SI58とその周辺に多い傾向にある。このことは当遺跡における玉生産が小規模で、空間的にも限られた範囲でのみ行われていたことに他ならない。このように当遺跡における玉生産の実態は、一般集落の一画で小規模な生産を行うといった専業性の低い生産体制であったと考えられる。このことは、ムラ単位で専業的な大規模生産を行う京都府奈具岡遺跡等と対称的といえる。

碧玉製玉類について　玉作の素材は水晶，碧玉、緑色凝灰岩の３種類である。未実測分も含め、遺跡全体の総重量は、234.9ｇである。その内訳は水晶が173.9g、碧玉が36.2ｇ、緑色凝灰岩が24.8ｇである。碧玉は、自然科学分析により碧玉には、島根県玉湯町の花仙山産と、北陸産とみられる女代南Ｂ群が含まれていることが判明している。分析結果をもとに色調を手がかりとして未分析資料を分類すると、大半のものが花仙山産とみられる。女代南Ｂ群とみられる剥片の総重量は1.4ｇにすぎない。

近くに所在する笠見第３遺跡は、SI58に先行して花仙山産の碧玉の使用を逸早く開始した遺跡である。出土した碧玉の産地同定の結果、女代南Ｂ群が大半を占め、花仙山産はわずかであった。このことから東伯耆地域において、碧玉製玉類の素材は、弥生時代後期中葉までは、北陸産の可能性が指摘される女代南Ｂ群を、後期後葉は花仙山産が主体を占めていたことを窺わすものである。つまり弥



第183図　碧玉製玉未製品



第184図　水晶製玉未製品　396、397のみ　S＝1/1

生時代後期中葉から後葉にかけて、玉素材の流通ルートが、東から西へといった流通から、西から東へという流れへ移行したことを示すと言える。また技法の面でも、調整剥離段階の資料（399、401、402、242）をみるといずれも打撃分割技法による調整であり、施溝分割技法がみられるのは、弥生時代中期の502のみである。このことから、素材の選択のみにとどまらず、技法の面においても弥生時代後期後葉に玉作の製作技術上の大きな転換期を迎えたことが窺える。

SI32中央ピット出土の242は、勾玉未製品の可能性がある。弥生時代後期のものとみられる。全長18.1㎜、幅11.8㎜と小ぶりで、半月形を呈する。上面には研磨痕が認められる。左側面は、抉りが認められないが、両面から剥離を行い、薄く調整されている。右側は丸みを帯び、厚い形状に整えている。この状態で、研磨工程へ移っていることから、調整剥離の工程は終了し、製品に近い形状のものと考えられる。碧玉製勾玉は、出雲でも花仙山の近くに所在する古墳時代初頭の樅の木古墳群の包含層中出土例が、古い時期に属するものと考えられている。242が勾玉未製品であることが妥当であるならば、これより時期的に遡上するものである。

水晶製玉生産について　弥生時代の水晶の玉作遺跡で、工房を伴う遺跡は、奈具岡遺跡、鳥取県西高江遺跡、島根県平所遺跡、福岡県潤地頭給遺跡が挙げられる。これらはいずれも専業的な大規模生産を行った遺跡とみられている。一方で遺構に伴わないものの集落内で水晶製玉類の生産をうかがわす遺跡の一つとして、妻木晩田遺跡が挙げられる。400棟を超す住居跡の調査例がありながら、玉作工房が発見されていないことから、集落の一角で小規模な生産を行っていたものと推定される。当遺跡における玉生産の規模も、これに類似するものであったと考えられる。大規模生産を行う遺跡がある一方でこうした小規模生産を行う遺跡のあり方が何に起因するものなのか、現段階では不明である。

切子玉について　切子玉は一般的には古墳時代後期の副葬品である。本例は時期的に大幅に遡上するものである。これまで弥生時代の類例として報告されているのは長崎県対馬の木坂遺跡の石棺墓出土例のみである。ただしその可能性があるものとして、島根県松江市平所遺跡出土の切子玉状未製品が挙げられる。切子玉はこうした弥生時代の遺跡からほとんど出土せず、一方で大陸との玄関口である対馬で出土例があることをふまえると、当遺跡で生産された玉類の供給先についての問題は、大陸とのつながりの中で理解していく必要があろう。

(3)　総括

当遺跡は弥生時代の青銅器が比較的顕著に出土する地域に所在し、近隣でも明治年間に銅鐸が、1980年代には銅矛が出土している。こうした中、今回当遺跡の調査が行われ、これらの青銅器が埋納された時期と併行するとみられる時期の住居跡もみつかった。このことは、当遺跡を形成した集団と銅鐸祭祀を担った集団との極めて深いつながりをうかがわせるものである。

また当遺跡の一画では、小規模ながら玉生産が行われていたことが明らかとなった。玉作に関連する鉄器や、砥石などの出土は顕著でないが、玉作を大規模に行う専業的な集落とは対称的な、一般集落における玉生産の一端が明らかとなったといえる。（小山）

参考文献

鳥取県教育文化財団　2003　『笠見第３遺跡発掘調査概報』
米田克彦　2002　「島根県安来市大原遺跡における玉生産」『古代文化研究』10　島根県古代文化センター
高田健一　2003　「玉作り関連遺物」『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書』　鳥取県教育委員会
坂田邦洋　1976　『対馬の考古学』

なお、本稿の玉未製品の分類にあたり、上掲の米田論文を参考とした。

表58　久蔵峰北遺跡玉未製品観察表

遺　構　名	No.	材　　質	素材・形状	最大長(cm)	最大幅(cm)	重　量(g)	備　　考
ＳＩ１	19	水晶	素材剥片	1.7	1.7	4.8	
ＳＩ１	20	水晶	剥片	1.5	1.9	2.2	
ＳＩ３	47	水晶	調整剥片	1.9	1.5	4.2	
ＳＩ９	91	水晶	調整剥片	2.6	1.4	3.8	裏面に夾雑物
ＳＩ９	92	碧玉	石核	2.5	2.9	9.5	
ＳＩ10	102	水晶	素材剥片	3.4	1.5	6.2	
ＳＩ10	103	水晶	調整剥片	2.4	1.3	3.9	もしくは素材剥片
ＳＩ30	234	水晶	石核	3.6	2.2	13	
ＳＩ32	242	碧玉	勾玉未製品	1.81	1.18	2.4	
ＳＩ37	260	水晶	素材剥片	2.2	2.4	8.1	
ＳＩ58	396	水晶	切子玉	5.3	5.3	0.2	研磨痕残り半透明、未製品か？
ＳＩ58	397	水晶	素材剥片	0.9	0.6	0.4	
ＳＩ58	398	水晶	剥片	1.3	1.1	1.3	
ＳＩ58	399	碧玉	調整剥片	0.87	0.53	0.3	一部研磨痕あり
ＳＩ58　床面直上	400	緑色凝灰岩	管玉未製品	1.77	0.99	2.0	穿孔済み
ＳＩ58	401	碧玉	調整剥片	2.4	1.1	2.4	
ＳＩ58　床面付近	402	碧玉	調整剥片	2.0	1.9	1.7	
ＳＩ58　床面付近	403	碧玉	剥片	1.2	1.5	0.6	
ＳＩ58	404	碧玉	剥片	2.3	2.7	4.0	
ＳＩ58	405	碧玉	剥片	0.9	1.6	0.3	
ＳＩ58　床面付近	406	碧玉	剥片	1.2	1.3	0.7	
ＳＩ58　床面付近	407	碧玉	剥片	1.6	1.5	0.6	
ＳＩ58　床面付近	408	碧玉	剥片	1.3	1.5	1.0	
ＳＩ58　床面付近	409	緑色凝灰岩	素材剥片	1.7	1.5	1.4	
ＳＩ58　床面付近	410	碧玉	剥片	0.7	1.1	0.4	
ＳＩ59	418	水晶	剥片	2.4	1.8	2.1	
ＳＩ60	424	水晶	素材剥片	2.4	1.0	3.9	
ＳＩ60	425	水晶	石核	4.0	2.5	24.0	
ＳＩ60	426	水晶	剥片	3.5	2.4	5.8	
ＳＤ１	471	水晶	剥片	2.3	1.8	3.0	
ＳＤ１	472	水晶	剥片	3.0	2.3	5.6	
ＳＤ２	477	水晶	剥片	1.6	1.4	1.7	
ＳＤ５	478	碧玉	調整剥片	1.1	0.7	0.6	厚さ4.8mmの板状原石
ＳＫ１	483	水晶	素材剥片	2.6	2.8	11.2	やや濁り半透明
ＳＫ１	484	水晶	石核	2.6	4.6	29.6	
ＳＫ11	481	煙水晶	切子玉未製品	2.05	1.45	5.0	未穿孔　敲打痕あり　裏面に長軸に平行する剥離あり。敲打による破損か？　敲打ののち一部研磨
ＳＫ32	502	緑色凝灰岩	石核	6.1	2.8	16.4	厚さ7.6mm
Ｐ709	532	水晶	素材剥片	2.4	2.6	9.7	
Ｄ10Ｇ	533	水晶	素材剥片	3.5	1.8	8.3	
Ｅ10Ｇ	534	水晶	素材剥片	4.0	1.7	6.1	
Ｇ12Ｇ	535	水晶	剥片	2.1	1.8	1.4	
Ｊ９Ｇ	536	水晶	剥片	1.4	0.9	0.5	
Ｊ９Ｇ	537	水晶	剥片	1.4	1.2	1.2	
Ｅ12Ｇ	538	水晶	調整剥片	3.2	1.6	5.4	
Ｊ９Ｇ	539	水晶	剥片	2.8	1.4	4.8	
Ｂ９Ｇ	540	碧玉	剥片	3.0	1.7	3.4	
Ｅ11Ｇ	541	碧玉	調整剥片	2.0	1.0	2.6	

表59　久蔵峰北遺跡土器観察表

（　）は復元値　※は残存値

遺構・地区・層位	No.	器種	法量（cm）	調整	色調	胎土	焼成	備考
SI1 床面直上	1	甕	器高※11.2	外面：ヨコナデ，ヨコハケ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI1 床面付近	2	甕	口径(15.1)　器高※13.0	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，指頭圧痕，ケズリ	鈍い灰黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI1 東区下層	3	甕	口径(16.0)　器高※13.8	外面：ヨコナデ，ハケ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	外：鈍い灰黄褐色 内：橙色	密(砂礫を多く含む)	良	煤付着
SI1	4	甕	胴部径(23.2) 器高※9.5	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ，指頭圧痕，ケズリ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI1 床面直上	5	甕	口径(15.6)　器高※3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外：鈍い黄橙褐色 内：橙褐色	密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI1 床面直上	6	高杯	口径18.3　器高※5.3	外面：ナデ 内面：ナデ	橙色	密(砂粒を含む)	良	破損後煤付着
SI1 床面付近	7	高杯	口径(20.0)　器高※5.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　脚内：シボリ	橙褐色	密(砂粒をわずかに含む)	良	－
SI1 北西区	8	高杯	口径17.4　器高※12.1	外面：タテハケ後ミガキ，ナデ 内面：ミガキ，シボリ	橙褐色	密	良	内外面煤付着
SI1 床面直上	9	高杯	口径17.4　器高※5.2	外面：ハケ後ヨコナデ 内面：ハケ後ナデ	橙色	密(砂粒を含む)	良	内面黒斑有
SI1 床面直上	10	高杯	口径16.8　器高※4.9	外面：ナデ，ハケ 内面：ナデ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI1 床面付近	11	高杯	口径(17.4)　器高※5.1	外面：ナデ 内面：ナデ	橙色	密(砂粒を多く含む)	やや良	－
SI1 上層	12	高杯	器高※6.4　底径(9.6)	外面：ナデ，オサエ 内面：ナデ	鈍い黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI1	13	高杯	器高※7.1　底径(14.2)	外面：ミガキ，ヨコナデ 内面：シボリ，ミガキ，ヨコナデ	淡褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI1	14	小型丸底壺	胴部径(9.1)　器高※6.0	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ナデ，指頭圧痕	橙色	密	良	外面煤付着
SI1 北西区	15	甕	口径(10.4)　器高※4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ後ミガキ，ケズリ	鈍い灰黄褐色	密	良	内外面煤付着
SI1	16	埦	口径(11.0)　器高※5.0	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ	黄橙褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面赤彩
SI1 上層	17	須恵器杯蓋	口径(12.2)　器高※3.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI1 南北ベルト	18	須恵器杯身	口径(11.0)　器高※3.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	暗灰褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI2	24	甕	口径(18.8)　器高※4.3	外面：ヨコナデ，タテハケ 内面：ヨコナデ，指頭圧痕，ナデ	鈍い黄褐色	やや密(砂粒を多く含む)	良	内面煤付着
SI2 検出面	25	甕	器高※3.5　底径(8.5)	外面：ミガキ　底面：ナデ 内面：ケズリ	外面：浅黄色 内面：灰黄色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI3 床面直上	26	甕	口径(18.2)　器高※4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI3	27	甕もしくは壺	器高※5.4　底径(5.8)	外面：ナデ 内面：ケズリ	褐灰色	やや密(砂粒を含む)	良	内面煤付着
SI3 北区下層	28	甕もしくは壺	器高※3.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI3	29	甕	口径(13.6)　器高※14.0	外面：ヨコナデ，ヨコハケ，タテハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	やや密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI3	30	甕	口径(18.2)　器高※4.2	外面：ヨコナデ，ナデ，平行沈線 内面：ヨコナデ，ケズリ、ナデ	浅黄橙色	やや密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI3 北西区	31	甕	口径(15.6)　器高※5.3	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI3	32	甕	口径(16.0)　器高※4.25	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	鈍い黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI3 南ベルト	33	甕	口径(16.0)　器高※5.0	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI3	34	甕	器高※19.5	外面：ハケ，ナデ 内面：ケズリ，指頭圧痕	外面：鈍い橙色 内面：鈍い黄橙色	やや密	良	内外面煤付着
SI3 東南区	35	甕	口径(12.6)　器高※2.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	褐灰色	密	良	－
SI3 東区上層	36	埦	口径(15.0)　器高※4.4	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ミガキ	明赤褐色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI3 東区上層	37	壺	器高※6.6	外面：ナデ，多条平行沈線，貝殻腹縁文，ナナメハケ後ナデ　内面：ナデ，ケズリ	外面：鈍い橙色 内面：浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI3	38	壺	器高※5.9	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面赤彩煤付着
SI3	39	鼓形器台	器高※6.9	外面：ヨコナデ 内面：ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI3	40	低脚杯	器高※2.1　底径6.0	外面：ヨコナデ 内面杯部：ナデ　脚部：ヨコナデ	淡黄色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI3	41	高杯	器高※3.0　底径(8.4)	外面：ナデ 内面：シボリ後ナデ，ハケ後ナデ	鈍い赤褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI3 東区上層	42	高杯	器高(3.7)	外面：風化のため不明 内面：シボリ後ナデ	淡黄色	密	良	－
SI3 北東区	43	低脚杯	器高※2.4	外面：ナデ 内面：ミガキ(暗文状)	明赤褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI4	48	甕	口径(15.2)　器高※3.0	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	やや良	外面煤付着
SI4	49	甕	口径(12.0)　器高※2.7	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密	やや良	－
SI5 P2	51	鼓形器台	口径(24.6) 底径(21.6)　器高※14.4	外面：ヨコナデ，平行沈線 内面：ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI5	52	高杯	口径(13.2)　器高※7.0	外面：ミガキ 内面：ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI5 南西区	53	器台？	口径(20.8)　器高※2.0	外面：風化のため不明 内面：風化のため不明	黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI5	54	甕	口径(22.4)　器高※14.3	外面：ヨコナデ，ヨコ・ナナメハケ，平行沈線 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI5 南西区	55	壺	口径(9.8)　器高※7.0	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI5 南西区	56	壺	口径(11.6)　器高※6.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI5	57	壺	器高※8.6	外面：沈線，貝殻腹縁文 内面：ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI5	58	低脚杯	器高※3.8	外面：ハケ後ナデ，ヨコナデ 内面：ミガキ、脚内：ヨコナデ，ナデ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI6 西側 SI5 貼床層	61	高杯	口径(22.0)　器高※4.4	外面：ミガキ 内面：ミガキ	鈍い黄橙色	密	良	－
SI6	62	器台	口径(17.4)　器高※7.2	外面：平行沈線後ヨコナデ，ヨコナデ，タテハケ後ナデ　内面：ナデ後ミガキ，ケズリ	明褐色	密	良	－
SI6	63	甕	口径(16.1)　器高※6.9	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ，ケズリ後ナデ	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を含む)	やや良	－
SI6 西側	64	杯	口径(13.8) 底径(6.2)　器高※4.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底面：回転糸切	鈍い黄橙色	密	良	－
SI7 南東区下層	66	甕	口径(16.0)　器高※9.7	外面：ヨコナデ，ハケ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	やや粗(砂粒を含む)	やや良	外面煤付着
SI7 北東区床面直上	67	甕	口径(12.4)　器高※20.0	外面：ヨコナデ，ハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：橙褐色 内面：浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI7 北東区上層	68	カワラケ	口径(6.2)　器高※1.4	外面：ヨコナデ，回転糸切後ナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	密(砂粒を含む)	やや良	－
SI8 北東区下層	69	器台	口径(21.9)　器高※5.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：橙褐色 内面：浅黄褐色	やや密(砂粒を含む)	やや良	－
SI8 下層	70	甕	口径(15.0)　器高※3.3	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI8 下層	71	甕	器高※1.7　底径(4.2)	外面：ナデ 内面：ケズリ	灰色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI8 上層	72	甕	口径(16.2)　器高※8.7	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ，後ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI8 下層	73	高杯	器高※2.6	外面：ナデ 内面：ミガキ　脚内：未調整	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI9	74	甕	口径(19.8)　器高※24.4	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ後ナデ	黄橙色	密	やや良	外面煤付着
SI9 下層	75	壺	口径(22.6)　器高※9.7	外面：ヨコナデ，ハケ，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密	やや良	内外面煤付着
SI9 北東区下層	76	甕	口径(22.0)　器高※8.3	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄褐色	密	良	外面煤付着
SI9 南東区下層	77	甕	口径(16.3)　器高※4.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	密	良	－
SI9 北西側	78	甕	口径(33.1)　器高※7.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI9 南東区下層	79	壺	器高※3.8	外面：ヨコナデ，沈線 内面：ヨコナデ，沈線，ナデ，ケズリ	浅黄色	密(砂粒を含む)	良	－
SI9	80	甕	口径(17.8)　器高※5.2	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI9	81	低脚杯	口径(15.0)　器高※5.5	外面：ナデ 内面：ナデ	明黄褐色	やや粗(砂粒を含む)	良	－
SI9	82	壺	口径6.2　器高8.8	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，オサエ，ケズリ	黄橙色	密	やや良	－
SI9	83	甕	口径(14.8)　器高※13.7	外面：ヨコナデ，ハケ 内面：ヨコナデ，ケズリ	黄橙色	密	やや良	外面煤付着
SI9 南東区上層	84	高杯	器高※4.8	外面：風化のため調整不明。ナデ？ 内面：風化のため調整不明。ナデ？	黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	やや良	外面煤付着
SI9	85	高杯	器高※3.9	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ	橙褐色	密(砂粒を含む)	やや良	外面煤付着

遺構・地区・層位	No.	器種	法　量（cm）	調　整	色　調	胎　土	焼成	備　考
SI9	86	高杯	口径(17.2)　器高※4.5	外面：ナデ 内面：シボリ後ナデ	橙色	やや粗	良	－
SI9	87	高杯	器高※6.5	外面：ナデ 内面：ケズリ	鈍い黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI9	88	高杯	口径(8.4)　器高※7.3	外面：ナデ 内面：ナデ　脚内：ケズリ後ナデ	橙褐色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI9 上層・下層	94	甕形土器	器高※58.4	外面：ナデ，ハケ 内面：ケズリ，ナデ	明黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 床面付近	104	高杯	器高※1.7　底径(17.6)	外面：ナデ？ 内面：ハケ後ナデ	浅黄橙色	密	やや良	－
SI10 P6	105	甕	器高※3.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI10 北西側上層	106	器台	口径(20.6) 底径(18.9)　器高12.0	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ後ヨコナデ，ナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI10 南西側	107	甕形土器	器高※9.3	外面：ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，指頭圧痕	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 中・下層	108	甕	口径(17.8)　器高※5.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	浅黄橙色	密	やや良	－
SI10 北東側	109	器台	口径(22.0)　器高※5.6	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ，ナデ	淡黄色	密(砂粒を含む)	やや良	－
SI10 北東側上層	110	甕形土器	口径12.9　器高※8.0	外面：ヨコナデ，タテハケ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 南西側	111	甕	口径(22.0)　器高※12.2	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ後ナデ	鈍い橙色	密	やや良	内面煤付着
SI10	112	低脚杯	口径17.6 底径4.8　器高5.3	外面：ミガキ，ヨコナデ 内面：ナデ　脚内：ナデ	淡黄色	粗(砂粒を含む)	不良	－
SI10 南西側上層	113	低脚杯	器高※3.2	外面：ナデ 内面：ナデ　脚内：ナデ	浅黄橙色	粗(砂粒を含む)	不良	－
SI10 中・下層	114	小型丸底壺	器高※4.5	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ナデ，指頭圧痕	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を含む)	良	－
SI10 南東側	115	低脚杯	器高※2.5　底径(6.5)	外面：ナデ 内面：ナデ　脚内：ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 南西側	116	甕	口径(14.5)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰色	粗	やや不良	－
SI10 北西側	117	甕	口径(15.4)　器高※7.0	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ	浅黄橙色	やや密(砂粒を含む)	やや良	－
SI10 南西側	118	甕	口径(15.3)　器高※5.2	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	淡灰褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 南東側	119	甕	口径(12.8)　器高※5.1	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	灰白色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI10 北西側上層	120	高杯	口径(23.2)　器高※7.2	外面：ナデ 内面：ナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI10 南東側	121	高杯	口径(16.0)　器高※4.9	外面：ナデ 内面：風化のため調整不明	灰色	密	やや良	－
SI10 南東側	122	壺	器高※5.7	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ナデ，指頭圧痕	浅黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI10 西ベルト	123	甕	口径(15.8)　器高※2.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	鈍い橙色	やや密	やや良	内面黒斑
SI10 北東側上層	124	高杯	器高※2.4	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ後ナデ，ミガキ	橙色	密	やや良	－
SI10	125	甕	口径(21.0)　器高※5.1	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	やや良	内外面煤付着
SI10 南東側	126	甕	器高※3.5	外面：波状文，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	鈍い橙色	密(砂粒を含む)	やや良	－
SI10	127	甕	口径(18.4)　器高※3.6	外面：平行沈線後ナデ消し，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	やや良	内外面煤付着
SI10 北西側上層	128	高杯	口径(13.4)　器高※5.6	外面：ヨコナデ，タテハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ　脚内：ナデ	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を含む)	良	－
SI10 西ベルト上層	129	高杯	器高※5.1　底径(11.2)	外面：ナデ 内面：ナデ，ヨコナデ	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を含む)	良	－
SI10 北西側	130	高杯	器高※3.9	外面：ナデ 内面：ナデ　脚内：ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI10 北東側	131	甕	器高※5.0	外面：凹線，貝殻腹縁文 内面：ケズリ	外面：橙色 内面：明黄褐色	密	良	－
SI10 南西側	132	甕	器高※3.7　底径(5.8)	外面：ミガキ　底面：ミガキ 内面：ケズリ	灰黄色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI10 南東側上層	133	甕	器高※4.1　底径2.5	外面：ナデ 内面：指頭圧痕，ナデ　底面：ナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI11 東側床面付近	134	壺	口径(14.2)　器高※7.3	外面：ヨコナデ，ナデ，刺突文 内面：ナデ，ケズリ	黄橙色	密	良	－
SI11 東側床面付近	135	甕	口径(16.0)　器高※3.9	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：風化のため調整不明	黄褐色	粗	不良	外面煤付着
SI12 P3	137	甕	器高※21.9　底径(15.6)	外面：平行沈線後ナデ，ヨコナデ，ハケ後波状文 内面：ナデ，ミガキ，ケズリ後ナデ	灰白色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI12 床面付近	138	甕	口径(14.8) 底径6.2　器高23.8	外面：波状文，ヨコナデ，ハケ，波状文，ミガキ 内面：ミガキ，ケズリ	浅黄橙色	密	良	外面赤彩煤付着
SI12 中央P5	139	甕	口径(15.1)　器高※11.6	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，刺突文 内面：ナデ，ケズリ	外面：鈍い橙色 内面：鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI12 床面付近	140	甕	口径(17.6)　器高※6.6	外面：波状文，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：鈍い橙色 内面：明黄褐色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	141	甕	口径(15.2)　器高※13.2	外面：波状文，ナデ，ハケ目後ナデ 内面：ナデ，ケズリ，指頭圧痕	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI12 床面付近	142	甕	口径(16.8)　器高※5.4	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ	浅黄橙色～橙色	密	良	外面煤付着
SI12 床面付近	143	甕	口径(16.2)　器高※4.9	外面：平行沈線，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	鈍い橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	144	甕	口径(15.7)　器高※5.6	外面：平行沈線，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	145	甕	口径(14.9)　器高※7.5	外面：平行沈線後ヨコナデ，ナデ，波状文，ミガキ　内面：ナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面黒斑有
SI12 床面付近	146	甕	口径(17.0)　器高※4.6	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	淡黄色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI12 床面付近	147	甕	口径(15.4)　器高※6.6	外面：平行沈線後波状文，ミガキ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI12 床面付近	148	甕	口径(13.9)	外面：波状文，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内面赤彩
SI12 床面付近	149	甕	口径(22.7)　器高※4.9	外面：波状文，ナデ 内面：ナデ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI12 床面付近	150	甕	器高※4.6	外面：波状文，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	外面：浅黄橙色 内面：淡橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	151	甕	口径(18.0)　器高※10.1	外面：平行沈線後ヨコナデ，ナデ，貝殻状痕 内面：ミガキ，ケズリ	褐灰色	密	良	－
SI12 床面付近	152	甕	口径(9.8)　器高※5.2	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ミガキ，ケズリ後ナデ	外面：鈍い灰褐色 内面：鈍い黄橙褐色	密(砂粒を含む)	良	外面黒斑有
SI12 床面付近	153	甕	器高※3.7　底径(4.4)	外面：ナデ　底面：ナデ 内面：ケズリ	外面：橙色 内面：鈍い橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	154	甕	器高※4.0　底径(3.0)	外面：ミガキ 内面：ケズリ	黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI12 床面付近	155	台付甕	器高※4.2　底径(10.4)	外面：ナデ 内面：ケズリ　脚内：ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI12 床面付近	156	器台	口径(16.4)　器高※4.5	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩 内面煤付着
SI12 床面付近	157	高杯	器高※5.3	外面：タテハケ後凹線 内面：ナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI12 床面付近	158	把手	器高※6.4	外面：ナデ 内面：ケズリ	外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI14 床面直上	161	甕	口径(21.4)　器高※20.5	外面：平行沈線，ミガキ，櫛状文 内面：ミガキ，ケズリ	鈍い黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI14 下層	162	甕	口径(16.8)　器高※9.5	外面：平行沈線，ミガキ，波状文 内面：ミガキ，ケズリ	橙褐色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI14	163	器台	口径(19.8)　器高※7.4	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ミガキ，ケズリ後ナデ	橙褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI15 P3	164	甕	口径(14.5)　器高※17.3	外面：平行沈線，ヨコナデ，ミガキ，ハケ後ミガキ　内面：ミガキ，ケズリ	灰黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI16 床面直上	165	壺	器高※5.1　底径(15.0)	外面：凹線，ヨコナデ，タテハケ後凹線 内面：ヨコナデ，ナデ	外面：淡黄橙色 内面：淡黄色	密	良	外面赤彩
SI16 床面付近	166	甕	器高※2.9	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI16 P5	167	甕	口径(20.0)　器高※4.0	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	淡黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面黒斑有
SI16 床面付近	168	甕	器高※5.3　底径(6.0)	外面：ハケ後ミガキ ケズリ後ナデ　底面：ミガキ	暗灰褐色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI17 床面直上	171	甕	口径(13.8)　器高※2.2	外面：沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI17	172	甕	口径(14.5)　器高※2.4	外面：凹線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI17	173	壺	口径(15.4)　器高※1.5	外面：貝殻腹縁文，ナナメハケ 内面：ナナメハケ	黄橙褐色	密	良	外面煤付着
SI18 床面直上	174	器台	器高※3.8	外面：平行沈線 内面：ミガキ	橙色	密	良	内外面赤彩
SI18	175	甕	口径(16.0)　器高※4.2	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	鈍い黄橙色	密（砂粒を含む）	良	内外面煤付着
SI18 P2	176	甕	器高※3.6	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	灰黄褐色	密	良	内外面煤付着

遺構・地区・層位	No.	器種	法　量（cm）	調　整	色　調	胎　土	焼成	備　考
SI19 検出面	177	甕	口径(15.3)　器高※2.2	外面：平行沈線，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	外面：橙色 内面：浅黄橙色	密（砂粒を含む）	良	外面赤彩
SI19 サブトレンチ	178	甕	口径(16.6)　器高※2.2	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI19	179	甕	－	外面：平行沈線 内面：ヨコナデ，ミガキ	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を多く含む)	良	内外面赤彩
SI19 検出面	180	壺	－	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ	外面：橙色 内面：浅黄橙色	密	良	外面黒斑有
SI19 P15	181	カワラケ	器高※1.1　底径(4.8)	外面：ナデ 内面：ヨコナデ　底面：回転糸切	鈍い黄橙色	密	良	－
SI20 P３	184	甕	器高※3.8	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	鈍い橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI20 床面付近	185	高杯	器高※3.0	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ミガキ	淡橙色	密	良	－
SI20 床面付近	186	甕	口径(14.6)　器高※3.5	外面：平行沈線，ヨコナデ，刻目文 内面：ナデ，ケズリ	鈍い橙色	密	良	外面煤付着
SI20 P23	187	鉢	口径(10.2)　器高※6.0	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ナデ，指頭圧痕	橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面黒斑
SI20 床面付近	188	甕	口径(16.6)　器高※2.3	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	鈍い橙褐色	密	良	内外面煤付着
SI21 P11	191	甕	器高※4.5	外面：ナデ後波状文・竹管文，ミガキ 内面：ミガキ	鈍い赤褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内面黒斑有
SI21 東側周壁溝	192	甕	口径(13.7)　器高※4.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	灰黄褐色	密	良	内外面煤付着
SI21 床面付近	193	甕	口径(15.2)　器高※4.5	外面：平行沈線文後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	灰褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI21 床面付近	194	甕	口径(18.2)　器高※3.9	外面：平行沈線文，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	明黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI21 北東側上層	195	壺	口径(15.6)　器高※5.2	外面：平行沈線文，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	明橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI21 南西側上層	196	甕	口径(15.2)　器高※2.8	外面：平行沈線文，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	淡黄色	密	良	－
SI21 北西側上層	197	甕	口径(14.4)　器高※4.7	外面：平行沈線文，ヨコナデ，貝殻腹縁文 内面：ミガキ，ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI21 検出面・上層	198	壺	器高※2.5　底径(3.3)	外面：ハケメ後ナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	橙色	密	良	内外面赤彩，内面黒斑，穿孔2ヶ所有
SI21 床面付近	199	甕	器高※2.5　底径(3.3)	外面：ミガキ（一部ハケメを残す） 内面：ケズリ，ナデ　底面：ナデ，ミガキ	鈍い褐色	密	良	外面煤付着
SI21 東南側	200	鉢	口径(9.4)　器高※3.0	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	淡橙色	密	良	－
SI22	208	甕	口径(22.0)　器高※9.1	外面：ヨコナデ，ナデ，波状文 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	やや密	やや良	外面煤付着
SI22 検出面	209	器台	口径(25.6)　器高※7.6	外面：波状文，ナデ 内面：ナデ	橙色	粗	やや良	－
SI22 P22	210	甕	口径(15.0)　器高※3.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI22 撹乱土	211	甕	器高※2.2　底径(4.4)	外面：ミガキ 内面：ナデ　底面：ナデ，ミガキ	褐灰色	密	やや良	－
SI22	212	高杯	器高※6.4	外面：ナデ 内面：シボリ，ナデ	浅黄橙色	密	やや良	－
SI23 P17	215	甕	口径(21.2)　器高※2.9	外面：ナデ，タテハケ 内面：ヨコハケ	褐灰色	密	やや良	外面煤付着
SI23	216	甕	口径(17.0)　器高※2.6	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	鈍い黄橙色	密	やや良	－
SI23 撹乱土	217	甕	口径(6.4)　器高※3.7	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ　底面：ハケ	鈍い橙色	密	やや良	内外面煤付着
SI24	220	甕	口径(14.6)　器高※3.1	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	黄橙色	密(砂流を僅かに含む)	やや良	内外面黒斑有
SI24 P５	221	甕	口径(16.0)　器高※4.6	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面一部煤付着
SI25	223	甕	器高※7.2	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	やや良	外面煤付着
SI25 P２	224	甕	口径(16.0)　器高※4.1	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	暗黄褐色	粗(砂粒を多く含む)	やや良	外面煤付着
SI25 P１	225	甕	口径(20.0)　器高※4.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	やや良	内外面煤付着
SI26 床面直上	227	壺	口径(14.6)　器高※13.5	外面：ヨコナデ，ミガキ後ヨコナデ，波状文，平行沈線　内面：ハケ後ナデ，ケズリ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI26	228	甕	口径(19.2)　器高※9.3	外面：平行沈線後ナデ，平行沈線，波状文 内面：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI26	229	低脚杯	器高※1.9　底径(6.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黄橙色 内面：黄褐色	密	良	内面黒斑有
SI27	230	壺	口径(22.0)　器高※6.4	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI28	231	甕	器高※4.65　底径(5.8)	外面：ミガキ，ナデ 内面：ケズリ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI29 南西側	232	甕	口径(15.0)　器高※4.1	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	外面：鈍い黄橙色 内面：浅黄色	粗(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI29 P３	233	壺	口径(13.2) 底径（4.6）	器高※16.2	外面：ヨコナデ，ケズリ後ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	粗(砂粒を多く含む)	良	内外面赤彩 底面煤付着
SI31 南東側	235	甕	器高※16.4　口径(15.8)	外面：平行沈線後ナデ，ミガキ，凹線 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒多く含む)	良	内外面煤付着
SI31 P687	236	甕	口径(4.9)　器高※3.0	外面：ミガキ 内面：ナデ　底面：ナデ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI31	237	甕	器高※5.5　底径(5.6)	外面：ハケ後ナデ 内面：ミガキ　底面：ナデ	浅黄色	密	良	外面煤付着
SI32 P４	240	甕	器高※6.4　底径(5.6)	外面：ナデ 内面：ナデ　底面：ケズリ後ナデ	外面：鈍い黄橙色 内面：橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI32 南側	241	埦	口径(13.3)　器高※3.7	外面：ヨコナデ，ハケ後一部ナデ 内面：ヨコナデ，ハケ後一部ナデ	鈍い橙色	密	良	－
SI33 床直	243	甕	器高※2.4　底径(4.2)	外面：ミガキ 内面：ケズリ　底面：ミガキ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI34 P５	244	甕	口径(10.2)　器高※3.1	外面：平行沈線，ヨコナデ後タテハケ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI34 P６	245	甕	器高※3.4	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	暗灰褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面煤付着
SI34 北西側下層	246	台付甕	器高※4.3	外面：ナデ 内面：ナデ　脚部内：ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI36	250	甕か器台	器高※3.3	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	浅黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI36 床面付近	251	甕	器高※5.1	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩 外面煤付着
SI36 床面直上	252	甕	口径(2.8)　器高※0.9	外面：ナデ 内面：ケズリ　底面：ナデ	灰色	密(砂粒)	良	外面～底面煤付着
SI36 北西側	253	甕	口径(18.0)　器高※4.5	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内面赤彩 内面煤付着
SI36	254	甕	口径(13.4)　器高※5.1	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI36 床面直上	255	壺	器高※52.0　底径(17.0)	外面：平行沈線，波状文，ハケ後ナデ，ミガキ 内面：ケズリ，ナデ　底面：ハケ後ナデ	橙色	やや粗(砂粒・砂礫を多く含む)	良	内外面黒斑有
SI37 南西側	256	器台	器高※4.1	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ミガキ	浅黄褐色	密	良	内外面赤彩
SI37 南西側	257	壺	器高※5.9	外面：ミガキ 内面：ナデ	鈍い黄橙色	やや密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI37 北西側	258	甕	口径(21.0)　器高※4.7	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI37 北西側	259	甕	器高※5.3	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI38 床面付近	261	壺	口径(20.8)　器高※10.6	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	鈍い橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI38 床面付近	262	甕	口径(27.0)　器高※5.0	外面：凹線，ヨコナデ，タテハケ 内面：ヨコナデ，ナデ	淡褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI38 床面付近	263	甕	口径(22.6)　器高※4.7	外面：凹線，ナデ 内面：ヨコナデ，ハケ，ミガキ	外面：橙褐色 内面：淡灰褐色	密(砂粒を含む)	良	外面被熱により赤化
SI38 床面付近	264	甕	口径(20.0)　器高※3.4	外面：凹線，ヨコナデ， 内面：ヨコナデ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	頸部指頭圧痕貼付突帯 外面被熱により赤化
SI38 床面付近	265	壺	口径(15.4)　器高※9.7	外面：貝殻腹縁文，ヨコナデ，タテハケ後凹線 内面：ヨコナデ，ナデ後ヨコハケ	淡黄褐色	密	良	－
SI38 床面付近	266	甕	口径(16.0)　器高※3.0	外面：３条の凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	淡黄褐色	密(砂粒僅かに含む)	良	－
SI38 床面付近	267	甕	口径(16.0)　器高※1.5	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面煤付着
SI38 床面付近	268	壺	口径(15.0)　器高※5.8	外面：凹線，ヨコナデ，凹線後貝殻腹縁文 内面：ヨコナデ後ミガキ，ナデ	浅黄褐色	密	良	内面赤彩
SI38 床面付近	269	甕	器高※3.6	外面：凹線，ヨコナデ，ナデ 内面：ミガキ，ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI38 北西側下層	270	甕	口径(20.0)　器高※3.4	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ後ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩 外面煤付着
SI38 西ベルト	271	壺	口径(24.0)　器高※32.1	外面：凹線，ハケ 内面：ヨコナデ，ハケ，ケズリ	外面：浅黄橙色 内面：浅黄褐色	密	良	内外面煤付着
SI38 床面付近	272	壺	器高※19.7　底径(8.0)	外面：ミガキ 内面：ケズリ　底面：ナデ	褐灰色	密(砂粒を多く含む)	良	内面煤付着
SI38 床面付近	273	壺	器高※12.3	外面：ヨコナデ，ハケ，貝殻腹縁文 内面：ナデ，ハケ	鈍い黄橙色	密	良	－

遺構・地区・層位	No.	器種	法　量（cm）	調　整	色　調	胎　土	焼成	備　考
SI38 床面付近	274	甕	器高※3.3　底径(5.9)	外面：ナデ 内面：ナデ　底面：ナデ	鈍い黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI38 床面付近	275	甕	器高※2.2　底径(9.4)	外面：ヨコナデ 内面：ナデ　底面：ナデ	黄橙褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI38 床面付近	276	甕	器高※11.1　底径(5.9)	外面：ミガキ 内面：ケズリ，ナデ　底面：ナデ	淡黄色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI38 床面付近	277	器台	口径(20.0)　器高※4.0	外面：凹線，ナデ 内面：ナデ	黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI38 床面付近	278	高杯か器台	器高※8.5　底径(18.0)	外面：ミガキ，平行沈線後ナデ消し 内面：ナデ，ケズリ後ミガキ，ヨコナデ	鈍い橙色	密(砂粒を含む)	良	筒部透孔 内外面赤彩
SI38 床面付近	279	高杯か器台	器高※5.7　底径(16.1)	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ	鈍い黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI38 床面付近	280	台付甕	器高※5.5　底径(12.0)	外面：ミガキ　内面：ナデ　脚端：凹線 脚内：ヨコナデ，ケズリ，ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を多く含む)	良	内面黒斑
SI38 床面付近	281	器台	口径(35.3)　器高※11.1	外面：凹線，波状文，ナデ 内面：ヨコナデ，ハケ　口唇部：波状文	灰黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI38 南西側	282	壺	器高※3.3　底径(7.0)	外面：ケズリ後ナデ 内面：ミガキ　底面：ナデ	黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI39 床面付近	284	甕	口径(26.8)　器高※8.5	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ，波状文	橙褐色	密(砂粒多く含む)	良	－
SI39 南東側下層	285	甕	口径(21.2)　器高※6.4	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：黄橙褐色 内面：淺黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI39 南東側下層	286	甕	口径(20.0)　器高※4.0	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI39 南西側下層	287	甕	器高※6.3　口径(22.9)	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，タテハケ 内面：ミガキ，ケズリ後ミガキ	黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI39 床面付近	288	壺	器高※6.2	外面：ナデ後凹線，貝殻腹縁文，竹管文，渦巻文 内面：ケズリ	灰褐色と淺黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩 外面煤付着
SI39 Ｐ３	289	器台	口径(20.0)　器高※5.3	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI39 Ｐ５	290	甕	口径(14.0)　器高※4.4	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面煤付着
SI39 東ベルト	291	甕	器高※3.6　底径(5.8)	外面：ミガキ 内面：ケズリ後ナデ　底面：ミガキ	淡褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 床面直上	294	甕	口径(20.0)　器高※3.9	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 南東側下層	295	甕	口径(14.4)　器高※4.6	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI40 東ベルト下層	296	甕	口径(22.0)　器高※4.3	外面：平行沈線，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 東ベルト下層	297	甕	口径(15.0)　器高※3.9	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	橙褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 西側床面直上	298	甕	器高※12.8　底径(4.2)	外面：ミガキ 内面：ケズリ　底面：ナデ	浅黄橙色	密	やや粗	内外面煤付着
SI40 南西ベルト中層	299	甕	口径(21.9)　器高※5.3	外面：平行沈線，ヨコナデ，ミガキ，貝殻腹縁文 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 南東側中層	300	甕	口径(19.5)　器高※6.1	外面：平行沈線，ヨコナデ，貝殻腹縁文 内面：ヨコナデ，ケズリ	暗橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI40 南東側下層	301	甕	器高※4.6　底径(4.4)	外面：ナデ後ミガキ 内面：ナデ　底面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 北西側下層	302	甕	口径(20.0)　器高※3.2	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI40 北西側中層	303	壺	口径(15.0)　器高※6.2	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，凹線 内面：ヨコハケ，ヨコハケ	淡黄褐色	密(砂粒を多く含む)	良	内面黒斑有
SI40 南西側中層	304	甕	器高※3.5　底径(4.9)	外面：タテハケ後ミガキ 内面：ナデ　底面：ミガキ	外面：暗黄褐色 内面：黄褐色	密	良	外面煤付着
SI40 Ｐ９	305	壺	器高※8.1	外面：凹線，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI40 南東側下層	306	器台	口径(24.0)　器高※7.6	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ナデ，ミガキ	橙褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI40 南東側中層	307	甕	器高※5.0　底径(7.8)	外面：ナデ 内面：ナデ　底面：ナデ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI41	315	甕	口径(15.6)　器高※25.6	外面：ヨコナデ，ヨコハケ，刺突文，ハケ後ナデ 内面：ミガキ，ケズリ後ナデ	浅黄橙色	やや粗(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI41 SK41	316	甕	口径(15.3)　器高※26.0	外面：ヨコナデ，ヨコハケ後タテハケ，刺突文， ハケ後ナデ　内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	やや密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面煤付着
SI41	317	甕	口径(16.0)　器高※5.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	浅黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI41 床面直上	318	高杯	口径(17.6)　器高※4.6	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ミガキ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI41 床面付近	319	小型丸底壺	器高※5.0	外面：ヨコナデ，ハケ後ナデ 内面：ナデ，ケズリ	外面：黒褐色 内面：褐灰色	密(砂粒を含む)	良	－
SI41 床面付近	320	甕	器高※3.0　底径(8.0)	外面：不明 内面：ナデ　底面：ナデ	外面：橙色 内面：淺黄橙色	やや密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI41 南西隅	321	甕	口径(24.2)　器高※4.7	外面：平行沈線後ナデ消し，ナデ 内面：ミガキ，ケズリ	橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI41 南東側	322	壺	器高※9.3	外面：ヨコナデ，ミガキ，ハケ，竹管文 内面：ヨコナデ，ハケ後ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI42 床面付近	323	甕	底径(18.9)　器高※2.7	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ミガキ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI42 下層	324	甕	口径(15.6)　器高※4.1	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内面赤彩
SI42 下層	325	甕	底径(21.6)　器高※3.5	外面：凹線 内面：ミガキ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面黒斑有
SI42 下層	326	甕	器高※5.4　口径(18.4)	外面：平行沈線，ヨコナデ，貝殻腹縁文 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI42 下層	327	甕	口径(11.2)　器高※3.1	外面：凹線後平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI42 床面付近	328	低脚杯	器高※3.3　底径(7.2)	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ　底面：ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	内外面赤彩
SI42 上層	329	甕	器高※4.1　底径(5.5)	外面：ミガキ，ナデ 内面：ミガキ	外面：鈍い黄橙色 内面：暗灰色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI42 南東側	330	蓋	器高※4.0　底径(16.6)	外面：ハケ後ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ミガキ，ヨコナデ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	内面煤付着
SI42	331	甕	器高※2.3　底径(7.2)	外面：ナデ，ハケ後ナデ 内面：ケズリ	外面：褐灰色 内面：灰色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI42 下層	332	甕もしくは壺	器高※2.1　底径(7.0)	外面：ミガキ 内面：ケズリ，ナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面赤彩
SI43 北東側床面直上	336	甕	口径(22.0)　器高※4.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	橙褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI43 床面付近	337	甕	口径(17.0)　器高※5.6	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	浅黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面煤付着
SI43 南西側床面直上	338	甕	器高※3.5	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	淡褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI43 北西側下層	339	甕	口径(22.0)　器高※4.0	外面：凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI43 床面付近	340	甕	器高※4.8	外面：凹線，ヨコナデ，タテハケ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ヨコハケ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内面煤付着
SI43 Ｐ１	341	甕	器高※4.3	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI43 Ｐ９	342	甕	器高※3.4	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	暗黄褐色	密	良	－
SI43 北東側下層	343	器台	口径(20.0)　器高※3.7	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ナデ	黄橙褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	口縁部に線刻による鋸歯文
SI43	344	器台	器高※3.9	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ミガキ	外面：赤褐色 内面：橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI43 上層	345	壺	器高※4.6	外面：ナデ 内面：ナデ，ケズリ	淡褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	内外面赤彩
SI45 南西側下層	349	甕	口径(17.7)　器高※4.5	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ミガキ，ケズリ	鈍い橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SI45 北西側下層	350	甕	口径(17.6)　器高※4.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	暗黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI45 南東側下層	351	甕	口径(17.0)　器高※5.4	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI45 北西側上層	352	甕	口径(18.0)　器高※5.2	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI45	353	甕	器高※3.6　底径(5.8)	外面：ナデ 内面：ケズリ　底面：ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI45 Ｐ３	354	甕	口径(16.0)　器高※3.3	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	暗灰褐色	密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SI45 Ｐ３	355	台付甕	器高※4.8　底径(14.7)	外面：ヨコナデ，平行沈線後ナデ消し 内面：ヨコナデ，ナデ	黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI45 北西側	356	甕	口径(20.0)　器高※4.5	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面黒斑有
SI46 南西側上層	358	器台	器高※11.8	外面：凹線，ナデ 内面：ケズリ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI46 南西側上層	359	台付甕	器高※4.2　口径(12.6)	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ後ミガキ　脚内：ナデ	外面：黄褐色 内面：暗灰色	密(砂粒を含む)	やや良	－
SI47 床面付近	360	壺	口径(30.0)　器高※2.0	外面：６条の凹線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI48 床面付近	361	甕	口径(18.0)　器高※10.2	外面：ヨコナデ，ハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，指頭圧痕	外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	外面煤付着
SI48 床面付近	362	甕	口径(15.0)　器高※4.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－

遺構・地区・層位	No.	器種	法量（cm）	調整	色調	胎土	焼成	備考
SI48 床面直上	363	高杯	器高※5.9　底径(9.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI48 床面付近	364	須恵器 杯蓋	口径(12.0)　器高※3.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI48 床面付近	365	須恵器 高杯(脚)	－	ナデ	暗灰色	密	良	－
SI51 床面直上	366	甕	口径(18.6)　器高※6.1	外面：ヨコナデ，ミガキ，ハケ 内面：ヨコナデ	浅黄橙色	密	良	内面煤付着
SI51 下層	367	高杯	器高※4.9	外面：ハケ，板オサエ，ミガキ 内面：ナデ	橙色	密	良	－
SI51 下層	368	高杯	器高※8.0	外面：ナデ 内面：ナデ　脚部内面：シボリ	橙色	密	良	－
SI51 上層	369	甕	口径(26.0)　器高※10.8	外面：ハケ後ナデ，ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	黒褐色	密	良	内外面煤付着
SI51 床面直上	370	高杯	口径(13.6)　器高※7.9	外面：ヨコナデ，ハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，ハケ後ナデ，ミガキ	橙色	密	良	－
SI54 北東側	374	甕	口径(12.0)　器高※4.5	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密	良	内外面煤付着
SI54 P4	375	高杯	口径(21.4)　器高※3.5	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ	浅黄橙色	密	良	外面煤付着
SI54 西側上層	376	高杯	口径18.0　器高※9.1	外面：ナデ 内面：ナデ　脚内：シボリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI55 ベッド状遺構盛土中	377	甕	口径(21.0)　器高※3.6	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	外面黒斑有
SI55	378	甕	口径(14.2)　器高※5.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：暗黄褐色 内面：浅黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI56 北西側	380	甕	口径(16.6)　器高※3.6	外面：沈線，ナデ 内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI57 床面付近	381	甕	口径(16.9)　器高※5.9	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩
SI57 床面付近	382	甕	口径(14.2)　器高※4.5	外面：平行沈線後ナデ消し，ナデ，ヨコナデ 内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI58 P5	388	甕	口径(12.2)　器高※3.5	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SI58 P5	389	甕	口径(15.3)　器高※3.3	外面：凹線，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI58 P5	390	甕	器高※1.8　底径(3.4)	外面：ナデ 内面：ナデ　底面：ナデ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI58 南東区	391	甕	器高※2.2　底径(4.6)	外面：ミガキ 内面：ケズリ	褐灰色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI59 南西側	411	甕	口径(10.4)　器高※5.3	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ，３条の沈線間に刻目　内面：ミガキ，ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI59 南西側	412	甕	口径(14.4)　器高※3.0	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI59 下層	413	甕	器高※4.7　底径(7.0)	外面：タテハケ 内面：ケズリ　底面：ハケ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI59 下層	414	器台か 高杯	器高※3.5　底径(12.5)	外面：ナデ後線刻・スタンプ文，凹線 内面：ナデ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI59 東側	415	須恵器 杯蓋	口径(12.7)　器高※3.4	外面：回転ヘラケズリ，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰褐色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SI60 床面付近	419	甕	口径(15.6)　器高※5.0	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	暗黄褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SI60 南東側下層	420	甕	口径(17.0)　器高※3.4	外面：平行沈線，ヨコナデ，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密	良	－
SI60 南東側下層	421	甕	口径(18.6)　器高※3.0	外面：凹線，ヨコナデ，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	外面煤付着
SI60 北東側下層	422	甕	器高※4.3　底径(9.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	淡黄褐色	密(砂粒を含む)	やや良	外面煤付着
SI61 P6	427	甕	口径(15.0)　器高※4.5	外面：平行沈線，ヨコナデ，貝殻腹縁文 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	外面：灰黄色 内面：鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI61 下層	428	器台か 壺	器高※2.6　底径(15.3)	外面：ヨコナデ，凹線 内面：ケズリ，ヨコナデ	明黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内面煤付着
SI61 下層	429	器台か 壺	器高※4.3　底径(12.3)	外面：ミガキ，ヨコナデ 内面：ケズリ，ヨコナデ	灰褐色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI64 床面直上	439	甕	口径(15.0)　器高※11.5	外面：平行沈線後ナデ消し，ヨコナデ，波状文，ナデ，平行沈線　内面：ヨコナデ，ケズリ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI64 床面直上	440	甕	口径(16.8)　器高※6.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ヘラケズリ	橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI64 床面付近	441	甕	口径(14.3)　器高※6.8	外面：ヨコナデ，ミガキ 内面：ミガキ，ヨコナデ，ヘラケズリ	外面：浅黄色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI64 床面直上	442	器台	口径(18.2)　器高※5.9	外面：ヨコナデ，波状文 内面：ヨコナデ，ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩 内外面黒斑有
SI64 床面直上	443	鉢	口径9.6　器高7.1	外面：ヨコナデ，ハケ後ナデ 内面：ヨコナデ，ハケ後ナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩 内面煤付着
SI64 東側上層	444	甕	口径(13.4)　器高※6.8	外面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ 内面：ヨコナデ，ミガキ，波状文	浅黄褐色	密	良	外面煤付着
SI64 床面直上	445	高杯	口径(12.4)　器高※7.2	外面：ヘラミガキ，ナデ 内面：ヘラミガキ	鈍い黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	内面黒斑有 外面煤付着
SI64 下層	446	高杯	口径(13.3)　器高※7.8	外面：ハケ後ナデ，ナデ後ミガキ 内面：ナデ後ミガキ，ヘラケズリ	橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI64 上層	447	器台	器高※7.4　底径(17.0)	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ，ヨコナデ，ケズリ	外面：黄橙色 内面：浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面赤彩
SI64 床面直上	448	高杯	器高※3.2　底径(18.8)	外面：ミガキ，ヨコナデ 内面：ケズリ，ハケ，ヨコナデ	明黄褐色	密(砂粒を含む)	良	透孔有
SI65 床面付近	449	甕	口径(16.4)　器高※6.9	外面：凹線，ヨコナデ，ハケ 内面：ヨコナデ，ハケ後ナデ	橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SI65 床面付近	450	甕	口径(12.7)　器高※4.7	外面：凹線，ヨコナデ，ハケ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ	外面：鈍い黄橙色 内面：橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面煤付着
SI65 床面付近	451	甕	口径(14.3)　器高※4.2	外面：凹線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ミガキ，ヨコナデ，ナデ	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SI65 床面付近	452	甕	口径(13.8)　器高※6.3	外面：凹線，ヨコナデ，ミガキ，刺突文 内面：ヨコナデ	外面：黄橙色 内面：黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	穿孔有 内外面煤付着
SI65 南西区南北ベルト	453	甕	器高※6.1　底径(6.4)	外面：ミガキ 内面：ケズリ　底面：ナデ	灰黄褐色	密	良	－
SI65 P4	454	器台か 壺	器高※3.8　底径(9.0)	外面：ハケ後ナデ，線刻，ヨコナデ，凹線 内面：ナデ，ヨコナデ	浅黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内面黒斑有 外面煤付着
SB2 P4	457	低脚杯	器高※6.2　底径(10.0)	外面：ハケ後ミガキ 内面：ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	－
SB4 P3	458	甕	口径(12.2)　器高※4.0	外面：平行沈線，ヨコナデ，貝殻腹縁文 内面：ケズリ，ヨコナデ	暗褐色	密	良	－
SB6 P4	459	甕	口径(16.4)　器高※3.8	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ナデ，ケズリ	浅黄橙色	密	良	外面黒斑有
SB8 P6	460	甕	口径(16.5)　器高※3.5	外面：平行沈線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	内外面煤付着
SD15	461	器台	口径(17.0)　器高※4.9	外面：平行沈線，ミガキ 内面：ハケ後ナデ，後ミガキ	灰黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩
SD15	462	壺	口径(15.4)　器高※8.7	外面：沈線，ナデ，凹線，刺突文 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	外面：鈍い黄橙色 内面：浅黄橙色	やや密(砂粒を含む)	やや良	－
SB10 P5	463	甕	口径14.4 底径6.1	器高15.6	外面：平行沈線，ミガキ，貝殻腹縁文　内面：ヨコナデ，ケズリ，ケズリ後ナデ　底面：ナデ	鈍い黄橙色	密	やや良	頸部に1対穿孔有
SD4	464	甕	口径(15.2)　器高※3.7	外面：凹線，ナデ 内面：ケズリ，ナデ	淡黄橙色	密	良	－
SD3	465	甕	口径(12.0)　器高※1.7	外面：凹線，ミガキ 内面：ヨコナデ，ミガキ	橙色	密	良	－
SD4	466	甕	口径(16.1)　器高※3.4	外面：ハケ後ナデ，凹線 内面：ナデ	淡黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	－
SD4	467	甕	器高※2.0　底径(5.0)	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：灰褐色 内面：黒褐色	密	良	－
SD18	469	器台か 壺	器高※4.0　底径(19.6)	外面：ナデ，平行沈線 内面：ケズリ，ヨコナデ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩
SD17	470	器台か 高杯	器高※3.9　底径(14.8)	外面：ナデ，凹線，ヨコナデ 内面：ケズリ，ナデ	外面：灰黄褐色	密(砂粒を含む)	良	内面煤付着
SD8	475	甕	口径(17.6)　器高※6.0	外面：凹線，ヨコナデ，ハケ 内面：ヨコナデ，ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SD2	476	甕	器高※3.9　底径(4.5)	外面：ハケ後ミガキ 内面：ケズリ　底面：ナデ	外面：鈍い黄橙色 内面：うすい灰色	密(砂粒を含む)	良	外面煤付着
SK39	479	深鉢	器高※2.2	外面：刻目隆帯，ナデ 内面：ナデ	赤褐色	密(砂粒を含む)	良	縄文土器
SK31 上層	480	甕	器高※4.9	外面：平行沈線，ヨコナデ後ミガキ，貝殻腹縁文，　内面：ミガキ，ケズリ	外面：灰黄色 内面：黒褐色	密(砂粒を含む)	良	－
SK8 中層	486	深鉢	－	外面：押型文，沈線による区画内は連続押引文 内面：ナデ	外面：明黄褐色 内面：褐色	やや粗(砂粒を含む)	良	縄文土器
SK10 中層	487	甕	口径(15.4)　器高※3.2	外面：平行沈線後ナデ消し 内面：ミガキ	外面：赤橙色 内面：鈍い黄橙色	密	良	－
SK10 中層	488	甕	口径(14.0)　器高※2.6	外面：平行沈線，ナデ 内面：ナデ，ケズリ	外面：黒灰色 内面：浅黄橙色	密(砂粒を僅かに含む)	良	－
SK49	489	甕	口径(19.5)　器高※4.0	外面：平行沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ミガキ	浅黄橙色	密(砂粒を多く含む)	良	外面煤付着
SK35	490	甕	口径(15.4)　器高※7.5	外面：ヨコナデ，ハケ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	内外面煤付着
SK34	491	甕	口径(13.6)　器高※3.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	浅黄色	密	良	内面煤付着
SK45	492	甕	口径(18.4)　器高※4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	明黄褐色	密	良	内外面煤付着

遺構・地区・層位	No.	器種	法　量（cm）		調　整	色　調	胎　土	焼成	備　考
SK27	493	器台	器高※3.5	底径(21.0)	外面：ミガキ，凹線 内面：ケズリ，ヨコナデ	灰白色	密(砂粒を含む)	良	内外面赤彩
SK51	494	低脚杯	器高※3.8	底径(7.0)	外面：ミガキ，ヨコナデ 内面：ミガキ，脚内：ヨコナデ，ナデ	灰白色	密(砂粒を含む)	良	外面脚内黒斑有
SK29	497	須恵器壺	器高※34.4	底径14.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底面：ナデ	灰色	密	良	－
SK32 上層	498	甕	口径(16.0)	器高※17.7	外面：凹線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ナデ	明赤褐色	密(砂粒を多く含む)	良	内外面煤付着
SK32 上層	499	甕	器高※12.0	底径6.0	外面：ミガキ 内面：ナデ　底面：ハケ後ナデ，ミガキ	明赤褐色	密	良	外面煤付着
SK32 下層	500	甕	口径(15.0)	器高※18.0	外面：凹線，ヨコナデ，ハケ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ナデ，ハケ後ナデ	鈍い黄橙色	密	良	内外面煤付着
SK32 下層	501	甕	器高※15.0	底径5.0	外面：ミガキ 内面：ケズリ　底面：ナデ	外面：鈍い黄褐色 内面：灰白色	密	良	内外面煤付着
P1026	504	甕	口径(26.6)	器高※8.1	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ケズリ	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	密	やや良	外面煤付着
H5G P154	505	杯	口径(9.2) 底径(6.6)	器高※3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底面：回転糸切	鈍い黄橙色	密	不良	内面黒斑有
F19G P1530	506	甕	口径(17.2)	器高※4.9	外面：平行沈線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ，ケズリ	明黄褐色	密	やや良	外面煤付着
J16G P810	509	柱状高台杯	口径(9.2) 底径(6.6)	器高※3.7	外面：ナデ 内面：ヨコナデ　脚底：回転糸切	鈍い橙色	密	やや良	－
D18G	512	須恵器杯蓋	口径(14.1)	器高※4.0	外面：回転ヘラケズリ，ヨコナデ 内面：ナデ，ヨコナデ	灰色	密	良	－
谷２	513	水差し形土器	口径(17.0)	器高※4.9	外面：ナデ， 内面：ナデ，ケズリ後ナデ	鈍い黄橙色	密	良	外面黒斑有
谷１褐色粘質土最終埋没土	514	台付鉢	器高※17.3	底径(14.8)	外面：ナデ，凹線 内面：ナデ　脚内：ナデ，ヨコナデ	外面：橙褐色 内面：黄橙色	密	良	外面赤彩 脚内黒斑有
谷２	515	器台か高杯	器高※11.3	底径(12.0)	外面：ナデ，凹線 内面：ナデ，ケズリ	鈍い黄橙色	密	良	内外面赤彩

表60　久蔵峰北遺跡石器観察表

（　）は現存値　＊は赤木先生による石材同定

遺構・地区・層位	No.	種　類	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	石　材	備　考
SI１ 床面から２cm上	21	磨石	10.2	6.9	10.3	1000.0	輝石安山岩	下端部にすり面あり
SI１ 床面直上	22	砥石	10.6	1.6	4.4	110.0	＊スレート(粘板岩)	全面砥面
SI２ 壁溝検出面上	23	敲石	19.7	5.2	8.9	1260.0	＊黒雲母角閃石安山岩	表面及び両側面・両端部に敲打痕あり
SI３ 東区 床面から５cm	44	敲石	7.1	6.3	4.1	270.0	石英安山岩	上端部に敲打痕あり
SI３ 床面付近	45	敲石	14.7	4.8	7.0	660.0	＊細粒花崗岩	両端部に敲打痕あり
SI３ 西区 床面から20～30cm上	46	砥石	(6.8)	(5.0)	3.5	150.0	流紋岩	上端部に砥面、下端部に敲打痕あり
SI４ 南西区 床面から5～20cm	50	敲石	9.7	8.2	5.5	600.0	安山岩	下端部に敲打痕、上端部にすり面あり
SI５ 床面直上	59	敲石	16.3	5.6	9.0	1100.0	＊黒雲母花崗岩	両側面・上端部に敲打痕あり
SI５	60	台石	38.0	10.2	35.6	2000.0	＊(含黒雲母)角閃石安山岩	表面・裏面にすり面あり
SI９	89	敲石	16.9	6.1	7.9	1180.0	細粒花崗岩	下端部に敲打痕あり
SI９	90	台石	19.9	7.4	19.1	4820.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕が見られる
SI10 床面直上	95	敲石	17.6	4.7	6.4	770.0	細粒花崗岩	被熱痕あり　すり面があるが、擦痕見えず
SI10 床面直上	96	敲石	16.6	5.5	5.7	800.0	細粒花崗岩	表面に擦痕及びすり面、下端部に敲打痕あり　被熱痕あり
SI10 北西区	97	石包丁	(4.2)	0.8	4.0	22.6	＊泥質緑色片岩	両面すり面及び、両面穿孔
SI10	98	石錘	6.4	2.1	4.9	90.0	角閃石安山岩	扁平な楕円礫長軸の両端を打ち欠く
SI11 床面直上	130	台石	17.7	6.1	18.2	3250.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕あり
SI12 床面付近	159	敲石	11.4	5.2	6.1	600.0	＊輝石安山岩	表面・両側面・端部に敲打痕あり　下端部のみすり面あり
SI16 床面から５cm上	169	砥石	6.6	2.9	7.2	140.0	＊流紋岩	両面砥面
SI16 P５	170	台石	39.5	11.2	19.6	1266.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕及び剥離面あり　裏面にすり面あり
SI20 北ベルト	189	凹石	14.3	4.5	10.3	1070.0	黒雲母角閃石安山岩	両面中央部・両側面に敲打痕あり　敲石として転用
SI21 床面付近	201	台石	(19.3)	7.8	(25.2)	4440.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に敲打痕・擦痕あり
SI22 攪乱土	213	珪化木	3.1	－	1.1	4.1	－	両側からの打撃による剥離　ソフトハンマーによる剥離か？
SI23 下層	218	砥石	8.0	3.9	4.6	170.0	＊流紋岩質凝灰岩	両面・両側面・下端部に砥面あり
SI23 下層	219	砥石	7.7	4.6	4.6	260.0	＊凝灰質安山岩	両面・左側面に砥面あり　右側面に敲打痕あり
SI24	222	敲石	11.0	2.8	5.6	265.0	細粒花崗岩	両側面・両端部に敲打痕あり
SI34 床面から３cm上	248	敲石	18.3	5.5	7.3	1110.0	含石英（金）雲母安山岩	両端部に敲打痕あり　表面にすり面あり
SI34 床面直上	249	台石	18.7	5.3	17.7	2470.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕あり
SI40 南側	308	台石	22.8	6.8	19.4	4360.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に敲打痕及び擦痕あり
SI40 南東側	309	砥石	9.6	3.5	6.4	330.0	流紋岩質凝灰岩	表面・両側面に砥面あり　表面に敲打痕あり
SI42 床面付近	333	磨製石斧	12.6	4.5	5.8	550.0	＊閃緑岩	研摩は全面に及ばない　敲石に転用
SI42 床面付近	334	台石	17.9	5.1	25.8	4060.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕あり
SI42 床面付近	335	台石	19.5	6.5	20.4	3590.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕あり
SI43 床面直上	347	砥石	8.5	2.8	2.9	120.0	＊流紋岩	全面砥面
SI51	371	台石	29.1	9.1	20.7	910.0	黒雲母角閃石安山岩	表面に擦痕及び敲打痕、被熱痕あり
SI52 北側	372	砥石	6.1	1.1	1.8	20.0	＊緑色泥岩	両面・両側面に砥面あり
SI53	373	敲石	13.3	6.9	9.2	2000.0	黒雲母角閃石安山岩	両端部に敲打痕あり　剥離面は使用時の欠損か？　側面、上端部に煤付着
SI57	383	磨石	11.0	2.3	6.0	210.0	安山岩	表面、ほぼすべてにわたって赤色顔料付着
SI57	384	敲石	17.3	8.6	9.8	1860.0	＊黒雲母花崗岩	表面に擦痕あり　下端部に敲打痕あり
SI57 P２	385	敲石	13.2	5.8	7.2	840.0	＊黒雲母角肉石安山岩	両側面・上端部に敲打痕あり　下端部にすり面あり
SI57 P３	386	砥石	12.7	3.2	5.2	270.0	＊流紋岩	全面に砥面あり、表面が一番顕著　窄孔貝による穴あり
SI57 南西側	387	珪化木	4.2	12	14.5	10.4	－	片側からの打撃による剥離
SI58 床面付近	392	敲石	16.2	10.1	10.3	3100.0	黒雲母角閃石安山岩	両端部に敲打痕、下端部が顕著
SI60	423	磨石	(7.6)	6.5	7.9	560.0	黒雲母角閃石安山岩	上部は剥離面がほぼ１周している　下端部にすり面あり
SI61	430	砥石	9.5	4.3	6.0	360.0	流紋岩質凝灰岩	両面・両側面に砥面あり
SI61	431	砥石	10.7	4.7	4.9	510.0	＊微文象花崗岩	表面及び左側面に敲打痕あり　花崗閃緑岩にも似る
SI61	432	砥石	12.7	1.9	7.5	260.0	＊アプライト	全面砥面
SI61 床面から25cm上	433	凹石	12.4	3.8	8.7	590.0	細粒花崗岩	両面中央部・両側面に敲打痕あり
SI65 床面付近	455	台石	23.1	5.7	18.7	4380.0	黒雲母角閃石安山岩	表面中央に敲打痕及び擦痕あり
SI65 床面付近	456	砥石	7.1	2.5	2.4	54.5	流紋岩質凝灰岩	４面砥面
SK８	485	不明石製品	(4.8)	0.7	(6.2)	31.4	＊金属鉱物結晶含有石英	－
F７G Pit323	507	石錘	5.8	1.7	4.5	60.0	細粒花崗岩	扁平な楕円礫長軸の両端を打ち欠く
Pit1266	508	砥石	2.9	1.1	1.9	10.0	＊緑色泥岩	全面砥面
谷２	516	石錘	9.1	5.1	5.1	320.0	＊細粒花崗岩	長円礫長軸に１条の浅い溝がめぐる
H19G 攪乱土	517	石錘	10.7	5.8	5.8	340.0	＊黒雲母角閃石安山岩	長円礫の長軸の１条の溝を主体に、十字上に短軸をきるようにめぐる
谷３	521	磨製石斧	13.1	2.7	5.1	270.0	＊細粒花崗岩	基部側の両側面に整形段階の敲打痕あり　研磨全面に及ばず
谷２	522	扁平片刃石斧	5.6	1.3	3.6	45.0	＊軟玉	全面砥面

表61　久蔵峰北遺跡鉄器観察表

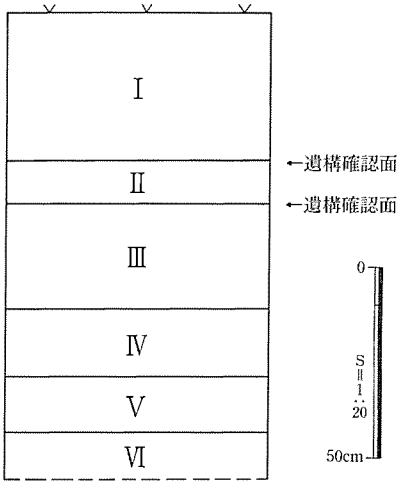
遺　構　名	No.	形　　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚　さ(cm)	備　　考
ＳＩ９	93	刀子の刃部？	(4.7)	2.0	0.3	
ＳＩ10	99	板状	3.8	2.6	0.3	
ＳＩ10	100	板状	4.5	2.0	0.4	
ＳＩ10	101	板状	(5.7)	1.7	0.3	
ＳＩ12	160	鉄鏃？	(5.3)	(4.2)	0.2	
ＳＩ19	183	棒状	2.4	0.4	0.4	
ＳＩ20	190	棒状	8.0	0.8	6.0	
ＳＩ21	202	錐状工具	(4.1)	2.2	0.4	
ＳＩ21	203	錐状工具	(4.9)	2.0	0.4	
ＳＩ21	204	刀子	(8.3)	1.8	0.3	
ＳＩ21	205	棒状	(3.1)	0.4	0.3	
ＳＩ21	206	棒状	(2.7)	0.6	0.3	
ＳＩ21	207	棒状	3.6	0.5	0.5	
ＳＩ25	226	棒状	(3.3)	0.6	0.6	
ＳＩ31	238	鉄鏃？	(5.6)	1.3	刃部0.2	
ＳＩ31	239	鉈か刀子の柄？	(4.1)	1.3	0.4	
ＳＩ34	247	鉄鏃？	(2.3)	1.8	刃部0.4	
ＳＩ38	283	板状	2.3	1.9	0.2	
ＳＩ39	292	棒状	5.5	0.7	0.5	
ＳＩ40	311	棒状	13.5	1.2	0.8	
ＳＩ40	312	刀子	(9.0)	1.4	刃部0.2	
ＳＩ40	313	刀子の刃部？	(3.1)	2.4	0.5	
ＳＩ40	314	鉈	3.7	1.7	0.3	
ＳＩ43	348	鉄鏃？	3.5	1.7	0.3	
ＳＩ56	379	鉈	(3.4)	1.6	刃部0.3	
ＳＩ58	393	板状	4.7	3.4	0.4	
ＳＩ58	394	棒状	(2.5)	0.6	0.3	
ＳＩ58	395	棒状	(2.7)	0.4	0.5	
ＳＩ59	416	板状	(3.6)	2.9	0.7	
ＳＩ59	417	鉄鏃？	(3.7)	1.7	刃部0.3	
ＳＩ61	434	鉈	(7.6)	1.3	刃部0.2	柄部の裏側に柄木を添え蔓で巻く
ＳＩ61	435	鉈	4.9	1.5	刃部0.4	
ＳＩ64	437	棒状	4.7	1.1	0.5	
ＳＩ64	438	棒状	4.0	0.8	0.3	
布掘掘建柱建物１	468	板状	(5.2)	1.5	0.3	
ＳＫ29	495	鋤先	32.3	16.6	刃部0.6	
ＳＫ29	496	鉄板	13.9	14.9	0.6	
ＳＫ32	503	無茎鉄鏃	1.8	1.8	0.1	穿孔あり。木質付着
Ｐ682	511	板状	4.4	1.6	0.2	
包含層中	527	板状	4.3	2.1	0.3	
包含層中	528	棒状	(3.4)	0.9	0.5	
攪乱土	529	棒状	(3.4)	0.5	0.3	植物性繊維が付着
攪乱土	530	板状	(3.9)	0.9	0.3	
攪乱土	531	棒状	(12.6)	0.7	0.7	

第４章　蝮谷遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と層序

蝮谷遺跡は、東伯郡東伯町字蝮谷に所在する。地理的には、大山から放射状に延びる尾根の北東端にあたり、標高56m～63mに位置する。調査区には尾根部と谷部を含み、その比高差は調査前の地形で７mとやや急な谷地形を呈する。調査区は大きくは西側の尾根部と東側の谷部に分けられ、谷部の東側に位置する尾根も一部調査区内に含む。

蝮谷遺跡の東側には、近年の造成等により改変を受けた浅い谷があり、その谷を挟んで75mの距離に久蔵峰北遺跡が隣接する。このように指呼の間に位置する両遺跡は存続する時期においても併行し、蝮谷遺跡で確認された遺構の時期は久蔵峰北遺跡の存続時期の中に含まれる。このことから両遺跡は本来一連のものであったと思われる。また蝮谷遺跡の西側には大きく抉り込んだ谷を挟んで岩本遺跡が位置する。



Ⅰ　褐色土
Ⅱ　暗黄褐色土（ホーキ層の二次堆積土層）
Ⅲ　黄褐色土（ホーキ火山灰層）
Ⅳ　黄褐色土（AT：姶良丹沢火山灰層　20,000～25,000Y.B.P）
Ⅴ　白色粘質土
Ⅵ　淡赤褐色粘質土（ハードローム）

第185図　蝮谷遺跡基本層序

蝮谷遺跡の調査区内の状況は、調査前の状況として、ほぼ全体に竹や笹が生い茂っており、表土面の下に厚く根をはっている状況であった。根がはっている範囲では、遺構検出・土層の分層が困難であったことから、現表土面から厚い範囲を表土として扱わなくてはならない状況であった。

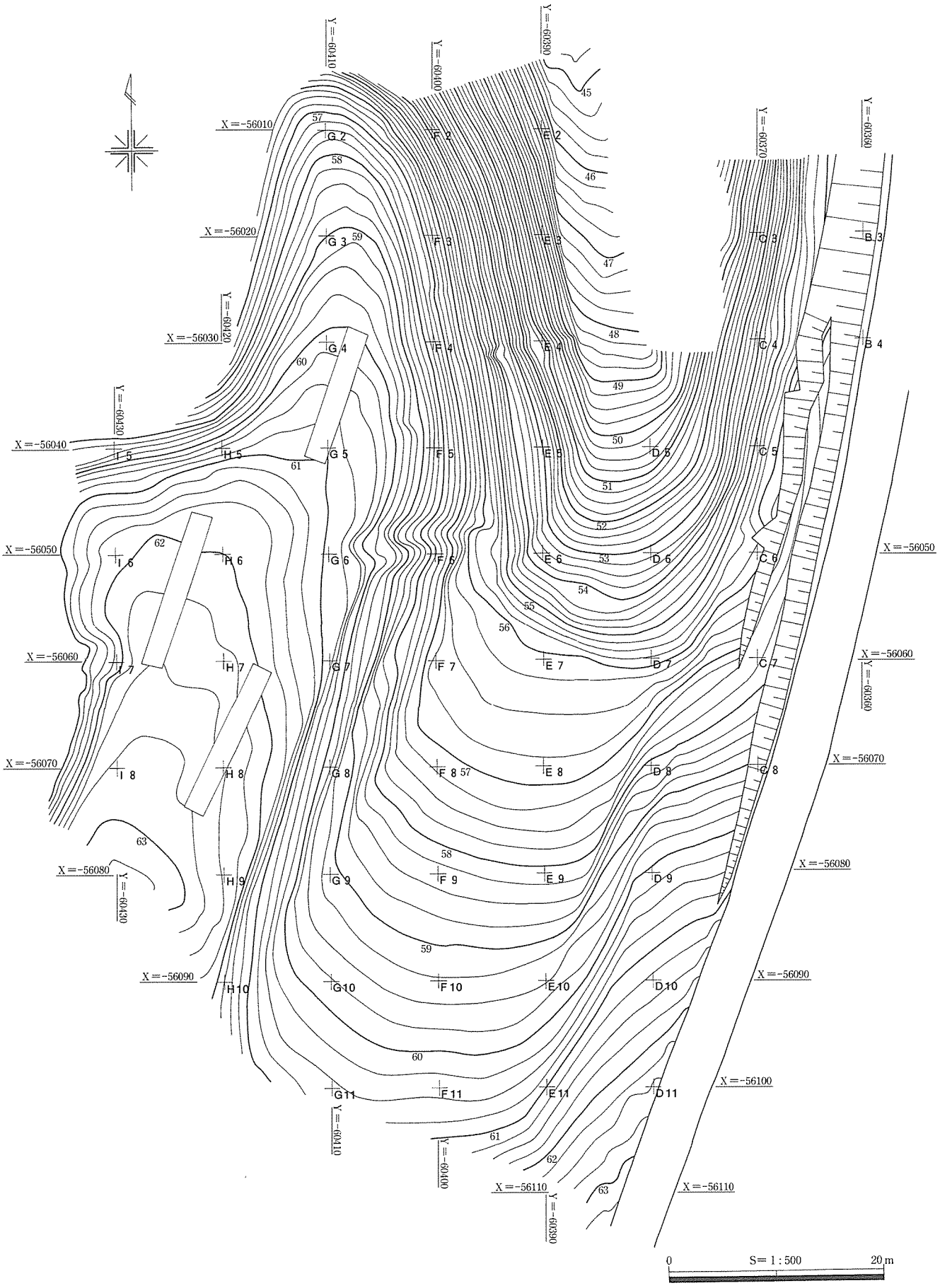
表土下の土層堆積状況としては、西側の尾根部では表土下に一部の地点で赤褐色土（ソフトローム）を主体とした２次堆積土層が認められるところもあったが、尾根部大半ではホーキ層、もしくはホーキ層の２次堆積土層が認められ、遺構もこれらの層の上面で確認された。また、ホーキ層の下には尾根の中央付近ではAT層が残存している状況であり、白色粘質土、淡赤褐色粘質土（ハードローム）の順に深く認められ、検出した遺構の深さはこの淡赤褐色粘質土層中にとどまる。調査区東側にあたる谷部では、表土下の状況として大きく暗褐色土、褐色土に分けられる遺物包含層が厚く堆積している状況であった。また調査区東端も谷部から７mほど高くなった尾根であり、20cmほどの薄い表土下からはAT層が認められ、これを確認面とする遺構が検出された。調査区東側尾根部の基本層序は調査区西側の尾根のAT層下の状況と一致する。

第２節　調査の成果

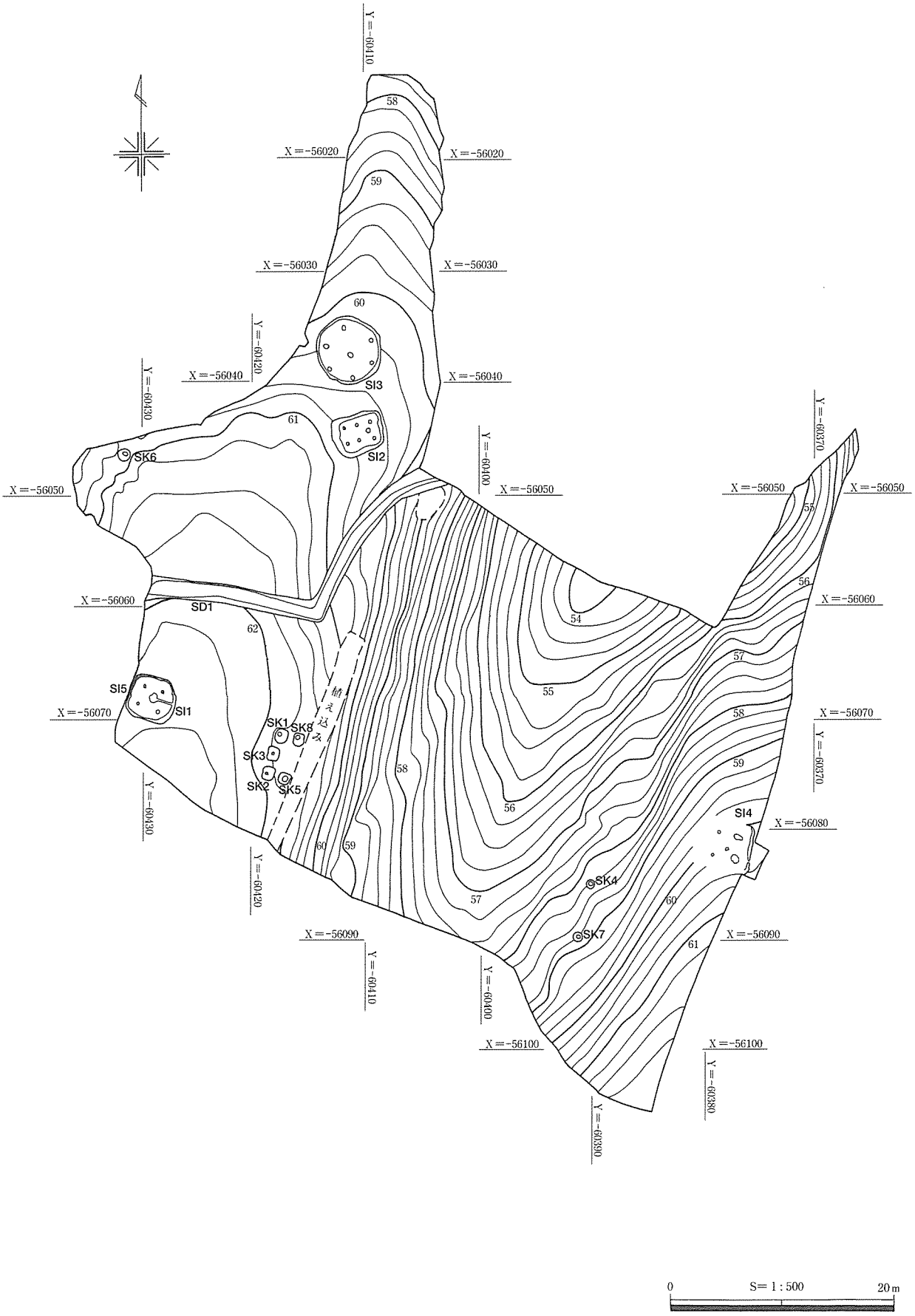
(1)　調査の概要

調査開始に先立ち、業者委託により４月17日に調査前航空写真撮影、４月21日に調査前地形測量を行った。４月28日から重機による表土剥ぎを行い、５月12日発掘調査を開始した。

調査は東伯町教育委員会の試掘調査により竪穴住居跡が確認された調査区西側の尾根部から行い、竪穴住居跡３棟、土坑６基、溝状遺構１条、ピット43基を検出した。調査区東側の谷部は同町教育委



第186図　蝮谷遺跡調査前地形測量図



第187図　蝮谷遺跡調査後地形測量図

員会の試掘調査が行われておらず、また、現行の地形から近年の造成による谷の改変が予想されたが、表土剥ぎ中に厚い包含層の存在が確認されたため、６月10日から尾根部の調査と併行して遺構検出作業を行った。谷部での調査では住居跡の遺構は検出されず、土坑２基、ピット２基の検出のみであった。しかし、後述するように谷部包含層はその多くは弥生時代から古墳時代の遺物で占められていたが、中世の陶器のほか近世と思われる磁器も含まれており、谷が現況のように埋没した時期は中世もしくは近世以降であることが明らかとなった。調査区東側の尾根部についても谷部とともに調査を行い、竪穴住居跡１棟、ピット１基を確認した。

蝮谷遺跡の調査は７月31日に終え、８月６日に調査後航空写真撮影、８月20日に調査後地形測量を業者委託により行い、現地での作業を終了した。

(2)　竪穴住居跡

ＳＩ１（第188～190図、表63、PL. 84・87）

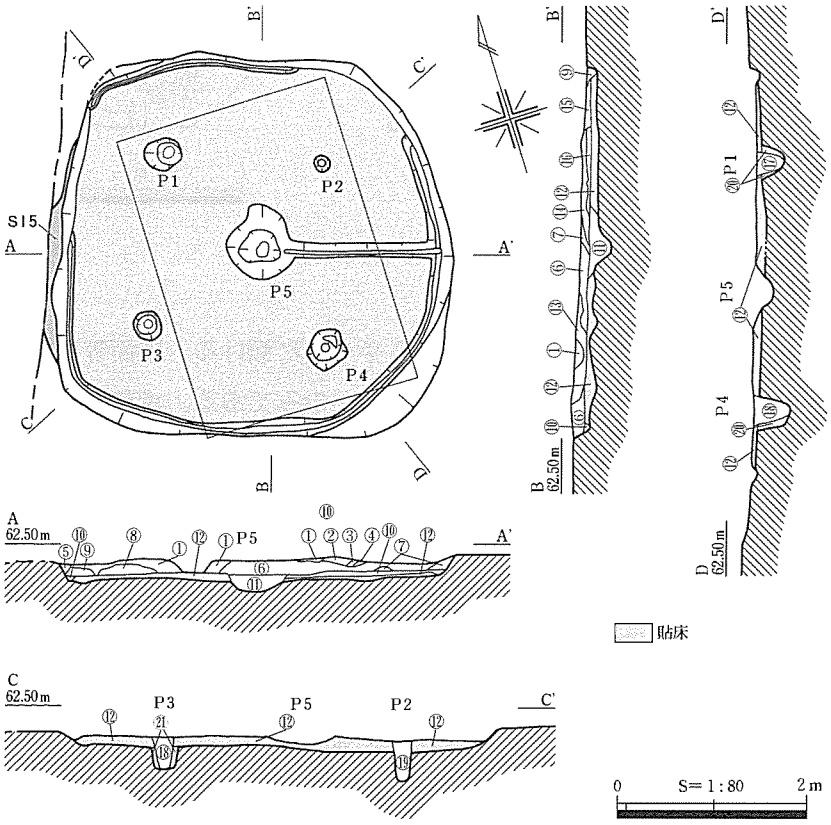
ＳＩ１は調査区西側を南北に通る尾根平坦面の南端、Ｈ７・８、Ｉ７・８グリッドに位置する。標高およそ62.25m、ホーキ層および、白色粘質土層を確認面とした。本遺構内、およびその周辺は近年の梨栽培に伴う耕作により攪乱を受けている状況であり、住居内埋土や壁の一部は失われていた。平面形は隅丸方形で、東西5.16m、南北3.92mの規模である。深さは確認面から最も残りのよいところで20cmあまりであった。床面は黄褐色土と白色粘質土による貼床が全面に施されている。

柱穴と考えられるピットは４基確認され、中央にはピットが配置されている。壁溝は住居全体には廻らなく北東側、西側で途切れており、南東側では壁よりも約40cm内側を廻る。中央のピットからのびる床溝は東側に向かい東壁の壁溝に連結する。

埋土の状況は、検出面の層中に細片であったが炭化材が多く含まれ、焼失住居であることが確認できた。下層でも大きなもので５cmほどの遺存状況ではあったが、炭化材が住居中央付近にまとまって検出されたほか、焼土も認められた。確認された焼土は、付近の炭化材よりも直上から５cmほど上位に位置する状況であった。また炭化材に関しては、検出した状況からこれらの部材が住居のどの部分に用いられていたかを判別するのは困難であるが、その多くは繊維方向を住居中心部に向けていることから垂木の可能性が高いと思われる。また、第６章第３節で触れるように、本遺構の炭化材は一部ではあるが樹種同定分析を行い、クリであることが確認された。

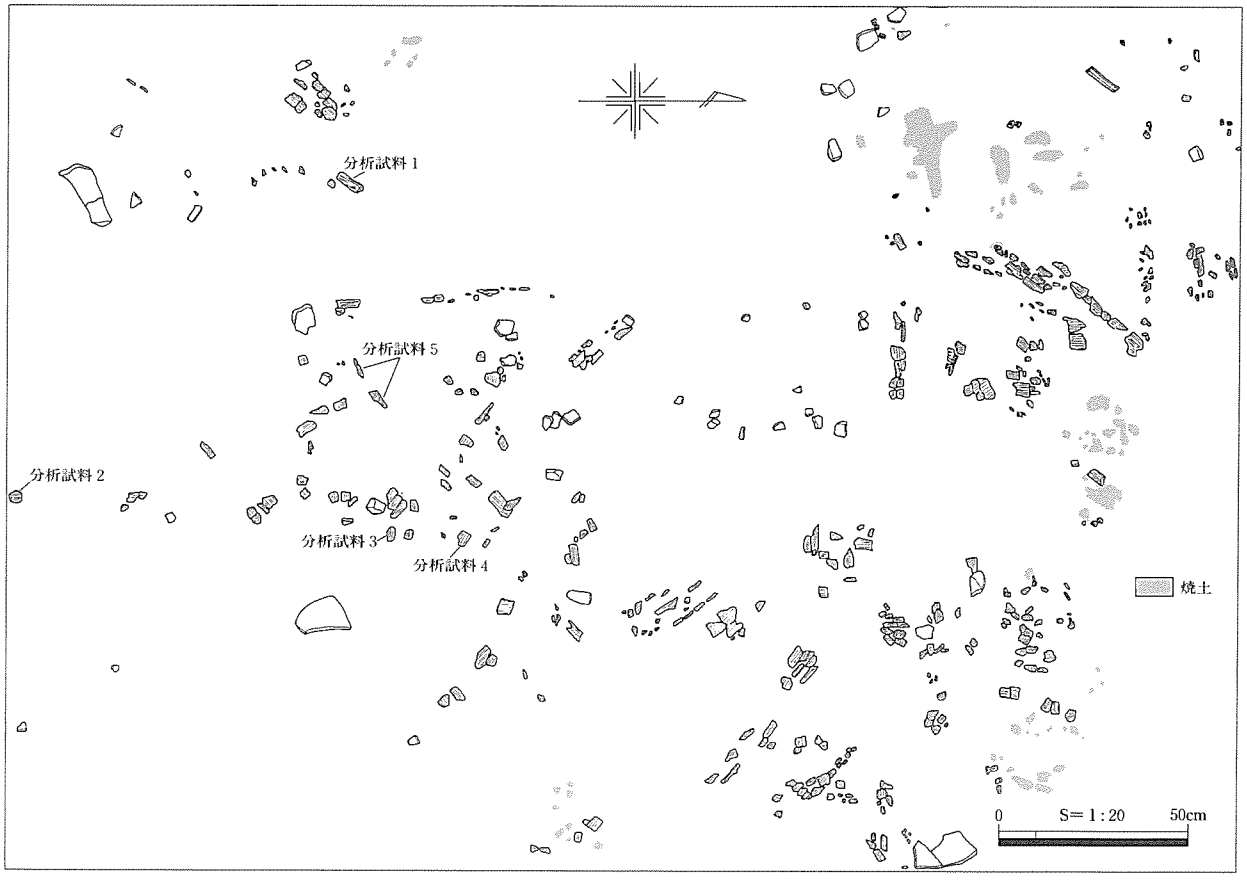
本遺構の出土遺物であるが、先述したように遺構の遺存状況は、近年の攪乱等を受けており、最も残りの良いところでも床面から20cmほどであったため、出土遺物でその様相が分かるものはあまり認められなかった。１は高坏の坏部で、内外面ナデによる最終調整が施されているが、下半にハケによる調整の痕跡を残す。２は甕の頸部から口縁部の破片で、口縁部は直立する。また、外面には平行多条沈線文が施された後、上半部分をナデ消している。３は平底の甕の底部で、内面ケズリ、外面はハケ調整の後ナデが施される。

さて本遺構の時期であるが、床面付近から出土している２の甕は、口縁部に施した平行多条沈線文をナデ消すなど、清水編年Ｖ－３の時期の特徴と考えられ、このことから弥生時代後期後葉の時期が考えられる。

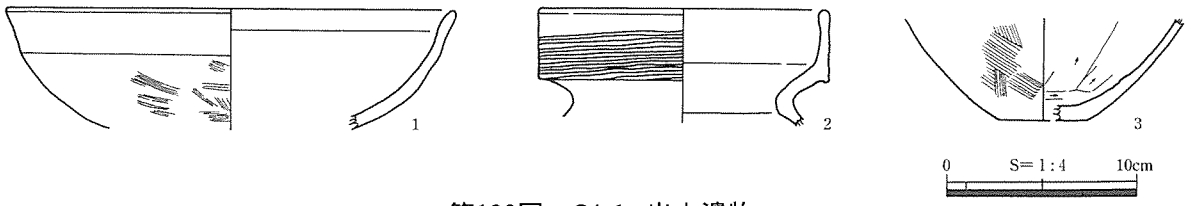


①暗褐色土（炭化材を含む）
②淡褐色土（黄褐色土のブロックを含む）
③褐色土
④褐色土（白色粘質土のブロック・炭化材を含む）
⑤褐色土（黄褐色土のブロックを含む）
⑥褐色土（黄褐色土のブロック・炭化材を含む）
⑦淡褐色土（黄褐色土のブロック・炭化材を含む）
⑧黄褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）
⑨褐色土（炭化材を含む）
⑩淡灰褐色土（白色粘質土のブロックを含む）
⑪暗灰褐色土（黄褐色土のブロックを含む）
⑫淡褐色土（貼床、黄褐色土のブロックを含む）
⑬淡褐色土（炭化材を含む）
⑭暗褐色土（黄褐色土のブロック・炭化材・焼土を含む）
⑮淡褐色土
⑯暗褐色土（炭化材を多く含む）
⑰暗灰褐色土（黄褐色土のブロック・炭化材を含む）
⑱灰褐色土（黄褐色土のブロック・炭化材を含む）
⑲灰褐色土（炭化材・焼土を含む）
⑳淡灰褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）
㉑淡黄褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）

第188図　SI１実測図



第189図　SI１　炭化材・焼土出土状況図

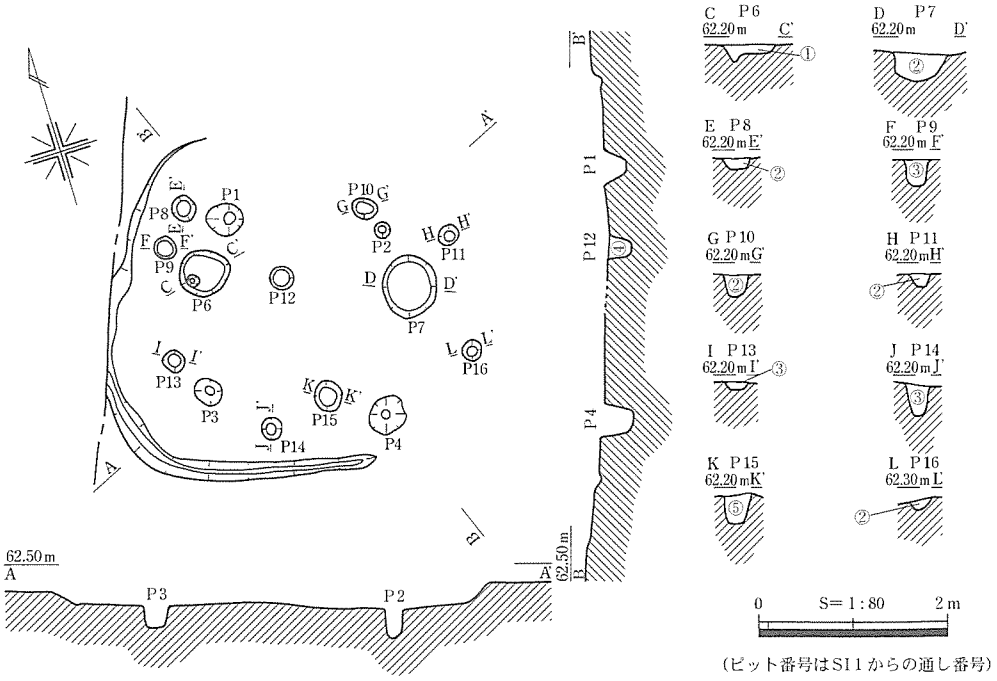


第190図　SI１ 出土遺物

SI５（第191図、PL. 84）

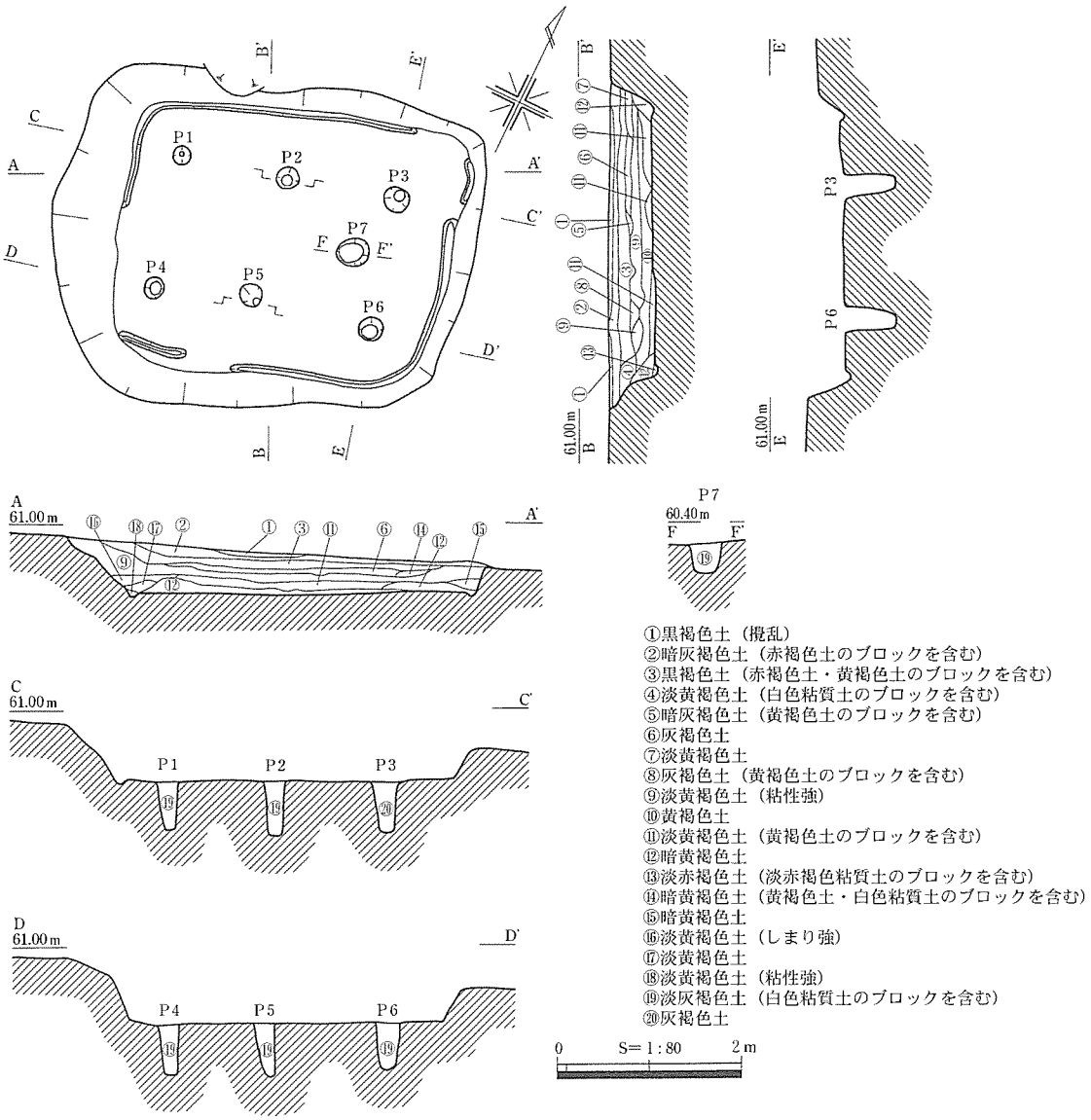
SI１の貼床除去後に検出した住居跡である。主軸をSI１よりもやや西に傾ける。床面等はすでにSI１により壊されており、南側で壁溝の一部とピット10基を確認したのみである。南側の壁溝は南西隅で北側に屈曲するが、すぐに調査区外にのびる。本住居跡の規模であるが、先述したように遺構の大半が失われており、また、調査区外も急激に地形が傾斜することから遺存はせず、全体の規模は不明である。しかし、SI１西壁の北部分は淡赤褐色粘質土（ハードローム）の地山であることから、東西規模は最大でもSI１を大きく上回るものではない。南北規模は、壁溝は残らないが北西壁部分と考えられるわずかな落ち込みが確認できることから3.68mである。埋土は、わずかに残る西側部分で褐色土が20cmほど認められた。

出土遺物はピットから土器の細片がみられたが、本遺構の時期を推察できる遺存状態ではない。SI１に埋土を壊された状況であったが、本住居跡には明確に柱穴となるピットは確認できなかったことから、SI１と柱穴を共有する建替え前の住居である可能性があり、その場合、SI１とほぼ同じ時期である。



①褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）
②褐色土
③淡黄褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）
④淡灰褐色土（黄褐色土・白色粘質土のブロックを含む）
⑤淡灰褐色土（白色粘質土のブロックを含む）

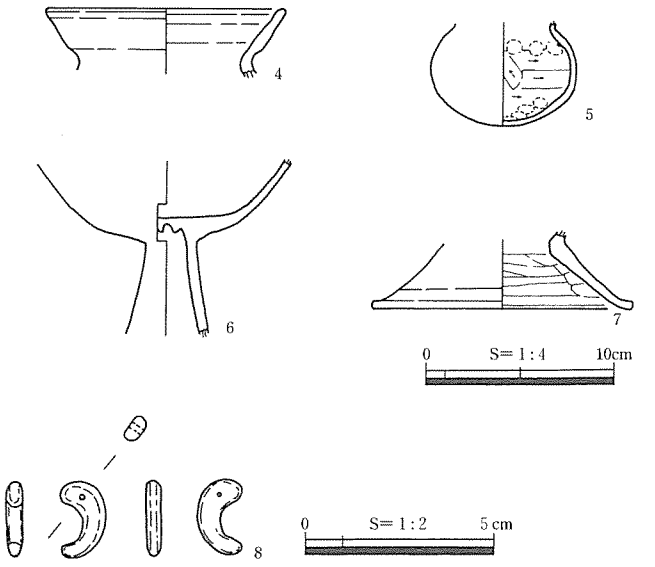
第191図　SI５実測図



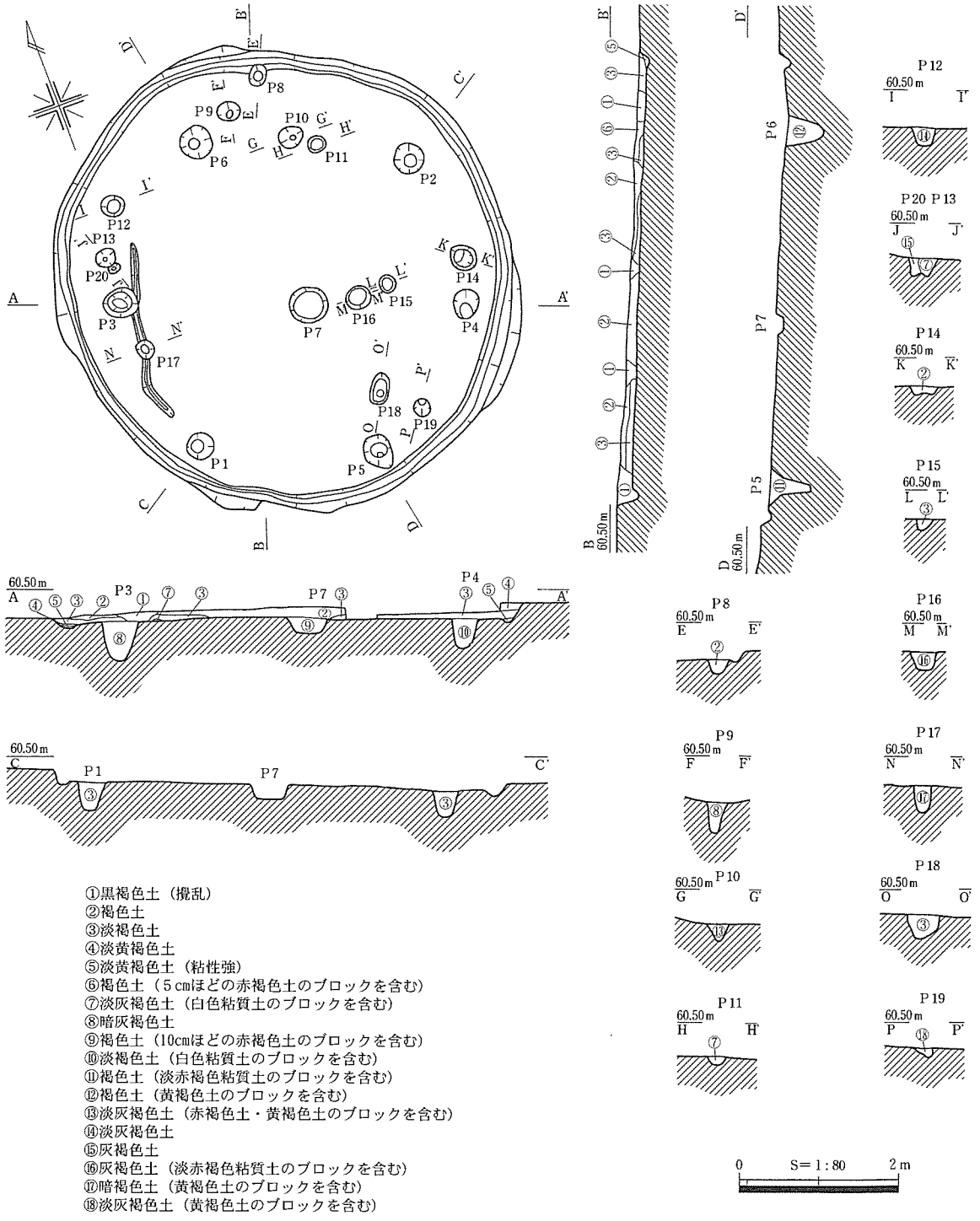
第192図　ＳＩ２実測図

ＳＩ２（第192・193図、表63・64、PL. 84・85・87・93）

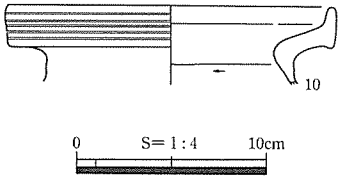
ＳＩ２は調査区西側の尾根平坦面のほぼ中央、Ｆ５、Ｇ５グリッドに位置する。標高60.88m、ホーキ層の２次堆積土と考えられる暗黄褐色土層を確認面とする。平面形は隅丸の長方形で、規模は東西3.48m、南北4.60mである。深さは最も残りの良い部分で60cmを測る。白色粘質土層を床面とし、７基のピットを検出した。うち６基が柱穴と考えられ、サイコロの６の目のように配置されている。また、ピット１基は住居中央から東によったところに位置する。壁溝は住居全体には廻らず北東側、西側、北側で一部途切れている。



第193図　ＳＩ２　出土遺物



第194図　SI３実測図



第195図　SI３出土遺物

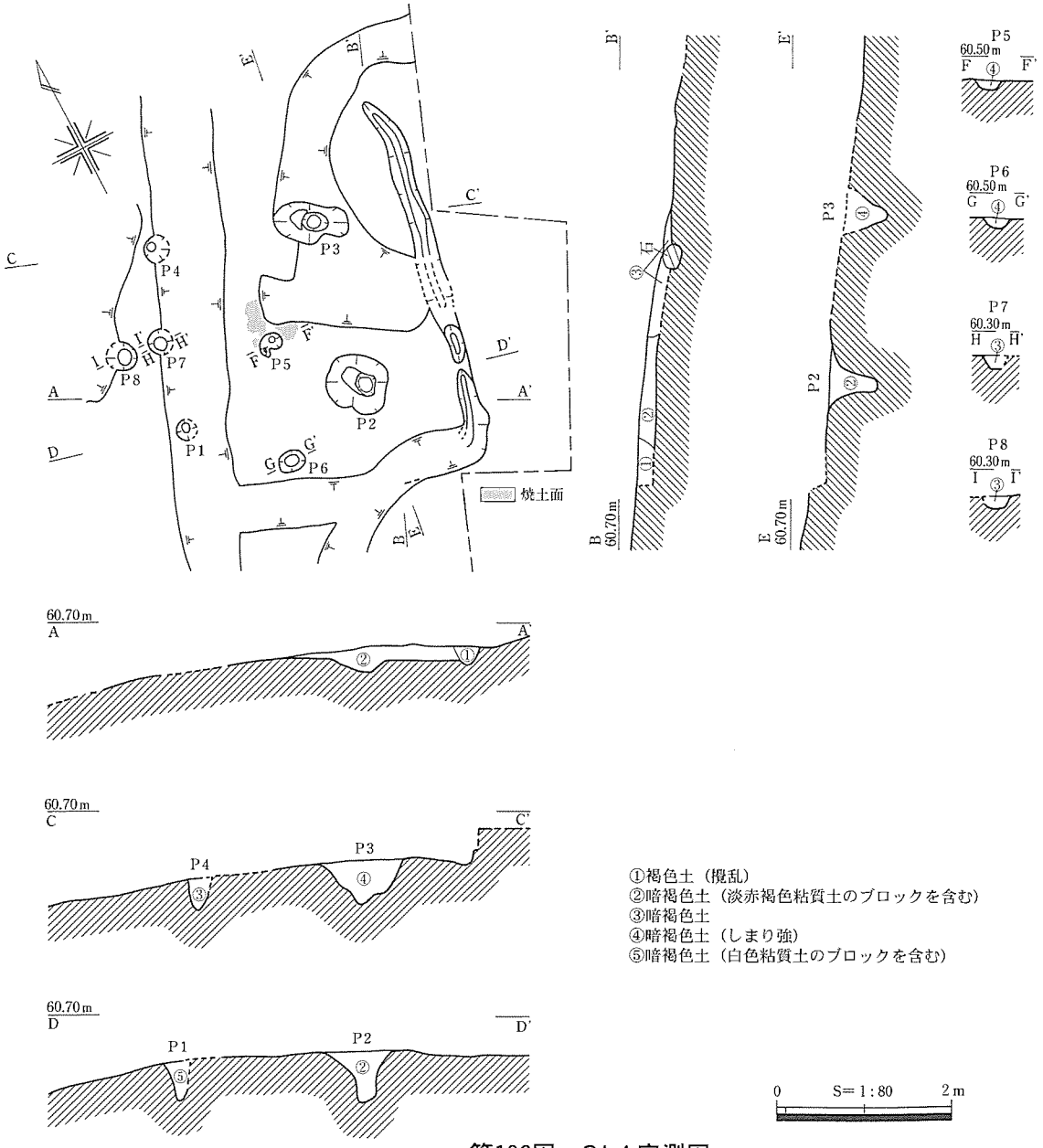
出土遺物としては、外反した口縁部をやや肥厚させる甕の口縁部４や、５の小型丸底壺の胴部、６の高坏、７の鼓形器台の脚部などがあげられる。また、埋土上層ではあるが、８の両面穿孔が施される蛇紋岩製の勾玉も出土した。本住居跡の時期は、床面から出土遺物は認められなかったが、出土土器は天神川編年Ⅳ期に相当することから古墳時代前期末から中期初頭と考えられる。

SI３（第194・195図、表63、PL. 85・87）

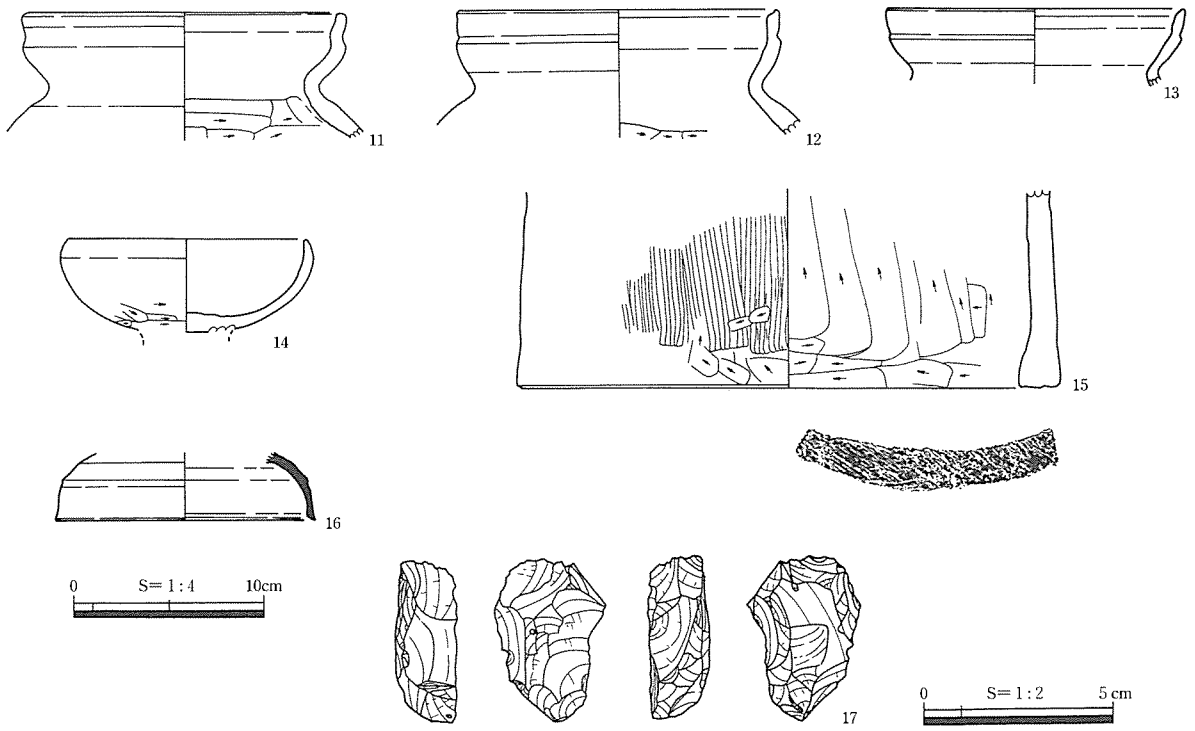
SI３は調査区西側の尾根平坦面、SI２の北側、F５・６、G５・６グリッドに位置する。東伯町教育委員会の試掘調査で確認された竪穴住居跡で、確認面はホーキ層の２次堆積層である。住居平面形はやや六角形を呈する円形で、南北6.00m、東西5.68mの規模で、深さは確認面より10cmほどであった。床面は住居の北西側で一部AT層であったが、それ以外は白色粘質土層とする。ピットは19基検出され、柱穴と考えられるものはP１～６の６基が確認でき、中央ピットとしてはP７が考えられる。壁溝は住居内を全周し、床溝は住居西側に幅10cmのものが、南北に２mほど認められ、P３・17に一部壊されている。

出土遺物はあまり認められなかったが、床面付近から10の口縁部外面に平行多条沈線文が施される壺の破片が出土している。

本遺構の時期であるが、10の壺が清水編年Ｖ－３に相当することから、弥生時代後期後葉の時期が考えられる。



第196図　SI４実測図



第197図　ＳＩ４　出土遺物

ＳＩ４（第196・197図、表63・64、PL.85・87・88・93）

ＳＩ４は調査区東側尾根の平坦面から谷部への落ち際のＣ８・９グリッドに位置する。標高60.42m、ＡＴ層を検出面とする。ＳＩ４の住居構造はその立地条件から、その大部分は住居埋土を含め、谷部に崩落してしまったと考えられ、住居東側に壁溝などを残すのみである。住居平面形は東壁の壁溝が南北で西側に屈曲をみせることから方形、もしくは長方形であったと考えられる。規模は南北で4.40mほどである。

検出した床面は住居東側に限られるが、ＡＴ層を床面とし、本住居跡に含まれると思われる範囲からは、ピットが８基確認された。そのうちＰ１～４の４基が柱穴と考えられる。また、中央のＰ５の付近には焼土面が認められた。

本住居跡の残存状況は良くなかったが、住居東側に残存するわずかな埋土中には多くの出土遺物が認められた。11・12・13は甕の口縁部である。口縁部中位には丸みを持った鈍い稜を有し、稜より上位の部分は短縮化が進んでいる。口唇部は、11が丸みを帯びており、12・13は平坦面を作っている。14は脚部分を失っているが、埦形の坏部を持つ高坏である。15はカマドの底部の破片で、外面タテハケ、内面は縦方向のヘラケズリが施される。成形の際、粘土の積み上げによって自重で肥厚してしまった内外面の底部には横方向のヘラケズリが施される。16は須恵器坏蓋の破片で、口縁部はわずかではあるが外反しており、天井部と口縁部との間の稜や口唇部の稜が鋭く作られている。復元ではあるが口径14cmを測る。17は黒曜石の石核である。

本住居跡の時期であるが、出土した甕口縁部の特徴は天神川編年Ⅸ期、もしくはⅩ期に、須恵器坏蓋は陶邑編年MT15に相当すると思われる。このことから古墳時代中期末から後期初頭頃の年代が考えられる。

(3)　土坑

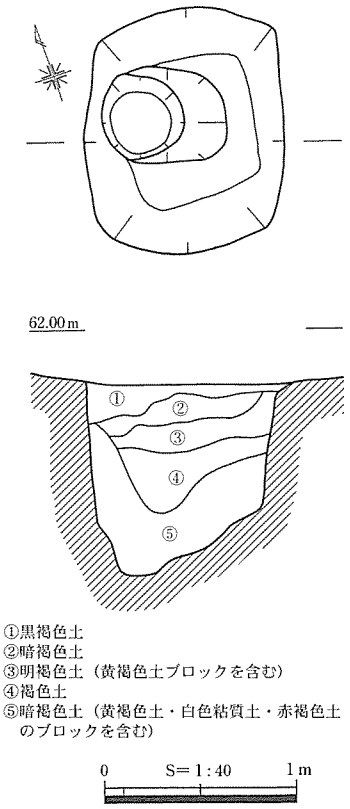
SK１（第198・199図、表63、PL. 85・88）

Ｇ８グリッド北西側、高さ61.80mの平坦面に位置する。平面形は四隅が若干張る楕円形で、長軸130cm、短軸106cm、深さ105cmを測る。土坑内は深さ70cmほどのところで平坦面を持ち、北西側がさらに低くなる。

出土遺物18・19は甕口縁部の破片で、18には口縁部に平行多条沈線文、肩部には貝殻腹縁文が施されている。19は特に施文はされず、ヨコナデによる調整のみである。20・21は高坏、もしくは器台の脚部の破片で、両者とも円形の透孔が穿孔される。21の内外面には赤色塗彩が施される。

本遺構の時期であるが、19・20・21の出土遺物は埋土上層から中層にかけて認められたものであり、18は底面直上からのものである。18の底面直上の土器は清水編年Ｖ－３に相当することから弥生時代後期後葉の時期と考えられる。

なお、SK１の付近にはSK２、SK３、SK５、SK８がコの字状にみられる。ここでは埋土の状況に柱の痕跡は確認できなかったことから、個々に取り扱うこととするが、近接しながらも切り合わず、底面の高さもほぼ同レベルになっていることから、掘立柱建物等の一連の遺構になる可能性がある。

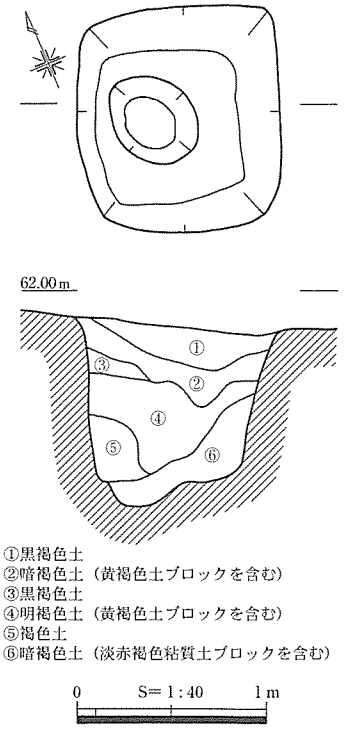


第198図　SK１実測図

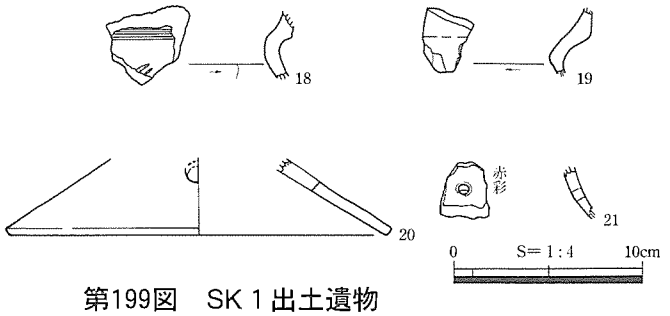
SK２（第200・201図、表63、PL. 85・88）

Ｇ８グリッド西側、高さ61.80mの平坦面に位置する。平面形は四隅が丸くなる方形で、長軸122cm、短軸107cm、深さ100cmを測る。土坑内は深さ80cmほどのところで平坦面を持ち、中央でさらに若干の窪みがみられる。形状や埋土の色調などSK１と近似しているが、混入している土に違いが見られる。

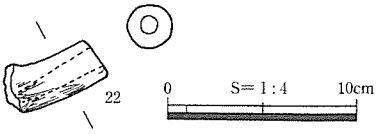
出土遺物はわずかであったが、底面付近から22の注口土器の注口部分の破片が見られた。土師器にみるような先端をすぼませる形態でないことから弥生土器と思われる。本遺構の年代的位置付けは難しいが、SK１等と関連したものであるならば、弥生時代後期後葉の年代が考えられる。



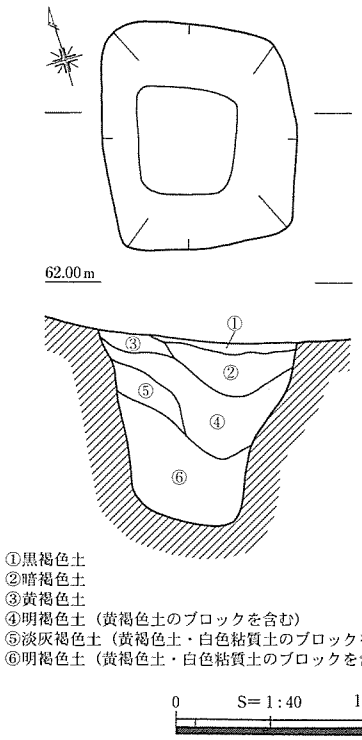
第200図　SK２実測図



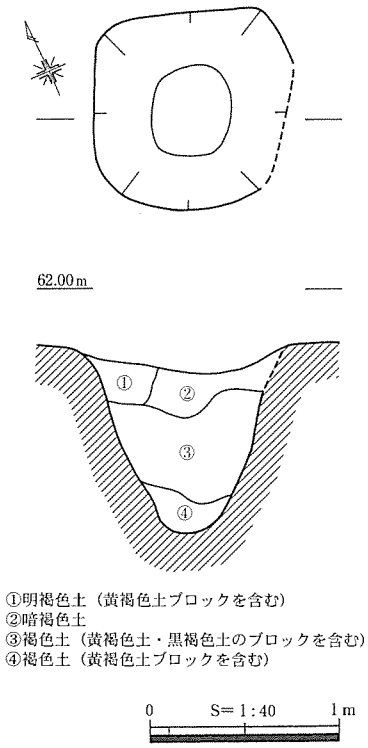
第199図　SK１出土遺物



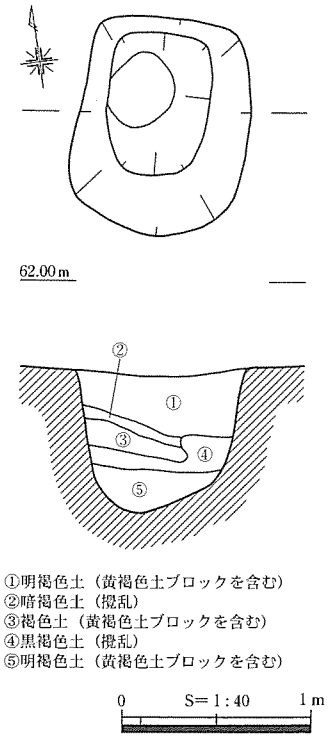
第201図　SK２出土遺物



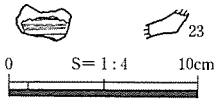
第202図　SK３実測図



第204図　SK５実測図



第205図　SK８実測図



第203図　SK３出土遺物

SK３（第202・203図、表63、PL. 86・88）

Ｇ８グリッド北西側、高さ61.70ｍの平坦面にSK１、SK２に挟まれて位置する。平面形は四隅が丸くなる方形で、長軸121cm、短軸104cm、深さ98cmを測る。土坑内は、東側で深さ50cmのところで大きさを減じさせている。平面形はSK１、SK２に近いが、底面の窪みはみられない。

出土遺物はわずかではあったが、埋土上層中から甕もしくは壺の口縁部の破片である23がみられた。口縁部には平行多条沈線文が施されている。

本土坑の時期は、埋土上層中からわずかに遺物が認められたのみであり、詳らかにできないが、出土遺物は清水編年Ｖ－３に相当することから弥生時代後期後葉頃かと思われる。

SK５（第204図、PL. 86）

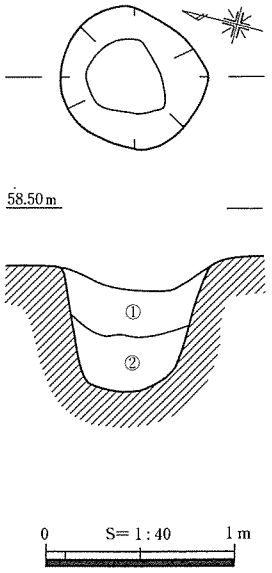
Ｇ８グリッド西側の高さ61.70ｍの平坦面、SK２の東側に位置する。平面形は四隅が丸くなる方形で、東側の上半部分は植え込みによる攪乱を受ける。大きさは長軸104cm、短軸推定102cm、深さ100cmである。SK１、SK２などは検出面から底面に向かいほぼ垂直に落ち込んだ形状を呈したが、SK５は検出面から底面に向かい徐々に大きさを減じさせる。また底面部分の形も平坦面を作らない、丸くしたものである。

出土遺物はみられず、本遺構の時期は不明である。

SK８（第205図、PL. 86）

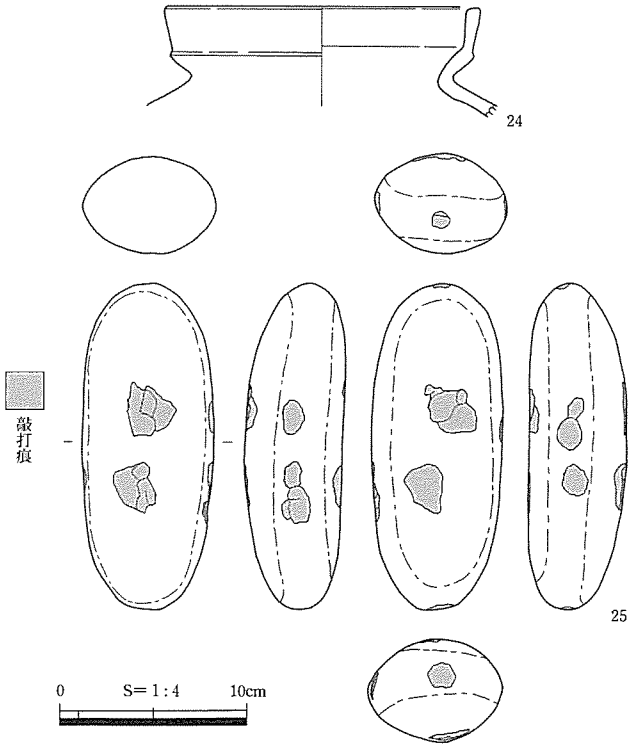
Ｇ８グリッドの北西側、高さ61.50ｍの平坦面、SK１の東側に位置する。平面形は四隅が丸くなる方形で、南辺部分がやや膨らんだ形状である。長軸116cm、短軸90cm、深さ74cmを測る。SK８もSK５に近く緩やかな丸みを底面の形状を呈している。

出土遺物はみられなかった。本遺構の時期は不明である。

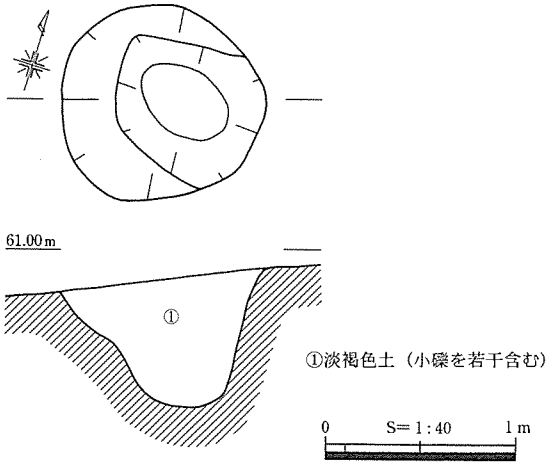


①暗褐色土（淡赤褐色粘質土ブロック・炭化物を含む）
②暗褐色土（淡赤褐色粘質土ブロックを含む）

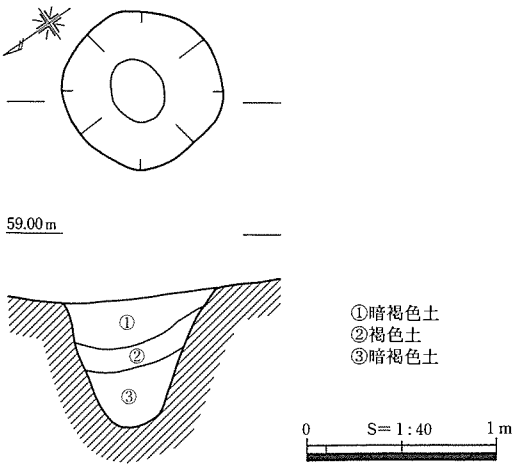
第206図　SK４実測図



第207図　SK４出土遺物



第208図　SK６実測図



第209図　SK７実測図

SK４（第206・207図、表63・64、PL. 86・88）

Ｅ９グリッドの東側、一部Ｄ９グリッドにかかった地点に位置する。谷部に堆積した包含層の調査の後、淡赤褐色粘質土を検出面として58.20cmの高さで確認した。規模は長径78cm、短径68cm、深さ64cmを測り、平面形は円形を呈する。土坑内は検出面から底面に向かいやや急な傾斜で落ち込み、底面は緩やかな丸みを持っている。

出土遺物には、埋土上層中で出土した口縁部から肩部にかけての甕の破片24がみられたほか、底面からは流紋岩質安山岩の敲石25が出土した。24の甕は、外反した口縁部下半に稜を有し、口唇部に平坦面を作る。

本土坑の時期であるが、甕口縁部の特徴が天神川編年Ⅷ期に相当することから、古墳時代中期中頃と考えられる。

SK６（第208図、PL. 86）

Ｉ６グリッド東側、60.90ｍの高さで、ホーキ層を検出面とし確認した。平面円形で長径108cm、短径104cm、深さ74cmを測る。本遺構の埋土の状況は、淡褐色土の単層であったが、埋土中に含まれる小礫等はホーキ層中にみられるものであり、検出面であるホーキ層とは色調を異にする以外、きわめて近い特徴を有する。

出土遺物もみられなく、本遺構の時期は不明である。

SK７（第209図、PL. 86）

Ｅ９グリッドの南東側、一部E10グリッドにかかった地点に位置する。谷部包含層の調査後、58.70ｍの高さで淡赤褐色粘質土を確認面として検出した。長径86cm、短径82cm、深さ73cmの規模を持ち、円形の平面形である。断面形は底面に向かい徐々にその大きさを減じさせた、すり鉢状の形状を呈する。

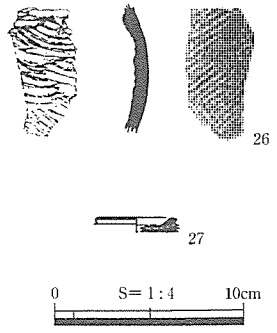
出土遺物はみられず、本遺構の時期は不明である。

(4)　その他の遺構

SD１（溝状遺構　第211図、表63、PL. 88）

SD１は、調査区西側の尾根を南北に分断するように、Ｈ６グリッド南西の調査区外から東に16ｍほど向かい、Ｇ６・７グリッドで北東方向に屈曲し、Ｆ５・６グリッドを通り調査区外に延びる。確認できた範囲で溝の長さは約32ｍ、標高は確認面でおよそ58.5～62.0ｍである。Ｇ６・７グリッドの屈曲する地点が、溝のほぼ中間にあたる。幅約180cm、深さは確認面から最も深いところで40cmほどを測ったが、ほぼ20～30cmの深さであった。埋土は黄褐色土のブロックを含んだ暗褐色土の単層で、埋土中からは須恵器や土師器の細片がわずかに認められた。26、27はいずれも須恵器で、26は甕の胴部の破片で、外面に格子タタキ目、内面に青海波文が見られる。27は坏蓋の天井部の破片で、輪状の摘みが貼り付けられている。

さて本遺構の時期であるが、出土遺物では図に挙げた須恵器よりも新しい時期の遺物は確認できなかった。しかし、SD１が調査区外に延びた地点であるＦ５グリッドやＩ６グリッドにおいて、傾斜地でありながら現在の地形も溝状の窪みが確認できること、埋土である黄褐色土ブロックを含んだ暗褐色土が調査区内にみられた梨の栽培による攪乱土に近いことから近現代の新しい時期に掘られた溝であると思われる。



第210図　SD１出土遺物

ピット（第211図、表62）

蝮谷遺跡では住居跡内で検出したピットを除き、46基のピットを確認した。調査区東側の尾根や、尾根から下る斜面地にわずかながら見られたが、調査区西側尾根、特に尾根から西側に張り出す部分に多く分布する。埋土の状況は、Ｐ８を除き単層である。柱痕が確認されるものもなく、配列等からも建物跡と言えるものはない。計測値は表62の通りである。

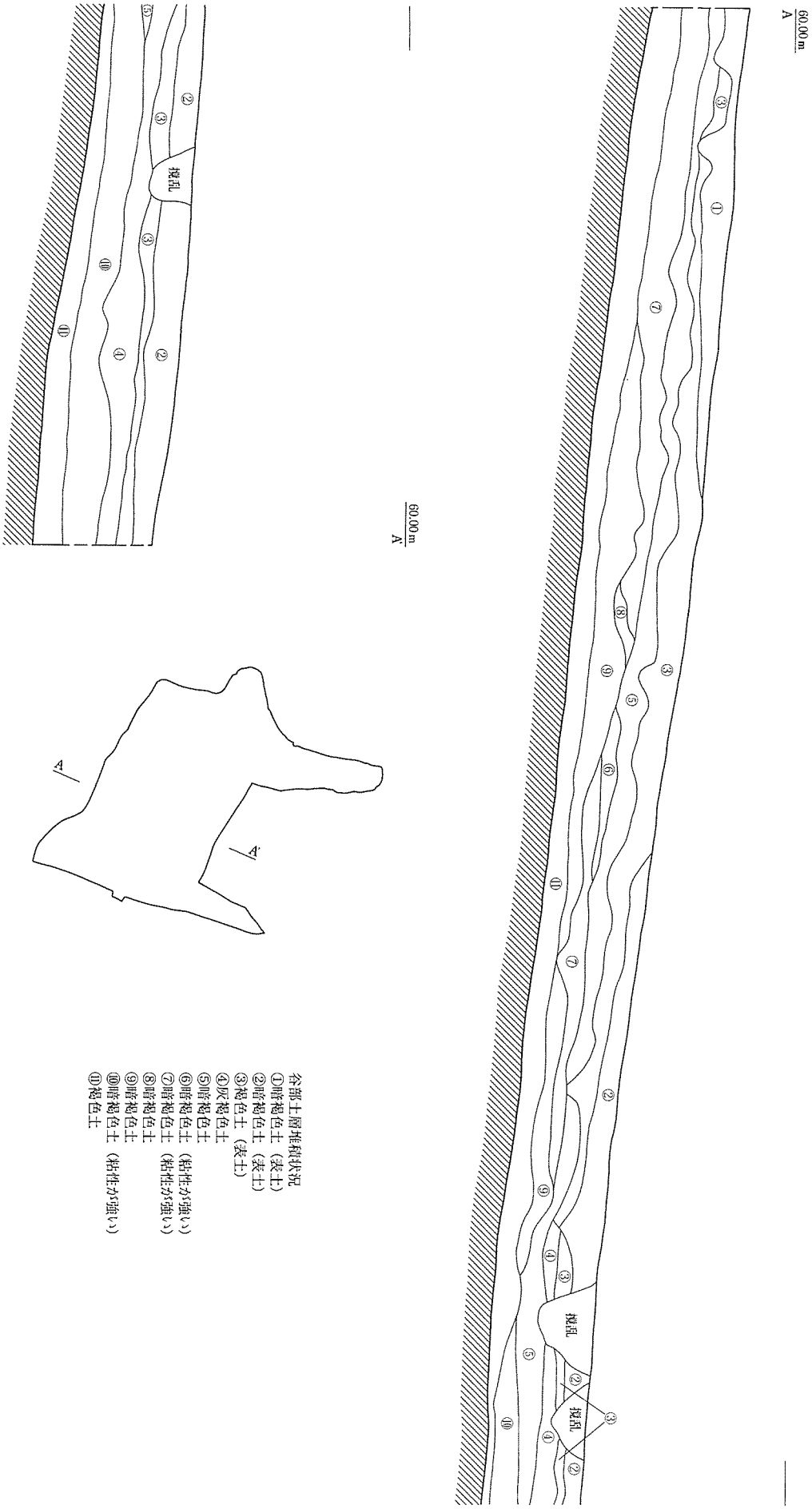
(5)　谷部の調査（第212～215図、表63～66、PL. 89～93）

調査区東側の谷部では、検出された遺構はSK４・７、Ｐ２・３の

表62　蝮谷遺跡ピット一覧表（計測単位はcm）

Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考
Pit 1	32	30	20.5	暗褐色	
Pit 2	49	30	29	暗褐色	
Pit 3	22	15	23	暗褐色	
Pit 4	18	15	18	淡褐色	
Pit 5	36	32.5	18	灰褐色	
Pit 6	35.5	32	22	灰褐色	
Pit 7	37	34.5	22	淡灰褐色	
Pit 8	30	26	22	暗灰褐色・淡灰褐色	２層
Pit 9	35	30	27.5	灰褐色	
Pit10	24	22	22	淡灰褐色	
Pit11	27	22	13	淡褐色	
Pit12	24	23	23.5	淡褐色	
Pit13	26	25	25	灰褐色	
Pit14	28	26	19	淡褐色	
Pit15	28	28	16.5	淡褐色	
Pit16	32	32	19	淡褐色	
Pit17	30.5	28	20	淡褐色	
Pit18	37	30	36	淡褐色	
Pit19	28	28	14	褐色	
Pit20	28	24	11	灰褐色	
Pit21	28	22	13.5	褐色	
Pit22	19	17	10	褐色	
Pit23	22	22	10	褐色	
Pit24	18	16	13	褐色	
Pit25	16.5	16.5	15	黒褐色	土器出土
Pit26	24	24	13	褐色	
Pit27	20	18	13	淡褐色	
Pit28	25	23	23	淡褐色	
Pit29	24	22	39	淡褐色	
Pit30	26	26	31	褐色	
Pit31	25	22	10	褐色	
Pit32	26	24	19	褐色	
Pit33	24	23	11	褐色	
Pit34	26	26	24	褐色	
Pit35	30	26	39	褐色	
Pit36	13	13	10	明褐色	
Pit37	30	26.5	18.5	褐色	
Pit38	24	18	36	灰褐色	
Pit39	28	28	36	灰褐色	
Pit40	22.5	20	13.5	褐色	
Pit41	16.5	14	14	灰褐色	
Pit42	38.5	30	22	褐色	
Pit43	32.5	24.5	11	暗褐色	
Pit44	22	20	9	暗褐色	
Pit45	20	18	14	明褐色	
Pit46	30	29.5	16.5	明褐色	

第211図　SD１・ピット配置図



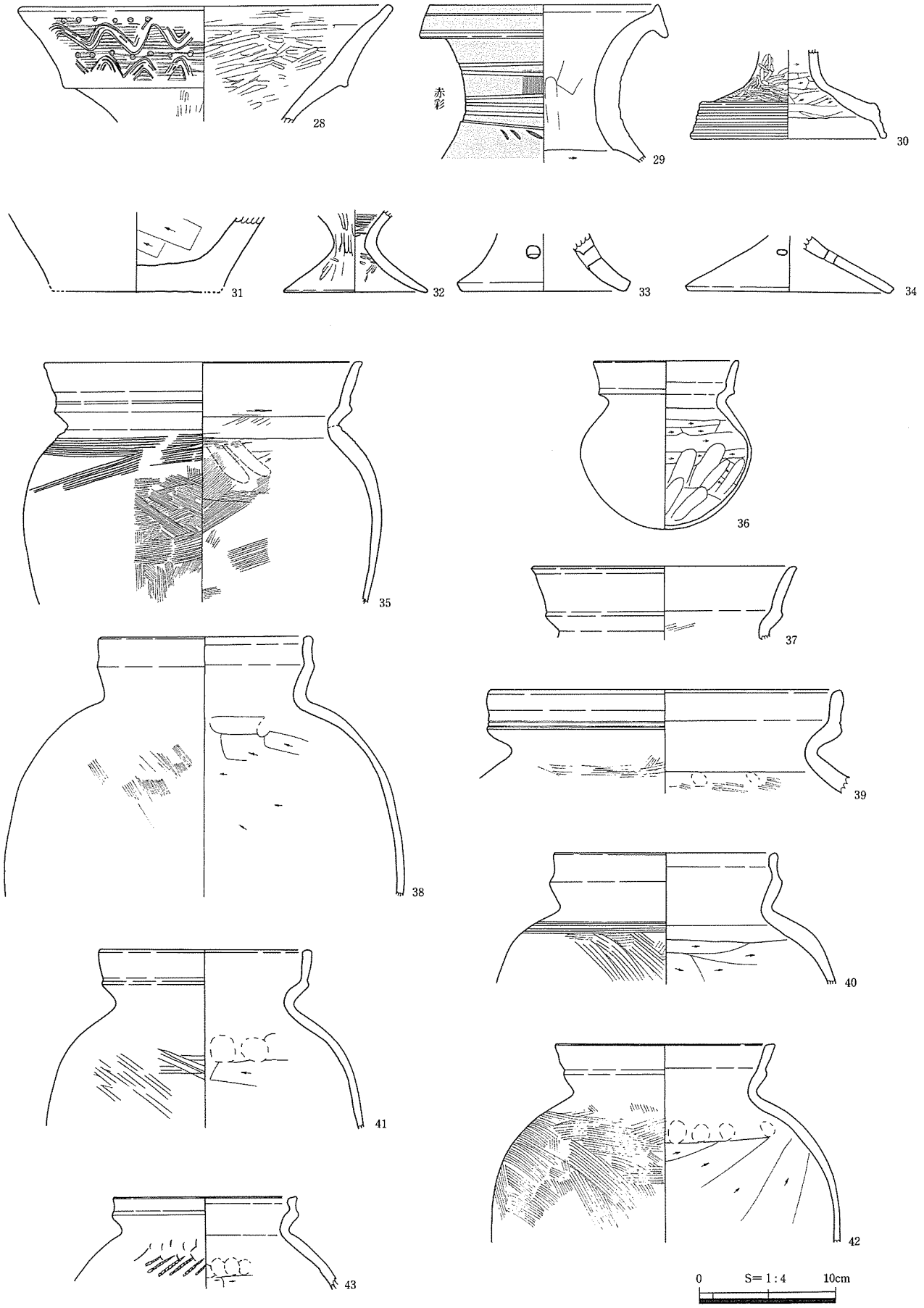
第212図　谷部土層断面図

みであったが、谷部を埋める堆積土中には遺構に伴わない夥しい量の遺物が包蔵されていた。谷部では部分的にではあるがサブトレンチによって、遺物包含層下に無遺物層が続くことを確認し、この遺物包含層までを調査対象とした。谷部堆積土は大きくは上から表土、暗褐色土、褐色土に分けられ、暗褐色土はさらに粘性、締まり、色調の差により分層できた。そのうち遺物を多量に包含した層は暗褐色土層の７・９・10層、褐色土層の11層である。

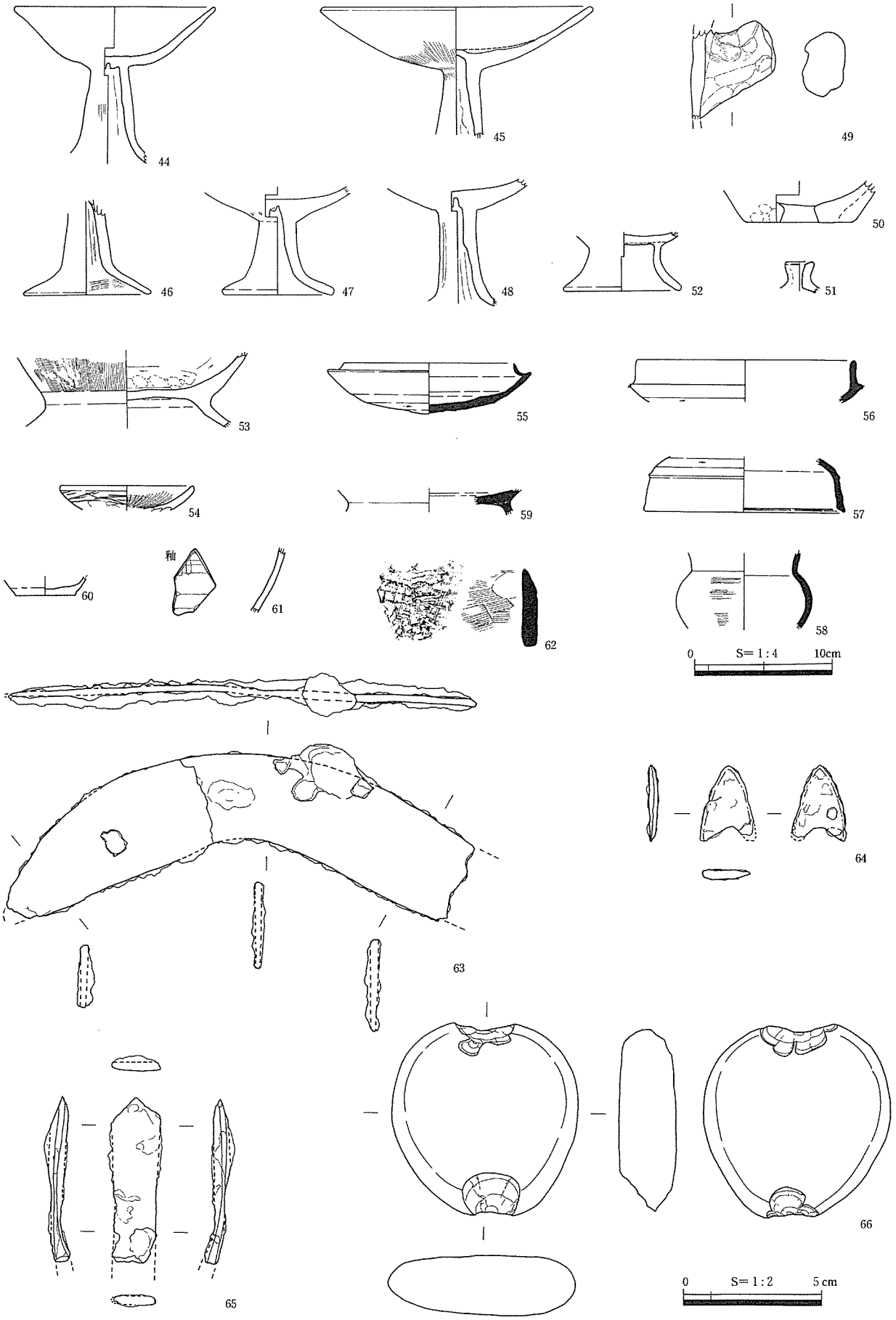
さて、この谷部堆積土であるが、色調、粘性、締まり等で分層は行えたが、特に谷部の埋没過程を反映するものではない。出土遺物は暗褐色土層、褐色土層ともに弥生時代中期後半～古墳時代中期にかけての遺物を中心とし、両者間の出土遺物には接合するものもみられた。また、出土量はわずかであったが、古代および中世、また近世のものと思われる遺物もみられる。このことから蝮谷遺跡の谷部が現況の埋没をした時期は、中世もしくは近世ころの時期が考えられ、谷部包含層内の遺物の大半を占める弥生時代中期後半～古墳時代中期の遺物は、谷部を挟んだ東西の尾根上に立地していた該期の遺構の崩落に伴って多量に流れ込んだものと考えられる。

出土遺物であるが、暗褐色土中から出土した土器については28～31までが弥生土器、32～54までが土師器、55～59までが須恵器、60～62が中世以降のものである。28は器台の口縁部分で、内面にヘラミガキ、外面口縁部には密な平行多条沈線文の後、２段の波状文・竹管文が組み合わさる文様が施される。29は壺の上半部で口縁部に凹線文、頸部には凹線・刺突文が施文される。これらの弥生土器は時期が判別するものに関しては、その形態や施された文様の特徴から清水編年Ⅴ－２・３に相当し、弥生時代後期中葉から後葉の時期が考えられる。土師器に関しては、35～37の甕が口縁部立ち上がりの短縮化が見られず、下端の稜も明確であることから古墳時代前期、このうち35、36の肩部まで確認できるものは、肩部の張りはあまり認められないことから天神川編年Ⅱ期、前期前半頃の時期と思われる。38～43の甕は口縁部立ち上がりの短縮化が進み、下端の稜も丸みを帯びていることから天神川編年Ⅷ・Ⅸ期に相当し、中期中葉頃の時期が考えられる。高坏44～48はいずれも古墳時代中期のものと見られる。54は復元口径9.8cmの小型の土師器坏で、外面は粗いヘラミガキによる調整、内面には横方向の粗いヘラミガキの後、放射状のヘラミガキ（暗文）が一段施される。口縁部での立ち上がりはほとんどみられず、偏平な器形を呈すことは皿に含まれるものかもしれない。調整の特徴が平城宮Ⅱ期、もしくはⅢ期に相当すると思われることから、８世紀の第２四半期頃のものと考えられる。鳥取県内の類例としては、54よりも口縁部の立ち上がりが認められ、赤彩が施されるなどの違いがあるが、法量等からは米子城跡21遺跡（濱隆造1998『米子城跡21遺跡』（財）鳥取県教育文化財団）の包含層出土の暗文が施文される土師器坏がもっとも近い。62は外面に格子タタキ、内面にはヨコハケが施された中世須恵器の甕の破片である。63～65は鉄製品で、63は曲刃鎌の刃部、64が無茎平根式で長三角形の鉄鏃、65が鉈の刃部である。66は角閃石安山岩の長軸の両端を打ち欠いた石錘である。

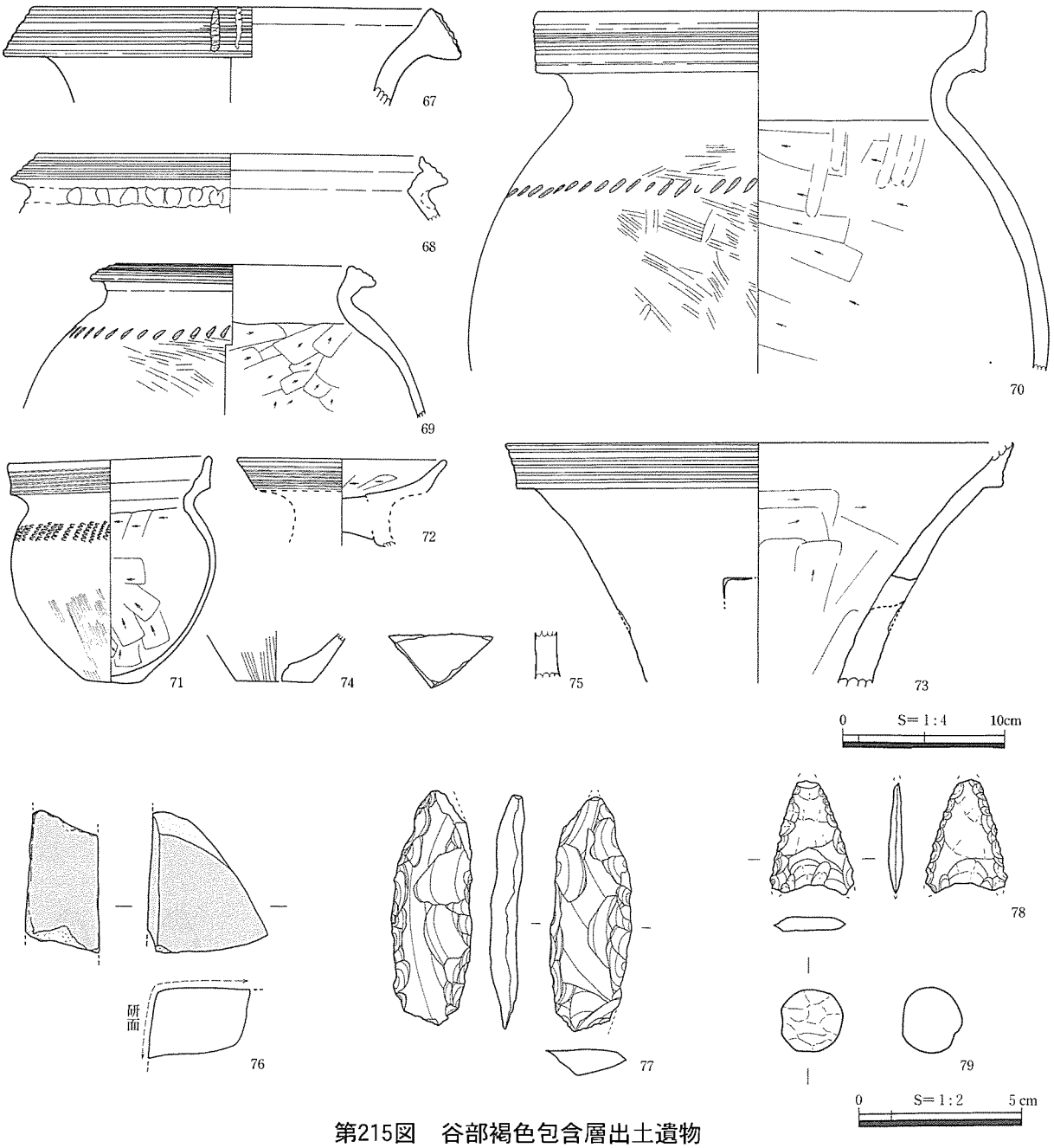
褐色包含層中出土土器も暗褐色土層と同様に弥生時代後期から古墳時代中期までの時期のものが中心となるが、67・68など清水編年Ⅳ－３、弥生時代中期後葉ころの土器も認められる。甕67は口縁部に凹線を施した後、棒状浮文が貼り付けられる。甕68は頸部に粘土帯が貼り付けられる。69～73は弥生時代後期に相当する。74も弥生土器と思われるが、平底の底部に穿孔が施された鉢である。75は時期が下り、陶器であるが、色調や胎土から常滑の甕の破片であると思われる。76～78までが石製品で、76は花崗岩質アプライトを石材とした砥石である。77はサヌカイト製の石槍状石器、78もサヌカイトを石材とした凹基式の石鏃である。79は直径２cmあまりの穿孔されない土玉である。



第213図　谷部暗褐色包含層出土遺物



第214図　谷部暗褐色包含層出土遺物

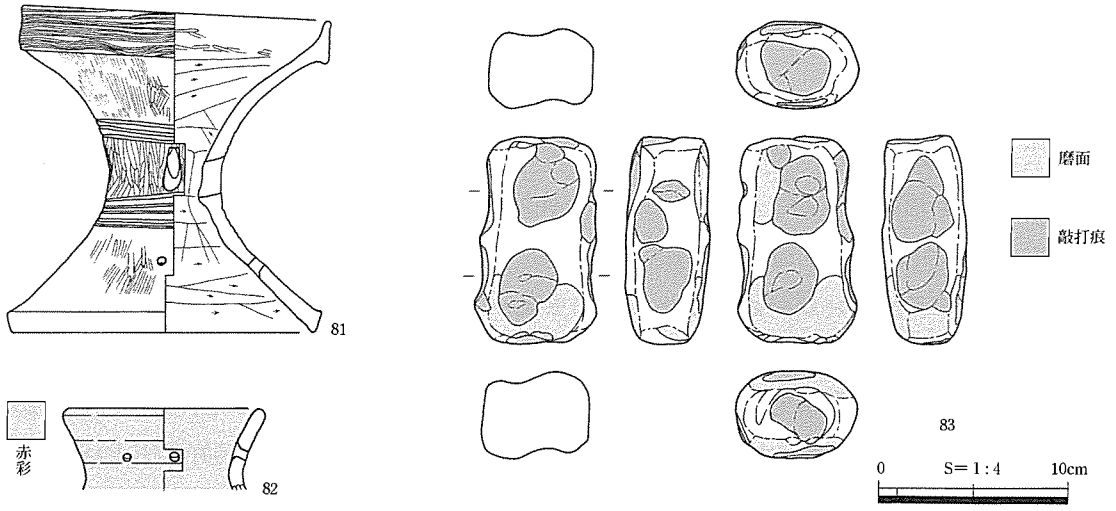


第215図　谷部褐色包含層出土遺物

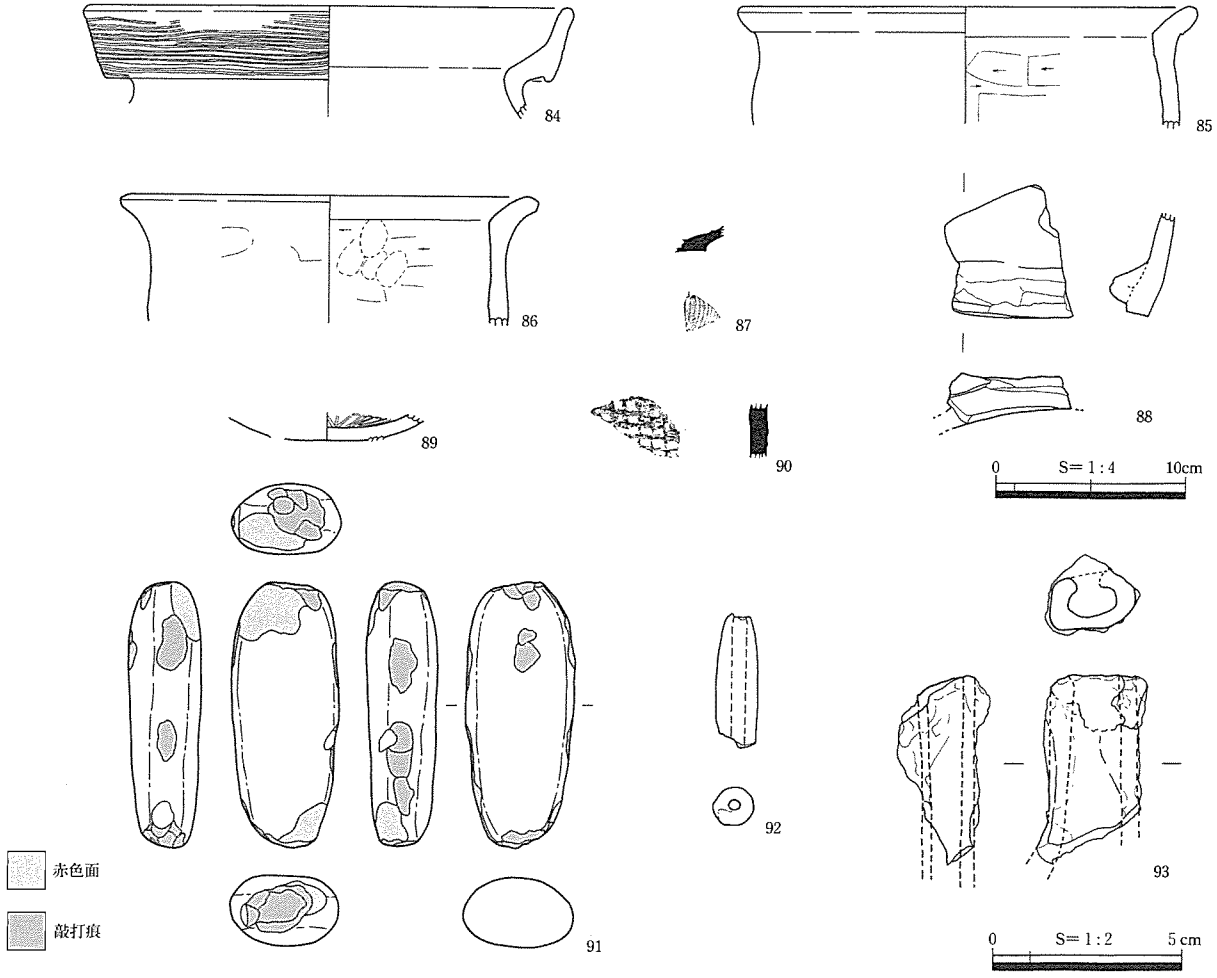
(6)　遺構外出土遺物（第216・217図、表63～66、PL. 91～93）

調査区西側の尾根上では、表土下に一部ではあったが、赤褐色土（ソフトローム）を主体とした２次堆積土層が認められるところがあり、その層中からはわずかではあるが遺物の出土がみられた。81は器台で、複合口縁の受部から筒部へとすぼまり、筒部から脚部に向かってはハの字状に広がる器形を呈する。また、施文は外面口縁部、および筒部には凹線がみられるほか、筒部には４方向の穿孔がされる。清水編年のＶ－１、もしくは２に相当すると思われる。83は閃緑岩を石材とし、敲石および、磨石として用いられている。６面すべてに使用の痕跡がみられる。

そのほか、表土、攪乱土中から古墳時代後期以降の土師器甕の85、86、回転糸切痕が底面に残る須恵器坏87、高台部分を欠失しているが、外面のヘラミガキは省略され、内面に放射状にヘラミガキ（暗文）が施される89がみられた。87、89はともに８世紀以降のものである。また、90は外面に格子



第216図　尾根部包含層出土遺物



第217図　表土・攪乱土中出土遺物

タタキが施された中世須恵器の甕の破片である。91は石英安山岩の敲石で、外面は酸化のためか黄褐色を呈し、敲痕の付近には被熱もしくは、酸化を原因とする赤色面が認められる。92は筒状の土錘、93は袋状鉄斧の柄の部分の破片と思われる。

第３節　まとめ

蝮谷遺跡では上述したように、竪穴住居跡５棟、土坑８基、溝状遺構１条、ピット46基の遺構を検出した。ここでは蝮谷遺跡で検出した遺構について若干触れる。

調査区西側の尾根部で確認されたＳＩ１は焼失住居であった。鳥取県内の焼失住居に関しては従前の研究として、住居内の出土遺物の多寡の状況から、放火による住居廃棄の考察や、弥生時代後期後葉の時期に卓越して焼失住居が認められる等の意見（牧本　2002)、上屋構造の復原研究がある（浅川編　2001)。蝮谷遺跡ＳＩ１では遺構の遺存状況はあまり良くなかったため、遺物の出土状況による住居廃棄等については明らかでないが、時期は弥生時代後期後葉に属し、山陰地方で最も焼失住居が認められる時期のものである。また、上屋構造の復原においては、炭化材等良好な出土状態ではなかったが、住居中央付近では炭化材、焼土が部分的に認められ、確認された焼土は、付近の炭化材よりも直上から５cmほど上位に位置する状況であった。このことは焼失した住居建材の上に土が乗った状態を示すと考えられ、土屋根であった可能性が高い。また、出土炭化材に関しては、一部ではあるが樹種同定分析を行い、分析を行った炭化材についてはすべてクリであったことが判明した。鳥取県中部における該期の住居建材へのクリ材利用に関しては、従来の分析ではあまり明らかでなかったが、近来では井図地中ソネ遺跡ＳＩ９などで確認されている（古川・船橋　2003)。

次に、第１節において蝮谷遺跡と久蔵峰北遺跡とは指呼の距離に位置することなどから、本来は一連の遺跡と捉えられることは述べたが、古墳時代前期末の時期に属するＳＩ２に関しては、該期の遺構が久蔵峰北遺跡において確認されていないことから一連の遺跡としての認識とは異にする。また、弥生時代中期後半～古墳時代中期の遺物が多量に見られた蝮谷遺跡谷部包含層出土遺物も、古墳時代前期の遺物は前半のものを中心とすることから、谷部を挟んだ東西の尾根上に現在は残存しない遺構が立地していた場合も該期の遺構は希薄であったと思われる。しかし、蝮谷遺跡の南側に近在する八橋第２～４遺跡（大賀　2001）では該期に位置付けられる竪穴住居跡が多く認められることから、古墳時代前期末頃の時期において集落は丘陵部をやや南に上った場所で展開されたと考えられる。この集落の変遷の理解が妥当であるならば、ＳＩ２はこの南側に移った集落に帰属するものと判断される。このように考えた場合、蝮谷遺跡の周辺では久蔵峰北遺跡、八橋第２～４遺跡と弥生時代中期～古墳時代中期まで集落が連綿と続き、蝮谷遺跡はその縁辺部に形成されたものとして理解されるが、この場合においても該期の集落の中心から外れて尾根先端部に立地するＳＩ２は特殊な機能を有していた可能性もあり、サイコロの６の目のように柱穴を配した稀な住居構造もその機能に起因してのものかもしれない。

以上、ここでは蝮谷遺跡で検出した遺構について若干触れたが、蝮谷遺跡谷部で認められた包含層遺物からは、残存する遺構よりも弥生時代後期から古墳時代中期にかけて当地における土地利用が活発であったことが窺え、また古代や中世においてもわずかではありながらも蝮谷遺跡の地が利用されていた可能性が考えられる。

参考文献

浅川滋男編　2001『竪穴住居の空間分節に関する復原研究』
大賀靖浩　2001『八橋第２遺跡～第４遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
牧本哲雄　2002『妻木晩田遺跡の焼失住居について』『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会
古川郁夫・船橋晃　2003「井図地中ソネ遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種同定」『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

表63　蝮谷遺跡土器観察表

法量の※は復元値、△は残存値

No	遺構・地区・層位名	挿図 PL	種類・器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	SI 1 床面直上	第190図 PL87	弥生土器 高坏	口径23.4※ 器高6.4△	外面口縁部ヨコナデ。体部ハケ後ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	密（6㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面橙色 外面黄褐色	外面口縁部スス付着 内面赤彩
2	SI 1 床面付近	第190図 PL87	弥生土器 甕	口径14.8※ 器高5.8△	外面口縁部平行多条沈線文後ナデ。頸部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい黄橙色 外面にぶい橙色	内外面口縁部スス付着
3	SI 1 床面付近	第192図 PL87	弥生土器 甕	底径4.8※ 器高5.3△	外面底部ハケ後ナデ。 内面底部ヘラケズリ。	密（4㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも褐灰色	外面スス付着
4	SI 2 埋土中	第193図 PL87	土師器 甕	口径12.5※ 器高3.6△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも橙色	外面口縁部スス付着
5	SI 2 床面付近	第193図 PL87	土師器 小型丸底壺	器高5.5△	外面頸部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面肩部ナデ。胴部ヘラケズリ。底部ナデ。	やや密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい橙色 外面橙色	内面黒斑
6	SI 2 床面付近	第193図 PL87	土師器 高坏	器高9.2△	外面体部・脚部ナデ。 内面体部・脚部ナデ。底部指頭圧痕。	密（1㎜の砂粒を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
7	SI 2 床面付近	第193図 PL87	土師器 器台	底径13.8 器高4.1△	外面脚部・底部ヨコナデ。 内面脚部ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
9	SI 2 埋土中	PL87	土師器 甕	口径14.4※ 器高3.0△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面ともにぶい橙色	
10	SI 3 床面付近	第195図 PL87	弥生土器 壺	口径17.0※ 器高4.1△	外面口縁部平行多条沈線文。頸部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
11	SI 4 床面付近	第197図 PL88	土師器 甕	口径16.4※ 器高6.7△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	やや密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面灰黄褐色 外面灰白色	外面スス付着
12	SI 4 床面付近	第197図 PL88	土師器 甕	口径16.8※ 器高6.7△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
13	SI 4 埋土中	第197図 PL88	土師器 甕	口径15.6※ 器高4.0△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面ともにぶい橙色	
14	SI 4 床面付近	第197図 PL87	土師器 低脚坏	口径12.6 器高5.0△	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ・ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	やや密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい黄橙色 外面橙色	
15	SI 4 床面付近	第197図 PL88	土師器 竈	底径28.8※ 器高10.4△	外面体部タテハケ。底部付近ヘラケズリ。 内面体部・底部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい橙色 外面浅黄橙色	底面黒斑
16	SI 4 埋土中	第197図 PL88	須恵器 坏蓋	口径13.8※ 器高3.6△	外面口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面灰色 外面暗灰色	
18	SK 1 底面	第199図 PL88	弥生土器 甕	器高4.2△	外面口縁部平行多条沈線文。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面とも浅黄褐色	
19	SK 1 埋土上層	第199図 PL88	土師器 甕	器高3.4△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄橙色	
20	SK 1 埋土下層	第199図 PL88	土師器 高坏	器高4.0△	外面ナデ。 内面ナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面にぶい橙色	
21	SK 1 埋土上層	第199図 PL88	土師器 高坏	器高3.0△	外面ナデ。 内面ヘラケズリ後ナデ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面浅黄橙色 外面灰黄色	内外面赤彩
22	SK 2 埋土下層	第201図 PL88	土師器 注口土器	器高3.9△	外面ハケおよびナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
23	SK 3 埋土上層	第205図 PL88	弥生土器 甕もしくは壺	器高2.0△	外面口縁部平行多条沈線文。頸部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	やや密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄褐色	
24	SK 4 埋土上層	第207図 PL88	土師器 甕	口径16.6※ 器高3.6△	外面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい橙色	
26	SD 1 G6 検出面	第210図 PL88	須恵器 甕	器高6.8△	外面胴部タタキ後ナデ。 内面胴部当て具痕（青海波文）有り。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも灰色	
27	SD 1 F6 埋土上層	第209図 PL88	須恵器 坏蓋	器高0.7△	外面摘み部ヨコナデ。 内面体部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも灰色	
28	D8 暗褐色包含層	第213図 PL91	弥生土器 器台	口径26.8※ 器高18.5△	外面口縁部平行多条沈線文後波状文・竹管文。頸部ナデ。 内面口縁部・頸部ヘラミガキ。	密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	外面にぶい褐色 内面にぶい橙色	
29	D7 暗褐色包含層	第213図 PL90	弥生土器 壺	口径16.8※ 器高11.5△	外面口縁部・頸部凹線文。肩部刺突文。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄橙色	外面赤彩

No	遺構・地区・層位名	挿図 PL	種類・器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
30	E10 暗褐色包含層	第213図 PL89	弥生土器 器台	底径14.0※ 器高6.4△	外面脚端部凹線文。脚部ヘラミガキ。内面脚端部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。	密（1～2㎜の砂礫を含む）	良好	内外面浅黄色。	内外面赤彩 底部スス付着
31	H9 暗褐色包含層	第213図 PL92	弥生土器 甕	底径12.3※ 器高5.6△	外面胴部・底部ナデ。内面胴部ヘラケズリ。	密（4㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも灰白色	
32	E9 暗褐色包含層	第213図 PL89	土師器 器台	口径10.6※ 器高6.0△	外面脚部・筒部ナデ後ヘラミガキ。内面脚部ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ。筒部ナデ後ヘラミガキ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも明赤褐色	
33	F6 暗褐色包含層	第213図 PL91	土師器 高坏	底径12.4※ 器高4.2△	外面脚部ナデ。内面脚部ナデ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄色	
34	F8 暗褐色包含層	第213図 PL91	土師器 高坏もしくは器台	底径14.7※ 器高4.1△	外面脚部ナデ。内面脚部ナデ。	やや密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	
35	F8・9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径23.4※ 器高17.4△	外面口縁部ナデ。胴部ハケ。内面ケズリ後ハケ。一部ナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	口縁部胴部スス付着
36	F9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径10.5 器高12.4	外面口縁部・肩部ヨコナデ。胴部ナデ。内面口縁部・肩部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。	密（1～2㎜の砂礫を含む）	良好	内面にぶい橙色 外面浅黄色	内外面スス付着
37	F9 暗褐色包含層	第213図	土師器 甕	口径19.0※ 器高5.4△	外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ハケ後ヨコナデ。	密（1～2㎜の砂礫を含む）	良好	内外面とも黄橙色	
38	E9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径14.6※ 器高19.0△	外面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。胴部ナナメハケ後ナデ。内面口縁部ヨコナデ。肩部・胴部ヘラケズリ後ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄橙色	内外面スス付着
39	E9 暗褐色包含層	第213図 PL91	土師器 甕	口径25.6※ 器高7.5△	外面口縁部ヨコナデ。肩部ヨコハケ。内面口縁部ヨコナデ。肩部ナナメハケ・ナデ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面暗灰色 外面にぶい黄橙色	内面スス付着
40	E8 暗褐色包含層	第213図 PL91	土師器 甕	口径16.2※ 器高9.5△	外面口縁部・頸部ヨコナデ。肩部ヨコ・ナナメハケ。内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ後ナデ。胴部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面暗灰黄色 外面にぶい黄橙色	外面スス付着
41	E9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径15.0※ 器高13.0△	外面口縁部・肩部ヨコナデ。胴部ナナメハケ後ナデ。内面口縁部ヨコナデ。肩部・胴部ヘラケズリ後ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	外面スス付着
42	E9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径16.0※ 器高14.5△	外面口縁部・肩部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメハケ。内面口縁部ヨコナデ・肩部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面浅黄橙色 外面にぶい黄橙色	外面スス付着
43	E9 暗褐色包含層	第213図 PL90	土師器 甕	口径13.4※ 器高6.1△	外面口縁部ナデ。肩部貝殻腹縁文。胴部ナデ。内面口縁部ナデ。胴部上半ナデ、指頭圧痕。ケズリ頸部よりやや下がる。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面とも灰黄色	外面胴部黒斑
44	F8 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 高坏	口径14.4※ 器高10.7△	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。脚部タテハケ後ナデ。内面ナデ。脚部シボリ後ナデ。	密（1～2㎜の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	
45	F9 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 高坏	口径9.3※ 器高19.3△	外面体部タテハケ。筒部ナデ。内面体部ナデ。筒部シボリ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも明赤褐色	
46	F9 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 高坏	底径9.0※ 器高6.8△	外面体部ナデ。内面筒部シボリ。脚部ヨコハケ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	
47	F9 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 高坏	底径7.8※ 器高7.9△	外面体部タテハケ後ナデ。脚部ナデ。内面体部・脚部ナデ。	密（4㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	
48	D7 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 高坏	器高8.7△	外面体部ナデ。脚部ナデ後粗いヘラミガキ。内面体部ナデ。脚部シボリ後ナデ。	密（1～3㎜の砂礫を含む）	良好	内面黄橙色 外面橙色。	
49	E9 暗褐色包含層	第214図 PL91	土師器 甕(把手)	器高7.1△	外面ナデ。内面ヘラケズリ。	密（1～3㎜の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい褐色	外面胴部黒斑
50	G9 暗褐色包含層	第214図 PL91	甑	底径7.8※ 器高3.0△	外面ナデ。内面不明。	やや粗（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面明黄褐色 外面褐灰色	
51	D8 暗褐色包含層	第214図 PL91	蓋(摘み)	器高2.3△	内外面ナデ。	密	良好	内外面橙色	
52	E8 暗褐色包含層	第214図 PL89	土師器 低脚坏	底径8.4※ 器高4.3△	外面体部ナデ。内面体部ヘラミガキ。脚部ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	坏部内面赤彩
53	D7 暗褐色包含層	第214図 PL90	土師器 甕	器高5.4△	外面体部タテハケ。台部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ・ナデ。台部ナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
54	E9 暗褐色包含層	第214図 PL91	土師器 坏	口径9.8※ 器高1.7△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ（放射状暗文）。	密	良好	内外面ともにぶい赤褐色	外面黒斑
55	F8 暗褐色包含層	第214図 PL90	須恵器 坏	口径12.4 器高3.8	外面口縁部・体部上半ヨコナデ。体部下半回転ヘラケズリ。底部ヘラ切後ナデ。内面口縁部・体部ヨコナデ。	密（6㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも灰色	

No	遺構・地区・層位名	挿図 PL	種類・器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
56	D8 暗褐色包含層	第214図 PL91	須恵器 坏	口径15.8※ 器高3.1△	外面ヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。 内面ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内外面とも青灰色	
57	E9 暗褐色包含層	第214図 PL91	須恵器 坏蓋	口径14.5※ 器高4.0△	外面ヨコナデ。天井部回転ヘラケズリ。 内面ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内面褐色 外面暗灰色	
58	E7 暗褐色包含層	第214図 PL91	須恵器 短頸壺	器高5.5△	外面頸部ヨコナデ。胴部カキメ。 内面ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	内面青灰色 外面暗青灰色	外面自然釉
59	E9 暗褐色包含層	第214図 PL91	須恵器 高台坏	器高1.7△	外面体部・高台部ヨコナデ。底部木目圧痕もしくは静止糸切痕をナデ消し。 内面体部ヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも薄い灰色	
60	E8 暗褐色包含層	第214図 PL91	土師器 かわらけ	底径4.5※ 器高1.3△	外面体部・底部ナデ。 内面体部ナデ。	密	良好	内面灰色 外面にぶい黄橙色	
61	E9 暗褐色包含層	第214図 PL91	磁器 碗	器高4.5△	外面　－ 内面　－	密	良好	内外面灰オリーブ	時期は近世か
62	C6 暗褐色包含層	第214図 PL91	須恵器 甕	器高6.0△	外面体部格子タタキ後タテハケ。 内面体部ヨコハケ。	密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも灰色	時期は中世
67	E9 褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 甕	口径24.7※ 器高6.0△	外面口縁部凹線文・棒状浮文。頸部ナデ。 内面口縁部・頸部ヨコナデ。	密（4㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも浅黄橙色	
68	E9 暗褐色包含層 褐色包含層	第215図 PL91	弥生土器 甕	口径23.8※ 器高3.7△	外面口縁部凹線文。頸部粘土帯貼り付け後指頭圧痕。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面淡黄色 外面浅黄橙色	
69	E9 褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 甕	口径14.6※ 器高9.1△	外面口縁部凹線文。頸部ヨコナデ。肩部ナデ。胴部ヘラミガキ後刺突文。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密（1～2㎜の砂礫を含む）	良好	内面にぶい黄橙色 外面浅黄橙色	外面スス付着
70	E9 暗褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 甕	口径27.6※ 器高18.4△	外面口縁部平行多条沈線文。頸部ヨコナデ。肩部刺突文。胴部タテハケ後ナデ。 内面口縁部・頸部ヨコナデ。肩部・胴部ヘラケズリ後ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面胴部スス付着
71	E9 褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 甕	口径12.2 底径3.5 器高16.2	外面口縁部平行多条沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁文。胴部タテハケ後ナデ。 内面口縁部・頸部ヨコナデ。肩部・胴部ヘラケズリ後ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面浅黄橙色 外面にぶい黄橙色	内外面スス付着
72	E8 褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 器台	口径12.7※ 器高5.4△	外面口縁部平行多条沈線文。 内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	密（2㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	内外面黒斑
73	E8 褐色包含層	第215図 PL91	弥生土器 器台	器高14.9△ 底径31.4※	外面脚部ヨコナデ。端部凹線文。 内面脚部ケズリ・ナデ。	やや密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
74	E7 褐色包含層	第215図 PL92	弥生土器 鉢	器高5.1△ 底径4.6※	外面胴部タテハケ。 内面胴部ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面明黄褐色 外面橙色	底部穿孔
75	D8 褐色包含層	第215図 PL92	陶器 甕	器高2.8△	外面　－ 内面　－	密	良好	内面暗褐色 外面黄灰色	外面自然釉付着 常滑焼
80	F5 包含層	PL92	陶器 壺	器高2.6△ 底径8.0※	外面　－ 内面　－	密	良好	内外面オリーブ灰色	時期は近世か
81	F3 暗褐色包含層 攪乱	第216図 PL92	弥生土器 器台	口径18.1※ 器高17.3△ 底径15.9※	外面口縁部平行多条沈線文。筒部ハケ・ヘラミガキ・凹線文。脚端部ナデ。 内面口縁部ヘラケズリのち一部ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	筒部四方向透かし 脚部四方向穿孔
82	F3 暗褐色包含層	第216図 PL91	土師器 甕	口径10.2※ 器高4.2△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 内外面赤彩
84	谷部 表土	第217図 PL92	弥生土器 甕	口径25.1※ 器高5.9△	外面口縁部平行多条沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部・頸部ヨコナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい赤褐色 外面明赤褐色	口縁部黒斑
85	西尾根 表土	第217図 PL92	土師器 甕	口径23.6※ 器高6.3△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面とも橙色	
86	谷部 表土	第217図 PL92	土師器 甕	口径20.8※ 器高6.8△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後一部ナデ。	密（5㎜以下の砂礫を含む）	良好	内外面ともにぶい橙色	
87	谷部 包含層	第217図 PL92	須恵器 坏	器高1.3△	外面体部ナデ。底部回転糸切り。 内面体部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも灰色	
88	調査区外表採	第217図 PL92	土師器 カマド	器高7.0△	外面ナデ。 内面ヨコハケ後ナデ。	密（3㎜以下の砂礫を含む）	良好	内面にぶい黄橙色 外面浅黄橙色	
89	東尾根 表土	第217図 PL92	土師器 高台坏	器高1.4△	外面体部ナデ・ヨコナデ。 内面体部ナデ後ヘラミガキ（放射状暗文および横方向の２段）。	密	良好	内外面とも橙色	
90	D10 攪乱	第217図 PL92	須恵器 甕	器高3.6△	外面胴部格子タタキ。 内面胴部ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	時期は中世

表64　蝮谷遺跡石器・石製品観察表

No	遺構・地区・層位名	挿図・PL	種　類	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備　考
8	SI2 埋土上層	第193図 PL93	勾玉	蛇文岩	2	0.75	0.5	1.5	
17	SI4 埋土中	第197図 PL93	石核	黒曜石	4.2	3	1.6	19	
25	SK4 底面	第207図 PL93	敲石・磨石	流紋岩質安山岩	17.3	7.1	5.25	922	
66	E8 暗褐色包含層	第214図 PL93	石錘	角閃石安山岩	6.3	6.8	2.15	161	
76	E8 褐色包含層	第215図 PL93	砥石	花崗岩質アプライト	4.4	3.7	2.1	44	
77	E7 褐色包含層	第215図 PL93	石槍状石器	サヌカイト	7.3	2.5	8.5	19.6	
78	E9 褐色包含層	第215図 PL93	石鏃	サヌカイト	2.65	1.9	0.35	1.8	
83	H6 包含層	第216図 PL93	敲石・磨石	閃緑岩	9.9	6.2	4.6	569	６面すべてを使用している
91	D8 攪乱土中	第217図 PL93	敲石	石英安山岩	14	5.7	3.7	456	一部赤色化

表65　蝮谷遺跡鉄製品観察表

No	遺構・地区・層位	挿図・PL	種　類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備　考
63	F8 暗褐色包含層	第214図 PL93	曲刃鎌	17	3.9	0.25	68	
64	E8 暗褐色包含層	第214図 PL93	鉄鏃	2.8	1.8	0.32	2.8	
65	E9 暗褐色包含層	第214図 PL93	鉈	6.1	1.8	0.6	12	
93	G7 表土中	第217図 PL93	袋状鉄斧	4.7	2.65	2	28	

表66　蝮谷遺跡土製品観察表

No	遺構・地区・層位	挿図・PL	器　種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色　調	備　考
79	F9 褐色包含層	第215図 PL93	土玉	長径1.95 短径1.75	オサエ・ナデ	密	良好	にぶい橙色	
92	H8 攪乱土中	第217図 PL93	土錘	最大長△3.5 最大幅1.1 孔径0.3	外面ミガキ	密	良好	にぶい橙色	重さ４ｇ

第５章　岩本遺跡の調査

第１節　岩本遺跡の概要

(1)　概要

１．調査の概要

岩本遺跡は、東伯町の西部を流れる八橋川の東岸に位置し、この河川によって尾根状に分断された丘陵の北西端に立地する。調査地は、標高29～52m、丘陵先端部に向かって南から北に全体の傾斜が下がり、尾根を挟んで東・西側は、河川の浸食を受けて急崖である。本遺跡からは北西に日本海を一望することができ、南西方向には大山・船上山を見上げる。また、谷を挟んで東側には蝮谷遺跡・久蔵峰北遺跡、河川を挟んで西岸の丘陵上には八橋第８・９遺跡が立地する。

調査の結果、表土下に溝状遺構１が検出された。本遺構は東西方向に尾根を分断しており、東端は斜面に向かって収束、西側は調査区外へ延びている。遺物の出土状況から、埋没時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、石器が見られた。

２．調査の経過と方法

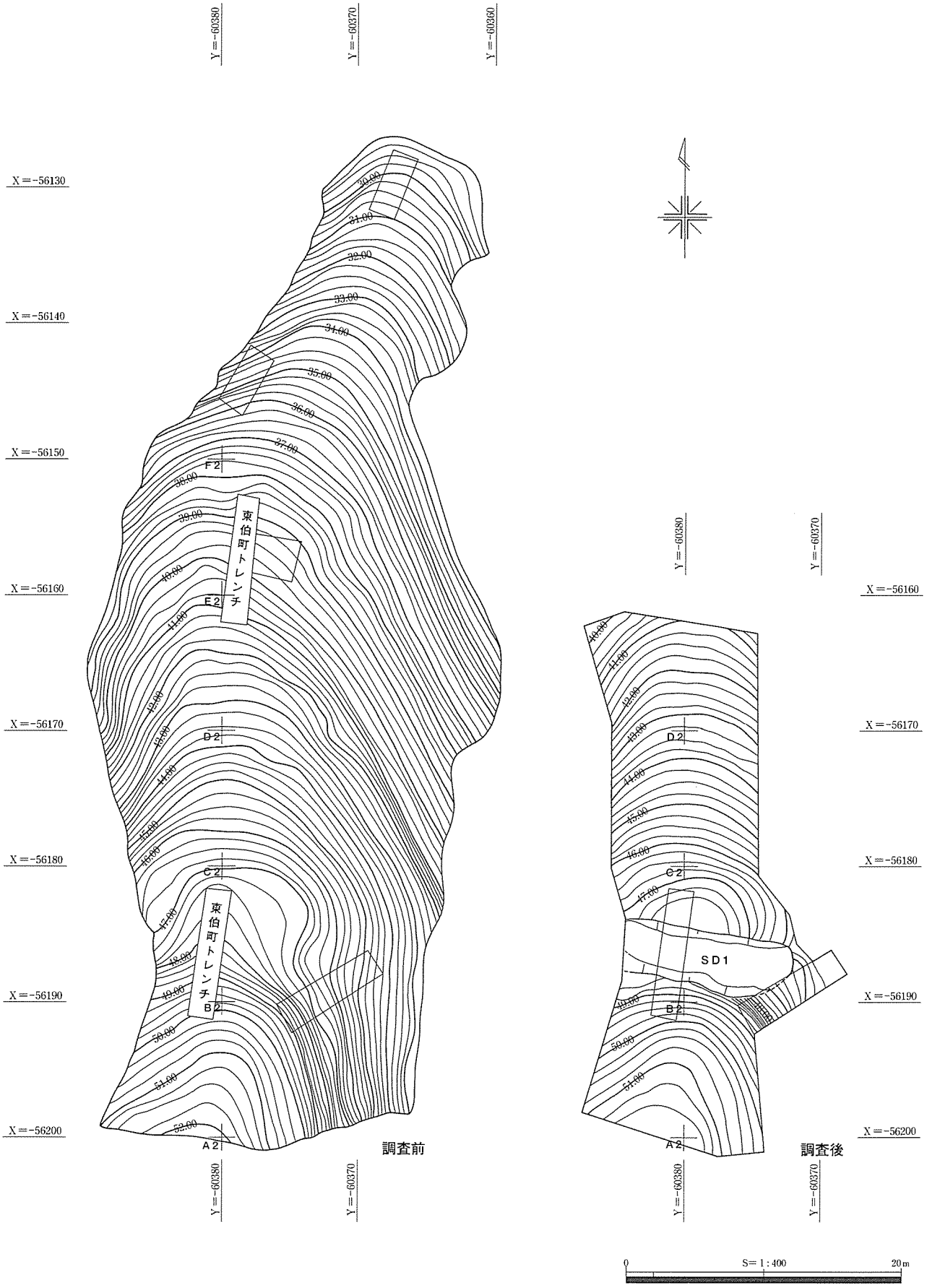
表土剥ぎに先立って、東伯町教育委員会による試掘トレンチの北側に、５m×２mのトレンチを２本設定した。その結果、両トレンチで遺構は確認されず、表土を含め遺物は検出されなかった。また、東伯町の試掘トレンチ２本のうち、北側のトレンチを東側に３m×３m拡張し確認作業を行ったが、遺構は検出されず、土器の小片が木の根攪乱中より１点出土したのみであった。以上の結果から、東伯町北側トレンチの南側までを本調査の範囲とし、人力もしくは重機による表土剥ぎを行った。遺構確認面は表土直下面のみである。

調査地の地形測量にあたっては平板とトータルステイションを併用し、検出した遺構・遺物の記録にはトータルステイションを用いた。現場の写真撮影については、35㎜版と６×７版のモノクロ及びカラーポジで撮影した。10m間隔の測量基準杭は公共座標第Ⅴ系に基づいて設定し、東西軸を東から算用数字、南北軸には南からアルファベットで表した。また、調査地の西・北側は国土交通省によって防護柵が設置され、急峻な東側は発掘調査と併行して防護ネットを張り、事故防止と落石に備えた。

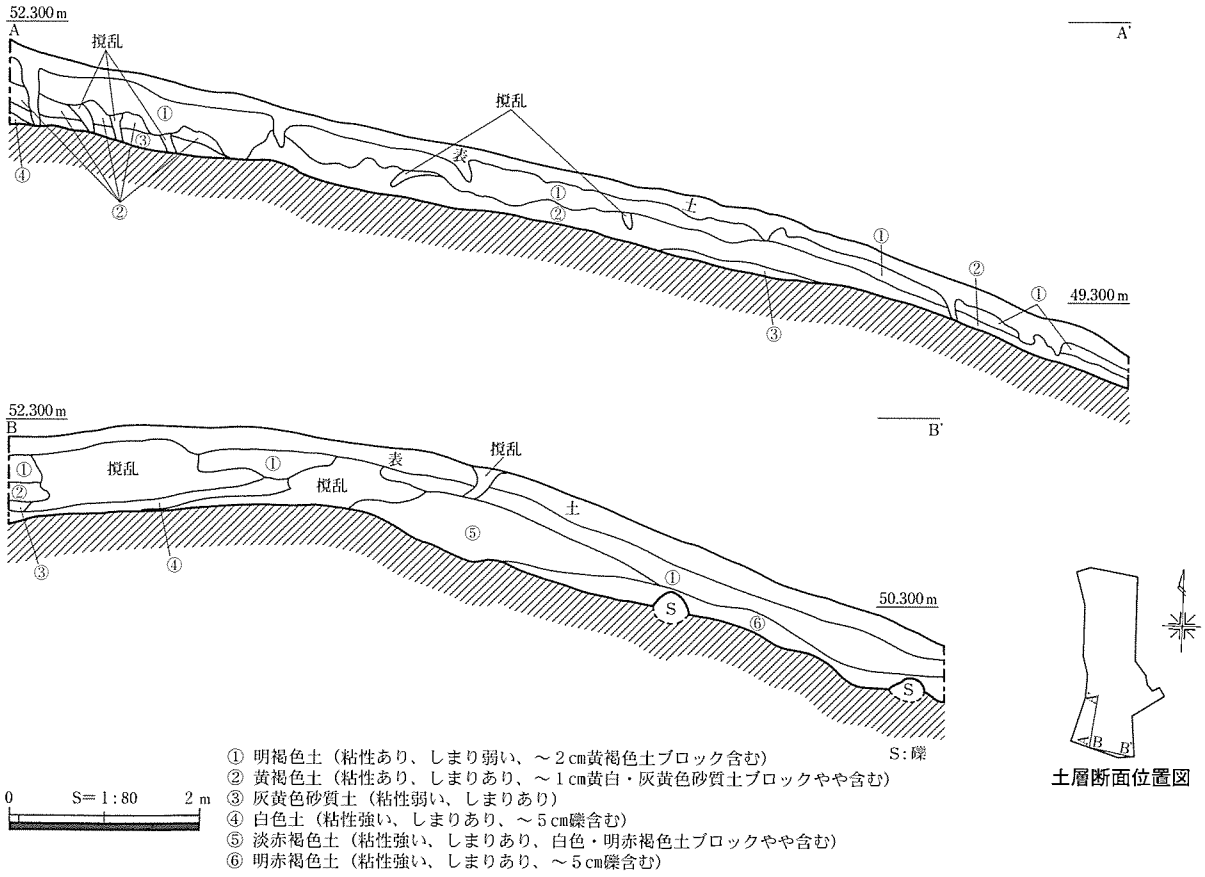
(2)　調査区内の堆積（第219図）

尾根上という立地条件から土層が全体的に薄く、流出と堆積を繰り返した様相を窺うことができる。遺構確認面下の①層はソフトロームであり、ホーキ層・姶良Tn火山灰層（AT、約２万～２万5,000年前）に由来すると思われる②・③層が下位に続く。①・②層は純層ではないと考えられるが、③層を含めこれらに人為的な影響を受けた痕跡は認められなかった。④～⑥層はハードローム由来の堆積であろう。

ローム層の下には大山古期噴出物である東伯凝灰角礫岩層が堆積し、調査で検出された溝状遺構は本層まで掘り込まれている。層中にはマンガンと思われる紫色の沈着が見られ、礫の一部は風化が進んでいわゆる「くさり礫」化していた。遺構埋土中に含まれていた礫は、これらが流れ込んだものと考えられる。



第218図　調査前・調査後測量図



第219図　調査区土層断面図

第２節　溝状遺構の調査（第220・221図、表67、PL.95）

本遺跡は、尾根筋から北側の丘陵先端に向かう斜面地に位置しており、調査地の南部には緩やかな段状地形が認められた。東伯町教育委員会の事前調査によって、この窪みは溝状遺構（以下、SD１）の痕跡であることが確認されたため、SD１が丘陵を巡っていることを想定して、等高線と直交する８ｍ×２ｍのトレンチを調査地南東部に設定した。その結果、SD１は地形の傾斜が急峻に変化する辺りで途切れており、丘陵を囲む形状ではないことがわかった。次に、表土除去と併行して遺構の精査を行い、SD１上面を埋める暗褐色土の広がりを検出した。帯状を呈する暗褐色土は、東西に尾根を分断し、明瞭ではないが、東側はやや撥状に広がった後に収束していた。西側は調査区外に延びるため、全体の長さ・形状を確認することはできなかった。

SD１の調査は、埋土の堆積状況を把握するために、南北に溝を切るようなトレンチを３本設定し進めていった。はじめに、東伯町による南側のトレンチを利用し、再掘削して埋土の基本堆積を確認した。次に２本のトレンチを設け、全体の掘り下げを進めていった。その際、溝の埋没状況を明らかにするため、各トレンチの層序の対応関係には注意した。遺物の取り上げは、トレンチ断面で層位を確認しながら行った。

各トレンチの土質・堆積状況・出土遺物などから、本遺構の基本層序をⅠ～Ⅳ層に大別し、更にそれらを①～⑧層に細別した。以下、各層の特徴について述べる。

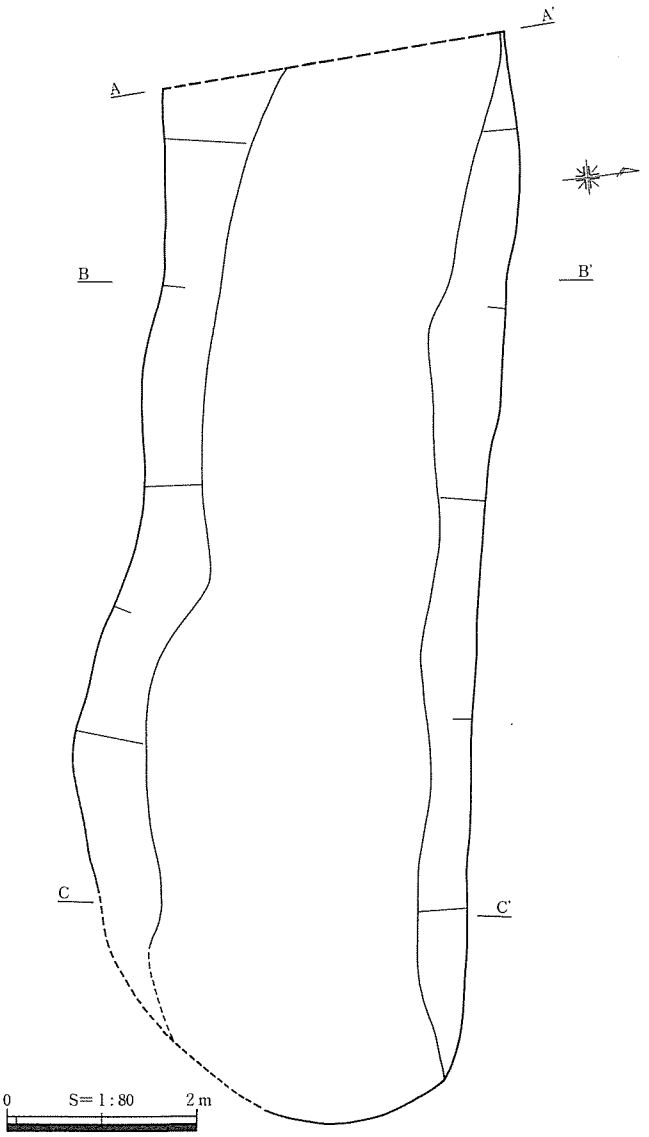
Ⅳ層　⑧層の単層である。よく締まった土質で礫を多く含んでおり、東伯凝灰角礫岩層に由来するものと考えられる。遺物は出土していない。B－B′ではⅣ層の堆積は見られない。

Ⅲ層　⑤・⑥・⑦層からなる黄褐色系の堆積である。⑤層は炭化物・焼土粒を多く含んでいる。周辺に他の遺構は検出されず、SD１の壁等に火を受けた痕跡も認められないため、これらは人為的に運ばれた可能性が高い。⑦・⑤層は弥生時代後期に比定される土器が出土している（第222図１～４）。C－C′ではⅢ層の堆積は確認できない。

Ⅱ層　②・③・④層からなる褐色系の堆積である。Ⅱ層の堆積によって、SD１はほぼ埋没し、わずかに窪地となる。③層から古墳時代前期の土器が出土している（第222図５）。

Ⅰ層　Ⅱ層堆積後、①層が溝の上面を覆っている。

完掘した溝は、上面幅4.4～3.8m、底面幅3.2～2.1m、床面から南壁頂部までの高さ2.2～0.7m、床面から北壁頂部までの高さ0.9～0.4mを測る。断面形は逆台形状で、東伯凝灰角礫岩層を平均約0.7m掘り込んでいた。前述したように東端は丘陵を巡らずにとぎれるが、丘陵東側は急斜面であり、溝の東側において壁の肩が一部地崩れによって失われているのが認められたことから、この東端も埋没の過程で自然に失われた可能性は残る。埋土に帯水や土塁等の痕跡は認められなかった。



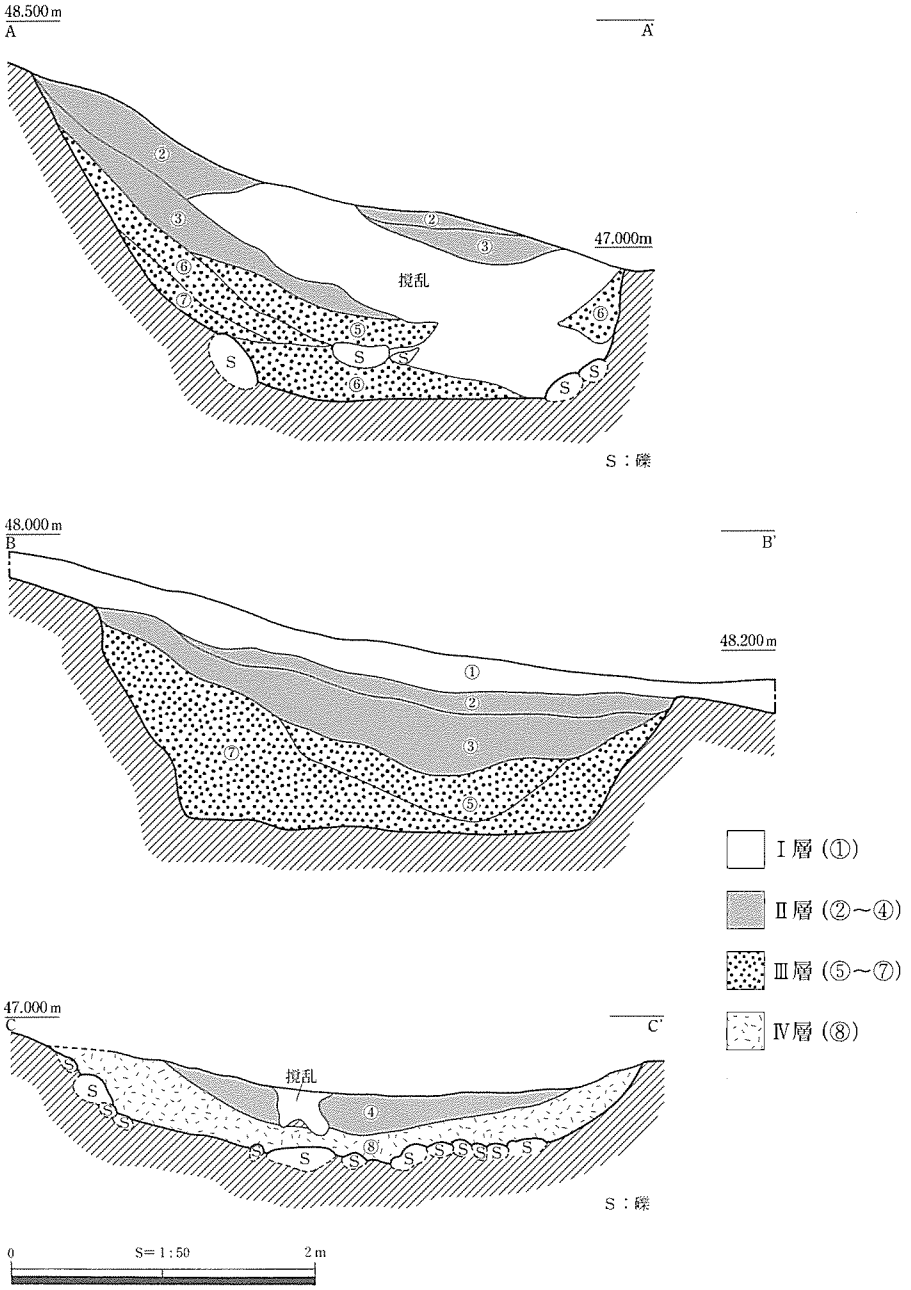
第220図　SD１実測図

SD１は、地山を掘りこんでいるために掘削時期の判断は困難であると考える。しかし、Ⅲ層では⑦・⑤層から弥生時代後期の土器が出土し、Ⅱ層では③層から古墳時代前期の土器が検出され、Ⅲ層とⅡ層には堆積状況に切りあいや不整合が認められない。このことから、溝の埋没時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えたい。

第３節　出土遺物（第222図、表68・69、PL.96）

(1)　SD１出土遺物

１・２は⑦層、３・４は⑤層出土の弥生時代後期に比定される土器である。１は壺で、外面はミガキ、内面頸部以下はケズリ調整である。２は高坏又は器台である。外面全体に赤色顔料が塗布され、端部は３条の沈線が巡る複合口縁状を呈している。調整は外面ハケメ、内面はケズリ後ナデが施されている。３・４は高坏である。中空ではあるが、粘土を充填した痕跡が観察できることから高坏と判断した。３は外面ハケメ後ナデ、内面はケズリ調整である。また、外面は赤色顔料が残っている。４

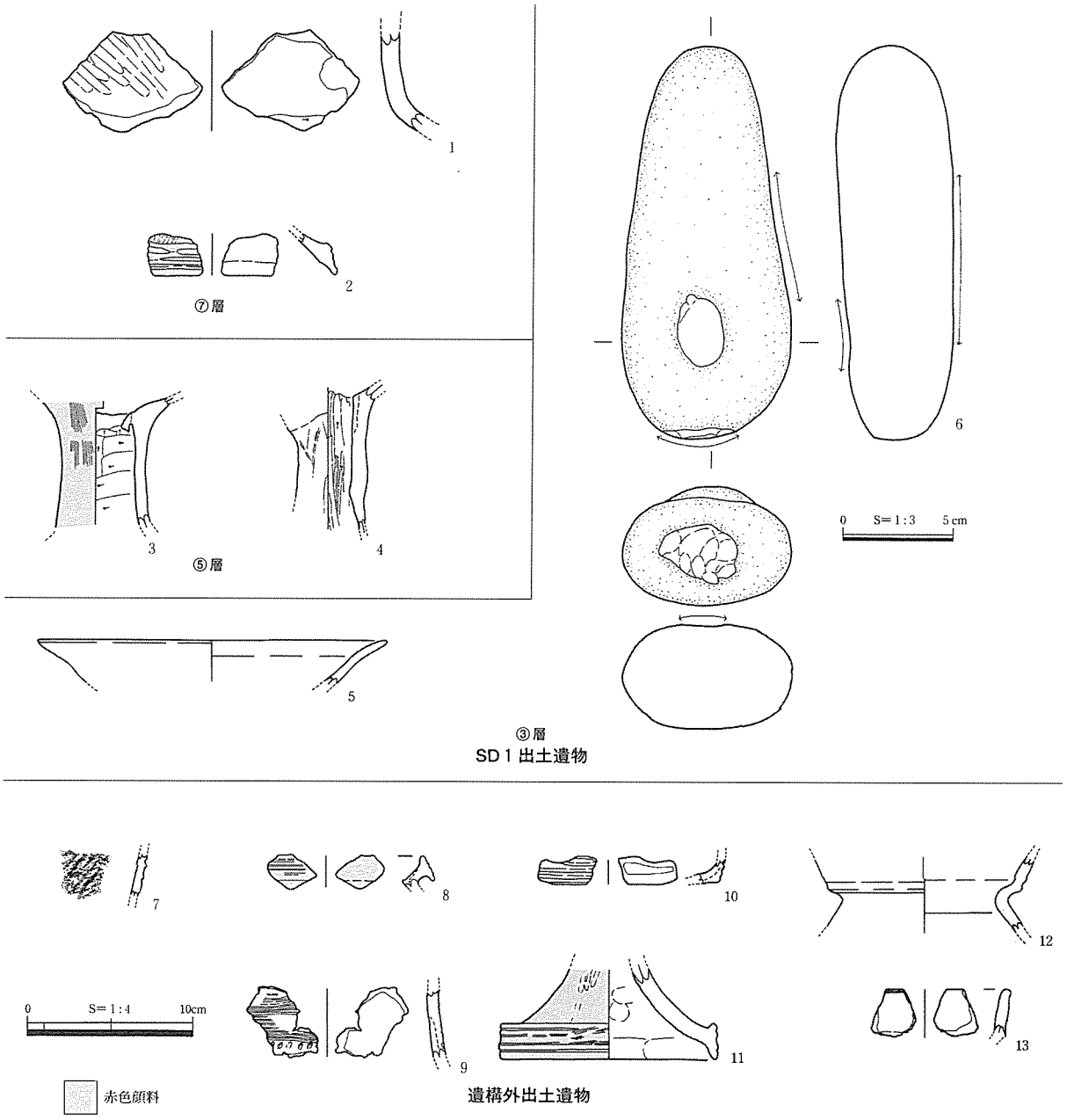


第221図　SD１土層断面図

表67　SD１層序表

層名			特記
大別	細別	色調	
Ⅰ層	①	黒褐色	表土
Ⅱ層	②	暗褐色	漸移層
	③	褐色	～１cm礫含む。
	④	にぶい褐色	やや軟質、５cm礫含む。
Ⅲ層	⑤	黄褐色	～３cm礫含む。炭化物・焼土粒を多く含む。
	⑥	黄褐色	やや軟質、～２cm礫含む。⑤よりやや赤味がかる。
	⑦	明黄褐色	～２cm礫多く含む。
Ⅳ層	⑧	暗赤褐色	よく締まる、～５cm礫多く含む。

は外面ハケメ後ナデ、内面は棒状工具による縦方向のケズリ調整が施されている。５・６は③層より出土した。５は古墳時代前期の高坏である。口縁部は緩やかに外反し、内外面ともにナデ調整が施される。６は敲石である。表面・下端部に明瞭な敲打痕があり、右側縁部に擦痕が認められる。



第222図　出土遺物

(2)　遺構外出土遺物

７は縄文土器である。調整は不明だが外面にLR単節縄文が施されている。９は壺である。弥生時代中期後葉～後期と考えられ、貝殻による多条平行沈線が施された後、箆状工具による刺突が左斜め下方向に傾けて巡っている。８・10・11は弥生時代後期に比定される。８・10は甕である。８は口縁端部がＴ字状を呈し、内傾する。櫛歯状工具による５条の平行沈線が施され、内外面ともナデ調整で、赤色顔料が残っている。10は口縁端部が上方向に拡張し、櫛歯状工具による３条の平行沈線が施されている。内面はナデ調整である。11は高坏又は器台の脚部である。端部は複合口縁状を呈し沈線は４条施される。外面はミガキ、内面はナデ調整。外面に赤色顔料が塗布されている。12は古墳時代前期の甕である。外面はナデ、内面は口縁部がナデ、胴部はケズリ調整が施される。13は古墳時代中期の甕と考えられる。端部は平坦面を形成し、外面・内面ともにナデ調整である。

第４節　まとめ

岩本遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期を埋没時期とするSD１が検出された。SD１は丘陵を巡る形態ではないが、尾根を挟む東西が急斜面であることを考えると、尾根部を分断するだけで十分に役割を果たしていたのかもしれない。また、SD１周辺には遺構が認められず、遺物はほとんど検出されなかったが、調査地内に造成等の痕跡が認められなかったことから、溝が埋没した後にそれらが失われたと考えるのは難しい。よって、SD１周辺が日常的な生活空間であった可能性は低いと推測される。

東伯町内において、SD１と同時期に、このような規模で断面が逆台形状の溝が検出されている遺跡は認められない。県内では、弥生時代後期に比定される米子市の日下寺山遺跡・尾高浅山遺跡が挙げられるが、この２遺跡では同時期の竪穴住居跡なども検出され、環壕集落と考えられている。未調査地に遺構が存在する可能性は残されているが、本遺跡はこれらの例とは性格が異なると推察されるものであり、類例をまって検討していきたいと考える。

表68　岩本遺跡出土土器観察表

番号	図版 PL	地区 遺構	層位	器種	口径 (cm)	頸径 (cm)	器高 (cm)	胎土		焼成	色調
1	第222図 PL.96	C２/ SD１	⑦	弥生/壺	－	－	(6.05)	密	３㎜ 石英	良好	外）明黄褐 内）明黄褐
2			⑦	弥生/高坏	－	－	(2.50)	密	２㎜ 黒雲母・長石	良好	外）にぶい黄褐 内）にぶい黄褐
3			⑤	弥生/高坏	－	－	(7.90)	密	２㎜ 黒雲母・石英・長石	良好	外）－ 内）黒
4			⑤	弥生/高坏	－	－	(8.55)	密	２㎜ 石英・長石	良好	外）橙 内）橙
5			③	土師/高坏	(21.0)	－	(2.60)	密	２㎜ 黒雲母・石英・長石	良好	外）浅黄橙 内）浅黄橙
7		F１/ 攪乱	－	縄文	－	－	(3.00)	やや粗	２㎜ 石英	良好	外）明黄橙 内）明黄橙
8		不明/ 攪乱	－	弥生/甕	－	－	(1.95)	密	２㎜ 石英・長石	良好	外）橙 内）橙
9		B２/ 表土	－	弥生/壺	－	－	(4.20)	密	３㎜ 黒雲母・石英	良好	外）橙 内）橙
10		調査地南端/攪乱	－	弥生/甕	－	－	(1.50)	密	１㎜ 石英・長石	良好	外）明黄褐 内）明黄褐
11		調査地南端/表土	－	弥生/高坏 又は器台	(13.0)	－	(5.50)	密	１㎜ 黒雲母・石英・長石	良好	外）にぶい黄橙 内）にぶい黄橙
12		B２/ 表土	－	土師/甕	－	(10.0)	(4.60)	密	２㎜ 黒雲母・石英・長石	良好	外）橙 内）明黄褐
13		C２/ 攪乱	－	土師/甕	－	－	(2.80)	密	１㎜ 黒雲母・石英・長石	良好	外）黒 内）浅黄橙

１．図版・番号は本文中の図版番号に対応する。
２．復元値および残存高は（　）で示した。
３．色調は『新版標準土色帖』による。

表69　岩本遺跡出土石器観察表

番号	図版 PL	地区 遺構	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)
6	第222図 PL.96	C２/ SD１	③	敲石	黒雲母石英安山岩	17.75	7.60	5.30	1.02

１．図版・番号は本文中の図版番号に対応する。